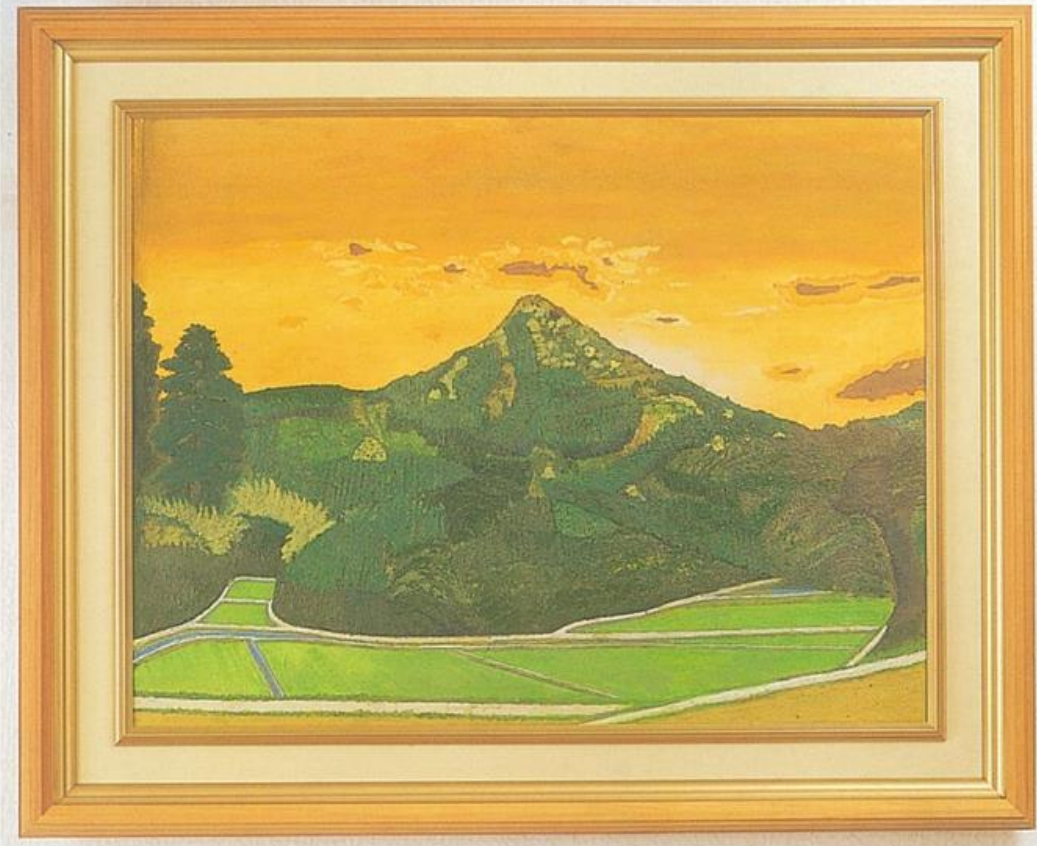


波多津町誌



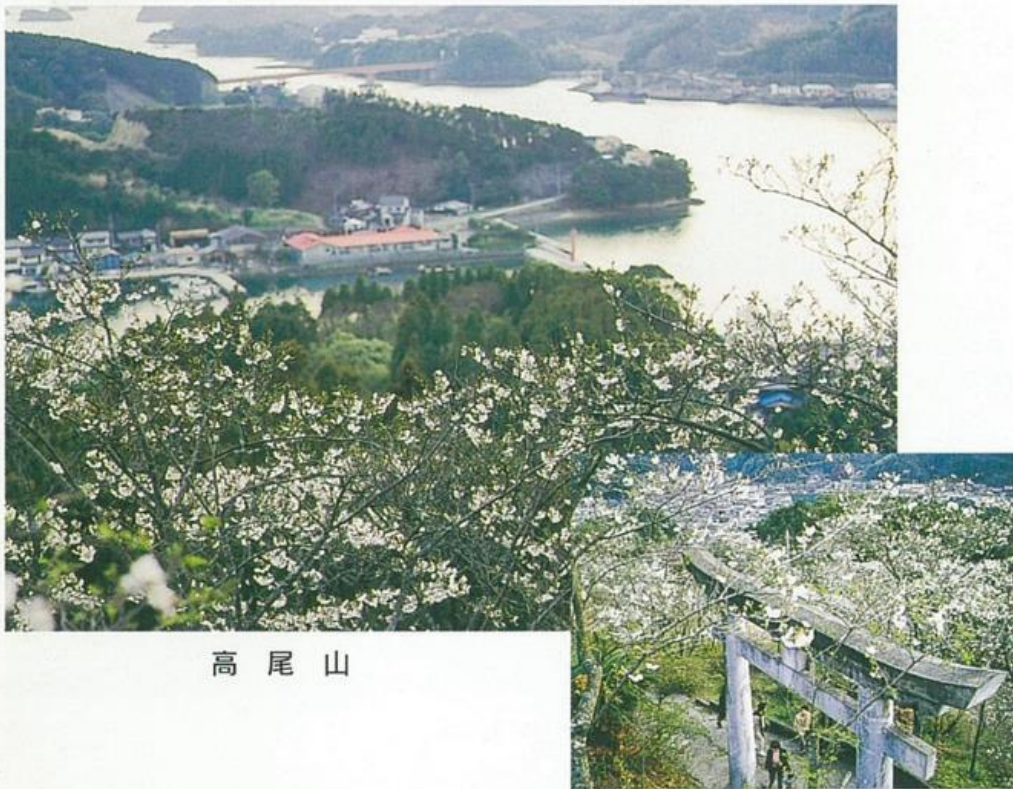


画「御岳(みたけ)」古河吉村





波多津港



高尾山





法行城跡



十六羅漢

## 波多津町誌目次

第一章 地名「波多津」の由来 .....	9
第二章 波多津の自然.....	10
第一節 位置 .....	10
一、位置 .....	11
二、面積 .....	15
第二節 歴史にみる伊能忠敬の波多津測量 .....	17
第三節 地 形.....	20
一、屈曲に富む海岸線 .....	20
二、東部の行合野川流域 .....	22
第四節 地 質.....	24
一、佐世保層群.....	25
二、畑津頁岩層.....	27
三、畑津砂岩層.....	28
四、行合野砂岩層.....	28
五、佐里砂岩層.....	30
六、杵島層 .....	31
七、火成岩 .....	31
第五節 植 生.....	33
一、植物層のあらまし .....	33
二、波多津町の植物 .....	35
第六節 気候（気象） .....	51
第三章 人口・世帯.....	53
第一節 旧藩時代以来旧記にある人口の推移.....	53
一、唐津藩時代の人口 .....	53
二、明治時代以降の波多津の人口 .....	54
第二節 人口の推移.....	55
第三節 世帯数の推移 .....	57
第四章 歴史 .....	59
第一節 原始時代.....	59
一、時代区分 .....	59

二、先縄文時代.....	60
三、縄文時代 .....	61
第二節 地名と歴史.....	62
○木場の三十六石.....	62
第三節 波多氏時代.....	63
一、源頼光―渡辺綱の西下と筒井.....	63
二、波多氏の起源と岸嶽城築城.....	63
三、波多家の滅亡.....	64
四、波多家と波多津.....	65
第四節 唐津藩政時代.....	68
一、藩政時代の概要.....	68
二、唐津藩主歴代.....	68
三、庄屋制度.....	69
四、農民対策.....	70
五、主屋文書.....	71
六、唐津領惣寄高（波多津関係）.....	81
第五節 明治以降.....	86
一、唐津藩知事時代.....	86
二、行政区画の変遷と庶政の刷新.....	87
第五章 行政.....	89
第一節 大岳村誕生.....	89
第二節 村名改称「波多津村」となる.....	90
○村役場と新庁舎.....	91
第三節 町村合併で伊万里市となる.....	93
一、郡・町村制の変遷.....	93
二、経過.....	94
第四節 歴代村長・助役・収入役.....	95
第五節 波多津村村会議員名簿.....	98
第六節 伊万里市会議員（波多津町）.....	101
第七節 明治四十一年以降区長.....	103
第六章 教育・文化・民俗.....	119
第一節 寺子屋教育.....	119
第二節 幼児教育.....	120
一、波多津東幼稚園.....	120



二、波多津保育園.....	127
第三節 学校教育.....	136
一、波多津小学校.....	136
二、波多津東小学校.....	157
三、波多津中学校.....	180
第四節 社会教育.....	201
一、社会教育の歩み.....	201
二、青年教育.....	201
三、育友会（PTA）.....	202
四、子どもクラブ.....	203
五、青年団.....	203
六、婦人会.....	205
七、老人クラブ.....	206
八、体育協会.....	207
九、波多津公民館.....	208
第五節 波多津の教育を支えた人たち.....	210
第六節 文化.....	219
一、石造文化.....	219
二、文学.....	277
三、ふるさとの言葉.....	282
四、民俗.....	298
五、風習.....	304
第七節 波多津町の名字.....	307
一、集落別世帯数並名字数（町内一軒だけの名字は別記）.....	307
二、複数使用のうち一集落だけの名字.....	309
三、町内五十四軒は一つ名字.....	309
第七章 宗教.....	310
第一節 神社・寺院.....	310
一、神社.....	310
二、寺院.....	333
三、おこもり堂.....	337
第二節 英霊を祀る.....	339
第八章 産業.....	356
第一節 農業.....	356

一、農具と農法.....	356
二、農作物の耕種.....	356
三、農作物の移り変わり .....	357
四、農家のくらし.....	357
五、畜産 .....	358
六、製紙業（紙すき） .....	358
七、波多津における農民の協同組織の歴史.....	359
八、農業の現状と今後の課題.....	360
九、馬蛤潟新田と力武新田沿革.....	363
第二節 漁業 .....	368
一、唐津藩時代の波多津の漁業.....	368
二、波多津の漁業組合の沿革.....	369
三、波多津の初期の漁業 .....	369
四、波多津の延縄漁業 .....	370
五、波多津漁港改修工事 .....	371
六、釣漁 .....	372
第三節 林業 .....	373
第九章 人物 .....	376
第十章 集落史 .....	381
資料.....	508
あとがき.....	511
主な参考文献 .....	512
波多津町誌編集委員会 .....	512
正誤表.....	514

(題 字 藤田 平太)

(見開き絵 古河 吉村)

## 発刊のことば

もうかれこれ四半世紀にもなろうとしていますが、私は昭和五十年に波多津小学校創立百周年記念誌の編集に携わったことがありました。その作業を進めながら、同校百年の歴史は同時に同校を支え続けた波多津町民の百年の歴史でもあると思いました。その思いはさらに発展して波多津小学校の百年の歴史だけにはこだわらず、波多津町全体の地形や気候、主な文化財や歴史的事象などについても許される範囲で収録しておきました。

その後、波多津町誌への私の思いは止みませんでした。太古の昔から現在までのさまざまな歴史的事象をできるだけ詳しく正確に書き残し、後世に伝えたいとの願いは日々に募りました。そこで、町内に在住されている十数名の有志の方々に私の熱い思いをお話し申し上げたところ、等しく賛同していただきました。

私がこの一冊に収録した内容は「地名・〈波多津〉の由来」「波多津町の自然」「人口、世帯」「歴史」「行政」「教育・文化・民俗」など多岐にわたります。それぞれの細部について文献や遺物で調べ、検証し、記述してゆく作業は思いのほか大変なものでありました。頼りにしていた有志の方々もこの十年ほどの間にほとんどが他界され、私自身の高齢化と相俟って作業は遅れに遅れました。

この作業を始めてから間もなく、思いもかけない朗報にも接しました。畑津の田嶋神社の本殿が室町時代の建立と分かり、昭和六十二年六月に国の有形重要文化財に指定されたことです。このことで私が強く感じたことは波多津町はまさに誇るべき先人の業績と価値の高い文化財の宝庫であるということでありました。私たちが見聞できる業績や文化財は一朝一夕でできあがったものではありません。先人が長い間営々として励み残してくださった大切な遺産であると思います。

かつてはもの静かで平穏であった波多津町にも、近年、社会的変貌の大波が押し寄せています。道路網の整備や住宅事情の改善が進む一方、少子化や過疎化の問題は大きな悩みです。学校教育で言えば、平成十年四月波多津東小学校が新築移転しましたが、波多津中学校は黒川中学校と統合して平成十二年四月には新しい学校として出発することになっています。これも時代の流れというものでありましよう。

今年は西暦で一九九九年。まさに世紀末です。二年足らずで新しい時代の二十一世紀を迎えます。丁度この期に「波多津町誌」を刊行することができることを心から感謝いたします。郷土の歴史に誇りを持ち、郷土を愛し続ける「波多津の人」が数多く育ってくれるようにという願いを込めて、私はこの一冊を編んだつもりです。長く教職に身を置いた者の、或いは欲ばった考えかも知れませんが。

願わくばこの一冊が町内各家庭での団欒の具として利用され、波多津町の「すばらしさ再発見」の拠りどころとなり得れば誠に幸いです。また、ゆえあって波多津町を離れ遠隔の地に在られる方々にも故郷を偲ぶよすがとなれば望外の喜びであります。以上、万感の思いを込めて「波多津町誌」刊行のことばといたします。

平成十一年三月三十日

波多津町誌編集委員長 藤田 平太



## お祝いのことば

波多津町は、豊かな自然と古い歴史を持つまちであり、その歴史は波多津東小学校の北部丘陵から縄文時代前期の曾畑式土器が出土したことからみても、少なくとも今から五千年ほど前から先人の営みがあったことが明らかになっています。また、同じ町内の畑津には、室町時代に建てられた田嶋神社本殿があります。この田嶋神社本殿は県内に残る社殿建造物としては最古のものとされ、昭和六十二年に伊万里市内では唯一、国の重要文化財に指定され、伊万里市民の誇りとなっています。

そのほか、有形・無形の文化遺産が多数残っており、これらの文化遺産は波多津町の歴史・文化の個性を物語る重要な遺産であるとともに、これからの新しいまちづくりをすすめるための有益な財産でもあります。

特に地方分権が本格化しようとしているとき、町誌の発刊は、地域の個性や特色に光をあて、それを地域の活性化に生かす上でも、有意義な取り組みだと思います。

また、これらの文化遺産は、町民の皆さんの心のよりどころともいえるものであり、多くの史跡やまつりは、言わば町民皆さんの「まほろば」の原点であります。したがってこの「まほろば」の歴史を集大成された、波多津町誌は、まさに関係の皆様のご熱意と努力の結晶として、高く評価されるべき労作であります。

ここにこの町誌の発起から調査や研究、そして執筆に至るまで並々ならぬご苦労と多大なご努力を重ねられました、波多津町誌編集委員をはじめ執筆委員の皆様、並びに関係者の方々に対して心より敬意を表する次第であります。

伝統的な地縁社会が崩壊しつつある今日、地域の伝統と誇りを後世に語り継ぐことの重要性を再認識され、今後、本書が新たな波多津町を創造するための基本資料としても活用されることを期待してやみません。

結びに、波多津町誌編集委員会の藤田平太会長さんをはじめ、委員の皆さんのご努力に対し、重ねて深甚なる敬意と祝意を表し発刊にあたっての祝辞といたします。

平成十一年三月吉日

伊万里市長 川本 明

## 第一章 地名「波多津」の由来

日本の古代末期、西暦一〇〇〇年ごろから著名な文学作品や歴史物語が作られています、その中でも「源氏物語」はさん然と輝き世界的に有名でありましょう。その影響を受けてか、約百年ぐらい後、藤原道長・瀬通など平安貴族の生活を物語風にかかれた「栄華物語（栄花物語）」がありますが、その本が出版されたとみられるころの康和四年（一一〇二）九月二十三日付肥前国源久（松浦党の党祖）処分状案（石志文書）に

処分 三男源勝宛給田地事  
（中略）

船山 四至 東限大川野道貴志多気 西限八田津越道 とあり、八田津と書く。

その後百数十年経過した文永六年（一二六九）七月二十日付の源留（松浦党第二代党主）讓状案（伊万里文書）に「武末名（中略）波多道里二坪壺段参杖」とあり、同じく正中三年（一三二六）三月七日付、源勝（同第三代党主）讓状案には「一所同国やたけ並はたつの浦の田畠屋敷山野等」とあります。

中世後期には波多氏が上松浦党の首領として波多郷の岸岳城に拠ったが、文禄三年（一五九四）波多氏は滅亡してしまいました。

それから数年後は歴史に残る慶長の時代となり、このときの慶長絵図には「波多津」と記名されており、文化（一八〇四～一八一七）年中記録によれば、「畑津村」一「畝数十五町八段一畝九歩」とあります。

今迄の経過の中で、八田津・波多津・畑津など歴史的な年代を踏まえてのはたつの名称は地名として生きていますが表現は異なっています。明治二十二年（一八八九）の町村制施行の際、畑津ほか、十三ヶ村が合併して大岳村と命名し発足いたしました。

しかし明治三十三年村会議決で歴史に輝いた党主・波多氏にちなんで波多津村と改称されました。

火山岩が噴出してできた三岳（二三三・五m）は岩石採掘で姿を変えつつありますが、戦国期に畑津城と呼ばれた城跡があり町の中心となっています。

それと関連して、「松浦古事記」には、波多三河守の家臣の中に「一、畑津平内藤原清和 畑津御岳城三百石」とあります。

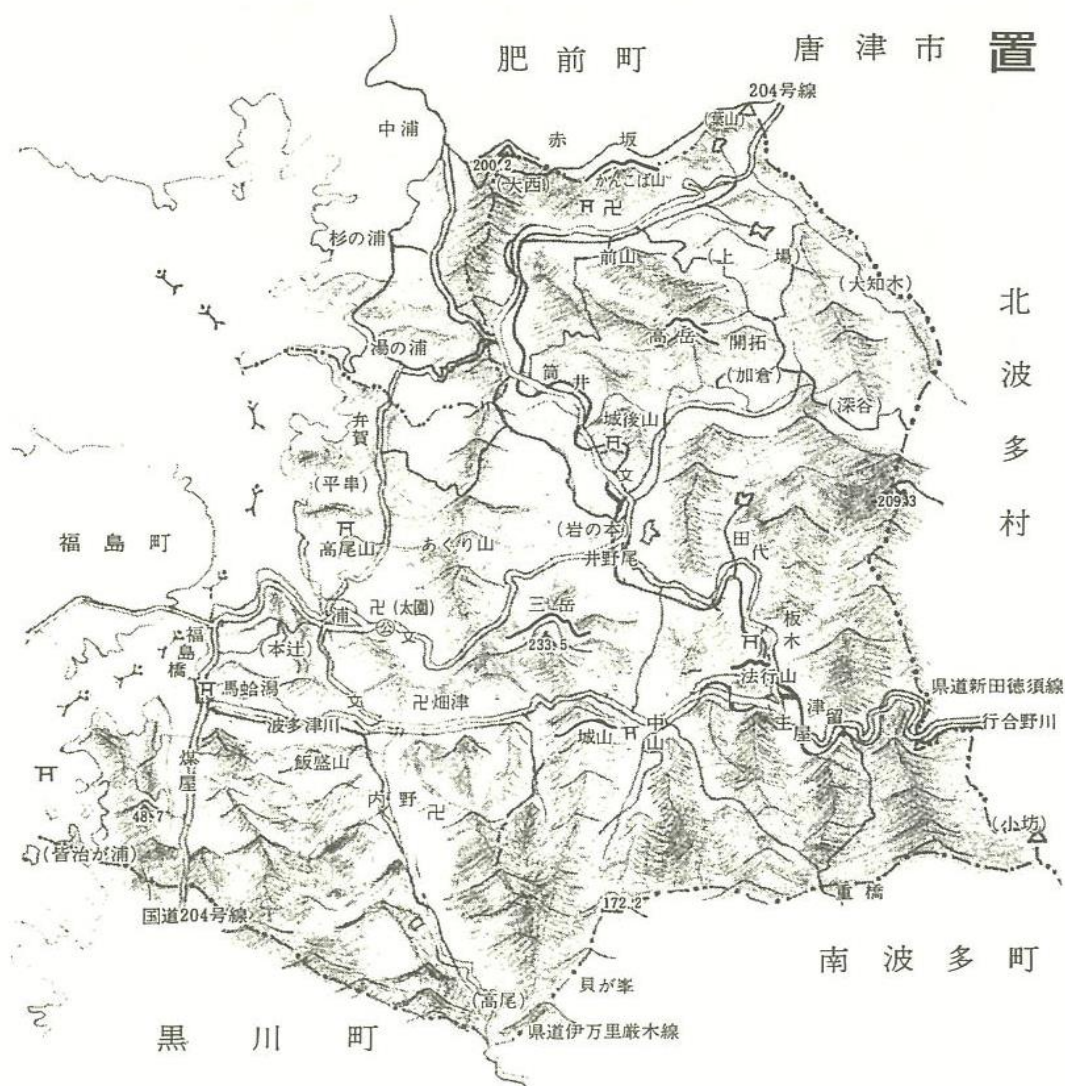
波多津の地名はこのように我が国の古代末期から約九百年の歴史の中に「はたつ」の地名として表現され、永い政治史や生活史の中に生きてきたものです。

## 第二章 波多津の自然

### 第一節 位置

### 第一節 位置

波多津町図



北波多村

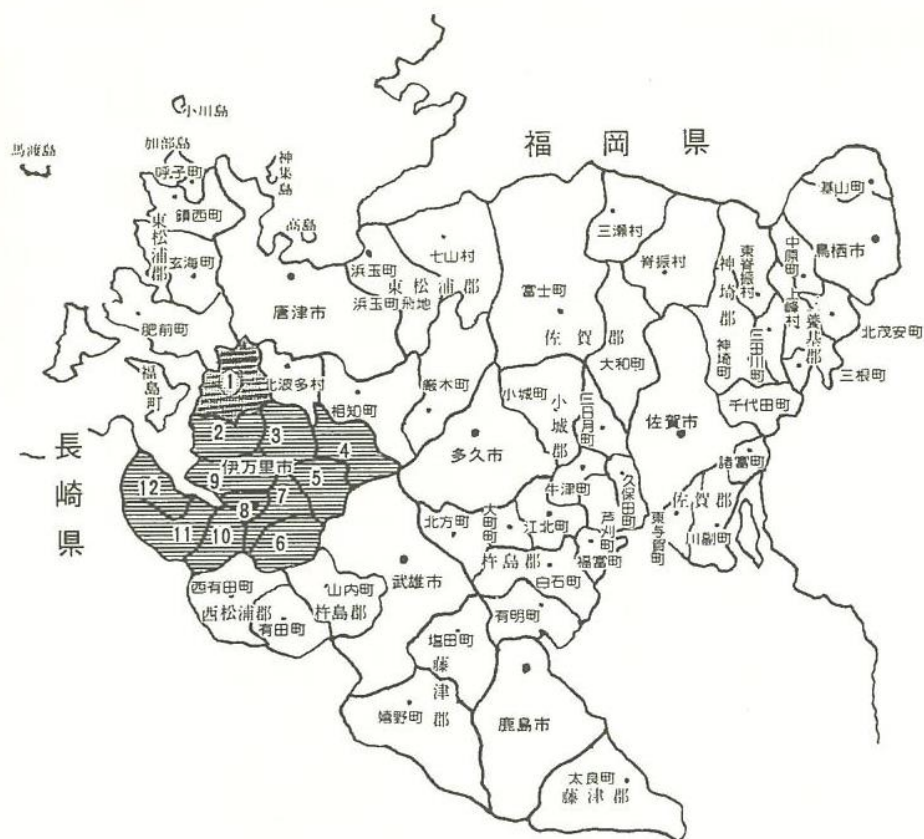
南波多町



# 一、位置

県内市町村図

県内市町村図



伊万里市町名

1	波多津	7	大 坪
2	黒 川	8	伊万里
3	南波多	9	牧 島
4	大 川	10	二 里
5	松 浦	11	東山代
6	大川内	12	山 代

日本の佐賀—伊万里 波多津

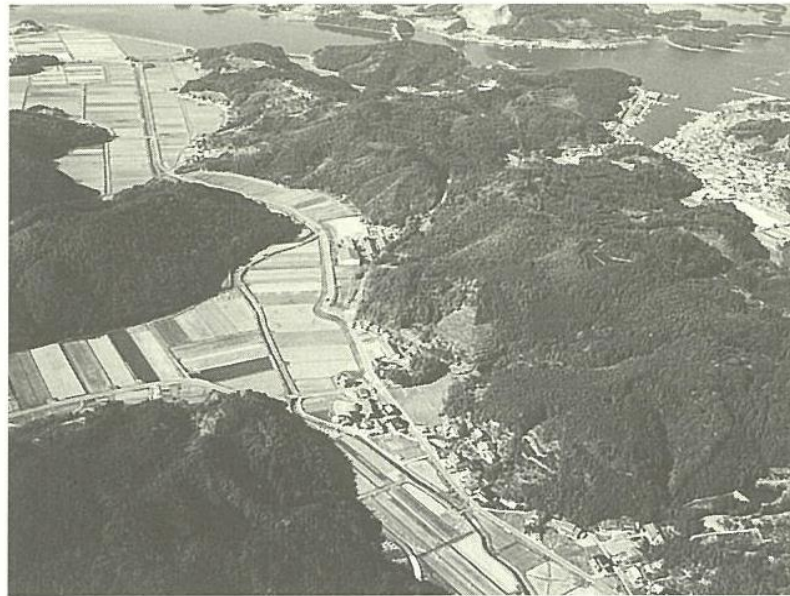
一、  
位  
置



伊万里市役所から東海岸を北へ十六km、そこが波多津の中心浦集落である。市内最北最遠の町。木場大知木はそこから更に北へ八km、ここからだったら唐津はひとくんだり十km余り。佐賀へは岸岳經由五十数km、昔はこれが出張ルートだった。

市からみても、県からみても、まして国全体からはかたよっているが、交通網の発達で、今は距離は絶対ではない。気宇広大に広く見る眼をもち地域の活性化を図りたい。

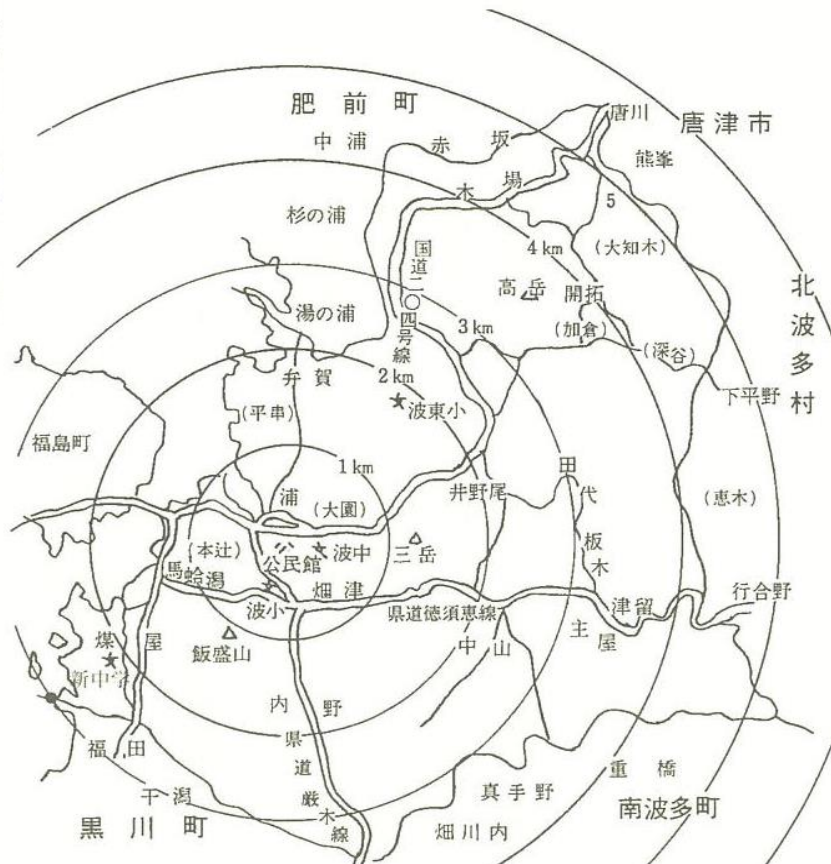
波多津の外境



畑津上空よりの航空写真  
波多津港や福島を遠望する

町公民館の位置	極東	津留字古坊	東経一二九度五六分	極南	内野字高尾	北緯三三度二〇分
	極西	煤屋皆治が浦	東経一二九度五一分	極北	木場字葉山	北緯三三度二四分
			東経一二九度五二分			
			北緯三三度二二分			

波多津町四方位極点の位置



波多津の外境





煤屋上空よりの航空写真  
馬蛤潟新田の広がり波多津町の  
点綴する田園や山々は心に残る

ここでは境界線や、極点というのは、じつは地図（国土地理院著作五万分の1）によるものであって、現地にあたって調べたわけではないが当該集落では現地を歩いて確認してあると思います。

## 二、面積

### (1) 広がり

狭い所		広い所	
一ばん	一ばん	一ばん	一ばん
西	東	西	東
筒井字原田	木場字深谷	煤屋字皆治が浦	津留字古坊
三、三		七、八 (km)	
北	南	北	南
辻字鷺田	内野字菜切	木場字十九石	内野字高尾
五、〇		七、五	

上の距離は地図上で測った直距離である。

上段の地図は町公民館中心の1km毎の円周を入れている。これにより各地区間の距離が把握でき交通や生活上の資料となりましょう。

(2) 面積

波多津町

32.48 (km<sup>2</sup>)

町名	面積 (km <sup>2</sup> )	割合 %
市計	252.88	100
伊万里	47.43	18.8
黒川	25.68	10.2
波多津	32.48	12.8
南波多	29.24	11.5
大川	29.84	11.8
松浦	21.30	8.4
二里	16.38	6.4
東山代	28.81	11.4
山代	21.72	8.6

## 第二節 歴史にみる伊能忠敬の波多津測量

伊能忠敬（一七四五～一八一八）はいまの千葉県佐原市の人、家業のひまひまに数学や暦学を独学で修め、五十才家督を譲り渡して後江戸に出て、天文学や測量術を師について学び、初期頃は自力で実地測量をされたが、後では幕府の命を受け役人として日本全国を測量、我が国最初の実測地図を作製されました。

忠敬が当地方を測量されたのは、文化八年（六十六才）より始まる第八次測量の時で、一行は同年十一月二十五日江戸を出発、同九年一月二十五日小倉に着き九州の測量を開発されました。当松浦地方は九年八月十七日、糸島からはいつて浜崎地方を測られたのが初めてで、あと順に東松浦半島を測り波多津にはいられたのは、九月六日のことでした。

あと測量班日記によって足跡をたどります。

**文化九年九月六日** 朝晴。七ツ半前高串浦出立。乗船六ツ頃杉野浦へ着、六ツ後坂部出合、又手分坂部方は唐津へ向て測る。我等門谷・尾形・嘉平治・佐助・先手の残湯野浦村字船隠<sup>(註1)</sup> ⊕印より初、順測辻村、同地畑津浦止宿本陣前迄測る。沿海一里十三町五十六間二尺、止宿本陣太郎・下役百姓安兵衛・内弟子百姓中右衛門<sup>(註3)</sup>・唐津領畑河内組大庄屋竹下与兵衛出る。久留米郡方手付稲益斧八来る。久留米候より贈。国産溝口紙持参。佐嘉、東島平橋・江頭伊平同道にて来る。此夜晴天測る。

**同七日** 晴天。朝六ツ後辻村内畑津浦出立。同所より初、⊕印迄九町九間。此より大瀬島へ渡る。渡三十間。大瀬島一周二町三十六間三尺、⊕印より初煤屋村、旧は⊙村というよし。⊙印迄三十四町二十六間一尺、⊙印より明神崎、片三十間、又、⊙印より初、煤屋村内⊕印迄五町十八間、⊕印より黒上山鼻回三町四十四間三尺、⊕印に繋ぐ、⊕印より初同村内⊕印を残す。三町四十九間。此より沖島へ渡三十間三尺、煤屋村持沖島一周三町五十二間三尺、⊕印より初、⊕印迄八町五間、福田村⊕印より鰐口新田打留迄、沿海十六町九間、沿海含二里四町五十二間一尺。我等小手分して島々を測る。煤屋村内黒男明神崎⊕印より初、大島へ渡る。渡二十間二尺、煤屋村内大島一周三町五十六間、同島より竹島へ渡る。渡百十二間、竹島一周三町二十八間四尺、同島より音ヶ瀬へ渡る。四十二間。音ヶ瀬より日割瀬へ五十一間、日割瀬より満切島へ渡る。七十五間。福田村内満切島一周四町二十間、外に黒上山鼻より明神△印へ行渡三十六間、又、明神崎⊕印より同岬△印迄行四十四間、又、満切島より地方へ行八十一間、島、並、渡とも含十九町二十六間、前測島渡岬回十一町四十四間、惣測数三里二間一尺、七ツ半頃小黒川村へ着、止宿本陣大庄屋柴田平治・下役宿百姓源太夫。此夜晴曇測る。

註

1, 七ツ半

現在の時刻	昔の時刻
0時 1	9ツ
2 3	8ツ
4 5	7ツ
6 7	6ツ
8 9	5ツ
10 11	4ツ
12 13	9ツ
14 15	8ツ
16 17	7ツ
18 19	6ツ
20 21	5ツ
22 23	4ツ



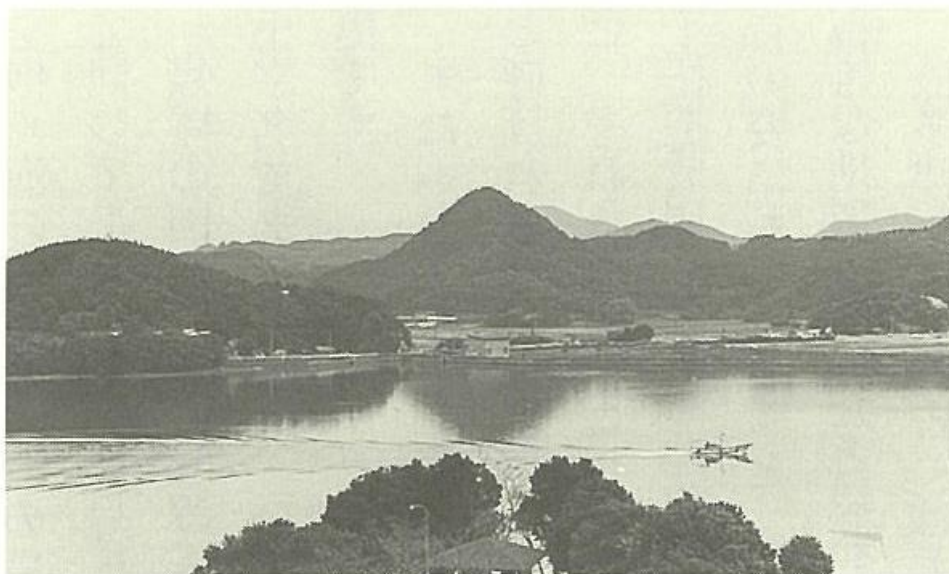
## **2、坂部**

江戸から来た測量隊を二班に分け、一班長が伊能隊長兼任、二班長は坂部。

## **3、畑津浦**

大昔馬蛤潟から湾入りした海は、船頭屋敷付近まではいりこんで、畑津集落三岳城の西麓から海岸線にかけて発達していた。しかし、永年の間に海岸線の後退や、馬蛤潟海岸の干拓耕地化によって、畑津集落の漁民は谷口の峠を越えて辻の海岸に移動していった。残った者が畑津本村を維持して農業を営み、移動した者が畑津浦を形成して漁業を営み年と共に大きく発展していった。

### 第三節 地形



福島より波多津町を遠望、中央は飯盛山

#### 一、屈曲に富む海岸線

波おだやかな伊万里湾沿岸は、屈曲に富むリアス式海岸で、地殻変動の地史の中で沈降した特有の海岸をもっています。

この変動の中で、その昔海面下に没した谷や川もありましたが、わずかに頂だけ残り陸地と離されて島となった姿が煤屋海岸に見られます。

もちろん長崎県福島とも陸続きであったのが、これもまた島となったものと言えます。海図を見ても、古期の谷間が波多津町側にも長崎県の今福町側にも認められます。

今日、現海面上二～三mの高さに波による浸食の跡が見られることは、少し地盤が隆起したのか、海岸線が沖に移動する海退があったのかいずれかでしょう。

煤屋の車エビ養殖場周辺や、その北の黒男神社鎖座の島が陸繋島りくけいとうになっていることなどこのことを物語っていると云えましょう。

皆治ケ浦かいじ けうらを抱く沖ノ島から西方の道切れ島に至る州は、博多湾を抱く海の中道と志賀の島間の道切れと相以っていて、地名まで同じであることは注目に値するものでしょう。

煤屋の国道二〇四号線に沿うた田地が「上灰浦」「下灰浦」の小字名であることは、いずれも浅海であったのが干拓された証拠です。

また「力武新田」から東へ波多津川沿いの通称「馬蛤潟新田」まてがたと呼ばれる低地に蒲原、午ノ木、小灰浦、煤屋、馬蛤潟、白潟と、それらの東部に畑津の「新田」など昔は海岸であったのが干拓造成によって陸地化したものです。

昔の姿にもどしますと、この付近が一番入江が奥深く海岸線の複雑な地形であったと思われます。

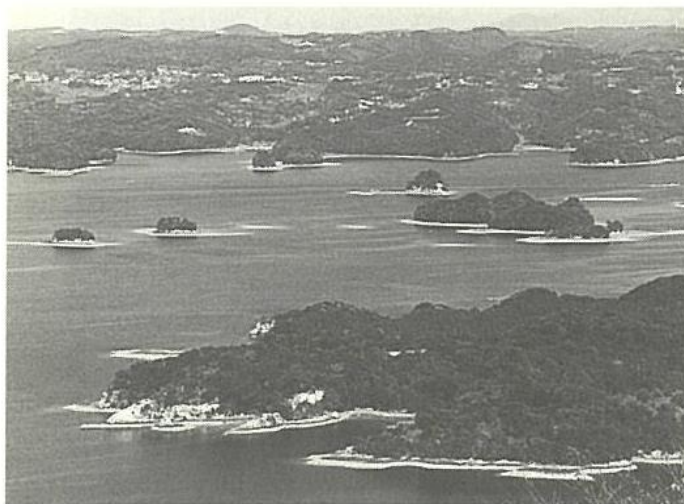
波多津「浦」も古くは入江であったものが、干拓によって現在のようになったもので「浜新田」の小字名はこれを証明しています。

肥前町との境界になっている「角串鼻」は、海に突出した岬に命名されたもので、その前面には「イロハ島」が点在します。その島々は、火山活動と推積岩からなり、特異な地質により長崎県の文化財指定を受けています。

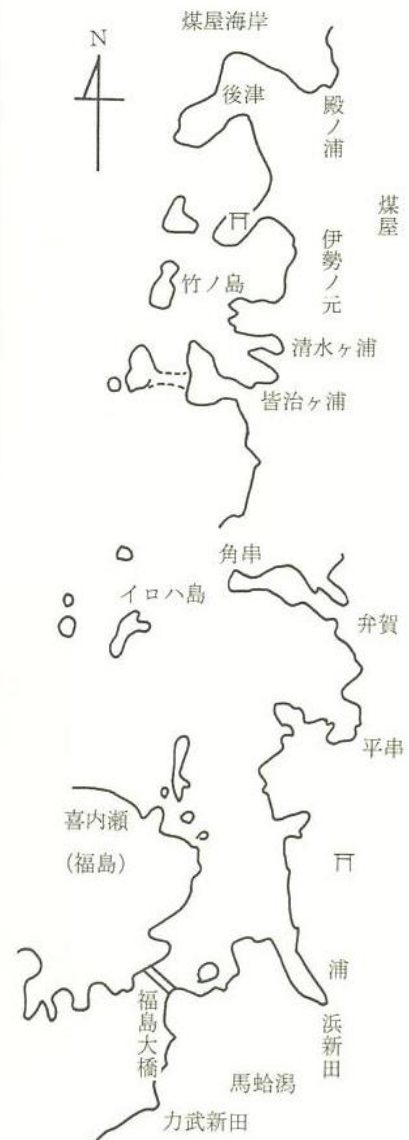
この湾内の島々は紺碧の穏やかな海と調和して一幅の絵を見るようで訪れる人の心を和ませてくれます。



煤屋海・竹の島



福島よりイロハ島を望む



## 二、東部の行合野川流域

西部の伊万里湾岸域と東部の行合野川流域との分水嶺は、北部の肥前町との境界から、あぐり山、二三・五mの三岳、中山の城山、黒川町との境をなす高地、二三六mの貝が峰を結ぶ線となります。

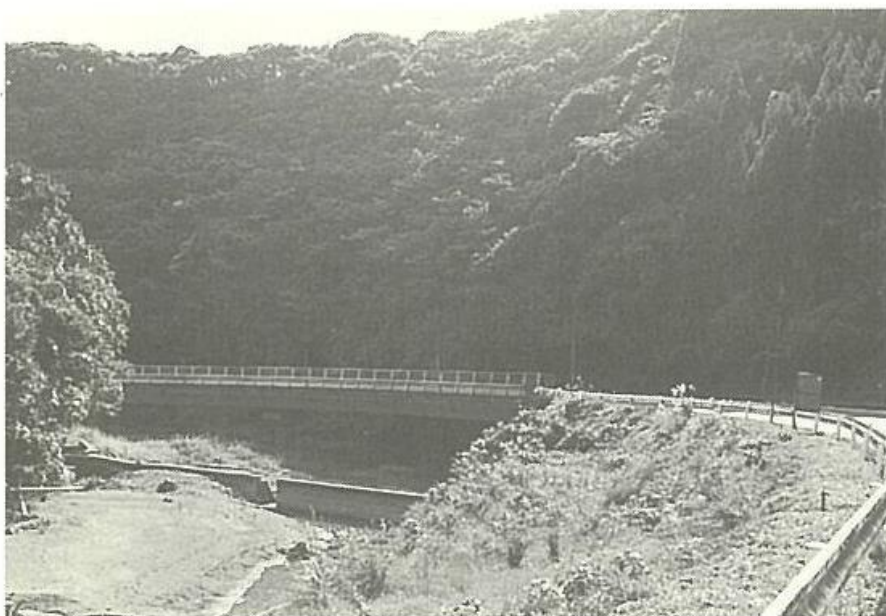
そこで、古い時代からの交通の障害は峠を越すことでした。浦～井野尾間の三岳北部にある「鶴掛峠」が標高百m、三岳南部の中山峠では五十m、内野より広域農道を経て東部に出る梨ノ木峠では約百mの丘を越して行かなければなりません。

水系から言えば、伊万里湾斜面と唐津湾斜面とに二分されます。

行合野川は木場の「葉山」から流下し、十九石、大坪、三十六石付近ではほぼ直角に曲がり筒井に入ると蛇行をくり返し、加倉より西流する川を合わせ、井野尾付近でやや広さを増し、田代から北波多村境の津留の「川氏」、板木の「川字治」（左岸）までは蛇行の連続です。浸食のちがいが非対称の山をつくっている、いわばケスタ状の地形を作って津留を経た下流は、両側の山が四十m位の断崖で迫る峡谷美の形を見せ、北波多村行合野で徳須恵川となっています。

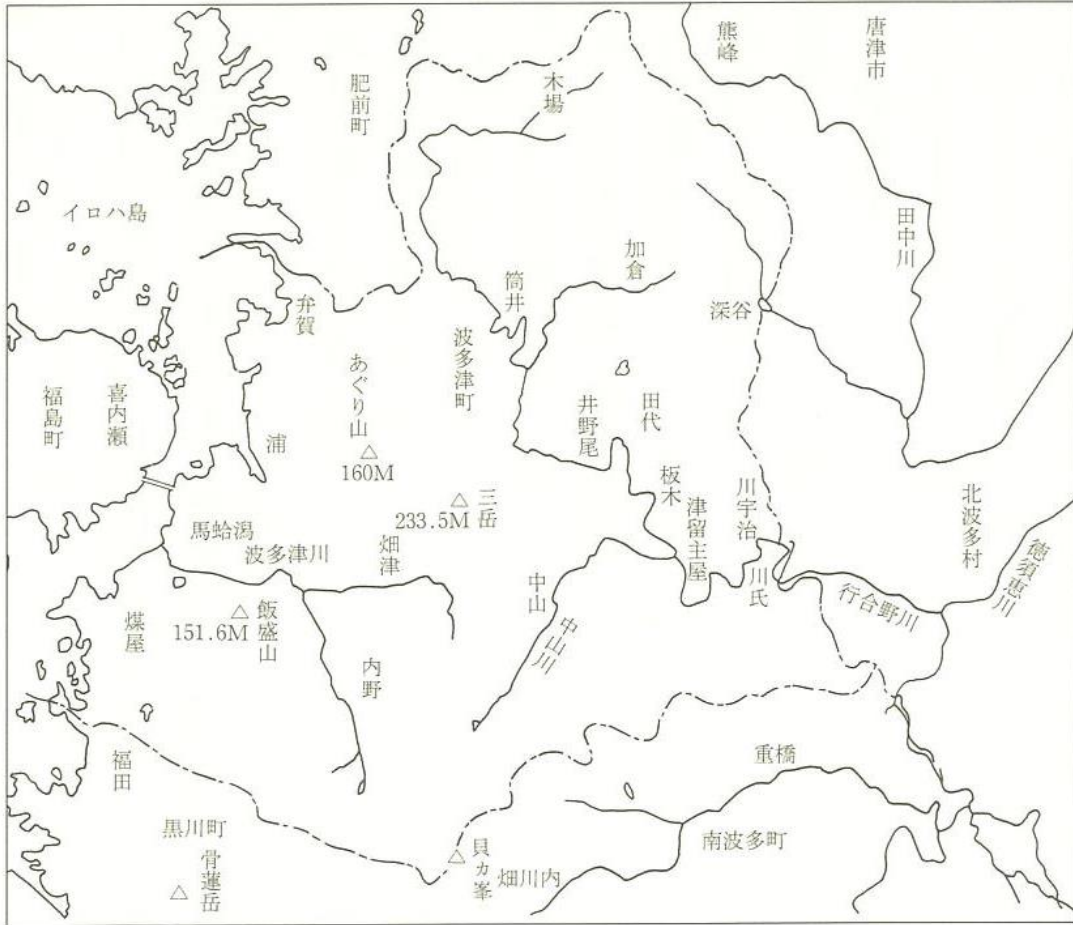
その途中で中山川を板木で呑むが、その本支流に囲まれた八十mの高地には、文録年間まで続いた法行城の跡が今は城趾碑がたち静かな佇まいをみせています。その昔地形的な要害として、また要衝の役を果たしていたものと思われる。

木場の大知木からの細流は深谷近くの「蛇が淵」に注ぎ、北波多村の下平野で田中川に合流し、徳須恵盆地の北部「下竹有」で徳須恵川に流出しています。



津留を過ぎれば「川氏」の溪流

# 波多津町の水系





## 第四節 地質

佐賀県は、石炭が地下に眠っていましたので早くから地質の研究がなされ、福岡・長崎両県を合わせて北部九州の地質は他県にくらべ詳細に調査され、その恩恵を受けています。

参考資料として

五万分の一 地質図幅説明書・伊万里

五万分の一 地質図幅説明書・唐津

五万分の一 地質図幅説明書・呼子

以上工業技術院地質調査所発行 昭三一～三二

五万分の一 佐賀県炭田地質図・図幅説明書

十万分の一 佐賀県地質図 昭四〇

北松浦炭田地質図・同説明書

北松南部鉱業会 昭一三

山崎達雄教授論文選集

山崎達雄教授記念事業会 昭五七

佐賀県の地質に関する主要な文献は右のとおりですが、実地踏査も行いました。また記述の引用文献として、先学の研究に拠るところも多大であることに深謝しています。

## 一、佐世保層群

波多津町における上層の最も新しい砂岩層は、佐世保市相ノ浦周辺に見られるので、地質調査に当たった学者が、その地名をとって相ノ浦層と命名しました。その相ノ浦層が東部に行くとその姿を消し、佐賀県側に入って西有田町に露出し、北部の伊万里市二里町、東山代町の大部分を占めています。伊万里湾の越木島、上陸して瀬戸町、黒川町その以北では杵島層と変わっています。

波多津町での佐世保層群は、相ノ浦層の下部が露れ、黒川町、瀬戸町と順に西南に行くにつれて上層部が見られます。つまり北北西――南南東の走行で、この線に直角の西南西へ傾斜しています。

相ノ浦層の特徴は、その下部である杵島層群の中の畑津頁岩層の容易に浸食されやすい地層上に急崖を形づくっており、ち密にして硬くしまった中粒～細粒砂岩であるため、所により、まるい石英・けいがん 珪岩・チャートなど石英質の固い小石の入った層をみることがあります。(大坪町の屋敷野へ登る途中道路の左側の崖で観察)

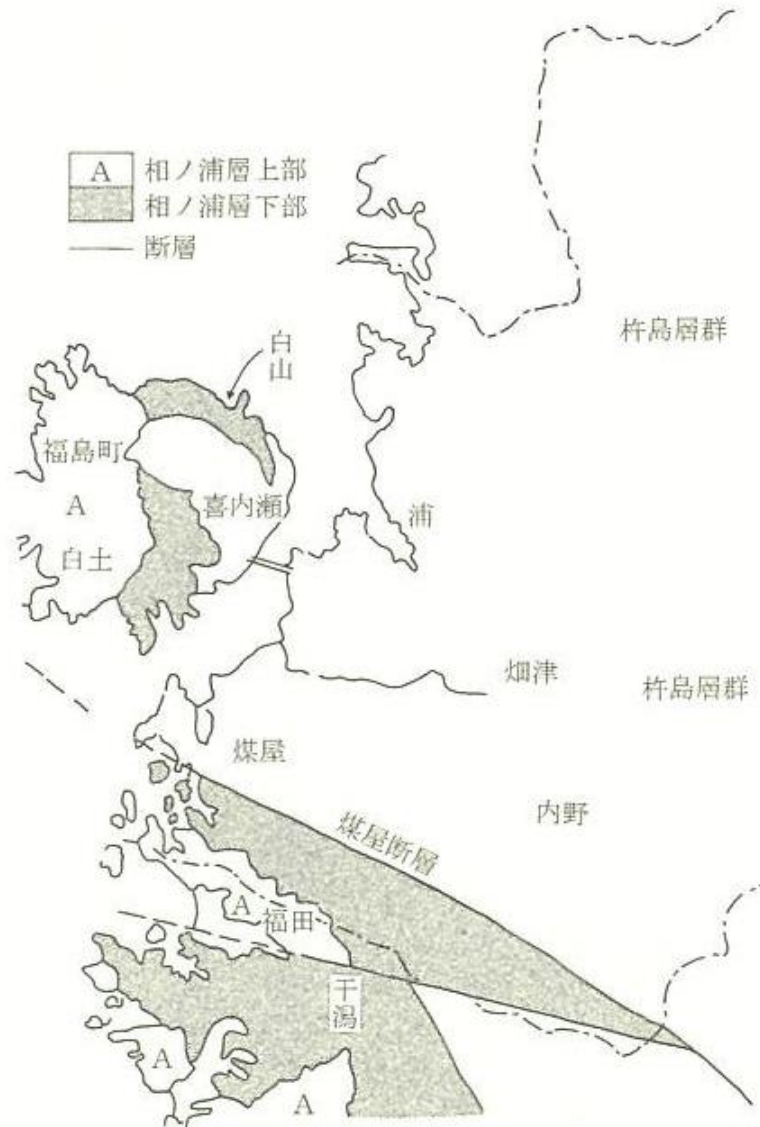
西有田町の標高三六〇mの中尾岳ぬすつといわ (盗人岩) の洞穴、大木の勝負岩岩陰遺跡、曲川下内野の竜王社洞穴遺跡、上本村権現山岩陰遺跡、伊万里市東山代町脇野の岩戸山、標高百mの白蛇山岩陰遺跡、黒川町牟田なつこぼの中木場道路ぎわにあるみいわ 箕岩 (穀物の殻・塵などをえり分ける用具の形をした岩の洞穴、これに磨崖仏が刻まれている)。南波多町原屋敷古場集落近くのこつていわ 答岩や隣接地の岩陰などは相ノ浦層懸崖の代表です。

なお、現在は七ツ島工業団地造成のため、無くなった源平岩洞穴遺跡など古代人の住居生活の場として利用された所でした。そのことを考えると相ノ浦地域では、まだまだ遺跡の発見の手がかりとなりそうです。

佐世保層群には石炭層があり、黒川町福田から波多津町煤屋にかけて、しばらく栄えた波黒炭鉱では、柚木層の七ヘダ層を採掘していたと言われます。

黒川町波多津町境干潟近くのイロ八岩は相ノ浦層からなり特有の経常を見せています。層中から発見された貝化石などにより、地質年代を新第三紀とされており、今からおよそ二千六百万年前ごろできた地層と言われています。

## ●相の浦層の分布



伊万里市北部を中心にみる地質

年 数	地 質 時 代		地 質		火山活動	地 域
(年 前)		(現世) 第 四 紀	沖積層	平 地		
			洪積層	段 丘	複数の 火山活	東松浦 火山で 西 岳 できる
100万～ 200万	新 世	新 第 三 紀	佐世保層群	福井 柚木  1500 m位 の海 成層  相ノ浦層	動で現 在の山 地をつ くる	三 岳 マユ山 (大川内) 黒川町 伊万里町 西松浦郡 煤屋
2500万			古 第 三 紀	杵 島 層 群	畑津頁岩層	
7000万	中 生 代	相 知 層 群			畑津砂岩層	層 厚 約 1000 m 位 の 海 成 層
			(駒鳴層)		行合野川流域	
22500万	古 生 代		行合野砂岩層			木場・加倉
			佐里砂岩層		同	
6億 45億	先カンブリア時代 〔地球の誕生〕		杵島層			北波多村
			芳ノ谷層 巖木層		古場	
			県北山地のカコウ岩（日本列島の骨組）			
			県北山地の変成岩			
			県内に見当たらない			

## 二、畑津頁岩層

この地層の標式地は畑津周辺であったとされ名づけられましたが、周辺の山頂部に薄くカバーしています。

また、辻付近、煤屋の後津、角串などに露出しています。暗灰色～灰白色で泥岩とシルト（砂と粘土の中間の沈積土）岩の互層からなりますが風化すると崩れやすく、しばしば崖崩れを起こしています。

### 三、畑津砂岩層

標式地は畑津周辺。この砂岩層は一般に細粒～中粒ぐらいで、新鮮な切り口では灰青色の泥質砂岩を主とし、ごくうすい頁岩をはさみます。

風化しやすく黄褐色や淡い紫がかかった色に変わり、時には緑色鉱物を含み、良質のものは石材として利用されています。

これは、波多津町内では西部地区に多く見られます。クリノメーターで測ると、走向は北北西～南南東で傾斜は西南西に向かって一〇度ぐらいです。中山～井野尾間の道路拡幅工事でその露頭が見られ西側カットに貝化石が帯状に発見されました。



### 四、行合野砂岩層

標式地が北波多村行合野周辺で、国道二〇二号線道路沿いに露出していて行合野砂岩層と命名されています。

波多津町内では、中央背陵高地より東部に発達し、行合野川沿いの地域はほとんどこの層が見られ特異な地形・景観が展開されます。



板木の行合野川に中山川が合流するところ、両川に囲まれて八十mの高地があります。東部が急で西部のゆるやかな傾斜の地形を利用して築城されたのが法行城です。

このような地形をスケス状地形といいます。敵襲に対しては、周囲に川があり容易に登りにくい地形だから要害として利用されたのでしょう。同様の地質地形は筒井の上戸城や中山の城山などがあります。

本層の下部は一枚の塊状の青灰色細粒砂岩で、よく石材として利用されますが、風化すると一般的には淡紫赤色に変わります。

波多津木場の大坪石切場で昭和四十一年七月地元の松下用助さんが、灰白色で長さ十五 cmの骨の化石を発見されました。佐賀大学教授磯谷誠一氏は、これをペリカン鳥の鳥骨と鑑定されましたが、その包含層の現場に案内しました。この化石は、三十六石橋と十九石橋の間から東に入った石切場で行合野砂岩層の石を採掘中発見されたものです。

町外では大川町大川野字山口の採石場で水鳥と推定される鳥骨化石二個が発見され、脚の鱗がはっきり見られます。また多久市西多久町藤川内の岸川氏経営の採石場でも鳥骨の化石が出てきました。いずれも行合野砂岩層です。

ウミガメやサメの歯なども発見されることから、当時代二千七百万年～三千万年前の漸新世時代の我が郷土は現在より暖かったのではないかと推考されます。

波多津町東部の大部分を占める行合野砂岩層をもう少しくわしく見ますと、上層部は粗粒の石英や長石などの粒の荒い鉱物が主となっていますが、細かい<sup>れん</sup>礫（小石の粒）も含んでいます。また北波多村志気入口より西方の山道に入ると粗粒砂岩の中に二枚貝や巻貝の化石が多く見られます。このことから当時の海岸の様子も十分うかがうことができます。

また、大川町駒鳴峠周辺から西にはよく露出していますので「駒鳴層」とか「駒鳴型」とも別に呼ばれています。

本町では、川氏・津留・田代・井野尾・岩ノ本・中山に見られ、前述の法行城も、この行合野砂岩層の上部、いわゆる駒鳴型砂岩層の非対称的な傾斜で自然に形成された地形を利用したものだだったので

す。

前述の津留～川氏間の峡谷は粗粒砂岩からなる駒鳴層の山陵を行合野川が突き破っています。つまり山脈を直角に浸食した谷となったいわゆる「<sup>まっく</sup>横谷」となっています。

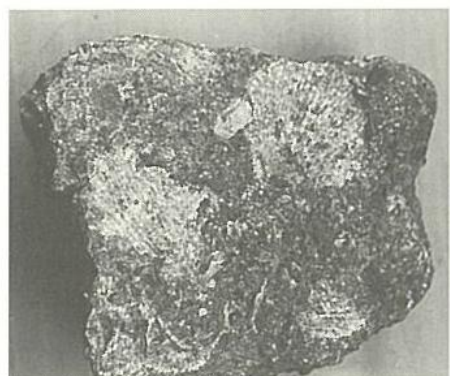


畑津砂岩層（川氏）



板木 法行城址（主屋から）

●駒鳴砂岩層及び 行合野砂岩層の分布



行合野砂岩の化石



五、佐里砂岩層

筑肥線佐里駅付近に標式的に露出し、岸岳の山頂部などにも分布しています。

波多津町では、深谷～大知木・加倉～木場付近に露出し、本層の下限は杵島層最上部の細粒砂岩などに続く粗粒～中粒砂岩ですが、各地を通じて岩相の水平的変化は少ないようです。

岩石の中には、石英や俗に火打石といわれる石英質の粒が観察されます。全体の厚さは七〇～八〇mと報告されています。

上部の方は、泥岩のうすい層に伴って「骨石」と呼ぶ火山の噴出等のできた凝灰質の堆積岩をはさんでできています。

新鮮なものは、暗青色ですが風化すると黄白色に変化してきます。

骨石の命名者は新井琴次郎氏で、動物の骨がくずれ、散乱した様子によく似ていることで提唱された

ものです。骨石が重視されたのは、この層の下方四百mぐらいで大きな炭層に達する手がかりとなったからです。

## 六、杵島層

杵島層は、杵島郡北方町や大町町の杵島炭鉱付近に標式的に見られるので杵島層と命名されています。

調査報告によれば、有田付近でのボーリングにより、この杵島層の厚さは二百二十mを記録し、元の杵島炭鉱付近では百六十m、波多津町木場では百mの厚さだそうです。

その中には、海にすむ貝の化石や植物漂流の木片化石を混えているところから、潟湖・内湾性の沈積層であろうと推定されます。

木場付近露出の本層は、暗灰色で瀉泥を固めたようで、浸食されやすく、木場地区の無蓮<sup>むれ</sup>あたりから谷間が開けてくるのはこのためではないでしょうか。

加倉付近では田代断層によって杵島層上部のシルト岩がわずかに露出しますが、このシルト岩に貝化石がよく発見されます。

波多津町での堆積岩の最も古いのはここまでで、杵島層の下にある芳<sup>よし</sup>谷<sup>たに</sup>層は、東部の北波多村では広範囲に分布しています。（ごくわずかに木場にあらわれている所があります。）

以上のように波多津町の堆積岩層は、西部に相ノ浦層があり、次第に東部に行くにつれ、畑津頁岩層、畑津砂岩層、行合野砂岩層（上部は駒鳴砂岩層）、佐里砂岩層、杵島層と古い地層となっています。下部の古い地層が同一町内で見られるのは、前述のように、地層が西の方に傾いているからでもあります。

## 七、火成岩

地殻変動の中で火山活動により火成岩ができたのですが、当地方の堆積岩層をおおっている火山岩類は、さまざまです。

これらの火山岩類の噴出時期は明確でないようですが、玄武岩<sup>げんぶがん</sup>の浸食程度などから第四期の中で玄武岩類以前に生じた火山岩類は鮮新世、以後のものは更新世に属し、玄武岩類は両者にまたがるものと考えられています。

波多津町で人目をひくのは、畑津から東部にまたがる三<sup>みたけ</sup>岳で、百mの丘陵の中に突出した標高二百三十三・五mは、飯盛山<sup>いらいもりやま</sup>百五十一・六mと共に波多津町を印象づける山です。両者ともに畑津頁岩層の地層中や割れ目に地下のマグマ（岩漿<sup>がんしょう</sup>）が押し入ってつくられた山です。飯盛山の山容は飯を盛った形をしていて、全国的にもこの山の名は多いようです。

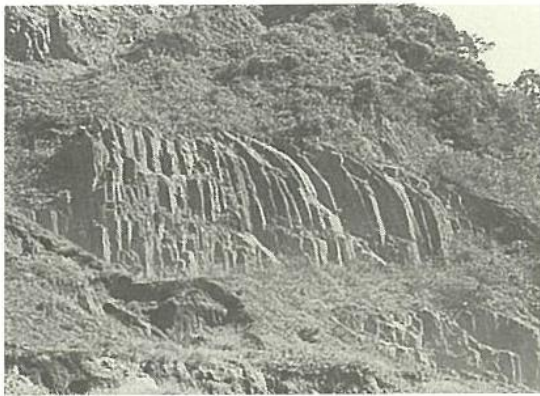
## ◆三 岳

中腹では、たてに割れ目のある柱状節理の玄武岩が広く深く屏風のようになっていて異様な景色が見られます。現在、西の山麓は採石され、山の形が変わりつつあります。

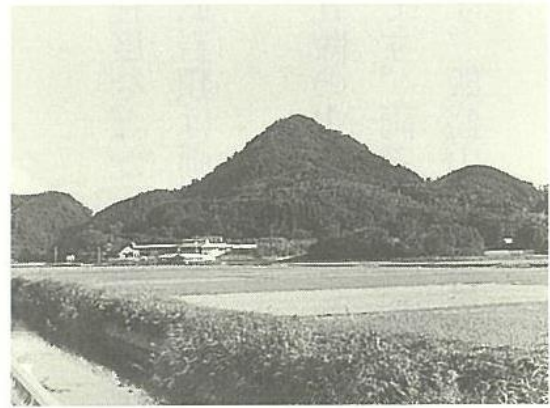
粗粒で黒灰色をした石で、その中には輝石や斜長石、またかんらん石の小さな鉱物（斑晶）が見えます。くわしく言うと「輝石かんらん石玄武岩」ですが、地元では「かな石」と呼んでいます。

#### ◆飯盛山

飯盛山の岩石は、安山岩のように結晶が微細な斜長石、輝石しそ輝石・磁鉄鉱の中（石基）に玄武岩特有の斑晶としての鉱物を含みますので「普通輝石しそ輝石安山岩」と呼んでいます。一見して「玄武岩質安山岩」によく似ています。



三岳頂上附近の柱状節理露頭



溶岩でできた飯盛山

#### ◆あぐり山

東西の分水嶺となる波多津町北部の「あぐり山」（最高地百六十m）は畑津砂岩層中に貫入する「粗粒玄武岩」で暗緑色をしていて、顕微鏡下での鉱物（斑晶として）は、かんらん石や斜長石と少量の輝石がみられます。

#### ◆上場台地

東松浦半島は、玄武岩の溶岩台地の地形で上場台地と呼んでいます。

唐津から見ても、波多津町の高尾山より遠望しても平坦な地形が続いています。資料によれば、流動性に富む玄武岩溶岩だから、普通みられる円錐状や楕状の山の形は形づくことができず、基盤岩が溶岩流出直前に平原化していたからだと言われています。この上場台地の裾の南端は、波多津町の木場区木場や大知木、稗古場、加倉付近まで延びています。

玄武岩もその岩質や組成する粒度で分類されますが、この上場台地でも七種に分けられるよう複雑で



す。波多津町木場地区のものは粗粒で灰白色の「かんらん石粗粒玄武岩」です。

この火山岩は、肥前町入野周辺から唐津市の菅牟田、熊峰に続いて分布し、一部は鷹島にも及んでいます。著しく風化作用を受け、かんらん石の斑晶にみえますが、他の玄武岩に比べて軟質であるため「真石」と呼ばれ、石材に利用されています。現在、大知木や稗古場の採石は見られず、稗古場ではその採石場跡は桑畑に変わっています。

中山～井野尾間の道路拡幅工事のカットで、行合野砂岩層に火山岩である流紋岩併入した珍しい所を観察することができました。しかしセメントでカバーされると見ることはできないだろうが、地層の観察研究では惜しまれてなりません。

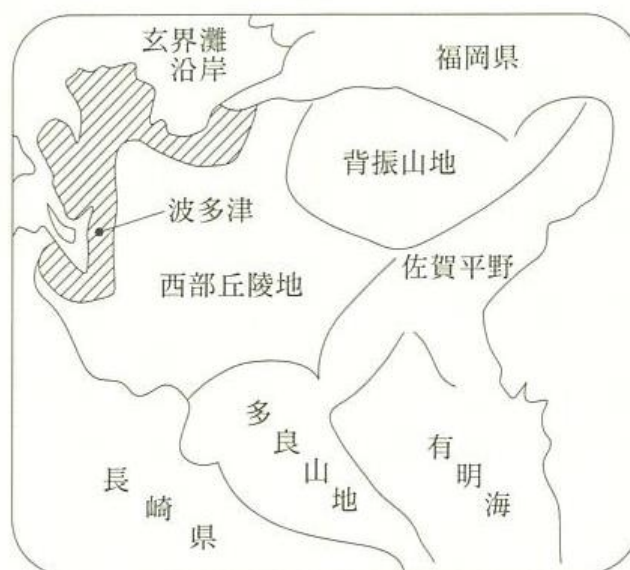
## 第五節 植生

### 一、植物層のあらまし

佐賀県は東経一二九度四十四分～一三三度三十三分、北緯三十二度五十七分～三十三度三十七分に位置し、北は玄界灘、南は有明海に面しており、北部に天山、背振山、南部に経ヶ岳、多良岳と標高千m前後の山がいくつかある程度で、ほとんどがゆるやかな傾斜面の地形で成り立っていますが、生育している植物の種類は決して少なくありません。人の入りやすい地形のために、豊かな自然は人々の生活に利用され易く、厚生林として残されている区域は僅かな部分であるに過ぎないのです。

県内の植物分布地域区分によりますと波多津は、玄界灘沿岸地域と西部丘陵地域の接する部分に位置しています。

植物分布地域区分



佐賀の自然と植物より

日本の植物生態区分は、大別してヤブツバキクラス・ブナクラス・コケモモ、トウヒクラスの三つに分けられ、暖帯温帯、亜寒帯と称していますが、ヤブツバキクラスの暖帯亜区系では常緑広葉樹が主体となっています。

玄界灘沿岸地域は、浜玉、唐津、東松浦半島から南下して伊万里市の玄界灘に面する地域をふくむもので、対岸の福島や鷹島も同じ植物分布をもつものと思われます。この地域はマテバシイ、スタジイ、タブノキ、ヤブツバキ、タイミンタチバナ、ヤブニッケイ、ミミズバイ、ホルトノキなどの木本類とヤブコウジ、ホソバカナワラビ、ノシメラン、ムサシアブミ、キジョラン、などの草本類から成り立っています。

また、ハマヒサカキ、マサキ、ハマビワ、マルバシャリンバイ、トベラ、ツルソバ、オニヤブソテツ、ツブキ、ダンチク、ダルマガク、など、さらに暖流や寒流の影響から南方系、北方系の植物があり、朝鮮半島を経て渡来した大陸系の植物も入りこんでいることも特徴的で植物の種類が豊富に残されています。

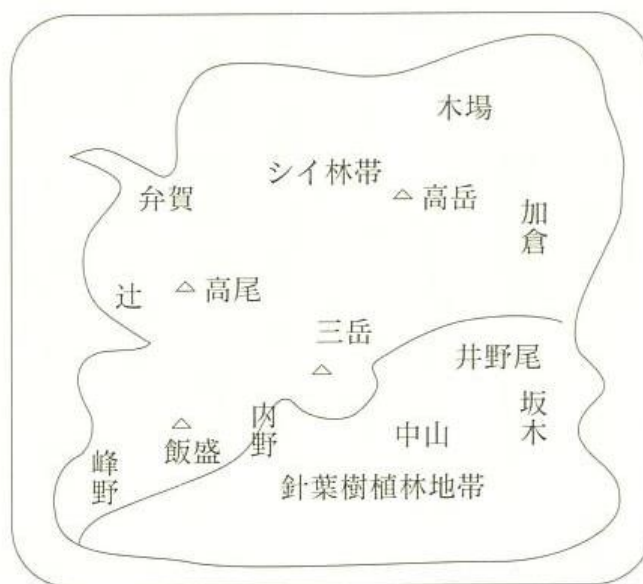
特異なものとしては、エゾオオバコ、エゾニガクサ、ハイビャクシン、オガサワラエノキ、ヒメキラソウなどがあり、海岸にはハマグルマ、ハマヒルガオ、ハマゴオ、ハマオモト、コウボウムギ、カワラヨモギ、などがありホソバノハマアカザ、シオクグ、ウラギク、アイアシなどが潮の影響を受ける塩性植物として存在します。

海岸を離れた内陸部は、シイ（スタジイ・コジイ）、カシ（アカラシ・ウラジロガシ・シリフカガシ・アカガシ・ツクバナガシなど）、クスノキの仲間（カゴノキ・アオガシ・イヌガシ・シロダモ）、モチノキ、ネズミモチ、サザンカ、アオキなど。下草としてオオカグマ、ハナミョウガ、リュウノヒゲなどが普通に見られます。

人里近くでは、クヌギ、コナラ、エゴノキ、リョウブ、ハゼ、クロキ、ヤブムラサキ、サルトリイバラ、ナガバキイチゴ、モウソウチク、マダケなどが見られます。

波多津は、この植物分布の接合する所に位置することから、弁賀、辻、馬蛤湯、煤屋などの西部海岸地域と、木場、加倉、筒井、田代、中山などの東部兵陵山地地域に分けることができます。この地域には、高尾山（七十六・八m）、飯盛山（一四八・二m）、三岳（二三三・五m）などの山が両地域の中にあり、多くの種類の植物が生育しています。

佐賀県植生図（昭和五十三年三月、文化庁）によれば、樹木の生育層より分けて北部はシイ林帯、南部は常緑針葉樹の植林地帯としています。図では、三岳、飯盛山を結ぶ線を境としてシイ林帯と針葉樹植林地帯を区分しています。



佐賀県植生図 波多津

## 二、波多津町の植物

### (1) 森林・山地の植物

#### 【針葉樹】

伊万里市および西松浦郡一帯は、従来、成長晩生型ながら樹幹通直で心材は淡紅色のアヤスギと呼ぶ品種のスギが多く造林されていますが、波多津から北波多にかけては地スギと呼ばれるヤブクグリ系のスギが集団的に古くから植林されています。心材は茶褐色ですが腐れに強くしかも植付けてから八年目頃から急速に成長し通直に伸長する特色があります。この品種の由来はわかりませんが、井野尾、坂木、および中山では五十年生以上の老壮令林が各所にありますし、また、中山の大山祇社の境内にはこのヤブクグリとみられるスギの大木が見られることから、かなり以前から地元でさし木育苗が行なわれ植林が繰り返されて今日に至ったもののようです。また、熊本県小国地方や大分県日田地方のヤブクグリには約七つの系統のものがありますが、波多津のヤブクグリはこれらの地方にあるヤブクグリの源流ではないかと言われたことがあります。現在では一般にはアヤスギ系・オビスギ系・ヤブクグリ系・ホンスギ系などのスギ植林が行われていますが、地スギとしての波多津ヤブクグリは波多津特有のもので将来ともに残していくべきスギの一品種でありましょう。

ヒノキは、東部の深谷の近くに県行造林地としての植林があり三十数年を経過しています。また、そのほかの各地域でも山の中腹などに適地を選んで植えられたヒノキ林を見ることができます。



## 板木のヤブクグリ植林

### 【広葉樹】

シイ林は標高六〇〇m以下の兵陵や低山の代表的な常緑広葉樹林で、高木層にスダジイ、ツブラジイ（コジイ）、亜高木層にヤブツバキ、ミミズバイクロキ、低木層にルリミノキ、ネズミモチ、アオキなどがあり、林床の草本としてはヤブラン、オオカグマなどが普通に生えていますが、海岸に近い低地の常緑広葉樹林としてもう一つのタイプにタブ林があります。高木層にタブノキ、シロダモ、ヤブニッケイ、亜高木層にはヤブツバキ、イヌビワ、アオキ。林床の草本としてはムサシアブキ、キジョラン、フウトウカズラなどがあります。さらに標高五〇〇mから八〇〇mに分布するアカガシを代表とするカシ林がありますが、これは高木層にアカガシ、亜高木層にヤブツバキ、シキミヒサカキ、低木層にネズミモチ、ハイノキ。林床植物としてベニシダ、リュウノヒゲ、ヤブコウジなどがありますが、波多津の広葉樹はこれらの三つの暖帯亜区系の常緑広葉樹林帯の植物が混ざり合った樹木の集合体として考えることができるようです。

広葉樹は古くから主として薪炭材として伐り出され、跡地は自然萌芽の新生樹の発生による二次、三次林となり繰り返されて今日の林相を作っています。

高尾山、飯盛山をふくむ西部海岸地域では、高木層を占めるものとしてアラカシ、アオモジ、ヤブニッケイ、アカメガシア、スダジイ、など。亜高木層としてシャリンバイ、ゴンズイ、ヒサカキ、ヌルデ、ヤブツバキなど。低木層はヤマザンショウ、イヌビワ、マユミ、ナワシログミなど。林床にはオオカグマ、ハナミョウガ、ヒメキランソウ、ツワブキ、サルトリイバラなどがあります。

東部丘陵山地地域は、三岳をふくんで中山、板木、木場、加倉などの東部の地域ですが、高木層としてシイ、タブ、アカメガシワ、ヤマハゼ、クロキ、など。亜高木層としてはクサギ、ネズミモチ、アオキ、イヌビワ、トラベ、など。さらに低木層にはイヌザンショウ、タイミンタチバナ、イヌツゲ、ヤマハギ、などが顕著に見られます。また、林床にはキンミズヒキ、ヤマノイモ、アケビ、ノブドウ、ツワ

ブキ、などがあり、そのほかにルリミノキ、シイモチ、ヤマザクラ、も見られます。



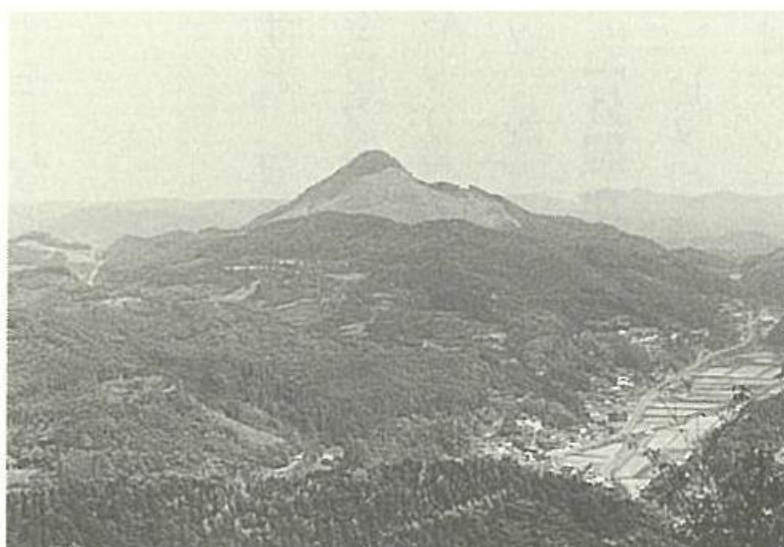
飯 盛 山

**【つる植物】**

サルトリイバラ、ヤマノイモ、アケビ、ノブドウ、ハスノハカズラ、カラスウリ、ムベ、オオイタビ、ヤブガラシ、タンキリマメ、サネカズラ、アマチャズル、スイカズラ、ヘクソカズラ、フユイチゴ、ツタ、キレハノブドウ、マルバグミなど。

**【林内の草本】**

ヤブラシ、リュウノヒゲ、シュンラン、オオカグマ、ベニシダ、ツワブキ、チゲミザサ、ヤブマオ、ヒトツバラン、オニヤブソテツ、シヤガ、フユイチゴ、ウマノミツバ、オモトなど。



飯盛山から三岳をのぞむ 右手は内野地区





三岳頂上付近の植林されたクヌギ

## (2) 原野・道ばたの植物

### 【道ばた・畑の植物】

歩きながら目に触れる植物を挙げますと、ヨモギ、ギシギシ、ノゲシ、ギョウギシバ、チカラシバ、エノコログサ、イヌタデ、カゼクサ、クワクサ、ススキ、チガヤ、エノキグサ、ツユクサ、ノアザミ、オドリコウソウ、マンジュシャゲ、カヤツリグサ、ミチヤナギ、スベリヒユ、ヒメクグ、キクタニギク、など。

### 【外国からの帰化植物】

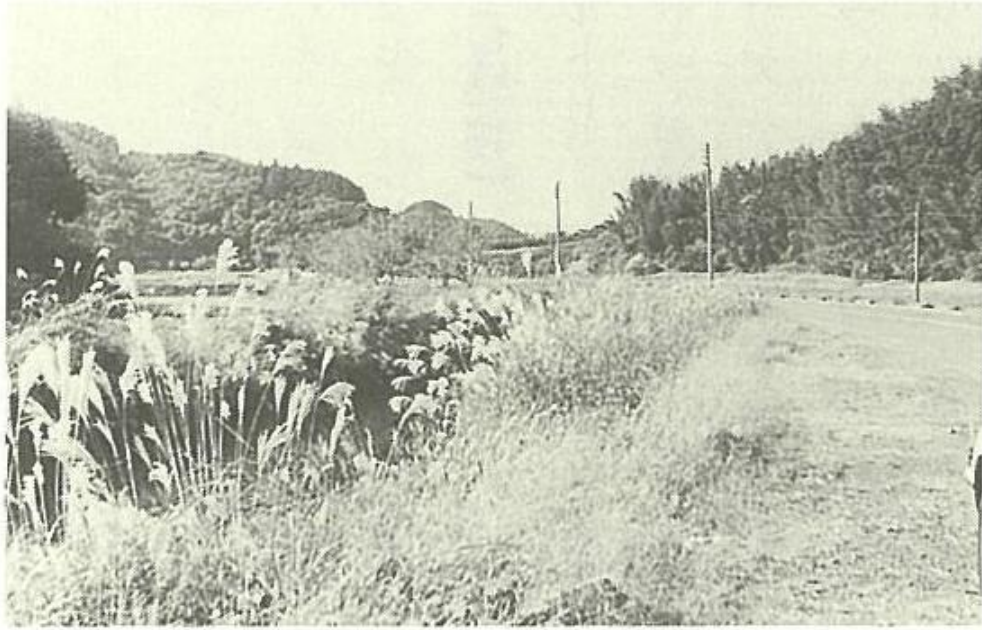
ヒメジョオン、シロツメグサ、セイタカアワダチソウ、オオアレチノギク、ヒロハウシノケグサ、ホウキグサ、コバンソウ、ゲンゲ、ウマゴヤシ、オオイヌノフグリ、マツバゼリなど。

### 【林縁・原野の植物】

アキノキリンソウ、トバシダ、スギナ、ヤマブドウ、エビズル、サルトリイバラ、クサイチゴ、チガヤ、ゼンマイ、ナルコユリ、ヤブマオ、ヨメナ、ノコンギク、ハナイバナ、ヒヨドリバナ、ヤマハッカ、ヤクシソウなど。

### 【あぜ道・水田の植物】

ミゾカクシ、スズメノテッポウ、タガラシ、カヤツリグサ、アゼガヤツリ、アゼナ、ヒデリコ、イボクサ、ウキクサ、イヌビエ、コナキなど。



路傍のススキ

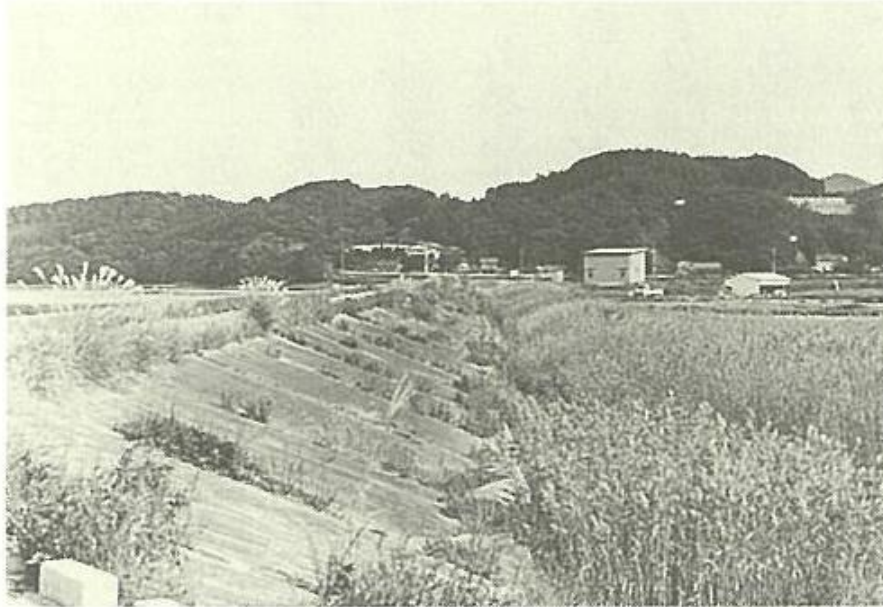
### (3) 海岸近くの植物

波多津の海岸は、砂浜にはほとんど恵まれていません。防潮工事も必要のないところでは、波打ち際まで自然に生育した広葉樹が迫っており、汐尻と植生限界との高さの差は、ほぼ一m五十cmくらいで、クロマツなどはほとんど見かけられません。

煤屋の海岸では、佐賀平野の北部にそびえる天山（標高千四十六m）山系で見るハネミノノユエンジュのような樹種もあり変わった植物が見られます。

上木層にシイ、リュウキュウハゼ、ツクシザクラ、クロキ、トラベ、アラカシ、コナラ、アカメガシワ、カクレミノ、ダラノキ、エノキ、ムクノキなどが混生して海岸の林帯をつくっています。

また、ハマボウの群落が三、四ヶ所にあり黄色の美しい花が初夏から真夏にかけて咲きつづけていますし、ハクサンボク、クマノミズキ、ホソバイヌビワ、シャシャンボ、タイミンタチバナなどは、ギョウギシバ、ハマスゲ、ツワブキ、ハマウド、カゼクサ、オカヒジキ、メドハギ、ヒメヨモギ、ハマアカザ、アメリカセンダングサなどがありますが、ハマボウ、ハマアカザ、オカヒジキ、などの海近くでなくては見られない植物や、内野口の民家のそばにあるダンチクの小さな集団や、三岳の頂上近くの採石場上の岩石地に繁茂しているハスノハカズラなども、海岸を離れて生きている海砂近くに生育する植物なのです。



煤屋の海岸内部

#### (4) 波多津町の貴重な樹木と保存したい地域

波多津には、先祖が残した貴重な遺産ともいえるべき植物やその群落がいくつも見られます。波多津ヤブグリの植林地もその一つであり、各地区に祀られている氏神さまの社そうも神社を取り巻く鎮守の森として大切に残してきたものであって、郷土の天然記念物であります。田代の「かんのんさまのスギ」として樹齢四〇〇年といわれ佐賀の銘木古木の一つとして貴重な存在であった。直径一・四mの大スギは、残念なことに昭和六十二年の十二号台風で倒伏し伐採されて現在は古株が残って往時を思い出させていますが、各地区に自然林のかたちで残っている社そうの貴重木などは、いつまでも保護し残していきたいものです。



田代三嶋神社 スギ伐根

#### 【高尾山のサクラと金刀比羅神社】

高尾山のサクラは、伊万里市のサクラの名所として第一に挙げられる程有名であり、千本のサクラの山として知られていました。しかし、ここも昭和六十二年の台風によって大木のサクラが倒伏し以前のような美しさが失われました。早急にむかしの高尾山を再現したいものです。

また、ヒラドツツジの根付けや手入れに努力されていた田中敬太郎さん（当時七十二才）の記事が昭和五十七年五月号の「いまり広報」に掲載されています。

金刀比羅神社社殿のまわりには、六本のクスの大木があります。また直径八十cmもあるスダジイの大木が立っていますし、社殿の裏手にはアラカシもまじえたシイ林が繁茂して玄海の北風を防ぐ役割を果たしています。





高尾山公園

**【畑津 田嶋神社境内】**

神社正面右手にあるクスの大樹は、直径一・二m、樹高二十m、推定年令四〇〇年と思われます。境内周辺にスギが六本あり、直径一・〇m、〇・八m、〇・六m、いずれも樹高は二十mを超える大木で推定二五〇年以上と見られています。

このほかに、アラカシ、(直径〇・八m)が四本あり他のカシ類とともにカシ林を作っています。年令はクスと大差のないものと推定されます。林内は清掃が行きとどいており下草にはヌスビトハギ、イノコズチが見られ、老令のアラカシからは多数の萌芽株が伸びあがっています。



畑津 田嶋神社



### 【板木 田嶋社境内】

参道石段に至る道下にマダケとアカガシの木立があり、木殿及び絵馬堂前の境内には一対の大木のイロハモミジがあり、さらに二本のクスの大樹が社殿を覆っています。本堂殿はシイ林でハゼ、クス、ヤブツバキ、マダケが混生して東側にまで及んでいます。

イロハモミジ、直径0・6m、樹高十五m、クスは二本とも直径0・8m、樹高十八m。アラカシも二本とも、直径0・8m、樹高二十mで推定年令三五〇年くらい。ほかにもアラカシ、アカガシ、ヤブツバキ、クス、イヌマキ、ハゼ、シイ、が社そうに生育し、林床には、タブ、ミズヒキソウ、チジミザサ、ツワブキ、フユイチゴが見られます。

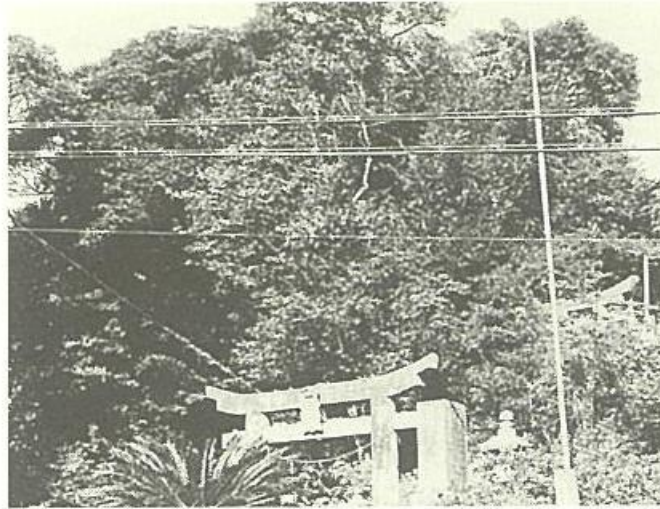


田嶋神社 イロハモミジ

### 【筒井 田嶋神社境内】

波多津東小学校の北隣り国道二〇四号線沿いに周囲をシイ、タブの常緑広葉樹林に囲まれた静けさのある神社です。本殿裏に見事に揃ったスダジイ十数本の大立が見られ、シイ、タブ、クロキ、イス、シイモチなどが混生して繁茂している社そうです。大樹としては、タブ、直径0・8m、樹高十m。シイ、直径一・〇m、樹高十m。スギ、直径0・8m、樹高十八m。

また大小六株より成るフジ棚は、東西約十五m、南北およそ十mの棚の上に枝を拡げていて、花期には見事な花を咲かせています。



筒井 田嶋神社



田嶋神社 イス



筒井田嶋神社のシイとフジ

**【木場 田嶋神社境内】**

社殿の裏はスギ林となっており、その中に一本のイスが混生しています。さらに一本は神殿裏にありました。このイスは根本に空洞がありクワ科のオオイタビが幹に這い上って共生しています。直径〇・八m、樹高十m。推定年令は他の一本も同じく二〇〇年生ぐらいと思われます。スギ林の中で被圧され気味の他の一本は、直径〇・五m、樹高八mです。高齢のイスは佐賀県にもありませんので十分に保護管理し保存したいものです。

また、境内に枝張りよく形の整ったイロハモミジがあります。直径〇・四m、樹高十三mで、板木の田嶋神社のものより小径ですが大切にしたいものです。



田嶋神社 イス



田嶋神社 イロハモミジ

#### 【中山 大山祇社境内】

かつては社殿裏一帯は、シイやカシ類などが生い茂り、正面の境内にはスギが植えられた立派な氏神さまであったろうと想像することができます。

樹高十二～十三mぐらいのシイの大木が四本あり、それぞれ直径一・五m、一・〇m、〇・八m、〇・六mで、ほかにアカガシ、ネズミサシ、モッコクなどが混生しています。

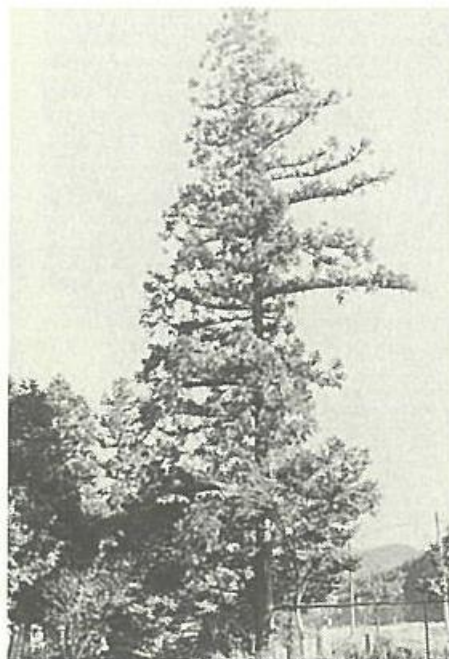
社殿近くには神木として植えた直径一・五cmほどのオガタマノキがあります。

四本のスギはいずれも通直に伸びあがり樹高は十八～二十五mぐらいです。これらのスギの大木は、波多津ヤブグリの典型とも考えられます。直径は最大のものが〇・八m。〇・六mのもの樹高は最も高く二十五mにも及んでおり、他の二本は直径〇・四mです。

大山祇社のこのスギは、波多津地スギについて調査研究を行った伊万里農林高校林業科（外園・洲上）によって畑津の田嶋神社のスギと同じ種類のもので判定されており、昭和五十四年度の佐賀植物友の会誌にその内容を報告されています。

この調査はアイソザイム法といい、スギの葉の中にふくまれるタンパク質をつくる酵素を化学反応によって分類してそれを図示したザイモグラフによって判定をしていく方法です。





中山 大山祇社のスギ



中山 大山祇社

#### 【波多津町辻のアコウ】

辻浦の篠崎満氏宅に植えてあるアコウは、立ちあがり部分の幹の直径が二十八cm、現在の樹高は四・五mほどあります。高さ一・二mくらいで一度伐られており、その後芽が伸びて今の大きさになっています。樹皮はアコウ特有の木黄茶褐色をしており親指ほどの実が枝についています。家並みの都合から毎年枝を剪定していますが、すぐに芽生えて枝が写真のように繁茂するとのこと。この木は、五十年ほど前にいろは島あたりに漁に出た折に、或る島から掘り取ってきた二本のうち的一本であるとのこと。



波多津辻浦アコウ

**【井野尾のシイ】**

井野尾の通称坂堂（むかしは釈迦堂ともいう）と呼ばれるシイタケのほだ場にあるシイの大木です。推定年令は二五〇年生、直径ほぼ一m、樹高十四mで幹は三つに分かれたまま、成長しており、根廻りは五・六m、枝張りは東西二十m、南北十二mあまりに広がり勢いのある樹相を示しています。

**（5）波多津の名木・巨木・貴重木一覧**



番号	樹種	区分	直径(又は幹廻り)	樹高	推定年令	生育場所
18	アコウ	貴重木	○・二八m	四・五m	五十年	浦篠崎満氏宅
17	イス	貴重木	○・八m(○・二m)	十m	二〇〇年以上	木場田嶋神社
16	イロハモミジ	貴重木	○・六m	十五m	三五〇年以上	坂木田嶋神社
15	イロハモミジ	貴重木	○・六m	十五m	三五〇年以上	坂木田嶋神社
14	シイ	巨木	一・〇m(三・四m)	十四m	二五〇年以上	井野尾坂堂
13	シイ	巨木	一・〇m	十m		筒井田嶋神社
12	シイ	巨木	一・五m	十m		中山大山祇社
11	アラカシ	名木	○・八m	二十m	二五〇年以上	畑津田嶋神社
10	アラカシ	名木	○・八m	二十m	三五〇年以上	坂木田嶋神社
9	アラカシ	名木	○・八m	二十m	三五〇年以上	坂木田嶋神社
8	クス	名木	○・八m	十八m	三五〇年以上	坂木田嶋神社
7	クス	名木	○・八m	十八m	三五〇年以上	坂木田嶋神社
6	クス	名木	一・二m	二十m	四〇〇年以上	畑津田嶋神社
5	スギ	名木	○・六m	二十五m		中山大山祇社
4	スギ	名木	○・八m	二十二m		中山大山祇社
3	スギ	名木	○・八m	十八m		筒井田嶋神社
2	スギ	名木	○・八m	二十m	二五〇年以上	畑津田嶋神社
1	スギ	名木	一・〇m	二十m	二五〇年以上	畑津田嶋神社

板木

(注記)

○アコウ くわ科

わが国の西南地方暖地の海岸地方に自生する高木、幹は直立し高さ二十mくらい、大小の枝を四方に

ひろげ幹の大きなものは、径一mにもなり、幹の周囲から気根を出す、葉は長い柄があり互生、楕円または長楕円形で先端は鋭光形、全緑、長さ十～十三cm、幅五～六cm、雌雄異種、花のうちは球形、中に淡紅色の細かい花があり熟すると淡紅色をおびた白色径十五mmぐらいある。種子をまくとよく芽が出る。佐賀の名木古木には肥前町新田に一八〇年、樹高五mのもの一本だけがある。また平戸の黒子島には巨大木がある。

## 主要な植物の解説

### ○ヤブツバキ、ツバキ科

本州から九州の海岸近くにはえる常緑木。植物分布上からは暖帯亜区系の常緑広葉樹林帯の指標植物とされ、この地帯にはヤブツバキがある。ヤマツバキとも呼ばれ、これからツバキ油を採る。園芸品として多くの品種がある。

### ○アオモジ クスノキ科

熱帯、亜熱帯性の小高木、台湾、琉球から九州の西海岸を北上し、佐賀の天山、浮岳古湯を結ぶ西側に分布している。波多津では海岸から東部山地まで伐採跡地や雑木林などの至るところに生育している。春の彼岸に花を折って墓に挿すところからヒガンバナ、トゴツシュなどの呼び名があり生長い早い。

### ○ハマボウ アオイ科

神奈川県より西の本州から琉球までの海岸の潮のさしてくる入江に生える落葉低木で二～三m程になる。葉は厚味があり灰白色の毛を上面にうすく下面には密にかぶる。夏に直径五cmくらいの黄色のフヨウの花に似た花をつける。波多津では煤屋の海岸に三、四ヶ所の群落があり、佐賀県ではこの群落は貴重なものである。

### ○イロハモミジ カエデ科（タカオモミジ）

本州・四国・九州の山地にふつうにみられ、人家にも植える落葉高木、標高九〇〇mくらいの高さまで分布し、生育範囲が広く山のモミジ（紅葉）の主体をなしている。波多津では神社に多く植えられ、弁賀、板木、木場の各地で大きく成長し、かたちもよい。

### ○ダンチク イネ科（ヨシタケ）

暖地の海辺から川岸などに生える大形の多年生草本で、群生する。莖は太く直立、ときには傾斜して

おり葉と同じく緑色、高さ三mにも達する。谷間を駆け上り時には標高一〇〇mくらいまで生育している。秋、茎頂に大物の淡紫白色の花穂を直立し、風になびいている葉の長さは互生し六十cm内外に達し、むかしはこれで餅を包むこともあった。

### ○ハスノハカズラ ツツラフジ科

海岸や海に近いところにはえる多年生の常緑木本性のつるで、茎は円柱形で緑色、葉は互生、長い柄があり、たて形の広卵形、全緑で葉質は厚くない、葉柄はハスの葉のようなつき方をする。核果は六mm熟すと朱紅色となる。三岳の岩石地に匍伏して繁茂している。

### ○キクタニギク キク科 (アワコガネギク)

朝鮮、満州から九州北部・本州の中国地方などに不連続的に分布する大陸系の植物。九州では昭和二十九年に東松浦半島(玄海町その他)で四十四年に福島町の白岳で発見されたということですが、波多津でも道ばたで、特に中山方面でよく見かける黄色のかわいい野生菊です。京都の菊谷で発見されたのでキクタニギクといい、また黄金色の泡の集りにたどってアワコガネギクともいいます。花は多いもので一株に五九〇個もつけているという程で茎頂に一cm〜一・五cmに黄花をいっぱいにつけ秋を色どっています。

### ○セイタカアワダチソウ キク科

北アメリカ原産の多年草、茎は高さ一m〜二mぐらい、空き地や道ばたに群生して黄色の花が目立つ帰化植物、明治年間に観賞用として日本に渡来したといわれるが、戦後の輸入物資にまぎれて日本に入り最初は鉄道線路や国道沿いの土手などに繁茂したがいまでは波多津の山の中の道ばたに秋を色どっている。花粉症の原因をつくるとも疑われたが風媒花ではない。染料として利用され、花活けに手折られている。

### ○アマチャヅル ウリ科

北海道から九州まで、また朝鮮、中国、東南アジアまで広く分布し、山地や、やぶに多い多年生のつる草。茎はつるとなって巻きひげでよじのぼり雌雄異株、葉は互生、ふつう小葉からなる常葉、小葉は皮針形或いは狭卵楕円形で鋸葉があり葉面には細毛を散生する。葉に甘味があるのでアマチャヅルという。葉草としてブームを作ったが、これは甘味成分の中に薬用人参の薬効成分とみなされているギンセノサイド及びギペノサイドが含まれているという徳島文理大の竹本常松教授の成分分析の結果からきたものである。薬効は万病に効く、副作用もないので日常の保健茶として気楽に飲用するがよいとされている。坐骨神経痛、関節痛が五週間後には軽快したという報告もある。八〜九月頃黄緑色の小花を開く、全草を採取してかげ干しにして保存し、使用する。

## 第六節 気候（気象）

### ・波多津をとりまく気象のあれこれ（農業技術員の経験談）

長年農林関係の指導員として活躍してられた方に襲業関係の気象に関する経験談を聞かせていただきました。

年間の降雨量が昭和五十七・五十八年に限っては波多津の統計と伊万里の統計では二百mm位波多津の方が少ないという。その降雨量の境界、つまり気象現象の境界がどうも新道入口あたりではないかと思われれます。対岸の山代方面では、鳴石を境にして先の方が波多津と同条件であるように見え、その要因は海（対馬暖流）と地形にあるのではないかと思われれます。

同じ波多津町でも、東部の方が西部の方より降雨量は多く、昭和五十九年六月二十九日波多津の東谷は凄い雨量に見舞われました。市農協井野尾出張所が浸水し、板木・田代の田圃は冠水しました。そのため植えつけたばかりの苗が流失して大きな被害がでました。このときの雨量は昭和二十八年の水害より多かったようです。

昭和四十二年二月十二～十三日は大雪が降りました。当年は苗植えができなかったのですが、その年の夏は七月九日の豪雨のために市内の小学校の子供が水に流され、七月八日には伊万里町で母と子供が水に流されました。大雪と豪雨の因果関係がどうもありそうな気がしてならないのです。雨量の最多時期は、波多津では六月二十五日から七月五日ぐらいまでであるという。

つぎに、霜と農作物の関わりについて聞いてみました。ところが、この波多津町に無霜地帯があるというのです。加倉から木場にかけての小字七目から上の方らしい。なぜ霜が降らないかという、冷えた空気は山の斜面に沿って下りていく。だから傾斜があって東南向きの上の方には霜は少ないということになります。波多津では四月十二日以降は霜は降らないという。初霜は十月三十日位で四月十二日頃までが霜の時期ということになり、このことから考えると、蜜柑の霜害は標高百米以下のところに生じることになります。

また、中山から畑津峠を越えると二～三度の気温差を感じるという。毛布一枚の違いがあるといわれ、これは明らかに畑津峠を越せば下って海に向かうからでしょう。海岸と内陸部の差でしょう。波多津町の年平均気温は、十五・五度といわれていますが、肥前町の国民宿舎のあるその上の三越で平均十六度という。浜玉の海岸沿いでも平均十六度といわれる。これはいずれも海に向かって傾斜しているからだといわれます。

冬の晴天率をみてみると、（十二月～二月まで）伊万里一〇%、相知一五%、佐賀平野二〇%という。このことから麦の収穫の差が表れるという。もちろんこのことは、日照時間の差ともなる。佐賀から伊万里方面へ来る人の話しであるが、途中、女山峠を越えたら雨だったという人は意外と多いらしい。この地域の冬の気候を象徴していて面白い。

波多津での梅の開花は早いときで十二月からだという。しかし、このようなときは、不作の年とい

う。そして開花が遅いときは四月三日頃までという。奇妙なことに桜と桃と梅と一緒に咲くこともあるという。そのようなことを桜・桃・梅と一緒に春を迎えるというので三春駒ともいうらしい。

春一番が吹くと春が訪れるといわれ、波多津町で春一番が吹くのが、二月二十四日頃といわれます。

立春を過ぎて最初に吹く風のことを春一番というらしいが、でも、ここ二・三年は桜の花は三月に開花している。一週間程度で花は散る。佐賀の多布施の桜からみると、こちらは開花時期が三・四日遅いという。春一番の前に中国大陸で舞い上がった砂塵が上空の偏西風に乗って飛んでくるいわゆる黄砂が二月半ばにこちらに達します。

台風であるが、七月台風が一度上陸をすると、その年は異常気象になるようだ。平成五年は七月二十七日に台風が九州（この地）に上陸している。七月二十九日に台風六号が上陸、さらに台風七号がまたも八月十日にこの地に上陸している。平成四年は台風のため梨が被害を蒙り、梨の「豊水」が沢山やられた。蜂の巣が低いときは風が強くとくという。巣を上の方に作っていると、被害が大きいということを知ったのである。昆虫の感がそうさせるのであろうか。驚くべき感性である。ここ十年位台風がくるのが早い。

雪は農作の徴候を現すものだ。昔から冬の雷は大名の身上を揺るがすともいわれ、それは、暖冬（不作）→冷夏に連がって、不作は二～三年続く。だから民・百姓から税の取り立てができないというらしい。

暖冬の年は万年雪は下がるという。前に降り積もった雪が夏がきてもとけない現象らしい。暖冬の次に冷夏につながるからであろう。

雨の予見の方法には昔からの言い伝えでいろいろご存じであろう。それが、伊万里だけで言えることは、腰岳の八合目に雲がかかったら必ず雨が降るといふ。ここに面白い逸話がある。雨の予見者が殿様にかかえられた生活に入ったら感が鈍って雨の予見ができなくなったというのである。それは、自分の衣類の湿りぐあいが生活環境のちがいがからみてとれなくなったためだといふ。

常識としては、春二番の風が三月下旬・春三番の風が四月始め（これが桜の花ちらし）にきて、やっと春が訪れるという。その春には、寒くなって雨が降り、そして、気温が上って暖かくなる。秋は、逆に暖かくなって雨が降り、そして、気温が下って寒くなる。

また、面白いことを聞いた。蜜柑の袋のことである。皮をむいて、中に入っている袋の数が十二～十三こ位が一番甘いという。九個位しか入っていない蜜柑は甘さが落ちるといふ。だが八朔蜜柑や伊豫柑は袋の数が少ない方が美味しいという。

さらに、栗はイガとも落ちたら実が散って、イガが上で割れた方が下になっているという。普通凡人の気付かぬ点である。これは子孫をふやすための天の摂理のようなものであるのかと思うものです。

文明や科学が進むのはよいが、一方では自然の環境を破壊しないように、自然を守り、育てていかないと、やがて、人類はしっぺ返しに遭遇するにちがいないと思った。それは、これから先、生きていく人々の使命であるように思えました。



### 第三章 人口・世帯

#### 第一節 旧藩時代以来旧記にある人口の推移

##### 一、唐津藩時代の人口

(資料—松浦拾風土記 現波多津町関係抽出)

○計数のあわないところもあり、計算ちがいか、記入の際の誤記かわからないが、訂正を加えないでそのまま掲げる。  
 ○畑河内組に入るべきと思われる浦と馬蛤潟が掲げられていないが、数の上から見て畑津と辻に含まれていると思われる。

組	村	家族	人数	男	女	一軒当り人数
黒川	煤屋	29	142	76	69	43
畑河内	内野	51	270	155	114	53
	畑津	105	480	277	203	45
	辻	59	272	152	120	46
板木	板木	22	114	60	54	52
	主屋	13	55	27	28	50
	津留	8	47	記入なし		59
	中山	29	130	75	55	48
	田代	17	78	46	30	55
	井野尾	33	157	88	69	48
	筒井	50	211	120	89	42
	木場	36	152	85	64	42
	合計	452	2,108	1,162	895	47
板木	湯の浦	22	114	59	55	52
	杉の浦	21	87	50	37	41

## 二、明治時代以降の波多津の人口

○国勢調査第一回以降 第八回昭和三十年の頂点まで、僅かずつながら増加カーブで進んでおり、第九回以降は減少カーブの落ちこみがはげしく、この表の範囲内では今年の人口は、五十五年間で最低となっている。

	回数	調査	年	月	西暦	世帯	人口	男	女
		明治	32	12	1899		3,728		
国 勢 調 査	1	大正	9	10	1920		3,703		
	2	"	14	10	1925		3,712		
	3	昭和	5	10	1930		3,919		
	4	"	10	10	1935		4,048		
	5	"	15	10	1940		3,873		
	6	"	20	11	1945		4,392		
	臨時	"	22	10	1947		4,631		
	7	"	25	10	1950	800	4,813	2,322	2,491
	8	"	30	10	1955	811	4,910	2,361	2,549
	9	"	35	10	1960	800	4,627	2,212	2,415
	10	"	40	10	1965	782	4,066	1,957	2,109
	11	"	45	10	1970	782	3,712	1,783	1,929
	12	"	50	10	1975	789	3,597	1,720	1,877
	13	"	55						
	14	"	60						
15	"	65							

(資料 ― 第七回国勢調査までは「佐賀県統計書―昭二七年版」  
第八回以降は「伊万里市の統計」による)

## 第二節 人口の推移

### 市内町別人口の推移

(各年10月1日現在) 単位：人

年次	市計	伊万里	黒川	波多津	南波多	大川	松浦	二里	東山代	山代	県	国千人
五九	六、七五〇	二、三、九一八	四、〇三五	三、三五七	三、三二六	三、六二六	三、四四六	五、九九六	六、〇三三	八、〇三三	八、七五九	二、〇、二三五
五五	六、二四三	二、三、三五九	三、九九〇	三、四二一	三、三三八	三、六八三	三、四六六	五、八八九	五、七九六	八、三三二	八、六五、五七四	一、七、〇五七
五〇	六、〇、九一三	二、二、六四五	四、二、三七	三、五九四	三、三八七	三、八〇八	三、六六〇	六、〇、一六	五、七九五	八、七八一	八、三七、六七四	一、一、九四〇
四五	六、一、五六一	二、〇、九一二	三、二、六六	三、七二二	三、五四五	五、三三九	三、八五二	六、〇、三四	五、九〇三	八、八九八	八、三八、四六八	一、〇、四六五
四〇	六、七、三二六	二、二、六六八	三、五、六五	四、〇、六六	三、七九一	六、二、九七	四、一、七五	五、六、九八	七、三、三一	一、〇、八三五	八、七、一、八八五	九、九、二〇九
三五	七、八、三九七	二、三、七〇九	四、一、二三	四、六、二七	四、二、八八	七、七、七一	四、六、六四	六、三、三三	八、六、一三	一、五、二、七九	九、四、三、八七四	九、四、三、〇二
三〇	八、一、六三五	二、三、一七二	四、五、七四	四、九、一〇	四、六、〇七	八、〇、六〇	四、九、六四	六、四、二五	九、一、七一	一、五、六、四二	九、七、三、七四九	九、〇、〇七七
二九	八、三、三五四	二、三、七二七	四、七、七七	四、八、七〇	四、五、五〇	八、二、一一	四、九、七二	六、四、三〇	一〇、三、一〇	一、六、五、五七	九、六、九、五一	八、八、二〇〇
二五	八、二、三九九	二、三、一六六	四、六、九一	四、八、一三	四、六、二二	八、三、四六	四、九、五八	七、三、六六	八、七、四四	一、六、六、六四	九、四、五、〇八二	八、四、一、一五
二〇	七、〇、四二〇	一、九、七六二	四、六、四七	四、三、九二	四、三、三六	六、三、〇一	四、七、六六	五、八、五九	七、五、五五	一、二、八、二二	八、三、〇、四三二	七、一、九九八
一五	六、〇、五三九	一、六、五六六	四、二、四四	三、八、七三	三、六、五六	五、五、八五	三、八、四七	四、三、九八	八、三、五一	一、〇、〇、一九	七、〇、一、五七七	七、三、一、一四
昭和五	五、〇、五二七	一、六、三八六	三、六、三一	三、九、一九	三、七、三四	三、四、七五	三、九、三二	四、二、三八	四、〇、〇四	七、二、二八	六、九、一、五六五	六、四、四、五〇
大正九	五、三、〇四七	一、四、八六〇	三、四、八八	三、七、〇三	三、五、六三	三、四、六五	三、六、八六	四、〇、九五	六、一、〇五	九、〇、八二	六、七、三、八九五	五、五、九、六三

世帯数

年次	市計	伊万里	黒川	波多津	南波多	大川	松浦	二里	東山代	山代	県	国(千人)
昭和六〇	一七、〇七七	六、九九八	一、〇二五	七六七	七〇六	八九四	七九六	一、七三三	一、七八四	二、三九四	二四、六二九	三八、一一三
六一	一七、一四六	七、〇八八	九九六	七六一	七〇七	八九三	七九三	一、七三六	一、七九二	二、三八〇	二四、七六八	—
六二	一七、二二六	七、一四六	九六二	七六一	七一	八八二	七六六	一、七五三	一、八二九	二、三八七	二四、〇二八	—
六三	一七、二四六	七、二〇二	九三七	七七二	七二五	八七七	七八二	一、七四二	一、八五四	二、三七六	二四、七九八	—
平成元	一七、三〇九	七、二二八	九三〇	七七五	七八	八八〇	七八五	一、七四七	一、八六一	二、三八五	二五、〇五一	—
二	一七、三六三	七、三三三	九四七	七六二	七〇二	八七一	七九七	一、七六六	一、八八四	二、三三三	二五、〇三五	四一、〇二六
三	一七、五〇一	七、三八〇	九四一	七六〇	七〇六	八六九	八〇九	一、八一〇	一、九一四	二、三三二	二五、〇二九	—
四	一七、六三三	七、四八六	一、〇二〇	七四八	七〇八	八六六	八〇四	一、八一七	一、九〇七	二、二七九	二五、六四〇	—
五	一七、七六三	七、五六五	一、〇二九	七五二	七〇六	八七一	八〇〇	一、八四二	一、九三二	二、二五六	二五、九三三	—
六	一七、九八四	七、七三二	一、〇四一	七五八	七〇七	八七六	七九八	一、八五三	一、九五三	二、二六六	二六、六八三	—
七	一八、〇五四	七、七九二	一、〇六二	七三三	七〇四	八四九	七七四	一、八六五	二、〇一八	二、二五七	二七、八六二	四四、一〇八
八	一八、二八六	七、九五五	一、〇九二	七三四	七〇一	八四六	七七三	一、九二	二、〇二二	二、二五二	二七、三三三	—
九	一八、四三三	八、〇六〇	一、〇八九	七三六	六九八	八四二	七七三	一、九六三	二、〇四八	二、二三五	二七、三三三	—

資料―国勢調査(国勢調査年以外は常住人口)



### 第三節 世帯数の推移

#### 市内町別世帯数の推移

(各年10月1日現在) 単位：世帯数

年次	市計	伊万里	黒川	波多津	南波多	大川	松浦	二里	東山代	山代	県	国子人
五九	一七、三三九	七、〇八八	一、〇七六	七六四	六九七	九〇八	八二八	一、七四二	一、七六五	二、四七二	二、四三〇、〇九	—
五五	一六、五九六	六、六六六	一、〇五二	七七一	七〇八	九二八	八三三	一、六五〇	一、六六〇	二、四九八	二、三三三、一八九	二五、九六〇
五〇	一五、七四〇	五、八二一	九二〇	七八九	七〇六	九三六	八二六	一、六〇九	一、六〇六	二、五三五	二、三三、二五三	二二、一〇七
四五	一五、〇四七	五、二七六	六九八	七八二	七〇二	一、二八〇	八三三	一、四五七	一、五三五	二、四八四	一九九、七六五	二七、八六九
四〇	一六、二五四	五、七〇四	七二二	七八二	七二二	一、三六七	八三七	一、二八一	一、七四七	二、七三三	一九、四五	二四、〇八一
三五	一六、三三七	四、九四六	七四三	八〇〇	七五五	一、五六三	八六七	一、二九三	一、八七一	三、四九九	一九〇、〇六三	二〇、六五六
三〇	一五、五二七	四、五三九	七八九	八一	七六七	一、四三〇	八六二	一、三三四	一、八〇七	三、三三八	一八、四六八	一七、九六〇
二九	一五、八八〇	四、五三四	七八〇	七六七	七六〇	一、五六四	八五九	一、二八八	一、九〇二	三、四二六	一七、六九九	—
二五	一五、九五八	四、四五四	八〇二	八〇二	七七五	一、五五三	八六九	一、四三〇	一、七六〇	三、五二四	一七、六〇三	一六、五八〇
二〇	一三、七六五	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一四、七七七	—
一五	一一、四〇六	三、一七一	七五六	六七六	六三二	一、〇二三	六七〇	八四四	一、五六〇	二、〇八五	一九、七六一	一四、〇九一
昭和五	九、五〇一	三、〇九七	六二七	六八一	六八二	六二八	六九八	八一九	七八四	一、四九五	一八、七三三	一二、六〇〇
大正九	一〇、三三一	二、九三六	六三二	六八九	六八一	六五八	六八八	八二二	一、二八六	一、九三〇	二八、八五四	一一、一三三

人口



年次	市計	伊万里	黒川	波多津	南波多	大川	松浦	二里	東山代	山代	県	国(千人)
昭和六〇	六二、〇四四	二四、一〇七	四、〇四四	三、四一一	三、三二九	三、六四二	三、四二五	六、〇二四	六、一五〇	七、九三三	八八〇、〇二八	一一、〇四七
六一	六一、九三三	二四、二二六	三、九六〇	三、三八一	三、三三四	三、六三八	三、三九一	六、〇二二	六、一六七	七、八二五	八八〇、八六七	一一、〇六二
六二	六一、七三七	二四、二二四	三、八四四	三、三六五	三、三二七	三、六〇九	三、三三〇	六、〇二九	六、二三二	七、八〇七	八八〇、六八三	一一、〇六〇
六三	六一、六〇二	二四、二八八	三、七六八	三、三五五	三、三三二	三、五六四	三、二九九	五、九九二	六、三〇四	七、七〇一	八八一、四七一	一一、〇六〇
平成元	六一、三六六	二四、二八一	三、七三五	三、三三一	三、二八八	三、五三二	三、三〇四	五、九五三	六、二六九	七、六三三	八八〇、七五五	一一、〇二八〇
二	六〇、八八二	二四、〇一〇	三、七八八	三、二九六	三、三三九	三、五〇五	三、二七五	五、九八〇	六、三五一	七、五〇八	八七七、八五一	一一、〇六一
三	六〇、五九一	二三、九六八	三、六七七	三、二三二	三、二二八	三、四二四	三、二四〇	六、〇〇七	六、三九四	七、四三二	八七七、〇六五	一一、〇四三
四	六一、一九四	二四、一八	三、七七三	三、二五六	三、三二二	三、五〇七	三、三二六	六、〇二四	六、五二三	七、三八五	八七七、六〇三	一一、〇四三
五	六〇、九九一	二四、〇七五	三、七三八	三、二五三	三、三二六	三、四八一	三、二五八	六、〇三五	六、五〇九	七、三二六	八七八、四一六	一一、〇四三
六	六一、二二四	二四、四二〇	三、六九一	三、二三三	三、三〇二	三、四五五	三、二〇六	五、九九九	六、五三八	七、二八〇	八八〇、三三〇	一一、〇三三
七	六〇、三四八	二四、六〇二	三、六九一	三、一一一	三、一二七	三、三三三	三、〇六六	六、〇五二	六、三五二	七、〇一四	八八四、三〇一	一一、〇五〇
八	六〇、二五九	二四、八〇六	三、七八八	三、〇九五	三、〇八六	三、三〇一	三、〇二一	六、〇六五	六、二八四	六、八八三	八八五、一七六	一一、〇六四
九	五九、九七八	二四、八六七	三、六四一	三、〇四五	三、〇六九	三、二六三	二、九六一	六、一五四	六、二四七	六、七三二	八八四、七〇四	一一、〇六四

資料―国勢調査（国勢調査年以外は常住人口）

## 第四章 歴史

### 第一節 原始時代

#### 一、時代区分

先史時代の時代区分

(紀元前)	50,000 —	先無縄土器時代	おのナイフやり	旧石器時代			
	40,000 —						
	30,000 —						
	20,000 —						
	10,000 —						
	9,000 —						
	8,000 —				細石器		
	7,000 —				中期	新石器時代	
	6,000 —						早期
	5,000 —						前期
4,000 —	中期						
3,000 —	縄文時代	後期	新石器時代				
2,000 —		晚期					
1,000 —							
900 —							
800 —							
700 —							
600 —							
500 —							
400 —							
300 —							
200 —	弥生時代	時金石併用代					
100 —							
0 —							
(西暦)	100 —						
	200 —						

日本にはおよそ四万年前ごろから人類が住みついたのではないかという説がある。そしてきわめて粗雑な打製石器（石材の外側を打ち欠いで作った石器）を使って生活したのであろう。

## 二、先縄文時代

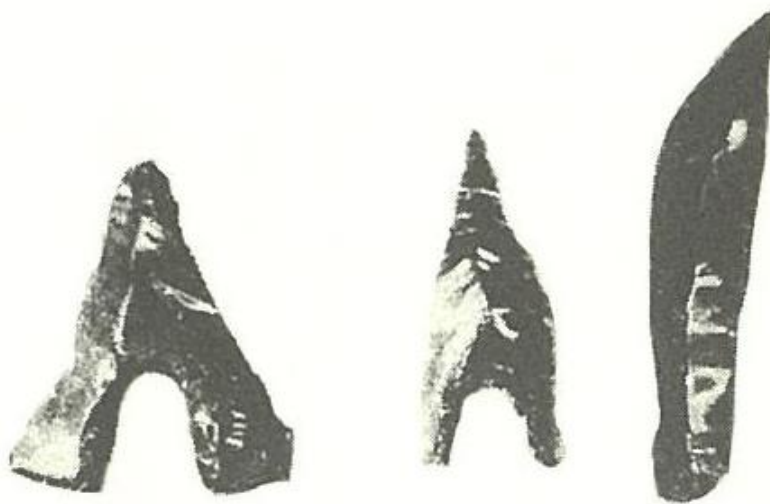
伊万里地方にも、先縄文時代から、既に人類が居住していたといわれる。それを証拠づけるものはこの時代の石器の出る遺跡が存在していることである。

わが波多津からは、木場集落の前山遺跡から石刃と石刃核、同集落開田遺跡からも石刃と石刃核、井野尾部落の水溜遺跡からは石刃が出土している。更に考えると、先史時代は一般にその居住は、湿気を避けて日当たりの良い、しかも飲み水や食糧を得るに便利で、また外敵に防衛にも有利な泉・山・川・湖のほとりの台地や、海岸近くの台地に多く営まれていたことからすると、先の三カ所は格好の場所ではなかったかと思われる。だから一万年もの昔に波多津にも人類が住んで居たことはまぎれのない事実であろう。

石器は金属器がまだ出現しない原始時代に、人類が生活していくために、固い石でこしらえたいろいろの道具のことである。

写真三点いずれも実物大である。右の石刃はいたって薄く、いわばかみそりの刃のようにして、それで肉を切ったり皮をはがしたりしたのである。左二点は狩をする時の矢の先に取り付けた鏃である。

石器には材料、作り方、使い方等によっていろいろ種類がある。



石器一石鏃（左2）、石刃（右）

### 三、縄文時代

縄文時代の人類は、石器をしだいに精巧に作れるようになったがそのうえ土器を作って使用するようになった。やわらかい土をこねて必要な形にこしらえ、天日に干して生乾きしたものを、火で焼きあげたものが土器である。

波多津からも土器が出た。元筒井分校跡北方の丘から石斧・石鏃・磨石といっしょに、曾畑式土器が一片採集された（現在波多津中学校に保管中）。県下では曾畑式土器の出土する遺跡は相当に多いが、伊万里では例が少なく貴重視されている。

波多津から先縄文時代の石器が出たのは三カ所であったが、この時代の石器は前記のほかに次の各地から発見されている。

- ・ 煤屋集落穴が坂（あなんさこ）
- ・ 木場集落上場元牧場跡
- ・ 本辻深浦の供養の辻
- ・ 大知木西の前の古屋敷跡
- ・ 内野こうじやの裏の山
- ・ しゅうごえの切通し
- ・ 飯盛山周辺

これらの出土分布からみても、縄文時代には波多津（波多津に限ったことではない）にもけっこう人が広がって住むようになったものと考えられる。更に深く注意深く探せばあるいはもっと多くの場所からいろいろな遺品が出てくるかもわからない。



曾畑式土器破片（波多津中学校保管）

## 第二節 地名と歴史

### ○木場の三十六石

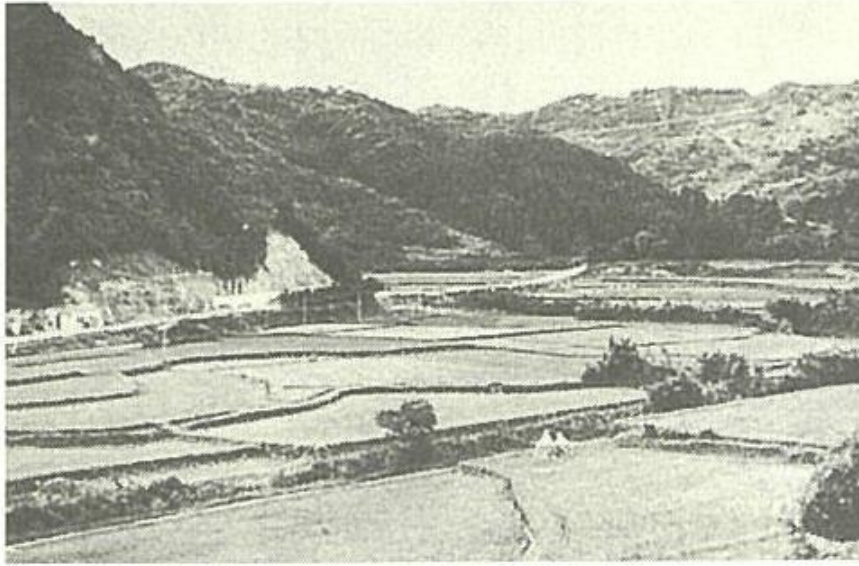
国道を唐津に向けて筒井を通り抜け三村屋から先の地域は木場所属だが、小字名を三十六石という。更に北進すると橋があってそこまでが三十六石、橋の名前も三十六石橋。橋を渡ればその字名は大坪。また橋があって名前が十九石橋、字名が十九石。

この地名はたしかに大化の改新（六四五年）に実施された條里制の名残りであろう、と原口静雄先生（元伊万里高校教諭）はいわれている。

筒井集落の岩の本に横沈という地名があるのも同様であろうと。とすれば、千数百年も前のことだから、木場・筒井はずいぶん歴史が古いことになる。波多津では東部地区が古いことは実証的にわかるけれども、西地区を合わせて全体が郷土のことを調べたり、大事なものを保存したりするように心がけたいものである。

巻末の町内の小字名地図を参考にして普通のよび名、古い名称などと対照して、いろいろなことを考えてほしい。





木場部落三十六石の水田

### 第三節 波多氏時代

#### 一、源頼光―渡辺綱の西下と筒井

一条天皇の正暦二年（九九一）源頼光は肥前守に任ぜられ、当国に西下、渡辺源吾綱もこれに従って松浦の地に下向し筒井村に居館を構えた。 —「前太平記廿一」による—

主従は満三カ年ほどこの地に住していた。この間の主従の行動は明らかでないが、その聲望威勢はおそらく近隣に鳴りひびいて後年の松浦党の基盤をつくったものというべき、その後綱の子孫がこの地に繁栄したのはこの時からであろうと察せられる。綱は帰京後三十一年、万寿二年（一〇二五）七十三才をもってなくなったが、綱の子、久は筒井源太夫と称し、父の居館筒井に住した—北波多村史— しかし、これらの人名・年代等にはそごする点も多く今後の研究が必要である。

大江山の酒てん童子を退治したという伝説の剛勇四天王随一の渡辺綱が筒井に館を築いた。その子孫が松浦党の祖となり威勢を松浦の地にふるったとあるからには、真偽は別にしても明らかにする必要がありそうだ。

#### 二、波多氏の起源と岸嶽城築城

藤原氏専政時代の末期は国司・郡司の退廃がその極に達し、威令は全く行われず、各地に凶徒が群立しても鎮撫することができなかつた。このようなびん乱の世に、所伝によれば第七十一代後三条天皇の延久元年（一〇六九）渡辺綱の曾孫源新太郎久は、肥前国松浦郡宇野の御厨検校（御厨とは神宮への貢進上納を司る役所であり、古は各地に在ったが、後にはそれが地名となった）となり、檢非違使（警察官兼裁判官の如きもので貴族や武士の登竜門）に補し、従五位下に叙せられ、源太夫判官と号し西下し

て今福の加治屋城に居を構えた。ここで久は初めて松浦を称し松浦源氏の祖となり、松浦・彼杵・吉岐・鷹島・福島・山代・有田等の広大な土地を領有し名実共に松浦党の領袖となった。

久の次男持は波多郷の領地を分封され岸嶽の要害に拠り、初めて波多氏を名乗り波多氏隆盛の基礎を築いたのである。岸嶽城の築造はおそらく久安年間（一、一五〇年前後）であろう。

当時の城というのは、今日唐津城などでみるような何層やぐらの堂々たる威容を誇るものではなく、簡易質実を旨としたきわめて小規模なもので、天然の地を頼みとして僅かに木柵・土堀・小規模な石垣等の臨時的な施設を設けたに過ぎず、居館もなく、天然の要害を利用した山城であった。

かくして波多持が岸嶽に築城して以来四百余年間、十六代三河守親に至るまで、上松浦の宗家となり威勢をふるうことになる。

### 三、波多家の滅亡

日本のいわゆる戦国時代を平定天下統一の大業を成し遂げ、今は飛ぶ鳥も落す権勢並ぶものない豊臣秀吉が、征韓のため名護屋に本陣を定めた。この地は波多三河守の所領であった。本陣をここに定めるについては腹臣寺沢志摩守に命じて事前調査も十分させた上、交渉をさせたのであるが、三河守は領内民百姓のことも思い秀吉の気に入るような返事をしなかつたらしく、先には秀吉の博多到着出迎え遅参のことやらもあって、秀吉の胸中には既に波多家改易一寺沢を後に封ずる考えがあったともいわれる。波多氏は兵二千を引きつれ鍋島直茂の旗本として出征、大いに戦功を挙げて文禄三年(一五九四)二月帰還したのであるが、意外にも海上において黒田甲斐守より秀吉の命が伝えられた。すなわち名護屋に船をつなぐことを禁じ、直ちにその所領一円は没収し、身は徳川家康に預けるといふ過酷きわまるものであった。

波多氏改易（お家とりつぶし・領地没収）については、いろいろの資料にその理由が記されているのでどれが真実であるか明確でないが、秀吉としては既定方針従ったままで、罪状などは罰せんがための口実に過ぎなかったであろう。また諸書に三河守の内室秀の前の不首尾を書いているのもあるようだ。

岸嶽本城に三河守の災厄の知らせが伝わるや、城内は挙げて驚き家臣すべて馳せ参じ前後策について大評定が開かれた。この事は松浦拾風土記の中に詳細に書かれている。とにかく過激派・自重派に分かれて大論争となった。しかるにそれを聞いた秀吉が怒って「三河守の罪科はきまって配流しているけれども、その跡のことはなにも沙汰していないのに騒いだり城を離れたりするとは言語道断だ。近々に城地受取りに来るからそれまではよく城を守っておれ、勝手に行動する者は捕まえるぞ」と厳重な申し渡しがなされた。そして間もなく城受取りの使者がきて岸嶽城は明け渡されたのであった。

三河守は常州の配所から家臣に迎えられた一度は岸嶽に帰ってみたが、今は一同離散して誰も居ず、追手の眼を恐れて点々としている間に、下松浦の地で不幸な生涯を終わったという。

第一代源次郎持からかぞえて第十六代目三河守親まで四百有余年間、上松浦に君臨した波多家はここでまったく廃絶したのである。

#### 四、波多家と波多津

波多津という地名は古い記録の中にはあまり出てこない。畑津と書いたのが普通のようなのである。だから地名の上で波多家となにか関係があって例えば波多家の外港だったから波多津とつけられたのではなどと考えたがいまのところその根拠は見出せない。始めから終わりまで波多氏の領土であったことにはまちがいない。

波多津には、岸嶽本城の出城がいくつも築かれている。ということは波多津は岸嶽本城にとって重要な位置ということであったろうか。それも考えられぬことではない。

##### ・板木法行城

松浦古事記には、古家周防守築くとあり年代不詳。

波多三河守災厄の時は、久家玄蕃橋扶度が城主で八百石を領していた。

また当時同城には久家祐十郎橋扶源（百石）も居たとある。右と同族であろう。

家臣の中では高禄の方であるが、この地が相当に重視されていたからであろうか。唐津藩になってもこの村は板木組大庄屋の所在集落となるが、その名残りでもあろう。

写真は庄屋敷跡から撮す。

石垣は後えいの人が築いて慰霊の設備をされるとかー。

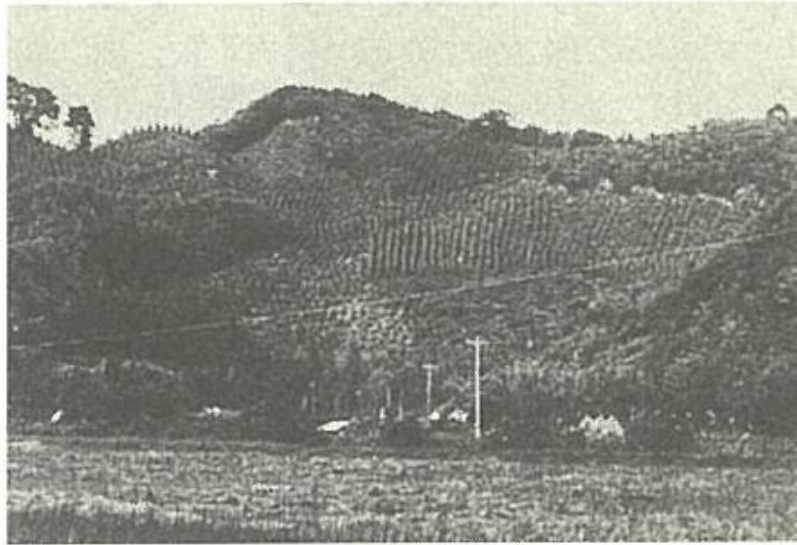


##### ・筒井城後城

松浦古事記に岡本山城守が、人皇六十二代村上天皇の天曆三年（九四九）に開いたとある。また同年中に山上十五左衛門も開いたとあるが、山代守は波多氏の近親で重臣にあたるので実際の仕事は山上氏が担当したのであろう。

城は山城だが頂上には簡単な石垣が残っているという。

写真は田嶋神社の北側水田から撮した。  
波多家没落の時は居城者がなかったのか記名がない。

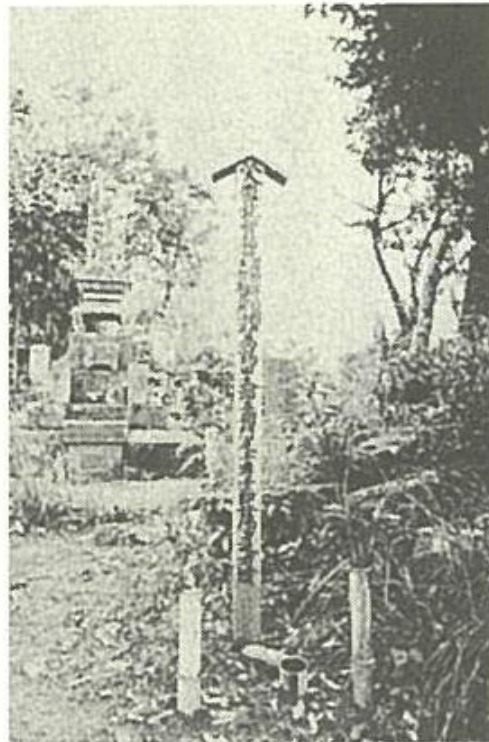


・筒井城後城

・鶴田太郎左衛門の墓標

鶴田氏は三河守悲運の時、五百石を領して筒井村在村との記録がある。

墓は城後山の中腹にある集落の墓地内にあったというが、数年前その後裔の鶴田家当主が累代墓をつくるため開墓されたところ多くの副葬品が出土したという。墓標はその墓の跡に菩提寺宝泉寺住職が書いて建てられたものである。



・鶴田太郎左衛門の墓標



### ・御嶽城

松浦古事記に久田五郎築くとあるが年代不詳。

この山は波多津を一望の中におさめる高山で町の中央に座しきわめて重要な位置にある。

波多家没落の頃は、畑津平内藤原清和が三百石を領して城主であった。また当時畑津左京藤原清貞も無禄でこの城に居た。

写真は井野尾から撮ったもので山の中腹左側に黒くみえるあたりが城の跡である。



・  
御嶽城

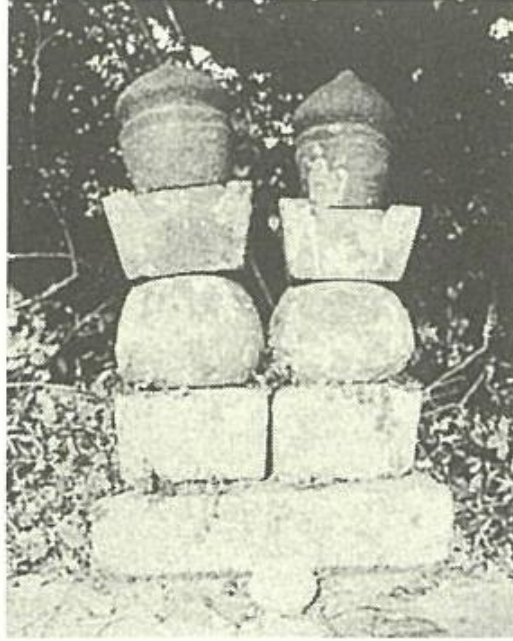
### ・無名塔

波多家没落後、家臣たちはちりじりに離散していったが、波多津にも相当数の人が来たに違いない。それらはいずれも悲憤悶々のうちに日を送り、なかには世を恨み、人を恨んで死んでいった人もあるだろう。

その墓を建ててもらった人はよい方、道ばたにのたれ死にした人は石を幾つか積み重ねて岸嶽末孫の墓、身分ある人は名前も入れぬ五輪塔か板碑など、哀れな末路ではある。しかし波多津はどの墓にも花を手向け合掌するのがならわしであった。



・ 無名塔



#### 第四節 唐津藩政時代

##### 一、藩政時代の概要

慶長三年（一五九八）豊臣秀吉薨じ、同八年（一六〇三）徳川家康江戸幕府を開き、以来二百六十五年間明治に至るまで、天下万民ことごとく徳川の威光になびき封建社会の世となった。松浦地方も波多家没落後は寺沢志摩守広高が代わって旧波多領を支配することとなり、唐津城を築いて第一代藩主になった。

○波多津は唐津藩の領土となり、法行城、城後城、三岳城も廃城されて秋風落莫の感切なるものがあつた。やがて組の政治組織がしかれると板木組配下に板木村・津留村・主屋村・中山村・田代村・井野尾村・筒井村・木場村・湯の浦村・杉の浦村が入り、畑河内組配下に内野村・畑津村・辻村が入り（馬蛤潟が村として独立村となるのは後年）、煤屋村は黒川組に入った。

○唐津藩は寺沢民以後藩主の交代が頻繁に行われ、藩主の度々の転封による多額の出費と、山間僻地の多い領内では産業も振るわず、蓄財政も苦しく、その負担は常に領民の双肩に負わされ時には誅求の苛政に苦しんだこともあつた。

##### 二、唐津藩主歴代

（領主）	（期間）	（禄高）
寺沢志摩守藤原広高	慶長二～寛永十（三十七）	十二、三万石
同 兵庫頭藤原堅高	寛永十～正保四（十四）	八、三
御 公 領（江戸幕府直轄）		

大久保加賀町藤原忠職	慶安二～寛文十（二十二）	八、三
同 出羽守藤原忠朝	寛文十一～延宝六（八）	八、三
松平和泉守源乗久	延宝七～貞享三（八）	七、三
同 和泉守源乗春	貞享三～元禄三（四）	七、〇
同 和泉守源乗邑	元禄三～同四（一）	七、〇
土井周防守源利益	元禄四～正徳二（二十二）	六、〇
同 大炊頭源利美	正徳三～元文一（二十四）	六、〇
同 大炊頭源利延	元文二～延享一	六、〇
同 大炊頭源利里	延享二～宝暦十二（十八）	六、〇
水野和泉守源忠任	宝暦十三～安永四（十三）	六、〇
同 左近将監源忠弼	安永四～文化二（二十九）	六、〇
同 和泉守源忠明	文化二～文化九（六）	六、〇
同 左近将監源忠邦	文化九～文化十四（七）	六、〇
小笠原主殿守源長昌	文化一四～文政六（六）	六、〇
同 耆岐守源長泰	文政六～天保四（十）	六、〇
同 能登守源長会	天保四～天保七（三）	六、〇
同 佐渡守源長和	天保七～天保十一（五）	六、〇
同 佐渡守源長国	天保十二～明治一（二十九）	六、〇
同 耆岐守源長行	安政四～明治一（九）	六、〇

### 三、庄屋制度

寺沢志摩守が旧波多氏領を嗣いで唐津藩主になると、まず波多氏の残党取締りに心胆をくだいた。哀れな末路で波多氏が没落したことは、志摩守のざん訴によるものであると家臣領民は信じていたから言動にも不隠当なところがみえたのである。そこを見抜いて志摩守は、波多氏家臣の中から由緒正しいものを抜擢して庄屋とし村毎に一名ずつを住まわせた。

領内およそ百七十か村（今日の大字）を三十七組に分け、組毎に惣庄屋（のちに大庄屋）一名をおきその組を総括させた。

庄屋はその村の一切を采配し、惣庄屋はその組中に不都合なことがないように指導監督の義務があり、もし百姓中に一人でも不届者が出た場合は、その村の庄屋・惣庄屋共に連帯責任を負わねばならぬ定であった。庄屋には屋敷と居宅が与えられ、それに庄屋料があり、惣庄屋には納米の中から役料として米百石が給せられた。

寺沢氏によって始められた庄屋制度は、その後度々改革もされた—大久保氏時代には庄屋の交代制がはじまったなど—。しかし基本的なことはそのままに明治初年度廃藩になるまで永続した。

なお志摩守は領内巡検の際、百姓一般に直接訓示をしているが、その時は村中残らず集合させられて

いた。村中からは迷惑の声が強かったので、あとでは百姓の中から相当の名望のある者を選び、名頭という役を設けて百姓一般の代表とし、御用の節は名頭が出て行って承わることになった。これから名頭が始まった。

#### 四、農民対策

検地とは、土地の広さを測って面積を出し、その土地一枚一枚の上・中・下を定めることであるが、これには必ず石盛（一反当り米の収穫率）を石高（その土地からの収穫高）が付きものであり、石高が年貢を賦課するときの基礎になるのである。だから検地はごく厳密におこなわれ、たとえ半坪以下の広さでも、石盛は一合一勺でもゆるがせにできなかった。

慶長年間に行われた唐津藩の検地は左のとおり一。

（石 高）

松浦郡の内 六万三千三十二石四斗六升七合八勺

右のうち……物成一年貢

松浦郡の内 三万二千四百五十五石七斗五升三合

そのほかに……小物成一雑税 六十七石六斗九升五合

農民からの年貢は収穫高の半分以上五一%強

同……………雑税は……………一・一%強

すなわち五公五民の重税であったのである。

元和二年（一、六一六）の検地になると

石高 六万六千五百十五石一斗七升四合

新検地高 八万二千四百十六石四斗一升六合

差引 一万五千九百一石二斗四升二合

新検地では波多氏時代に比べて四分の一に近い二四%の増加をはじめだしたのである。このように過酷であったため、石盛の高い田を持つ百姓で手不足な者（ほかに理由もあったか）は、田を無料で譲った上に金や酒を添えて他に渡す者さえでてきたのである。この元和検地が農民に与えた影響は相当大きかったとみえ「松浦記集成」は次のように書いている。

「右石高に引合せ打出高余計相増し、百姓難渋の時来り免（石高に対する年貢の比率）、石盛高く、反米莫大に進み、凡そ日本国中に類例無之程之由、既に田畑竿詰り（田畑を図る時の竹尺を短くして面積を広く出すの意）の上、嶮岨の山畑の永續ならざる場所、或いは茶・桑・楮までも、畑年貢の外に高入、皆出来より年貢償候故、豊作にも作得無之、平年作□□□取続き兼ねる村方多く有之、格別差迫りたる村は田拾□□□燐燭無之ては取続き不相成、故に波多家仕来の旧恩を語り続き、□□□の世変を残念に思はざるはなし、是れ波多家貴賤の微運、天道□□□しかくものかと思ふは下賤の常、天を恨みず、人を咎めずとは士以上の事、愚昧の輩は諭しがたく、小吏の力等にて何そ及ぶ処ならんや、嗚呼命

哉]。(注、記録不詳事項は□□で表現する)

訴える所なく、頼る所なく、如何なる難渋も欠乏も「嗚呼命なるかな」と、自らあきらめるよりほかに仕方なかった百姓の境遇は察するだに哀れである。

百姓の貧困はいわゆる藩財政の貧困を物語るもので、藩の財政のほとんどを農に負う藩としては、いきおい農村振興、増産に力を入れなければならぬことは当座の急務であり、志摩守は検地後しばしば領内を巡視し、百姓に対して直接「用地水、水口、来世に至るまで相違無き様仕候事」などの具体的な事項を示達してこの励行を督促した。さらに領内の庄屋待遇にも改善を加え権限を保持させて、百姓どもの取締りを強化させた。

黒川新田の干拓工事の時は、志摩守自ら毎朝暗いうちに起き、馬を飛ばして七里の道をかけつけ、仕事始めの時間から人夫を督励して工事の進捗をはかったという。

(土井周防守による馬蛤潟新田干拓の記録を、町の現状篇農林業の耕地の部掲載)

## 五、主屋文書

之は唐津藩政時代の農村事情を物語る材料として貴重なものであるが、出所が主屋の旧庄屋太田勇吉家から現在その一族市丸伝造氏に引継がれ所蔵されていたところから主屋文書とよばれているものである。

内容は藩政時代に板木組とばれたその支配下の、津留・主屋・中山・板木・田代・井野尾・筒井・木場・

湯の浦・杉の浦各村(現大字)の概況を記録したものである。

この度は全部集落を掲載できないので他日を期し、大庄屋の配されていた板木だけを左に掲げ若干説明を加えたい。

### 板 木 村

一高 百八十一石七斗五升四合

畝数 十一町六畝七歩

反別

石盛 二石六斗七升代

上田 二町一反四畝二十歩半

分米 五十七石三斗一升七合

石盛 二石七升代

中田 二町一反四畝九歩半

分米 四十四石三斗六升三合

石盛 一石四斗七升代

下田 三町二反一畝六步

分米 四十七石二斗一升六合

石盛 八斗七升代

下々田 一町四反二畝一步半

分米 十二石三斗五升八合五勺

石盛 二石七升代

増中田 二畝十四步

分米 五升九合五勺

田数メ 八枚九反四畝二十一步半

分米メ 百六十一石七斗六升四合

石盛 一石四斗五升代

上畑 二反十五步

分米 二石九斗七升二合

石盛 一石一斗五升代

中畑 二反十六步半

分米 二石三斗六升三合

石盛 八斗六升代

下畑 九反三畝二十六步

分米 七石七斗

石盛 六斗代

下々畑 六反六畝二十五步半

分米 四石一斗五合

石盛 二石六斗四升代

屋敷 七畝三步

分米 一石八斗七升

畑屋敷畝メ 二町八畝二十六步

分米メ 十九石一升

一步に付 一升二合

下紙木 八步

分米九升六合

一步に付 九合

下々紙木 二步 分米 一升八合

一步に付 一升八合

上茶 四步 分米 七升二合



一步に付 一升二合

下茶 一畝二十二歩 分米 六斗二升四合

一步に付 九合

下々茶 十三歩 分米 一斗二升二合

紙木茶メ 二畝十九歩半

分米メ 九斗二升八合

付札に但四合御檢地帳寄算違

中桑 一本 分米 二升八合

一本に付 一升五合

下桑 二本 分米 三升

桑メ 三本

分米メ 五升二合

田畑屋敷木物成

畝数合 十一町六畝七歩

高合 百八十一石七斗五升四合

内 三石三斗八合 永川成

畝数 下々田 三反八畝一步

石盛 八斗七升代

一高 四斗四升六合 新溜下半高引

畝数 二畝六歩半

此訳

石盛 二石七升代

中田 二畝 分米 四斗一升四合

石盛 一石四斗七升代

下田 六歩半 分米 三升二合

小計 三石七斗五升四合

畝数 四反七歩半

残高 百七十八石

畝数 十町六反五畝二十九歩半

一口米 御物成米 一石に二升宛

夫高 百七十六石一斗三升一合

一米 二石六斗四升二合 夫米但高に一步五厘掛り

一米 四升	樹木代大庄屋上納仕候
一銀 三匁五分二毛	真綿代銀にて上納仕候
此真綿 二十匁六分	但百匁に付銀十七匁替
一銀 四匁	漆代
一銀 七分一厘	雉子御運上
一銀 三分五厘	小鳥御運上
一銀 二分	旅出○御運上
一溜五カ所	但郡中掛り

内

字谷口一カ所 御田地九反八畝に掛る用水溝長七十四間  
 字浦の谷一カ所 御田地五反四畝二掛る用水溝無  
 字長谷一カ所 御田地七反に掛る溜より川に落川より用水溝三百間  
 字通り谷一ケ所 御田地一町五反に掛る用水溝無  
 字松ノ尾一カ所 御田地七反に掛る用水溝無

一井積六ケ所

内

字こぶた一ケ所 御田地六反一畝に掛る用水溝無  
 井野尾村の内字白木一ケ所 御田地二町一畝に掛る用水溝長二百四十間  
 字上幸井手一ケ所 御田地二町三畝に掛る用水溝長四十六間  
 字長谷口一ケ所 御田地六反三畝に掛る用水溝長七十四間  
 字西ノ上一ケ所 御田地七反二畝に掛る用水溝長百三十六間  
 字人津里一ケ所 御田地八反五畝に掛る用水溝無

一川三ケ所

内

一ケ所 本川田代村より流出申候  
 一ケ所 小川中山村より流出申候  
 一ケ所 小川当村より流出申候  
 但洪水之節は御田地水入に罷成申候

一家居根山二十九ケ所

内

一ケ所 村山  
 一ケ所 寺山  
 四ケ所 神山

二十三ヶ所 百姓家居根山

- 一 人数百四十五人 内 八十三人男  
六十二人女
- 一 家数二十六軒
- 一 馬数十八疋 内 一疋男 一牛数六疋 内 五疋男  
十七疋女 一疋女
- 一 かしき並牛馬飼料の草村中にて伐来申候
- 一 御年貢米並大豆小豆取立之節は納三斗俵に仕唐津御蔵え納申候節は二十俵或者三十俵四十俵之内より一俵宛廻俵御取被成百姓外にて向霜降搔落に斗り三斗三合にて三斗入に納申候若欠立申候得は其俵数に欠米指申候自然升違等にて八九合一升程も欠立申候得は其節御 断申上其俵斗に欠米申候廻俵之儀者別俵を出申候
- 一 御年貢米唐津御蔵納之儀陸付下仕候得は道法四里十八丁郷蔵より行合野船場迄積出道法二十七丁夫より川船にて廻船路五里船一艘に付二十六俵積人足四人乗せ遣候但納人足共に運賃船一艘に付米四升宛天氣能々御座候得者其日仕廻夜に入罷歸申候道筋大庄屋切手にて遣申候
- 一 役高之儀相勤候高引高等帳面指上候通に御座候
- 一 早稲○者大庄屋改にて帳面差上候不作にて大検見相願候節は書上之初高目録に書口り御改節警御切手御座候共早稲○之畝数に者掛り不申候もつとも早稲之内皆損有之節者御手代衆御出沒御見分相済申候
- 一 村々土御免之儀三ヶ年土御免二御定被下候田方不作にて土御免合毛に取合不申候節は御検見御願申上御見分口上御引方被下候もつとも大検見小検見村方より願出候随被仰付小検見相願候節增高之場所は地畝共に立毛損毛之割御引被下候
- 一 田方立毛損毛之節一步之初二合九勺迄は皆損より相唱御見分之上御見捨被下候增高之場所者地畝半高御引被下候
- 一 田畑被損仕候節者御改之上高御引被下候增高之場所は地畝共に被下候
- 一 溜井磧井樋用水溝御田地破損其外諸普清人足其村之百姓十五歳より六十歳迄之内罷出得申候者之分日数五日相勤其餘は御領分より越夫人足にて御普清被仰付候
- 一 新切畑一毛作之分百姓勝手次第に相開御年貢之儀者従前之御免にて御座候
- 一 大庄屋給高二石其年之御免にて被下候御扶持米之儀は其年之毛付高に一厘掛りにて被下候
- 一 役高百石大庄屋為役料と従前之被下候六歩掛にて役米六石組中にて割合清取来申候
- 一 本夫五十人先年より大庄屋へ被下来申候尤組合に割賦仕無賃にて使い来申候
- 一 種子米御蔵より御出御借被成三割利足を加之上納仕候
- 一 夫食拝借仕候節者無利足にて被仰付候
- 一 御年貢米不足仕候節者御救米被下其外無利足拝借等被仰付候
- 一 百姓農具入用之鍛冶炭何方之御林にても御願上前々より焼来申候村山家居根山にては無願焼来申候

尤御運上不仕候

- 一 大豆納米一石に付大豆一石三斗宛小豆納米一石に付小豆一石二斗宛
- 一 御膳米納候節は撰欠米一俵に付一升宛被下候
- 一 薪納八束に付代米五合宛但二尺に廻近村之御林にても御願上伐採申候
- 一 長尺薪八束に付代米七合五勺宛長二尺に二尺廻伐来候儀右同断
- 一 鍛冶炭納一石に付代米二升宛御買料は代米五升宛伐来候儀右同断
- 一 蕨縄納一束に付代米九升宛御買料は代米一斗宛
- 一 大中細縄納一束に付代米八合宛御買料は代米九合宛
- 一 山茅納六束一駄に付代米五合宛御買料者代米一升二合宛
- 一 麻 納一貫目に付代米二斗宛
- 一 置菰納一置分に付代米七合五勺宛菰数大小五枚
- 一 小麦藁納六束に付代米五合宛
- 一 茅苫納上苫捨枚に付代米四升五合宛中苫拾枚に付代枚三升五合宛下苫十枚に付代枚二升五合宛
- 一 粉納一石に付代米五斗宛
- 一 藁麥納一石に付代米五斗宛
- 一 勝 納百束に付代銀二十五匁宛
- 一 小麦納三斗に付代米二斗宛
- 一 草 納百束に付代銀五匁宛
- 一 渋柿納三斗に付代銀一匁宛
- 一 齒朶納十二束に付代銀一匁宛
- 一 竹箒納め百本に付代銀二各五分宛
- 一 萩納八束に付代銀一匁宛
- 一 首家茅納八束に付代銀一匁宛
- 一 御用人足積出人足百人迄者一日一人に御扶持米納五合宛其餘は日雇人足一日一人に銀九分宛被下候
- 一 御用炭木伐下し竈建人足御割賦之通指出一日一人に御扶持米納五合宛被下候
- 一 右下諸代米御物成御勘定に御指紙被下候
- 一 御用材木伐申候杉扶持米一人に付一升宛被下候下より雇候 外に賃米三升宛郡中より役高にて割合出申候
- 一 遠見番給扶持米郡中より夫高にて割合出申候
- 一 井樋掛樋之類郡中掛之分雜用郡中割にて出申候大工木挽一日賃金一人に付一匁二分扶持米一升四合

七夕郡中にて出申候

右入用並溜井積川筋水除ケ御田地困諸普請竹木之儀御用木之内並御林御田地困山にて御願申上候えは御渡被下候無運上

- 一 御厩入草一疋に付敷 1ヶ月に三十束但三尺廻糶糠一斗五升飼葉六俵何れ代米無しに相納申候
  - 一 村々土御免之儀三ヶ年土免に被仰不作之節者大検見御願申上御免にて御引被下候格別不作之節は土高御用捨御仰被下候
  - 一 土御免除三ヶ年御用捨御手当之上難渋之年柄は別段に春仕付御用捨御願申上候得ば御手当被下候
  - 一 村々共に新田畑之儀御帳面指上三ヶ年或は場所に寄五ヶ年御物成御捨免被下其上別免に被仰付候
  - 一 御普請所土取所畑跡の儀增高御免被下田に仕候其所損毛之説者畑高御引被下候
  - 一 村々共に庄屋方へ其村の百姓無足人迄年中に三日宛前々より来よ遣来申候
  - 一 村々共に百姓家作事之時分材木所持不仕者は御林にて御運上差上御願申上伐採申候 一 村々御用木之儀者帳面指上候通に御座候御船宮御用に御伐被成候得は元木代被下候
  - 一 御田地困諸請人足御割賦之通役高にて出申候御扶持米無尤普請相重り及難渋に候節者御扶持米被下候
  - 一 村々御高札場並郷蔵庄屋いえ修覆之節入用の竹木御林又者御用木之内にて御願申伐採申候無運上
  - 一 村々共に新仕立山の儀銘々主に被下候
  - 一 諸用に付旅行仕候節は御断申上御切手申受参申候
- 
- 一 宗旨御改毎年三月に御奉公御廻村にて人別血判御取被成候尤家内之分は二月頃御手代衆御出血判御取被成候幼少の者は親代血判仕候十月者人別印形並寺判取帳面差上申候
  - 一 人別御改之儀年中に一度四月に御改被成候
  - 一 出入人の儀御他領之分御願申上御領内者大庄屋限家届申候
  - 一 村々田畑に猪鹿当り申候時は御鉄砲拝借仕無玉にて威申候
  - 一 大庄屋宅内外修理の儀一切組村より致来申候
  - 一 新屋度御願上御検地之節家新建仕候上御届申上候後は本間下之分斗御検地被仰付候
  - 一 御茶屋御高札場大堤並井樋等御作事方より御修理御用御使被成候日雇人足一日一人に付代銀九分宛被下候屋根 師者一日一人に付賃金一匁二分宛被下候
  - 一 御作事方御修理御用にて御役人衆御出之節御賄用夫差出申候  
一人一日に五分宛御扶持米被下候
  - 一 郡御奉行様御原鑑一枚兼て御渡置被成候諸御役人様御出郷之節御賄並人馬差出印鑑し為に御座候
  - 一 領土分様方御用にて郷中に御出被下候節は御賄之儀一賄に付上三十文下二十文宛被下 候  
尤御賄方都て一計一菜にて御座候
  - 一 右以下之御役人衆御足輕衆御用にて御出郷被成候節は賄札御持来被下候後は引合御賄仕候宅賄三合或は二合五勺御扶持手形受取御物成御勘定継に相成候後は近年は旅籠錢其度々御払に相成候に付先規の通後勘定継に相成候様御願申置候
  - 一 旅人当時滞在之儀は大庄屋限り承届置長召置は御願申上来候



- 一 在々吹諸職人之儀本職人行届不申節は勝手次第に召使来申候
- 一 急用事にて近国罷越為に板往来一枚兼て御渡置被下候何方へ罷越候節者庄屋添切手仕候て 申候尤組合村々共に一枚宛御渡御座候
- 一 御年貢米皆済以後百姓方より米出申候節は庄屋道切手にて出申候尤組中皆済不相成内は大庄屋道切手にて遣申候所々皆済以後は百姓勝手次第出申候
- 一 大庄屋庄屋共に持高御田地之分御役者其村中より従前々相勤来申候
- 一 庄屋百姓家居根竹木共に御免被下入用之節は勝手次第に伐採申候売申候節は御願申上伐申候無運上
- 一 庄屋に数廻普請入用之竹木村山家居根山にて従前に組中共に伐取申候
- 一 神仏山之内其堂宮修理之節は入用次第伐採申候売申候節は御願申伐来申候無運上
- 一 孝心定実其外格別農業出精之者は御褒美被下候
- 一 貧窮にて出生之子養育相成兼候者には歳々御救米被下候春秋両度取調御願申候
- 一 七十歳以上近親類迎も無御座窮民へは御救米年に一俵宛相果候迄被下候八十歳に相成候老人江者米一俵宛被下其上御酒御吸物被下候
- 一 類焼之者には人別米一俵宛被下其上小屋掛入用竹木之儀最寄之御林にて御渡被下候其外風水等にて潰家に罷成危難の節は是又御救米被下候
- 一 「組中鴨蹄御運上之儀者年に入札仕高札之所に被仰付何方よりも殺生仕来申候尤御運」 上銀之儀者翌月上納仕候  
「但鴨捕出御用立節相納申候時は鴨一番に付銀七匁宛御運上銀に御差継被下候」  
(此項半分抹殺されたり○印之残る)
- 一 御用御○状組継村並継荷物御役所御差継を以て送申候
  
- 一 田嶋大明神一ヶ所 宮守徳須恵村社人  
祭禮十一月七日 但茅 堤伊勢預り
- 一 天神社一ヶ所  
祭禮十一月七日 但茅 同人預り
- 一 八幡社一ヶ所  
祭禮十一月七日 但茅 同人預り
- 一 天神社一ヶ所 宮守安藤陸奥預り  
祭禮十一月七日 但茅
- 一 本寺黒岩村医王寺 禅宗曹洞派吉祥山 浄光寺

### 板木村より所々道法

一	大手御門迄	四里十八丁	寅の方
一	徳須恵村迄	一里十八丁	卯の方
一	行合野村迄	二十七丁	辰の方
一	畑河内村迄	一里	牛の方
一	小黒川村迄	二里余	未の方
一	畑津村迄	二十八丁	申の方
一	切木村迄	二里	亥の方
一	上平野村迄	二里	寅の方
一	主屋村迄	四丁	己の方
一	津留村迄	五丁	己の方
一	中山村迄	八丁	未の方
一	田代村迄	八丁	亥の方
一	井野尾村迄	十三丁	戌の方
一	筒井村迄	二十六丁	戌の方
一	木場村迄	一里十四丁	亥の方
一	杉野浦迄	一里十五丁	戌の方
一	湯野浦迄	一里五丁	戌の方

○検地による板木村の田は上・中・下・下下田合せて八町九反二十一歩半、畑は上・中・下・下下畑と屋敷を合せて二町八畝二十六歩半、合計十一歩六畝歩。昭和四五センサス経営耕地調べと対照してみてもほしい。

○石盛は米一反当りの基準収穫量、田、畑別、評価段階別に収穫量を出してみてください。それが分米になるのですが……。屋敷の田えの換算が上田より三升低い二石六斗四升、昔から屋敷は一等田並ということ……。石盛が当時一ばん高かったのは筒井の二石八斗一升、近隣では北波多山彦村の四石六斗五升が群を抜いている。

○課税対象となるものに、紙木（下等の楮八歩、下下楮二歩）茶の木、桑の木三本などがあるのに驚く。

○未来の制 持衆が知行所の百姓を勤番につれていくので、一同大いに迷惑をしていたが、改革され、別に雇入れの賃米（課税総高の一步五厘）を差上れば勤番に出なくてもよいようになった。

○樹木差上のこと 百姓所有の山林立木の調査台帳を備えつけておき、御用しだい差上げるようになっていた。しかし村によって立木の多くある村と、無い村があるので、今後は村の大小にかかわらず、代わりに村々から米四斗を納めるように改められた。

○田の不作の時は係役人が実地検査のうえ、一坪の粃収穫高が二合九勺までは無収穫として年貢免除、

また田畑破損の時は実地検査の上それぞれ割引があった。

○年貢米は唐津城下の藩倉庫に納入する定で、納入の際は二十俵ないし三・四十俵の中から一俵を取出し、これを百姓舁で計り、三斗三合を一俵三斗入りとして計算し、若し之に不足があった時は、その不足量を全俵数を掛けて得た量を補充しなければならなかった。

○年貢の輸送は板木村から行合野の船着場まで陸上二十七町を運び、それから川船で廻航路五里を下って城下に着き、好天気ならばその日のうちに納入を終え、夜に入って帰着した。運送費は廻船一艘につき二十六俵積、人足四人乗りで、米四升ずつの定めであった。

○庄屋の諸所得 大庄屋給として高二石を年貢上納米の中から、また扶持米はその村の毛付立（作付面積）の一厘を給せられた。板木村の諸控除を終わった後の総高百七十八石に対する、十町六反五畝二十九歩半に完全に作付けされたなら、一斗七升八合が庄屋の扶持米となる。ほかにある大庄屋役高百石のうち、六分すなわち六石は役米として組中の庄屋へ配分し、残り九十四石は大庄屋の所得であった。

○大庄屋は人夫五十人を無賃で使用することができた。それは組中の村々に割当てて使用した。（省略）庄屋宅内外の修理は一切村中より行うことになっており、普請に要する竹木は村の山から勝手に伐り取ることができた。

○貧困救済 年貢米や、食糧不足の時は、藩庫から無利息で借用することができた。種子米が無い時は、御蔵米から借用することができた。この時は三割の利息を加えて返納しなければならなかった。貧窮して生まれた子どもを養育することができない者は歳々御救米を賜った。

七十才以上の者で近親者をもたぬ窮民には、御救米を年々一俵ずつを死ぬまで賜わった。八十才の老人には一俵と御酒と御吸物を下された。

火事の時類焼者には人別に米一俵賜わり、その上小屋掛入用の竹木は最寄りの藩林から伐採を許可された。その他風水害の危難に遭った者にも御給米を下さった。

○米と他の物との比率 米一石につき、大豆は一石三斗、小豆は一石、薪納めは一束の長さ二尺周り二尺のもの八束につき米五合ずつ、長薪は七合五勺。近村の御林でお願いの上伐取ることができた。鍛冶炭納は一石につき代米二斗ずつ、御買料は代米二斗五升ずつ、百姓農具用の鍛冶炭は願い上げのうえ無運上にて焼くことができた。その他縄、麻芋、豊菰、茅苫、そば、小麦、小麦わら、厩草、糠、飼葉、渋柿、しだ、竹箒、萩等数多く挙げられている。

○人足賃金 御用人足、積出人足、日雇人足等々多くの人足の賃金がきめられている。

○人改めに関する事 いろいろの用事で旅行する時は届出て切手を申し受けること。領内の旅行は庄屋まで届け出ること。急用で旅行する時は、かねて渡されてある板往来と庄屋の添切手を申し受けて出ること。その他……。

○宗旨御改は毎年三月に御奉行が村々を廻って人別に血判を取り、家内の分は二月頃手代がきて血判を取り、幼少の者は親が代わって血判し、十月に人別印形ならびに寺判取帳を差出す規定であった。

## 六、唐津領惣寄高（波多津関係）

これは唐津藩領内の元和検地（元和二一、六一六）にもとづく、各組支配下各村の田畑高（年貢米算出の基礎資料～生産責任量）と、田畑の面積、石盛（田の評価段階に応ずる反当収量）を掲げている。なお石高（波多氏時代の検地）も合わせて掲げているので、対照してみると、元和検地の過酷さがわかる。

主屋文書では板木村の分だけしか取りあげなかったもので、他の村は板木を参考にしてこれをみれば、自分の村がおよそ理解できるものと思う。

家数・人数・氏神・寺院・牛馬その他も現在と対照してみれば興味ある話材が生まれるのではあるまいか。

### 黒川組

#### 煤屋村

一 田畑高	二百四十三石五升	石高	三十石七斗五升
畝数	二十五町九段五畝十五分	石盛	田二石七斗ヨリ三斗迄
	新田共二		畑九斗四升ヨリ二斗迄
家数	二十九軒	人数	百四十二人
	一軒に四人九分		内 七十六人男 六十九人女
氏神	九郎大明神		
	掛り福田村坂口守人		
	牛 十一疋 馬 二十疋		

### 畑川内組

#### 内野村

一 田畑高	二百八石六斗五升五合	石高	百四十七石六斗二升五合
畝数	十五町二段二畝八歩半	石盛	田二石六斗ヨリ一石迄 畑一石二斗ヨリ
			三斗迄
家数	五十一軒	人数	二百七十人
	一軒に五人三分		内 百五十六人男 百十四人女
氏神	天満宮祭禮十一月十七日		
	徳末 堤出雲		

牛 六疋 馬 六疋

威鉄砲一挺

東本願寺末寺光月山法徳寺開基寛永十六己卯年 空圓法師

畑 津 村

- 一 田畑高 三百石七升 石高 百五十八石四斗七升四合  
畝数 十五町八段一畝九歩 石盛 田二石三斗ヨリ七斗迄 畑二石ヨリ一石一斗迄

氏神 田嶋大明神 畑津 同浜 辻 高 馬蛤潟 四ヶ村宗廊也

祭禮十一月五日

牛 四疋 馬 三疋

黒岩村医王寺末寺白永山宝泉寺開基王淵和尚文禄四乙未年

- 一 田畑高村二籠ル 但シ四十七石五斗三升四合也  
日高夫 七百五十二人 石船四艘 漁船三十五艘 天當六艘  
諸網十一帖 鰯網 八帖 御運上銀百五十目  
家数 百五軒 人数 四百八十人  
一軒に四人五分七 内 二百七十七人男 二百三人女  
氏神 本村に有り

辻 村

- 一 田畑高 二百四十八石九斗七升六合 石高 百七十三石六斗  
畝数 二十三町六段四畝六歩半 石盛 田二石五斗ヨリ七斗迄 畑一石四斗ヨリ七斗迄  
家数 五十九軒 人数 二百七十七人  
一軒に四人六分一 内 百五十二人男 百二十人女  
氏神 畑津村に有り  
天當 二艘 牛 八疋 馬 五疋 鉄砲二挺 但獵師筒

馬 蛤 潟 新 田

- 一 田畑高 四百九十七石九斗一升 石高 ナシ  
畝数 二十二町九畝二十五歩半 石盛 田二石三斗五升ヨリ八斗迄 畑三斗四升ヨリ二斗迄  
氏神 本村に有り 牛 三疋 馬 三疋



八 板 木 組

板 木 村

- 一 田畑高 百八十一石七斗五升四合 石高 百二十九石五合  
畝数 十一町六畝七步 石盛 田二石六斗七升ヨリ八斗七升迄  
畑一石五斗五升ヨリ六斗迄  
家数 二十二軒 人数 百十四人  
一軒に五人一分八 内 六十人男 五十四人女  
氏神 田嶋大明神  
祭禮十一月七日 徳末 社司  
吉祥山浄光寺禅宗曹洞派本尊薬師之像 牛 三疋 馬 六疋

主 屋 村

- 一 田畑高 五十石一斗八升五合 石高 二十石三斗八升九合  
畝数 三町四段一畝十步 石盛 田二石三斗八升ヨリ五斗八升迄  
畑一石一斗七升ヨリ三斗迄  
家数 十三軒 人数 五十五人 内二十七人男 二十八人女  
氏神 田嶋大明神  
祭禮 十一月十一日 徳末 社司  
牛 十一疋 馬 一疋

津 留 村

- 一 田畑高 六十五石九斗八合 石高 二十七石三斗一升六合  
畝数 三町六段二畝二十一步 石盛 田二石七斗四升ヨリ九斗六升迄  
畑一石六斗ヨリ七斗迄  
家数 八軒 人数 四十七人  
一軒に五人八分八  
牛 十四疋 馬 一疋  
氏神 天神社 祭禮十一月十一日 徳末 社司

中 山 村

- 一 田畑高 二百六十石七斗四升三合 石高 百八十五石五斗五升六合

畝数 十四町六段八畝十一歩 石盛 田二石三斗五升ヨリ五斗五升六合迄  
畑一石一斗一升ヨリ九斗二升迄  
家数 二十九軒 人数 百三十人  
一軒に四人八分 内 七十五人男 五十五人女  
氏神 山神社 祭禮九月十九日 社司 右同断  
牛 七疋 馬 三疋 威鉄砲一挺

#### 田代村

一 田畑高 百二十二石九斗六升 石高 八十三石四斗四升七合  
畝数 七町一段五歩半 石盛 田二石五斗七升ヨリ七斗二升迄 畑一石  
六斗ヨリ七斗迄

家数 十七軒 人数 七十八人  
一軒に五人五分 内 四十八人男 三十人女  
氏神 山ノ神 祭禮十一月八日  
掛り御城内 安藤  
牛 五疋 馬 五疋

#### 井野尾村

一 田畑高 二百四十一石二斗二升 石高 百五十一石五升一合一勺  
畝数 十三町八段三畝二十五歩 石盛 田二石二斗ヨリ八斗四升迄 畑一石四斗  
ヨリ六斗迄  
家数 三十三軒 人数 百五十七人  
一軒に四人七分六 内 八十八人男 六十九人女  
氏神 山王権現 祭禮十一月六日 社司 右同断  
牛 十八疋 馬 十三疋 鉄砲一挺 威筒

#### 筒井村

一 田畑高 五百五十二石一斗四合 石高 三百九十六石三斗六升八合  
畝数 二十八町六段八畝三步 石盛 田二石八斗一升ヨリ一石一升迄  
畑一石七斗ヨリ七斗迄  
家数 五十軒  
一軒に四人二分二 人数 二百十一人

内 百二十人男 八十九人女

氏神 田嶋大明神

祭禮十一月十一日 掛り御城内 内山

牛 十八疋 馬 七疋 威鉄砲二挺

木 場 村

一田畑高 四百十七石六斗六升三合 石高 二百三十七石九升三合

畝数 二十五町八段七畝十八歩半 石盛 田二石七斗ヨリ九斗迄 畑一石ヨリ五斗五升迄

家数 三十六軒 人数 百五十二人

一軒に四人二分二 内 八十五人男 六十四人女

氏神 大島大明神

祭禮十一月十一日 掛り御城内 内山

牛 十八疋 馬 七疋 威鉄砲二挺

氏神 田嶋大明神

祭禮九月十八日 御城内 戸川

若武王尊 天正十八年寅二月建立 大石村 一乗坊

熊野十二社権現 天正十年二月隈崎庄建立大石村一乗坊

清水山西雲寺浄土宗元禄六年西曆 1688 年 熊連社湛誉上人開基ノ由

牛 二十七疋 馬 六疋 札威鉄砲二挺

湯 野 浦 村

一田畑高 二十一石四斗六升七合 石高 十五石三斗四升九合

畝数 一町五段二十四歩 石盛 田二石八斗ヨリ一石迄 畑一石六斗ヨリ六斗迄

家数 二十二軒 人数 百十四人

一軒に五人一歩八 内 五十九人男 五十五人女

## 第五節 明治以降

### 一、唐津藩知事時代

慶応三（一八六七）一月 明治天皇尾踐祚。

十月 徳川十五代将軍慶喜大政を奉還し、徳川幕府二百六十五年、鎌倉幕府以来六百八十二年の武家政治が終わり、天皇親政の古にかえる。

四年九月 明治と年号が変わり、明治維新の新政が始まった。

明治二年正月 薩・長・土・肥の四藩率先して土地・人民を天皇に奉還、諸藩もこれにならう。これによって諸大名は華族に列せられ、諸藩は政府の直属として、従来どおり大名を藩知事とされた。

○唐津藩は第五代小笠原長国が版籍を奉還して子爵を賜り華族に列せられ、引続き藩知事に任ぜられた。藩知事は新たに藩政庁の組織を整え、諸役人に対しては善政を行うよう、次々に多くの布達を出した。そのうちの一つ

（藩知事の御直書）

百姓共へ教訓ならびに取あつかいのことは、先日書付にて申達置候通 支配地の民百姓共饑え凍ゆるの悩なく銘々その住居に安堵いたさしめんと願う処なり 元百姓は年中暑さ寒さのいとなく骨折して 上へ貢物を納め公役をつとめ 老いたる者幼き者を養い 生業の営み暇なきは 全く上へ納め物多きと公役の繁きとに本づくと我ら深く心を痛め惨まし居る折から 朝廷より是まで辛きならわし悪き仕来りを御改めなさるお沙汰なるにつき如何にも右の苦しみを解き遣したく候えども思うだけはくつろぐを得ず 先ず左の通り向後ゆるめ遣す。

- 一、諸役所役高納物を品々ゆるす
- 一、厩納飼葉草藁共ゆるす
- 一、諸中間村出銭を免す
- 一、林山番をゆるす
- 一、村遠見番をゆるす
- 一、竹買入は相応の価にて買遣す
- 一、竹貴旅出品に依てゆるす（旅出は移出）
- 一、漁民共漁旅出をゆるす

右の条々この度ゆるし遣すに付 銘々田畑の作り物に心を尽くし 怠りなく老いたるを養い 幼き者を慈しみ 悩み煩うものは哀れみ掛け 尚暮し向にあまりある者は 親類組合 を相互に救い 義理つよく情深く人の人たる道をよう教へ諭し申すべく候也。

明治三年十二月 知事印

前に書いた藩主の農民対策にくらべてなんという違いであることか。なお民百姓らに朝廷の御仁慈を知らしめるよう努めていることと、封建制度の名残りを止めることばが多く使われているこ

とも気付くのである。

その頃庄屋を廃して里正・伍長（くみちょう）が置かれているが、波多津のことは資料なく今後の研究にまつほかない。

さて唐津藩は、中央新政府の指令にもとづき各種の改革を断行していったが、その場合庄屋の寄合である「一統評議」が百姓参加という陰の力を背景に、大きな影響力をもって百姓有利の方向に進められていったという見方もある。

## 二、行政区画の変遷と庶政の刷新

明治四年七月 廃藩置県の詔下り 全国二島百十三藩が新たに三府七十二県となった。

八月 今の佐賀県には当時佐賀県・唐津県・小城県・蓮池県・鹿島県が置かれた。この月 散髪令・脱刀令が出され身なり服装の上でも大きく変わることになる。

○九月 佐賀県庁を伊万里に移す。唐津小城蓮池鹿島各県も廃して伊万里県に属し、新編成による厳原県も含むものである。伊万里では仮庁舎を円通寺に置き、その他万端を整えて大いに将来を期待していた。

またこの月戸籍法を發布して新戸籍の編成を始めた。

同五年五月 伊万里県を廃して佐賀県となし県庁を佐賀へ移す。伊万里の県都はわずか九か月で夢と消えた。

八月 学制が頒布され教育の諸規定も定められた。

十二月 旧来の藩札はことごとく新貨幣と交換させることとなり、県や出張所で着々と新円交換が行われた。

この月 徴兵令が施行され、翌六年一月から県内の壮丁は熊本鎮台に入営することになった

また同月 大陰暦を廃して太陽暦を採用された。

同六年一月 郡区政の大改革を行い、郡を区に改められた。

同八年九月 三岳小学校、大平小学校が開校した。

同九年四月 佐賀県を三潁（みづま）県に合併したが松浦郡・杵島郡は分離して長崎県に所属させ、次いで藤津郡も長崎県に合併させた。

しかし八月 三潁県が廃止されたのでいまの佐賀県全部は長崎県に移管され、肥前国全部が長崎県管下に入った。

明治十一年七月 郡区町村編制法公布されて大小区制廃され郡を単位として合成区政を定めた。

十月 松浦郡を分けて東西南北の四郡とし、旧唐津領のうち波多津・黒川・南波多・大川・は西松浦郡に編入された。

同十二年 県会議員の選挙が行われ、初の県会が開催された。同じく郡区町村法が実施された。



同十六年五月 長崎県より佐賀県を分立し（当時の郡一基肆・三根・養父・神埼・佐賀・小城・東松浦・西松浦・杵島・藤津）、県庁を佐賀市に置く。新政発足以来変転し続けていた佐賀県は漸くにしてここに安定したのである。

同十八年 中央政府の組織に大改革を加え、太政官を廃して内閣を置いた。

同二十一年四月 町村政発布

同二十二年二月 大日本帝国憲法が発布され立憲政治の基本が確立した。

#### ○土地制度

明治元年十二月、新政府は、土地の「百姓持地」確認を公布し、四年には「田畑勝手帳」を公布して何を作ってもよい、五年には「土地永代売却禁止令」の解除等をなし、極端に所有権を制限することは一応解消された。

しかし租税に関しては当分の間旧慣によると布告した。

同五年土地の所有権を確認する「地券」を発行、一方田畑宅地や山林原野の調査を終って、「名寄帳」「土地台帳」を整理して地券を廃し、今まで各藩各県毎にまちまちだった課税率を全国的に統一し、納税はすべて金銭を持ってなすこととなった。

明治維新以後、各種の組織制度等実に目まぐるしく旦つ複雑に変転していったが、自治制誕生を望む声はしだいに強くなった。

## 第五章 行政

### 第一節 大岳村誕生

明治二十二年四月市町村制実施ふるさとは初め大岳村と命名、初代村長田辺良寿氏で発足。

役場開設に付届

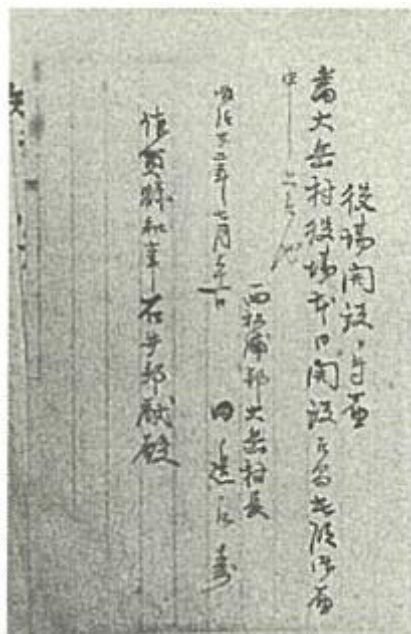
当大岳村役場本日開設候間比段御届申し上げ候也

西松浦郡大岳村長

田 辺 良 寿

明治二十二年七月三十一日

佐賀県知事 石井邦〇殿



村名大岳村が何に由来するものかわからないが、村内山また山の連なりだったから名付けられたものであろうか。村の区域に入ったのは木場・筒井・井野尾・田代・板木・津留・主屋・中山・畑津・内野・煤屋・馬蛤湯新田・辻の十三か村。それまでは「〇〇村（むら）」とよんでいたが、これからは「波多津村大字〇〇」とよぶようになりました。

村役場の位置は、畑津集落通称谷口とよばれるいまは坂本久氏の屋敷になっている所だった。地籍面は大字辻字黒石一四五八番地。

明治二十二年（一八八五）苛酷な大名政治の下で苦しんでいた頃は、考えることさえできなかったであろう自由と平等の明治の新政を迎え、更にこれからは隣集落どうして村をなし自分たちが村長も選んでやっていけるというのだから、さぞかし資料も話題も豊富にあったろうに……、今は資料散逸、当時の状況が書けない。郷土の今日を築かれたご先祖に申し訳ないと思います。

## 第二節 村名改称「波多津村」となる

大岳村誕生後十二年目早くも村名改称のことが起こりました。

村名変更申請

西 松 浦 郡 大 岳 村

今般波多津村と村名変更の件、村会に於て議決仕り候間

別紙村会議決書謄本添付

明治三十三年十二月十日

西松浦郡大岳村長

麻 生 文七郎

佐賀県知事 武内維積殿

(添付書類)

村名変更議案

本村村名ヲ波多津村ト変更セントス

理 由

従来本村一帯ノ地ヲ畑津ト唱ヘシハ往古鬼子獄ノ城主波多親ガ本村海岸ヲ以テ其用港ニ充テタルニ起因スル称ニシテ往時波多津ノ文字ヲ用ヒシモ近世ニ至リ畑津ト略シ今襲用スル所ナリ然ルニ征韓ノ役親力罪ヲ豊公ニ得テ討滅セラルルヤ遁戮ノ残臣ハ離散シテ農トナリエト変シ多ク本村ニ占居シ現今住民ノ多数ハ親力遣臣ノ子孫ナルヲ以テ一般ニ波多津ナル名称ヲ追慕スルモノナリ加之本村ノ位置亦本郡南波多及東松浦郡北波多村ニ界シ一面海ニ沿スルヲ以テ地勢ニ則ルモ古来ノ伝称ハ本村最モ適當ナル称呼ナリトス反之現称大岳ハ町村制実施ニ際シ深く考慮スル所ナク漫然下名セシモノニシテ固ヨリ本村ニ何等ノ縁故ナキハ論ヲ候タス郡内又大山大坪大川内大川等大字ヲ冠セル村名多数ナルト行書書体ヲ用フルトキ八大岡ニ酷似スルヲ以テ常ニ郵便物ノ紛錯ヲ生シ通信ノ敏活ヲ阻シ公私ノ利益ヲ害フコト少カラス社会ノ交通ハ日一日頻繁ヲ加フルノ今日隔靴搔痒ノ憾ナキ能ハサルナリ加フルニ往時藩政時代ニ在テハ本村沿岸一帯ノ水産ハ大イニ世ノ好評ヲ博シ就中海參ノ如キハ領主ヨリ幕府ヘノ献納品トシテ汎ク宇内ニ知ラレ其他各種ノ乾製魚類モ香味色澤ノ他ニ卓絶スルノ故ヲ以テ各地ニ歡迎サレ波多津海岸波多津煮干鯧ノ名称ハ自然ノ商標トシテ市場ニ高位ヲ占メタリシガ地名ノ変更以来漸ク世人ノ疑惑ヲ買フニ至リ輒近著シク販路ヲセバメ本村水産業ノ発展ト漁民ノ利益トヲ抑制スルノ実例少ナカラサルニ至レリ於是乎村名改称ノ必要ヲ感スルコト益深シトス

以上ノ理由ニ由リ村名ヲ変更シ従古伝来ノ慣称ヲ存続シ一方ニ於テハ通信ノ敏活ヲ図リ社会ノ交通ヲ円満ナラシメ併セテ産業ノ発展ヲ助長シ以テ本村ノ利福ヲ増進セントス之レ本案ヲ提出セシ所以ナリ

明治三十三年十二月九日提出

大 岳 村 長 麻 生 四 郎

右村名ヲ波多津村ト変更ノ件可決候也

大岳村会議長

明治三十三年十二月九日

大 岳 村 長 麻 生 四 郎

同 村 会 議 員 古 河 昇 次 郎

田 中 定 次 郎

理由は各方面にわたってよく考え及んである。村発足の当初にはこの深慮をめぐらす余裕がなかったのであろう。

### ○村役場と新庁舎

明治三十七年には、村役場移転のことが起こっている。保存書類によれば

#### 役場位置変更認可稟請

本村役場ヲ移転セントスル 本村大字辻八原ト波多津浦ト称セシモ 明治九年土地調査ノ際大字辻ト合併ヲナシ 今ハ波多津浦名称ノ大字ナキモ世人称呼スルニ総テ波多津浦ト称ス戸数百五十余ニシテ村ノ中央ニ在リ 各大字ニ通行ノ便ヨク同浦民ハ総テ商業・漁業等ヲ営ミ 波多津全村ノ需要供給地ナリ 区裁判所出張所、郵便局等アリテ通信ノ便ハ無論 出張所ニ申請事件ニシテ 役場ニ就キ調査及ビ証明ヲ要スル人民ハ頗ル便利ヲ得ルヲ以テ 役場位置ノ変更八年来人民ノ切望スル所ナリ 故ニ村ノ便益ヲ図リ 大字辻又九百三十二番地ニ変更致シタク候条 御認可想成度、別紙村会議決書謄本本全村地図相添ヘ此段稟請候也

明治三十七年六月二十六日

西松浦郡波多津村長 麻 生 四 郎

佐賀県知事 香 川 輝 殿

(認可書)

佐賀県指令第二七六二号

西松浦郡波多津村

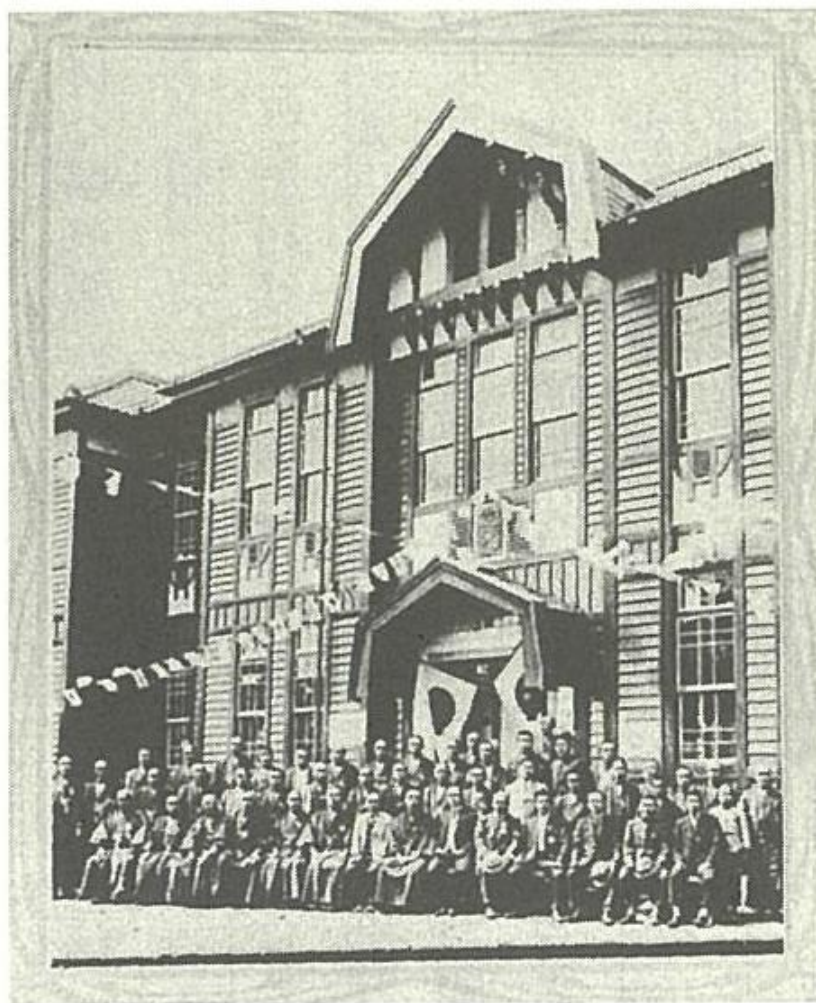
明治三十七年六月二十六日波庶第五〇六号稟請村役場位置変更ノ件

右昭和二十三年八月法律第七十七号第二条ニ依リ之ヲ認可ス

但シ位置変更ノ上ハ其旨届ツベシ

明治三十七年七月十二日 佐賀県知事 香 川 輝

## ○村役場改築



波多津村役場改築落成式記念撮影

明治三十七年畑津集落から移転した村役場は、二十三年目の大正十五年五月に改築成り、その月十八日に落成式が挙げられた。式上工事報告に於て建築委員長辻治太郎氏が述べられた中から要点を摘録すると

今迄の村役場は郡内でも最低の建物だった。偶々不況の折ではあったが村内の世論一致して改築が決定した。

昨年八月業者に頼んで設計してもらったら工事費総額一万四千八百六十余円と出たが、村民の負担を考え一部修正して一万三千元に減額のうえ、村会で可決予算化した。しかし普通一般の入札方法では施工困難とみたので、各々専門的部分の競争入札の方法をとった。其の結果、地形工事二千二百五十円、木材の部四千五百二十円、木工の部千九百九十八円、左官工事の部五百五十円、建具の部七百九十九円、鋳力並びに塗装工事七百四十五円、瓦葺工事五百七十円、スレート百三十円、畳六十一円、合計一万八百二十三円で落札、それに基礎工事の松丸太材三百四十二本は村有林より間伐することとし、昨年十一月より着工本日全くその工を終えたものである。苦役延べ千三百人を要しました。

## 設備の概要

本館二階建延九〇坪八合四勺	坪当り		
便所廊下	三坪二合五勺	工費	百八円強
倉庫	六坪	人夫	十三人
計	一〇〇坪	九勺	

(原文のまま) 役場の構、壮且つ美ならずと雖も質素堅牢その用を充すに於ては萬違算なきを信ず。

(なんと確信に満ちた簡潔の一文。干拓新地の軟弱地盤だが、基礎工事の松丸太三百数十本、尺角に近い御影石の二段重ね土台、六尺角の本柱、これらの材料の使われる工事現場を、建設委員として毎日監視した人にして初めて言える言葉か、畏敬を感じずにはおれない)

この役場は、波多津村行政の中心拠点として、昭和二十九年三月三十一日まで、十分にその機能を果たした。四月一日からは伊万里市役所波多津支所兼波多津公民館として、引続き使用されても尚まだ堅牢を誇っていたが、別の地に公民館兼支所が建てられたので、四十八年四月一日をもって閉鎖され、先頃一般に払下げ売却された、敷地ともども。

## 第三節 町村合併で伊万里市となる

### 一、郡・町村制の変遷

明治二十二年の町村制施行によって設置された町村は、伊万里町・牧島村・里川村・波多津村・南波多村・大川村・松浦村・大坪村・大川内村・二里村・東山代村・西山代村であった。その時は既に西松浦役所は設置されていた(明治十二年 — 一八七九)。しかし大正十五年(一九二六)には郡役所は廃止となりました。

牧島は昭和三年に、大坪村・大川内村は同十八年に伊万里町に合併、西山代村は山代町と改称され二町七か村になっています。

太平洋戦争の激化に伴い、県庁の出先機関として西松浦地方事務所が、昭和十七年に開設され、同三十年に改編されるまで県の地方行政を担当しました。

このような郡・町村の動きの中に合併は既に胚胎されていたといえるかもしれない。火をつけたのが「伊万里湾総合開発計画」。

## ○町村合併を必要とする理由



「地理的な隣接による交通・文化・経済・風俗等の密接不離の関係、殊に今般の伊万里湾の総合開発計画の推進については、関係地元が大同団結して政治的にも、財政的にも強化された自治体となることが必須先決の条件だ。そうなることは産業の振興、住民の共存共栄福祉の増進につながる。」またそれをめざしてがんばらなければならないということでありました。

## 二、経過

正式な動きとしては二十九年一月四日、西松浦郡町村会・町村議長会合同協議会が第一回。二月八日の同会議で有田・大山・曲川がはずれ、残り二町七か村で町村合併研究協議会を発足した。二月十四日同常任委員会発足、十七日同総務委員会、同二十七日委員会総会開会、三月三日町村合併促進法による町村合併促進協議会発足。その後若干の委員会審議総会を経て、三月十二日各町村議会に於て「市町村の廃置分合について」の議決を終え

、十三日各町村長の調印～「合併申請書」提出となった。

かくて明治二十二年以来の波多津村政は昭和二十九年三月末をもってその幕を閉ざすこととなり、その日閉村式が行われました。

明るく四月一日からは、新伊万里市波多津町としての第一歩が始まった。

当時の村政執行部は、村長～松尾加助氏、助役～酒谷久雄氏、収入役～金子禎助氏であった。

村議会議員は、議長～古崎定治氏を含め次の十六氏だった。1 松本勢一氏 2 奈良崎儀三郎氏 3 田中忠兵衛氏 4 市丸亀次郎氏 5 田中熊助氏 6 川上勇三郎氏 7 長谷川宝助氏 8 前田友太郎氏 9 田中惣四郎氏 10 小杉定治氏 11 金子末治郎氏 12 吉田定兵衛氏 13 古崎定治氏 14 井手寅助氏 15 田中松五郎氏 16 酒谷徳兵衛氏（新市発足後一年間は市会議員一翌年改選）

前記のうち酒谷助役、古崎議長、長谷川議員は合併研究協議会や、促進協議会の役員や委員をされました。

**○村民の合併賛成を取り付けるには、なにぶん超短期間のことだったので、執行部も議会もなかなか苦労の連続だったことと思う。**

「今まさに発車せんとする汽車に乗り遅れたら将来取り残されて後悔するは必定」との説得が、妙に印象深く今も忘れられない。

議会も村民も一様に危惧したことは「僻遠の地だから道路改修や、老朽小学校改築が遅らされるのでは」ないかということだった。それがどうなったかは町民がその目で確かめています。

それから半世紀！新しい世紀に向かうとき、伊万里市に、波多津町に栄光あれ…。

#### 第四節 歴代村長・助役・収入役

歴代村長		
代	氏名	就任・退任
1	田辺良壽 (不明)	明22.7.19~26.7.18 (満期)
2	井手治太郎 (安政2年4月14日)	明26.7.20~32.4.24 (家事の都合)
3	麻生四郎 (安政元年4月10日)	明32.5.2~37.3.15 (商業のため)
4	麻生文七郎 (嘉永2年7月7日)	明37.7.11~40.3.26 (病気のため)
5	加川公夫 (明治3年8月4日)	明40.4.22~大8.5.1 (満期)
6	稲葉義勇 (明治12年8月7日)	大8.5.3~昭7.8.10 (家事の都合)
7	加川公夫 (明治3年8月4日)	昭7.8.17~17.11.25 (病気)
8	田中英治 (明治23年7月7日)	昭17.11.30~21.6.30 (病気)
9	小杉芳太郎 (明治28年2月20日)	昭21.7.25~21.11.11 (一身上の都合)
10	前田末太郎 (明治8年8月21日)	昭22.1.27~26.4.4 (昭和22.4.5 地方自治法により 公選による村長となる)(任期満了)
11	松尾加助 (明治27年7月21日)	昭26.4.23~29.3.31 (町村合併により退職)

歴代助役		
代	氏名	就任・退任
1	井手治太郎 (安政2年4月14日)	明22.7.19~26.7.13 (満期)
2	山村権治郎 (慶応元年9月15日)	明26.7.20~30.7.19 (満期)
3	加川公夫 (明治3年8月4日)	明30.7.19~34.7.18 (満期)
4	兼武鐵造 (明治2年8月8日)	明34.7.27~35.2.26 (家事の都合)
5	古川団兵衛 (明治3年4月2日)	明35.3.7~40.8.20 (退職認定)
6	鶴田実太郎 (安政3年8月25日)	明40.9.26~43.2.14 (事故)
7	古河昇治郎 (嘉永元年10月11日)	明43.8.10~大3.8.9 (満期)
8	中山豊治郎 (元治元年8月26日)	大3.9.7~7.3.15 (病気)
9	古川団兵衛 (明治3年4月2日)	大7.5.21~11.5.20 (満期)
10	金子茂吉 (明治7年7月1日)	大11.5.24~昭3.11.6 (家事の都合)
11	古川団兵衛 (明治3年4月2日)	昭6.5.5~7.11.4 (家事の都合)
12	塚部綾彦 (明治9年8月8日)	昭7.11.8~9.1.31 (家事の都合)
13	金子茂吉 (明治7年7月1日)	昭9.2.18~9.5.18 (家事の都合)
14	塚部綾彦 (明治9年8月8日)	昭9.5.28~16.3.31 (病気)
15	小杉芳太郎 (明治28年2月20日)	昭16.4.5~21.7.25 (村長就任)
16	助役臨時代理 前田末太郎 (明治8年8月21日)	昭21.11.12~22.1.27 (村長就任)
17	松尾加助 (明治27年7月21日)	昭22.8.1~26.4.4 (村長立候補)
18	酒谷久雄 (明治43年12月17日)	昭26.5.30~29.3.31 (町村合併)

## 歴 代 収 入 役

代	氏 名	就 任 ・ 退 任
1	山 村 権 治 郎 (慶応元年9月15日)	明22.9.15~26.7.20 (助役当選による)
2	鶴 田 武 左 工 門 (天保2年8月15日)	明26.8.1~29.5.25 (事故)
3	兼 武 鐵 造 (明治2年8月8日)	明29.5.26~34.5.14 (家事の都合)
4	稲 葉 義 勇 (明治12年8月7日)	明34.5.14~37.2.1 (家事の都合)
5	長 谷 川 正 幸 (安政2年8月3日)	明37.2.2~39.7.16 (家事の都合)
6	辻 三 郎 (慶応元年10月20日)	明39.7.31~41.7.9 (家事の都合)
7	前 田 末 太 郎 (明治8年8月21日)	明41.7.10~44.4.15 (家事の都合)
8	太 田 勇 吉 (明治17年5月3日)	明44.5.12~昭7.9.8 (病気)
9	小 杉 芳 太 郎 (明治28年2月20日)	昭7.9.21~16.4.7 (助役就任)
10	高 田 松 吉 (明治41年12月18日)	昭16.4.14~19.6.18 (兵役臨時召集)
11	酒 谷 久 雄 (明治43年12月17日)	昭19.7.5~26.5.30 (助役就任)
12	金 子 禎 助 (明治22年10月26日)	昭26.5.30~29.3.31 (町村合併)

第五節 波多津村村会議員名簿

村落		委員会			
氏名	就任	氏名	就任		
木場	松岡 円藏 前川 初太郎 松岡 泰作 長谷川 宝助	明治二五・九(二期) 大正七・一〇(二期) 大正一五・一〇(一期) 昭和五・一〇(三期)	筒井	古川 団兵衛 古川 音藏	大正四・三(二期) 昭和一二・五(二期)
井野尾	古河 昇治郎 高田 平三郎 古川 富五郎	明治二五・九(五期) 大正一一・一〇(一期) 昭和五・一〇(三期)	田代	谷崎 倉吉 谷崎 浅次郎	明治三九・三(三期) 昭和一一・五(二期)
板木	前田 忠助	大正一一・一〇(四期)	津主	市丸 久四郎 市丸 要助	明治二七・九(三期) 大正一五・一〇(一期)
中山	中山 富治郎 古賀 正治郎 田中 才助	明治二七・一(一) 大正七・一〇(二期) 昭和二十二・五(二期)	畑津	松本 分七 前田 末太郎	大正七・一〇(二期) 昭和一二・五(五ヶ年)
村落		委員会			
氏名	就任	氏名	就任		
内野	鶴田 武左衛門 小宮 正直 鶴田 実太郎 原田 元右衛門	明治二五・九(一年五ヶ月) 明治二七・二(三年一〇ヶ月) 明治三二・三(四期) 大正一五・一〇(二期)	馬蛤潟	井手 貫助 辻 治太郎	明治二五・九(二期) 明治三九・三(五期)
煤屋	田中 龟治 田中 徳治	昭和八・五(一期) 昭和一二・五(一期)	辻	波多 忠兵衛	明治三四・七(一期)
浦	酒谷 弥市 稲葉 義勇 松尾 誠一郎 松本 喜一郎 原口 勢次 古崎 定治	明治四三・七(一期) 大正三・四(二期) 大正一一・一〇(一期) 大正一五・一〇(二期) 昭和八・五(二期と三ヶ年) 昭和八・五(三期)	備考	・四人定員。 ・明治二五年九月より明治三十年までは任期三年。 ・明治三〇年以降は任期四年。 ・昭和二六年五月以降は教育委員→文教委員と改称。 ・(波多津村吏員名簿より明治四二年改め)	



津主		板木	田代	井野尾	筒井		木場	集落	委員会				
市丸久四郎				前田友太郎	古川音藏	古川團兵衛	補欠 古川團兵衛	・松岡泰作死亡の為	長谷川宝助	松岡泰作	氏名	土木	
大正五・四(二期)				昭和二二・五(二期)	昭和六・五(九ヶ年)	昭和三・五(三ヶ年)	昭和二・二(一年三ヶ月)		昭和一七・五(二期)	大正一三・五(二期)	就任	委員	
浦			辻		馬蛤湯	煤屋	内野	畑津	中山	集落	委員会		
松本勢一			田中弥作		松尾誠一郎	川上勇三郎	波多熊左エ門	辻治太郎	丸田徳四郎	前田末太郎	田中惣四郎	氏名	土木
昭和二六・五(二期)			昭和二二・五(二期)		大正一〇・九(二期)	昭和二六・五(二期)	大正九・四(二期)	大正五・四(四期)	昭和二二・五(二期)	昭和一二・五(二期)	昭和二六・五(二期)	就任	委員



中山		津主		板木	田代		井野尾	筒井		木場		集落	委員会
田中 市作		市丸 龜治郎		前田 榮之助	古河 熊太郎 田中 松五郎		高田 平三郎	市丸 廣吉 奈良崎 儀三郎		前川 初太郎 福本 円治郎 末長 末五郎		氏名	
昭和一二・五(二期)		昭和二六・五(二期)		昭和二三・五(二期)	大正一〇・九(七期) 昭和二六・五(二期)		大正一四・九(二期)	昭和一七・五(二期) 昭和二六・五(二期)		大正元・九(二期) 大正一〇・九(二期) 大正一四・一(二期)		就任	
浦	辻			馬蛤潟	煤屋	内野		畑津		集落	委員会		
松本 勢一	川上 勇三郎				田中 熊助	藤森 虎吉 井手 東平 藤森 徳造		金子 末治郎		氏名		植林委員	
昭和二六・五(二期)	昭和二六・五(二期)				昭和二六・五(二期)	昭和一二・五(二期) 昭和一七・五(二期)		昭和二二・五(二期)		就任			
大正一四・九(二期)		昭和一二・五(二期)		大正一四・九(三期)		昭和四・一(二期)		大正元・九(二期)		大正元・九(二期)			

第六節 伊万里市会議員（波多津町）

昭和34年選挙 S.34.4.1～ 38.4.30	昭和30年選挙 S.30.4.1～ 31.8.29	昭和29年度（合併） S.29.4.1～30.3.31			年度
高田 田中 金忠 次兵 郎衛	長谷川 小杉 宝定 助治	川上 金子 田中 古崎 井手 酒谷 田中 田熊 長谷川 吉田 小杉 市丸 田忠 奈良儀 崎三 郎			氏名
文産總 教経務	港建経文 湾設済教	税税保保厚農農港港経文文總總 健健 衛衛 務務生生生水水湾湾済教教務務			委員会
昭和54年選挙 S.54.5.14～ 58.4.30	昭和50年選挙 S.50.5.9～ 54.4.30	昭和46年選挙 S.46.5.10～ 50.4.30	昭和42年選挙 S.42.5.10～ 46.4.30	昭和38年選挙 S.38.5.1～ 42.4.30	年度
田野 中口 静義 男一	田野 中口 静義 男一	野口 義一 <small>（西九年四月二日死亡）</small>	野口 義一	木須 清司	氏名
建（産）副 議 設（経）長	産總建産 経務設経	建（總）副 議 設（務）長	建 産 設 経	産 總 経 務	委員会

平成7年選挙	平成5年 補欠選挙	平成3年選挙	昭和62年選挙 S.62.5.11~ H.3.4.30	昭和58年選挙 S.58.5.11~ 62.4.30	年度
栗井 原定 和美	井本 睦美	田野 中静 男	田野 中静 男	田野 中静 男	氏名
総産 務経	産 経	(文副 議 教)長 産 経	総産 務経	総産 務経	委員会

第七節 明治四十一年以降区長

明 治					年号
45	44	43	42	41	年度
	松下興平治		池田末太郎		木場
市丸今朝松			市丸三太郎		筒井
				古川藤五郎	井野尾
		谷崎 倉吉	古河 善助		田代
小田 三助	前田森左工門	前田 定治	小田 三助		板木
市丸 善藏				前田音治郎	津留
		市丸猪之助		市丸源治郎	主屋
田中市次郎	松尾 安吉		田中 惣吉		中山
松本善兵衛		原田 善七		松本善兵衛	畑津
	鶴田虎之助			小杉半兵衛	内野
	田中定左工門		田中亀左工門		煤屋
	柴田 七			井手忠三郎	馬蛤湯
高森茂治郎		川元 喜平			辻
		稲葉 義勇			浦

大 正						年号
7	6	5	4	3	2	年度
	松岡 泰作		前川初太郎		前川 嘉七	木場
						筒井
			古川富五郎	古川藤五郎	高田吉次郎	井野尾
						田代
	前田 忠助		市丸亀太郎			板木
市丸国太郎			前田鹿太郎	市丸国太郎		津留
	市丸猪之助		市丸安太郎		市丸源治郎	主屋
			松尾 安吉	古賀角太郎		中山
中島 三郎		大久保勇吉		原田亀太郎	松本 分七	畑津
金子 徳治	金子 定助			原田元左工門		内野
		田中 甚六			田中亀左工門	煤屋
	井手 興助				井手忠三郎	馬蛤湯
						辻
	松本 平吉				古崎伝次郎	浦

大 正						年号
13	12	11	10	9	8	年度
	松下 熊助	福本円治郎				木場
			市丸興太郎		古川重太郎	筒井
古川 百藏		古川甚太郎			高田吉次郎	井野尾
田中 兼藏	田中 兼助	古河 大助			古河 善助	田代
	瀬戸幸太郎		小田 三助			板木
		前田鹿太郎				津留
市丸 米助			太田 幾平	市丸 清次		主屋
田中卯太郎	田中 善助	田中 米造		古賀 初治		中山
金子元治郎		原田 勇作		前田末太郎		畑津
	藤森 虎吉			小杉半兵衛		内野
		田中万五郎			田中 亀治	煤屋
		辻 兼太郎	柴田友四郎			馬蛤潟
						辻
			古崎 定治	古崎伝次郎		浦



昭和				大正		年号
5	4	3	2	15	14	年度
	松下 熊助			長谷川宝助		木場
奈良崎儀三郎			古川 音藏			筒井
高田金治郎			高田金太郎		古河 惣市	井野尾
谷崎倉太郎				古河 米造		田代
	前田金太郎		前田栄之助		畑山作左工門	板木
						津留
		市丸 米助		市丸源治郎		主屋
	田中 正平	古賀角太郎		古賀正次郎		中山
金子末治郎		大久保熊太郎		原田文太郎		畑津
藤森 徳造				金子 直平		内野
	田中 亀治	田中 三平		田中 亀治		煉屋
渡辺今朝治				柴田友四郎		馬蛤湯
高森 勇作						辻
					池田 佐市	浦

昭和						年号
11	10	9	8	7	6	年度
	松下 熊助		松下 要平		松下常太郎	木場
						開拓
田原善治郎					田原善治郎	筒井
			前田友太郎		古川 太藏	井野尾
古河 米造		古河 米造	谷崎勇三郎	古河熊太郎	田中 兼藏	田代
前田金太郎	前田森左工門		小田 三助			板木
市丸 力造		前田鹿太郎			市丸国太郎	津留
市丸徳左工門		太田銀右工門	市丸源治郎	市丸亀治郎	田中 才助	主屋
田中 市作	田中 市作		古賀休太郎			中山
金子末次郎		大久保熊太郎		坂本 綱治		畑津
丸田徳四郎	丸田徳四郎		井手 東平			内野
田中 甚六	田中 甚六		田中 熊助			煤屋
井手 寅助			井手 文吉			馬蛤潟
川上勇三郎		栗原 亮				辻
古崎 定治		古崎 定治			松本喜一郎	浦

昭和						年号
17	16	15	14	13	12	年度
松下源之資		前川 元治	松下 万造		松下源之資	木場
						開拓
	市丸末治郎		奈良崎儀三郎	松尾政右工門	前田友太郎	筒井
高田金治郎	古川末治郎					井野尾
谷崎権治郎		谷崎浅治郎	田中 兼藏			田代
前田金太郎			瀬戸利左工門	市丸常治郎		板木
	市丸力之助	前田興左工門		前田鹿太郎	市丸 傳藏	津留
太田銀右工門		市丸政五郎	市丸 清治			主屋
	古賀 三治		古賀幸之助		古賀徳四郎	中山
坂本 源助		松本権次郎		坂本 源助		畑津
	小杉 新造		坂本 文七		小杉 豊造	内野
田中 卯助		田中 熊助		田中 武助		煤屋
辻 東三		井手 豊作				馬蛤潟
高森甚太郎		栗原豊治郎				辻
塚部 伊平					酒谷忠兵衛	浦

昭和						年号
23	22	21	20	19	18	年度
前川 正男		松下 芳雄		松下常太郎		木場
木須 清司	湯原重之助	木須 清司				開拓
市丸末治郎	奈良崎角助	古川 太助			奈良崎敬太郎	筒井
	古川 久一		古川 清市		古川伊三郎	井野尾
古河 清作		田中松五郎		谷崎 勇		田代
市丸常治郎	前田 俊治	畑山三治郎				板木
市丸政五郎	前田鹿太郎				市丸 力造	津留
(津留、主屋合併)					太田 幾平	主屋
	古賀 徳助		古賀 泰助		田中 孝一	中山
	原田 三男	松本権次郎				畑津
	小杉 吉作		藤森盛太郎		藤田 勇作	内野
		田中 清				煤屋
	渡辺 芳嗣					馬蛤潟
池田忠兵衛				高森 与市		辻
	田中忠兵衛					浦

昭和						年号
29	28	27	26	25	24	年度
松下 用助		山口 幸雄	富野加志男	松下松之助		木場
	湯原重之助	木須 清司		湯原重之助	山下徳之助	開拓
古川 倉太	奈良崎角助	松尾三次郎		古川 美年	田原 正男	筒井
古川 仙吉	古川 久一	高田 幸作	古川 清市	高田 忠作	古川 丸一	井野尾
古河 実	古河 庄作	田中今朝五郎	前半 福野 定治 後半 谷崎円三郎	谷崎 勇		田代
市丸 繁夫	前田 虎夫		加川松五郎	小田金治郎		板木
前田 政市	市丸力之助	市丸 熊一	前田初太郎	市丸善治郎	市丸 伝造	津主
	古賀兼治郎		古賀 寛助		田中惣四郎	中山
	原田静之助		前田 一夫		松本 寛三	畑津
	小杉 大造		金子 常作		井手 芳助	内野
	田中 禎助		田中 虎三		田中 秀男	煤屋
	中島 三男		井手 惣八		井手 常男	馬蛤潟
	栗原 亮	高森 惣八		高森佐平治	川上勇三郎	辻
	塚部 伊平		塚部 秀夫			浦

昭和						年号
35	34	33	32	31	30	年度
松岡 亨		松下 愛吉		松下松之助		木場
井本 峯夫	松下 常夫	古川 満	松尾馬之丞	高森 力	堤福右工門	開拓
田原 賢次		鶴田友之助		古川伊三郎		筒井
高田 義男	森野 季二		前田 政喜			井野尾
田中 次男		谷崎 清		古河清一郎	谷崎 勇	田代
瀬戸 兵助	前田 俊治	前田房太郎	畑山 重生	前田 嘉市		板木
市丸力之助	市丸 定治	前田 高信	市丸亀治郎	市丸力之助	太田 幾平	津主
	古賀 廣造		田中 憲男		田中 友一	中山
	原田虎三郎		松本 虎吉		坂本 源助	畑津
	井手 正詞		藤森 新吉		小杉 新造	内野
	田中 俊男	田中 禎助		田中 秀男		煤屋
渡辺 実		井手 悟	渡辺 芳詞	井手芳太郎		馬蛤潟
高森 昇						辻
			古崎 泰三		原田 正雄	浦



昭和						年号
41	40	39	38	37	36	年度
長谷川丈夫		松下幾太郎		松下 愛吉		木場
高森 力	堤 昭次	松尾 宗雄	山下 新	峯松 徳治	井本 幸夫	開拓
	田原 定次	松尾三治郎		松尾三治郎		筒井
古川 仙吉		前田 政喜	前田 政喜	古河 政信	古川 右一	井野尾
古河 清美		谷崎 正美		田中 貢		田代
小田 忠三	前田 勝	古館 英造	前田友四郎	前田善太郎	前田 虎夫	板木
市丸 国重	前田初太郎	市丸 定治	前田 高信	市丸 国重		津主
	松尾 八郎	古賀 定	古賀 定		古賀 繁造	中山
	前田 四郎	大久保勝三郎	大久保勝三郎		坂本 久	畑津
	小杉 繁夫	藤森 正助	藤森 正助		金子 茂	内野
	田中 隆	田中 豊	田中 豊		田中 静男	煤屋
柴田 昭		柴田 一秋		井手 傳		馬蛤湯
	内田 勇	川上 寛三		川上 寛三		辻
		稲葉 年一		稲葉 年一		浦

昭和						年号
47	46	45	44	43	42	年度
長谷川丈夫	松岡 亨	山口 幸雄		松下幾太郎		木場
峯松 徳治	井本 幸夫	井本 峯夫	松下 常夫	渡辺 俊美	古川 満	開拓
	市丸 武司		奈良崎敬治郎		宮崎 清	筒井
高田 清	大久保信男	高田 爲造		古川 久一		井野尾
田中 貢	田中 三義	谷崎門三郎	福野 定治	谷崎 勇		田代
前田 仁	前田 嘉市	畑山 繁	前田 定美	前田 虎夫	瀬戸 勘次	板木
市丸 徳一	太田 辰生	前田 高信	市丸 定治	市丸 康男	市丸 義弘	津主
	田中 米倉		古賀 薫		松尾 達雄	中山
	坂本 亘		大久保利通		大久保 昇	畑津
	原田 弘司		坂本 久雄		小杉 正	内野
	田中 繁		岸本 弘		田中 武	煤屋
井手 幸雄		渡辺 宗隆		柴田 辰巳		馬蛤湯
	稲葉 義信		栗原 勇		小石原徳雄	辻
			吉田 町造			浦

昭和						年号
53	52	51	50	49	48	年度
松下 寿夫	長谷川丈夫	松下 秀男	前川 護	山口 嘉作	松下 均	木場
松下 常夫	渡辺 俊美	古川 満	高森 力	堤 昭次	松尾 宗雄	開拓
	市丸 儀一		市丸 倉治		市丸 繁雄	筒井
大久保信男	高田 義男	古河 政信	山口 秀雄	古川 丸一		井野尾
田中 貞美	谷崎円三郎	田中 三義	谷崎 正美	古河 敏数		田代
前田 良美	前田房太郎	市丸 春夫	市丸 繁夫	畑山 武夫	古館 静雄	板木
市丸 正	太田 辰生	市丸 国重	市丸 康男	市丸 義弘	前田 高信	津主
	田中 茂雄		田中 権助		古賀 隆	中山
	松本 薫		金子 茂之		金子 典	畑津
	金子 司		藤森 徳雄		金子 重美	内野
	田中 又市		田中 鉄男		田中 一義	煤屋
兼武 敏一		辻 春夫		辻 信男		馬蛤潟
高森 辰也	栗原 實		池田 良寿		高森 勝馬	辻
	吉田 町造				田中善之助	浦

昭和						年号
59	58	57	56	55	54	年度
長谷川益夫	松下 幸一	松下 初男	松下 稔	松下 正美	松下 芳雄	木場
古川 満	高森 力	堤 昭次	峰松 徳治	井本 幸夫	井本 峯夫	開拓
	市丸 幸男		古川 卓造		市丸 虎信	筒井
前田 巖	山口 秀雄	高田 繁	古川 菊雄	古川 元志	古川 保	井野尾
田中 和寛	古河 敏数	谷崎 寿昭	古河 賢一	古河 清美	福野 定治	田代
				畑山 学	小田 忠三	板木
市丸金治郎	太田 国一		市丸 徳一	太田 国一		津主
	松尾 忠夫		古賀 金満		古賀 幸雄	中山
4月~12月 谷本 護		松本 文吾	前田 隆之		小杉 道生	畑津
	堀川 正夫		金子 力		藤森 武志	内野
田中 次雄	田中 繁幸	田中 章		田中 勝	田中 正司	煤屋
渡辺 平八		吉田 八郎		井手 新		馬蛤潟
高森 学		高森 英一		高森 昇		辻
	橋口 熊吉					浦

平成		昭和				年号
2	1	63	62	61	60	年度
末長 嘉徳	松下 誠	前川 進	末長 利一	1月～3月と1年間 上田 隆	4月～12月 松下富美也	木場
高森 博文	堤 昭次	峰松 徳治	井本 峯夫	松下 常夫	渡辺 俊美	開拓
古川 功	古川 義昭	奈良崎明生	鶴田 勝		奈良崎 尚	筒井
古川 重利	古川 菊雄	高田 繁	古川 政弘	古川 三郎	古川 保	井野尾
谷崎 寿昭	谷崎 富治	古河 賢一		田中 次男		田代
前田 繁和	前田 定和	前田 良美	前田 仁	加川 周史	瀬戸 昭夫	板木
市丸金次郎	市丸 源梧	市丸 繁登	市丸 正	市丸 源梧	市丸 繁登	津主
古賀 勲	古賀 輝雄	古賀 一夫	田中 秀穂	古賀 清	田中 重則	中山
松本 経雄		松本 工		松本 勇一	1月～3月と1年間 坂本 安雄	畑津
	小杉 勝喜		小杉 繁		金子 秋穂	内野
田中 次雄	田中 繁幸	田中 章	田中 勝	田中 敏	田中 勇	煤屋
兼武 一正		井手 正男		柴田 義一		馬蛤潟
栗原 敏春		栗原 恒尚		高森 剛		辻
	栗原 定和					浦

平成						年号
8	7	6	5	4	3	年度
松下 登	一瀬 博恵	松下 藤男	井本 義則	前川 正義	松下 正美	木場
堤 昭次	峯松 徳治		井本 峰男	渡辺 俊一	古川 満	開拓
松尾 団	奈良崎 茂	奈良崎 保	宮崎 進	田中 敬一	上田 新	筒井
森野 作一	古川 政弘	前田 久年	古川 三郎	古川 工	前田 巖	井野尾
谷崎 正治	古河 時政	田中 政俊	松本 登	谷崎 正治	田中 和寛	田代
高田 繁和	市丸 政信	前田 定和	前田 政行	前田 敏和	前田 博行	板木
前田 高雄	市丸 定行	市丸 重博	市丸 和男	市丸 正人	太田 国一	津主
田中 末雄	田中 茂行	松尾 須直	古賀 秀夫	古賀 武	田中 仁	中山
原田 敏夫		原田 文夫		原田 秋則		畑津
鶴田 伊巧	藤森 昇	藤森 寅義	藤森 誠	原田 弘司	金子 孝充	内野
	岸本 熊一	佐伯 光義	田中 勝利	田中 敏	田中 勇	煤屋
柴田 久雄	井手 孝	井手 文吉	柴田 茂	中島 与祐		馬蛤潟
波多 正樹		高森 繁光		高森 久忠		辻
	杉本 茂助					浦



平成		年号
10	9	年度
末長 進	末長 義一	木場
高森 博文		開拓
奈良崎 稔	奈良崎一夫	筒井
古川 重利	古川 速	井野尾
谷崎 寿昭	松本 登	田代
古館 増男	高田 繁和	板木
市丸 康一	市丸 康寛	津主
富永 正人	古賀 正春	中山
原田 良和		畑津
	藤森 安磨	内野
	田中 健一	煤屋
井手 直人	井手 裕人	馬蛤潟
波多 初男		辻
		浦

## 第六章 教育・文化・民俗

### 第一節 寺子屋教育

幕末期の唐津藩には、藩学として<sup>えいけいどう</sup>盈科堂・経誼館・志道館等が設立され、また各地に多くの私塾がで  
き、庄屋、神官僧侶など指導者階級の人が多く塾生となって、塾師のもとで熱心に勉学に励みました。

これらは、帰郷後殆んど任地の神社やお寺、或いは自宅等を教室として、村の子どもを集め、読み・  
書き・そろばんから、初歩的な礼儀作法等も指導しました。板木の加川氏宅には当時使用されたと言わ  
れる教科書類が保存されています。

当時波多津居住者で塾生となり、勉強をした人には次のような人があります。

- 板木村大庄屋 田代 寛作。明倫堂（相知村）塾師 進藤源介。
- 井野尾村庄屋 古川壮太郎。奇賢堂（<sup>ちやうだ</sup>町田村）塾師 桜井覚兵衛。
- 板木村大庄屋 田代恒太郎。葦葭堂（<sup>い か</sup>南波多古川村）塾師 山口與次造。
- 辻 村 庄 屋 稲葉 義方。<sup>かんらん</sup>観蘭堂（山本石志村）塾師 桜井綱治。
- 板木村大庄屋 岸田 三郎。愛日亭（佐志見借村）塾師 宗田運平。

宗田運平は黒川出身、天明七年（一七八七）に生まれ、幼時から普通学や聖賢の道の実践について  
学び、わけても関流の算術、天文、<sup>てんもん</sup>暦法を学んで愛日亭を開いたのは五十を過ぎてから。和算につい  
ては五十九才の時江戸に出て長谷川氏について学び、帰郷後は更に熱心に儒学、暦法、天文、算術に  
ついて塾生指導に当たり、明治三年八十四才で逝去されたということです。

- 筒井村庄屋 麻生勇太郎。帰厚舎（徳須恵村、後に鏡村に移転）塾師 松本退藏。
- 内野村庄屋 向 敬太郎。明倫塾（<sup>きやうらぎ</sup>厳木村浦河内）塾師 秀島鼓溪。
- 畑 津 村 <sup>ととき</sup>十時金次郎哲龍。<sup>ごじゅんどう</sup>五惇堂（<sup>せがれ</sup>厳木中島村 秀島鼓溪は故あって所拂を受けましたが中島村  
に開塾）塾師 秀島鼓溪。（以下相知町史付巻より）
- 板 木 村 松岡繁太郎（二十才）同村大庄屋松岡藤右衛門<sup>せがれ</sup>倅、万延元年六月<sup>かんぎえん</sup>咸宜園入門寄宿生。

寄宿生が唐津から五人もあったことが、今も残っている咸宜園入門帳でわかります。

塾主広瀬淡窓先生は、当時における学徳兼備の大教育家として全国的に著名な方でしたから、入門の  
希望者が多く四千人余りも自署された入門帳が今も残っているということです。

これらの人々は、塾卒業後はまた波多津に帰って、寺子屋や塾の先生として活躍されたことと思いま  
す。

○明治八年学制の実施に当たっては、大平村は八ヶ村の中心井野尾村の寺子屋ガラン堂が大平小学校と  
して、三岳村は畑津天神さまにあった寺子屋が三岳小学校として発足しています。両小学校とも後年学  
校の位置は変わりますが、発足に際してスムーズに開校できたことは、どちらにも寺子屋があって、先

生と校地校舎それに地域住民の心の準備ができていた賜と思います

## 第二節 幼児教育

### 一、波多津東幼稚園

波多津町筒井一番地

☎〇九五五－二五－〇七六九



#### (1) 教育方針（平成十年度）

〇県、市の教育方針にのっとり、園児に適当な環境を与えて総合的な遊びの指導の中で、園児の健全な心身の発達を図る。

〇園と家庭・地域の連携を密にして、個を尊重しながら個に即した成長を目指す。

〇小学校との一貫性を図りつつ保育指導の実践に当たる。

#### (2) 教育目標

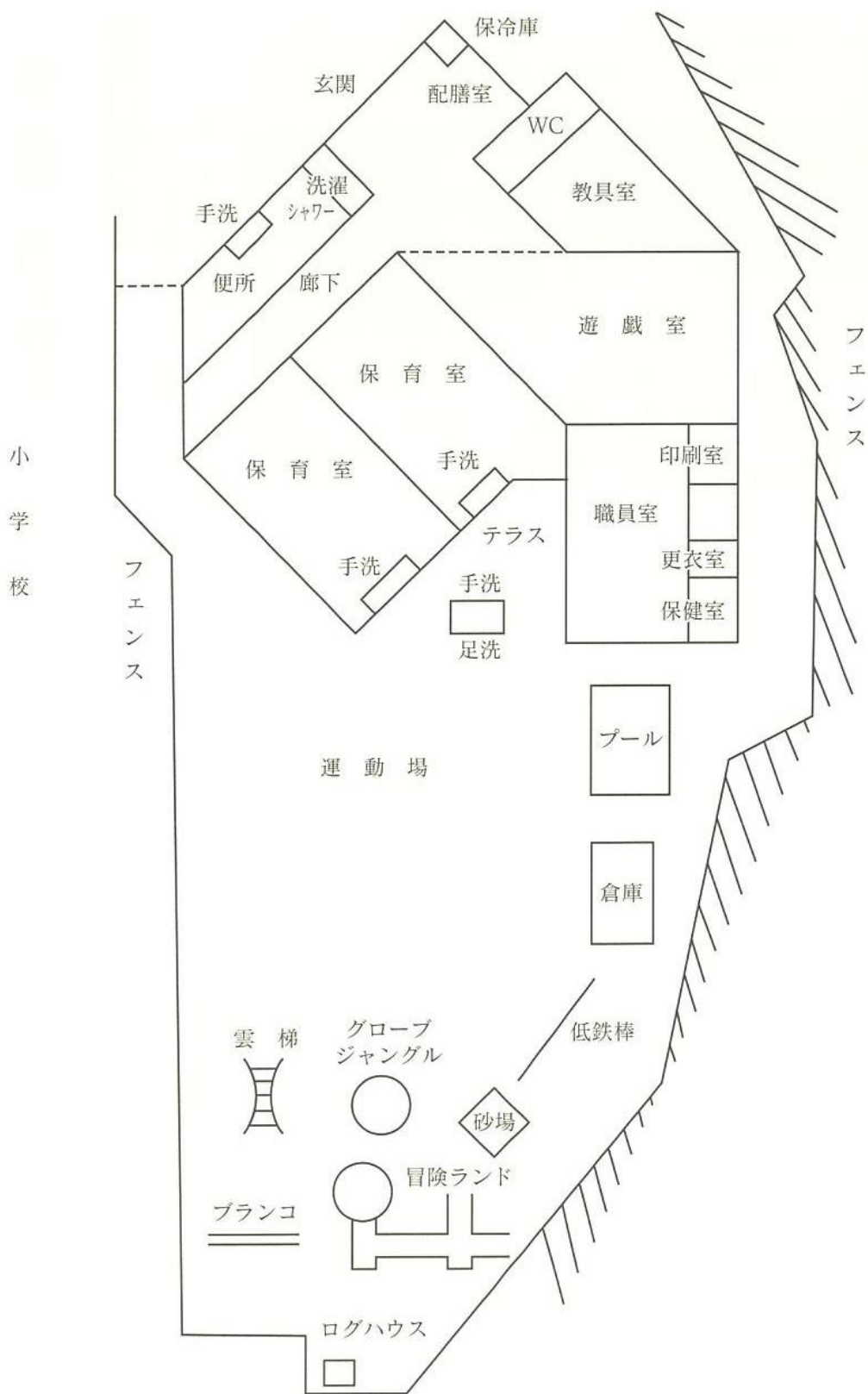
〇明るく元気な子。

〇みんなと仲よくできる子。

〇せいっぱいがんばる子。

〇感受性豊かな子。

(3) 園舎平面図及び施設の見取図



(4) 沿革

年月	概要	年度	園長名	学級数	園児数 (卒園児数)	育友会長名
昭和40・10	波多津小学校解体校舎払下げで園舎一棟一二二mを建設	昭和43	吉田新	1	38 (21)	古川仙吉
43・9	伊万里市立波多津東幼稚園開園(園長は小学校校長兼任)	44	向大進	1	43 (38)	
46・4	裏山に遊び場、砂場を新設する	45	同	1	33 (30)	
48・4	アコーデオンカーテンにより保育室を二分する	46	同	1	27 (20)	
52・8	通園路坂道の舗装完了	47	市丸定雄	1	37 (26)	
53・9	職員室を新設する	48	同	2	33 (18)	
54・2	P T A 現地研究発表会を開催	49	杉山熊夫	2	36 (26)	
55・8	幼稚園のみの専任園長となる	50	同	2	40 (27)	
55・8	保育室中央を仕切って二室にする	51	同	2	37 (24)	長谷川丈夫
56・8	シーソー、低鉄棒、水飲場を設置する					
57・12	保育室の床張り替え、外庭遊具の塗装					
58・3	庭園を整備する					
58・3	保育室の壁面整備、手洗場の塗装					
59・3	プール建設(移動式の鉄板製)(波多津町市有林管理委員会)					
60・4	廊下を拡張する 園庭及び通園路坂道のフェンス張り替え					



年月	概要											
昭62・3	昇降口石段横の用具置場設置、雨どいしゅん工 台風十二号による被害修復工事完了(屋根、ひさし、フェ ンス等)											
11	園庭の固定遊具の塗装並びに移動すべり台修理 園歌を制定する。保育室前面の壁張り替え。園児数増加 に伴い園児用のたな増設。											
平元・3	職員便所新設											
63・8	職員室及び保育室の一部をアルミサッシの窓に替える。 テラスの屋根取り替え											
2・8	黒川幼稚園長との兼任だった園長は、本園専任園長となる 保育室の一部をアルミサッシの窓に替える											
3・4	プレハブ倉庫新設											
4・4	保育室新設											
4	グローブジャングル取り替え											
5	県教育課程研究集会(発表)											
8	県・国公立幼稚園PTA連絡協議会研究大会(波東幼P研 究発表)											
5・6	運動場フェンス工事(新品)、プール塗装工事(内側)											
7												
年度	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	年度
園長名	古川 稔	同	野口 榮一	同	同	牧瀬 孝	同	同	井手東太郎	田中 照	牧瀬 孝	園長名
学級数	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	学級数
園児数 (卒園児数)	35 (18)	33 (15)	33 (20)	34 (14)	30 (18)	32 (17)	31 (18)	34 (18)	32 (19)	43 (26)	40 (21)	園児数 (卒園児数)
育友会長名	古川 重利	古川 政弘	同	同	畑山 学	同	田中 茂雄	市丸 儀一	田中 憲男	同	同	育友会長名



年 月											概 要		
4	10・3	9・10	10	9	8	8・2	11	7	7・2	11		8	6・5
<p>焼却炉設置(新品)、○園舎・校舎の改築陳情(一回)  園舎・校舎の改築陳情(第二回)  建設予定地の視察(市教委)  育友会先進校(新校舎)視察(三瀬小の木造校舎)  テント贈呈式(肥前福島ライオンズクラブ)  九州国公立幼稚園研究大会(全体会にて研究発表)  園舎・校舎改築陳情(第三回)  校舎建設委員会(第一回)  先進校視察(山代西小)  保育室照明替え(中央部四基)  先進園視察(江北幼・北方幼)園  校舎・園舎建設委員会  新校舎用地造成起工式  小学校・幼稚園改築工事安全祈願祭  校舎・園舎のお別れ式  校舎・園舎の備品移転作業  小学校・幼稚園入校・入園式(テープカット)</p>													
10	9	8	7	6	5	4	3	2	平成元	63	年度		
同	同	古川 隆治	同	同	丸田 光也	同	同	松尾 榮	同	同	園長名		
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	学級数		
17 (12)	23 (11)	24 (13)	22 (10)	24 (14)	28 (15)	33 (19)	31 (16)	44 (27)	40 (14)	31 (16)	園児数 (卒園児数)		
畑山 芳則	松下 裕慈	同	古川 政記	同	高田 貞金	井本 睦美	同	市丸 久吉	小田 正則	同	育友会長名		

(5) 園児数の推移

組	年度	平元	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	5歳	14	27	16	18	15	14	10	13	11	12
4歳	26	17	16	14	13	10	12	11	12	4	
計	40	44	32	32	28	24	22	24	23	16	
4歳児の 入園率	90	85	80	88	65	71	67	55	75	44%	

(6) 通園方法 (平成十年五月現在)

方法	年齢 性別	4歳		5歳		合計		
		男子	女子	男子	女子	男	女	計
	徒歩	0	0	0	0	0	0	0
定期バス	0	1	0	0	0	1	1	
乗用車	1	2	3	6	4	8	12	
タクシー	0	0	3	0	3	0	3	
バイク	0	0	0	0	0	0	0	
計	1	3	6	6	7	9	16	

(7) 園歌

園歌

作詞 古川 稔

作曲 片山伊知子

一、お日さまが お顔を出して

おはようさん おはようさん  
元気に 遊ぼう 輪になって  
みんなで 遊ぼう 輪になって  
走ろうよ 走ろうよ  
城後の山の 山ん子よ  
さくら並木の 山ん子よ  
みんな みんなの  
波多津東幼稚園

二、お日さまが お空の上で

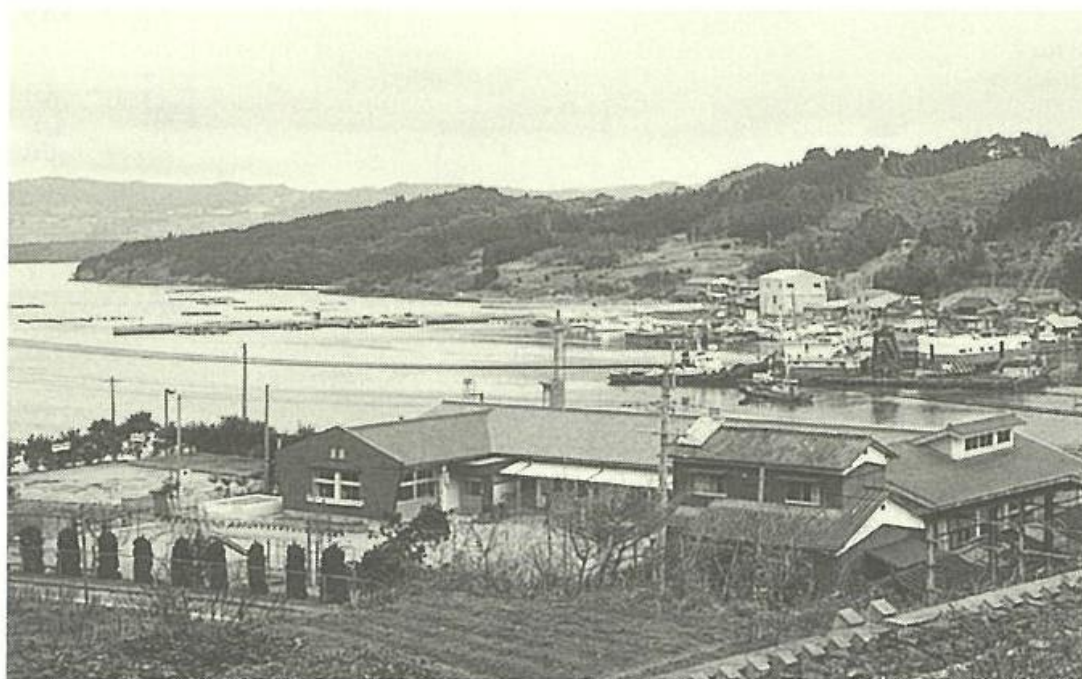
こんにちは こんにちは  
たのしく歌おう 輪になって  
みんなで歌おう 輪になって  
歌おうよ 歌おうよ  
城後の山の山ん子よ  
さくら並木の 山ん子よ  
みんな みんなの  
波多津東幼稚園

## 二、波多津保育園

波多津町辻四九九番地一〇八

☎〇九五五-二五-〇〇二七

○伊万里福祉会立波多津保育園



### (1) 保育目標（平成十年度）

みんな仲良く 丈夫なからだ げんきな子

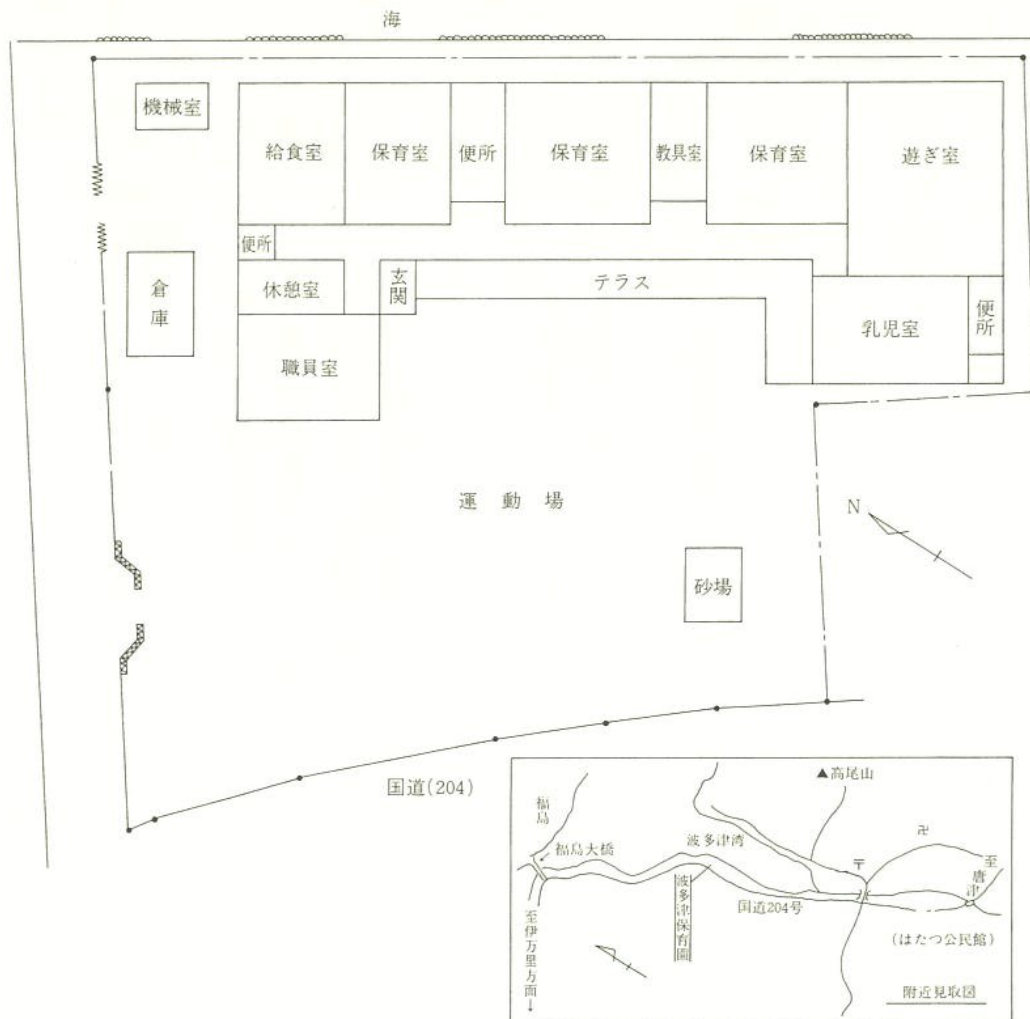
#### ○保育方針

地域とのふれあい、多様な保育ニーズに対応し、海とみどりに囲まれ、明日も来たい保育園を目指します。

#### ○なみのこクラブ年間目標

「私たちは決して飛び出しません」

(2) 波多津保育園平面図



(3) 波多津保育園沿革

1963	1962	1961	1960	1959	1958	年
38	37	36	35	34	33	年 度
同	同	同	波多津 保育園	同	波 多 津 季節保育所	園 名
同	吉田定兵衛	古崎泰三 吉田定兵衛 (9.1-)	同	同	古崎泰三	園長名
同	同	同	同	同	定員60名	学級数
60 (27)	60 (36)	60 (40)	60 (39)			園児数 (卒園児数)
		○ 吉田定兵衛園長就任。(9・1)	● 伊万里市社会福祉協議会立波多津保育園として知事の認可を受ける。 (定員六十名)(9・1)	● 第二期拡張工事に着手する。(10・2)	● 波多津授産場を保育所開設のため改築工事に着手する。(4・9) ● 波多津季節保育所として発足する。 定員六十名、古崎泰三園長就任。	主 要 沿 革
同	同	同	同	同	小島 京	園 医
						育友会長



1970	1969	1968	1967	1966	1965	1964	年
45	44	43	42	41	40	39	年 度
同	同	同	同	同	同	同	園 名
同	古崎泰三	吉田定兵衛 古崎泰三 (9.1-)	同	同	同	同	園長名
同	同	同	同	同	同	同	学級数
60 (16)	60 (29)	60 (30)	60 (28)	60 (20)	60 (33)	60 (27)	園児数 (卒園児数)
		○古崎泰三園長就任。 (9・1)					主 要 沿 革
同	同	同	同	同	同	同	園 医
同	同	田中善之助					育友会長

1977	1976	1975	1974	1973	1972	1971	年
52	51	50	49	48	47	46	年 度
同	同	同	同	同	同	同	園 名
同	同	同	同	同	同	同	園長名
同	同	同	定員80名	同	同	定員70名	学級数
80 (24)	80 (26)	80 (24)	80 (24)	70 (20)	70 (31)	70 (23)	園児数 (卒園児数)
			● 保育室増改築する。 (定員八十名)(4・1)			● 乳児室を増築する。 (定員七十名)(4・1)	主 要 沿 革
同	同	同	同	同	同	同	園 医
同	同	同	同	同	同	酒谷 勇	育友会長

1984	1983	1982	1981	1980	1979	1978	年
59	58	57	56	55	54	53	年 度
同	同	同	同	同	同	同	園 名
同	條島 勝	同	同	同	同	同	園長名
同	定員80名	同	同	同	同	同	学級数
80 (29)	80 (28)	80 (24)	80 (33)	80 (33)	80 (29)	80 (40)	園児数 (卒園児数)
	○ 條島勝園長就任。(4・1)					<ul style="list-style-type: none"> <li>● 国道二〇四号線拡幅工事に伴う新築移転地を波多津町辻四九九番地一〇八に決定する。(9・2)</li> <li>● 伊万里市福祉会設立認可により福祉会立波多津保育園となる。(10・16)</li> <li>● 園舎新築起工。(12・28)</li> <li>● 園舎工事完成。(3・31)</li> <li>● 新園舎にて保育を開始する。(4・1)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	同	同	同	同	園 医
同	同	塚部徳義	同	同	杉本昌晃	同	育友会長

1991	1990	1989	1988	1987	1986	1985	年
3	2	平成元年度	63	62	61	60	年 度
同	同	同	同	同	同	同	園 名
同	林 芳之	犬塚芳雄 林 芳之	同	同	同	須藤桂子	園長名
同	同	同	同	同	同	同	学級数
80 (24)	80 (34)	80 (31)	80 (19)	80 (30)	80 (29)	80 (27)	園児数 (卒園児数)
		○ 犬塚芳雄園長就任。(4・1) ○ 犬塚芳雄園長辞任。(5・31) ○ 林芳之園長就任。(6・1)				○ 須藤桂子園長就任。(4・1)	主 要 沿 革
同	同	同	同	同	同	同	園 医
同	同	同	同	松本幸三	同	同	育友会長

1998	1997	1996	1995	1994	1993	1992	年	
10	9	8	7	6	5	4	年 度	
同	同	同	同	同	同	同	園 名	
同	同	同	同	副島信男	蒲原幸子	芳野四郎	園長名	
同	同	同	定員90名	同	同	同	学級数	
77 (23)	82 (23)	84 (25)	90 (17)	同 (18)	同 (23)	同 (21)	園児数 (卒園児数)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 乳児保育促進対策事業として、遊具並びに備品購入(五十万円)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 園庭遊具パラシオ・ブランコ等新規設置(六百万円)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 蒲原幸子園長辞任。(3・31)</li> <li>○ 副島信男園長就任。(4・1)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 芳野四郎園長辞任。(3・31)</li> <li>○ 蒲原幸子園長就任。(4・1)</li> <li>○ 芳野四郎園長就任。(4・1)</li> <li>○ 林芳之園長辞任。(3・31)</li> </ul>		主 要 沿 革
同	同	同	同	同	同	同	園 医	
同	金子和宏	同	平松善彦	同	同	小杉利孝	育友会長	

(4) 行政区別在籍園児調べ(平成十年五月一日現在)

クラス	ふじ		さくら		ばら		も も						合 計		
	5才児		4才児		3才児		2才児		1才児		0才児				
男女別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計
木 場	1		1		1	1						1	3	2	5
開 拓													0	0	0
筒 井			1		1		1						3	0	3
井ノ尾			1								1		2	0	2
田 代			1										1	0	1
板 木						1				1			0	2	2
津留主屋													0	0	0
中 山		1			2		1						3	1	4
畑 津	1												1	0	1
内 野	1	1	3	2		1	1			1			5	5	10
煤 屋	1												1	0	1
馬 蛤 潟	1			1	2			2					3	3	6
辻	2		3		2	1	2		1				10	1	11
浦	6	6	4	4		3		1	1	1			11	15	26
波多津町計	13	8	14	7	8	7	5	3	2	3	1	1	43	29	72
他町から計	1	0	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	3	2	5
合 計	14	8	16	8	8	7	5	4	2	3	1	1	46	31	77



### 第三節 学校教育

#### 一、波多津小学校

波多津町畑津又七六三番地一

☎〇九五五-二五-〇〇〇四



#### (1) 学校教育の構想（平成十年度）

波多津小学校 校訓「精いっぱい」

##### ●教育目標

知、徳、体の調和のとれた人間性豊かで、視野の広い心身ともに健康な児童の育成をめざす。

##### ●努力目標

#### 1、進んで学び考える子（知）

- ・よく聞き、自ら考え豊かに表現する
- ・自主的な学び方を身につける

#### 2、思いやりがあり助け合う子（徳）

- ・広い心をもち仲よく挨拶ができる。
- ・責任を重んじ、お互いに協力して感謝する心をもつ。

#### 3、健康でたくましい強い子（体）

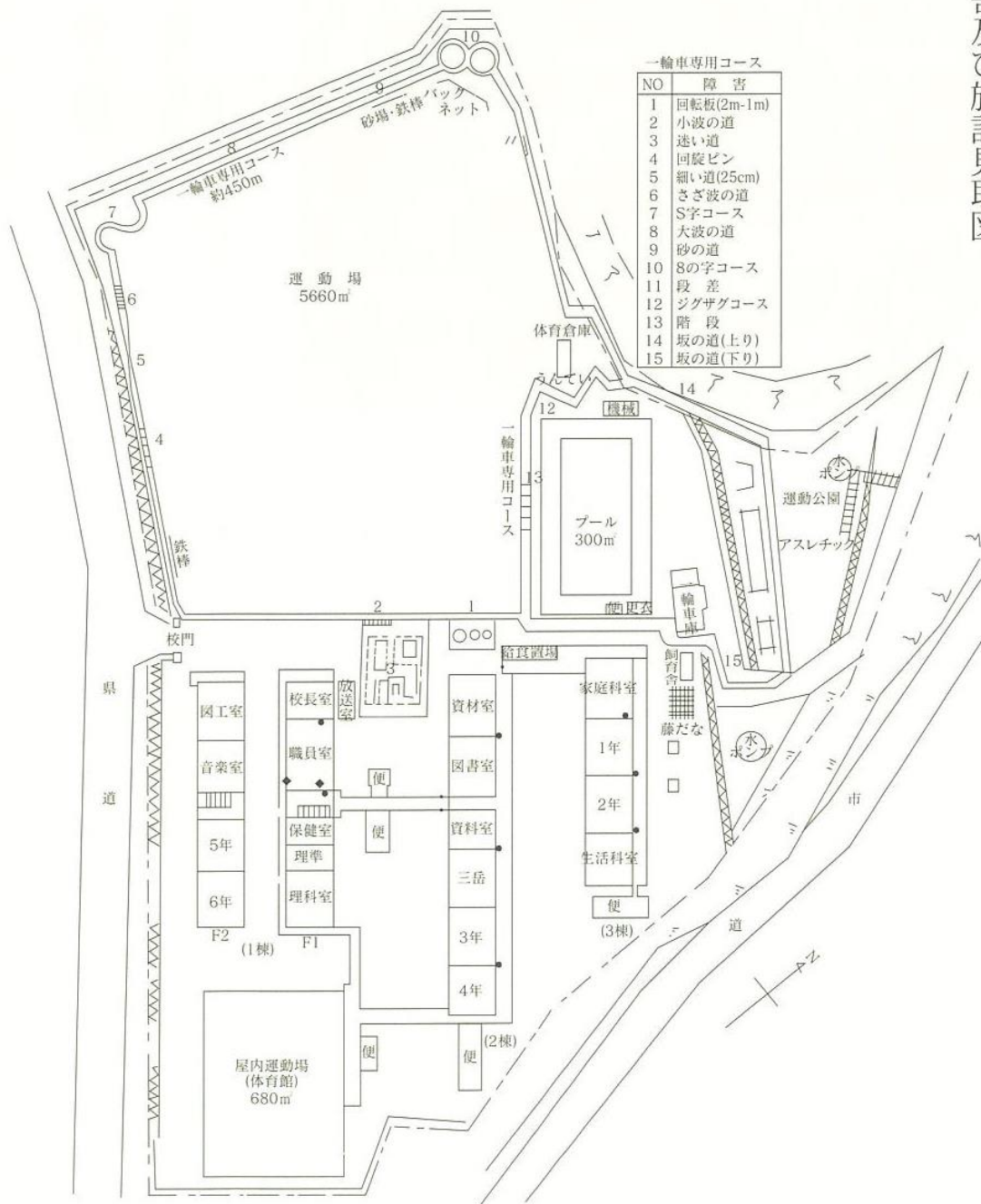
- ・運動に親しみ、心と体をきたえる
- ・危険を判断し、安全に心掛ける

#### 4、ふるさとを愛する子（情）

- ・生き物や自然を大切に美しいものを素直に感じとる子（人や物を大切にする子）
- ・ふるさとのよさを知り広い世界にも視野を向ける子

#### (2) 校舎及び施設見取図

(2) 校舎及び施設見取図



(3) 波多津小学校沿革

1880	1879	1878	1877	1876	1875	年
13	12	11	10	9	明治8	年 度
同	同	同	同	同	三岳小学校	校 名
						校長名
						学級数
						児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学務委員ができる。</li> <li>● 教育令改正、小学校は初等科三年、中等科三年、高等科二年とし、少なくとも初等科には就学するようにすすめる。</li> <li>● 教育令が出て大学区、中学区の制を廃する。</li> <li>● 従来の大小区を廃し新に郡ができ西松浦郡となる。</li> <li>● 四月十日の卒業証書によると畠津小学校とある。</li> <li>● 官立学校の日曜は休み、土曜は半休。</li> <li>● 日本の地位を世界の一等国の列に高めようとする国家目標に沿う教育がはじまる。</li> <li>● 公立三岳小学校として開校。</li> </ul>						主 要 沿 革
						校 医
						育友会長

1887	1886	1885	1884	1883	1882	1881	年
20	19	18	17	16	15	14	年 度
同	尋常三岳 小 学 校	同	同	同	同	同	校 名
							校 長 名
							学 級 数
							児 童 数 (卒 業 生 数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 尋常三岳小学校と称し、太平尋常小学校(木場、筒井、井野尾、田代、中山、津留、主屋の八村設立)を当校に合併し更に筒井、板木に各分教場を設ける。</li> <li>● 小学校を尋常、高等各四ヶ年とし、尋常終了を義務づける。</li> <li>● 主席教授として小田圭太郎、教授として坂本吉在職。</li> <li>● 西松浦郡小学校連合運動会が腰岳で行われる。</li> </ul>							主 要 沿 革
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 九鬼文部少輔本郡を巡視される。</li> </ul>							
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 本郡教員検定試験有田に於て行われる。</li> </ul>							
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 小学校教則綱領公布される。</li> </ul>							
							校 医
							育 友 会 長

1894	1893	1892	1891	1890	1889	1888	年	
27	26	25	24	23	22	21	年 度	
同	同	三岳尋常 小 学 校	同	同	同	同	校 名	
同	同	同	同	同	初代 脇山浪造		校長名	
							学級数	
							児童数 (卒業生数)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 裁縫科を設置する。</li> <li>● 大平尋常小学校区域より筒井、木場を分ちて本校に合併し筒井分教場を設置して尋常一、二年の児童を収容する。</li> <li>● 明治天皇御真影奉戴。(十二月)</li> <li>● 照憲皇太后御真影奉戴。(十二月)</li> <li>● 校舎狭隘なるをもって新築して瓦葺となす。(三月)</li> <li>● 学校変更により三岳尋常小学校と改称し三学級に編成する。</li> <li>● 教育勅語騰本奉戴。</li> <li>● 学校清潔法発布。</li> <li>● 教育勅語発布される。</li> <li>● 大岳村となる。</li> <li>● 国歌「君が代」の制定を各国に通知する。</li> </ul>								主 要 沿 革
							校 医	
							育友会長	



1900	1899	1898	1897	1896	1895	年
33	32	31	30	29	28	年 度
波多津尋常小学校 波多津尋常高等小学校	同	同	同	同	同	校 名
5代 桜井 清	3代 一作 林 4代 代海 岩野	同	2代 原田千之助	同	同	校長名
9		4				学級数
尋 234 高 113		178 (33)				児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 波多津村となる。</li> <li>● 波多津尋常小学校と改称する。(六月)</li> <li>● 高等科を併設し波多津尋常高等小学校と改称する。(九月)</li> <li>● 小学校令改正の結果尋常科四ヶ年の義務教育を施行。</li> <li>● 高等科は二、三、四年の自由修学とする。</li> <li>● 西松浦郡小学校連合運動会が腰岳で行われる。</li> </ul>						
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 公立学校に校長を置くようになる。</li> </ul>						
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 校舎狭隘なるを以つて増築して二階建てにする。</li> </ul>						
						主 要 沿 革
						校 医
						育友会長



1907	1906	1905	1904	1903	1902	1901	年
40	39	38	37	36	35	34	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
7代 市原 帛 蔵	同	同	同	6代 藤松雄太郎	同	同	校長名
							学級数
尋 271 高 101	尋 273 高 134	尋 270 高 113	尋 272 高 98		尋 295 高 89		児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学校園完成(二三〇坪)爾来暫時増加して一〇六坪となる。(五月)</li> <li>● 義務教育年限延長につき卒業生なし。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学校の年度始めを四月とする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 国定教科書を全国小学校で採用する。</li> <li>● 読本イシ、イエではじまる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 新築校舎竣工。(六月)</li> <li>● 教育評価 甲、乙、丙となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 男女全国就学率九〇%をこえる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 四月より二ヶ年間特別学級を附設して子守児童の教育を行う。</li> <li>● 一反歩の土地を借りて体操場を拡張する。(五月)</li> </ul>	主 要 沿 革
							校 医
							育友会長

1914	1913	1912	1911	1910	1909	1908	年
3	2	明治45 大正元	44	43	42	41	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
9代 雪竹源一 10代 山崎初太郎					8代 百島 郁	同	校長名
							学級数
尋 413 高 32	尋 398 高 33	尋 367 高 28	尋 402 高 30	尋 401 高 24	尋 376 高 23	尋 332 高 34	児童数 (卒業生数)
	● 従来久しく筒井、木場の間に分教場を設け、尋常科一、二、三、四学年を収容し来りしが本年より公に其筋の認可を得、従来の校舎を仮校舎とし正式に筒井分教場を設立する。	● 学校園設備佳良につき知事より金二〇円を賞与せらる。	● 学校医として井手猪平太氏就任される。 ● 読本ハタ、タコではじまる。		● 種痘法公布。	● 設備佳良につき知事より表彰される。 ● 小学校令一部改正の結果尋常科を六ヶ年の義務教育に延長し高等科は二ヶ年となる。	主 要 沿 革
	同		井手猪平太				校 医
							育友会長

1921	1920	1919	1918	1917	1916	1915	年
10	9	8	7	6	5	4	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
同	同	同	同	同	11代 小杉定治	同	校長名
9	9	9		9			学級数
尋 424 高 70	尋 425 高 55	尋 447 高 51	尋 448 高 48	尋 427 高 51	尋 438 高 49	尋 438 高 49	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 出席優良につき表彰される。(西松浦郡長 檉田三郎)</li> <li>● 運動具倉庫完成。(四坪、経費は寄附)</li> <li>● 読本ハナ、ハトではじまる。</li> <li>● 父兄会できる。(七月)</li> <li>● 処女会創立。</li> <li>● 雨天体操場、宿直室、小使室の模様替えと外便所を修繕する。(四月)</li> <li>● 八月より各字に青年夜学会を開く。</li> <li>● 筒井分教場の経営は独立していたがこれより合併することとなる。(四月)</li> <li>● 筒井分教場の経営は独立していたがこれより合併することとなる。(四月)</li> <li>● 雨天体操場、宿直室、小使室の模様替えと外便所を修繕する。</li> <li>● 八月より各字に青年夜学会を開く。</li> <li>● 筒井分教場の経営は独立していたがこれより合併することとなる。(四月)</li> <li>● 筒井分教場の経営は独立していたがこれより合併することとなる。(四月)</li> <li>● 雨天体操場、宿直室、小使室の模様替えと外便所を修繕する。</li> <li>● 処女会創立。</li> <li>● 父兄会できる。(七月)</li> <li>● 運動具倉庫完成。(四坪、経費は寄附)</li> <li>● 読本ハナ、ハトではじまる。</li> <li>● 出席優良につき表彰される。(西松浦郡長 檉田三郎)</li> <li>● 出席優良につき表彰される。</li> <li>● 毎月一回諸教科につき考査する。</li> <li>● 波多津実業補習学校を附設する。</li> <li>● 出席優良につき表彰される。</li> <li>● 忠魂碑建立される。</li> </ul>							
同	同	同	同	同	同	同	校 医
							育友会長

1928	1927	1926	1925	1924	1923	1922	年
3	2	大正15 昭和元	14	13	12	11	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
15代 井手東治郎	同	14代 手塚憲寿	同	13代 北川愛一郎	12代 川原田仁八 13代 北川愛一郎	12代 川原田仁八	校長名
11	10	10	10	10	10	10	学級数
尋 441 高 101	尋 437 高 89	尋 392 高 80	尋 437 高 80	尋 425 高 65	尋 377 高 67	尋 371 高 79	児童数 (卒業生数)
● 一年生を男女別に編成して十一学級とする。	● 加設教科として手工を加える。		● 児童学級文庫を新設する。(九月)	● 堆肥新築(六坪 二五〇円)	● 国民精神作興に関する詔書下賜。 ● 運動用具を増設し理科器械、化学薬品を整備する。	● 高等科一学級を設置する。 ● 運動場の大拡張二五〇坪増。	主 要 沿 革
同	同	同	同	同	同	同	校 医
							育友会長

1935	1934	1933	1932	1931	1930	1929	年
10	9	8	7	6	5	4	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
同	同	18代 福田嘉吉 19代 田中繁太郎	17代 藤本東三郎	16代 森田乙吉	同	同	校長名
12	12	11	11	11	12	12	学級数
尋 641 高 114	尋 477 高 126	尋 463 高 124	尋 495 高 108	尋 538 高 99	尋 438 高 117	尋 428 高 109	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 製茶場新設。(県茶業試験場より指導員来る)(五月)</li> <li>● 炊事場・昇降口新築。</li> <li>● 高等科三学級となる。</li> <li>● 新校舎三教室竣工七月。(牧島小学校校舎を購入して再建立する)</li> <li>● 校舎屋根全部修理、土間廊下を板張りになす。(八月)</li> <li>● 水産視學員巡視。(各種魚類標本、網船模型製作)(十一月)</li> <li>● 田嶋神社の仮教室使用は本年もつづく。</li> <li>● 学校歯科医を嘱託する。</li> <li>● 学級増、田嶋神社を仮教室として二学年女子を收容する。(四月)</li> <li>● 校舎一棟竣工。(七月)</li> </ul>							
同	同	同	同	同	校医 井手猪平太 歯科医 川内サエ	同	校 医
							育友会長



1942	1941	1940	1939	1938	1937	1936	年
17	16	15	14	13	12	11	年 度
同	波多津第一 国民学校	同	同	同	同	同	校 名
同	同	同	同	同	同	同	校長名
13	12		12	12	13	13	学級数
尋 440 高 171	尋 440 高 149	尋 430 高 168	尋 410 高 165	尋 441 高 140	尋 473 高 139	尋 488 高 128	児童数 (卒業生数)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学制改革により波多津第一国民学校と改称する。(四月)</li> <li>● 義務教育初等科六年、高等科二年の八ヶ年制となる。</li> <li>● 太平洋戦争はじまる。(十二月八日)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 皇紀二千六〇〇年式典。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 青年学校義務制になる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 中庭に一教室新築竣工する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 校門建設。(古崎定治氏寄附)(二月)</li> <li>● 二宮金次郎銅像除幕式。(三月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 拡声器購入。(四五〇円寄附による)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	同	同	同	同	校 医
							育友会長



1949	1948	1947	1946	1945	1944	1943	年	
24	23	22	21	20	19	18	年 度	
同	同	波多津村立 波多津校 第一小学校	同	同	同	同	校 名	
同	同	22代 山本登一	21代 田中省三	同	同	20代 相川伊三	校長名	
15	14	13	12			13	学級数	
500 (86)	514 (95)	514 (83)	尋 487 高 81			尋 462 高 160	児童数 (卒業生数)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 電鈴を設置して号鐘にかえる。(五月)</li> <li>● 分教場学級増／単四、複一。(三月)</li> <li>● 分教場に三教室一棟、渡廊下を増築し、落成式を行う。</li> </ul>								主 要 沿 革
<ul style="list-style-type: none"> <li>● P T A を結成する。(二月) ● 新制高等学校発足。</li> <li>● 教育委員会発足。</li> <li>● 学校借地全部を買収する。(三月)</li> </ul>								
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学制改革により波多津村立波多津第一小学校と改称する。(四月) ● 事務職員、養護教諭をおく。● 分教場に五、六年年をおき、四学級となす。● ピアノ購入。(七月) ● 教育基本法、学校教育法でる。◆ 高等科廃止 ◆ 小学六年 ◆ 中学三年 ◆ 全学年男女共学</li> <li>● 新教育の研究をする。</li> <li>● ラジオを購入して放送教育を始める。</li> <li>● 日本国憲法公布される。(十一月)</li> <li>● 原爆投下される。太平洋戦争おわる。(八月十五日)</li> </ul>								
同	同	同	同	同	同	同	校 医	
同	初代 井手文吉						育友会長	

1956	1955	1954	1953	1952	1951	1950	年
31	30	29	28	27	26	25	年 度
同	同	伊万里市立 波多津校 小学	同	同	同	波多津村立 波多津校 小学	校 名
同	同	同	同	同	24代 金子武美	23代 瀬戸貞治	校長名
11	17	17	17	16	16	15	学級数
437 (62)	552 (62)	521 (87)	449 (79)	501 (90)	522 (74)	510 (73)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 筒井分校大平小学校と合併し市立波多津東小学校となる。(四月)</li> <li>● 事務職員、養護教諭中学校と兼務となる。</li> </ul>							
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 校舎改築第一期工事。(第三棟舎竣工 一、二二、五坪)</li> <li>● 運動場第二次拡張工事完成。(二反四畝七歩・敷地／六五万円・埋立／七〇万円)</li> <li>● 田嶋神社分室を本校に引き上げて閉鎖する。(九月)</li> <li>● 子供信用組合知事より表彰される。(十二月)</li> <li>● 町村合併市制施行により伊万里市立波多津小学校と改称する。</li> <li>● 中学校新校舎に移る。(田嶋分室も小学校教室とする)</li> <li>● 本校の運動場拡張工事完成。(十月) (九、九三、七坪・一、五一〇、三九〇円)</li> <li>● 筒井分校に一学級を増加する。(単六学級)</li> <li>● 助役兼初代教育委員長／酒谷久雄就任、教育委員／松尾茂資、福地道雄</li> <li>● 波多津村教育委員会発足。(十一月)</li> <li>● 校歌(中原勇夫作詞・岡井隆一作曲)、校旗(筒井茂雄)を制定する。(九月)</li> <li>● 西松浦郡育友会主催弁論大会で優勝する。</li> <li>● 本校に一学級を増加し十一学級となる。(三月)</li> <li>● 波多津村立波多津小学校と改称する。</li> <li>● 忠魂碑を田嶋神社へ移す。</li> </ul>							
同	同	同	同	同	同	同	主 要 沿 革
同	吉田定兵衛	同	同	同	井手亮海	同	校 医 育友会長

1963	1962	1961	1960	1959	1958	1957	年
38	37	36	35	34	33	32	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
同	同	同	26代 遠藤秀夫	同	25代 富永初市	同	校長名
12	12	12	12	12	12	11	学級数
457 (83)	472 (78)	486 (86)	517 (97)	513 (74)	461 (48)	461 (48)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学習樹木園造成。(一九種／六九本植樹)(三月)</li> <li>● 学校緑化コンクールに於て伊万里緑化推進委員会より表彰をうける。</li> <li>● 環境緑化コンクールに於て佐賀県緑化推進委員会より表彰をうける。</li> </ul>							主 要 沿 革
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 理振法の適用をうけ、一〇万円相当の理科備品を購入する。</li> <li>● 伊万里緑化推進委員会より学校緑化の指定をうける。</li> <li>● 湯沸場、図書室、廊下新築。</li> <li>● バックネット、小鳥舎を作る。</li> <li>● テレビ受像器を設置する。</li> </ul>							
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 通学道路完成。(二二万円)</li> <li>● 一学級増十二学級となる。</li> </ul>							主 要 沿 革
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 井戸並びに揚水ポンプ新設。(四月)</li> <li>● 校舎改築第二期工事(第二棟竣工／一八五、三坪)、講堂竣工(二二二、七坪)、記念事業として講堂備品の寄附をうける。(七五万円)(五月)</li> </ul>							
同	同	同	同	同	同	同	校 医
同	同	同	金子常作	同	同	同	育友会長



1970	1969	1968	1967	1966	1965	1964	年
45	44	43	42	41	40	39	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
同	30代 小杉敏夫	29代 西 好道	同	28代 藤田平太	同	27代 野村寿男	校長名
11	11	11	12	12	12	12	学級数
275 (51)	278 (58)	309 (57)	348 (78)	366 (65)	395 (78)	436 (85)	児童数 (卒業生数)
主 要 沿 革							
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学校緑化指定により桜八本、プラタナス一〇本、さんご樹六〇本を植える。 (四月)</li> <li>● 普通学級一〇学級となる。特殊学級を開設する。(四月)</li> <li>● 運動場造成工事完了する。(二〇四八、六五平方メートル・一一〇万円)</li> <li>● 佐賀県PTA連絡協議会、伊万里市連合PTA指定によるPTA現地研修会を開く。(十二月)</li> <li>● 福島大橋開通する。● 祝賀式に鼓笛隊参加。(十月)</li> <li>● 伊万里市教育委員会委嘱による理科の研究発表を開く。(十一月)</li> <li>● 準健康優良校として朝日新聞社より表彰をうけ楯を受領する。(二月)</li> <li>● 管理棟舎竣工(鉄筋二階建/六〇〇平方メートル、一、四一五万円)</li> <li>● 管理棟の落成式を行う。内容充実費として特志寄附二〇〇万円をうける。</li> <li>● RKK熊本放送より日曜教室の録画一位となる。</li> <li>● 伊万里市教育委員会より理科の研究指定校として委嘱される。</li> <li>● 北部給食センター開設と共に完全給食を開始する。(九月)</li> </ul>							
同	同	同	同	同	同	同	校 医 京 小島 池田 八郎 校 医 蘭科 池田
同	同	同	野口義一	同	同	同	育友会長

1977	1976	1975	1974	1973	1972	1971	年	
52	51	50	49	48	47	46	年 度	
同	同	同	同	同	同	同	校 名	
同	32代 池田儀一	同	同	31代 古田 新	同	同	校長名	
7	7	8	8	8	9	10	学級数	
176 (27)	170 (18)	188 (46)	197 (36)	209 (38)	214 (46)	242 (47)	児童数 (卒業生数)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 放送室を新設する。</li> <li>● ソニー理科教育優良校として表彰される。</li> <li>● 県理科教育発表会で学校賞をうける。</li> </ul>								主 要 沿 革
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 運動場防球ネット完成する。</li> <li>● 優良子ども銀行として貯蓄推進委員会より表彰される。</li> </ul>								
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 伊万里市教育委員会委嘱による図工科研究発表会を開く。(十二月)</li> <li>● 創立百周年記念式典を行う。(十二月五日)</li> </ul>								
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 伊万里市教育委員会より図工科の研究委嘱をうける。 「児童の内なるものを豊かに育てる造形教育」</li> </ul>								
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 七月水害による復旧工事終る。(二月)</li> <li>● プール完成。(二五メートルの六コース、一、二七〇万円全額公費)(八月)</li> </ul>								
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 普通学級一学級減。</li> <li>● 普通学級一学級減。</li> <li>● 養護教諭配置される。</li> </ul>								
同	同	同	同	同	同	同	校 医	
田中與人	同	同	同	同	田中静男	同	育友会長	

1984	1983	1982	1981	1980	1979	1978	年		
59	58	57	56	55	54	53	年 度		
同	同	同	同	同	同	同	校 名		
35代 堀田保雄	同	同	34代 原口辰己	同	同	33代 野口栄一	校長名		
7	7	7	7	7	7	7	学級数		
182 (37)	178 (22)	184 (29)	178 (23)	176 (26)	172 (25)	175 (40)	児童数 (卒業生数)		
主 要 沿 革									
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 市水泳大会小規模校で優勝する。</li> <li>● 運動公園アスレチック施設完成。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 伊万里市教育委員会より体育の研究を委嘱される。</li> <li>● 文部省・県教委より体力づくり推進校の指定をうける。</li> <li>● 理科発表学校賞(知事)、読書感想文優良賞(県)をうける。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学校安全優良校県表彰をうける。 ● 体育館落成。</li> <li>● スポーツ少年団ソフトボール九州大会(日南市)特別賞をうける。</li> <li>● 県スポーツ少年団大会でソフトボール優勝する。</li> <li>● 「交通安全宣言校」発足。</li> <li>● 県児童生徒理科研究発表会で学校賞をうける。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 市連Pより育友会研究を委嘱される。</li> <li>● プールフェンス前面張り替える。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 第一棟床修理。(二十五万円)</li> <li>● 理振法の適用をうける。(十八万円)</li> </ul>	
同	同	同	同	同	同	同	校 医		
原口久幸	同	小杉信行	同	同	同	同	育友会長		



1991	1990	1989	1988	1987	1986	1985	年
3	2	平成元	63	62	61	60	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
39代 森 昭利	38代 筒井 恣	同	37代 立石 健	同	36代 松尾 勝	同	校長名
7	7	7	7	7	7	7	学級数
174 (30)	175 (30)	171 (28)	169 (22)	167 (28)	169 (33)	174 (28)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 台風十九号による屋根瓦修理</li> <li>● パソコン導入</li> <li>● 市上水道校内配管工事完了</li> <li>● 市上水道配管理設(松の本―学校一―一四万)(校内配管二八八万)</li> <li>● 集中豪雨で体育館二・三棟床下浸水(七月二日)につき市内一斉臨時休校</li> <li>● 市水泳大会小規模校で優勝する</li> <li>● 校舎東側埋立</li> <li>● 駐車場埋立</li> <li>● 校地拡張(体育館東側)</li> <li>● 朝日新聞社、NHK佐賀テレビより一輪車ユニホック放映。</li> <li>● 第四十回県民体育大会開会式に一輪車・マスゲーム出場する。</li> <li>● 図書館移転整備</li> <li>● 一輪車増設(普通車八十台、特殊車六台)</li> <li>● 一輪車専用スタンド・専用コース等施設完成。</li> <li>● 保健体育指導で全国表彰をうける。</li> <li>● 文部省、県、市教育委員会委嘱「豊かでたくましい児童を育てる体力づくり」研究発表をする。</li> </ul>							
小島 京	同	同	同	同	同	同	主 要 沿 革 校 医
同	同	同	橋口年春	同	同	同	育友会長

1998	1997	1996	1995	1994	1993	1992	年
10	9	8	7	6	5	4	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
同	42代 井手孝通	41代 円田 滋	同	同	40代 高瀬龍朗	同	校長名
7	7	7	7	7	7	7	学級数
125 (27)	130 (26)	138 (27)	153 (31)	156 (22)	163 (30)	174 (30)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 親子ふれあいフェアの開催―県広報紙に掲載</li> <li>● 給食室の設置(資材室を改装)</li> <li>● 文化面・体育面の一段の飛躍</li> <li>● 読書感想文コンクール、学童美術展、小体連陸上・水泳大会他</li> <li>● 学校ボランティア活動協力校委嘱 ● 運動場西側防球ネット完成</li> <li>● 二十四時間TV・愛は地球を救う番組の中で</li> <li>● 全国一輪車大会出場(全国第四位)</li> <li>● 非常階段設置</li> <li>● 教室等窓サッシ化完了</li> <li>● 東京金管五重奏団芸術劇場</li> <li>● 創立百二十年記念航空写真撮影</li> <li>● 教室等窓サッシ工事</li> <li>● 市教委委嘱国語科研究発表会</li> <li>● 営繕工事(二棟、三棟)</li> <li>● 市教委委嘱国語科研究指定校</li> <li>● TVアンテナ修復工事</li> <li>● 育友会同和研修会(九月～二月)</li> <li>● 第一棟二階補修</li> <li>● 市連P現地研究発表会</li> </ul>							主 要 沿 革
同	同	同	同	同	小島 智	同	校 医
同	小杉利孝	同	同	向 哲信	同	橋口儀信	育友会長

## 校 歌

中原勇夫作詞

## 岡 隆一作曲

- 一、玄界灘の潮のように  
あふれ高鳴る希望をのせて  
強く明るい子供よ我等  
いざいざ働け栄の波多津  
ああ 波多津小学校
- 二、山の緑の起伏見よや  
遠い青空明け行く光  
聴く正しい子供よ我等  
いざいざ学べよ 誉の波多津  
ああ 波多津小学校
- 三、体を鍛え魂磨き  
花咲く平和前途は楽し  
輝く夢の子供よ我等  
いざいざ羽搏たけ 日本の波多津  
ああ 波多津小学校

### 伝統の一輪車教育

昭和五十八年度より三カ年、文部省指定・教育委員会委嘱「体力づくり」の研究指定校として研究を推進することになったが、この時一輪車教育をとりあげた。

これまで十数年に亘ってその伝統を守り全国大会でも入賞をしている。

一年生から六年生まで、運動場につくられた一輪車コースを毎日練習し、ほとんどの児童がサーカスのように、さっそうと華麗に乗りまわし楽しく運動しています。

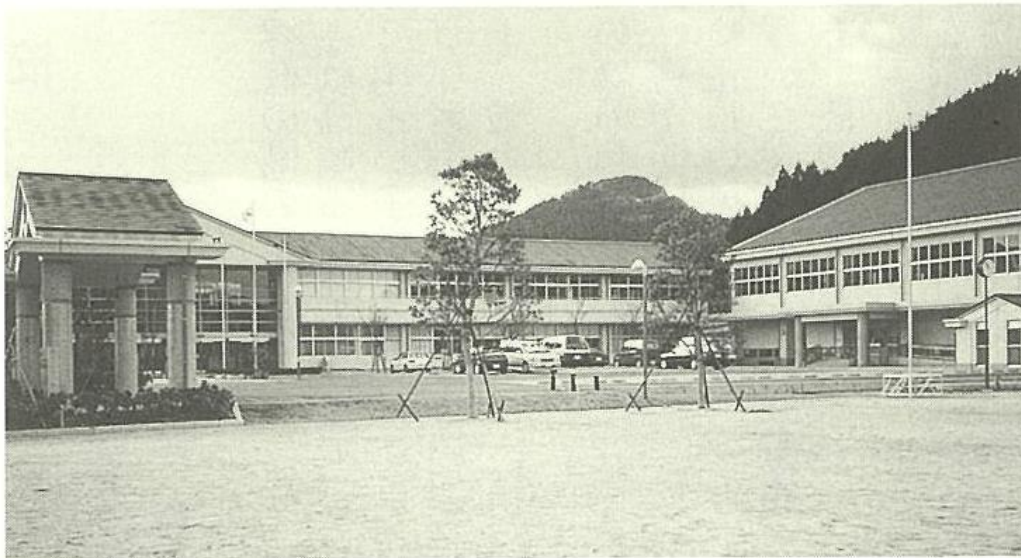


(さっそうと華麗に一輪車運動)

## 二、波多津東小学校

波多津町筒井一―番地

☎〇九五五―二五―〇〇六四



### (1) 教育目標 (平成十年度)

心身ともに健康で創造性に富み、自ら学ぶ意欲と正しく判断して行動する実践力をもった、心豊かな児童を育成する。

① 校訓「がんばる」

② めざす児童像

- 自ら考え、進んで勉強する子
- 心豊かな思いやりのある子
- 体をきたえ、最後までやりぬく子

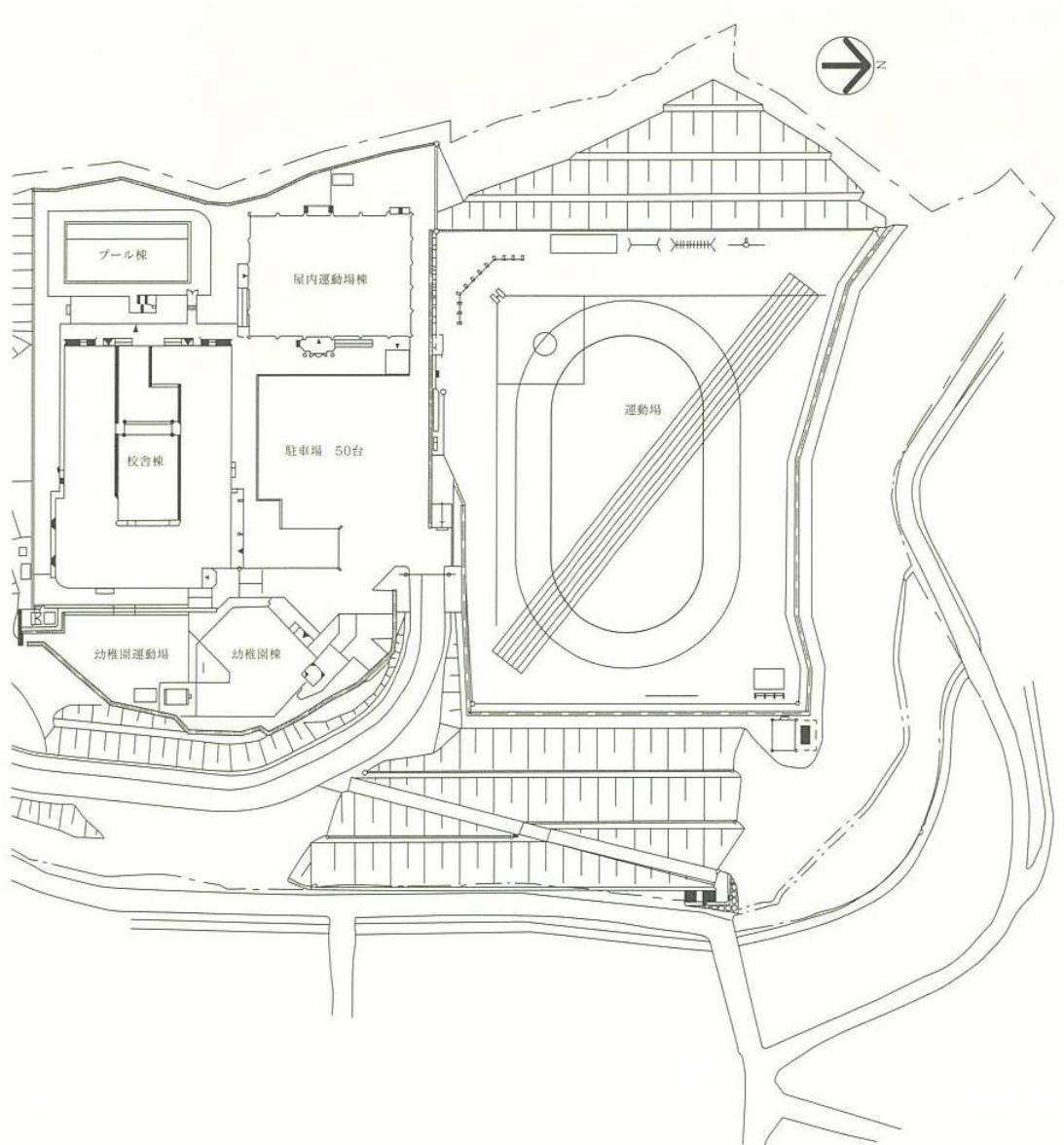
③ めざす学校像 ○教師像

- 喜び（学び）のある学校
- やすらぎ（居場所）のある学校
- 規律（生き方）のある学校

- 日々の授業を大切にする
- 児童一人一人を大切にする
- 地域社会の信頼に応える。



(2) 波多津東小学校・波多津東幼稚園配置図

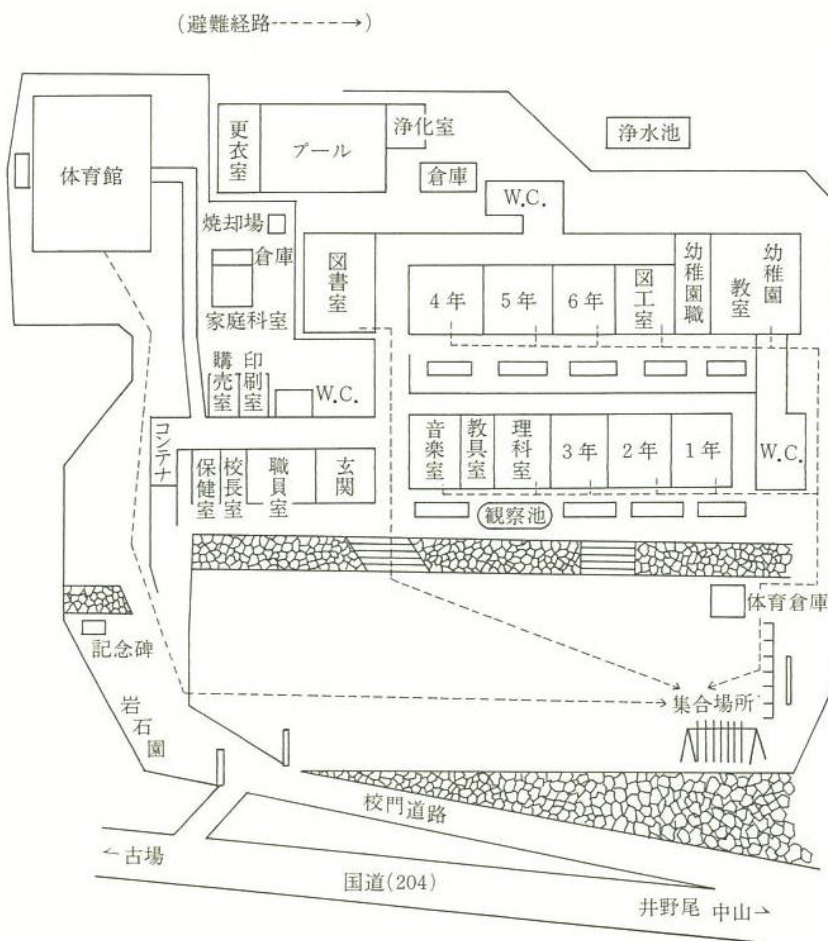




(3) 旧校舎 波多津東小学校 (平成十年三月まで)



波多津東小学校平面図



(4) 波多津東小学校沿革

1960	1959	1958	1957	1956	1955	年
35	34	33	32	31	30	年 度
同	同	同	同	波多津東 小 学 校		校 名
同	小杉東太	同	金子末松	藤田平太		校長名
7	8	8	8	8		学級数
314 (51)	326 (61)	308 (41)	286 (22)	274 (43)		児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 昭和三十年度(三月)筒井字上戸平に統合校舎敷地のくわ入れ式を行う。</li> </ul>						
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 大平小学校並に波多津小学校筒井分校の両校を統合して校名を波多津東小学校と称して発足する。僻地学校の指定を受ける。</li> <li>● 第一棟、第二棟舎落成。教育委員会法一部改正。</li> <li>● 講堂落成、水道完成、緑化指定、鉄棒・ブランコ設置、運動場整地。</li> </ul>						
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 第二棟便所及び倉庫新設、僻地校を解除し準僻地校となる。</li> <li>● 道徳の時間特設。セメント階段新設。</li> </ul>						
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 運動場金網新設、第二棟便所廊下設置、自転車置場新設、理科振興法適用、テレビ新設。</li> </ul>						
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 図工科教育研究県指定。</li> </ul>						
同	同	同	同	今村守屋		校 医
同	同	同	同	松下常太郎		育友会長

1967	1966	1965	1964	1963	1962	1961	年
42	41	40	39	38	37	36	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
吉田 新	同	同	同	藤森力造	同	浦川寅三	校長名
6	6	7	7	7	7	7	学級数
227 (39)	255 (34)	244 (50)	253 (49)	256 (43)	275 (60)	289 (50)	児童数 (卒業生数)
主 要 沿 革							
● 校内水道管配管工事、東側石垣工事。	● 子ども信用組合大蔵大臣表彰、理科室建設(波小旧校舎払下げ)。	● 岩石園設置、校舎塗装。 ● 十周年記念事業、校門道側溝工事、湯沸場拡張工事。	● 給食共同調理場(センター落成) ● 水源地整備工事、校門移転、第一、二棟間土上げ工事、石垣つき。	● 藤棚架設、校地東側通路完成。管理棟北側石垣つき。 ● 井野尾駐在所を市より払下げ、体育倉庫膳写室として建築。 ● 校名標柱建設、理振法の適用を受ける、茶園作る。	● 管理棟舎便所及屋根樋、校旗制定新調、ジャングルジム設置。 ● 全国花一杯運動並に環境緑化表彰。	● 講堂渡廊下落成、管理棟舎新築落成、図工科研究発表、鼓笛隊編成。	
同	同	同	同	同	同	泉田行男	校 医
吉川仙吉	同	松尾三次郎	同	谷崎 清	同	同	育友会長

1974	1973	1972	1971	1970	1969	1968	年
49	48	47	46	45	44	43	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
杉山熊夫	同	市丸定雄	同	同	向 大進	同	校長名
6	6	6	6	6	6	6	学級数
98 (15)	118 (31)	136 (33)	154 (31)	169 (36)	195 (44)	220 (39)	児童数 (卒業生数)
<p>● 校門道舗装、カラー親テレビ購入、プール周辺の緑化、理科教室努力校入賞（ソニー）。</p> <p>● 水源ボーリング試掘、プール新設、玄関火災報知器新設。</p> <p>● ピアノ購入、運動場排水溝新設、子ども信用組合表彰。</p> <p>● 幼稚園運動場造成校門道路配水溝工事、教室照明新設。</p> <p>● 運動場及び遊具施設設備完了（十五周年記念事業）。</p> <p>● 県委嘱小さな学校研究発表、学校保健優秀校県表彰。</p> <p>● 学校裏山購入、市指定国語教育研究発表、育友会県P表彰。</p> <p>● 波多津東幼稚園開設（理科室を幼稚園舎とする）校長兼任。</p>							
同	同	今村信夫	同	同	同	同	主 要 沿 革 校 医
同	同	同	同	同	同	同	育友会長



1981	1980	1979	1978	1977	1976	1975	年
56	55	54	53	52	51	50	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
同	中島初雄	同	田中 照	牧瀬 孝	同	同	校長名
6	6	6	6	6	6	6	学級数
132 (23)	135 (21)	127 (11)	116 (14)	106 (13)	107 (23)	102 (19)	児童数 (卒業生数)
<p>● 校舎内配線工事、校舎東側、側溝工事、水道制御装置移動工事。</p> <p>● 電子オルガン購入、プール漏水修理(市費十四万四千円)</p> <p>● プール金網張替、運動場防球ネット設置、校舎トタン塗装替。</p> <p>● 幼稚園舎拡張工事、一九五万円(市費)校門玄関道舗装。</p> <p>● 幼稚園坂道舗装工事、百葉箱取替。</p> <p>● 学校園、学級園整備、水道施設完備(市費二三四万四千円)。</p> <p>● 開学百周年記念事業、(記念碑三五万記念誌発行二十万、寄付約二七〇万)</p> <p>● 共同アンテナ受信施設新設。</p> <p>● 市小さな学校研究発表会、大平小百周年、波多津東小二十周年記念事業推進。</p>							
同	同	同	同	同	同	小島 京	主 要 沿 革 校 医
田中茂雄	市丸儀一	田中憲男	同	同	長谷川丈夫	同	育友会長

1988	1987	1986	1985	1984	1983	1982	年
63	62	61	60	59	58	57	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
一丸 進	同	松尾 亘	同	樋渡昭吾	同	松本武明	校長名
6	6	6	6	6	6	6	学級数
102 (17)	102 (19)	107 (19)	105 (19)	117 (25)	122 (23)	129 (22)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 印刷室設置、音楽室電灯取付、プール濾過器修理。</li> <li>● 水道ポンプ周辺道路工事、二棟舎小便所改造。</li> <li>● 体育館敷地測量、放送室設置、体育倉庫改装。</li> </ul>							主 要 沿 革
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 放送施設を改善する。遊具塗装。</li> <li>● 台風十二号により破損のため「がんばれ波東小」新設。</li> <li>● 管理棟舎南側窓改良(アルミサッシ)。</li> <li>● 職員室、各教室、照明灯増設、花壇設置、飼育舎新設。</li> </ul>							
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 雨水受樋修理。</li> <li>● 一輪車購入(四九台)第一棟東側、玄関東側、側壁全面補修。</li> </ul>							
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 第一棟東側足洗場新設、体育館建設(九、四四六万円)</li> <li>● 体育館落成、家庭科教室新設、上水道貯水タンク屋根取り替え。</li> </ul>							
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 体育館建設決定、体育館敷地造成着工、講堂解体。</li> <li>● 体育館建築着工。</li> </ul>							
同	同	同	同	同		同	校 医
同	古川重利	古川政弘	同	同	畑山 学	同	育友会長



1995	1994	1993	1992	1991	1990	1989	年
7	6	5	4	3	2	平成元年	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
同	北原利之	同	古川隆治	同	森戸吉昭	出雲悠司	校長名
6	6	6	6	6	6	6	学級数
121	115	114	105	109	94 (11)	99 (18)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 市連P委嘱「育友会現地研修会」研究発表会</li> <li>● 校舎、園舎建設委員会発足</li> <li>● 県教委へき地巡回指導訪問</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● コピー機購入</li> <li>● 「特別活動」研究発表会 (九州へき地教育研究大会会場)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 卒業記念植樹(ハナミツキ)</li> <li>● 市教委研究委嘱「特別活動」二ヶ年</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● スポーツクラブ結成</li> <li>● 「入権の花運動推進校」指定</li> <li>● 「愛鳥モデル校」指定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 卒業記念園造成</li> <li>● 「人権の花運動推進校」指定</li> <li>● 「愛鳥モデル校」指定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 印刷機新規購入</li> <li>● 台風十七号、十九号襲来、プール監視小屋倒壊、屋根瓦被害</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 東便所改装。</li> <li>● 一輪車練習コース完成。</li> <li>● 校門柱建立。</li> <li>● 下学年教室サッシ窓取り付け。</li> <li>● プール機械室床改修、同排水溝新設</li> <li>● 下学年手洗い場新設</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	同	同	同	同	校 医
古川政記	同	高田貞金	井本睦美	同	市丸久吉	小田正則	育友会長

1998	1997	1996	年
10	9	8	年 度
同	同	同	校 名
同	土井伸亜	同	校長名
6	6	6	学級数
114	112	121	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 旧校舎お別れ式</li> <li>● 新校舎に移転、開校</li> <li>● 新校舎落成式(十月二十日)(総事業費十八億四千万円)</li> </ul>			主 要 沿 革
<ul style="list-style-type: none"> <li>● ネパールの人との交流会</li> <li>● (愛鳥モデル校指定最終年)</li> <li>● 実のなる木十本植樹。</li> </ul>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>● ネパールの人との交流会開催</li> <li>● 新校舎用地造成起工式</li> <li>● 卒業記念植樹「実のなる木」二十本</li> </ul>			
同	同	同	校 医
同	松下裕慈	同	育友会長

大平小学校沿革

1890	1889	1886	1885	1883	1875	年
23	22	19	18	16	明治8	年 度
同	同	三岳小	同	同	大平小	校 名
同	同	同	同	不明	富田東二工門	校長名
同	同	同	同	同	不明	学級数
同	同	同	同	同	不明	児童数 (卒業生数)
主 要 沿 革						
● 十月小学校令改正、(教育勅語)発布。	● 大岳村となる。	● 廃校となり畑津、内野、馬蛤潟新田、煤屋、辻、浦、六か村の設立に係る三岳小学校に合併して同校の板木分教場となる。	● 板木、筒井の両村へ各校舎を建設し板木を本校とし筒井を分教場とする。	● 暴風のための校舎破損する、教場を二部に分け一つは板木田嶋神社一つは筒井猿田彦神社に仮教場を設けて教授する。	● 佐賀県第三十六区第八小区公立大平小学校と称し、中山、主屋、津留、板木、田代、井野尾、筒井、木場の八か村立にして校舎を井野尾村に建設し初等小学科を教授する。	● 学校創立。
						校 医
						育友会長

1901	1900	1897	1895	1894	1893	1892	年
34	33	30	28	27	26	25	年 度
波多津 尋常小	同	同	同	同	同	大 平 尋常小	校 名
同	中山豊次郎	池田好実	同	同	山本元太郎	坂本吉兵衛	校長名
3	2	1	2	2	2	2	学級数
129 (26)	79 (8)	43 (7)	77 (7)	61 (4)	37 (5)	29 (1)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 校名を波多津尋常小学校と改称する。</li> <li>● 特別学級設置認可。一学級を付設して教授する。</li> <li>● 小学校令改正の結果、尋常科四か年の義務教育施行。</li> <li>● 十月十二日学級数、一学級となる。</li> <li>● 板木に新校舎落成し移転する。</li> <li>● 本校区域内の筒井、木場、を三岳尋常小学校の区域に入れ筒井分教場は同校の分教場とする。</li> <li>● 学制改正の際三岳小学校より分離して尋常小学校を設置し大平尋常小学校と称し二学級を編成する。</li> </ul>							主 要 沿 革
							校 医
							育友会長

1915	1914	1913	1912	1908	1903	1902	年
4	3	大正2	45	41	36	35	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
手塚憲寿	井手政市	同	同	同	同	同	校長名
3	3	3	4	4	3	3	学級数
105 (22)	117 (15)	107 (18)	108 (22)	96 (5)	118 (22)	128 (29)	児童数 (卒業生数)
		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 職員住宅新築工事及び落成。</li> <li>● 一学級減、三学級となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教室の模様替工事を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学制改正義務教育年限延長により尋常科第六学年までを置き四学級編成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 特別学級を廃止する。教育評価甲、乙、丙となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 裁縫科が加設される。</li> </ul>	主 要 沿 革
							校 医
							育友会長

1931	1929	1927	1924	1923	1922	1919	年
6	4	昭和2	13	12	11	8	年 度
同	同	同	同	同	同	同	校 名
原田徳之助	小田 実	渡辺俊一	西原守太郎	同	北川愛一郎	川原田仁八	校長名
3	3	3	3	3	3	3	学級数
137 (25)	124 (21)	124 (19)	114 (17)	106 (13)	107 (21)	99 (21)	児童数 (卒業生数)
	● 体育倉庫を新設する。	● 西松浦郡教育会主催通俗講演会開催。 ● 手工科が架設される。		● 桑園新設	● 運動場拡張工事、(一六〇坪を三五〇坪に)架橋落成。		主 要 沿 革
							校 医
							育友会長



1946	1944	1942	1941	1939	1938	1934	年	
21	19	17	16	14	13	9	年 度	
同	同	同	波多津 第二国民 学校	同	同	同	校 名	
北川吉夫	坂井徳次郎	松尾竹一	同	吉田博行	小野海造	畠山寿雄	校長名	
4	3	3	3	3	3	3	学級数	
138 (25)	130 (25)	123 (21)	117 (18)	115 (18)	124 (25)	131 (21)	児童数 (卒業生数)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学級数増加、四学級とする。</li> </ul>								主 要 沿 革
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 国民学校令実施と共に校名を波多津村第二国民学校と改称する。</li> </ul>								
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 佐賀県教育会囑託「塾風を復興した農山村式の複式教育に関する教育研究発表会」開催。</li> </ul>								主 要 沿 革
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 公民学校教室兼講堂として建坪三八坪増築。</li> <li>● 同時に奉安庫設置。</li> </ul>								
							校 医	
							育友会長	

1954	1953	1951	1950	1949	1948	1947	年
29	28	26	25	24	23	22	年 度
伊万里市立大平小	同	同	大平小	同	同	波多津第二小	校 名
同	藤田平太	重松太郎	金子武美	江口高治	同	原田吉之助	校長名
6	6	6	6	6	6	5	学級数
122 (16)	108 (21)	126 (13)	123 (20)	122 (26)	165 (20)	136 (23)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 町村合併により伊万里市立となる。学校統合問題起こる。</li> <li>● 運動場拡張工事第一期終了。電話開通。</li> <li>● 水道施設完了。</li> <li>● 校名を波多津村立大平小学校と改称する。</li> <li>● 学級増加許可、全単式六学級となる、子供銀行発足。</li> <li>● 国民学校を改廃し小学校教育実施、校名変更、育朋会組織。</li> <li>● 波多津村立波多津第二小学校と改称する。教育後援会組織。</li> </ul>							主 要 沿 革
							校 医
							育友会長

1955 30	年 年 度
同	校 名
同	校長名
6	学級数
143 (27)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 新校地第一棟建築、第二棟建築。</li> <li>● 三十年三月統合に伴い学校閉鎖。</li> </ul>	主 要 沿 革
	校 医
	育友会長

筒井分校沿革

1890	1886	1885	1875	年
19	18	16	明治8	年 度
三岳小 筒井分 教場	大平小 筒井分 舎	大平小 筒井 仮教場	大平小	校 名
同	同	不明	富岡東二エ門	校長名
				学級数
				児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 大平小学校が三岳小学校と合併したため三岳小学校筒井分教場と改称する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 筒井と木場の堺に校舎を新築し大平小学校筒井分校と改称する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 台風により大平小学校舎が倒壊したため猿田彦神社に仮教場を設け大平小学校筒井仮教場とする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学校創立</li> <li>● 創立当時は、佐賀県第三十六区第八小区公立大平小学校と称し下等科を教授する。後初等科及中等科を教授する。</li> </ul>	主 要 沿 革
				校 医
				育友会長

1908	1900	1899	1896	1894	1892	1890	年
41	33	32	29	27	25	23	年 度
同	同	波多津尋常 小井場分教場	波多津尋常 小井場分教場	三岳小井 分教場	大平尋常 小井分舎	同	校 名
市原 帛 蔵	桜井 清	岩野海光	同	脇山浪造	坂本吉兵衛	同	校長名
同							学級数
(2)							児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 従来修業年限尋常科四か年(義務)高等科四か年(任意)を勅令四十二号を以って尋常科六か年(義務)高等科二か年(任意)と改められる。</li> <li>● 小学校令改正により義務教育実施(四か年)高等科(一、二、三、四年の自由修学)</li> <li>● 波多津尋常高等小学校筒井分教場と改称し一年〜四年を収容する。</li> <li>● 波多津尋常小学校筒井分教場と改称する。</li> <li>● 筒井、木場の両集落は三岳小学校区に編入され三岳小学校筒井分教場と改称し一年〜四年を収容する。</li> <li>● 波多津尋常小学校筒井分教場と改称する。</li> <li>● 学制改革にあたり板木、筒井の両分舎は三岳小学校より分離して大平尋常小学校と称し同校の筒井分舎となる。</li> <li>● 十月小学校令改正(教育勅語)。</li> </ul>							主 要 沿 革
							校 医
							育友会長

1948	1947	1944	1941	1916	1915	1913	年
23	22	19	昭和16	5	4	大正2	年 度
同	波多津第一 筒井分 教場	同	波多津第一 国民学校 筒井分教場	同	同	同	校 名
同	山本登一	相川伊三	田中繁太郎	小杉定治	山崎初太郎	百島 郁	校長名
4	4	同	同	同	同	同	学級数
(24)	(21)	(10)	(11)	(9)	(9)	(9)	児童数 (卒業生数)
主 要 沿 革							
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 運動場新設並通学道完成、祝賀式、大運動会挙行。</li> <li>● 学制改革により波多津村立波多津第一小学校筒井分教場と改称する。一年々六年まで収容し四学級編成となる。</li> <li>● 福田国次先生頌徳碑建立除幕式。松尾一次(伊万里)より二宮金次郎陶像の寄贈。</li> <li>● 学制改革により波多津第一国民学校筒井分教場と改称する。</li> <li>● 筒井分教場の費用は本校に合併する。</li> <li>● 筒井字磯道に筒井分教場新校舎及び職員住宅を新築し移転する。落成式を行う。総工費二千七拾五円、全村負担。</li> <li>● 従来久しく筒井、木場の界に分教場を設け尋常一、二、三、四学年を収容してきたが公に認可を得従来の校舎を仮校舎とし正式に筒井分教場を設立した。校費は独立編成。</li> </ul>							
							校 医
							育友会長



1955	1953	1950	1949	年
30	28	25	24	年 度
同	同	波 多 津 小 学 校 筒 井 分 校	同	校 名
同	金子武美	瀬戸貞治	同	校長名
6	6	5	5	学級数
(16)	(8)	(14)	(22)	児童数 (卒業生数)
主 要 沿 革				
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 統合のため分校を閉鎖する。(三十一年三月)</li> <li>● 学級増加、六学級編成となり複式学級は改称される。</li> <li>● ピアノ購入、(木場、筒井区にて)電話施設、校庭遊具を整備充実する。</li> <li>● 新教育実践により波多津村立波多津小学校筒井分校と改称する。</li> <li>● 五学級編成となり複式学級は、一学級となる。(総工費八〇万円)。</li> <li>● 三教室一棟、渡廊下を増築、玄関を改修し落成式挙行する。</li> </ul>				
				校 医
				育友会長

## 校 歌

中原勇夫 作詞（佐大）

川本久雄 作曲（東大）

### 1、朝あけわたる 三岳とともに

かがやくいらか 楽しい園

窓につどいて呼ぶはなに まことの華（はな）

ぼくも わたしも 波多津東小学生

### 2、声もわきたつ 平の草木

きたえた体 若い心

大地をふみて呼ぶはなに 働く庭

ぼくも わたしも 波多津東小学生

### 3、星は七彩 わがふるさとの

清い灯 まどかな夢

結ぶのぞみに呼ぶはなに 栄えの日本

ぼくも わたしの 波多津東小学生

### 三、波多津中学校

波多津町辻二九七九番地

☎〇九五五―二五―〇〇二四



#### (1) 教育目標（平成十年度）

「二十一世紀に生きる個性豊かな生徒の育成」

一人ひとりが、豊かな人間性を培い、個性と能力を伸ばしながら、生涯にわたって自ら学ぶ意欲を養い、国際的な視野に立ち、二十一世紀に生き、郷土ならびに国家のために貢献出来る、心身ともにたくましい生徒を育成する。

#### ① 生活信条と期待する生徒像

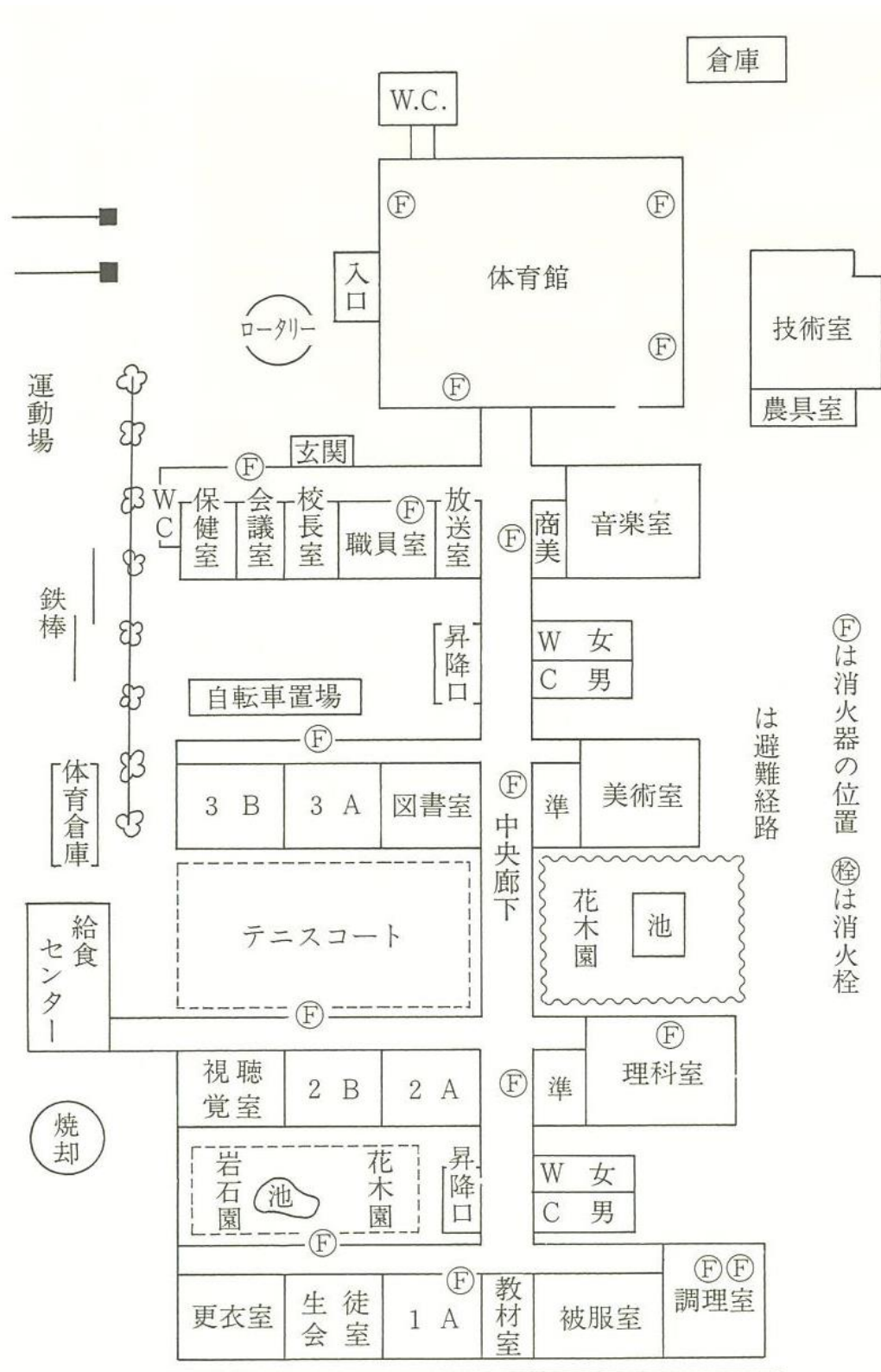
●明朗 ●積極 ●徹底

#### ② 学校像・教師像

●学校像 ア、意欲 イ、個性と能力の伸長 ウ、自立性 工、整頓 オ、勤労と礼儀

●教師像 ア、使命感 イ、公平な愛情 ウ、健康で研修 工、協力 オ、服務規律

(2) 波多津中学校平面図



(3) 波多津中学校沿革

1949	1948	1947	年
24	23	22	年 度
波多津村立 波多津中学校	同	波多津村立 波多津中学校	校 名
同	同	田中時次郎	校長名
9	7	5	学級数
327 (111)	270 (47)	208 (23)	児童数 (卒業生数)
主 要 沿 革			
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教育基本法・学校教育法公布(3・31)</li> <li>● 学校教育法施行規則公布(5・22)</li> <li>● 中学校教育後援会役員会を開催し波多津中学校育友会と改称し新発足する。(1・29)</li> <li>● 西松浦郡教組囑託「社会科研究発表会」を当校において開催する。(2・27)</li> <li>● 中学校敷地選定特別委員会(委員6名)を開催し特別選定にあたる。(4・22)</li> <li>● 敷地選定委員会を開催する。(1・8)</li> <li>● 議第一号波多津中学校校地設定の件について提案「波多津中学校校地を波多津村大字辻中倉に設定する。」</li> <li>● 右原案通り可決する。</li> <li>● 但し、一か月後・変更陳情あり。当局、善処することになる。</li> <li>● 学務委員会の開催をする。(仮教室設置増築に関する会議を開き、分教室に二教室設置することに決定し直ちに着工する。(7・25)</li> <li>● 仮教室二教室竣工・九月一日より二C・一Bを収容する。本校五教室、分室四教室計九教室を設置する。(8・25)</li> </ul>			
同	同	井手猪平太	校 医
同	同	前田末太郎	市(町)長
同	同	長谷川宝助 田中亀次 原口勢定 古崎治	学務委員 教育委員
同	松尾 茂資	教育後援会長 松尾茂資	育友会長



1952	1951	1950	年
27	26	25	年 度
同	同	同	校 名
梶原鎮雄	瀬戸貞治	山本登一	校長名
9	9	9	学級数
282 (108)	307 (106)	325 (106)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 中学校起工式(4・17)</li> <li>● 第二期建築工事 一四一五坪七六五万円(3・11)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 県教育庁より敷地決定関係者来村(5名)実施調査と査察を実施する。(4・253)</li> <li>● 中学校敷地整地工事入札一、二八七、〇〇〇円で神陽建設(佐賀市赤松町 森永時雄氏)に決定。(10・9)</li> <li>● 中学校校舎設計につき打合せ・設計請負金一三〇、〇〇〇円(伊万里町音成正氏)で決定(11・5)</li> <li>● 第一期工事建築請負(四八〇坪)七六〇万円筒井、田中儀左工門氏、代表森野嘉市氏(2・27)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 中学校敷地問題協議会(4・4526・3・7)37回開かれる。</li> <li>● 「敷地問題はその決定を白紙をもって県や教育長に一任する。」条件として村民は関与しないことにする。(3・7)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	校 医
同	松尾加助	同	市(町村)長
酒谷 久雄 松尾 茂資 福地 道雄	同	同	学務委員 教育委員
同	同	藤本東三郎	育友会長



1953	1954	1953	年
30	29	28	年 度
同	伊万里市立 波多津中学校	同	校 名
瀬戸貞治	同	同	校長名
7	8	9	学級数
314 (112)	298 (82)	284 (89)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 県緑化推進委員会より緑化指定校に委嘱される。(12・21)</li> <li>● 31・1・19)</li> <li>● 県教委懸賞論文入選・題目「教育課題設定のための郷土調査」</li> <li>● 図書館法に基づく補助金内示(六万円)三〇〇冊購入(7・26)</li> <li>● 県指定社会研究発表会(於佐賀)(11・21)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 伊万里市に合併の為校名変更</li> <li>● 昭和二十九年より二か年間「改定に伴う社会科教育」の研究指定校として県境を委嘱する。(県教委)(5・19)</li> <li>● 校歌制定(作詞 中島哀浪氏・作曲 川本久雄氏)(30・1・27)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 中学校移転(12・21)</li> <li>● 理振法に基づく理科整備(二九〇、〇〇〇円)(29・1・16)</li> <li>● 中学校新築落成式(29・3・20)</li> <li>● 校旗制定(3・20)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	校 医
同	(市長)橋口四郎	同	市(町村)長
副島 元市 徳永 正 内山 竹四 草崎トキ工 田中 道次 教育長 川崎 文次	湖島 元市 近藤 眞作 内山 竹四 前田 仙次 川崎 文次 高田 好次 尾崎 茂資 山口 林 橋口 直巳 神 松本 千代作	松尾 茂資 福地 道雄	学 務 委 員 教 育 委 員
辻 寛兵衛	同	同	育友会長

1959	1958	1957	1956	年
34	33	32	31	年 度
同	同	同	同	校 名
同	須古将宏	同	同	校長名
8	7	7	7	学級数
289 (105)	287 (108)	310 (96)	307 (98)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 産業教育研究発表会を開催(10・5)</li> <li>● 環境緑化優良校として佐賀県知事・読売新聞社より表彰(35・3・5)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 産業教育第一年中間研究発表会(2・17)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 水道施設完了(5・27)</li> <li>● 産業教育について文部省の指定を受く(6・27)</li> <li>● 健康優良生徒市内第一位(7・13)</li> <li>● 図書館コンクール参加(努力賞として表彰)県教委より(11・1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 山林購入決定、学校借用成立(農協購入使用樹中学へ移管)(4・4)</li> <li>● 産業館落成式(9・19)</li> <li>● 柑橘園開墾完成(2・10)</li> <li>● 製茶室完成(3・31)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	同	校 医
同	橋口四郎	同	同	市(町村)長
同	同	松尾 加助 草崎トシエ 副島元市教育長 山崎重雄 池田武良太 徳永山崎 松尾池田西田 草崎トシエ	副島元市教育長 山崎重雄 松尾池田西田 草崎トシエ	学務委員 教育委員
同	福地道雄	田原善次郎	同	育友会長

1963	1962	1961	1960	年
38	37	36	35	年 度
同	同	同	同	校 名
同	同	藤田平太	富永初市	校長名
9	9	9	8	学級数
418 (145)	412 (130)	393 (110)	317 (72)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 波多津町小・中学校給食促進委員会結成(8・21)</li> <li>● 技家工作室増築(3・30)</li> <li>● 運動場拡張敷地購入(2・20)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 進路指導後援会発表(12・6)</li> <li>● 市教委委嘱英語科の研究発表会(12・4)</li> <li>● 運動場排水工事(労力地元奉仕)(8・6、8・10)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 生徒の標準服制定(2・25)</li> <li>● 自転車置場増築完成(7・23)</li> <li>● 第一回文部省全国学力調査を受く(10・23)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 講堂・玄関補修工事完成(5・31)</li> <li>● 中庭用水池工事完成(8・30)</li> <li>● 子ども組合大蔵大臣・日銀総裁より表彰を受く(12・1)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	同	校 医
同	山口正次	同	同	市(町村)長
同	池田 武 教育長 西田 良太 内山 守人 草崎トキ工 松尾 加助 山崎 重雄	同	池田 武 加助太 松尾 加助 良大工 西田 草崎トキ工	学務委員 教育委員
同	渡辺勝治	同	古賀徳助	育友会長

1966	1965	1964	年
41	40	39	年 度
同	同	同	校 名
同	同	小杉東太	校長名
9	9	9	学級数
376 (124)	394 (140)	398 (133)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 昭和四十一年度学校保健統計調査実施校に指定する。 (文部省)(4・1)</li> <li>● 昭和四十一・四十二年度スポーツテスト(運動能力テスト)の実施校に指定される。(4・9)(県教委)</li> <li>● 鼓笛隊を編成する。(9・27)</li> </ul>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 蜜柑園購入(8・22)</li> <li>● 角力大会(市中体連)に団体優勝する。(7・17)</li> <li>● 健康優良校(歯科)として伊万里市一位となる。(6・4)</li> </ul>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 波多津町学校給食センター落成(9・2)</li> <li>● 運動場拡大のため水田買収(12・26) (高森盛右衛門氏 所有地一二四、六四坪 二十二万円)</li> <li>● 県学校保健会より表彰をうく。優秀校として。(1・17)</li> </ul>			
同	同	小島 京	校 医
山口正次	(市長)山口正次	同	市(町村)長
同	同	松尾 加助 池田 武 内山 守人 草崎トキエ 水上 房代	学務委員 教育委員
同	同	同	育友会長

1970	1969	1968	1967	年
45	44	43	42	年 度
同	同	同	同	校 名
小杉東太	野村寿男	同	藤本力造	校長名
10	9	9	9	学級数
314 (116)	312 (100)	337 (121)	352 (130)	児童数 (卒業生数)
主 要 沿 革				
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 産振法指定・施設・設備費を受く。(11・30)</li> <li>● 特殊学級新設(教室改造)(9・30)</li> <li>● 楽焼場施設完了(3・10)</li> <li>● 子ども信用組合表彰(3・4)(農林中央金庫理事長)</li> <li>● 市教委委嘱数学研究発表(11・17)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 運動場拡張工事着工(5・22)</li> <li>● 工事費(市二十三万円・育友会十、五万円他)</li> <li>● 右完工(10・22) 落成式(10・22)</li> <li>● 明治百年記念式(10・23)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 給食センター・内部施設拡充(9・8)</li> <li>● 子ども信用組合県知事より表彰を受く。(11・25)</li> <li>● 第二、第三棟普通教室点燈(3・20)</li> </ul>		
同	同	同	同	校 医
竹内通教	同	同	同	市(町村)長
同	同	松尾池田 加助武 荒木上教育長 月房代重雄	松尾池田 加助武 荒木上教育長 月房代重雄	学務委員 教育委員
松下用助	同	同	同	育友会長



1974	1973	1972	1971	年
49	48	47	46	年 度
同	同	同	同	校 名
市丸定雄	原田八郎	同	同	校長名
7	7	8	9	学級数
229 (79)	245 (86)	262 (99)	283 (96)	児童数 (卒業生数)
主 要 沿 革				
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「ベルのない学校」へ発足(50・1・8)</li> <li>● 体育館倉庫バックネット、鉄棒・砂場新設(10・30)</li> <li>● 国道二〇四号改修に伴う運動場造成工事完成(9・30)</li> <li>● 国道二〇四号改修に伴う運動場拡張工事に着工する。(49・1・25)</li> <li>● 波中スポーツクラブ発足する。(6・17)</li> <li>● 火災報知設備完了(4・23)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学級編成八学級(特殊学級一を含む)(4・1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 運動場金網工事(9月)</li> <li>● 少年赤十字へ全員加盟(7月)</li> <li>● 子ども信用組合大蔵大臣賞を受く。(10月)</li> </ul>		
同	同	同	同	校 医
同	同	同	同	市(町村)長
小島 猛司 小杉マツエ 荒木 月秋 世戸 常徳 江口 高浩 教育長 山崎 重雄	小島 猛司 小杉マツエ 江口 高浩 教育長 山崎 重雄	同	池田 武 荒木 月秋 小島 猛司 水上 房代 江口 高浩 教育長 山崎 重雄	学 務 委 員 教 育 委 員
同	同	野口義一	同	育友会長



1977	1976	1975	年
52	51	50	年 度
同	同	同	校 名
田中良雄	同	同	校長名
5	7	7	学級数
157 (49)	183 (68)	200 (81)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 文部省・県市教委より二ヶ年間生徒指導推進校として委嘱される。(4・1)</li> <li>● 音楽室用ピアノ購入(9・7)</li> <li>● 固定バスケット台購入(11・22)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 通学道路舗装工事竣工(8・30)</li> <li>● 産振法適用さる。(6・20)</li> <li>● 文部省指定学校保健統計調査実施校に指定さる。(51・4・20)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 校舎裏山崩防止整備工事竣工(12・9)</li> <li>● 放送機購入・放送室整備(10・28)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	校 医
同	同	同	市(町村)長
世戸 常德 吉永栄一郎 古藤 勝彦 教育長 田尻 徳磨 藤本 満東	世戸 常德 小杉マツエ 古藤 勝彦 教育長 田尻 徳磨 藤本 満東	小島 猛司 江口 高治 瀬戸 常德 小杉マツエ 田尻 徳磨 教育長 藤本 満東	学 務 委 員 会 長
同	同	田中敏雄	育友会長

1980	1979	1978	年
55	54	53	年 度
同	同	同	校 名
同	武藤 清	同	校長名
6	5	5	学級数
132 (41)	137 (41)	148 (65)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 校門道路土堤改修(1月)</li> <li>● 屋内体育館完成(2月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ボランティア協力校(12月)</li> <li>● 体育館建設準備委員会(6月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 校歌浄書・表装(講堂・音楽室)(8・17)</li> <li>● 相談室・衝立作製(8・18)</li> <li>● 文部省・県・市教委委嘱・生徒指導研究発表会(11・2)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	校 医
同	同	同	市(町)長
田尻 徳磨 千葉 健史 古藤 勝彦 江口 和夫 吉永栄一郎 藤本 満東	世戸 常徳 吉永栄一郎 田尻 徳磨 千葉 健史 古藤 勝彦 教育長	同	学務委員 教育委員
同	同	同	育友会長

1983	1982	1981	年
58	57	56	年 度
同	同	同	校 名
同	中島初雄	同	校長名
6	5	6	学級数
146 (46)	133 (37)	137 (54)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 音楽室・美術室・理科室屋根瓦葺替え</li> <li>● 電子ファックス・輪転機購入</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 第二棟舎瓦葺替え(56・8)</li> <li>● 電子複写機購入(6・中旬)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 第一棟舎瓦葺替え(56・8)</li> <li>● 校門道路金網補修(57・3)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	校 医
同	同	同	市(町村)長
田尻 徳磨 教育長職務 吉永栄一郎 代理者 千葉 健史 日高 昇 江口 和夫	同	田尻 徳磨 江口 和夫 吉永栄一郎 教育長 千葉 健史 藤本 満東	学 務 委 員 教 育 委 員
同	田中與人	同	育友会長

1986	1985	1984	年
61	60	59	年 度
同	同	同	校 名
松本辰夫	同	高森 勤	校長名
6	6	6	学級数
156 (46)	160 (50)	147 (50)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 県・市教委委嘱「学習指導法開発研究実践校」として研究継続二 年次</li> <li>● 技術科・機械室・屋根張り替え(3・31)</li> <li>● 玄関及び体育館前庭園造成(3・31)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 雨樋工事(全校舎取替工事)完(8・19) (4・1)</li> <li>● 県・市教委より「学習指導法開発校」の研究指定を受ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 第三棟(一・二年男子用)便所排水工事(8・4)</li> <li>● 第三棟屋根瓦葺替え(8・8)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	校 医
同	同	同	市(町村)長
田尻 徳麿 村岡 一 千葉 健史 教育長 江口 和夫 黒木 淳吉	田尻 徳麿 村岡 一 千葉 健史 教育長 江口 和夫 黒木 淳吉	田尻 徳麿 江口 和夫 吉永栄一郎 教育長 千葉 健史 黒木 淳吉	学務委員 教育委員
古賀寛幸	同	同	育友会長

1989	1988	1987	年
平成元	63	62	年 度
同	同	同	校 名
同	梅谷喜久夫	同	校長名
5	6	6	学級数
137 (51)	144 (47)	164 (64)	児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 窓枠取替え(二教室)</li> <li>● 運動場夜間照明施設工事</li> <li>● 運動場西側防球ネット・バックスネット工事</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 市連P研究委囑誌上発表</li> <li>● 職員便所改築</li> <li>● 運動場放送施設設置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 運動場横辻川改修工事完成(8月)</li> <li>● 被服室畳張替工事完(5・25)</li> <li>● 県・市教委委囑「学習指導法開発研究」の発表会開催(10・30)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	校 医
同	同	同	市(町村)長
同	田尻 徳麿 北野 弥生 村岡 一 教育長 田中 照 黒木 淳吉	田尻 徳麿 村岡 一 江口 和夫 教育長 千葉 健史 黒木 淳吉	学 務 委 員 会 長
同	溝口直行	同	育友会長



1992	1991	1990	年
4	3	2	年 度
同	同	同	校 名
同	同	前田武憲	校長名
			学級数
			児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● コンピューター室完成 パソコン二十台設置</li> <li>● 第2便所改修工事(3月)</li> <li>● 蛍光灯増設工事(1―A 1―B 教室)(10月)</li> <li>● アルミサッシ窓枠工事(3―A教室、音楽室)(11月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 保冷库置場工事(7月)</li> <li>● 教室床張り替え(1―A 1―B 2―A 2―B)(6月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 体育倉庫新築工事</li> <li>● AETミスマラニーフエロン英語指導(11月)</li> <li>● 体育倉庫火災により内部半焼(11・7)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	校 医
同	同	同	市(町村)長
村岡 一 大宅 弘海 田中 照 教育長 和茂 北野 弥生 前田	同	同	学 務 委 員 教 育 委 員
柴田 茂	同	前田久年	育友会長

1995	1994	1993	年
7	6	5	年 度
同	同	同	校 名
同	前田菊男	市原康之	校長名
			学級数
			児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 県教委・市教委委嘱 学力向上推進校モデル校(英語)の指定を受ける(平成7 ～平成9 の三カ年間)(4月)</li> <li>● 簡易水洗工事(全便所)(7月)</li> <li>● ファクシミリ設置(9月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● アルミサッシ窓枠工事(図書室)(3月)</li> <li>● 第1棟舎廊下根太補強(10月)</li> <li>● 蛍光灯増設工事(音楽室、美術室、理科室、調理室、被服室)(12月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 中央廊下根太補強(4月)</li> <li>● 教室蛍光灯増設工事(図書室、3-A)(7月)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	小島 智	校 医
同	川本 明	同	市(町村)長
同	同	同	学務委員 教育委員
同	松本幸三	古川広美	育友会長

1998	1997	1996	年
10	9	8	年 度
同	同	同	校 名
同	藤井 汎	同	校長名
			学級数
			児童数 (卒業生数)
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 体験学習(コスモス、イモ植え)(5月)</li> <li>● 収穫祭(10月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 調理室床改装(8月)</li> <li>● 久光製薬よりC P 3台寄贈(8月)</li> <li>● 学力向上推進モデル校(英語)研究発表(10月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 中央廊下 蛍光灯増設工事(2月)</li> <li>● 体育館演台前田菊男前校長寄贈(3月)</li> </ul>	主 要 沿 革
同	同	同	校 医
同	同	同	市(町村)長
田中 照 岩永憲一良 大宅 弘海 教育長 川崎 静子 前田 和茂	村岡 一 川崎 静子 田中 照 教育長 大宅 弘海 前田 和茂	同	学 務 委 員 教 育 委 員
吉田正男	同	同	育友会長

伊万里市立波多津中学校せいと数及び卒業生の進路（空欄は○）

年 度	生 徒 数	卒 業 生 数	進 学	就 職	就職進学	自 営	そ の 他
S 2 2	2 0 8	2 3	* *	* *	* *	* *	* * *
2 3	2 7 0	4 7	1 0	7		3 0	
2 4	3 2 7	1 1 1	1 8	6		8 7	
2 5	3 2 5	1 0 6	2 7	1 2		7 5	
2 6	3 0 7	1 0 3	2 7	7		7 2	
2 7	2 8 2	1 0 8	2 4	1 6		6 8	
2 8	2 8 4	9 9	3 1	1 9		4 9	
2 9	2 9 8	8 2	1 7	1 0		5 5	
3 0	3 1 4	1 1 2	3 0	3 2		5 0	
3 1	3 0 7	9 8	2 1	3 9		3 8	
3 2	3 1 0	9 6	1 9	3 8		3 9	
3 3	2 8 7	1 0 8	2 4	3 8		4 6	
3 4	2 8 9	1 0 5	2 6	3 8		4 1	
3 5	3 1 7	7 2	2 5	3 8		9	
3 6	3 9 3	1 1 0	4 4	4 4		2 2	
3 7	4 1 2	1 3 0	4 1	4 9		4 0	
3 8	4 1 8	1 4 5	4 7	7 2		2 6	
3 9	3 9 8	1 3 3	4 9	6 2		2 2	
4 0	3 9 4	1 4 0	5 6	6 8		1 6	
4 1	3 7 6	1 2 4	4 5	5 5		2 4	
4 2	3 5 2	1 3 0	5 1	5 9		2 0	
4 3	3 3 7	1 2 1	6 7	4 1		1 3	
4 4	3 1 2	1 0 0	5 2	4 2		6	
4 5	3 1 4	1 1 6	6 0	5 0		6	
4 6	2 8 3	9 6	6 7	2 7		2	
4 7	2 6 2	9 9	6 1	3 8			
4 8	2 4 5	8 6	6 8	1 7		1	
4 9	2 2 9	7 9	7 7	2			
5 0	2 0 0	8 1	7 4	6		1	
5 1	1 8 3	6 8	6 2	6			
5 2	1 5 7	4 9	4 6	3			
5 3	1 4 8	6 5	5 8	2			5
5 4	1 3 7	4 1	4 0	1			
5 5	1 3 2	4 1	3 9	2			
5 6	1 3 7	5 4	5 2	1			1
5 7	1 3 3	3 7	3 7				
5 8	1 4 6	4 6	4 3	1	2		
5 9	1 4 7	5 0	4 6		4		
6 0	1 6 0	5 0	4 9		1		
6 1	1 5 6	4 6	4 4			2	
6 2	1 6 1	6 2	5 8	3		1	
6 3	1 4 7	4 7	4 6	1			
H 1	1 3 7	5 1	5 1				
2	1 3 1	4 6	4 6				
3	1 2 5	4 0	3 7	1	2		
4	1 3 1	4 5	4 3	1	1		
5	1 2 8	4 0	3 8	1	1		
6	1 3 6	4 6	4 5		1		
7	1 2 3	4 2	4 0		2		
8	1 2 6	4 7	4 1	4	2		
9	1 3 4	3 4	3 4				
1 0	1 4 4	4 5	4 4				1
1 1	1 4 8	5 5	* *	* *	* *	* *	* * *

\* H 1 2 生徒数 1 3 4 人

## 校 歌

作詞 中島哀浪

作曲 川本久雄

### 1、山は静かに常にあり

育て諸鳥声澄みて  
われらは学ぶ湧く水の  
汲めば日に日に新しき  
知識を共にみがきつつ  
競わむ 競わむ  
波多津中学校

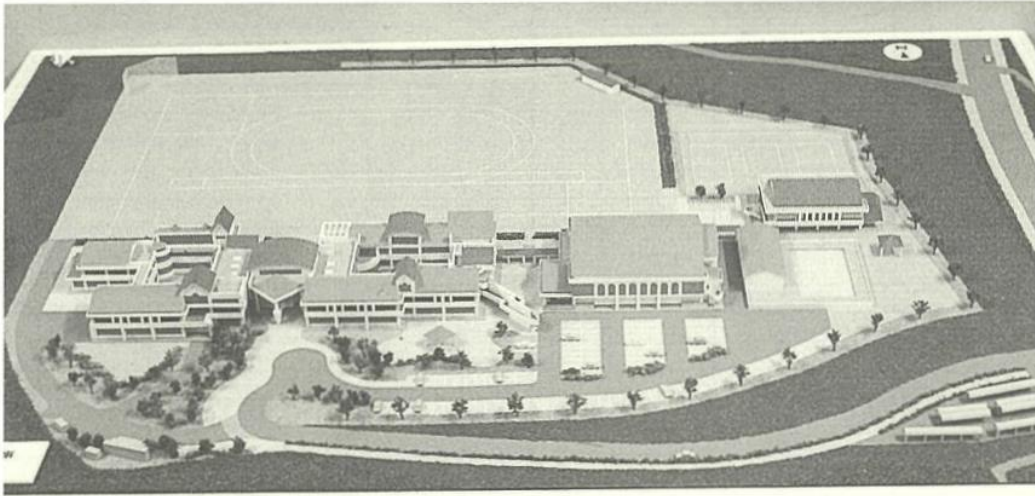
### 2、海は豊に常にあり

希望にみちて寄る波の  
われらに送る歌をきけ  
凧げばうしおも島々も  
ひとつ緑のまごころを  
修めむ 修めむ  
波多津中学校

### 3、土は光と常にあり

守れ規律を胸張りに  
われらは健し空の下  
呼べばこだまも朗らかに  
待つよ波多津の明日の幸  
鍛えむ 鍛えむ  
波多津中学校

北部中学校（仮称）（波多津中・黒川中統合）  
平成12年4月開校を目指し、校地の造成が進捗中



2000年4月の開校を目指す「中学校」の模型



## 第四節 社会教育

### 一、社会教育の歩み

社会教育が発足したのは明治十九年頃とされ、郡や町村に教育会が設置されています。会員は、学校職員や町村の各公職者を始め有職者で組織され、小学校教育の振興や町村民の社会教育が主な目的でありました。

明治三十七、八年の日露戦争後の社会情勢は、実業教育・社会教育の振興を促し、集落や町村に婦人会や青年会が設置され、教養の向上や社会奉仕などの団体活動が活発になりました。殊に第一次世界大戦後は、社会教育活動が新しい教育活動として認められ、人間形成の場は学校だけでなく、家庭や社会生活の諸分野の中にも求められてきました。

このような活動を当時は「通俗教育」と呼ばれていましたが、大正十年改めて「社会教育」と称されるようになり、文部省でも社会教育課が設置されました。

しかし、昭和六年の満州事変後は、社会教育の目的が帝国主義一色に塗り替えられ、特に支那事変勃発後は軍事訓練の場と化し、本来の社会教育の目的から逸脱してしまいました。

第二次世界大戦後は、昭和二十一年文部省の次官通達をもとに、同二十三年には県下全市町村に公民館が設置され、これまで学校教育の従属的な存在であった社会教育は、学校教育と並ぶ重要な地位を占め、教育環境の整備と民主化運動の第一線に立てられました。とはいっても、敗戦という空前の社会変動による大混乱の最中では、成人の学習活動の場をも失わせる状況にありましたが、公民館設置後は、ここを拠点としてようやく成人教育が行われるようになりました。

昭和四十年代に入って、社会・経済・文化の変化により社会教育の様相も変わってきました。そこで、昭和四十六年には「急激な社会構造の変化に対処できる生涯教育の在り方について」の答申によって生涯教育の重要性が説かれ、更に文部省は昭和六十三年に社会教育局を生涯教育局と改め、一層その必要性を強調しています。

### 二、青年教育

#### (1) 農業補修学校

小学校を終えた者に、小学校教育の補習と職業上の知識修得の目的で、明治の初めより青年夜学校が設けられ、小学校教員などがその指導者になっています。明治三十五年の文部省令によって実業（農業）補修学校の設立が進み、波多津村では大正四年十月に青年会が創立され、大正五年八月には各字に青年夜学会が開設されています。西松浦郡誌（大正五年調）によりますと、郡内青年会員数は、南波多村五七八名（一位）、波多津村は二四八名で第二位となっています。また、同誌（大正九年調）によりますと、波多津村団長小杉定治（波多津小学校長）、波多津東部団長川原田仁八（板木小学校長）との記事が残されています。

続いて大正六年七月に処女会の創立をみています。

大正九年には波多津実業補修学校を波多津小学校に附設し、大正十年には青年学校制度改正により、波多津公民学校と改称されるという経過を辿っています。

## (2) 青年訓練所（公民学校）

青年教育の普及発達は大正に入り急速に進み、大正三年の第一次世界大戦後は、国際的な緊迫と青年の心身の鍛錬と資質の向上を目指して、大正十五年に青年訓練所が設立されました。

## (3) 青年学校

これまでの青年教育は、実業（農業）補修学校と青年訓練所とが両立し、二重学籍を持つ者が多かったため、これを一本化し教育を一段と強化するため、昭和十年青年学校令が交付され実業青年学校が誕生、昭和十四年には「青少年二賜ハリタル勅語」が交付され、教育内容も国家主義的な色彩を強めるとともに、この青年学校を義務制とし、増産と非常即応の期待をかけています。そのため、昭和十四年九月十四日「青年学校学則変更につき申請」が当時の実業青年学校長田中繁太郎より県知事へ提出されています。

これまでの歴代の校長は小学校長が兼務となっています。

田中繁太郎 昭和八年四月

相川 伊三 昭和十九年四月 就任されています。

昭和十九年四月実業青年学校が波多津小学校より分離独立したので、専任校長として

松尾 竹一 昭和十九年四月

田中時次郎 昭和二十二年四月 就任されています。

なお、田中時次郎は昭和二十三年四月から発足した新制中学校長を一年間兼務し、二十三年四月より二十五年三月まで波多津中学校長として勤務されています。

昭和二十三年三月三十一日付をもって波多津村立波多津青年学校は廃校となり、翌四月一日より新制の波多津村立波多津中学校が発足しました。

## 三、育友会（P T A）

波多津小学校沿革史によりますと、大正六年七月に父兄会発足とありますが、その後の記録は見あたりません。

昭和二十二年の学制改革により、従来の後援団体的な父兄会に代り、学校教育は教師の力ばかりでなく、社会全体の理解と協力が望ましいということから「父母と教師の会」すなわちP T Aが昭和二十三年一月に結成されました。また、波多津中学校の記録によりますと、昭和二十二年七月十九日波多津中学校教職員後援会を設立する。会長一名（松尾茂資）委員各集落一名となっていますが、翌二十三年一

月二十九日教育後援会を波多津中学校育友会と改称しています。

活動内容としては、①会員相互の研修 ②学校行事への協力及び財政的援助 ③学校環境の整備等が主なものですが、その活動のお陰で教材教具や施設設備の充実に多大の実績が残されています。

昭和五十年頃からは、教師との連携を密にして、学級懇談や校外生活補導等も活発に進められ、健全な児童生徒の育成に成果をあげています。

#### 四、子どもクラブ

##### (1) あゆみ

戦前は各集落毎に少年団という組織があり、小学校上級生が責任者になっていました。その活動は、日曜日毎に早起会を行い、氏神様や集落集会所などの清掃、夏休みなどの長期休業中は、自主的に学習会や水泳等を実施していました。また、正月七日の鬼火焚きや十四日のもぐら打ちの行事等にも積極的に参加し、楽しい思い出をつくっていました。また、団の運営費は薪やわらび取りをして、その売り上げ金で賄うなど自主的な活動をしていました。

波多津地区の子どもクラブは、昭和二十六年波多津村婦人会で母親学級を開設し「こどものしつけ教育」に取り組んだことから十四の子どもクラブが他地区に先駆けて育成され、主として子どもの親がその世話に当たり、海水浴やキャンプあるいはスポーツなど思い思いに活動していました。その後町子どもクラブ育成会のお骨折りで町子どもクラブが発足しています。現在では事業も公民館を拠点として開催されるようになり、集落や町独自の事業のほか、市子どもクラブ連合会の主催事業にも積極的に参加しています。

##### (2) 町子どもクラブ会長名

第一代	松本 進	昭和四十九年度	第二代	栗原 定和	昭和五十五年度
第三代	原口 久幸	昭和五十六年度	第四代	田中 熊夫	昭和五十九年度
第五代	川元 國満	平成元年度	第六代	井手 睦美	平成四年度
第七代	高田 保文	平成六年度	第八代	柴田 茂	平成七年度
第九代	井手 正人	平成九年度	第十代	田中 英雄	平成十年度

#### 五、青年団

##### (1) あゆみ

青年団の沿革は随分古いようです。明治の初めから若者宿（わっかもん宿）と呼ばれるものがあり、親睦・訓練・職業修得の場として、また、集落の防災防犯の任にもあたった模様です。そこで鍛えられて初めて一人前の人間として扱われることになっていました。

大正八年郡連合青年会が組織され、大正十三年十月に大日本連合青年団の結成、同十四年四月発団式が行われ、この青年団を軍事訓練の実施期間と法定されるという経過を辿っています。

戦後は荒廃した村の復興に、特に青年団の力が不可欠とされることから、青年団の復活に全力が注がれ、昭和二十二年に民主的な新しい波多津村青年団が発足しました。

## (2) 歴代団長名

初代	塚部 勝巳	昭和二十二年	二代	古川 美年	
三代	福地 道雄		四代	栗原 定和	昭和三十年
五代	高森 智	昭和三十二年	六代	杉本 茂助	昭和三十三年
七代	高森 保	昭和三十四年	八代	松本 偵助 (旧姓井手)	昭和三十五年
九代	前川 芳郎	昭和三十六年	十代	長谷川益男	昭和三十七年
十一代	小杉 信行	昭和三十八年	十二代	藤森 邦夫	昭和三十九年
十三代	谷崎 寿昭	昭和四十年	十四代	小杉 昭俊	昭和四十一年
十五代	金子 勝利	昭和四十二年	十六代	古川 正弘	昭和四十三年
十七代	古川 俊雄	昭和四十四年	十八代	古川 重利	昭和四十五年
十九代	藤森 波男	昭和四十六年	二十代	川元 和美	昭和四十七年
二十一代	酒谷 作義	昭和四十八年	二十二代	藤森 秀喜	昭和四十九年
二十三代	水尾 敏夫	昭和五十年	二十四代	吉田 正男	昭和五十一年
二十五代	井手 豊	昭和五十二年	二十六代	井本 睦美	昭和五十三年
二十七代	田中 勝幸	昭和五十四年	二十八代	藤森 堪山	昭和五十五年
二十九代	平松 義彦	昭和五十六年	三十代	市丸 道雄	昭和五十七年
三十一代	市丸 国助	昭和五十八年	三十二代	市丸 正一	昭和五十九年
三十三代	塚本 光次	昭和六十年	三十四代	古賀 洋幸	昭和六十二年
三十五代	高森 晋	昭和六十三年			

その後町としての青年団は、会員減その他の事情で組織されていませんが、浦地区では継続活動をしています。活動内容は次のとおりです。

- 無縁墓地の清掃
- 盆の十四・十五日 初盆詣りと踊り
- 盆の十七日 浦全体の盆踊り
- 十月十七日 秋祭 山車<sup>やまこ</sup>引き

このようにして青年団の活動を絶やすまいということで頑張っています。そして、やがて再び町青年団の復活に期待をかけているところです。

浦集落青年団長

平成元年 塚本英一

平成二年 田中勝成

平成三年 吉田辰幸

### (3) 青年宿

明治時代から各集落には青年宿があり、十五歳から嫁を娶るまでは必ずそこで寝泊まりしていました。昼間は家業に従事し、夜になると宿に集まって先輩の話しに耳を傾けたり、たわいない話に打ち興じたりしてその日の疲れを癒していました。

普通のこの青年宿は、青年に理解のある家長の住む離れなどを借りていましたが、大正十五年頃には各集落に青年倶楽部が建設されています。

浦の青年倶楽部の場合は、畑津から浦へ役場が移転新築した折の廃材を利用して、大正十五年に建築されています。しかし、昭和二十年頃には老朽化も進み使用に堪えなくなりましたので、村当局と再三にわたる交渉の結果、ようやく昭和二十四年建設され、名称も青年倶楽部から新しく公民館となりました。しかし、資金面では不足を来したので、落成式を兼ね、浪曲界の花形浪曲師を呼び興行、その利益で返済しています。

## 六、婦人会

### (1) あゆみ

明治三十四年唐津の奥村五百子により婦人会が組織され、明治から大正期にかけて女性解放運動、生活改善等の運動に取り組んだのが始まりとされています。戦前は愛国婦人会、国防婦人会として銃後の守りにつとめていました。

- 昭和二十年終戦と同時に大日本婦人会解散
- 昭和二十二年十月佐賀県婦人会創立により波多津村婦人会発足
- 昭和二十六年婦人会館設立により一日一円貯金開始
- 昭和二十九年町村合併により市制発足と同時に伊万里市婦人会連合会結成
- 同年婦人会問題研究会が県単位で組織され、代表出席の要請
- 昭和三十一年新生活運動開始
- 昭和三十四年ねたきり老人へ「愛のおしめ」寄贈運動開始
- 同年北方領土返還署名運動開始
- 昭和三十五年婦人学級、消費者運動開始
- 昭和四十四年栄養改善協議会が結成され、料理教室開催
- 昭和四十六年佐賀県交通安全母の会発足に伴い、波多津町交通安全母の会を発足させ、学童や老人の交通安全、飲酒運転追放に努める。平成二年度表彰を受ける。
- 昭和五十六年婦人防火クラブ結成。三月内野クラブ、八月中山クラブ、九月木場クラブ
- 昭和六十年アフリカの子どもを救う募金活動

- 昭和六十二年婦人防火クラブ煤屋クラブ結成
- 平成四年花いっぱい運動展開、各集落に花壇設置、毎年継続事業とする。
- 平成七年佐賀県より木場へミニポンプ支給される。
- 平成九年佐賀県より筒井へミニポンプ支給される。

現在、毎月町内一斉美化作業を支部の隅々まで実地しているが、今後更に健康づくり推進とボランティア活動を通して地域の福祉につとめていきたいと思ひます。

## (2) 歴代会長名

初代	金子	フヤ	昭和五年	八代	鶴田	タイ	昭和四十五年
二代	加川	タヨ	昭和十二年	九代	井手	キヌ	昭和四十九年
三代	田中	ウタ	昭和十四年	十代	塚本	スミ	昭和五十三年
四代	小杉	ツサ	昭和二十年	十一代	川添	サトノ	昭和五十七年
五代	川内	サエ	昭和三十二年	十二代	小杉	マツエ	昭和六十年
六代	兼武	文子	昭和三十六年	十三代	前田	トシ子	昭和六十三年
七代	小杉	マツエ	昭和三十七年	十四代	長谷川	コトノ	平成四年～現在

## 七、老人クラブ

### (1) あゆみ

- 昭和三十九年 波多津町老人クラブ発足
- 昭和四十二年 山町交歓会（福島・波多津・黒川）
- 昭和四十三年 四県連合交歓会（薩・長・土・肥）  
同 明治百年記念植樹
- 昭和四十四年 老人クラブ旗制定
- 昭和四十七年 県福祉大会で知事表彰
- 昭和四十八年 老人クラブ十周年記念式典
- 昭和五十三年 金婚・米寿菊花展
- 昭和五十六年 老人クラブ旗新調  
同 筒井ゲートボール、九州大会で活躍  
同 老人クラブに同好クラブ（ふるさと・菊花・あみもの）誕生
- 昭和五十七年 波多津老人憩の家高尾山荘落成開所  
所長 第一代 多久島竜美 昭和五十七年  
第二代 川原 郁郎 昭和五十九年  
第三代 加川 周史 昭和六十一年  
第四代 池田 光宏 平成四年



第五代 岩政 国光 平成七年  
第六代 角 靖二 平成八年  
第七代 久保田 隼 平成九年  
第八代 東島 悟 平成十年～現代

- 昭和五十九年 老人クラブ二十周年記念式典
- 昭和六十年 県知事表彰
- その他 毎年研修視察・奉仕作業・スポーツ行事を実施し、会員の教養向上と親睦並びに健康増進につとめるとともに、三年毎に物故者慰霊祭を実施しています。

## (2) 歴代会長名

初代 小杉 定治 昭和三十九年  
二代 田中忠兵衛 昭和五十一年  
三代 野田庄太郎 昭和五十七年  
四代 井手 悟 平成八年～現在

## 八、体育協会

### (1) あゆみ

- 昭和二十三年四月一日 西松浦体育協会結成
- 昭和二十九年 伊万里市体育協会結成
- 昭和三十四年三月二十日 波多津町体育協会発足並びに規約制定
- 昭和三五・六年 波多津地区は県教育委員会より社会体育の研究指定を受け、二カ年にわたりバレーボールの普及に努める。

### (2) 事業内容及び活動

- 町民体育の指導奨励並びに各種体育行事の開催
- 住民の体位向上に関する調査研究
- 各種関係機関団体との連携及び競技参加の協力
- 町民体育指導者の養成

### 活動として

●陸上部・野球部・ソフトボール部・バスケットボール部・剣道部・相撲部・卓球部・バトミントン部・ゲートボール部・スポーツ青年団部の各部を設置して活動しています。

### (3) 歴代会長名

初代 吉田 町造 昭和三十四年  
 二代 松尾 團 昭和四十六年  
 三代 小杉 東太 昭和四十八年  
 四代 栗原 定和 昭和五十六年  
 五代 田中 勝利 平成三年～現在

## 九、波多津公民館

### (1) あゆみ

波多津公民館は昭和二十三年八月十日開館、同時に十四の集落公民館が分館的存在で発足しています。(伊万里市史) その後の活動は、

- 毎月の公民館月報発行、ナトコによる映画会や巡回文庫開始・村民体育大会や成人学級の開催
- 昭和二十六年から文部省委嘱により青年学級を中学専修化的に開設
- 婦人会支部例会開催による母親クラブの開設・子どもクラブの育成に努める。
- 昭和三十二年 文部省指定によるPTA活動の推進や婦人学級の推進
- 昭和二十九年 町村合併により伊万里市波多津公民館となる。
- 昭和三十五・六年の二カ年間 県教育委員会指定「社会体育」の振興に当り、全町バレーボールに取り組み楽しい町づくりを展開
- 昭和四十八年四月に建物の老朽化に伴い場所を変更し現在地に新築開館

### (2) 歴代館長名

初代 黒川 安次 昭和三十四年	十一代 池田 豊 昭和五十四年
二代 山本 登一 昭和二十六年	十二代 池田 光宏 昭和五十五年
三代 松尾 加助 昭和二十九年	十三代 栗原 幸雄 昭和五十六年
四代 渡邊 勝治 昭和三十年	十四代 松尾 義明 昭和五十七年
五代 山本 登一 昭和三十二年	十五代 幸島 重光 昭和五十九年
六代 須藤 心一 昭和三十八年	十六代 山口 源太 昭和六十三年
七代 田中 和助 昭和四十一年	十七代 金子 照夫 平成二年
八代 古川 功 昭和四十五年	十八代 高峯 敬治 平成九年
九代 市丸 光彦 昭和四十九年	十九代 馬場崎満朗 平成十年
十代 加川 周史 昭和五十三年	二十代 金子 照夫 平成十三年四～

平成十七年三月三十一日

二十一代 小杉 道雄 平成十七年四月一日～

### (3) 職員体制

館長（兼）一名・主事一名・事務職員一名（兼）・臨時職員一名 計四名

### (4) 公民館の事業（平成十年度）

- ① 公民館運営審議会（二一二千円）
  - 各種事業の企画・実施の審議
- ② 自治公民館事業
  - 自治公民館相互の連絡調整
  - 自主活動の推進
- ③ 家庭教育学級（国庫 三二二千円）
  - 北部地域家庭教育学級の推進
- ④ 伊万里塾推進事業（一九〇千円）
  - 波多津塾の推進
- ⑤ 生涯学習モデル市町村事業（三〇千円）
  - 公民館大会の開催
- ⑥ 青少年育成「すこやかさがっ子」（一〇〇千円）
  - 地域内の異性代交流
  - 自然体験活動
- ⑦ 青少年育成活動事業
  - 年間を通して健全育成運動の啓発活動と推進
  - 夜間巡回パトロール
- ⑧ 社会同和教育推進事業
  - 社会同和教育推進協議会及び研修会
  - P T A同和教育研修講座
  - 各種研修会・大会への推進員の派遣
- ⑨ 新生活運動推進協議会

### ●町生活改善規約の普及・実践

このほか、図書の貸出しと月一回の広報「はたつ館報」は継続事業としています。

これらの事業を効果的に実践するためには、自治公民館との連携を密にする必要があるので、月一回の自治公民館長会及び年二回の主事会を開き、連絡調整を図ると同時に研修の機会をもち、人間性豊かで活気ある町づくりを目指しています。

## 第五節 波多津の教育を支えた人たち

### （波多津出身の教育者で、平成十年現在故人及び遠隔地在住者だけ）

明治五年八月、太政管布告によって学制が定められました。「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す」という主旨のもとに、各市町村で小学校が設立されました。わが波多津では、明治八年九月に三岳小学校が畑津に、同じく太平小学校が井野尾に設立されました。その頃の教育者の氏名は明確な資料がありません。明治二十一年に中山の坂本吉兵衛氏が、波多津出身の教育者としては資料に記載されている最初の人です。その後優秀な人材が教育者の道を志望され、佐賀県内の教育界で活躍し多大の功績を残しました。波多津は先生のむらといわれる所以であります。出身集落別に先輩の氏名と略歴を挙げてみます。

#### 【筒 井】

●古川政次郎（明治二十二年生）明治四十三年三月佐師卒、同年四月波多津高小訓導、大正三年四月東松浦郡芳谷小、和田山小、入野小訓導昭和三年四月田野小校長、打上小校長、佐賀郡中川副小校長を最後に昭和十六年三月退職、その間教育功労顕者として県知事表彰、文部大臣表彰を受賞されました。昭和九年には文部省募集「小学校修身教科書資料文」一等当選、更に「農村の教師」や「村の学校」を出版、また民話「唐津勘兵衛」を収集して出版されました。従七位勲七等瑞宝章を受けられました。退職後は佐賀県庁地方課嘱託や「みどり園長」をつとめられました。

●松尾茂資（明治二十五年生）明治四十二年三月佐賀農卒、同年五月波多津高小准訓導、波多津尋常小訓導、波多津高小、筒井分教場、波多津農業補修学校で教鞭をとられました。教職二十四年のすべてを波多津の教育に専念し、昭和八年八月退職されました。昭和二十七年に波多津村学務委員となり、同二十九年町村合併により市教育委員を一年間つとめられました。

#### 【井野尾】

●古河 亘（明治十七年生）太平尋常小から唐津中、広島高師に進学、明治三十八年三月広島高師卒、卒業後は広島県内の旧制中学校の教諭及び校長として活躍されました。

## 【田 代】

●谷崎五太郎（明治十七年生）明治三十八年三月佐師卒、明治二十八年三月より三十四年三月まで大平尋常小准訓導をつとめた後佐師入学、卒業と同時に伊万里小訓導、大坪小を経て大正四年四月南波多尋常小校長に昇任されました。黒川小、松浦小、大坪小の校長を歴任し昭和八年三月退職されました。その間教育功労顕者として知事表彰を受賞、叙従七位勲八等瑞宝章を受けられました。

●谷崎権之助（明治二十八年生）大正七年三月佐師卒、明治四十四年四月より大正三年三月まで波多津高小准訓導をつとめた後佐師入学、卒業と同時に波多津尋常小訓導、大山小、有田小訓導を経て昭和二年四月から三年間佐賀県師範学校訓導を勤められました。昭和五年四月有田小訓導、昭和十年四月山代西第一高小校長に昇任されました。昭和十三年五月佐賀県視学となり、昭和二十一年三月終戦により退職されました。

●谷崎文雄

## 【板 木】

●加川松五郎（明治三十年生）大正五年三月唐津中卒。同年相知高小代用教員をされました。大正六年十二月より昭和三年十一月まで十一年間軍隊勤務、陸軍特務曹長で除隊、昭和五年四月から十年十月まで波多津高小の訓導をされました。その後唐津高等実業青年学校の軍事教官となり、昭和二十年八月終戦により退職されました。軍隊現役時に叙勲七等瑞宝章を受けられています。

## 【中 山】

●中山豊治郎（元治元年生）明治十三年三月鬼塚村千々賀上等小卒。明治十八年四月三岳小訓導、明治二十六年四月太平尋常小訓導、明治三十三年十一月同校校長になられました。大正三年三月退職されましたが、教職三十年間波多津の教育に尽力されました。先生の薫陶を受けた人たちによって、大正四年一月「中山先生頌徳碑」が中山入口に建立されています。

●坂本吉兵衛（明治十年生）明治二十四年三月大岳村立尋常小補習科（四年）修業、明治三十六年二月黒川第一尋常小准訓導、大坪小を経て明治四十一年四月波多津尋常小に転任され、明治四十四年三月退職されました。

●田中東吉（明治十七年生）明治三十七年三月佐師卒。同年四月より伊万里小訓導となり六年九か月後の明治四十三年十二月大川内小学校に昇任されました。その後東山代小、二里小、牧島第一小、外尾小、伊万里小の校長を歴任し、昭和七年四月伊万里公民学校長、昭和十年四月伊万里高等実業青年学校長、昭和十二年四月唐津実業青年学校長になられました。その間に第二代西松浦郡教育会長、佐賀県教育評議員の要職に就任されました。叙正七位勲六等瑞宝章を受けられています。

●田中茂助（明治二十四年生）明治三十八年三月波多津高小卒。明治四十年四月二里第一尋常小准訓導、波多津尋常小、大坪小訓導を歴任して昭和六年八月に退職されました。その後伊万里高等女学校書

記として勤務されました。

●古賀セイ（明治四十年生）大正十一年三月波多津高小卒。大正十三年五月波多津小筒井分教場勤務、昭和二年八月退職されました。昭和十七年九月より波多津第二国民学校訓導となり、二十年三月退職されました。昭和三十五年より八年間中山で保育園を経営し幼児教育に力を注がれました。

#### 【畑 津】

●中島訂治郎（明治二十年生）明治三十三年三月佐師卒、波多津出身者で第一号の佐師卒であります。明治二十七年四月より三岳小准訓導、二十九年四月佐師入学、卒業と同時に伊万里小訓導、明治三十九年八月朝鮮馬山日本小学校長として渡鮮されました。大正二年六月仁川公立高小校長、朝鮮教育会評議員となり、昭和七年三月現地で病没されました。五十四才でした。叙従七位勲七等瑞宝章を受けています。

●原田徳之助（明治二十九年生）大正七年三月佐師卒。同年四月波多津高小訓導、黒川小、大坪小、伊万里小を経て昭和六年四月波多津尋常小校長に昇任されました。南波多第二小、東山代小、大山小校長を歴任し昭和十七年七月佐賀県視学神崎地方事務所教育課長、昭和二十年四月神崎小校長、二十一年四月伊万里小校長、二十二年三月退職されました。叙正七位を受けています。

●山本登一（明治三十五年生）大正十一年三月佐師卒。同年四月大坪小訓導、二里小、大山小、西山代第一小、大山小、伊万里小訓導を歴任して昭和二十一年四月南波多第二小校長に昇任されました。波多津第一小、波多津中学校長を歴任され昭和二十六年三月退職し、波多津公民館長になりました。

●向 正子（明治三十六年生）大正八年三月相知村女子実業補習学校卒。大正九年四月波多津高小筒井分教場に勤務し、昭和十一年三月退職されました。

●原田 学（大正二年生）昭和九年三月佐師卒。同年伊万里小訓導、昭和十五年四月波多津尋常小訓導、昭和十八年三月退職し千葉市の市立日ノ出学園に勤務され、小学校部長となり昭和五十五年三月退職されました。

●向 阜子（大正元年生）昭和四年三月唐津高女卒同年四月東山代第一小准訓導、波多津尋常小、波多津高小准訓導から昭和十一年四月相知小へ転任されました。

●向 大進（茶木）（大正五年生）昭和九年旧制武雄中卒、十七年四月波多津小教諭、二十三年永平寺本山僧堂本科修了、二十七年一月波多津中教諭、三十二年通信教育により仏教大卒、三十六年四月波多津東小教頭昇任、四十二年四月伊万里小、四十四年四月波多津東小校長、四十七年三月同校退職、同年四月大本山永平寺副寺、五十三年四月佐賀県宗務所長、県祖門会長等を歴任、平成十年一月死亡。教育者として、また宗教家として曹洞宗の発展に尽力されました。

●井手芳子（明治四十五年生）昭和八年三月佐女師卒、同年四月黒川小訓導、同十年四月二里小、同十七年四月漂 S A G A 在満国民学校、同二十一年十一月引揚、同二十二年四月波多津第二小、同二十六年四月波多津小、同二十七年三月同校退職、退職後は筒井茂雄先生の指導による俳句会（青涛会）に入り世話人となり活躍されました。平成十年十月没。



## 【内 野】

●金子茂吉（明治七年生）明治二十一年三月三岳小高等科卒。明治二十四年八月三岳小准訓導、大町小、田頭小訓導、明治三十三年六月同校校長、牧島第一小校長から波多津高小訓導、有田小、北波多小、切木小、波多津高小、松浦小訓導をつとめ大正六年三月退職されました。

●金子フヤ（生年不明）明治三十七年三月佐師卒。大正九年一月行合野分教場から波多津高小に転任され、大正十五年三月退職されています。

●金子与一（明治十七年生）明治三十一年三月鬼塚高小卒、明治三十四年四月波多津高小准訓導、大正九年筒井分教場勤務、大正九年五月退職されました。

●井手東治郎（明治十七年生）明治三十八年三月佐師卒、同年黒川高小訓導、黒川第二小校長、西松浦郡教員養成所教員、波多津高小訓導、西山代第二小校長、有田小訓導、黒川高小校長、大坪小、外尾小、波多津高小、松浦小、伊万里小の各校長を歴任、特に伊万里小校長在任中に鉄筋三階建校舍落成、昭和十一年三月退職されました。その後浦之崎川南造船所青年学校長として、昭和二十年八月終戦まで勤務されました。

勲六等瑞宝章を受けられました。戦後は初代遺族会長、家庭裁判所相談員、地方保護司等をつとめられました。

●小杉定治（明治十七年生）明治三十九年三月佐師卒。同年四月波多津高小訓導、明治四十二年四月から七年間佐賀県師範学校訓導となり大正五年四月波多津高小校長、大坪小、伊万里小、西唐津小校長を歴任し昭和十二年三月退職されました。その後は植林育林にはげまれ、昭和二十六年から村議会議員、昭和二十九年から四年間市議会議員昭和三十三年から伊万里市老人クラブ連合会初代会長を八年間つとめられました。叙勲六等瑞宝章を受けられています。

●藤本東三郎（明治二十一年生）明治四十二年三月佐師卒。明治三十五年四月から三年間波多津高小准訓導、三十八年四月佐師入学、卒業と同時に大坪小訓導、大川小、二里小、伊万里小訓導を経て大正十二年四月黒川尋常小学校長に昇任、大川小・牧場第一小、曲川小、波多津高小、伊万里小の各校長を歴任して、昭和十二年三月退職されました。

●小杉吉右工門（明治二十六年生）大正六年三月佐師卒。明治四十二年四月から四年間波多津高小准教員をつとめて、大正二年四月佐師入学、卒業と同時に再び波多津高小訓導となりました。大正十二年四月大山小へ転任され、文学青年教師として、また研究主任として活躍、大正十五年三月病気のため退職されています。将来有為の人材と囑望されていたので惜しまぬ人はありませんでした。

●鶴田ツグ（明治三十年生）大正四年三月唐津高女卒。同年八月大坪小准訓導、大川内小を経て大正七年一月筒井分教場に勤務されました。

●小杉ツサ（明治三十二年生）大正八年三月佐師卒。同年は波多津高小訓導、曲川小、波多津高小、波多津公民学校に勤務され、昭和十七年三月退職されました。教職二十四年、その内二十年間を郷土の学校教育に専念されました。退職後は浦之崎川南青年学校で教鞭をとり、昭和二十年八月終戦により退職されています。その後は婦人会役員として社会教育に努力されました。

●井手興平治（明治三十三年生）大正十一年三月佐師卒。同年四月小城郡古湯高小訓導、同十三年三月伊万里第一小、昭和七年四月伊万里第二小（牧島小）、昭和十一年四月同校首席訓導（教頭）昇任。昭和十五年三月退職されました。その間農業補習学校や公民学校の助教諭も兼務されています。退職後は親族の経営する山梨甲府市のナショナル系列の甲府工場の役員として勤務されました。

●小杉政治郎（明治三十五年生）大正十二年三月佐師卒。同年西山代第二小訓導、波多津高小、伊万里小、黒崎小訓導を経て、昭和十六年七月平原小校長に昇任、七山小校長から昭和二十二年四月佐賀県指導主事となりました。二十三年四月鬼塚小校長、北波多小、浜崎小校長を歴任し、昭和三十二年九月退職、同年十月より呼子町教育長を三期（十一年）つとめられました。叙勲五等雙光旭日章を受けられました。

●井手アヤ（明治三十七年生）大正十一年三月唐津高女卒、同年十一月波多津高小准訓導となり、大正十三年十一月退職されています。

●金子武美（明治四十一年生）昭和三年三月佐師卒。同年有田小訓導、波多津高小、大山小、東山代第一小、山代第一小、山代実業青年学校、波多津実業青年学校を経て波多津中教頭となり、昭和二十五年四月大平小学校長に昇任、波多津小、黒川中校長在任中昭和三十四年七月死亡退職されました。

●鶴田玄海（明治四十一年生）昭和八年三月宮崎高農卒、同年熊本県立鹿本農学校教諭、同県立葦北農から伊万里農林高、黒川中、波多津中、伊万里農林高教頭、昭和二十八年十月同校へ出勤途中に病没されました。

●藤森トキ（明治四十二年生）大正十五年三月波多津農業補習学校卒。昭和二年八月筒井分教場准訓導に就任以来七年七か月間、分教場の教育に専念され、昭和十年三月退職されました。

●藤森力造（明治四十四年生）昭和九年三月京都高等蚕糸学校卒、同年福井県天津村青年学校教諭、昭和十二年南波多第二青年学校、鏡村青年学校、波多津村青年学校、波多津中教諭を経て、昭和三十八年四月波多津東小校長に昇任、波多津中校長を歴任して昭和四十四年三月退職されました。教職三十五年のうち二十五年間の永い期間を、波多津の学校教育に尽瘁されました。

●金子ハルミ（明治四十五年生）昭和六年三月佐師卒。同年波多津高小訓導、二里小、曲川小、大山小訓導を歴任し、昭和十七年十一月退職、昭和十九年十一月波多津村立実業青年教諭となり昭和二十一年三月退職されました。

●藤本満東（大正四年生）昭和十六年三月京都大法卒、上海海軍衣糧廠に就職、終戦により引き揚げ、昭和二十二年四月伊高女教諭、二十六年十一月県教職員課勤務、二十九年四月県学校教育課指導主事、高等学校係長、四十一年四月より五年間唐津商校長、四十六年四月県学校教育課長、五十年四月より二期八年間伊万里市教育長を歴任し昭和五十八年三月退任されました。その間教諭四年六か月、校長五年の高校勤務で、二十六年六か月に亘り行政職にあつて、卓越した識見と抜群の指導力を発揮し、本県教育の振興教育の発展に尽力されました。

●金子エイ子（大正七年生）昭和十三年三月佐師卒。同年黒川高小訓導、波多津高小訓導を歴任し昭和十八年三月に退職されました。

●小杉敏寿（大正八年生）昭和十四年三月佐師卒。同年伊万里小訓導、黒川第二小、昭和十八年三月満洲国に渡り、奉天瀋陽在満国民学校訓導、二十年七月現地陸軍召集、同年九月ソ連抑留、昭和二十四年十月引揚げて、二十五年一月より波多津中、山代中、大川中、黒川中、曲川中、西有田中、牧島小、東山代小、国見中を経て昭和四十六年四月山代西小校長に昇任、黒川小、東山代小、大坪小各校長を歴任して昭和五十四年三月退職されました。その後社会教育指導員、歴史民族資料館長をつとめられました。

●金子末松（大正二年生）昭和九年三月佐師卒。同年二里小訓導、十年九月東山代小、十四年四月伊万里小、二十二年四月松浦小、二十三年四月黒川小、二十八年四月大坪小、三十二年四月波多津東小校長に昇任、三十四年四月市教委指導主事、三十六年四月杵西教育事務所指導主事、三十七年四月松浦中、三十九年四月杵西教育事務所長補佐、四十一年四月南波多中、四十二年四月伊万里小校長、四十八年三月同校を退職、平成十年一月死亡。平成十年勲五等瑞宝章を受けられました。

●井手東太郎（大正四年生）昭和十年三月佐師卒。同年黒川高小訓導、十三年四月波多津高小、十六年三月佐師専攻科卒、同年二里小、二十年四月滝野小教頭昇任、二十三年四月波多津東小、二十六年四月波多津小、三十二年四月大坪小、三十四年四月伊万里小、三十六年四月伊万里中、三十八年四月牧島小校長、四十年四月二里小、四十一年四月市学校教育課長、四十三年四月杵西教育事務所長補佐、四十五年四月大坪小、四十七年四月伊万里中、五十年三月同校長退職、五十一年五月市立図書館長、五十四年四月市立幼稚園長、五十八年七月から六十二年八月人権擁護委員等に貢献されました。平成九年五月死亡。勲五等瑞宝章を受けられました。

●藤田平太（大正二年生）昭和八年三月佐師卒。同年波多津高小訓導、昭和十六年三月佐師専攻科卒、同年波多津高小復職、同二十二年四月波多津小教頭昇任、二十六年大坪小教頭、二十八年四月大坪小校長昇任、昭和三十一年四月筒井分校との統合により波多津東小となり初代校長、昭和三十二年四月杵西教育事務所長補佐、昭和三十六年四月波多津中校長、同三十九年四月伊万里市教委学校教育課長、同四十一年四月波多津小校長、昭和四十三年四月伊万里中校長、同四十七年三月退職、その後市青少年問題協議会委員、市立図書館長五年、市郷土研究会事務局長、市明るい選挙推進協議会長十二年、裁判所調停委員十一年、民生委員、児童委員、国民年金委員など歴任されました。教職三十九年中の二十七年間を郷土波多津町内の小中学校に勤務して波多津の教育の振興と後継者養成に尽力されました。特に波多津東小が太平と筒井分校の統合については校区内の意見集約をはかり、統合後の施設整備教育充実に献身的に努力されました。学校教育、教育行政、社会教育にすぐれた手腕を発揮され、多大の貢献をされましたので、平成八年春の生存者叙勲、勲五等瑞宝章を受けられました。

●小杉東太（前田）（大正二年生）昭和九年三月佐師卒。同年四月伊万里小訓導、同十六年四月より佐師専攻科入学、同十七年四月大坪小、同二十年四月東黒川小教頭昇任、同二十五年四月波多津中教頭、同三十一年四月伊万里小教頭、同三十四年四月波多津東小校長、同三十六年四月市指導主事、同三十八年四月市学校教育課長、同三十九年四月波多津中校長、同四十二年四月大坪小校長、同四十五年波多津

中校長、同四十八年三月同校退職、在職中造形教育に尽力、市郡中体連会長、県中体連副会長をつとめられました。退職後は市社会教育指導員として成人教育に精励され、市スポーツ主事、市体育協会理事長として活躍され内閣総理大臣より体力づくり最優秀賞を受ける原動力となられました。

●井手彰潤（昭和三年生）昭和二十七年三月大谷大卒、同二十七年七月波多津中教諭、同二十九年四月有田中、同三十一年四月黒川中、同三十二年四月東山代中、同三十三年五月国見中、同三十八年四月山代中、同四十三年四月国見中、同四十五年四月伊万里中、同五十年四月黒川中、同五十三年四月国見中、同五十四年四月滝野中、同五十九年四月大川中教頭に昇任、同六十年四月山代中、同六十一年四月国見中教頭、平成元年三月同校を退職されました。内野法徳寺の長男に生まれ後継者としての教育を受けられましたが弟に僧侶をゆずり教師道を選ばれました。スポーツマンで中学生の野球・ソフトボールの顧問として活躍されました。平成八年五月死亡。

### 【煤 屋】

●鶴田夕子（明治四十二年生）昭和二年三月唐津高女卒、昭和三年十一月波多津尋常小准訓導となり昭和五年三月退職されました。

●鶴田タイ（明治四十四年生）昭和三年三月白石高女卒。昭和十年四月東山代村公民学校助教諭、十五年三月退職、更に昭和十七年四月波多津村実業青年学校教諭となり、十八年四月伊万里町青年学校に転任し、二十一年三月退職されました。その後波多津町婦人会長もつとめられました。

●鶴田ノブ（大正十一年生）昭和十六年三月唐津高女卒。同年四月波多津第一小助教諭に就任し、二十年三月退職されました。

●鶴田千木（大正十四年生）昭和二十年三月佐師卒。同年黒川第一小教諭、波多津小、波多津中に勤務して昭和二十四年一月退職されました。

### 【馬始瀉】

●柴田定五郎（明治十九年生）明治三十八年三月唐津中卒、同年鬼塚高小代用教員、明治三十九年二月より四十三年三月まで波多津高小准訓導、その間課外活動として野球や剣道の指導を行われました。退職して上京されています。

●井手庄太郎（明治二十年生）明治三十八年四月から四十二年三月まで波多津高小准訓導をして退職されました。

●山口東一（明治三十九年生）大正十五年三月佐師卒。同年伊万里小訓導、昭和七年四月から三年間佐賀県師範学校訓導、昭和十年四月大川小訓導、曲川小、松浦小、伊万里小を経て二十年四月曲川小校長に昇任、二十三年四月大坪小校長となり二十六年三月退職されました。その後、身障者の教育施設富士学園に勤務されました。

●辻 スカ（明治三十二年生）大正七年三月唐津高女卒。同年西山代第一小准訓導、筒井分教場、波多津尋常小、波多津高小訓導を歴任し昭和十七年三月退職されました。在職二十四年間のうち二十三年

間を波多津の学校教育に尽瘁されました。

### 【辻】

●竹田順太郎（明治十三年頃生）明治三十四年三月佐師卒。明治二十八年四月波多津高小代用教員、明治三十年四月佐師入学、三十四年三月卒業と同時に波多津高小訓導、三十五年六月伊万里小訓導として転任されています。その後不明です。

●田中光夫（明治三十九年生）大正十五年三月佐師卒。同年波多津高小訓導、昭和四年三月退職し広島高師に入学、卒業後は旧制中学校の教諭、校長を歴任し戸畑明専教授、第一経済大学教授になられました。

●筒井茂雄（明治四十四年生）昭和五年三月佐師卒。昭和八年三月東京美術学校卒。同年より旧制中学校の美術科教諭を経て、昭和二十四年四月佐賀大学教育部助教授、三十年同大学教授になられました。三十三年より二年間附属小校長併任、四十八年より二年間附属幼稚園園長併任。昭和五十一年三月定年退官されました、その間に日展入選十二回、東光展で三星賞受賞、東光会委員、油絵やデザインを専門として、美術科教員育成に尽瘁されました、なお俳句に造詣が深く指導者としても活躍されました。叙勲正四位勲三等旭日中綬章を受けられています。

●田村佐多雄（明治三十六年生）大正十三年三月佐師卒。同年波多津高小訓導となり、昭和十七年三月退職するまで十八年間波多津の学校教育に尽力されました。畑津田嶋神社宮司を兼務されていた為、大東亜戦争が熾烈となり出征兵士の武運長久祈願が頻発したので、早く退職されたものと思われます。

●渡邊正美（筒井）（大正四年生）昭和九年三月佐師卒。同年波多津高小訓導、昭和十五年三月佐師専攻科卒、同年松浦小訓導、同十七年四月大川小、同二十二年四月大川小、二十四年四月大川中教頭昇任、三十一年四月市教委指導主事、三十四年四月杵西教育事務所指導主事、三十六年四月東山代小校長、三十八年四月大川小 四十二年四月大川中、四十九年三月、大川中校長退職、四十九年八月市教委社会教育（同和）指導員、五十五年四月学校同和教育指導員、六十年三月退職、特に昭和四十六年、文部省、県教委から同和教育研究の指定を受けて、研究実践を続け、以後被差別地区のこどもの学力保証、同和教育の普及啓発活動に昭和六十年三月まで十五年間献身的に尽瘁され、県同和教育の先導役を果されました。平成八年六月死亡。勲五等瑞宝章を受けられました。

●市丸定雄（大正六年生）昭和十二年三月佐工卒、同十二年四月佐世保海軍工廠入社、同十三年十二月満鉄入社、同二十一年三月引揚、同二十一年四月田中造船所勤務、同二十二年十月波多津中助教諭、同二十七年十月同校教諭、同三十二年四月黒川中教諭、同三十六年四月波多津中教諭、同三十九年四月黒川中教頭昇任、同四十二年四月国見中、同四十四年四月伊万里中教頭、同四十六年四月牧島小校長に昇任、同四十七年四月波多津東小、同四十九年四月波多津中校長、同五十二年三月同校退職。二十九年六力月の教職の中で十四年六力月を波多津町内の小中校に勤務して後輩の指導に尽力されました。退職後は北波多村徳須恵に住居を移転し平成九年三月没。

●樋口ツユ子（大正六年生）昭和九年三月伊高女卒。同十五年四月波多津高小准訓導、同十六年五月

筒井分教場、同十七年五月波多津高小、同二十二年六月同校教諭、同三十二年四月黒川小、同三十八年四月波多津小教諭、同四十三年四月波多津東小、同四十七年四月波多津小、同五十一年四月退職、教職三十五年間のうち二十九年間を波多津町の子ども教育に貢献されました。平成九年十一月没。

## 【弁 賀】

●高森虎太（大正八年生）昭和十五年三月佐師卒。昭和十八年九月東京高師卒、大東亜戦争が熾烈となり、繰上げ卒業して海軍航空隊に入隊され、特攻隊員として終戦まで国の護りにつかれました。終戦後は義父の経営される東京双葉電線に就職、現在社長であります。

以上平成十一年一月現在、波多津出身の教育者で故人及び遠隔地在住者・町内の長老の略歴を記しましたが、偉大な先輩の功績に深甚なる敬意を表します。退職者で現在生存している人は男二十三名、女十九名です。現に教職にある人は男十九名、女九名で計二十八名で佐賀県内小、中、高の学校で波多津出身の誇りをもって活躍しています。

（波多津出身で、平成十年三月までに退職・生存し、市内及び県内に在住する者）・出身集落別に氏名（旧姓）及び（ ）内の上段は波多津町内の学校に勤務した年数、下段は教職年数を表わす。

### 〔木場〕

中西栄哲（五・六、五・六） 長谷川（田中）コトノ（三〇、三九） 井本郁子

### 〔筒井〕

石倉（市丸）秀信（二、四〇）

### 〔井野尾〕

小島輝雄（二〇、三五）

### 〔田代〕

谷崎君恵（三、一八・四） 高柳憲男（二二、◎）

### 〔中山〕

古賀（田中）善夫（〇、三九） 金子ヒナ子（一〇、一〇） 金子（片淵）利恵（五、三〇）

### 〔畑津〕

山本政千代（〇、二一・三） 原田八郎（一、三九） 大久保ミサ子（四・五、五・八） 前田トシ子（一九・一〇、三三・一〇） 古賀（小杉）正枝（三、三）  
松本武明（一三、三九） 田中（坂本）照（二、四〇） 松本辰夫（一三、四一）



近藤（山本）澄子（一七、四一） 井手豊子

〔内野〕

井手工三（一・八、一・八） 井手キヌ（一五、二五） 小杉敏夫（一四、三七・一一）  
小杉俊子（一九、二一） 井手ミチ（五、五） 藤本壽幸（一〇・四、三六・四）  
坂本スミ子（七、三九） 丸田（小杉）光也（一五、四〇） 山口（井手）文子（三、三三） 原  
田久美（高校、三八）

〔煤屋〕

田中良雄（一三、四〇） 原口（佐伯）辰巳（四、四一） 田中正次（一、一）  
泉建一（〇、三八）

〔辻〕

古川稔（二八・一一、三九・一一） 田中フネ子（三、三） 鶴田（末吉）英代（九、三八）  
栗原（田中）正明（三・三、三・三） 森キミ 筒井（谷崎）恣（二一、三八）  
古川フミ子（二二、三〇・三） 杉本茂助（七、七） 高森保（四、四二）  
田中（橋口）武美 畑山和代

〔弁賀〕

高森勤（二五、四〇） 渡辺（高森）イズミ（一五、三八）

以上の人たちは、退職後社会教育や地域の活動のリーダーとして活躍しています。

## 第六節 文化

### 一、石造文化

#### （1）木場

##### 公民館附近

忠 霊 碑 真石 台高さ八十cm 本体高さ三五〇cm

場所 公民館横

基金は寄付金並に木場区民の方々の浄財により建立。戦死者と遺族の方が銘記してありま

す。

寄付者 一万円 内閣官房長官、保利茂氏

戦死者 福岡喜曾治、池田卓也、井本則義、末永秀太郎、末長勝、井本司三郎、松岡泰、  
中西民英、末長武、松下民生、松下吉太郎、落合安治、末長◎、前川義男、益田  
正春以上十五名の戦士

石 工 松下千代松、松下哲夫、松下茂、中山秀美、松下照男、松下用助



肥前狛犬 神社わきの神寄場

### 田嶋神社

鳥居 第一 大権現 真石高さ二四〇cm 天明五年己十二月五日(一七八五)

施主 当邑 庄屋 青木良助 名頭 兵七、源造 名代伊栗治

鳥居 第二 大明神 真石高さ二九五cm 奉寄進 ◎表一基 当邑 庄屋

燈籠 一对 真石高さ一七〇cm ◎延二歳 酉弥生(一八六一) 建立

石工 徳永村治、徳永正幸、徳永国作、徳永長幸

燈籠 一基 真石高さ二二二cm 文政五年正月吉日(一八二二)

奉寄進 当村 名頭福本新左衛門

### 田嶋神社

唐獅子 一对 真石高さ二二〇cm ◎延二辛酉歳（一八六一）建立

奉寄進 木場村 名頭 久左衛門、同東造

豊前坊神 真石高さ五十cm 場所 田嶋神社東側 弘化二年己八月吉日（一八五〇）

建 立 木場村中

松岡泰作翁頌徳碑 自然岩石 台石高さ八十cm 本体高さ三三五cm 公民館前（道路上）

碑 文 国務大臣保利茂書 昭和四十九年六月 木場村中建立

### 神寄場線刻板碑

線刻板碑 真石 大の高さ五十五cm 小の高さ三十cmのもの五基があつて、どれも形は類似しています。塔部と基礎が一石作りである点も共通、いわゆる慶長型の板碑とされます。

薬師如来 右手に薬壺の座像、蓮華座、高さ五十五cm 阿弥陀（又は釈迦）如来高さ五十三cm

不動明王 右手に剣の立像、高さ三十二cm 地藏菩薩 高さ三十一cm 持国天力高さ三十一cm

弘法大師 右手に錫杖、高さ三十一cm

狛犬二体は盗難防止のため、西雲寺内に保管してあります。（右線刻板碑は伊万里郷土研究会誌より）

### 清水川

清水川は川の名前になっていますが、現在では川ではなく、道路の近くに清らかな湧水が、せせらぎの音を立てて流れ、非常にきれいな水が出ています。小字も清水となっていますが、昔は小川が流れていたかどうかは不明です。木場集落の西部地区は、ゆるやかな斜面に住宅が点々と建ち並んでいます。

この清らかな湧水は、近くの人々の飲料水として利用されています。昔、この付近に地すべりがあつり、大きな災害があつたといわれています。その関係と思われるのは、湧水の流れの中に六地藏や、近くに庚申塔を祭つてあり、再度災害がないように建立された、という伝承があります。



清水川六地蔵

### 清水川

六地蔵 真石高さ一七〇cm 場所 字清水（前田）

仏像 真石高さ一六〇cm 同所にあり

明暦二年丙年 為法落西雲信士(一六五六)長谷川丈夫氏水田入口

宮地嶽神社 真石高さ一〇〇cm 明治二十一年一月吉日

施主 松下弥三八、松下富左衛門、松下徳四郎、松岡芳次郎、前川喜右衛門、前川新作、前川吉右衛門

六地蔵 真石高さ一三四cm 清水川の中に建立

永録六年(一五六三)二月吉日

庚申塔 真石高さ一六六cm 同所附近

施主 木場邑庄屋 松岡荘之助、松岡芳助 同邑中

名 頭 源造 惣代 伊右衛門

世話人 新左衛門、定吉、志理左衛門、谷左衛門、治平、常四郎

年 号 天保六年（一八三五）この付近に地辻りがあり、守り神として建立。



庚甲塚(青面金剛塚)

#### その他の地区

宮地獄神社 真石高さ一一〇cm 長野

大神宮 真石高さ一二〇cm 同所 寛政三年九月（一七九一）

施主 松岡哲之助（庄屋）、松岡嘉左衛門 名頭、松下与吉 名頭、松下又左衛門（組頭）木場村中

#### 開田附近

大神宮 真石高さ 八十二cm 場所 筒井方面より木場に向って木場区の入口一五〇m  
国道上の山のなかにある。

安永二癸己十二月吉日（一七七二）

施主 木場村 庄屋 正野利助

燈籠 真石高さ一四〇cm 寛政二年庚戌二月（一七九〇）

奉寄進 当村庄屋 同邑中 右二基同居にあり

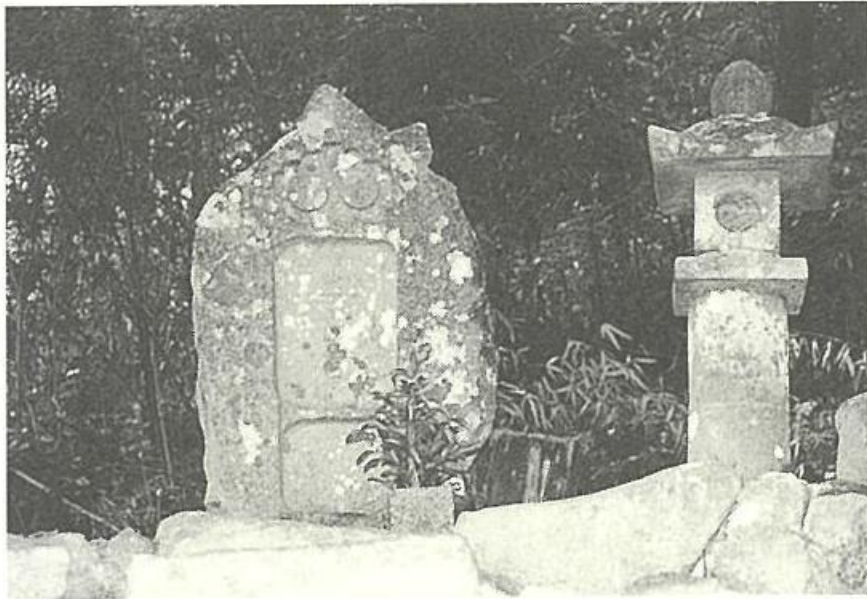
六地藏 真石 二基 高さ一五三cm 開田農業倉庫下 二基  
共に年号不詳

五輪塔 真石 二基 大の高さ一四〇cm 小の高さ八十cm 六地藏と並んで同所にあり。仏像真石 一体 高さ七十cm 木場区の正面む〇方面に行く入口 山の下にあり

積須恵正定塚 文化十四年〇年五月二十三日（一八一七）

六地藏 一基 高さ一七五cm 栗田 前川元治氏宅前道端 年号不詳

昔、この附近に地すべりがあり、犠牲者まであったので慰霊と今後災害がないよう建立されたもの。



伊勢碑 開田国道上すぐの杉林中

#### 西雲寺附近

牛像 真石 一体 高さ七十五cm 西雲寿境内にあり 天保十年亥年正月吉日  
奉寄進、唐川邑 重作

狛犬 真石 二体 銘記なし 盗難防止のため西雲寺寺内に保管。

仏像 真石 高さ三一〇cm 薬師如来石尊一〇之志 西雲寺の裏に建立してある。  
肥前国唐津 木場邑

墓石塔 真石 高さ三〇〇cm 主本国伊預 西雲寺の裏  
松岡右京之進 七世孫 唐津木場邑嗣子 松岡伊三郎元純  
文政七年甲申（一八二四） 委林鐘峰誉洞谷居士 謹而記之

墓石塔 真石 高さ三一〇cm 響誉妙谷大姉 文化十四年 同年三月十八日（一八一七）  
文政五年八月十八日（一八二二） 松岡洞谷夫婦の墓 同所

墓石 真石 高さ二七〇cm 徳誉仁翁居士 松風奄明誉徳遊大姉 同所



先祖 伊預 松岡藩領主 松岡右京之進 七世孫  
故 木場邑之長 松岡莊之助元純 夫婦の墓 年号不詳

墓 石 真石 高さ一五〇cm 三体坊主墓 同所  
廿五代 松譽上人十七代鏡津和尚 年号読取り不可

### その他の地区

守本尊 真石 地藏菩薩 高さ五十cm 場所 (大野) 新溜池の近く  
以前は子供たちの水泳場所だったそうです。子供が水泳中おぼれて死亡したので今後このような事故がないよう慰霊と供養のため守本尊を建立された。木場村中  
観世音菩薩 真石高さ四十cm 守本尊 地藏菩薩と同所新溜池のそばにあり (大野)  
仏 塔 真石高さ一二〇cm 場所 上古場 赤坂より分かれた木場に入る道路近く  
旧唐津道  
浄院禪定門 正保己夫一月十日 (一六六四)  
薬師如来 真石高さ八十cm 年号不詳 耳の病気の神様として参拝者あり (む◎)  
大日如来 真石高さ一五五cm 明治五甲正月吉日 奉納 木場村中 場所 (長坂)

### 加 倉

燈 籠 一基 真石高さ一四七cm 施主 井本氏寛政二年二月四日 (一七四九) 同所  
日切り地藏 真石高さ九十八cm 年号不詳  
右 三体 同所 建物はブロック塀で屋根はスレート葺き  
仏 像 真石高さ三十cm 正徳六丙甲四月 当村住 井本氏 加倉墓地入口  
心誓安清信士 建物 間口 一二〇cm 奥行 一二〇cm 木造瓦葺

### 肥熊神社

肥熊神社 真石 御神体 高さ九十cm 場所 字日の熊 弘化五年甲二月吉日  
(一八四八)  
自然石の大石 高さ一三〇cm 横一五〇cm の上に石祠で鎖座されてあります。  
尚、大石の正面に昔の人の人物を彫刻してありますが、長年の歳月により明確ではありません。  
燈籠一对 真石高さ 二〇三cm 同所 明治三十七年一月十八日 氏子中  
手洗鉢 真石高さ一基 自然石 高さ八十四cm 横 一〇〇cm 同所  
燈籠一基 真石 二〇〇cm 文政七年午九月 吉祥日 (一八一〇) 奉寄進  
施主 井本万四郎 井本宇平治 井本九平

鳥居一基 真石高さ二六〇cm 肥熊神社 明治十八年酉十二月吉日

奉献表一基 産子中

以前は御本体の裏山にお籠り堂が建立してあったそうですが、現在は竹山になっています。お祭りの時は、お籠り堂で酒盛りがあっていたといわれます。現在では御本体の前で参拝後酒盛りがあります。尚、神社の前の山坂道は、旧唐津往還で、この附近又は他のむら人達が唐津との交通路として利用されていたそうです。



肥熊神社 平成3年1月16日

## (2) 開拓

豊前坊神 自然岩石 自然岩に彫刻 開拓公民館の上の山の中 慶応二寅二月祈願 願主加倉

天照皇大神宮 自然岩石 岩に彫刻 弘化五甲年正月吉日(一八四八) 願主 加倉

五穀神社 自然石 年号不詳

## 大知木 熊野神社

鳥居 真石高さ二七〇cm 場所 大知木 区の下

明治〇〇年 閏三月吉日 奉納 大知木氏子中 台風で倒れたので再建

明記不詳

燈籠 真石 一基 明治十九年 戊二月吉日建立 大知木村中 石工 江頭重三

手洗鉢 真石 一基 奉寄進 理左衛門

## 深谷

牛神様 真石高さ一〇〇cm 文政十年九月吉日（一八二七）

施主 良作、峯右衛門、茂作、市丸源大夫、市丸重左衛門、市丸新造

### （3）筒井

六地藏 真石高さ一九一cm 場所 原田 正野牧場入口 明記不詳 毎年元旦に肥前町湯の浦の海水を田嶋神社に奉納した後で、お汐水を分けてお供えをします。

管理 祀主 牧場主 正野氏

## 原田、栗山地区

兄弟◎ 真石高さ四四cm 年号不詳 場所 正野牧場の南西 地名は兄弟◎と呼ぶ  
昔、この地に兄弟が住んでおり、山火事にあい、兄弟で火を消していたそうですが、焼死したので、慰霊と供養のために兄弟仏を建立されたといわれます。  
現在、上組の人で祀る。

観世音菩薩 真石高さ六一cm 享保十八年天◎八月（一七三二）栗山国道上

奉◎立 観立大姉 筒井村念◎講中持主 五左衛門外お堂 間口 一三〇cm

奥行 一〇〇cm 瓦葺

## 不動明霊地

不動明 二体 真石高さ 大二〇〇cm 小一〇〇cm 場所 栗山

◎像 真石 大小合わせて三十七体（内十三仏様 記念板碑石仏）

お籠り堂 堂内は畳敷き 中央◎棚に鎮座されてあります。

間口三〇〇cm 奥行五〇〇cm 木造瓦葺

建物 お堂の方は剣大神、武彦神を祀ってあり間口 二〇〇cm 奥行 一七〇cm

木造瓦葺きの中に鎮座されてあり、お堂の建立寄附者を明記してあります。

不動明王の場所は栗山地区、旧筒井分校跡地の東側の下の谷間の雑木林に囲まれ、谷間から清らかな湧水が音を立てて流れ、霊験あらたかなところ。湧水を利用して不動明体内より滝となって流れ落ちていきます。以前はお滝に打たれ念仏を唱えながら、修行されたといわれています。

この霊地は、栗山地区宮崎芳太郎氏がこの地に設立されてから、現在に至っています。今でも、むらの人達が毎朝十人ぐらい参拝者があり、清掃もよくしてあります。

## 公民館附近

六地藏 真石高さ一六八cm 基礎・竿・中台・塔身・笠と五個で形成（上戸平）

弘治三年十月（一五五七）銘の六地藏石塔は、本町田代三島神社前にもあったそうですが、昭和四十六年盗難にあったので、町内ではこの一基だけです。

弘治三年は永録元年（一五五八）と続きますが、その頃から六地藏の造塔が盛んになったそうです（伊万里郷土史）。

祭日は毎年八月二十四日、青年団主催により、盆踊りをはじめ多彩な行事があり、お酒（おみき）が振舞われ、多くの人達が参拝します。経費はお賽銭によってまかなわれます。

弘治銘録地蔵塔はもと庵寺の門前六地藏であつたらしい。今から四三〇年前、すでに建立され、当時の筒井が、豊かで開発されていたことを示す唯一のむらの歴史の証拠であり、大切に保存したいものです。

イボ石地蔵 イボ石高さ一三九cm 風化して刻字不明 六地藏と並んで建立



弘治六地藏といぼ地蔵

昆沙門真夫 真石高さ 五十二cm 上戸平 市丸武司氏宅の上の山林内にあり 明和七年庚九月吉日（一七七〇）建立 石工 川口林太郎

昔、この附近は地<sup>すべ</sup>り地帯で、山崩れがないように祈願建立されました。毎年秋の彼岸の中日を祭日と定め、附近の人達が参拝されます。参拝後、公民館で酒盛りがあります。

五穀神社 真石石祠高さ一二〇cm 台一〇〇cm コンクリート台

天保六蔵（一八三五）三月十八日 場所 公民館前

忠霊碑 みかげ石高さ一〇〇cm 本体高さ三〇〇cm 場所 公民館前

昭和二十九年十二月十九日 筒井青社会建立

建立委員長 古川美年 副委員長 市丸儀一 委員 上田富好、田中卓見、

## 松尾一

会 計 宮崎清、市丸寅信、市丸輝男

願 問 松尾茂資、古川音造、市会議員、奈良崎儀三郎、古川倉太

戦死者 古川百造、田原今朝治、田原可与、市丸良夫、古川善一、田中熊造、

松尾卓二、古川正、奈良崎達夫、市丸俊一、正野茂 以上十一名

大祭日 毎年三月中に青壮会主催により遺族を招待し、むら中で慰霊祭が行われます。

牛神様 真石高さ五十cm 以前は春秋二回お祭りがあっていましたが、現在はありません。

## 神寄場

地蔵尊 真石高さ八十cm 上戸平 国道三叉路の上

祭日は毎年八月二十四日 地蔵様祭りと同時に町中で参拝されます。

仏 像 木製高さ七十五cm 二体 同所

阿弥陀如来 木造三十七cm 一体 建物お堂 間口三〇〇cm 奥行二〇〇cm 木造瓦葺

## 田嶋神社

鳥 居 第一真石高さ二九〇cm 寛延二歳己正月吉日（一七四九）上古平 石工 長右衛門

鳥 居 第二真石高さ二九〇cm 奉献◎表一基 筒井村中石工 岩永与一郎 社掌 田村佐多雄

世話人 宮総代 田中敬太郎 区長 古川音造

唐獅子一对 高さ二二〇cm 明治三十二年二月建立 世話人 麻生四郎、松尾丈衛門、田中敬太郎、宮

口力造 石工 値賀川内、徳永利平、徳永安太郎

燈籠一对 真石高さ一五五cm 明和三丙戌正月吉日（一七六七） 筒井村住人 川口林左衛門

燈籠一基 真石高さ一八五cm 奉寄進 文化四卯歳三月（一八〇七） 施主 筒井村中

常夜燈一对 真石右高さ 一三五cm 中段 願主 古河幾四郎 左高さ一七〇cm 弘化四年丁未三月

吉日 願主 古河幾四郎

燈籠一对 真石右高さ 一五〇cm 下段 明治二十五年八月吉日奉寄進 当村 古河重左衛門 左高

さ一五〇cm 明治二十五年八月吉日建立 当村 古河重左衛門

燈籠一基 真石高さ一五〇cm 文政二己卯歳（一八一九）



筒井の田嶋神社 名木として広がる「ふじ」の境内

庚申青面金剛 享保十三戌申天十一月吉日（一七二八）上戸平 田嶋神社内

玄了、七右衛門、好右衛門、五左衛門、助右衛門、市平、伊右衛門、次八、亦六

庚申信仰は、中国の通教が伝えたといわれます。普通は「見ざる、聞かざる、言わざる」の三不振の像を祀り、悪疫、災害を防ぐためといわれています。

六地藏 真石高さ一八〇cm 慶長四丙戌◎◎ 正面必◎源（一五九九）

六地藏二基は盗難にあい、再建されたので塔身の六地藏だけ、コンクリートで形成されている。場所は地藏尊と同じ場所、国道を隔てて田嶋神社と相対する山坂道のそばにあります。

地藏尊 真石高さ九十八cm 元文二己十二月吉日（一七三七）

六地藏 真石二基 右高さ一七〇cm 地藏尊と同じ場所 左高さ一三一cm 年号不詳

五輪塔 真石大小合わせて十五基あり 同所 墓地内にあります。





筒井神社内 青面金剛(お堂内部)

### 岩の本 神奇場

- ◎ 塔 真石高さ一八〇cm 岩の本集落のうら山 国道より一〇〇m登ったところ、山の中。  
寛延三庚午天三月吉日(一七五〇)奉建立 施主 古家権兵衛孝
- 坊主墓 真石高さ七十cm 安政四年九月(一八五七) 畑津村宝泉寺 同所  
桃原◎◎子 天鶴瑞首座 建造物 間口 三〇〇cm 奥行 二五〇cm 木造  
瓦葺
- 五輪塔 真石高さ八十五cm 悟雲宗◎ 同所
- 毘沙門様 真石高さ一〇〇cm 坊主墓より先五十cmの処 山の中 年号不詳
- 大野様 真石高さ八十cm 岩の本集落の正面の山の中 井野尾の山で、古川喜久男氏  
祀る。
- 記念碑 竣工記念碑 波多津町東部地区 碑文 佐賀県知事 香月熊雄書 岩の本境松 県営圃場整備事業 波多津地区 昭和五十三年度 農林水産省採択 工事着工 昭和五十三年八月二十九日 竣工 昭和六十二年三月三十一日  
総事業費 十五億一千十八万八千円

内 訳

国庫補助 六億八千三百八十四万四千元

県 費 四億四千八百七十九万七千元

地元負担 三億七千七百五十四万七千元

受益戸数 二二〇戸

耕地面積 施行前 一一〇ヘクタール 施行後 一〇〇ヘクタール

工事主体 佐賀県設計監督 伊万里農林事務所

施行業者 株式会社 上滝建設、株式会社 福原建設、株式会社 大和舗道、  
株式会社 市丸建設



岩の本神寄場

#### (4) 井野尾

##### 公民館附近

記念塔 真石高さ三〇〇cm 公民館前 古川喜和人翁記念碑 鳥居原

寄附者 高田平三郎、前田定造、古川豊造、岩永岩夫、大田伊之助、市丸要助、中里太郎、福岡市  
志岐徳太郎 石工 岩永与一郎

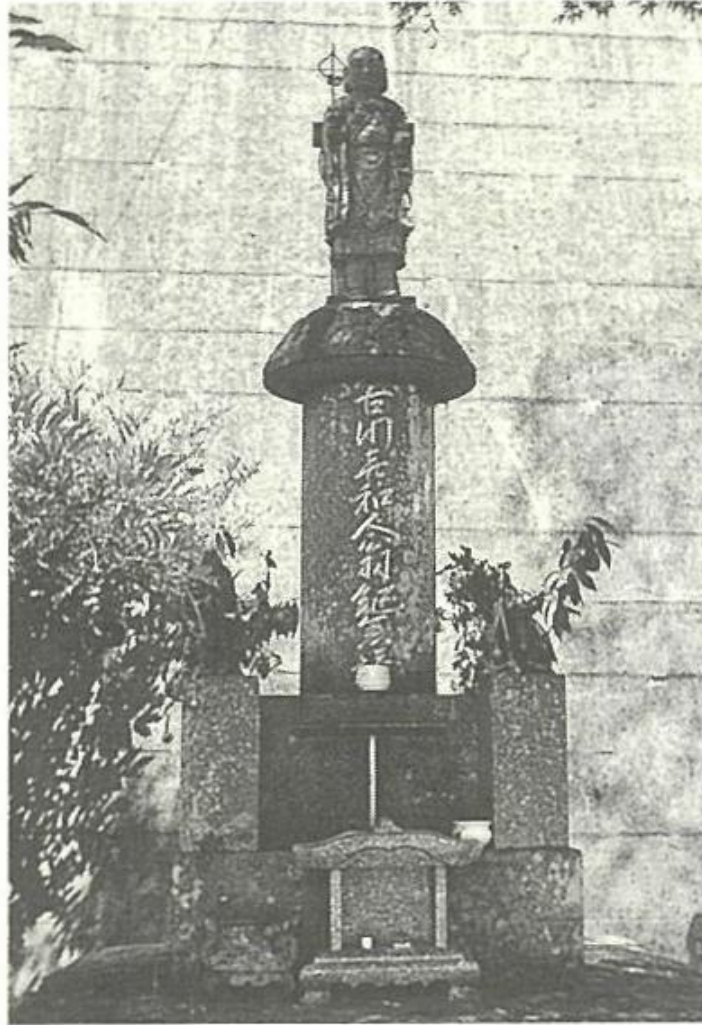
薬師如来 木造高さ六十cm 貞享五戌辰九月十五日（一六八八）

石仏像 真石二体 右高さ九十五cm 左高さ四十六cm 年号不詳

観世音菩薩 木像 一体 高さ三十cm

右四体は、同所にあり建物の中に鎖座。以前は巡礼の札所、現在は婦人会、の人が祀る。

建物 間口 二〇〇cm 奥行 一六〇cm 木造瓦屋根 公民館前



古川喜和人翁記念碑(井野尾公民館の前)

### 山王宮

鳥居 真石高さ二七〇cm 寛政七年乙卯十一月(一七九五) 穀目

奉建立 ◎表一基 井野尾村中 石工 小城西山 戸川本山陣内 小玉宮

燈籠 真石一对 高さ一八四cm 明治二十八年九月吉日 願主 平左衛門

記念塔 自然石高さ九十cm 奉寄進 施主 ◎造

紀元二千六百年記念に建立 自然石の上に大砲の弾丸を置いてあります。

手洗鉢 自然石高さ八十cm 文政五年正月吉日(一八二二) 奉寄進(願主) 仲造

天照皇大神宮 真石高さ二〇〇cm 山王宮社殿の右側に建立 文政四歳巳八月吉日

(一八二一)

以前は公民館の横にありましたが、平成二年十月現在地に移転。

畠津道 山口 大阪 清水川

地蔵様 真石高さ四十五cm 畠津道三叉路に建立されてあります。 明記不詳  
建物 間口一〇〇cm 奥行 七十cm 木造瓦葺 高田秋男氏祠る。

牛頭天王 自然石高さ一二〇cm 場所 山口 文久三年亥八月（一八六三）牛神様  
以前は村中で、毎年春秋二回、牛神様に参拝し、お籠りをして酒盛りがあっていました。現在では肥育牛生産者だけが参拝されています。井野尾区正面の山の頂上。

守本尊 真石高さ五十cm 観世音菩薩 井野尾区の溜池 明治十三年三月十七日建立  
（大阪）

村の女の子が遊んでいるうち、溜池にすべり落ち水死したので、二度と事故がないよう、溜池の近くに建立されてあります。以前は近所の人達が年一回、供養のため溜池の堤防附近で一重持って参拝していたそうです。

六地藏 真石高さ一七〇cm 井野尾中心部 市道三叉路 長年の歳月により読取不能  
宝暦十巳（一七六〇）小春吉祥日 ◎至◎界平◎利益 毎年八月二十四日  
地藏祭り

青年団主催で村中参拝され、カラオケなどで賑わいます。お神酒が振舞われます。この六地藏も毎年、地藏回しがあるそうです（清水川）。





井野尾伊勢碑  
牛頭天王碑



井野尾清水川六地藏

### 鳥居原（清水川）

五輪塔群 真石高さ五十cm 三十二体あり、六地藏の上の畑地

昔は、水田、畑地に散在していましたが、村の人達が当所に集められたようです。

伽羅堂跡地 五輪塔群のある畑地にあったようですが、台風のため倒壊したので板木に移転し、板木村塾となり、後に波多津尋常小学校と改称されました。

## (5) 田代

### 三島神社

鳥居 真石高さ二五〇cm 明治二十一年二月吉日 奉献 ◎表一基 田代村中建立

加倉荒石 石工 井本元太郎、井本分四郎 石工 小城郡栗原ケ里 江頭重三

鳥居の近く左側に樹令五百年の杉の大木がそびえ立っていて、県の名木に指定されむらのシンボルとして眺められ、仰がれていましたが、平成二年の台風により倒れたので、町の人達に惜まれています。

六地藏 一基 真石高さ一八五cm（推定） 田代の弘治六地藏は町内で、筒井と二ヶ所だけです。最も古い地藏様でしたが、昭和四十六年盗難にあったので村中で新たに再建されました。

唐獅子 一对 真石高さ一九五cm 明治二十七年十二月吉日

奉献 井野尾 古河昇次郎 石工その他明記なし

### 三島神社

燈籠 一对 真石 右高さ二〇〇cm 奉献 井野尾 古河昇次郎、渡辺清吉、古河世

左衛門、古河又吉、福野善四郎、古河吉右衛門、古河善助、古河又左衛門、古河吉太郎、古河幸作、古河好右衛門、古河徳左衛門、古河友四郎

燈籠 真石 左高さ二〇〇cm 弘化四丁末八月十五日（一八四七）

奉献 渡辺兼平、松本源吉、松本安五郎、田中好作、田中兼助、田中鶴太郎、田中亀作、谷崎好吉、谷崎好右衛門、谷崎倉吉、古河与太郎 石工 佐賀村 徳永政治郎、徳永喜代治、徳永小一郎

### 上の原 柳の内

天照皇大神宮 真石高さ一五〇cm 市道と広域農道三叉路分岐点 上の原

文政◎己年

仏塔 墓石塔 真石二体 高さ五十cm 同所 明記不詳

むらの伝説

昔、旅人が旅行中、行き倒れとなり、この地で死亡されたので、むらの人達が慰霊のため建立されたといわれます。福野定治氏祀る。





田代伊勢碑仮移転

守本尊 真石高さ八十cm 大日秀水菩薩 天明七年末三月二十五日(一七八七)柳の内  
田代柳の内の溜池の近くに建立してあります。

#### むらの伝説

昔、男の子が池の近くを通りかかったところ、池の中から河童（川太郎）が出て来ました。男の子は河童と相撲を取ったのですが、家に帰ってから急病になり亡くなりました。そこで、二度とこのようなことがないよう、村中で建てたと云い伝えられています。



田代 タメ池守神

#### その他の地区

- 牛神様 真石高さ五十cm 毎年四月二十三日 村中で祀る 年号不詳 フウツキ古場
- 十正真権現 真石高さ七十cm 大正五年十二月 世話人 福野善四郎  
福野定治氏祀る（大平）
- 五輪塔 真石 四基 波多家一族の墓地 大 一〇〇cm 二基 小 六十cm 中の原  
谷崎清氏祀る。



田代 五輪塔(中原)

## (6) 板木

### 火の口原附近

仏 像 真石高さ七十cm 妙閉禅定尼 享保十四年己酉年九月（一七二九）城平墓地内  
前田仁氏祀る。

仏 像 真石高さ四十cm ブロック・コンクリートの上に座像で鎮座

五輪塔 真石高さ五十cm 二基 波多家一族の墓地と推定 同所にあります。

### 田嶋神社

鳥 居 第一 真石高さ三二〇cm 奉納 ◎表一基 田嶋神社入口 板木村中建立  
字前田明治十七年甲申秋九月 穀目 石工 小城郡栗原ケ里 江頭重三  
昭和六十二年九月、台風のため倒れたので、氏子中で復元されました。

### 田嶋神社

燈 籠 一对 真石高さ一九〇cm 田嶋神社石段下 明治十五年一月建立

世話人 瀬戸利平、石崎善吉 寄進 板木村中 村の方々の寄付金と氏名が銘記。当時、板木の戸数 四十五戸 石工 小城郡 西川 深川常七

石燈籠は、元來仏前に供える灯明台として作られたもので、◎前に一基を置き、献灯をしたものであるといわれていたが、平安時代の頃から神社にも供えられるようになりま

した。室町時代になってから、堂前の左右にそれぞれ一基ずつ配置するようになったといわれています。(古賀稔康氏説より)

鳥居 第二 みかげ石高さ三〇〇cm 奉寄進 大阪豊中市 坂本篤郎建立  
平成元年五月吉日 平成巳巳 石工 浜玉町 林田清七

旧鳥居は台風で倒壊したので、新しく建立された。旧鳥居は天保五年甲午歳十一月吉日 津留より移転、建立されていました。

社◎堤伊勢正 津留主屋氏子中で建立されていました。

鳥居 第三 みかげ石高さ三〇〇cm 中段 奉寄進 主屋 市丸建設 市丸徳市建立 平成元年五月吉日 平成巳巳 石工 浜玉町 林田清七

旧鳥居は、安政七庚申四月吉辰当邑氏子中

奉献 板木組大庄屋 松岡藤左衛門元秀 石工 値賀川内 徳永邑治政幸  
同国作長幸 同富四郎晴幸 社掌 堤五十鈴 総代 古館東七

### 田嶋神社

石 段 真石 下段 八十七段 明治十四年巳五月 竣工 石工 森好造

中段 三十七段 上段 六段 合せて一三〇段 中段、上段の石段は紀元二千六百年記念事業として、建設されています。石工 不明 社掌 堤正典

唐獅子 真石 一对 右高さ二七〇cm 上段にあり。お籠り堂前 社掌 堤五十鈴

総代 古館東七 明治三十二年四月吉日 世話人 畑山元左衛門、瀬戸喜久治、前田東太郎、宮総代 瀬戸重左衛門 寄進 板木村中 村中の方の氏名と寄付金を明記してあります。当時の板木戸数四三戸。

唐獅子 左高さ二七〇cm 寄進 左の鳥居は町内外の寄付金により建立。住所、氏名、寄付金が明記されています。石工 値賀川内 徳永政治郎 摘子正造 同喜代治

燈籠 一基 真石高さ一四五cm 拝殿左の下 文政十亥六月吉日 (一八二七)

奉志燈明石◎ 施主 井手徳助

手洗鉢 二基 自然石長さ一五〇cm 一基 導石高さ一〇〇cm 拝殿前 一基

天照皇大神宮 真石高さ一五〇cm 場所 拝殿の右側

文政元寅年十二月吉日 (一八一八) 以前は市道の上にあったものを昭和五年頃、現地に上げられたそうです。

### 田嶋神社

六地藏 真石高さ一八五cm 田嶋神社石段下 天正四年丙子十一月 (一五七六)

今から四二〇年前補修 毎年八月二十四日が祭日。昔から青年団主催により祭祀が行われました。カラオケのど自慢等があり賑わいます。経費はおさい銭によって賄われます。昔から地蔵回しがあり、右から左へ回し、六体の地蔵様が六年に一度祭りに会われることになっています。地蔵回しのならわしは市内でも珍しいとされています。

#### 六地蔵の意味

- 一. 地蔵道－稿陀地蔵
- 二. 餓鬼道－宝球地蔵
- 三. 畜生道－法印地蔵
- 四. 修羅道－持地地蔵
- 五. 人間道－除◎◎地蔵
- 六. 天上道－日光地蔵

地蔵菩薩を六道に配して、おのおの道を教化されること、とあります。

(仏教語大字典)

燈籠 一基 真石高さ一四五cm 六地蔵と同所

文政十亥六月吉日(一八二七) 奉志燈明石◎ 施主 井手徳助

尚、井手徳助氏が田嶋神社拝殿下の燈籠と同時に寄進されてあります。



田嶋神社階段下六地蔵 8/24祭の時の地蔵まわし



## 小野の原地区

仏 像 一体 真石高さ四十cm 小野の原 大田辰夫 水田の中主屋 大田辰夫氏  
大田幾平氏建立

波多家一族の墓地。以前は、水田の中に土盛りしてありましたが、大田幾平氏が健康祈願のため仏像を建立されました。高貴な方の墓地で、霊験あらたかで、巡礼の礼所でもありました。

## 板木霊園地

法行城主及び末孫の霊地（上段の部）

大乗妙典一字一石一部 自然石高さ一〇〇cm 寛文八戌甲天三月十六日（一六六八）建立字 前田 施主 卜翁

墓地の中に一万個の石仏を入れてあり、一個の石に一字の経文が書き入れてあります。墓地の表面に五、六体の石仏が露出しています。経文石は五、六cmぐらいのもので、当地方の石と違います。このような墓地は少ないそうです。（伊万里市文化財）

### 上 段

墓石塔 真石高さ一一〇cm 瑞法妙禅定尼 寛文十一年七月七日（一六七一）

墓石塔 真石高さ一一〇cm 逆修愁安賢◎寿位 年号不詳

石 塔 真石高さ一三六cm 祥林妙香信女 延宝五年六月十二日（一六七七）

以上四基、上段に並んで建立されています。

### 中 段

墓 石 真石高さ一〇〇cm 年号不詳 基石

真石高さ一〇〇cm 年号不詳 墓石

真石高さ一〇〇cm 三基共明記不詳

墓 石 真石高さ一〇〇cm ◎雲宗頌 墓石

真石高さ一一〇cm 直庵当松 二基共に年号不詳

### 下 段

墓 標 真石高さ一〇〇cm 年号不詳 仏塔 真石高さ一三〇cm 松山道相 寛文八戌三月十五日（一六六八）

墓 石 真石高さ一〇〇cm 瑞泉妙祥 年号不詳 外に仏像 二体 真石高さ四十cm

下 段（霊地入口）

墓標示 みかげ石高さ一五〇cm 巾 二十cm 法行城歴代城主及び末孫の霊域



墓 石 真石高さ一四〇cm 寿仙常雲信士靈位 宝永二乙念（一七〇五）

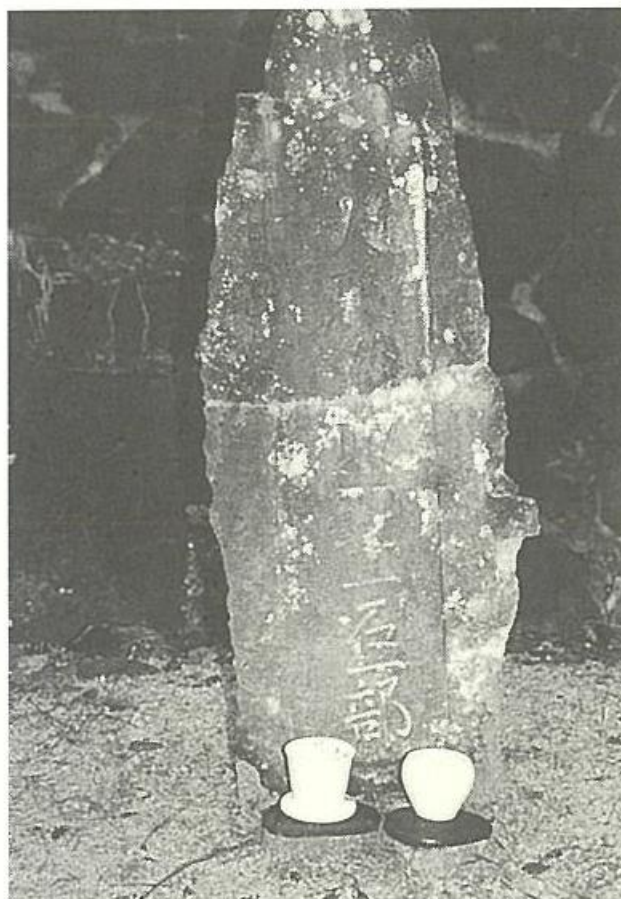
墓 石 真石高さ一一〇cm 禪林妙賀信女 年号不詳

仏 塔 真石高さ五十cm 石門上座 三体 年号不詳

仏 塔 真石高さ五十cm 智遠女基 一基 年号不詳



板木 法行城歴代城主及び関係一族の墓碑



板木霊地 大乘妙典一字一石一部

五輪塔群 真石高さ六十cm 七十基 うち一基は一四〇cm

以前は五輪塔はこの附近に散在していましたが、霊地整地の時同所に集められ整然と並べられています。管理清掃は板木老人クラブの奉仕作業で行われています。

祭日は毎年七月十日と定め、下の薬師堂より畑津宝泉寺の住職並に他の二、三人の住職の司祭により、坂本篤郎氏ほか坂本氏一統をはじめとし、伊万里市長、町内関係者、板木区民多数の参列のもとに盛大に行われます。

霊園地施主 大阪豊中市 坂本篤郎 施工 黒川町 福川建設



霊園地下段 五輪塔郡

### 法行城跡

法行城跡の碑 自然石 台高さ一三〇cm 本体高さ二〇〇cm 場所字小野の原  
 昭和五十四年十月建立 法行城主末孫に当る大阪豊中市 坂本篤郎氏  
 元寇の役後、岸岳城の出城として久我越前の守公が法行城を築き、その  
 後十七代続いています。

祭日は毎年五月、十月の二回、休日を利用して村中こぞって参拝。北波多村徳須恵堤  
 貞信氏宮司の司祭で盛大にお祭りが行われます。

皿井岳大権現 真石高さ一〇〇cm 石祠 明治十九年十一月吉日 板木村中  
 相知の皿井岳大権現様より合祀されて、現地に建立された。

享正前坊神 真石高さ一〇〇cm 石祠 安政四己八月建立 板木村中 牛神様  
 法行城跡の碑の北側 二基並べて建立 古代より牛神様祭り五月、十月村中でお祭りが  
 あっていたので、現在でも五月と十月に法行城跡祭りと同時に行われている。

### 前田、向板木、梅の木谷

馬頭観世音 真石高さ四十cm 前方 五十m先は昔の馬捨て場でした。馬供養のため建  
 立 小野の原

記念碑 自然石 台 三十cm 本体 一〇〇cm 碑文 惣庄屋跡地 法行城登り口 附近 前田 建  
 立 大阪豊中市 坂本篤郎氏

観世音菩薩 真石台高さ十五cm 本体高さ六十cm 方延元年申十二月十八日 (一八六〇)

向板木

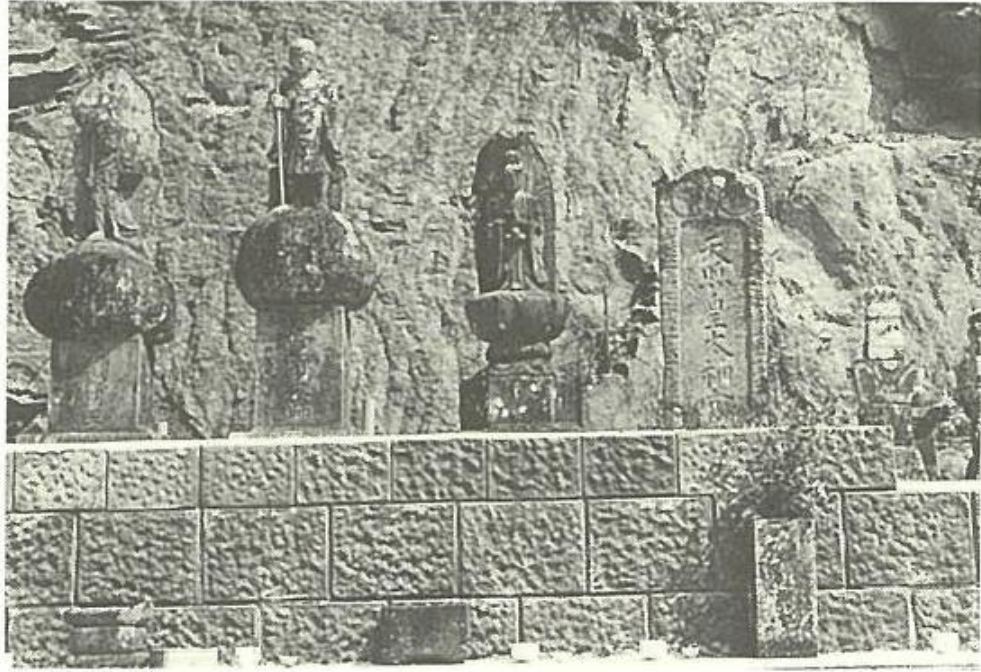
以前は巡礼の札所 前田政行氏祀る

## (7) 津留・主屋

### 公民館附近

- 田嶋神社 真石 本体高さ一〇〇cm 台石高さ一〇〇cm 小字前田 大正十一年九月吉日建立 施主 主屋 市丸広太郎鳥居 第一 みかげ石高さ三〇〇cm 同所神社入口 平成三年三月吉日 建立 施主 市丸徳一
- 鳥居 第二 みかげ石高さ三〇〇cm 平成三年十一月吉日建立 施主 市丸徳一
- 唐獅子 一对 みかげ石 台高さ一〇〇cm 本体高さ一〇〇cm 施主 市丸久吉  
石工 黒川町真手野 坂本石材工業
- 燈籠 一对 真石高さ 二〇〇cm 年号明記なし 施主 市丸徳一
- 燈籠 一基 真石高さ二三〇cm 奉寄進 主屋 市丸養左衛門
- 九重の塔 真石高さ二五〇cm 明記なし 施主 市丸徳一
- 天照皇大神宮 真石高さ九十cm 田嶋神社前方三十m山林内 文政十三寅年八月吉日  
(一八三〇) 願主 主屋村中
- 愛染明王 真石「あいじんさま」高さ一〇〇cm 同所 願主 市丸栄太郎、市丸安太郎
- 観世音菩薩 真石高さ一〇〇cm
- 立体観世音 金属製 高さ五十cm 以前は巡礼札所
- 弘法大師 高さ三十cm 以前は市丸伝造氏宅にあったのを、現地に移される。  
県道市道分岐点
- 観音堂 間口 三八〇cm 奥行 四〇〇cm 木造瓦屋根 中央奥の仏壇に鎮座。





主屋 天照皇大神宮

(8) 津留

神寄場

観世音菩薩 真石高さ一四〇cm 十手観音 四国八十八ヶ所三十番 津留橋附近（大谷橋附近へ移転）

修行大師 真石高さ一三〇cm 昭和十三年十月 一一〇〇年祭記念

不動明王 真石高さ一六〇cm 昭和十三年十月十日 施主 前田康太郎

寄附者 畑島 平田武一郎 中山 大田初五郎 弁賀 栗原政太郎

中山 古賀泰助 弁賀 高盛森右衛門 高瀬 鶴田幸太郎 重橋 田中国平

仏像 一体 真石高さ六十cm 年号不詳

五輪塔群 真石高さ四十cm 十八基 他仏像 二体

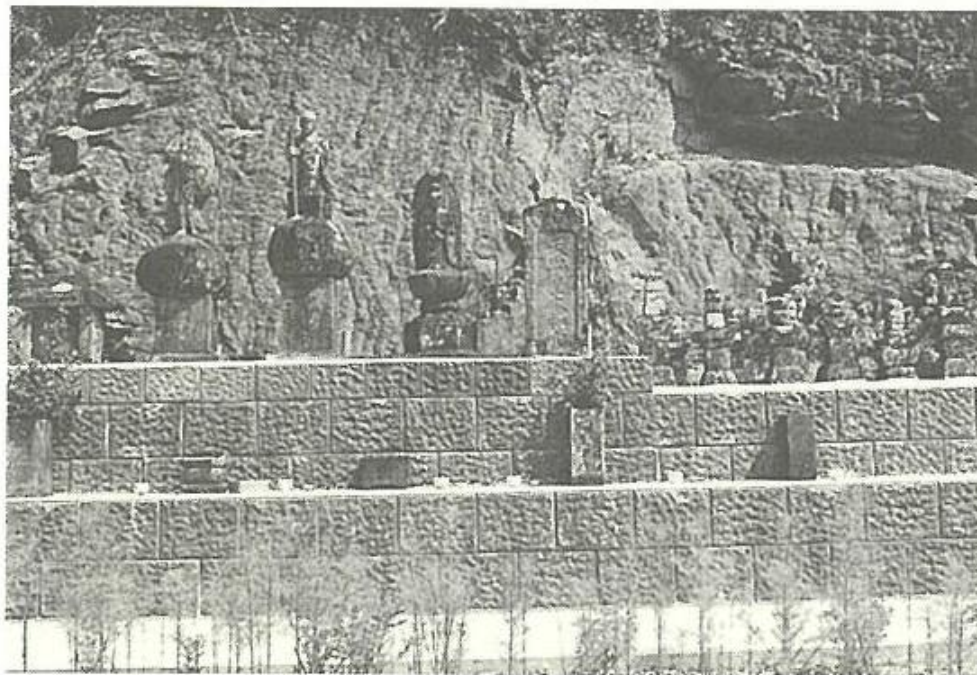
天照皇大神宮 真石高さ一〇五cm 明記不詳

燈籠 一对 真石高さ 一〇〇cm 文化五年辰年二月吉日（一八〇八） 願主 庄七 倉庫裏

左の燈籠 高さ一〇〇cm 文化十四丁◎冬三月吉日（一七九九） ◎主 惣兵衛、利助

御神体 木造 建物 間口 二〇〇cm 奥行 二三〇cm 木造瓦葺 肥料倉庫裏

明治三十七年奉納 日露戦争当時の額絵があります。右 八体 同所津留橋 附近に集めてあります。



神 寄 場

### 津 留

馬頭観世音 真石高さ八十cm 津留 市丸正氏宅裏山

仏像一体 真石高さ一〇〇cm 塚本家菩提 施主 塚本家 昭和二十八年八月二十一日

石仏像一体 真石高さ一三五cm 施主 市丸千代子

### 十六羅漢像 津留下大谷

第一号 真石高さ七十七cm 為秋月知信士 菩提建立施主 五左衛門

第二号 真石高さ六十cm 十六羅漢尊像先祖 追善供養 同所

第三号 真石高さ六十cm 文化申子八月二十五日（一八〇四）同所

第四号 真石高さ六十cm 以下十三体は同じ仏像でも、持ち物がそれぞれ違っています。 燈籠 真石 一基 高さ一五〇cm 明記不詳

燈籠は台風のため下の溜池に転げ落ちましたが、津留区民が現在地に復元。十六羅漢像は津留大谷の山の中段に大岩の下に一列に並べ建立されています。十六羅漢は、正法護持のため講じられた修行者の一群であり、賓度羅跋羅惰闇尊者 迦諾迦代蹉尊者等で構成されていて、禅宗では修行の過程として、羅漢を崇敬している十六羅漢は釈迦如来の◎属として表現されている場合が多い。（佐賀石造文化より）

五穀神社 真石高さ一〇五cm 津留区の正面の山の頂上

天保五年甲午九月吉祥日（一八三四）津留主屋村中建立 石工 行合野邑文七

以前は、むらの人達が豊作祈願をし、お籠りし酒盛りが行われていました。五穀神社は明



治四十年板木、田嶋神社に合祀になっています。

石仏塔 波多三河守 真石高さ四十cm 横十六cm 波多家一族の墓地 明記不詳  
津 留 前田高信氏の裏山にある。



十六羅漢像

## (9) 中山

### 大山祇神社境内

- 鳥居 第一 高さ二七〇cm 明治六年癸酉三月 奉献 中山村中  
石工 頭梁 馬蛤潟新田 徳永忠四郎、行合野 原田文七
- 鳥居 第二 真石高さ三一〇cm 明治四十年一月 区長 古賀◎四郎  
世話人 田中市二郎、古賀国太郎、古賀庄次郎、田中未治郎  
石工 松浦村山形 横田勝三郎 水害により倒壊、平成二年十二月再建
- 燈籠 一基 真石高さ一七七cm 慶応元年九月（一八六五）奉献  
庄屋 中川重左衛門重勝

燈籠 一基 真石高さ一五〇cm ◎主 当村 大作 元治元甲子九月吉日（一八八六）  
石工 徳永村治、徳永正幸

燈籠 一对 真石高さ三〇〇cm 明治三十三年七月吉日 奉献 松尾作太郎  
社掌 堤五十鈴 惣代 田中善太郎 世話人 富田千代松、古賀久太郎、  
松尾作太郎

鳴獅子一对 真石高さ二四〇cm 奉献 明治三十一年五月吉日 惣代 田中善造  
世話人 田中善助、古賀庄治郎、古賀初太郎 寄附者 各方面より多数明記石工 値賀川  
内 徳永政治郎、摘子政造、喜代治、小一郎

皇大神宮 真石高さ二一五cm 文化十五戌寅六月吉日（一八一八）明治四十三年  
神社統合の折、字立石より神社境内に移転。

### 大山祇祇神社境内

牡丹狂唐獅子 真石横 五十六cm 奉献 明治三十一年五月吉日 惣代 田中善造  
神社のお籠堂の中央奥に掲げてあり、明治三十八年 横田勝三郎作

この牡丹獅子は、横田氏が七十日間の日数をかけて作り上げたとの伝えがあります。

牛神様 祇園牛頭 真石高さ四十五cm 大神宮と同所

手洗鉢 二基 白然石

### 大山神社附近

三界万霊地藏尊 真石高さ一二〇cm 中山区入口 県道、市道、農道分岐点  
天明四辰年（一七八四）施主 中山村 治右衛門 祭日は毎年八月  
二十四日 村中で祀る。

建物 間口 一三〇cm 奥行 一三〇cm 木造瓦屋根

記念碑 自然石 台一〇〇cm 本体 二三〇cm 中山区入口 同所  
広域農道開通 土地改良竣工記念碑 碑文 伊万里市長 竹内通教書  
中山区 事業総延長 二四二〇m 巾 六・五m 二億六五〇〇万円  
用地買収 水田 一一・七六五㎡

工期 自昭和五十一年五月 至昭和五十五年十二月

請負業者 上瀧建設 黒木組 大和舗道

歴代区長 古賀隆、田中権助、田中茂雄、古賀幸男、松尾達男

第四工区 土地改良竣工 面積 一二三、三八七㎡

工期 自昭和五十三年 至昭和五十四年

建設委員長 古賀幸男 副委員長 古賀金満

委員 田中敏男、田中秀穂、松尾忠夫、古賀正春



三界万霊地藏尊

### 大山祇神社附近

記念碑 イボ石高さ二四〇cm 農道改修記念碑 明記なし 大山祇神社前

### 公民館附近

阿弥陀如来 木造高さ 一三〇cm 中山公民館内にあり

観世音菩薩 土造り 一体 高さ四十三cm 場所 公民館前 同所管理 田中友一氏

位牌 真詳雲源吉禅定門霊位 千時 天正八年庚辰十月四日（一五八〇）

建物 間口 一八〇cm 奥行 一八〇cm 木造瓦屋根

六地藏 真石高さ一七五cm 文政十亥八月吉日 領主 庄六（一八二七）同所公民館前

以前は、青年団主催により毎年八月二十四日、地藏祭りがあったそうです。

忠霊塔 真石高さ二六〇cm 場所 公民館裏 字立石

大東亜戦役 戦死 戦病死者 慰霊の塔（日露、日清、大東亜戦争）

建設委員 区長 古賀繁造 副 古賀広造 委員 古賀徳助、田中友一、古賀定  
松尾達男 法名塔には、各地での戦病死者を明記してあります。

戦没者 松尾茂吉、坂本好五郎、富永豊、古賀吾郎、田中孝一、大田初五郎、  
古賀庄助、田中千光 大田春一 田中秀芳 以上十名

慰霊祭は年一回、折をみて村中で行われます。

### 久保田地区

弘法大師 真石高さ六十二cm 明治三十四年十二月 中山村中 久保田地区山の中  
奉納 惣代 坂本吉右衛門 世話人 田中善造、古賀庄助

千手観音 真石高さ六十二cm 奉納 西国第十山代の国 宇治郎千手観音 三◎寺  
同所 明治三十七年六月 祭主 田中善造 建物お堂 間口 二〇〇cm  
奥行 二五三cm 奉寄進大工 富永正人 木材 古賀寛幸 瓦 古賀輝男  
一万円 田中米倉

以前は巡礼の札所になっていました。

### 上の原地区

稲荷大明神 真石高さ四十cm 正一位稲荷大明神 場所 上の原 二月初午の日、村中  
で祀る。

泳城光王守 真石高さ一一〇cm 奉寄進 嘉永五年申子十月二日 中山村中 定平

稲荷大明神 文政十三寅八月吉日 寄進 清六（一八三〇）同所昭和五十四年八月吉日  
再建 建物 間口 三〇〇cm 奥行 四〇〇cm 木造瓦屋根

記念碑 中山光生頌徳碑 自然石高さ二六〇cm 場所西の平 県道の近く

中山豊次郎先生は元治元年、八月二十六日、鬼塚村千々賀に生れ、その後波多津村大字中  
山に移住。以来、明治十三年四月一日より、明治二十六年四月二十 四日迄、大平尋常小  
学校に教師として勤務。明治二十六年四月二十五日より、大正三年三月三十一日まで、波  
多津尋常小学校に訓導又は、校長として勤務、三十四年に及びました。門下生も千人に及  
び、恩師に対し記念碑を建立。大正四年一月建立 石工 西山代浦の崎 岩永与市

### (10) 畑津

#### 田嶋神社

鳥居 第一 真石幅一九五cm 高さ三一〇cm 柱一五五cm 亀石三十cm

明治十三年一月三日 神主 牧野伝寿重

旗 柱 真石明治三十五年三月吉日建立 畑津青年

鳥居 第二 真石高さ三〇〇cm 田嶋宮 寛政三庚午正月吉日(一七五〇)

願主 青木助右衛門 社司 安藤但馬守政命 鳥居一字事氏子中  
中島大左衛門 辻理七、川上与市弥左衛門

燈籠 一基 真石高さ三〇〇cm 明治二十七年甲午陽念日 畑津中  
石工 伊万里町 大山吉之助

燈籠 一基 真石高さ二四〇cm 嘉永三庚戌年九月吉辰（一八五〇）内野 天神社より  
奉獻 願主 向格助、賢、金子友作 産子中

燈籠 一基 真石高さ一二〇cm 年号不祥

燈籠 一基 真石高さ一二〇cm 明治三十年二月吉日畑津浦 高木宇太郎

燈籠 一基 真石高さ一八〇cm 文化十癸六月吉祥日（一八一三）奉獻 畑津村中  
永受国明

燈籠 一基 真石高さ一一五cm 願主 鉄兵衛 安政二年乙卯 正月吉日（一八五五）

燈籠 一基 真石高さ九十cm 安政五年十二月（一八五八）馬蛤潟新田 定兵衛建立

燈籠 一基 真石高さ一八〇cm 奉修 文久二年戌九月（一八六二）

燈籠 一基 真石高さ二三〇cm 願主 歳三方 田中勇治 文化十五年戊寅二月吉日  
（一八一八）

燈籠 一基 真石高さ二〇〇cm 奉寄進 施主 中島平四郎 同秀吉 灯袋なし  
文化十三年歳七月末日（一八一五）

燈籠 一基 真石高さ二二〇cm 奉寄進 千時文化第九歳次壬申春（一八一二）  
当邑 施主 大久保友八 嫡子 庄造 建立

燈籠 一基 真石高さ二一五cm 永受国明 文化十癸酉年六月吉日（一八一八）



### 国重要文化財指定の田嶋神社(畑津)

記念板 石碑 みかげ石 田嶋神社本殿 国重要文化財指定記念 昭和六十二年六月三日  
宮司 田中義矩 世話人 田中繁、井手正司、内田勇、吉田光男、市会議員  
野口義一、田中静男 総代 酒谷勇、大久保昇、酒谷作夫、柴田辰己、金子典、田中善之助、  
篠崎清一  
区 長 橋口熊吉、金子秋穂、田中敏、松本勇一、小杉繁、田中勝、柴田義一、高森剛  
石工 内野 小杉石材彫刻 昭和六十三年三月吉日





## 国重要文化財指定 記念石碑

- 手洗鉢一基 高さ四十五cm 横六十cm  
 奉献 畑津村 馬蛤潟 若者中 天保十三年寅季秋（一八四二）
- 鳥居 一基 砂石 奉造栄 ◎表一基 寛政九丁己歳 内野区より  
 内野天神原より移す 昭和五十四年八月 内野氏子中
- 唐獅子一对 真石台 一三〇cm 本体高さ八十二cm 明治十三年辰十一月二十五日  
 右 施主 辻村 稲葉義方、池田忠助、波多定右衛門、栗原善造、栗原常平、川上孫四郎  
 石工 上戸川 永石義実
- 左 真石台 一三〇cm 本体 八十二cm  
 奉献 辻久雄、吉田久助、栗原又左衛門、川本嘉平、池田群平、  
 小石原兵左衛門、栗原常吉、波多吉左衛門、栗原与七、栗原義作、山口東作、栗原作右衛  
 門、栗原源作、栗原定作、小石原十兵衛、栗原定吉、  
 栗原安右衛門、稲葉宇吉、黒川大助、栗原利平、高木利平、高森利介、  
 栗原熊作、高森政右衛門
- 天照皇大神宮 真石高さ一五〇cm 享保国歳九月吉日
- 天照皇大神宮 真石高さ一二〇cm 寛延三年 庚午十一月吉日（一七五〇）
- 忠魂碑 みかげ石高さ四二一cm 田嶋神社境内に建立  
 帝国在郷軍人会波多津分会 大正十年一月吉日 のち波多津小学校より 移転  
 （昭和二十六年）
- 燈籠一对 みかげ石高さ一八六cm 波多津町遺族会 忠魂碑の前

祭神芳名金物塔 台みかげ石高さ一〇〇cm 金物塔高さ一一〇cm 戦没者を明記  
 建設委員 市丸繁夫、古川仙吉、古川久一、金子常作、井手東太郎、  
 正野重信、前田四郎、波多津町遺族会  
 慰霊祭 毎年四月十六日 遺族会並びに軍恩会の主催により慰霊祭が  
 あります。



田嶋神社境内 忠魂碑

**宝泉寺** 字八斗田 一三一四番地

歌 碑 自然石台高さ五十cm 本体一四五cm 幅七十cm 宝泉寺 境内下段  
 彼岸花咲く石段を のぼりつつお寺にとまる うれしさにあり 中島哀浪作  
 藤原翠書 昭和五十二年二月 向大進 建立

心洗 一基 自然石高さ一〇〇cm 奉献 永平誉院文輝 同所

地藏大菩薩 真石高さ一二五cm 台一〇〇cm 畑津若者中

石仏 一体 真石高さ七十cm 花立 線香立 施主 内野 小杉辰夫 昭和十九年

燈籠 一对 真石高さ一二〇cm 献灯 施主 梶原俊一

金仏塔 鉄塔高さ一六八cm 台一〇〇cm 建立 慶造院 三徳寿光居士  
 慶幸院三省寿信大姉菩提 功德主 辻正明、向寿美子 製作 福岡市

株式会社 竹中製作所 宝泉寺 十八世黄龍大進代 昭和四十八年八月八日

燈籠 一对 真石高さ一二〇cm 献灯 施主 梶原俊一

念彼観音力 自然石高さ二〇〇cm 観世音菩薩奉賛一同建立 昭和四十九年 仏誕生日

六地藏一对 右側 真石高さ一九三cm 石段上り口 右側

左側 真石高さ一八〇cm 永禄六年癸亥年（一五六三）明記不祥

五輪塔一基 真石高さ一一〇cm 十基 宝泉寺下段にある。

### 宝泉寺上段

地 蔵 真石台高さ三十cm 本台 九十七cm 宝泉寺正面玄関 年号不祥

石 仏 真石高さ七十cm 四体 明記不祥

板碑 一基 砂石高さ二〇六cm 幅 七十五cm 明記不祥

墓石 一基 真石高さ一四〇cm 明記不祥

地藏尊 真石一体高さ九十五cm 菊芳竜子位 明和七年寅年十月

墓石塔 真石一基高さ一六〇cm 住持族合霊塔 宝泉寺の上の山の中 年号不祥  
宝泉寺歴代住職の墓地

五輪塔群 真石高さ一〇〇cm 四十体 坊主 七体 八十cm 墓地内にあり。

### その他 地区

同社宮 真石高さ八十八cm さやの神 字 沢の元 天保十五年十月吉祥日（一八四五）

施主 分吉 藤左衛門 交作 鉄造 虎造 平造

守本尊地藏 自然石高さ一二〇cm 中央に仏像を浮彫りで彫刻 高さ三十八cm

蕨野池の所

この溜池に水死事故があり、二度と事故がないよう守本尊を建立。村中

馬頭観世音 真石高さ五十cm 場所荒粉 黒牟田のむらの農機倉庫の上、新通を越えて  
桧林の南側に移転。年号不祥。以前は下の方にあったが、圃場整備のため  
に現在地に移転される。

五穀神社 真石高さ六十cm 幅四十五cm 守穀神 農家の神様 むら中央西の山

建物 間口 二〇〇cm 奥行 二〇〇cm 木造瓦屋根 昭和二十五年旧八月  
十五日建立 信者二十名。

毎年旧八月十五日に中組の信者と、上下の信者が集まって参拝。重箱一杯の御強飯を神前  
に供え、参拝後その御強飯を振舞う。各人、重箱一杯、神に捧げるので帰る時も同じ女の  
人が御強飯を配っていました。男は神前で酒盛りがあっていましたが、現在では公民館で  
行われる。

祇園牛頭天王 真石台 五十cm 本体 九十cm むらの中央前の山 中島

桜の木を植え、公園のようになっており、見晴らしのよい所です。以前は春と秋、田嶋神社の祭りの時、同時に参詣がありましたが、現在では年に一回だけになりました。

## (11) 内 野

### 公民館附近

忠霊碑 内野区では、明治二十七、八年の日清戦争の時、一名戦病死されただけで、以後は度々の戦争にも従軍者はありませんでしたが、一名の戦死者もありませんでした。しかし、大東亜戦争の時には、十八名もの若い生命が奪われました。

区としては忠霊への感謝礼拝に最も適当な所として、公民館広場を選びました。昭和二十九年軍友会の労力奉仕によって建碑が進められ、五月十四日除幕式と第一回慰霊祭が行われました。その後は、毎月一回婦人会による定例清掃礼拝と、毎年春（四月）、秋（十月）の二回、区主催による慰霊祭が行われます。



忠霊碑 平成元年7月25日

## 道路改修記念碑

忠霊碑から南へ五十m、県道からお寺へ行く道が分かれる所に建立されています。碑の基壇正面に「地方文化ノ興隆民衆ノ福利ハ交通設備ノ発達ニ俟ツコト大ナリ。区民之ヲ望ムコト久シ。氣運茲ニ熟シ、第一期事業トシテ昭和五年二月起工、同六年三月二至リ田嶋神社前ヨリ字材木間吉千七十有◎間（約一九五〇m）ヲ竣工ス」とあり、記念碑は、道路の開通を祝って建てられています。

それから年を追って改良工事が進められましたが、昭和四十五年、待望の主要地方道（県道）の指定を受けました。続いて四十九年、国見山麓広域農道が開通して、県道と高尾で合流し、畑川内まで県費により施行されました。更に、五十四年農耕地の基盤整備事業に於て、字内野の県道と広域農道間をつなぐ一七〇〇 mの基幹農道が開通し、内野南方高地は俄に交通が便利となりました。記念碑には、詳細は書かれていませんが、碑は詳さに先人の労苦と喜びを語りかけます。

（歴代区長保管 道路沿革史より）

## 馬頭観世音石像

位置 道路記念碑よりお寺道を僅かに行った左側、屋敷畑の一隅、屋根付のお堂に祀られています。

設立年 文化八年（一八一）五月十七日

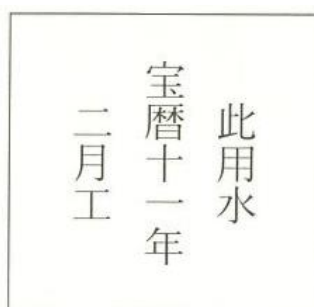
信仰心の厚い村と云われながら、地蔵様一体もなかった村に、突然馬頭観世音さまが出現された。というのは、実はこの屋敷畑の前の住人が、ここに来て屋敷を造成する時、前の屋敷で建てた観音様も一緒におつれしたということです。像の前に小銭が散らばっているのは、通りがかりの人がお詣りされたものでしょうか。

## にほぎ井堰附近

### 井堰工事記録岸壁

道路記念碑から県道を南へ一〇〇mばかり行くと、左の方に直角に各家への木戸道が分岐します。その内角に、BM 1 1 - 15・六七八mの水準点標柱が建っています。標高一五・六七八m（公示）

水準点標柱から僅か南へ行くと、ガードレールが切れて右に池の谷、市道二二五号線が分かれています。道幅四m、延長約一〇〇〇m、全線アスファルト舗装、昭和六十一年完成。



道は渡河後山麓を縫って左へ行きますが、右の方へ数m行きますと、木立の切れた左側の岩膚に、上のような記録が彫りつけられています。今から二三〇年前のことです。

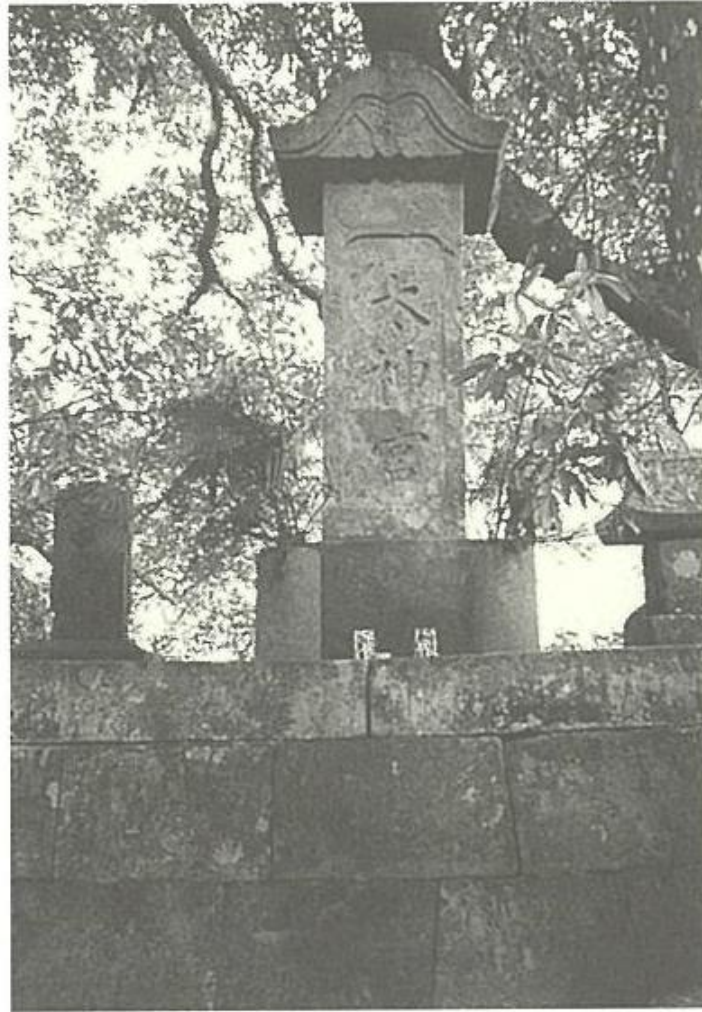
宝暦十一年は、大変な日照り続きで、時の藩主第四代土井大炊頭源利里雨乞いの祈祷をさせたり、川の水をせき止めて、井堰を作ったり、堤を掘ったりしたのではないのでしょうか。岩膚に彫られた、たったこれだけの文字が、当時のことをいろいろと考えさせてくれます。この文字は木の下蔭に苔に被われて、長い間、誰も気付きませんでした。最近全く偶然の機会に発見されました。

### 横道附近

#### 太神宮碑 場所字土屋

通称、横道お伊勢山のたぶ、杉、檜の古木に囲まれた一画に鎮座され、左側面に岩野官蔵為正、村中と二行に並べて書かれているのは建立者でしょう。岩野氏は当時の内野村の庄屋のようです。右側面には寛政十三歳辛酉仲春吉日造立年が書かれています。太神宮碑を中心に、左に副祠されているのは菅原道真公を祭っていた天神社の神祠、右のは権現山に祭っていた飯盛権現神社の神祠です。共に明治末期のいわゆる神社統合令によって、畑津田嶋神社に合祠されたので、太神宮碑と同じ場所に奉祠礼拝しているのです。





左天神様祠 内野太神宮碑 右飯盛神祠

## (12) 煤屋

### 公民館附近

慰霊碑 自然石台高さ一〇〇cm 本体高さ一七五cm 公民館横

昭和二十七年十月 大東亜戦争講和発効記念 復員軍人一同建立

煤屋戦死者 大東亜戦争の時の殉国の士は次の通り

小野東三、佐伯義光、岩本光男、田中嘉市、田中磯雄、鶴田広人、田中虎夫、

田中政敏、田中善九郎、田中幾助、田中琢也、田中兼吉 以上十二名

慰霊祭は年一回、村中で行われます。

地藏様 真石高さ一一〇cm 煤屋公民館下 海岸の方向一〇〇m先

三界万霊 地藏尊 寛政三年亥辛正月吉日（一七九一） 施主 治右衛門

### 殿の浦地区

薬師如来 真石二体 右高さ四十cm 左高さ四十七cm 殿の浦 山の中

硯石があり、鉄製、ワニ口、薬師如来末座像 二体  
建物 間口 一九〇cm 奥行 一六三cm 木造瓦屋根

手洗鉢一基 自然石

五輪塔群 真石高さ七十cm 六基 石仏二体 高さ 四十cm

八大龍王 真石本台九十七cm 台高さ七十cm 道路の上

宝永二乙酉歳（一七〇五）建立 文政五年午年 明治十年己卯十一月まで  
三回建替え。灰の浦新田の守護の神として祀られている。

煤屋村中 惣代 田中敬三 田中和助

### 黒男大明神

鳥居 真石高さ二八〇cm 黒男大明神 小字煤屋 海岸附近

天保十三牛寅歳正月（一八四二）吉辰 経営 名頭善九郎 惣代 東造 浅吉

燈籠一对 みかげ石高さ一七七cm 黒男大明神 施主 伊万里市農協長 田中正爾

平成二年七月吉日 宮惣代 田中繁 世話人 田中敏幸、田中次男

評議員 田中勝利、佐伯光義、岸本熊市、田中建一

疫神斎の面一对 木製 黒男大明神のお籠り堂の中に安置されています。

明治十二年乙卯五月二十八日作製 鶴田翠郷

当時、疫病が大流行したので福田村、馬蛤潟村堺に魔除けとして立てた面。



煤展 黒男大明神鳥居  
屋

### その他の地区

- 観世音菩薩 真石高さ四十cm 宮本尊千手観世音菩薩 伊勢の元  
大正十年十月 稗木場 松岡圓造創始 第十二番岩間山 正法寺の分霊  
昭和四十七年三月二十日建立 建造物 間口 一九七cm 奥行 一八九cm  
木造瓦葺
- 天照皇大神宮 真石高さ一四三cm 伊勢講祭り 伊勢の元  
正徳三癸巳七月吉日（一七一三）願主 田中善右衛門 祭日 五月、  
九月の各十一日
- 地藏尊 真石高さ一三〇cm 三界万霊地藏 煤屋入口 字清五郎  
文政七甲申四月二十九日（一八二四）施主 石工 大山林五郎 田中正司
- 辨財天 真石高さ五十cm 享和二年戌十一月吉日（一八〇二）  
施主 当邑 平左衛門 内番窪
- 龍神社 真石高さ四十cm 明治十四年四月 田中園作 敬作 敬作 ◎口敬助新田の  
守護神
- 龍神社 真石高さ四十cm 明治十四年辛巳八月 鶴田新田  
鶴田見純翠郷 石工 木須村 山口弥助

### (13) 馬蛤潟

#### 海岸堤防附近

八大龍王 真石台 九十cm 本体高さ九十五cm 石祠 堤防の守護神 力武新田堤防

明治二十九年九月吉日 力武善七 建立

龍神宮 真石高さ七十六cm 建物間口 二九四cm 奥行 二九二cm 木造瓦葺

深浦国道の上

龍神社は海上安全の守護神並びに地域住民の守り神、豊作物の豊作の守護神

として尊敬され、宮司の司祭のもと、今日に至っています。

記念碑 自然石台高さ九十五cm 本体高さ一九〇cm 新田堤防 海岸近くの国道二〇四

号線の近く。堤防改修記念碑 碑文 伊万里市長 山口正次書

この堤防は、宝永三年（一七〇六）唐津藩主寺沢公が築造を計画、寛政年間、佐賀授産社擲として着工された。東山代町力武善七氏によって、潮止め工事が行われ、改修されて以来、伊万里梅屋定治郎氏の所有であったが昭和十八年煤屋、馬蛤潟両区の管理になりました。しかし、多年の歳月によって、老朽化が甚しく、地元でも維持困難をきわめ、昭和三十六年五月、県の事業として取り上げられ、補強完成したものです。

受益面積 四六 ha 昭和四十一年四月六日

碑文 酒谷久雄書 馬蛤潟、煤屋区建立 石工 内野 小杉辰夫

記念碑 自然石高さ一七五cm 馬蛤潟新田二百年祭記念碑 午の木国道前

明治三十八年乙巳 神寄場 馬蛤潟新田が出来てから現在で二八五年。

観世音菩薩 真石高さ五十八cm 石仏 井手正男氏宅横

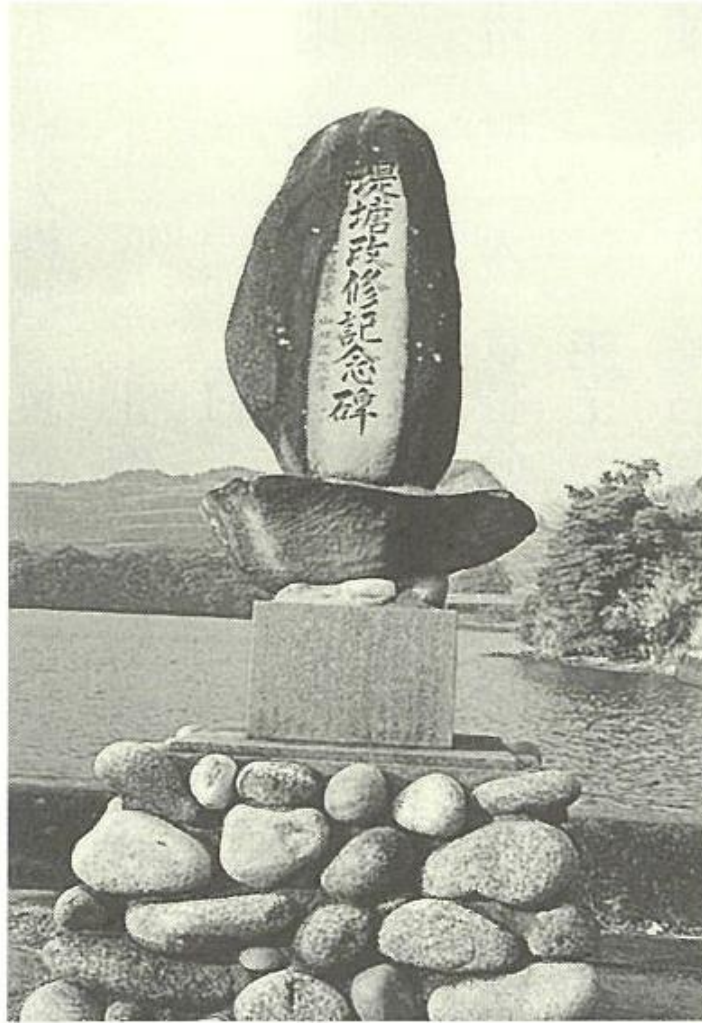
馬頭観世音 真石高さ四十七cm 明治三十年十一月吉日 旧暦八月十日 毎年村中で参拝

大日如来像 真石箱入り五十三cm 石仏像 昭和十一年旧七月十日

子安講様 真石高さ三十cm 右四体 同所神棚に鎮座

建物 間口 二〇〇cm 奥行 三〇〇cm 木造瓦葺 お籠り堂

以前は巡礼の札所 井手正男氏が管理、祀られています。



海岸堤防記念碑

### 公民館附近

牛魂之碑 自然石台 九十五cm 本体 一九六cm 公民館前

碑文

「馬蛤潟区、産業の一助として、飼牛を肥育し、年々之を屠殺場に送る。 而も人類  
営利のためと雖ども、此の犠牲者たる無辜（罪がない）の動物に対し同情と感謝なき能は  
ず、依って碑を建て毎年供養を営み以て菩提を弔ふ者也」

昭和八年八月建立

我農生謹書 新田鷹平 石工 島村沢辺

祭日 毎年八月十日 馬頭観世音、観音様と同時に田嶋神社宮司により慰霊祭。





牛 魂 碑

### その他の地区

稲荷社 真石高さ三十cm 正一位御社大明神 小灰の浦

建物 間口 一二〇cm 奥行 一四七cm 木造瓦葺

五輪塔 真石 二基 右高さ七十cm 左高さ七十六cm 深浦供養の辻

岸岳城 波多家一族の墓地

建物は木造瓦葺きでしたが、台風のため屋根が吹き飛ばされ、現在は  
ブロック塀で墓地を囲んでいます。馬蛤潟下組で祠る。

稲荷社 真石高さ三十cm 建物 間口 一三〇cm 奥行 一三〇cm 渡辺宗隆氏宅の上

初午の日に村中で参拝。管理・祭祀は渡辺宗隆氏

石 仏 真石高さ五十cm 仏名 年号不祥 字竹山

記念碑 自然石台高さ六十七cm 本体高さ四〇七cm 馬蛤潟区入口 松の元

竣工記念碑 農村基盤整備事業波多津西部地区 煤屋、馬蛤潟、内野、畑津



総事業費 四四五、八九九千円 農業生産基盤整備事業 三四一、六一九千円

圃場 五十 ha 農道整備 一条 一、七三〇m

農村生活環境基盤整備事業 一〇四、二八〇千円 農業集落通路整備 三条 一、七四二m

農業集落排水施設整備 一条 九〇八m 農業近代化施設等用地整備 一ヶ所三〇〇〇m<sup>2</sup>着工 昭和五十二年一月 竣工 昭和五十八年三月

事業主体 伊万里市農村基盤整備事業推進委員会

#### (14) 辻

##### 町公民館附近

猿神社 真石台高さ九十cm 本体高さ 八十五cm 石祠 波多津町公民館講堂前（猿神）  
畑津八斗田 田嶋神社にて祀る。毎年初午の日が大祭日、神社宮司の司祭により、  
氏子総代参列して祭事が行われます。

手洗鉢 一基 自然石 大正十年四月五日 施主 辻 赤崎組で建立

地蔵様 一体 真石高さ四十cm 年号等不詳 同所



大口 猿神社

## 養寿寺

地蔵尊 二体 真石 右高さ六十八cm 左高さ五十五cm 辻養寿寺入口石段下  
年号不詳 奉納 花立 導石幅 四十cm 昭和三十二年三月 池田作市  
水鉢 真石幅 四十cm 施主 栗原哲夫 多数の参詣者があります。

十三の塔 みかげ石高さ五八〇cm 養寿寺境内  
奉納 昭和五十五年三月吉日 施主 川本満義 高森清一

観世音菩薩 二体 真石高さ四十cm 養寿寺境内 建物 間口 一〇〇cm  
奥行 九十五cm 木造瓦屋根

地蔵尊六体 真石高さ五十cm 年号不詳 養寿寺境内

## ○本 辻

### 神寄場

墓石塔 真石高さ一四四cm 本辻 集落の上の山 波多津の浦行き近道のところ  
悟雲浄顕禅定門 久窪妙昌寿位 延宝六戌午十一月十四日（一六七八）

墓石塔 イボ石高さ一六五cm 本禅以下 読取り不能 同所

五輪塔群 真石高さ六十六cm 五十体 内十体 高さ九十六cm 同所

以前は畑地に散在していましたが、むらの人達が当所に集められた。  
また、草やぶや土の中に埋没していたものは、老人会ふるさとクラブの手  
によって整理されました。

阿弥陀仏 木製高さ五十cm お堂の中に鎮座  
建物 間口 一八〇cm 奥行 一六〇cm 木造コンクリート台瓦屋根  
年号不祥

観世音菩薩 木製高さ二十五cm 建物 間口 二三〇cm 奥行 二七〇cm 木造瓦屋根  
年号不詳 同所

地蔵尊一体 真石高さ五十四cm 三界万霊の高さ五四cmの上に。神寄場東方一〇〇m、  
旧道路、馬蛤潟と波多津浦との交通路



本辻 五輪塔

### 深浦地区

記念碑 竣工記念碑 自然石高さ一五五cm 横幅 二七〇cm 碑文 伊万里市長竹内通教  
 団体営土地改良総合整備事業 深浦地区事業概要 総事業費 五、五〇〇万円  
 農道整備七〇〇m 区画整備一・五 ha 営農用水一八・三 ha  
 着工 昭和五十五年十月 竣工 昭和五十八年三月 事業主体 伊万里市

○平 串

### 神奇場（お籠場）

十三仏様 仏像 コンクリート製十三体 高さ七十七cm 別の二体もコンクリート製  
 谷子

不動明 一体 高さ 一五四cm 不動明 小一体 高さ一〇〇cm 同所

観世音菩薩 一体 高さ一九〇cm 子安弘法大師 一体 同所

仏像 一体 台高さ一六五cm 本体四十cm 修待大師 同所

観世音菩薩 一体 台高さ六十五cm 本体 一四五cm 外に四体の仏像 五十cm 同所

お籠り堂 間口四〇〇cm 奥行三十一cm 木造 トタン屋根 発起人 平串 栗原兵作  
 昭和五十年厄入り安全祈願のため建立

祭日は毎月二十八日ですが、毎朝むらの人が参拝される。

平串のむらの入口、谷間所で以前は湧き水を利用して、不動明の体より落ち水（滝）に打たれ、念仏を唱えながら修行する人もあったといわれます。

地蔵尊 真石本体五十四cm 三界万霊の上 昔の旧木場行き道路の雑木林の中  
文化十二亥十二月吉日（一八一五）辻村 東吉建立



平串 十三仏様

○弁 賀

**浦山地区**

正一位豊受稲荷大明神 御神体六体 海上守護の神 字浦山  
靈験あらたかで参詣者が多い。大祭日は、毎年初午の日。  
病気災難除けの神様として崇敬されています。  
お籠り堂 間口一九〇cm 奥行二〇五cm 木造瓦屋根  
管理者 内田勇氏

稲荷社 飯盛高綱大明神 お堂 間口一九〇cm 奥行二〇〇cm 木造瓦屋根 浦山  
施主 高森佐平治 現在は転居不在のため村中で祀る

燈籠一对 真石高さ一四八cm 昭和二十二年二月吉日建立 施主 高森茂吉（現在  
小倉市に居住）

鳥居二基 木製寄進 高森久年 祭日 初午の日





弁賀 田嶋神社

#### 奥地区

- 甲神塔 自然石高さ五十八cm 本体 九十六cm 文政十戌年子霜月（一八二七）字奥  
高森勤氏宅上 高森勤氏が祀る。
- 八大龍王 真石高さ五十五cm 二体 海上守護の神 年号不祥 高森三太郎建立 奥
- 石 仏 自然石高さ五十五cm 金◎神岸岳末孫屋敷御先祖 仏像 真石 四十cm 一体
- 墓石塔 真石高さ七十cm 波多三河守家老 高森護建立 高森勝馬氏祀る。  
右四体 同所 みかん畑の中。

#### 池の元地区

- 馬頭観世音 真石高さ一〇〇cm 万延元年甲十二月（一八六〇）又左衛門 字池の元
- 観世音菩薩 仏像二体 木製 右高さ五十四cm 左高さ四十二cm 観音堂 同所  
昭和五十七年三月吉日再建 お籠り堂 間口 二八六cm 奥行 三一〇cm  
木造瓦屋根 世話人 内田勇 大工 釘島孝司 寄付者二十一名によって  
建立。
- 大日如来 真石 六十二cm 昭和五年一月吉日 施主 高森熊之助 池の元
- 岸岳末孫の墓 真石高さ九十cm 建物 間口 一〇八cm 奥行 一〇五cm 木造瓦屋根  
同所に岸岳末孫の墓地と推定される墓地が二ヶ所あり 同所
- 弘法大師 一体 陶磁器高さ三十五cm 建物 間口 一五〇cm 奥行 一九五cm

木造瓦屋根 年号不詳 以前は巡礼の札所。建物再建 平成二年  
高森マツ代氏祀る。

田嶋神社 真石台高さ一一五cm 御神体一一〇cm  
明治四十年神社統合令により波多津浦 金毘羅神社に合祀  
昭和十四年七月建立 寄付者一同を明記

鳥居一基 真石高さ 二八〇cm 田島宮 同所  
明治十六年末二月二十六日 弁賀中 石工 瀬戸村 岩橋寅八

### 池の元 その他の地区

忠霊碑 真石本体高さ三〇〇cm 台 一四〇cm 碑文 仙外（八十三才）書 池の元  
大東亜戦争の戦死、戦病死者の慰霊碑 戦没者は次の通り  
高森明、高森豊助、高森優、高盛明夫、高森虎夫、高森久四郎、高森春義、  
横尾徳一、高森清、内田武美、高森正美、高森弘、高森三男 以上十三名  
建立者 弁賀遺族一同 弁賀十七名の寄付者により建立 慰霊祭は毎年  
◎遺族 高森万太郎、高森徳之助、高森甚太郎、高森治三郎、高森寅造、  
高森末三郎、高森佐平吉、内田勇 昭和二十七年一月二十五日建立

城山大権現 砂石板碑高さ一五〇cm 年号不詳 角串

龍神宮 真石高さ六十cm 明治十五年 馬蛤潟 吉田氏 大刀場ヶ浦

龍神宮 真石高さ六十五cm 海上守護の神並に弁賀新田堤防守護の神

牛神様 牛頭天王 弁賀の守り神 大平（弁賀で最も高い山）

年一回、秋の彼岸の中日に、村中で参拝。一重持ってお籠りをし酒盛りがあります。

### その他の地区

観世音菩薩 砂岩板碑高さ一三五cm 幅 六十八cm 海上守護の神 角串（海岸通り）  
砂岩のため風化、明記不詳。以前は通路の脇に安置してありましたが、  
台風の時土砂が崩れ海岸に流れ落ちたので、海岸堤防工事と併せて再建。  
高さ二〇〇cm 石垣コンクリートを積み、その上に安置。施主 内田勇  
工事施行 市丸建設

記念碑 自然石高さ一六七cm 幅 三三五cm 弁賀公民館前

竣工記念碑 碑文 伊万里市長 竹内通教書 土地改良推進委員会建立  
団体営 土地改良総合整備事業 辻地区

事業概要

農道整備 一、八二〇m 農業用排水 三二六m 農道（軌道） 一三〇m



区画整理 四・六◎ 農用地開発 五・〇◎

営農用水 一八・三◎ 暗渠排水 四・六◎

着工 昭和五十四年七月 竣工 昭和六十二年三月

事業主体 伊万里市 石工 井手亥祇雄 造園 金子政文

## (15) 浦

### 金比羅神社

鳥居 第一 真石高さ三一六cm 高尾山 金比羅神社

明治十四年巳年九月 奉修 畑津浦 立石者 田中徳四郎

記念碑 真石 三十三cm ◎台 八十八cm 本体高さ 一六五cm 台 一九二cm

碑文 正三位小笠原長生書

建設委員 古崎定治、酒谷弥市、松本今朝治、田中英治、稲葉義男、塚部◎彦、  
稲葉俊太郎、松尾誠一郎、兼武鉄造、塚本寅造、松本喜一郎、塚本丸治

石工 津田市松

鳥居 第二 コンクリート製高さ六六〇cm 神社中段

奉納 大鳥居建立者 神戸市古川町 宮司 田村春人

関係者芳名

総代会長 吉田定兵衛 氏子総代 原田三男、高森与市、塚部伊平、橋口武造、  
浦田庄之助、小杉吉作、田中清、渡辺芳嗣 区長 稲葉年一、藤森正助、  
大久保勝三郎、田中豊、井手伝、川上寛三 大工 金子武一、木寺正男

石工 小杉辰男 鉄工 橋口熊吉 左官 小石原清一

世話人 吉田定、酒谷久男 以上記念塔に明記

鳥居 第三 真石高さ二九〇cm 神社上段 奉寄進 辻村中 稲葉義方

明治十三年四月十四日

世話人 高森常左衛門、栗原常造、池田忠助、栗原善造、波多忠兵衛、高森良吉

石工 永石左吉、永石義実 神社合祀により辻村より移転建立

### 金比羅神社

燈籠 一对 真石 火袋なし 右奉塩神 高さ二二〇cm 左かまど社 高さ二七〇cm

昭和九年旧三月十日建立 上野林組 中野林組 下野林組 石工 阿翁

田中利三郎

燈籠 一对 真石高さ一八〇cm 奉修 明治二十四年卯三月上旬 平松平吉、平松安兵衛、松本政太  
郎、平松善造、吉田又平、田中仲造、古崎亀造、古崎平吉

石工 浦田正平

燈籠 一对 右真石高さ二三〇cm 奉寄進 畑津浦中 長崎◎◎鍛冶屋町 井手弥八、  
山下安治郎 明治十六年六月十日 左の燈籠 明治十三年六月十日建立

燈籠 一对 右真石高さ二三五cm 大正十五年三月吉日 大字辻建立

高森茂治郎 石工 切木村字大浦 諸岡直次郎

左の燈籠 真石高さ 二三五cm 大正五年三月十日 藤津郡久間村字牛坂

施主石工 中島清八

記念塔 真石高さ七十七cm 神社再建記念塔 明治四十年六月十日

神社老朽化のため再建

社掌 田村力太郎 神徒惣代 塚部末太郎 区長 酒谷弥市、内田国太郎

世話人 川上勇助、松本平吉、吉田和造、栗原◎吉、高森良吉

記念碑 真石高さ一六〇cm 金比羅神社拝殿改修記念碑

昭和十二年三月竣工 社掌 田村佐多雄 委員長 古崎定治

区長 酒谷忠兵衛、川上勇三郎

燈籠 一基 真石高さ一三二cm 天保六年乙未（一八二五）施主 畑津浦 若者連中

保食命祠 真石高さ九十八cm 慶応元年十一月（一八六五）

愛◎神社 石祠 真石高さ一二一cm 明治三十七年旧三月二十四日奉建

世話人 古橋惣平、塚部政兵衛、大塚久吉、青木音次郎



高尾山公園展望台 平成3年1月16日

## 金比羅神社

記念塔 真石高さ一〇〇cm 御即位記念樹 大正五年三月十日

崇敬者惣代 塚部末太郎、池田実太郎、松本平吉、栗原金太郎、波多熊左衛門、高森善太郎

社司 田村力太郎 区長 古崎伝次郎、高森茂治郎

基準点 コンクリート製 一〇cm 角 高さ五cm 金比羅神社上段にあります。

手洗鉢 三基 自然石二 真石一

記念塔 真石板碑高さ一一〇cm 金毘羅神社 拝殿通路改築記念 社司 田村佐田雄

委員長 古崎定治 浦区長 酒谷忠兵衛 辻 川上勇三郎 奉錠 二基

燈籠一基 真石高さ一三〇cm 奉寄進 天保六歳（一八三五）乙未八月吉日

展望台 コンクリート柱 横 五〇〇cm 上段 手すり一四〇cm の棚を回してあります。

展望台に立ち、下を眺めれば眼下に波多津浦と町内一帯が一目で見える見晴しの良い所です。

大神宮 真石台高さ四十cm 本体一〇〇cm 嘉永六年九月吉日（一八五三）

天照皇大神宮 真石 二基 右高さ一八三cm 享保五歳（一七二〇）畑津浦建立

左の高さ 一三〇cm 享保十四年正月十一日（一七二九）辻村建立

仏像 三体 真石 金毘羅神社の東側、斜面の坂道の下

○弘法大師 本体 三十四cm 台五十cm 仏像本体高さ三十五cm

台五十三cm

○◎仏像 本体高さ四十五cm

日切り地藏菩薩 一千百年記念として建立 仏像と同所

世話人 塚部伊平、田中庄太郎、塚部米太郎、浦田福太郎、青木庄二郎、酒谷永太

郎、水尾助造 佐志 経塚小◎ 岩崎大善 昭和九年建立

弘法大師 一体 弘法大師 陶器

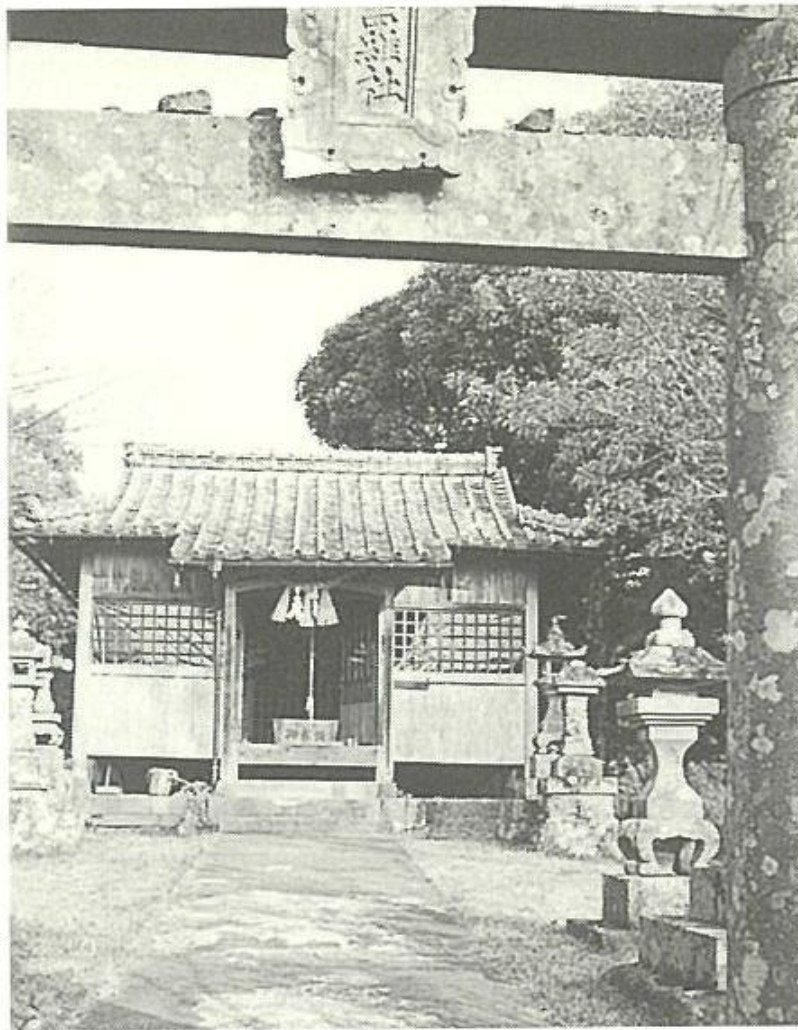
不動明王 一体 真石

右側 観世音菩薩 左側 日切地藏

お籠り堂の建物 間口 八十cm 奥行 六〇〇cm

参拝者が常時あり、仏棚には生花が飾られており、内外共によく清掃

されています。浦の御詠歌仲間で管理・参拝されています。



金毘羅神社内 天照皇大神

#### その他の地区

八大龍王 真石台 四十七cm 本体 八十cm 年号不祥 浦漁業組合前

恵比須様 真石台 七十五cm 本体 五十五cm 保育園

漁業の海上の安全と、大漁祈願のため建立 明記不祥



(右)八大龍王 (左)恵比須様 浦漁業組合前

### 浦 その他の地区

石 仏 真石台高さ二十cm 本体 七十cm 波多津小学校の上、国道の近く

三界万霊菩薩 真石 年号不祥 十五次戊寅春二月 田中東治 同所

仏 像 真石六十六cm 年号不祥

右三体、道路改修のため現在地に移転。平成三年六月

燈籠 一对 真石 右二三〇cm 左高さ一〇〇cm ワニ口 鐘一個 手洗 自然石一基

建物 台コンクリート 間口二〇〇cm 奥行一五〇cm 木造瓦屋根

施主 高森清一、篠崎正金 武雄市小楠 山口清映 伊万里脇田 塚部公雄

## 二、文学

### (1) 波多津青涛会

波多津青涛句会が始まったのは、波多津町辻出身であられる筒井茂雄先生が、佐大の教授をおやめになった昭和五十一年四月すぐのことではないでしょうか。私も丁度五十一年四月に畑津に帰って来て居って、誰からか、何か勉強会があつてると聞きはしましたが、短歌会でもあつておるのだらうと思つていたところ、樋口ツユさんが見えられて、俳句会に入りませんかとの事で入会した次第でありました。

茂雄先生は柔和なお方で、私などが無茶な発言をしても只にここにこして聞いて下さつたが、御指導はきびしいものでした。「俳句は自分の履歴書である。句に自分を入れよ」と力説されました。遅く入会した私は何が何だか分からず、写生で作句しました。

当時の俳句界は、虚子の花鳥諷詠にあき足らぬ人達によって、新興俳句が続出しました。人生諷詠を主張する野見山朱鳥や、口語俳句、無季俳句、又自由律俳句等混沌とした有様でした。波多津句会の属する春嶺誌は、新興俳句ではなかろうかと思いました。会員達は短期間と云うのに坦々として俳句して居られました。

昭和五十二年頃よりの句を拾って見ると、

背開けて声とならざる寒鴉 塔子

眼帯の一ト日の暗き寒鴉  
棗の実黒く散り敷き父母在さず  
天の川傾ぐ烏賊火の一線に  
彼岸会の母の記憶鉄漿つけて  
簞に風の優しく笹鳴けり  
石を積む船を眼下の蕨狩 ツユ

玄海の黄砂の闇に船の消ゆ  
大海月汐におくれて笹を干す  
遊学の子の文呉れず菜種梅雨 瑩子

スキップの子の髪はねて風薫る  
莓酒ルビーの色をすごしけり  
集魚灯消えて銀河の夜となる キヨエ

小綬鶏の鳴きて位置知る霧の海  
大漁旗かつぎパレード秋祭  
海に入る夕日の大き宿浴衣 ヒサ  
元寇の海に真白きボート浮く  
紅つつじ木の間に見えて夫の墓  
山拂ひの老女の背の彼岸柴 みよ

病室のスリッパ重なる寒夜かな  
雛の日のよもぎ摘みしは何時なりし  
放課後の鼓笛ひびき春近し ふみ



しだれ梅色づきにけり日練のごと  
君子蘭寒霜にあひ萎れけり  
炉開きの返し湯の湯気やさしかり 善子

新蕈の甘く香りて遊歩道  
練り柿の湯加減教へし母は亡く  
娘等去りて笥の音の寒さかな コトノ

磨きたるトラクター出し農始  
売られゆく子牛見送る彼岸花  
子を乗せてペタルの軽しつばくらめ 灯

レース着て初老の紅をつつましく  
校門にシャッター向けて卒業す  
まんまろき月の八十八夜かな 芳子

本山の雪三尺と云う話  
挽きこぼす木屑芳ばし山始

その頃会員は、減る一方でしたが、入会する人もあって、波多津の町田ハナエさん・原口勢子さん、伊万里より岩崎エミさん・田中秋子さんが参加され活気づいて来ました。

ところが、昭和五十三年、篠崎ミヨさんが御他界。病院より投句されるという熱心な方でした。

昭和五十四年一月十五日は、原口ヒサさん御他界。中央の先生に師事されたばかりの、意欲満々の矢先でした。葬花の白菊が今も眠うらにちらつきます。

それから昭和五十八年には、樋口つゆさんが御病氣。只今リハビリに一生懸命だが、言語障害もあって、一語も出ないとは何と慰めの言葉もありません。いつか句会の時、誰かが、「句が出来ない」とこぼした時、「誰でも始から上手ではありませんよ」との元気なお言葉も出たり、また、「私は久女の句が一番好き」と囁やかれた日もありましたのに……。一日も早い御全快を祈るばかりでした。

又、平成二年八月十八日は、筒井茂雄先生御他界。知名の画家であられた先生が眼の病とは……。

春嶺誌の毎月の表紙絵をおやめになる時、「私には俳句があります」と中央の先生におっしゃったとか。

波多津句会は楽しみでした。春は高尾山花見や野点。武雄の観梅や黒髪山の吟行。辨当の折、缶ビールを手にされた先生の、笑顔満点のお写真が手元にあります。

お葬式がすんだ三日目頃、私は先生の夢を見ました。句帳を左手に山を見ていらっしやる。黒髪山ら

しい。お顔もにこやかで、お洋服の生地まで灰色と紺色の交ぜ織りと分かるまでの明瞭さで、すぐ横に佇っていらっしやいました。先生はまだまだ俳句がしたかったのだと涙が出ました。

指導者を失った私達は、相談して今福の渡口先生をお願いいたしました。先生は心よく承知して下さって、初心者に分かるよう教えて下さりました。「一句に季語は一つにするように」「同じ意味の言葉は省くこと」等。おかげで句が垢抜けした様になりました。吟行は柳川の川下りでした。名物の蒸し鰻飯はおいしくいただきました。

その頃瑩子さんは春嶺の同人になられて、句会の万事をお世話して下さいました。そんな、こんなで渡口先生とは短い御縁となり、春嶺主宰の宮下翠舟先生に御指導を受けることになりました。各自五句宛出し合って瑩子さんが先生のもとへ送って下さりました。佳句には「○」や「>」が付いて返って来ました。詳しい添作はありませんでしたが、悪いところや分からぬところは注意が記してありました。皆は張り切って勉強しました。

こんな折、平成七年十一月十六日 筒井瑩子さんが半年の入院で御他界。生前病院よりお手紙を下さって、「句会を開いて下さいませんか。病気も少し良いので私も出席します。」と云う事でありましたが、二～三の会員と話し合ったところ、句会で病気が悪化でもしたらと大事をとり、全快して退院なされてからゆっくりしましょうと返事して、句会をしなかったことが今以って残念でなりません。

その頃はご本人も私達も病名を知りませんでした。瑩子さんの病床の句に、

女物男に買はせ梅雨を病む

黒南風や検査すみたる深ねむり

無器用の薬にも咽せ熱帯夜

クーラーを消して夜風や病良く

又別に

冬涛に向ふ心に父のあり

冬涛は父君茂雄先生の句集名であります。毎月武雄よりはるばるお出下さる先生を、句の師ともしてお迎えになった瑩子さんは、最上の幸福の日ではなかったでしょうか。自然を愛され、人を愛され、句修行に一生懸命だったまだお若い瑩子さんが、たった半年で帰らぬ人となりました。

平成九年三月、宮下翠舟先生も御他界で、只今波多津句会は自曲研究となっています。中央の先生に師事したり、他所の句会に参加したり、旅行、読書とそれぞれ一生懸命です。

昨日私は、茂雄先生が師として仰がれた故岸風三樓の世界を読んで驚きました。「自己の心魂を傾け、今日の生命に密着した作品は、如何なる高波が来ようと永遠に滅びる事はない」と叫んで居られます。又作句法としては、「俳句は情を堰き止めて物で抑えよ」とあります。俳句は情をもので具象的に表す詩とは知って居ましたが、情を堰き止めてとの激しさには驚かされました。この激しさが心の叫びの句となるのでありましょうか。父君の死の時も

父の死や鶏頭倒れたるままに

と父の死を必死にこらえて、そのおもひを倒れ伏した鶏頭に託しておられます。又

すかんぼを瓶にも挿して生きたしや  
先生が死線をさまよわれつつの句といひます。

遅々として上達しない私達の近詠は、  
すり足の白足袋すがし初茶の湯          はな

吊り釜のかすかに揺れる若葉風  
大茶会了えたる安堵花の書  
釜鳴りの刀自の点前爽やかに  
緑蔭に茶事をたのしむ一人かな  
淡雲や乾杯の酒ほろ苦し          せい子

静まりて婚の宣言牡丹雪  
花嫁の父の涙や雪霏々と  
梅が香や笑顔を見せてお嫁入り  
嫁入りの胸にミモザの香りけり  
汗止めの鉢巻しかといさき釣り          きよえ

名水の山のふところに蕨狩  
茶栓振る亭主は少女月の茶事  
紙燭の炎障子に巾るる月の茶事

荒磯に汐木拾うも年用意  
知足とふ老後のありぬ蕪汁  
古伊万里の器に適ひ蕪汁  
老の居間大方出来ぬ切炬燵  
独り居の馴れ来し夜の葛湯かな  
襖絵の虎に吠えられ寺の冬  
五千年坐すスフィンクス月涼し          秋子

夏の月大ピラミッドに寄り添ひて  
ピラミッド這ひ登りたる夏の雲  
レーダーに浮くスフィンクス夏の夜  
太陽一つ空港一つ夏砂漠  
豆の飯心祝のありし日に          灯

女等のかしまし熱帯魚の前に  
同姓の四五戸を抱きて山笑ふ  
福寿草抱いて幸福そうな女  
赤電話待つ一刻の春の雪  
草おぼろ孫の電車もう見えず 芳子

亡母夢に来ませし朝の霧の海  
涼風や娘と縫ふ己が死装束  
春宵の飛機オリオンの枠に入る  
子狸を猫十匹の遠巻きに

「俳句は自分の履歴書である。俳句には自分が入って居らねばならぬ」との、茂雄先生の、お言葉で、今漸く分かりかけた様な気がします。折角波多津へ植え付けて下さった俳諧の苗を、私達は日夜枯らすことなく精進して、自然を愛し、人間を愛する心豊かな俳諧の道を歩いて行きたいと思っています。  
(井手芳子 = 平成十年十月逝去)

### 三、ふるさとの言葉

#### (1) 波多津の方言

方言はその土地の気候、風土、文化、生活によって成立しています。その方言の中には、長年月の郷土の歴史があり、祖先から受け継いだ懐かしい生活感情がこもっています。

道行く人のあいさつにも「おはようなーもし」「きょうは、よかろうごたるなーもし」等。風土のそのもののやさしさ、のどかさ、暖かさ、親しさがありました。今は殆どそんな情景のあいさつも聞かれなくなっています。

この方言の中には、上品でやさしいことばから、強くてきついことばまでいろいろありますが、方言で語ることによって、心が通じ、親近感を増し、また、時によっては、郷土の誇りさえ感ずることもあります。

ところがこの方言も時代と共に消え去ろうとしています。最近の国際化をはじめマスコミの発達、特にテレビ、ラジオの普及によって都会も田舎も日本国中、北から南まで差がなくなり、共通語関東・関西弁が多くなり、各地の方言は次第に影をひそめています。明治、大正生まれの人達が姿を消す頃は、方言も姿を消して行くことになるのではないのでしょうか。

波多津の方言も東部と西部では多少の違いはありますが、長い歴史と親しみを持つ方言、そして今日まで波多津の生活を支えてきた方言をこの時にあたり記録・保存し、後世に伝えることも大切なことではないかと思い町誌に残すことにしました。

(方言の収集に際しては、「伊万里ことば」、他町の「町史」を参考にさせていただきました。)

1、天気・気象・時		方言	標準語
いんま うるえ からびる きゆう ごつとり じき しよて そくと ちよろつと ながたらしか なぎやーこつ ぬくだらしか ひがな一日 ひとせん よさり よんべ	あとで・後程 うるおい 乾く 今日 いつでも すぐ 最初・以前 間をおかずにすぐ ちよつとの間 いやになる程長い 長い間・長すぎる 蒸し暑い 終日・一日中 ひとしきり・一時 昨夜		
2、肢体・健康		方言	標準語
かんげ きびしや きようまき こえぶつつう ごちや じご しりべた しりご しんのす しゃばか たつしやか たりかふる ひざがんつう ふうたんべら ほねやみ むこずら	髪の毛 かかと(踵) つむじ 太った人 背中 はらわた おしり 直腸 けつの穴 弱い・病身者 強健・元氣 下痢をする ひざがしら ほお(頬) 疲れからきた病氣 ひたい(額)		

方言 言	やせこつぼう	標準語	やせた人の風体
3、住居・場所・事物	あらんほう あさつてみちよらす あすこんにき おりがえ かまや くど ちかか つぼさき とつさき(とつばな) はわきだめ やあなか やぼくら ゆるり	反対の方 反対の方を見ている あの辺 自分の家 炊事場 かまど 近い 外庭の端 いちばん先(先端) 塵捨て場 間(中ほど) 藪の暗がり いろいろ	あさがり(ひるめし) いやしか うまか きいたかあ くわれん ごつつう しーか ずうしい飯 ずくし だご ねまる はんどがめ ひだるか ひらがり ひんのむ ままじやくし ゆるか
4、飲食・嗜好	ちやのこ	朝食	昼食 欲ばつて食べるこ うまい 食べたい 食べられない ごちそう すっぱい 残り材料を一緒に入れたませごほん 熟した柿(熟柿) だんご 食物が腐る 水がめ ひもじい 三時頃のめし 飲み込む ご飯しやもじ やわらかい



方言 言	標準語	方言 言	標準語
<p>5、習俗・信仰・職業</p> <p>あーい あっぱか いつでん いらんこつ いんにや うつくしか うてあうな ううしかつ うつちよけ うつしやじよらす うつさごつ えずか ええちよる おりがつ おおきに おごり</p>	<p>ハイ(返事) 美しい いつでも 必要のないこと いいえ 美しい 相手にするな 粗雑・めちやくちや ほっておけ 病気で寝込んでいる うそ こわい・恐ろしい 置いている 自分のもの ありがとう ご馳走する</p>	<p>おんたか かつがつ がばか かけごつちよ かってくる からう がられる がたなか かんまん きしやなか きつか きえん ぎつちよ きてんかい きょうらす ぎゅうらしか くーだい</p>	<p>重い かたつめて たくさん かけっこ 借りてくる 背負う 叱られる 価値がない 気にしない きたない 疲れたこと 消えない 左きき 来てみなさい きておられる よくしやべり、人あたりがよい きましよう</p>

方言 言	<p>ぐらりする ぐるり くれんかい くんだり こがしこ こらい こすか こちよばいか こやんこつ こーやこつ こたえる こまか ころつと ざい さかしか さびしか(さみしか) さんによ</p>
標準語	<p>がっかりする 周囲 ください 下り これだけ 相手を呼ぶ時 ずるい くすぐったい こんなこと ごくろうなこと 身にしみて感じる 小さい すつかり・全く 在方・在郷 急な坂 寂しい 計算・勘定</p>
方言 言	<p>しかつか しつちよる しよーる しりやー しれたこつ しりやけぼう しやーびやー しやんす じつくり じんべんなこて すかん すいちよる すずるる すつぱり すらごつ すんな ずんだれ</p>
標準語	<p>おおまかで、やりっぱなし 知っている 知っている 知り合い・知人 わかつていること あきっぱい人 さしず・世話 愛人 ずぶ濡れ 珍しく 嫌い 好きである 溢れる みんな うそ するな だらしない</p>

方言	<p>せーだせ  せえじおれ  せからしか  せんがましばい  腹んせく  ぜんなか  せろ  そいどんか  ぞうぐり  ぞうひよう  そろつと  ぞろびく  そりけんさり  そぎやんいうたつちや  そりどんか  ぞうたん  そんくりやー</p>	標準語	<p>急げ  しないでくれ  やかましい  しない方がいいよ  腹が痛い  ぜひとも  やれ・行え  それでも  あばれる  そうどう・世話  こつそり  長すぎるものを引きずって歩く  そうだから  そんなに言っても  そういつても  冗談  それくらい</p>
方言	<p>そんときやー  たきもん  たしきやあ  だりきやあ  ちいつと(ちかつと)  つくら  つুকくえた  つんくりわける  つつかかるな  つむ  でけん  てぬき  てぼ  てんげ  としよれ  どうでんこうでん(どわつてん)  どーせ</p>	標準語	<p>それでは(さようならの意)  薪  確か・きつと  誰ですか  少し  ふところ  こわれた  配分する  関わりあうな  (頭髪)を刈る  できない・いけない  てぶくろ  手籠  手拭き・タオル  老人  どんなことがあっても・必ず  いずれにせよ</p>

方言 言	<p>どうわろ とろか どうじこい なきびす なめちよる なつちよらん なんちゆうかい なんちいいよつと なしじやいろ なまんこつちやなか なんのかんの にいのう にゆーか ぬるか ぬうにやあ ぬくたらしか ねおずみ</p>	標準語	<p>かまわない 鈍い・どんかん 走ってこい すぐ泣く人 みくびつている なつていない 何でしようか 何と言っているのか なぜかわからないが 容易なことではない あれこれ 荷を積むときの綱 寝ようか 微温・おそい なまけ者 蒸し暑い 目が覚めてすぐ</p>
方言 言	<p>ねずむ ねごつ ねはぐらかす ねちよる ねぶたか のぼする のさん のーなりかす のふぞか はがいか ばばしか ひやー ひゆうとり ひよつとして ふうけもん ふーかぶり ふとか</p>	標準語	<p>つねる・つまむ 寝言 眠りそこなう 寝ている ねむい おごりたかぶる 耐えられない 失う 横着・無作法 はがゆい 場所をとる はえ(蠅) 日雇 あるいは 馬鹿者 ほおかぶり 大きい</p>

方言 言	ふゆなか へこ ほけんたつ ほたる ほんなこつ ほんときやー ままんご まつくらすみ まつぽし まちつと まどろしか まめなか みたむなか みやーすとる むすこじよ むぞげ もつちよる	標準語	なまけ者 ふんどし・腰巻 湯気が立つ 投げる ほんとう さようなら(それならば) ままごと まつ暗な所 真正面・真ん中 もう少し 手ぬるい よく働く みつともない へつらう 男の子 かわいそう 持っている
方言 言	もてん もやもん やおなか やおか やーらしか やぐらしか やっさと やや ゆーなべ ゆつつらと ゆうきたな ゆうなかつたちゆう ゆわした(いわした) よさり よか よける よーら	標準語	人気がない 共同のもの 容易ではない 柔らかい 愛らしい やかましい たびたび 赤ちゃん 夜なべ ゆっくりと よく来たね 亡くなられたとのこと 言った 夜 よい(許す) 除去する 静かに



方言	標準語	よのよして よんにゅー よばい(よびゃー)	夜どおし たくさん 夜 恋人の家にしのんでいく お前の家 周りの人 たやすい いたずら わざと
6、生活・用具	ぞうりの一種 ぞうり 藁で作った入れ物	あしなか じょうり すご	
7、農村・漁村・生産	商売 落ちる 稲束をしぼる縄 藁むしろ	あきにゃー あえる いじ いなまき	
方言	標準語	いしわらがんつ うげる おえる(生える) おーこ かまぎ かいもがつき きばる きいぎればつちよう きしょう こえたご しーの すんのか そうけ たきもん とりこずみ とりえろ とう、とう	石がごろごろしている所 大根などの芯が中空になった部分 種子が発芽する 両先がとがったにない棒 かます・藁製の袋 楮の切株 働く 木の枝 役牛を右へ 下肥を入れる桶 ふるい もみがら ざる たきぎ 稲わらこずみ とりこめ 役牛を左へ



方言	どうつぼ はみ はいっ びやーら べべんこ ほげ ほどく やしにやー ゆうなべ わ	標準語	下肥をためるかめ 牛馬の飼料 牛馬を進める号令 そだ・小枝の薪 子牛 土砂を運ぶざる 耕す 下肥 夜の仕事 止まれ(牛を止める)
あんしゃん あんやん あんね あんねどん うんどま ええくりやあ	兄 兄 姉 女の奉公人 お前達 酔っぱらい	8、人・老若男女	おっかん(かかい) おとつちやん(ととい) おんじしやん おばしやん おつかしやん おんちゃん おり おどんも おとこし おなごし かかー きようであー こども(こどん) じいやん しやんす すそご(おとぼ) ぜんもん
標準語	母 父 叔父 叔母 母 よそのおじさん 自分・俺 俺達も 男の人 女の人 妻・女房 兄弟 子ども 祖父 恋人 末っ子 乞食		

方言	<p>だりか としよれ なきびす のんべえ ぼぼどん ぼあやん(ぼばい) みゅーと やや わっかし わいたち(わりどん) われん わりやー</p>	標準語	<p>誰か 老人 すぐ泣く人 酒飲みの人 男の奉公人 祖母 夫婦 赤ん坊 青年 君達 君・お前 お前は</p>
9、性情	<p>いっちょんつまらん ううしかつ おうどうか おろいか・おろよか</p>	<p>とてもだめ だらしが 横着 良くない</p>	
方言	<p>きつか きやーしよな きしやなか こつやこつ こちよばいか こすか じゃーわつか しゃーぼん じょうけんにやおよぼん しめつちよる せからしか ちったあ つまるもんな どうろこうろ どうなりこうなり とひょうむなか どんびり</p>	標準語	<p>疲れた 役立たず きたない ご苦労なこと くすぐつたい ずるい 気持ちかわるい おせっかい ただごとではない 水気が残っている うるさい 少しぐらいは だめだよ いいかげん どうにか 途方もない どんじり</p>

あとえする	あと追いする	<p>10、行動</p>	<p>あとえする</p>
<p>10、行動</p>	<p>あと追いする</p>	<p>あと追いする</p>	<p>あと追いする</p>
<p>どんこんならん とぜんなか にとはっしょう(二斗八升) ぬうにや のさん のぼすんな のすこつちやなか はがいか ひよんなこと ひょうげる ふうけもん ふうぎる ふうぎのわるか へそまがり へんちくりん</p>	<p>どうにもならない さびしい 少し足りない人 なまけ者 耐えられない つけあがるな たまったものではない はがゆい 珍しいこと おどける 当たり前でない人 不平不満をいう 愛想が悪い 素直でない 変人</p>	<p>いいちらかす いたちくる いきあたる いたぐるまする うちわる うつくやす うつちやえる えったくる えらかす おこつる おごる おてつく おらぶ おろたえる おしよる かきそこにやー がすまんづく</p>	<p>いいふらす 行つてくる つきあたる あぐらをかく 割る こわす 落ちる えりあさる だます・からかう からかう 叱る・人にふるまう 落ち着く 大声で叫ぶ うろたえる (木を)折る 書き損じ 欲ばる</p>

方言	かずむ かたる かやる かんぶりをふる きばる きびる きやーる くらする くるびく ぐぜる けったくる ごたくとる こなす さるく さばく じょうしき すべったくる	標準語	匂いをかぐ 参加する ころぶ 頭を横に振る 働く 結ぶ・しばる 帰る たたく・打つ 下を向く 小言・苦情をいう ける くどくど言う いじめる・さわる 歩き回る (髪を)すく 遠慮する すべってころぶ
方言	ぞうぐり(みのくり) ちよつかごむ ちんちろみやあ つんなむ つんぬく つんくじる てれっと てれんばれん とぶ なずる なわす にぐる にじくる ぬったくる ぬる ねちよる はまる	標準語	あばれる かがみこむ てんてこまい 同行する 突き刺す つねる ぼんやり ぶらぶらしている 走る なでる かくす・しまう 逃げる ぬりつける ぬりたくる 眠る 寝ている 身じたくをする(熱心にする)

いもりや (動物)	方言 はらかに はわく ひいわれる ひつくりがやす ひつこがす ひんまげる ひつばぐる ひんのむ びやーせろ ほたる まぜくる むぞがる もつてらいた やる	いもり	標準語 立腹する 掃く 割れる ひつくり返えす おる まげる めくる・はぎとる 飲み込む 足を広げろ 投げる まぜつ返す 可愛がる 持ってきた (物を)渡す
いんころ かんねかずら	方言 いら いん うのうし えんば ごつかぶろ すがり ずくつしよ ちようちよまんご どうごどり びき ひやあ ひらくち べべんこ(べえこ) わくど (植物)	ねこやなぎ くず(葛)	標準語 毛虫 犬のこと 牝牛 とんぼ ごきぶり あり 法師蟬 蝶のこと ふくろう 蛙 はえ まむし 子牛 がまがえる



方言	<p>ごりごり ずばな すもとりばな つるしば とうまめ とべら なば ふつ ふーずき へご ぼうぶら だごしば</p>	標準語	<p>からすうり 茅の花 すみれ ゆじりは そらまめ くさぎの木 きのこ よもぎ ほおずき うらじろ かぼちゃ さるとりいばら</p>
12、その他	<p>あほたれ ありや あつちやごし いうたつちや</p>	<p>ばか者 あれは 反対 言っても</p>	
方言	<p>いっちゃん いけと おりもくる おすか おろいか おおごつ おおきに がぼ・がばか がる(がるるる) きてくれんかい ぎゃん くうつとのさん そぎゃん そぎゃんたい そりば そんなろ たまらん</p>	標準語	<p>少しも 直接 私もくる 遅い 悪い 大変なこと ありがとう たくさん 叱る(叱られる) 来てください こんなに とてもたまらない そんなに そうです それを そうならば たまらない・耐えられない</p>



方言	ちんか てんで どぎやん にくじ にくたれ ぬてつと ねんじゅさんぼ のすこつちやなか のぼせもん のんだくれ ひやあ ひどか ひよんなこつ むかつと めつたんこたあ よんにゆうか りこうもん
標準語	小さい 少しも どんなに 悪口 にくまれ者 気のきかぬ いつも・常々 とてもたまらない 何事によらず真々熱中してしまう人 酔っぱらい 灰 ひどい・大変なこと 珍しいこと 腹が立つ めつたなことは 多い 利口もの
方言	ろくすつぽ 「語尾について」 ーちよる(ー)している) ●勉強しちよる。 ーなあもし(ごさいます) ●美しかなあもし。 ーばい(ーですよ) ●よかばい。 ーごて(ーのように) ●りんごのごてしちよる。 ーちゆう(ー)だろう?) ●こうしてよかちゆう。 ーねえやあ(ーねえ) ●相手に念を押し時に 使うことば 「こんだごは、食うち よかろうもん、ねえ やあ。」
標準語	あんまり 「方言の事例」 ●みやげどみやあ、た いそもろち、おお きにあなた。 ●人にばかり言わん でん、あなたんさつ しゃれんなもし。 ●わりやなんち言いよつ とな、いかんとね。 おりやいたちくるば い。

## 四、民俗

### (1) 食文化

#### ○懐かしの食べ物の四季

元日の朝は起こされなくても、雑煮のおいしそうな匂いが鼻をつき、早く食べたくてとび起きたものでした。父が汲んでくれた若水で顔を洗い、この朝ばかりは必ず家中揃って食卓につきます。雑煮の中味は牛蒡と昆布と白菜、それに餅が入っていました。歳の晩から作られた大皿の煮染め、刺身、数の子、煮豆、干し柿、蜜柑等も出てきます。

昼頃になると親戚の人が集まってきます。餅寄りです。同じ年頃のいとこたちが寄ってきますから、大声をあげて歓迎の一騒動、遊び疲れた頃にご馳走もでき上がりますので、おとなも子ども一緒になって大宴会、それは楽しい賑やかなふるさとならではの正月でした。

正月の雑煮がそろそろあきた頃、十四日節句、もぐらうちがやってきます。この日は、はなぐり餅をたいて神佛に供え五穀豊穰を祈願します。これは小豆飯の上に餅をのせて炊きあげます。

三月の節句はひな祭り、女の子の節句です。フツ餅（よもぎ餅）をついて菱形に切り、おひな様や神佛に供え、心身ともに健全な成長を祈り、家族中でお祝いをします。菜の花ずしや貝の吸物、貝を使った和えものなどを作ります。

端午の節句は男の子の節句で昔はちまきを作り神佛にお供えしたものです。五月五日の子供の日で祝日になりました。

田植えが終わると、さなぼりにけいらん饅頭をつくり、手伝ってくれた人や、近所にも配り田植えが終わったお祝いをし、また、豊作の祈願もします。

お祝い事があると必ず押し出しずしを作りさかい重という大きな重箱に二段、三段とつめて贈ったものです。現在でも、祝事、佛事には押し出しずしを作ります。

お供日は新米を氏神様に捧げ、天地の神様に感謝する日です。昔は十一月二十三日がお供日でした。親類、縁者、知人を招いて赤飯（おこわ）、甘酒、酢和え、のっぺ汁等でもてなしていました。その頃になると、田の水がいらなくなるので、一斉に堤の栓を抜いて水を落とし堀干しをします。干しがった堀からは、フナ、コイ、ウナギ、ナマズ等たくさんの魚がとれます。それを皆で分けて持ち帰り、フナのこぶ巻きや野菜と煮しめたりして 供日のごちそうになっていました。その頃では、これ等の川魚が重要な蛋白源となっていました。

今では川魚とりもなくなりました。休日などに他所の人が車を乗りつけ釣り糸を垂れているのをよく見かけます。（ウナギは買えば高価なのに、また、ビタミン A も多く含まれて栄養もあるのに、もったいないなあ）と横で見て通り過ぎることもあります。昔から土用うしの日にはウナギを食べる風習があり

ますがビタミン A を多く摂り夏バテを防ごうという昔の人の知恵です。

かつて、農家では、朝早くから夕方おそくまで農作業をするために自家で生産した、小菱、小豆、そば等を使って団子や、うどんや、だご汁等を工夫して作り、間食や夜食にしておりました。小麦粉に芋を切ってこねまぜて作る石垣だご等なつかしい味となりました。麦を香ばしくいり上げてひき臼でひいて粉にしたこうせんも子供の頃は楽しいおやつでありました。どれを取りあげても、昔の人の食生活への知恵が偲ばれます。

## (2) 衣文化

### ○着物の思い出

昔は一般に木綿の質素な衣服が主で、機のある家が多く、農家では棉の栽培から機織まで自家生産されたものが使われていました。

明治後期の晴着は絹織の黒やグレーの盲縞で、髪は丸髷、桃割れが一部に残り、男児は丸刈で着物や服の上に白いエプロンがおしゃれ着でした。

大正から昭和へと、養蚕が盛んになるにつれ絹布も織られ、先染で縞・格子・市松模様、白地は京染で、晴着が作られていました。夜具も、面・布ともに自家生産のもので作られていました。婦人の髪は、二百三高地とか呼ばれる型が一部に結われ、男性は丸刈から長髪へと移行しはじめました。

昭和の初め頃までは、集落の中に日本髪を結わせる人があって、結婚式には素人による丸髪が、高島田より多く、綿帽子も用いられていました。式服の裾模様は一部に使用されるだけで、手織の白絹に太めの丸紋を染め抜いた黒留袖が多かったようです。

葬儀には、近親者だけが喪服として、白や薄色の無地の長着、神だ髷という髪型、綿帽子の風習も一部に残っていました。

結婚式の高島田、角かくし、ごく一部の振袖打ち掛け、大きな裾模様の留袖が定着した頃戦時となり、男子は国民服、女子は二部式モンペにひつつめた髪となりました。パーマは此の頃まで入っていませんでした。

学校は、昭和にはいって男女共洋服が着られ始めていましたが、祝祭日には和服の場合袴をはいていました。女子は、平常日にも五年以上はえび茶の袴をつけ、髪は低学年がおかっぱ、五、六年以上がおさげや三つ編等になりました。

婦人も洋服が着られるようになり、簡単服と呼ばれたワンピースが、家庭着から外出着へと発展していきました。

仕事着は、半纏にタッチと呼ぶ下ばき、もも引、脚絆。女子は黒衿の半纏、腰巻、前掛、手甲、脚絆、足は男女共あしながが用いられ、次第に地下足袋へと移っていきました。蓑やじんぱちがさが雨や日よけに使われました。めじり袖の半纏は主なものでありました。

主婦会、処女会（青年団）が組織されてから、外出着には会服（団服）が羽織に代わって使用されました。

防寒用として、ケット、マント、綿入半纏が子供用に、男子用がマント、とんび、引きまわし等、ねじり半纏綿入れ半纏は女子も使用しました。

昭和十二・三年頃、金子主婦会長の指導で（奥村五百子女子考案とも言う）袴式のモンペが奨励され、しごきやおたいこが姿をひそめ、手持の和服がそれに変えられていきました。その後もモンペは次第に改良されて、全国的な型となっています。

漁家の特徴として、ドンザが重宝ちゆうほうされました。

昭和三十年位までは、手持ちの和服を染め替え、型打染め、洋裁等、各自古着の更正を主としていましたが、全国的には差はなくなってまいりました。

### (3) 住文化

#### ○住居



明治期の普通の百姓家(明治初年の建築)  
萱葺、廂なしの家



(普通)農家の間取り図

この家は今も実在し二年ぐらい前までは人が住んでいました。障子紙が貼ってあるところは座敷は八畳間という造りが普通でした。棟の両端には家の中で焚くいろりの煙の出口がありました。白い障子の前面は巾三尺長さ二間半の縁で、その下には卵を産む鶏や、小学生が兎をよく飼っていました。

萱葺き屋根は萱原、原野にかこまれた波多津地方民家の昔からの自然な姿でした。お宮もお寺もそうでした。写真の家は明治維新頃の建築といわれていましたから 撮影当時百年は既に越していたわけです。しかし屋根の葺替えや補強は何回かなされたことと思います。

屋根の構造が大屋根だけで<sup>ひきし</sup>廂がないのは、当時でも多くはありませんでした。なおこの家は昭和五十七年には葺替えの葺が入手できず、惜しみつつも瓦葺屋根に改造されました。

写真を見ると縁の下に、巾の狭い板を間をすかして打ちつけてあるのが見えますが、普通あの中には地鶏が飼われて卵を産んだり、小学生が兔を飼ったりしていました。

縁の外周りの白い線は、サッシ窓を取りつけてあるのです。屋内に白い障子が見えるのも、当時人が住んでおられる<sup>しるし</sup>証でした。

白いトタン板の下の暗い場所は、家の出入口ですが、雨除け板が光を遮って暗くしています。

前記の家の中は外見が質素なのにふさわしく、間かずも少なく飾りなどもなく単調でした。おおかたの家は座敷に床の間と仏間が取られ、朝夕食時前には必ずおまいりされていました。

#### (4) 波多津の女すもう



波多津の女すもう

##### ①起源

相撲甚句には「遠い昔に大閤が、朝鮮出兵された時、戦勝祝賀のその折に、生まれましたるこの力士」と、四百年の昔から波多津の女相撲があったように言われるけれども、裏付けとなる資料は見あたりません。

はっきりしていることは、明治三十年代以降、塚本留造氏（明治十一年－昭和四十三年、漁業）が、前記の起源伝承を信じて、波多津女相撲の復活再現を生涯の目標として掲げ、自らの努力と関係者すべての協力を受け、力士とともに練習と忍耐の年月を重ね、大衆の前に公開されたのは、大正十一年十月



十五日、天野房太郎医師の頌徳碑の除幕式の折でした。

この日こそ、みんなが認める波多津女相撲の復活再生の第一歩でした。

## ②神社奉納の記録

第一回公開以後の女相撲は好評で、しばらくは神社奉納が続きます。

集落の産土ことひらじんじや金刀比羅神社春季大祭、四月十日同神社境内において奉納。

村社たしまじんじや田嶋神社への奉納 十月十七日秋の大祭（おくんち）この日はおみこしが鎮座地畑津集落から、当集落まで約一キロおみゆき御神幸がありお旅所たびじよで休まれる。その広場で奉納される。この神社奉納もだんだん減少して近年は殆んど行われなくなりました。

## ③相撲甚句

相撲甚句は元来余興で歌われるものですから、即興的な明るい内容のものが多く、形式も七・七・七・五・と決っていても、字餘り字足らず平気で調子よく歌いまわしています。

記録に残された古い甚句も見つからず、豊臣秀吉の歌いこまれた句は、ごあいさつの中の「遠い昔に大閤が、朝鮮出兵された時…」の外にはありません。

町内には今左の甚句がありますが、流行歌や民謡等に押されて、ふだんには歌う人としてありません。

ごあいさつ	終戦	新生日本
木 <small>こびき</small> 挽うた	川ずくし	夢
祝の松	山集め	三匹の犬
西行法師	島ずくし	波多津名所
花あつめ	嫁入り	稲川女房

## ④相撲踊りと取組との先後

波多津では甚句と踊りは同時に組合わせて行われます。踊りの所作は「日本相撲協会の大相撲放映の時の、力士の土俵入りと大体同じ所作」で、それに女らしさの手の上げ下げが付き、甚句に合わせて行われる踊りらしからぬ踊りです。

取組は踊りがすんでから、東西の割にしたがって下位の者から順にとり進んでいきます。

## ●波多津の女相撲衰退

○大型造船会社の誘致によって、漁業者の職業転換となり、浜浦集落に元気がなくなった。○世情、趣味嗜好娯楽の変化により、女相撲など関心をひかないようになった。

○現在は港まつり等で祭りのイベントの中で行われている。

## 五、風習

### ○昔の祝儀（いまはけっこんしき）

昔の祝儀は大抵の場合見合いをして意にそえば仲人を立てて嫁もらいをしました。仲人は何回も足を運び嫁をもらい受けていました。そこで縁談が成立しますと、直ちに両家の親と本人・仲人の間で固めの盃が汲み交わされます。その場で仲人は祝儀の日取りを決めてもらいます。それこそ善は急げです。できるだけ早い大安吉日の日を選んで祝儀の日が決まります。茶のもの（紋付）は婚家の紋を入れて作製されます。

祝儀の挙げ方も現在と異なり婚家で挙げていました。また花嫁衣装は紋付綿帽子姿でした。嫁入りは仲人の先導で歩いて行くのでした。そのため中宿といって婚家の近くに宿をとっていました。主に花嫁の衣装直しや休憩の時間をとるためでした。婚家に着く頃は婚家の前庭では炬火を焚いて迎えていました。

仲人に続いて花嫁は戸口から入ります。花嫁が入ると同時に花嫁は釜蓋被せを受けます。つぎに茶の間に上がると姑様よりお茶を受けます。そして仏壇の前へ通され、ご先祖様へ報告参りをします。それから、花嫁は本座につきます。

花嫁方・花婿方の本客が座に着いて婚礼は始まりますが、進行は相伴人がつとめます。仲人の挨拶で始まって三・三・九度の盃を交わし（夫婦盃・親子盃）めでたく婚儀が成立するのです。引続き祝宴となり本膳が一の膳から五の膳まで出るのです。主膳で餅の入った料理がでます（一生もちますようにという縁起かららしい）。二の膳から五の膳もそれぞれ目出度いものばかりが料理されて出てくるのでした。それぞれの膳が縁起の最もよいものに由来していたようです。

本客の人数は七人・九人と奇数の人数とされていました。

祝儀の翌日は「中戻り」をしていました。夫婦で親元へお礼の挨拶に行っていました。この時は客分として饗<sup>もてな</sup>しを受けます。帰るときは両親も同伴して婚家へお礼挨拶に行きます。そこで再び祝い合っ

て酒をくみ交わしていました。親類一同と加勢人は翌日後祝いをしていました。特に親しい人は家に招待されていました。

### ○おとむらい

昔は、死人が出ると葬式の前夜は近親者等がお通夜をして死体を守って夜を過ごしていました。死体の安置の仕方も普通と逆さまで寝かせ方も北頭・北枕（藁枕）、掛衣も裾を頭部の方へかけ、袖を足の方にかけて安置していました。葬式間近になると、近親者は湯灌酒を呑み合っ、畳・床板をはぐり根台の上に小さな簀子をおいてその上で湯灌をしました。そして、白装束にして棺に入れていました。土葬が大方でしたから読経・焼香で葬儀がすむと封棺をして出棺していました。近親者は、銭の網を引き墓所へと向う。一般の人野辺の送りをして墓所まで行ってました。僧侶の読経があつて埋葬してました。

葬式の日には近所の人々に加勢を頼みいろいろの準備をしてもらいました。大白で玄米の手搗きをした

り、柴取りをしたり、飯炊きをしたり、箸づくり（竹で）をしたり等葬具一切の仕事をしてもらっていました。大工は館や位牌・墓標木・銭の綱板・花麩の膳部・天蓋等を作っていました。また、埋葬でしたから、墓所の穴掘りは区長が若者から四・五人を選んで頼んでいました。

穴掘人には休み時間（三時）に握り飯を届けていました。葬式がすんだ晩は、大工・穴掘人には高膳をすえて接待していました。

女の加勢人には前夜豆腐廻りが来て朝早くから豆腐造りをしてもらっていました。女は主として賄いの方でありました。死人の枕飯は飯椀一ぱい分だけ炊けと言いつけていました。

穴掘人に頼まれぬ人がありました。その人は妻が妊娠中の人でした。

### 一、出棺のとき左廻りに三回廻る（以下養寿寺和尚様指導）

葬儀（出棺のとき）の行列が三回廻るについては、涅槃門から発心門にぬけ、修業門に入り、菩提門にぬけて、涅槃門に入り、つぎは涅槃門を出て、菩提門に入り、修業門にぬけて、発心門に入って火屋に収めるのです。

こうすると始めは右廻り、つぎが左廻りとなります。生死涅槃と涅槃生死と順逆に廻って三世一貫・十方法界、この一圓相に収まる佛法の道理を標するのだから右廻り三回・左廻り三回でなかなか大変なことになる。そこで、葬式は左廻り三回で止めることになっています。

### 二、葬列の順序

これは、地方によって諸説がありますが、一般的な例であげると、松明・提燈・大幡・導師（衆僧）・位牌・靈膳・膳の綱（縁の綱）・靈籠・天蓋・親族・一般会葬者となります。

### 三、膳の綱（縁の綱）

籠台から曳く脰の膳の綱はいつしか「禪の綱」と一般に解されるようになっていますが、これは佛像の開帳・入佛式・鐘供養の曳綱にも行ないます。祝のときは紅白で行ない、葬式のときは白で行ないます。

## 〇もぐら打ち

十三日の昼から手頃な男竹を切り取り蔓も切り取ってきます。竹の笹は落とさなくて笹の部分折り曲げ藁で包み、蔓で螺旋状に巻取りしてもぐら打棒ができあがります。

十四日の早朝、外の四方を「もぐら打棒で土をもぐらぬように」と打ち叩いて廻ります。

子ども達は初夜の嫁さんの尻叩きに行きます。これは初嫁が一生居座ることを願って初嫁の尻を叩くのです。その後で接待を受けますが、子ども達のいちばんの楽しみの行事としています。また、折れた打棒は沢山の実がなるようにと、柿の木に掛けておきます。

## ○鬼火焚き

正月六日夕方から青竹を切り取って来て家の前に置きます。七日朝竹を一か所に寄せます。焚く場所は道端の三叉路になった所が良いのですが、現実にそうもいかないようです。

組中（仲間）が集まって焚きます。

松飾りを焼きその火で鏡餅を焼きます。この餅を神仏に供え厄除とします。また、餅を食べ鬼火に暖まると無病息災といわれており頬が赤くなる程暖まります。

## ○七草粥

七草粥は畑からせり、なずな、ははこぐさ、はこべ、ほとけのぞ、かぶ、だいこんを取ってきて、それをゆがき水を切っておきます。粥を炊くときゆがいた七草を入れ炊きあげると七草粥ができあがりま

す。七草粥は、夏の病にかからぬようにと欠かさず炊いて食べています。

## ○彼岸ごもり（主に秋彼岸）

彼岸の中日に集落の総ての人が、観音堂（下組）権現堂（上組）に寄り合い、先祖をお祀りして感謝を捧げ酒食を交わしていました。

酒を注ぎ交わし、肴も交わします。また、押鮓、押ごわえを交換し合い、親睦を深めていました。余興には歌や踊りがあり賑わっていました。若者は押鮓、押ごわえ等を飯めしそうケを持ち回って貰うのでした。それを明日の宿移りの時、そうケの鮓、こわえが空になる程食べていました。後で「腹ゴナシ」にと俵担ぎ、棒押し、引き、捻り等をして体力をつけていました。

## ○地藏菩薩祭（六地藏大菩薩）

昔は旧暦七月二十四日青年団員総出して、昼から竹と杉の葉を藤ふじかづら葛まがきで編んで籬まがきを作って囲み、花を大竹筒に挿入れ供えます。

六地藏菩薩を年毎に一体を右回しで移していきます。夕方から集落の大方の人がお詣りします。青年の方から御神酒を頂き御供餐をうけます。

その後で昔は鉦、笛、太鼓を打って歌や踊りもでて祭りが盛りあがっていました。現今でも祭りの仕様は同じですが、子供、青年団、婦人会をはじめ各人よりの歌や踊りで祭りを賑やかにしてくれています。

## 第七節 波多津町の名字

### 一、集落別世帯数並名字数（町内一軒だけの名字は別記）

#### ●木場（六十五世帯）

松下（二十四） 井本（十一） 末長（九） 前川（七） 山口（四） 長谷川（四）  
上田（一） 西川（二）

#### ●開拓（九世帯）

古川（一） 松下（一） 高森（一） 井本（二） 渡辺（一） 堤（一）

#### ●筒井（五十三世帯）

田中（六） 古川（十二） 市丸（十一） 松尾（四） 奈良崎（九） 鶴田（二）  
上田（三） 宮崎（二） 田原（二）

#### ●井野尾（三十七世帯）

古川（十四） 前田（二） 古河（四） 高田（八） 山口（一） 大久保（四）  
森野（三） 藤本（一）

#### ●田代（十九世帯）

田中（五） 古河（七） 谷崎（五）

#### ●板木（三十世帯）

市丸（二） 前田（十） 畑山（九） 瀬戸（五） 古館（二）

#### ●津主（二十世帯）

市丸（十五） 前田（三） 太田（二）

#### ●中山（三十九世帯）

田中（十五） 古賀（十六） 松尾（五） 瀬戸（一） 太田（一）

#### ●畑津（四十四世帯）

田中（一） 松本（九） 小杉（一） 井手（三） 金子（四） 前田（二） 塚部（一）  
大久保（三） 坂本（五） 原田（四） 浦田（三） 谷本（三） 山本（三）  
野田（一） 中島（一）

#### ●内野（六十世帯）

小杉（十八） 井手（六） 金子（十二） 古賀（一） 藤森（九） 坂本（二）  
原田（二） 鶴田（二） 藤本（一） 脇山（二） 丸田（二）

#### ●煤屋（三十四世帯）

田中（二十七） 鶴田（一） 岸本（三）

#### ●馬蛤潟（二十九世帯）

井手（八） 井本（一） 吉田（一） 渡辺（五） 原田（一） 柴田（六） 橋口（一）

中島 (一) 辻 (二)

●辻 (四十四世帯)

田中 (一) 高森 (二十) 栗原 (十一) 山口 (一) 池田 (二) 川元 (一)

波多 (二) 稲葉 (一) 小石原 (一) 川添 (一) 内田 (一) 廣瀬 (一)

●浦 (二百六十八世帯)

田中 (三十七) 古川 (三) 市丸 (二) 松本 (十四) 高森 (二) 小杉 (三)

井手 (四) 金子 (四) 塚本 (二十) 古賀 (一) 栗原 (五) 酒谷 (十四)

松尾 (三) 青木 (十二) 塚部 (十) 藤森 (二) 篠崎 (十) 吉田 (七)

久保 (八) 山口 (一) 渡辺 (一) 大塚 (七) 水尾 (七) 橋口 (五) 浦田 (二)

杉本 (五) 大石 (四) 宮崎 (一) 古館 (一) 池田 (一) 川元 (二) 岩野 (三)

津田 (三) 平松 (三) 堤 (一) 野田 (一) 稲葉 (一) 小石原 (一) 川添 (一)

内田 (一) 川本 (二) 芳屋 (二) 樋口 (二) 岩崎 (二) 庄司 (二) 須藤 (二)

谷川 (二) 堤田 (二) 古崎 (二) 古橋 (二)

●名字別集計 (七百五十一世帯)

田中 (九十二) 古川 (三十) 市丸 (三十)

松下 (二十五) 松本 (二十四) 高森 (二十三)

小杉 (二十二) 井手 (二十一) 金子 (二十)

塚本 (二十) 古賀 (十八) 前田 (十七)

栗原 (十六) 井本 (十四) 酒谷 (十四)

松尾 (十二) 青木 (十二) 古河 (十一)

塚部 (十一) 藤森 (十一) 篠崎 (十)

末長 (九) 畑山 (九) 奈良崎 (九)

吉田 (八) 久保 (八) 高田 (八)

前川 (七) 山口 (七) 渡辺 (七)

大久保 (七) 坂本 (七) 原田 (七)

大塚 (七) 水尾 (七) 瀬戸 (六)

柴田 (六) 橋口 (六) 鶴田 (五)

谷崎 (五) 浦田 (五) 杉本 (五)

長谷川 (四) 上田 (四) 大石 (四)

宮崎 (三) 森野 (三) 古館 (三)

太田 (三) 谷本 (三) 岸本 (三)

池田 (三) 川元 (三) 岩野 (三)

津田 (三) 平松 (三) 西川 (二)

堤 (二) 田原 (二) 藤本 (二)

山本 (二) 野田 (二) 中島 (二)

脇山 (二) 丸田 (二) 辻 (二)

波田 (二) 稲葉 (二) 小石原 (二)

川添 (二) 内田 (二) 川本 (二)

芳屋 (二) 樋口 (二) 岩崎 (二)

庄司 (二) 須藤 (二) 谷川 (二)

堤田 (二) 古崎 (二) 古橋 (二)



## 二、複数使用のうち一集落だけの名字

### (1) 浦集落のみ二十二種

塚本・酒谷・青木・篠崎・久保・大塚・水尾・杉本・大石・岩野・津田・平松・川本・芳屋・樋口・岩崎・庄司・須藤・谷川・堤田・古崎・古橋

### (2) 他の集落十八種

木 場 (末長・前川・長谷川・西川)

板 木 (畑山)                      筒 井 (奈良崎・田原)                      井野尾 (高田・森野)

田 代 (谷崎)                      馬蛤潟 (柴田・辻)                      畑 津 (谷本・山本)

煤 屋 (岸本)                      内 野 (脇山・丸田)                      辻 (波多)

## 三、町内五十四軒は一つ名字

### (1) 浦集落のみ三十二種

石井・井川・大西・大野・横場<sup>おうば</sup>・梶山・川崎・川野・木寺・小島・小寺・塩塚・正野・末吉・田森・竹田・谷口・筒井・永野・野方・浜田・浜地・原口・東島・前山・町田<sup>まちだ</sup>・溝口・本石・森・山下・吉村・早稻田

### (2) 浦以外の一軒だけの名字 (二十二軒)

木 場 (松岡・一ノ瀬・中西) 開 拓 (峰松・木須)                      筒 井 (宮口・古澤)

田 代 (福野)                      板 木 (加川・小田)                      内 野 (堀田・堀川・藤田)

煤 屋 (佐伯・永田・居石<sup>すえいし</sup>) 馬蛤潟 (兼武・石崎・清松)                      辻 (福地・川上・廣瀬)

## ○集落別の名字及世帯数

集落別	名字	世帯数	・	集落別	名字	世帯数
木 場	十一	六十五		津 主	三	二十
開 拓	八	九		中 山	六	三十九
筒 井	十一	五十三		畑 津	十六	四十四
井野尾	八	三十七		内 野	十四	六十
田 代	五	十九		煤 屋	六	三十四
板 木	七	三十		馬蛤潟	十二	二十九
辻	十三	四十四		浦	八十五	二百六十八
合計	名字実数 二百五	世帯数 七百五十一				

## 第七章 宗教

### 第一節 神社・寺院

#### 一. 神社

町内の神社は明治三十年代後半から、勅令により、「信徒数が少なくて社殿は永年の間に自然と荒廃し、到底維持復旧の見込立たず、祭祀さえもいき届きかねる」として、合祀を指導勧誘され、四十年までには三十数社が次の六社に合祀を終わっている～畑津田嶋神社・筒井田嶋神社・板木田嶋神社・浦金比羅神社・木場田嶋大明神・中山大山祇神社。しかしその後還座された神社もあるという。



屋根の千木 堅魚木破風板

#### 木場区

##### 田嶋大明神

○所在地 木場一宇開田 二二三一ノ一番地

○由緒 創建年代不詳（旧村社指定）

唐津拾風土記によると、天正十八年庚寅二月隈崎豊後守源倍建立と棟札に書いてあり、今から四〇〇年前になりますが、天正十年（一五八二）熊野十二社権現隅崎庄建立との記録もあります。現在の棟札には慶応元年とありますが、木場城築城と創建との関連があるように思われます。

○祭神 市杵島姫命 湍津姫命・田心姫命

合祀になった神社は無連神社（伊弉諾尊・伊弉冉尊・忽穗耳尊）の三神並に字加倉の肥熊神社（素戔鳴神）、字大知木の熊野神社（無弉諾尊・伊弉冉尊）の以上四社九神が祀られています。合祀 明治四十一年九月（指令収佐二第三五三七号）

- 宮 司 東松浦郡北波多村徳須恵 堤 貞信氏
- 神社所有地 境内五十五坪 田一反八畝二歩 原野三十町歩（明治四十年当時）
- 祭 日 一月二日 宮司・惣代・区長が出席して祭祀があり、十月十八日の大祭秋祭りには村中で参拝、酒盛りも行われます。春と秋の彼岸にも村中で参拝があります。

### 合祀された神社

- 所在地 字無連 十二社神社（無連神社）
- 由 緒 創建年代不詳
- 社 殿 二間に三間 木造茅葺 信徒四十二戸 境内十坪（官有地）田一反八畝二歩
- 合祀願文 「右ハ信徒少数ニシテ累年ノ久敷自然頽廢致シ到底維持ノ見込無之ノミナラズ祭祀迄モ行届兼候間 今般同村大字木場開田無格社田嶋神社二合祀仕度候間御許可被度下◎別紙双方明細書添信徒惣代並社掌連署此段奉願候也」
- 信徒惣代 松下永太郎 長谷川三治郎 松下定右衛門
- 提 出 明治四十年三月二十七日
- 合 祀 明治四十一年一月九日（合祀指令）
- 社 掌 東松浦郡北波多村徳須恵 堤 卓見（明治四十年現在）
- 所在地 字加倉 肥熊神社
- 由 緒 創建年代不詳
- 祭 神 素戔鳴命
- 社 殿 二間に三間、木造茅葺 信徒九戸 境内二十歩 民有地 第三種
- 信徒総代 松下初太郎 山口万造 山口安兵衛
- 合 祀 明治四十一年一月九日 木場開田 田嶋神社に合祀

### 熊野神社

- 所在地 大字木場字大知木（無各社）
- 由 緒 創建年代不詳
- 明治四十年三月木場 田嶋神社と合祀願提出、信徒少数に付き維持管理に困難のために合祀願。明治四十三年合祀願許可になり木場開田、田嶋大明神に合祀。但し大知木熊野神社は、大知木氏子の守護の神として継承崇拝し合祀され残されています。
- 建物・神殿・拝殿共に同所にあります。建物間口 五m四方。木造瓦屋根
- 宮 司 北波多村徳須恵 堤 貞信氏

合祀前（明治四十年当時）の熊野神社

- 由 緒 創建年代不詳 社殿（拝殿）二間に三間 木造茅葺
- 信 徒 九戸 境内二十坪 民有地 第三種
- 惣 代 末永熊造 松下和吉 橋本丹治郎



熊野神社

筒井区

田嶋神社（村社）

- 所在地 筒井 字上戸平
- 由 緒 創建年代不詳  
明治四十一年一月九日、佐賀県指令（佐第四一五号）及び明治四十三年五月二十八日、佐賀県指令（佐第二六六号）により、明治四十三年七月十五日、波多津村大字筒井字上戸平、1、猿田彦神社、井野尾字前田、2、和田津見神社並に井野尾字鳥居原、3、日枝神社、筒井字小峠、4、大山祇神社が社田嶋神社に合祀されています。
- 宮 司 伊万里市大川町大川野宿 田嶋神社宮司  
田中義矩氏
- 神社所有地 境内六四〇坪 第一種官有地 原野一畝 田一反七畝十六歩（明治四十一年現在）
- 祭 日 一月一日 一戸一名以上参拝、正月初祈願祭 四月に春祭り

宮司の司祭により村中で参拝。五月に苗代種蒔き後、豊作を願って祈願。  
七月下旬 夏季の流行病にかからぬよう村中で参詣。九月中に牛神様祭り。  
以前は牛神様の前でお籠り・酒盛りが行われていた。牛神様は筒井の山の  
頂上付近。

十月 秋祭り 秋の収穫感謝祭り

十一月 筒井の「お供日」で神前にお酒・米・甘酒等を供える。

十二月 今年最後の感謝祭り 昔は稚児舞いなどがあっていた。



田嶋神社 最近瓦替をして整備された

#### 合祀された神社

○所在地 筒井字上戸手 猿田彦神社（無格社）

○祭 神 天字津女命

○由 緒 創建年代不詳

○神 殿 四間に二間半 木造瓦屋根

○拝 殿 三間に六間 木造茅葺 信徒七十戸 境内六十八坪（官有地）

○信徒惣代 田中恵太郎 市丸三太郎 宮崎吉作

○合 祀 明治四十一年一月九日（佐兵第四一五号）田嶋神社に合祀

○所在地 筒井字小峠 大山祇神社（無格社） 祭神 大山祇命

○由 緒 創建 元和三年 社殿・石祠・境内二坪（官有地） 信徒七十二戸

○信徒惣代 市丸三太郎 宮崎吉作 田中恵太郎

○合 祀 明治四十一年一月九日 佐賀県指令（収佐兵第四一五号）明治四十三年五月

二十八日 佐賀県指令（収佐兵第二六六号）によって合祀認可（明治四十四年現在）



## 井野尾区

### 山王宮

○所在地 大字井野尾 字鳥居原（無各社）

○由 緒 創建年代不詳 山王宮鳥居は寛政七年（一七九五）建立の記録がある。

○祭 神 大山咋命

○山王宮の意義 山王宮の祭神は大山咋命で「グイ」というのは山の木や五穀をグイグイと延して育ててくださる神徳を表しており、五穀豊穰や家庭での日常生活の守り神とも云い、山の頂上や高い場所に鎮まる場合が多い。

総本社は滋賀県大津市の日吉の大社であるが、山王の名前はこの大社の延暦寺のそばから山王権現と称したことから出ている。当時の神仏習合思想の影響を受け、日吉神社の神は釈迦の垂示とされ、極めて位の高い神とされたところから多くの信仰を受けている。山王権現の名を以て、驚異的な発展をとげ、全国の分社はおよそ三八〇〇社に至っている。また京都の松尾大社の御祭神も大山咋命であり、酒造組合の信仰を受け、酒の守り神として知らされている。（山王宮掲示板より）

○神 殿 間口・奥行共に三m。木造瓦屋根

○祭 日 一月一日 四月六日の春祭りの時は、坂下の公民館で酒盛りがある。

七月上旬 夏祈禱 夏の流行病防止のため村中で参拝。

十月六日 秋の感謝祭り。

○宮 司 大川町大川野宿 田中義矩氏



山王宮



## 合祀された神社

- 所在地 井野尾字前田 和田津見神社（無格社） 圃場整備のため跡形もない
- 由 緒 創建年代不詳
- 祭 神 海童命
- 社 殿 石祠 拝殿は一間に一間一尺。木造瓦屋根 信徒四十戸  
境内三十五坪（官有地）
- 信徒惣代 古河昇治郎 高田吉次郎 古川百造
- 合 祀 明治四十一年一月九日 明治四十三年七月十五日筒井上戸平 田嶋神社に合祀。
- 所在地 字鳥居原 日枝神社（無格社）
- 由 緒 創建 永正二年十一月
- 祭 神 伊佐奈岐尊・伊佐奈美尊 社殿は一間に一間 木造瓦屋根  
拝殿は三間に六間、木造茅葺
- 鳥 居 唐基 九尺三寸 燈籠一对 九尺六寸 境内三〇〇坪（官有地）  
信徒三十七戸
- 合祀願文 「右八信徒少数ニシテ自然頽<sup>た</sup>廢シ維持困難見込モ無之ノミナラズ祭祀マデモ  
行届兼候条今般同村大字筒井村社田嶋神社二合祀仕度候間御許可被成下度別  
紙双方明細書相添へ信徒惣代及社掌連署ノ上此段奉願候也」
- 信徒惣代 古河昇治郎 高田吉治郎 古川百造
- 合 祀 右二社明治四十一年一月九日認可  
明治四十三年七月十五日筒井上戸平村社田嶋神社に合祀

## 田代区

### 三島神社

- 所在地 大字田代 字大平
- 由 緒 創建年代不詳  
明治四十年九月、田代字下の原の三島神社が、板木字前田、村社田嶋神社に合祀され、尚  
三島神社を分祀され現在の三島神社をむらの氏神として崇拝継承されています。神社前石  
段の下に弘治六地蔵と樹令五百年に及ぶ杉の大樹が立っていたことから、創建は古いもの  
と推定されます。鳥居は、合祀になった三島神社の鳥居を現在地に移転したものです。
- 祭 神 大山祇命（山の守護神）
- 神 殿 六m四方。木造瓦屋根
- 祭 日 一月五日 宮惣代・区長等が参列、宮司の司祭によって祭典。祭典後は、  
各氏子の家の今年の幸運と健康祈願のため家払い行事があります。

七月上旬は、夏の流行病にかからぬよう祈願します。



三島神社 鳥居 明治21年2月吉日

#### 合祀された神社

- 所在地 田代字下の原 三島神社 現在田代市道 古河幸雄氏の杉山の中
- 祭 神 大山祇命
- 由 緒 創建年代不詳
- 社 殿 一間に八尺 木造茅葺
- 拝 殿 三間に四間 木造茅葺
- 信 徒 三十三戸
- 境 内 五十五坪（官有地）
- 合祀願文 「右社信徒少数ニシテ累年ノ久シキ自然頽廢し到底維持ノ見込無キノミナラズ祭祀迄モ行届キ兼候間今般同村大字板木村社田嶋神社合祀仕度候間御許可被成下度別紙双方明細書添信徒及ヒ氏子惣代並社掌連署此段奉願候也」
- 年 代 明治四十年三月十日 無各社三島神社
- 信徒惣代 古河与太郎 古川善助 渡辺米太郎
- 合祀願 明治四十年三月十日 合祀願いを県に申請 田代 福野善四郎  
(田嶋神社惣代)

- 認可 明治四十年八月九日 佐賀県指令収（佐二第一五六八号）
- 合祀 明治四十年九月二十二日 板木字前田 田嶋神社に合祀（明治四十年現在）  
（神社合祀より）

## 板木区

### 田嶋神社（村社）

- 所在地 大字板木 字前田
- 由緒 昔、板木法行城築城のみぎり、鎖守の神として、田嶋神社の三姫神を勧請したと伝えています。以前は波多津郷八ヶ村の総社。明治五年、村社に列せられ、明治四十年村内の無各社合祀により三島神社外六社が追加されました。
- 創建年代 中世、板木郷は松浦源氏波多氏の所領で岸岳城と波多津港を結ぶ要所でした。そこで一族の渡辺源太翔の末裔古川越前守保に砦を築かせ板木郷の守りとししました。砦は法行城ともいわれます。子孫代々城主で久家玄番允計に至って波多氏改易に伴い下城。子孫は庄屋として板木郷を司りました。（徳須恵松浦家系譜）  
田嶋神社は法行城の鎮守であったので久家保が勧請し、鎌倉末期から南北朝期にかけて創建され、併せて薬師如来と勧請、浄光寺が建てられたと思われます。（富岡行昌氏調査による）  
尚、明治四十年八月神社統合指令により三島神社（田代字下の原）、天満神社（津留字田頭）、田嶋神社（主屋字前田）、五穀神社（主屋字岩屋）、稻荷神社（同）、白木神社（板木字白木）、天満神社（字前田）、八幡神社（同字小野の原）が合祀統合されました。
- 祭神 田心姫命・湍津姫命・市杵島姫命・大山祇命（三島神社）、菅原道真（天満神社）、三姫神・大山祇命（田嶋神社）、・稻荷社（五穀神社）、宇賀魂命（同）、高皇産霊神（白木神社）、神皇産霊神（同）、昌陀和気命（八幡神社）以上九社十神柱が祀られています。
- 神殿 上段◎m四方。木造銅板張り。柱の根元も銅板で張ってありましたが、盗難に遭う。
- 拝殿 建坪十五坪 平成四年三月竣工 再建新築 施主 坂本篤郎氏  
施行 古館建設
- お籠り堂 間口十二m 奥行六m 木造瓦屋根 旧拝殿でした。
- 宮司 北波多村徳須恵 堤 貞信氏
- 祭日 一月五日 氏子惣代・区長等参列のもと宮司の司祭でお祭りがあります。  
祭典終了後、家内安全・健康祈願のため各家を<sup>まわ</sup>り、家払いが行われます。  
二月二十七日 記念祭 氏子惣代 区長参列・宮司により司祭  
四月折りを見て神社参拝後、本年のお祭りの予算が話し合われる。

五月七日 春の大祭 昔は余興として芝居・青年団相撲が行われました。

七月上旬 田植えが終わってから、村中集まって夏祈祷があります。

十月二十七日 秋祭り 氏子中集まり秋の感謝祭。昔は当日が板木の「お供日」とされていました。以前は春秋の彼岸祭り、お日待ち等もあっていましたが、現在は行われていません。

#### ○拝殿落成及び記念碑について

平成四年三月八日、拝殿落成式挙行。坂本氏、町内役職者、有志、氏子が出席し、板木・津主合同主催によって厳粛盛大に挙行されました。

拝殿落成式終了に引き続いて記念碑の除幕式を挙行。神社中段の第三鳥居右に高さ台一m、本体二・五m、自然石で建立。

#### ○坂本先生頌徳碑 碑文 伊万里市長 竹内通教書

「源氏松浦党板木法行城主の末裔である坂本篤郎氏は、夙に敬神崇祖の念厚く大阪豊中市で医業を営むかたわら私財を投じて、法行城跡をはじめ歴代城主及び岸岳末孫の霊碑を建立整備されると共に薬師如来堂ならびに、田嶋神社の改築を行われ、ふるさと基金として伊万里市と地元地区に多額の浄財を寄付され、郷土の発展に尽瘁されました。ここに深く敬意を表すると共に後世まで先生の偉業を奉賛することを誓い記念碑を建立するものである。」

平成四年三月吉日 氏子一同 (謹書 加川周史)

○拝殿新築 拝殿は約三十年前建てられて、老朽化までには至っていませんでしたが、度々の台風により傾きかけていました(建坪十二坪)。前記の坂本篤郎氏から、拝殿新築の申し入れがあり、感謝し敬意を表して新築の運びとなり、平成四年三月に竣工しました。建築費用は坂本氏が殆ど負担され、氏子は一部負担程度で、地元古館建築、古館増男氏の卓越した技術と熱意によって、見事完成し、市内でも誇るような拝殿が建立されました。

○建築委員 委員長 板木区長 前田博行 副委員長 津主区長 太田国一  
委員 前田良美 前田繁和 前田敏和 前田政行

○惣代 瀬戸勘次 畑山 亘 市丸国重 市丸義弘

○施工 古館建築

○顧問 加川周史



平成4年竣工の拝殿（板木の田嶋神社）

#### 合祀された神社

- 所在地 板木字白木 白木神社（無格社）
- 合祀年 明治四十年八月、神社統合指令により
- 由 緒 創建年代不詳
- 祭 神 高皇産霊神 神皇産霊神
- 社 殿 二間に三間 木造茅葺
- 信 徒 十八戸
- 境 内 六十八坪（民有地）  
跡地は現在、圃場整備のため跡形もない。
  
- 所在地 板木字前田 天満神社（無格社）
- 由 緒 創建年代不詳
- 祭 神 菅原道真
- 社 殿 二間に三間 木造茅葺
- 信 徒 八戸
- 境 内 七十二坪（民有地）
- 跡 地 古館静雄の杉山跡地に石積みの無記名の石碑があります。

- 所在地 板木字小野の原 八幡神社（無格社）
- 由 緒 創建年代不詳
- 祭 神 昌陀和気命
- 社 殿 二間に三間 木造茅葺
- 信 徒 十九戸
- 境 内 九坪（民有地）
- 惣 代 右三社共に古館東七 市丸常七 前田定治
- 宮 司 堤 貞見氏
- 跡 地 前田繁和氏の畑地になっています。
- 合祀願文 「右参社は信徒少数ニシテ累年ノ久シキ頽廢到底維持ノ見込無之而已ナラズ祭祀迄モ行届兼候間今般同村村社田嶋神社へ合祀下度候間御許可被成下別紙双方明細書添属信徒惣代並二社掌連署此段奉願候也 明治四十年三月十八日」
- 合祀認可 明治四十年八月九日、板木前田 田嶋神社へ合祀認可、同年九月二十二日合祀。

#### 明治初年頃の板木の田嶋神社

- 社 殿 二間に一丈二尺 木造瓦屋根
- 祝詞座 一間に七尺 木造瓦屋根
- 拝 殿 三間に六間 木造茅葺
- 宮 司 北波多村徳須恵 堤 卓見氏
- 信 徒 一九〇戸
- 境 内 三五〇坪（官有地）
- 神社所有地 田 一反一畝九歩 地価額二五〇円 山林 四反四畝 地価額一一〇円 原野 一町二反九畝一步 地価額二二〇円 合計価格 五八〇円（明治四十年）
- 信徒惣代 板木 瀬戸重佐衛門 田代 福野善四郎 津留 市丸善造  
中山 田中善太郎 主屋 市丸安太郎 木場 松岡泰作

#### 津主区

##### 田嶋神社

- 所在地 大字主屋字前田（無格社）
- 由 緒 創建年代不詳（旧田嶋神社） 再建 大正十一年九月吉日  
明治四十年まで氏子の守護神として安全を祈願し、崇敬されていました。神社統合指令によって、同村板木字前田村社田嶋神社に合祀。後、市丸建設の先代社長市丸広太郎氏が、当



時土木請負業をされていた関係もあり、事業の安全と地域住民の守護神として大正十一年九月吉日、自己の土地を提供して再建。その後、現在の市丸建設社長市丸徳一氏が私財を投じて平成二年頃より鳥居・唐獅子・燈籠等を揃え、神社境内を広げ、整備され氏子一同より崇敬される神社となりました。

- 拝 殿 建設計画中
- 祭 神 市杵島姫命 湍津姫命・田心姫命 大山祇命
- 宮 司 北波多村徳須恵 堤 貞信氏
- 祭 日 宮司と検討中



平成2年より献呈整備された津主の田嶋神社

#### 合祀された神社

- 所在地 大字主屋前田 田嶋神社・大山祇神社 二社とも無各社
- 由 緒 創建年代不詳
- 祭 神 田心姫命 湍津姫命 市杵島姫命 大山祇命
- 社 殿 一間に一間半 木造瓦屋根
- 拝 殿 三間に四間 木造茅葺 (お籠り堂)
- 信 徒 十一戸
- 境 内 九十一坪 (官有地)

○所在地 字岩屋 五穀神社 稲荷神社 共に無各社

○由 緒 創建年代不詳

○祭 神 石祠 高さ 二尺五寸

○信 徒 十一戸（両社計）境内四坪（官有地）

○所在地 大字津留字田頭 大山神社 天神神社 共に無各社

○由 緒 創建年代不詳

○祭 神 大山祇命 菅原道真

○信 徒 十二戸

○境 内 三十八坪（官有地）

○社 殿 一間に一・五間 木造茅葺 拝殿 三間に四間 木造茅葺（お籠り堂）

○合 祀 明治四十年八月九日 佐賀県指令収（佐二第一五六八号及び一五六九号）  
大字板木前田 田嶋神社に合祀 明治四十年

○惣 代 太田国四郎 市丸米太郎 市丸円作 前田栄吉 前田音次郎 市丸国太郎

## 中山区

### 大山祇神社

○所在地 大字中山 字西の平（無各社）

○由 緒 創建年代不詳 大山祇命又は大山津見神ともいいます。

大山祇命は伊邪那岐命と伊邪那美命との間に生まれ、山を納める神とされています。（古語辞典）

明治四十年八月八日、佐賀県指令収（佐二第二八六八号）により合祀。字上

の原の稲荷神社、◎字立石 五穀神社を共に明治四十年十月二十六日、西の平大山祇神社

（無格社）へ合祀。尚、五穀神社は、慶応二年四月丑の日稲が不作になったので建立されました。

○祭 神 大山祇命 保食神（五穀神社） 倉稻魂命（稲荷神社）

○宮 司 東松浦郡北波多村徳須恵 堤 貞信氏

○祭 日 一月上旬 宮司により司祭。祭典後、氏子の家を回り、宮司により家払いが行われます。

五月春祭り 苗代の種蒔きが終わって、豊作祈願があります。

七月上旬 田植えが終わってから、夏の流行病防止の祈願があります。

十月 秋祭り 豊作感謝の祭り。



中山 大山祇神社

#### 合祀された神社

○所在地 中山字上の原 稲荷神社（無各社）

○由 緒 創建年代不詳

○祭 神 倉稻魂命

○社 殿 一間に一・五間 木造瓦屋根

○信 徒 一戸 境内七坪（民有地）

○信徒惣代 古賀初太郎 田中◎太郎 田中末次郎

○所在地 中山字立石 五穀神社（無各社）

○由 緒 慶応二年寅四月丑の日 稲作が不作のため建立

○祭 神 保食命

○社 殿 石祠 一尺に一・二尺 信徒五十一戸

○境 内 五十坪（民有地）

○合祀願文 「右二社八信徒少数ニシテ累年ノ久敷自然頽廢致シ到底維持ノ見込無之ノミナラズ祭祠迄  
モ行届兼候条今般同村中山字西ノ平無各社大山祇神社ニ合祀支度候間御許可被成下度別紙  
双方明細書相添信徒惣代並社掌連署此段奉願候也」

○社掌信徒惣代 社掌 堤 貞見 惣代 古賀初太郎 田中◎太郎 田中末次郎

○合祀願 明治四十年三月二十日提出 同年八月八日合祀許可（県指令二八六八号）

○合 祀 明治四十年十月二十六日 西ノ原大山祇神社（無各社）に合祀。

## 畑津区

### 田嶋神社（村社）

○所在地 畑津字八斗田

○由 緒 創建年代は不詳ですが、畑津宝泉寺の古文書によると、御岳城主畑津平内清和公（三〇〇戸）の祈願所又は、岸岳城主波多家の祈祷所として祭祀を営まれていた、とあります。再建は元武元年九月（一一三四）、大工安部邦宗と神社古文書に記録があります。

○祭 神 市杵島姫命 多岐津姫命 田心姫命 伊邪那岐命 伊邪那美命

明治四十年神社統合指令により左記の神社を合祀。

畑津 天満神社（菅原道真） 内野 飯盛神社（伊弉諾命 天忍穗耳命 伊弉冉命） 内野 天満神社（菅原道真） 煤屋 黒男大明神（大国主命）

馬蛤湯 龍神社（海童命）以上十一神

○国重要文化財指定

昭和五十九年、田嶋神社本殿は九州芸工大学教授 沢村 仁氏・文化庁建造物課長 工藤圭卓氏等の調査があり、昭和六十年十二月一日、伊万里市重要文化財の指定を受けた。更に昭和六十二年六月三日、国重要文化財として指定を受けました。建築史・地域史等の学術研究上、極めて貴重な建造物と高い評価を受けています。

○建造物の構造

本殿は桁行三間、梁行四間の切妻造りで椽瓦葺覆屋になっています。本殿の構造の形式は柿葺三間社見世棚造りと呼ばれるものです。

身舎柱は床下で八角柱、床上上内側は正面の中柱を除き、すべて十六角です。柱はすべて自然石上に建てられてあり地貫腰内法長押と頭貫と呼ばれる建築技法で作られています。

柱頭には平三斗と呼ばれる形式の組物が置かれ、四隅は連斗なしの連三斗と呼ばれる形式の組物で造られています。

四隅の秤肘木は正面及び背面側は肘木とせず木鼻になっています。木鼻はほぼ垂直に切断されています。妻側には中備は全くなく、妻飾りは豕叉首と呼ばれる形式で造られています。

正面三間は幣軸付き板唐戸で内部は板床竿縁天井で背面に高柵を設けてあります。見世柵は大面取りの角柱を自然石の石礎上にたて、下面面取の頭貫を渡しています。柱頭は出三斗で両端は頭貫木鼻を振肘木に連三戸とし、身舎柱とは繫虹梁で結んでいます。

中備は中央間のみ斗配しています。正面三間中央間のみ斗を配するという建築技法がこの建造物の大きな特徴のひとつになっています。向拝の桁や、垂木は後年の補修であり、建



立当時の物でなく、新しいと思われます。

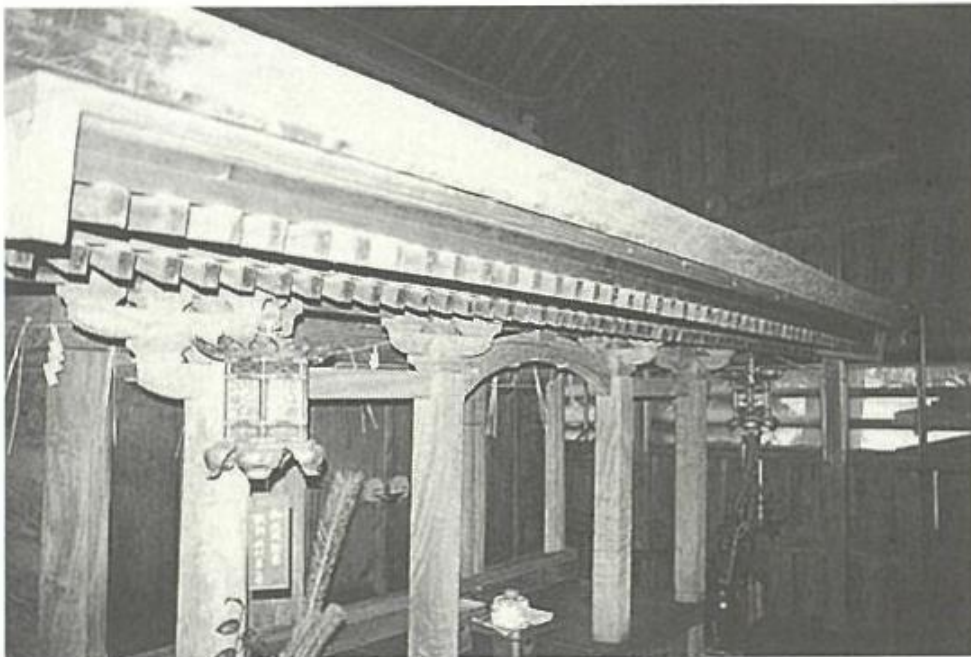
この社殿は残存する顔料から、本来は朱塗りの彩色の社殿と考えられます。神社創建年代は相当古いものと思われます。

○手洗鉢と建物新設

平成四年、氏子中で新設。手洗鉢は自然石。建物は木造瓦屋根。



畑津 田嶋神社



国の重要文化財指定の見せ棚造り

## 合祀された神社

- 所在地 大字畑津字八斗田 天満神社（無格社）
- 由 緒 創建年代不詳
- 祭 神 菅原道真
- 神 殿 一間四方 木造瓦屋根
- 境 内 九十五坪（官有地） 信徒 四十八戸
- 合祀願文 「右八信徒少数ニシテ累年ノ久シキ頽廢致シ到底維持ノ見込無之而已ナラズ祭祠迄モ行届兼候間今般同字村社田嶋神社へ合祀仕度候間御許可被成下別紙双方明細書添属信徒惣代並二神掌連署此段奉願候也」

明治四十年三月二十八日 社掌 田村力太郎

- 信徒惣代 田中告太郎 中島三郎 前田末太郎
- 合祀認可 明治八年八月八日 合祀認可（佐第一五六号）
- 合 祀 明治四十一年九月十九日 畑津八斗田 田嶋神社に合祀
- 祭 日 正月祭り 一月 一日 宮惣代参列・宮司により司祭  
記念祭 三月十七日 右に同じ  
祇園祭 七月十四日 前夜祭 宮司・宮惣代・区長参拝  
七月十五日 本祭り 宮惣代・区長参列 馬蛤潟にお下り  
田嶋祭 十月十六日 宮惣代・区長参拝  
十月十七日 宮惣代 浦新地へお下り 浦区民は皆参拝される、供日  
大抜祭 十二月三十日 年越行事
- 氏 子 畑津・内野・煤屋・馬蛤潟・辻・弁賀・平串・浦の区民  
畑津老人クラブでは毎月一日・十五日に神社掃除の奉仕が行われています。  
特に四、五日の落葉の時は全員出席して清掃がなされます。又、祇園祭り・  
田嶋祭りと年末は老人クラブによって〆縄を作り奉納されます。

## 内野区

### 合祀された神社

- 所在地 内野字河下 飯森神社（無各社）
- 由 緒 創建年代不詳
- 祭 神 伊弉諾命 天忍補耳命 伊弉冉命
- 神 殿 一間に二尺四方 木造瓦屋根 拝殿 三間に◎六間 木造茅葺
- 境 内 七五八坪（官有地） 第三種 信徒七十五戸



- 所在地 内野字下田 天満神社（無各社）
- 由 緒 創建年代不詳
- 祭 神 菅原道真
- 境 内 一〇四坪（官有地） 第三種 信徒七十五戸
- 合祀願文 略  
明治四十年三月二十七日 社掌 田村力太郎 信徒惣代 井手丈助  
坂本亀左衛門
- 合祀認可 明治四十年八月八日（収佐二第一五七四号及び一五六五号）  
畑津字八斗田 田嶋神社に合祀。

## 煤屋区

### 黒男大明神

- 所在地 大字煤屋字煤屋
- 由 緒 創建年代不詳  
昔、煤屋崎に畑津浦の漁夫が島かげに漂流していた漆塗の筥を拾い上げてみると、御神体（御鏡）が現れました。これを大事にし、煤屋崎の沖にある島の岩蔭（現在の古神山）に祀りました。そして漁に出る毎に御神酒や供物をして参詣をしていたところ、この漁夫は大漁続きでその子孫まで富を得たといわれます。（田村宮司からの伝承）  
黒男大明神は、明治四十年八月八日（佐賀県指令収佐二第四十七号◎第一五六四号）合祀許可を得て、明治四十一年九月十九日、畑津八斗田、田嶋神社に合祀。古代から氏子の守護神として現地に残され、合祀され今日に至っています。
- 祭 神 大国主命（あしはらのしごうのみこと蘆原醜男命）
- 宮 司 大川町大川野宿 田嶋神社宮司 田中義矩氏
- 神社歴 今から二三十余年前宝暦三癸西六月吉日、古神山での祭祀が不便なため、現在地小島に移転。福田村 坂口守人・名取格右衛門とあり、天保十三年壬寅歳正月吉辰、願主氏子中。社人 福田村 坂口守人・庄屋佐伯熊作、名頭善九郎  
惣代 東造減吉。鳥居建立の銘があります。  
黒男大明神宮の再建は明治十二年巳卯九月穀旦。社人 塩屋村 牧野津田衛 当番 岸本 広右衛門、田中和助、大工 内野村 脇山善四郎、◎与吉（棟札による）  
明治四十一年九月神社統合指令により御神体（御鏡）を新調し、明治四十三年九月合祀。黒男神社 煤屋村と銘を刻み、波多津字八斗田、田嶋神社に合祀。
- 祭 日 一月二十日 百々平神事  
七月 夏祈祷・疫病災難除け  
十月 秋の願成就。十月二十七日晩「イトマゲ」（神送り）をされ、出雲大社へ出発

される。

十一月二十八日 「ウチムキヤ」(神迎え)が昔から代々受け継がれています。

○拝殿再建 平成二年七月吉日新築 宮惣代 田中 繁

世話人 田中繁幸 田中次雄 評議員 田中勝利 佐伯光義 岸本熊一

田中健一



平成2年改築

#### 合祀された頃の黒男大明神

○所在地 字煤屋 黒男大明神(無格社)

○由 緒 創建年代不詳

○祭 神 大国主命

○神 殿 一間三尺四方 木造瓦屋根 拝殿 二間三尺に五間 木造茅葺

○境 内 三一七坪(官有地) 第三種 信徒三十八戸

惣代 田中定右衛門 田中万五郎 田中弥市

○合 祀 明治四十年八月八日認可 明治四十一年九月同村畑津村社田嶋神社に合祀。

## 馬蛤潟区

### 龍神社

○所在地 大字辻字深浦（無格社）

○由 緒 創建年代不詳

- ・明治四十年三月二十八日 合祀願を県に申請
- ・明治四十年八月八日 佐賀県指令收佐二第四七号により合祀許可
- ・明治四十一年九月十九日字深浦の龍神社は村社田嶋神社（同村畑津八斗田）に合祀。分祀され、現在地に昔のまま残され、氏子の崇敬を受けています。

○祭 神 海童命 海上の安全守護の神

○神 殿 間口 五m、奥行 四m 木造瓦屋根

○宮 司 大川町大川野宿 田中義矩氏

○祭 日 祭日は畑津田嶋神社に合祀された関係上、定祭日はないようですが、祭日は畑津田嶋神社に参拝したあと、地元龍神社に参拝されています。

馬蛤潟は今から二百八十余年前、馬蛤潟新田耕地整理がなされ、農地の耕地面積も他の村より多く、昔から専業農家として農産物生産一筋に励まれてきました。そのため風水害の災害防止、豊作を願って敬神崇祖の念が厚く祭祀が継承され、今日に至っています。

○農作物祈願 ・二百十日 二百十日は古代から台風で農家の最悪の日で、村中で集まり安全を祈願してきました。祈願祭典後は公民館で一重を持参し、お神酒を振舞い酒盛りが行われています。

・二百二十日 この日も台風の襲来日として、時間を定め農家の人が参詣します。

二百三十日を過ぎてから、都合を見て御願成就のお礼参りをされる。特に農家の方は二百十日から二百三十日に至る間、毎日夕方頃から祈願のため灯明を捧げられます。又、年間を通じて一日と十五日は家周りで神社に明を捧げて、家内安全、五穀豊穣のため参詣されます。農作物の安全祈願行事がこのように熱心に行われるのは、町内はもとより市内でも稀有のことといえましょう。

○祇園祭り 以前は旧六月十五日でしたが、現在は七月十五日が恒例の祭りになってい

ます。古代より馬蛤潟の祇園祭りは有名で、畑津の田嶋神社より御降神になり馬蛤潟堤防でお祭りがあります。以前は町内はもとより町外からも参拝者が多く、出店等もあって大変な賑わいを見せていました。

祇園祭りは馬蛤潟区内であり、龍神社とは関係がないように思われますが、龍神社は海上安全・氏子の守護神であり、八丈龍王は堤防の守り神で、祇園祭りも堤防安全で関係が深いといえましょう。かつて唐津藩城主寺沢志摩守が新田堤防を重視し、安全防止と警戒のため武士七人を警護に当てていたといわれます。



龍神社

**合祀願頃の龍神社**

- 神 殿 一間四方 木造瓦屋根
- 境 内 三〇〇坪（官有地）
- 社 掌 田村力太郎 信徒惣代 辻兼太郎 井手宇太郎 柴田友太郎
- 信 徒 二十四戸
- 合祀願文 「無各社 龍神社 右八信徒少数ニシテ累年ノ久シキ頽廢シ到底維持ノ見込無之而已ナラ  
又祭祠迄モ行届キ兼不候間今般同村畑津村社田嶋神社へ合祀件度候間御許可被成下別紙双  
方証明書添属信徒惣代並二社掌連署ノ上此段奉願候也  
明治四十年三月二十八日」
- 合 祀 明治四十年八月八日 佐賀県指令収佐（第四十七号）をもって合祀許可。  
同年九月十九日合祀。

**辨賀区 合祀された神社**

- 所在地 大字辻字弁賀 田嶋神社（無格社）
- 由 緒 創建年代不詳
- 祭 神 多岐津姫命 市杵島姫命 田心姫命
- 神 殿 一間四方
- 拝 殿 二間に三間 木造茅葺

○境内 二五六坪 (官有地 第三種)

○合祀願文 「右ハ信徒少数ニシテ累年の久シク頽廢致シ到底維持ノ見込無之祭祀ナラズ祭祠迄モ行届兼不候間、今般同村辻高尾無格社、金比羅神社へ合祀仕候間御許可被成下別紙双方ノ明細書添属信徒惣代連署此段奉願候也」

明治四十年三月二十六日 大字辻弁賀

○信徒惣代 高森良吉 高森仁造 高森善太郎

○合祀許可 明治四十年八月九日 佐賀県指令(佐二第一五七一号)を以て許可  
同年九月二日 辻高尾の金比羅神社に合祀。

## 浦 区

### 金比羅神社

○所在地 大字辻高尾(無格社)

○由 緒 創建年代不詳

明治末期、神社統合指令により猿神社、田嶋神社(弁賀)、浦野林の藪佐神社、かまど神社が合祀されました。金比羅神社は古語辞典によれば、仏語、梵語で「鱈」の意です。仏法を守る神々の一つで、魚の体で蛇の形をし、わが国では航海安全の守り神とされています。現在、玄海国定公園となり、高尾山の山頂に金比羅神社として祀られています。

昭和の中期頃迄は御神輿も繰り出され御幸祭も賑やかでしたが、毎度の御幸神に雨天の日が多く、現在は中止となり、祭典だけが行われています。以前は辻村弁賀、平串、大園、本辻、野林、中組、郷の浦の住民はこの神社の氏子でしたが、昭和四十五年頃より波多津西部地区全集落が氏子となっています。

○祭 神 大物主命 天穗日命(藪佐神社) 高彦根命(塩竈神社) 猿神社(同)

天宇津女命(同) 田嶋神社は市杵島姫命 田心姫命 湍津姫命 以上五社七神柱

○宮 司 大川町大川野 田嶋神社宮司 田中義矩氏

○祭 日 ・一月十一日 金比羅神社と大神宮(お伊勢様)に浦の組内の人は神前に供物を供えます。参拝後は、組内で酒盛りが行われます。各部落も同じ行事ですが正月、五月、九月の各一日に行事があります。

・八月十七日 お盆祭りとしてお伊勢様祭りと同じ行事がありますが、現在は八月中の休日を利用して行われます。



金比羅社 平成3年1月

#### 合祀された神社

○所在地 大字辻 藪佐神社（無格社）野林地区

○由 緒 創建年代不詳

○祭 神 天穗日命

○祭 殿 九尺四方 木造瓦屋根

○境 内 四歩

○信 徒 一五〇戸

○所在地 大字辻 塩竈神社（無格社）野林

○由 緒 創建年代不詳

○祭 神 高彦根命

○社 殿 九尺四方 境内一五五坪

○信 徒 一五五戸

○所在地 大字辻 猿神社（無格社）野林

○祭 神 天守津女神

○社 殿 一間半に二間 木造瓦屋根

○境 内 三十八坪（官有地） 信徒 一五五戸

○合 祀 明治四十年八月八日 佐賀県指令収（佐第一五七一号）を以て合祀許可を得て、同年九月二日 金比羅神社に右三社共に合祀。

○信徒惣代 平松源治 稲葉義男 大石伝佐衛門



## 二、寺院

### 清水山流光院西雲寺 浄土宗

○所在地 波多津町木場

○開 山 神蓮社高誉上人嶺公大和尚・元和二年（一六一六）

○本 尊 阿弥陀如来

○脇 士 観世音菩薩 勢至菩薩

○中 興 当山五世願蓮社重誉上人・元録六癸酉十二月十一日亡（一六九三）岸岳城主

波多家の祈願所でありました。真言宗の本尊大日如来像があり、現在の仏像は、寛永元申子三月（一六二四）に寄進されたものです。

波多三河守三男姫の位牌 法名西雲院殿利貞妙養禅尼 天正十七己丑十一月十日没（十六歳）

波多家よりの知行一伝承によると十石というが記録不詳、寺田がありました。本堂内大鑿一明暦二丙午年（一六五六）、半鐘 銘明和二乙酉年（一七六五）

寄進

○現住職 第二十七世 栄哲和尚



木場 西雲寺

## 向陽山宝泉寺 曹洞宗

- 所在地 波多津町畑津
- 開 山 東岳融閻大和尚 慶長十九甲寅歳寂滅（一六一四）
- 開 基 御岳城主畑津平内清和（大道月仙居士三百石）
- 本 尊 薬師如来
- 脇 土 右 日光菩薩 宝永四丁亥天八月吉祥  
左 日光菩薩 大仏師法橋梁慶作
- 中 興 当山第三世 白岩泰翁和尚 元文二丁巳年（一七三七）  
火災 明治四十三年乙酉（一九一〇）全焼
- 養寿寺分立 当山再興 大正元年壬子第十七世無学仙外大和尚
- 本堂内大鑿 銘畑津村宝泉禅寺現住悦春叟代覽政元巳酉年（一七八九）
- 本堂前半鐘 銘干時寛文三（一六六三）<sup>かのえまつ</sup>癸卯歳十一月吉日誌焉鑄物師樹善兵衛政往作、日本西海  
路肥前州上松浦郡向陽山禅寺住持天海祖舜和尚小弟知全憑十方  
檀那助力鑄半鐘一口以掛干堂前所布結縁之輩現世安穩後生善處郡生徳益山冥
- 火災を免れた位牌  
帰真久室妙昌大師 元録十三<sup>かのえまつ</sup>庚辰天十二月十三日（墓所本辻に在ります） 大般若經  
松浦山座主 井木坊の墨書名があります。
- 現住職 第十九世 哲信和尚



畑津 宝泉寺

## 光月山法徳寺 真宗

○所在地 波多津町内野

○開基—開山 一世空円法師

一世はもと井手飛弾守といい岸岳波多家の五百石取りの侍大将でしたが、主君波多三河守が豊臣秀吉によって常陸に配流後は剃髪して、松浦藤川内邑に光雲寺、同提川邑に西念寺を建て、後に当邑に法徳寺を建立したとの伝承があります。

寛永十六卯巳年（一六三九）本山より寺号（真宗大谷派法徳寺）、並びに御本尊を賜りました。

○御本尊 阿弥陀如来尊像

○中 興 第十世賢寂住職 堂宇建築その他寺門興隆に挺身されました。

第十一世 翫亮住職 第十二世蓋雄住職 第十三世亮海住職

○再 建 万治元<sup>つちのえいね</sup> 戊戌年（一六五八）二世受山再建

○大梵鐘銘 光月山法徳寺本堂改築記念第十五世願主釋彰潤

施主 甲府市小杉実五郎 井手與平治

昭和三十五年九月滋賀県愛知郡湖東町鑄匠黄地佐平謹鑄南無阿弥陀仏正覚大音響流十方

○現住職 第十六世 量潤住職



内野 法徳寺

### 万年山養寿寺 曹洞宗

- 所在地 波多津町辻
- 開 祖 桂林大和尚
- 本 尊 釈迦如来 当初肥後国細川候の祈願所
- 再 建 明治四十二年近年荒廃せるを熊本より福地大賢 和尚当山再建  
二代 良悟和尚（東堂 位牌堂建立）  
三代 道雄和尚（納骨堂建立）
- 現住職 第四世 龍雄和尚（庫裡建築、石垣並参道改築）
- 寺院建築 昭和十五年
- 大鑿銘 為先祖菩提施主清水前田作太郎 養寿院移転二世鳳山良悟代維時  
大正四年旧七月十日
- 小鑿銘 昭和六十年九月吉日 寄贈梅花講員一同
- 半鐘銘 大正三年九月吉日 調進所京都寺町高橋戈治郎



大園 養 寿 寺

### 三、おこもり堂

#### 木場大師堂

○所在地 波多津町木場清水

○祀ってある仏様 弘法大師

○由緒と行事 明治の初期に祀られたといひます。現在はおこもりもなくなりました。

しかし、終戦後まではおこもりがっていました。おこもりのときは、酒や煮しめをもって弘法大師堂に村中のものが集まりお詣りをして豊作や健康安全の祈願をしていました。お堂の広さは二間真四角位でありました。

#### 板木薬師堂

○所在地 板木字前田田嶋神社境内

○祀ってある仏様 弘法大師

お堂の中央仏壇に鎮座 弘法大師木造高さ一米、右薬師如来みかげ石高さ一米、外に二体の仏像、左三界◎霊等 法行城跡歴代城主末孫霊位等の木製位牌四〇糶を祀っています。

○由 緒 創建年代不詳 もとの名吉浄寺 薬師如来同所に付き関連していると推定されます。

○薬師堂建物 昭和の中期頃まで建坪十二坪の木造茅葺きであったのを、管理維持の都合上木造瓦葺き約六坪のお堂にしていますが、平成二年七月大阪豊中市坂本篤郎氏が私財を投じて新築され、建坪十坪の木造瓦葺きのお堂が完成しました。

○祭 日 昔から八月二十一日にお祭りをしていました。当時は村中集まって参拝をし、おこもり堂で赤飯を供え酒盛りがあり、夜店まで出て、大変なにぎわいでした。しかし、現在では婦人の方々が赤飯や精進料理を供えて供養しています。毎年七月十日法行城の城主末孫の霊地の供養を薬師堂で行っています。その日は元浄光寺住職外に二人の住職の司祭により坂本氏一統と井野尾・岩の本・板木の村から多くの人々が参列して盛大な供養をしています。尚、薬師如来は病の仏で霊験あらたかというので、病人の祈願は夜を徹して行われていたといひます。また、この場所は、巡礼の札所でもあり、前の広場は吉祥山浄光寺の跡地です。現在の畑津の宝泉寺であります。



## お大師さま

○所在地 波多津町辻高尾山

○祀ってある仏様 弘法大師、観世音菩薩、不動明王、地藏菩薩、いち目大菩薩

いち目大菩薩は高森プロパンより移されたものです。元高森家は「とまや」と言っていました。漁に出たとき網に石が二回も入ってきたそうです。その石から御光が出ていました。そこでその石を目の神様として高森家で祀っていたものを当社に移された由です。

○由緒と行事 お大師様は高野山からこられたといえます。

お祭り行事 旧三月二十一日、旧七月二十一日のお昼に講社の人々が分担して花を供え、絶やさないといいます。当番は郷之浦、浦潟、中組、あたご組、野林の順に回っています。また、月に一回晩にまわり番で、当番の家に集まってお経をあげて接待によべれます。さらに、三月（観音様）、四月（お大師様）、九月（お大師様）におめぐりをします。

## お大師堂

○所在地 波多津町中山字久保田

○祀ってある仏様 弘法大師

○由緒と行事 明治三十七年六月横田勝三郎氏によって建立されました。昔は札所になっていました。巡礼者はこの大師堂に一団となってお詣りをしていました。その当時は店などが出ていました。現在は毎年二回（四月二十一日、八月二十一日）にお祭りをしてしています。その日は村中の人が出てお詣りをしてしています。

## 五穀神さま

○所在地 畑津捧の木場

○祭り行事 旧暦八月十五日に五穀神社のお祭りをしていました。畑津の中組の人たち二十人余が集まっていました。その日は他所に出ている人も帰ってお祭りに参加していました。お祭りの日には、集まった人々でかまどを作り酒の酣つけをしました。酒盛りが始まる前にお酒と作ってきたおこわを神殿に供えました。酒とおこわを祭りに参加した人たちに接待をしました。お盆の一个月後だから酒盛りは晩になっていました。お月さんが上がり始める頃酒盛りはたけなわになっていました。おどりなども出てにぎわっていました。雨のときは坂本綱年氏の家で酒盛りをしていました。現在は公民館でやるようになりました。



この他にも、田代や本辻・平串など、その他の地区でも観音さまやお大師さまを祀ってあるお堂に集まって今でもおこもりをしている地区が多々あります。

## 第二節 英霊を祀る

### 一、忠魂碑

今は畑津田嶋神社本殿と並んで建立されていますが、元は波多津小学校上段に、大正七年一月波多津村在郷軍人会が建てられていました。

戦後占領軍の命によって現在地に移転されたものです。各集落においても自治公民館の庭など中心地に忠霊碑を建て、ねんごろに慰霊祭を行っておられます。

町においても、昔と変わらず毎年四月十六日、軍恩会と遺族会の共催で丁重な慰霊祭が行われています。

思えば我らが日々平和な生活をおくることができるのは、全く英霊のおかげであることを考え、英霊に対して、感謝拝礼を怠らず、またそのご遺族に対しても感謝の気持ちを忘れず、温情親切を以て接したいと思います。



田嶋神社境内 忠魂碑

二、戦死戦没者名簿

木場		氏名	戦死年月日	場 所	年令	階 級	遺族名
		福本喜曾治	大一一・六・一	広島衛戎病院 戦病死	二三	一等兵	福本 信男
		松下 民生	昭一二・九・二	西彼杵郡日見村戦病死	三三	二等兵	松下 時代
		末長 勝	昭一五・二・一一	佐世保海兵隊 戦病死	二二	一等兵	末長 リセ
		井本司三郎	昭一六・四・一九	中国福建省にて 戦死	二六	兵長	井本 富男
		中西 民英	昭一九・三・一九	唐津市松崎病院戦病死	二五	一等兵	中西 栄哲
		末長秀太郎	昭一九・九・二九	ラングーン病院戦病死	三一	伍長	末長 末延
		松下吉太郎	昭一九・一〇・三	ビルママンダレー戦死	三三	伍長	松下 キサ
		松岡 泰	昭一九・一〇・八	ブルマ方面にて 戦死	二二	海上水兵	松岡フジノ
		末長 武	昭二〇・一・二五	鹿児島沖にて 戦死	二九	一等兵	末長トシエ
		井本 則義	昭二〇・四・二八	九州西海上輸送船戦死	三〇	海少尉	井本 國弘
		落合 安治	昭二〇・五・三	黄海方面にて 戦死	三五	海上水兵	落合 政敏
		池田 卓弥	昭二〇・六・二二	佐賀陸軍病院 戦病死	二五	上等兵	池田 薫
		前川 義男	昭二〇・七・一八	マリヤナ群島にて戦死	三二	上等兵	前川トキヨ

氏名	戦死年月日	場所	年令	階級	遺族名	筒井											
						田原今朝治	古川百造	市丸良夫	市丸俊一	奈良崎達夫	古川頼太	古川正	田原可興	松尾卓二	田中熊造	古川善一	正野茂
末長 實	昭二一・八・一八	満州大連市にて戦病死	二四	伍長	末長スマ子	大七・九・二七	大九・九・一八	昭一九・三・六	昭一九・三・二八	昭一九・九・六	昭二〇・三・一六	昭二〇・三・二〇	昭二〇・四・一	昭二〇・六・二六	昭二〇・九・二	昭二〇・三・一〇	
益田 正春						ハバロスクにて戦病死	北方陸軍病院 戦病死	ビルマフーコン 戦死	福岡板付 鉄工所爆死	ビルマ雲南省にて戦死	ニューギニア方面戦死	ビルマ・ナンキョ戦死	比島ネグ島にて戦病死	沖繩伊江島にて 戦死	南支那海上方面 戦死	スマトラ方面にて戦死	硫黄島にて 戦死
						二八	二二	二七	二一	三三	二四	二四	二二	二五	三一	三七	三七
						上等兵	上等兵	上等兵	応徴士	上等兵	兵長	兵長	一等兵	軍曹	海一水兵	軍曹	(不明)
						田原 賢次	古川 美年	市丸シズエ	市丸 武司	奈良崎ハツヨ	古川 義昭	古川チカエ	古沢ウメノ	松尾 団	田中ミドリ	古川 初次	古川 斎

氏名	戦死年月日	場 所	年令	階級	遺族名
山口 武	昭一九・五・二五	ビルマ方面にて 戦死	二三	上等兵	山口 秀夫
高田 正雄	昭一九・六・九	ビルマ方面にて 戦死	二八	伍長	高田 シノ
古川 正男	昭一九・九・一四	ビルマ雲南省にて戦死	二九	軍曹	古川アサノ
古河 哲二	昭一九・一二・一三	ルソン島東南方面戦死	二四	陸大尉	古河 一也
高田 吉松	昭二〇・四・二四	フィリピン方面 戦死	三五	海少尉	高田 分吉
古河 肇	昭二〇・五・六	ルソン島方面にて戦死	二四	伍長	古河 イマ
高田 昂	昭二〇・六・七	フィリピン群島 戦死	二七	曹長	古河信左エ門
古川 健吾	昭二〇・六・一四	黄海方面輸送船 戦死	二三	海二兵曹	古川 久一
田 代					
古河 昇	昭一七・六・一四	久留米陸軍病院戦病死	三一	陸飛兵長	古河シズ子
渡辺 武明	昭一九・二・一九	ビスマーク群島 戦死	二七	海兵曹長	渡辺 源時
森 正光	昭一九・五・二九	サイパン島にて 戦死	二〇	軍属	森 武
谷崎 登	昭一九・七・六	ビルマ北部兵站病院	二二	伍長	谷崎 正美
古河 茂實	昭一九・八・一六	北支沿岸海上西方戦死	二四	海上兵曹	古河 幸男
松本 茂輔	昭一九・八・二五	ビルマ雲南省にて戦死	三七	伍長	松本 登
谷崎 次男	昭一九・九・一四	ビルマ・トウエツ戦死	二七	曹長	谷崎五太郎



氏名	戦死年月日	場所	年令	階級	遺族名
古河 重雄	昭二〇・六・一四	沖繩方面にて 戦死	三三	海中尉	古河 英典
谷崎 讓	昭二〇・八・一	ニューギニア島 戦死	二七	曹長	谷崎 清
古河 一郎					
板 木					
瀬戸喜久治	明三八・四・四	清国盛京省地付近戦死	三〇	上等兵	長 千都子
高森吉之助	昭一二・一一・一四	浙江省嘉善付近 戦死	三五	上等兵	瀬戸 昭夫
市丸菊之助	昭一三・一一・一	清国黄波野戦病院病死	三一	伍長	市丸 キミ
前田 勇	昭一六・九・二七	久留米陸軍病院戦病死	二六	兵長	前田シズエ
前田 順	昭一八・二・九	小倉陸軍病院 戦病死	二一	上等兵	前田房太郎
前田 数雄	昭一八・九・二六	ニューギニア方面戦死	二六	上等兵	前田シズエ
市丸 信義	昭一九・七・一五	ビルマミートキナ戦死	二三	兵長	市丸 芳子
瀬戸 厚	昭一九・九・二〇	南洋群島・船団 戦死	二九	海一機兵	瀬戸キクノ
古賀 義孝	昭一九・一二・二六	ビルマシャン州 戦死	二三	上等兵	古賀 義政
市丸 林造	昭二〇・一・一二	南洋群島駆逐艦 戦死	二五	海上兵曹	畑山 春江
市丸 政勝	昭二〇・一・二九	台湾海峡輸送船 戦死	二一	一等兵	市丸 スエ

氏名	戦死年月日	場所	年令	階級	遺族名
市丸 政雄	昭二〇・二・二八	仏印方面南西諸島戦死	三五	海上等兵	市丸 喜郎
古館 時男	昭二一・一二・一	南方第十陸軍病院病死	二八	伍長	古館 シマ
<b>津留・主屋</b>					
前田 甚左工門	明一〇・三・六	熊本・南西の役 戦死	二二	上等兵	前田 高信
市丸 武勇	昭一六・一二・二三	比島リンガエン 戦死	二一	海一水兵	市丸 康男
市丸 茂	昭一九・八・二二	ビルマミートキナ戦死	二六	伍長	市丸タカヨ
市丸 又平	昭一九・一〇・二	ビルママンダレー戦死	二九	伍長	市丸タカヨ
市丸 力	昭一九・一二・一一	ビルマカインテック戦死	二二	兵長	市丸 康男
市丸 一雄	昭一九・一二・三〇	フィリピン方面 戦死	二一	海上兵曹	市丸 繁登
市丸 幸雄	昭二〇・三・一	南西諸島方面 戦死	一九	海上水兵	市丸タカヨ
市丸 正樹	昭二〇・五・六	朝鮮・海上方面 戦死	一六	海軍属	市丸金次郎
栗原 定見	昭二〇・五・二三	大分県方面 戦死	四二	海軍属	栗原 千草
太田 幾馬	昭二〇・八・一五	満州国・村林 戦死	二三	兵長	太田 辰夫
太田 力	昭一五・二・二九	台湾方面にて 戦病死	二三	海二兵曹	市丸 貞
<b>中山</b>					
松尾 茂吉	明三七・七・一	清国奉天省崖家房戦死	二四	一等兵	松尾 千エ



		畑津			
氏名	戦死年月日	場所	年令	階級	遺族名
坂本好五郎	明三八・八・一	清国盛京省にて 戦死	二二	二等兵	坂本吉兵衛
大田初五郎	昭一八・五・三〇	中国江蘇省にて 戦死	三六	上等兵	大田 ミヨ
古賀 五郎	昭一九・五・二三	ビルマミートキーナ 戦病死	二二	伍長	古賀 薫
富永 豊	昭一九・七・一〇	満州牡丹江にて戦病死	二三	上等兵	富永 定美
田中 千光	昭一九・九・一四	雲南省勝越城にて戦死	二四	兵長	田中 光幸
古賀 庄助	昭二〇・七・六	フィリピンにて 戦死	三七	伍長	古賀マスヨ
田中 孝一	昭二〇・八・一四	中国江蘇省注清県戦死	三六	兵長	田中 キヨ
太田 春一					
田中 秀芳					
松本東治郎	昭一四・九・二	中国広東省縦化県戦死	二六	伍長	松本 政秀
金子 武	昭一九・七・九	サイパン島にて 戦死	三六	海軍属	金子 千カ
原田 進	昭一九・七・一七	ビルマミートキーナ戦死	三〇	伍長	原田 敏夫
田中 告男	昭一九・八・四	ビルマミートキーナ戦死	二八	兵長	田中 光男
武雄 正巳	昭一九・九・一三	南支那海方面にて戦死	不明	海上機兵	武雄 清
坂本 徳市	昭一九・九・一四	雲南省騰越城にて戦死	二八	伍長	坂本イツミ

氏名	戦死年月日	場所	年令	階級	遺族名
井手 秀男	昭二〇・四・五	ソロモン群島にて戦死	二八	曹長	井手 ワカ
田中 弘	昭二〇・五・二五	沖繩本島戦闘にて戦死	二五	軍曹	田中 光男
松本 春美	昭二〇・七・二二	自宅で 戦病死	二九	兵長	松本 勇一
野田 正治	昭一三・三・三一	台湾部隊 戦病死	二四	兵長	野田庄太郎
内 野					
井手重四郎	明二八・五・一三	小倉陸軍病院 戦病死	二八	一等兵	井手東太郎
金子 亘	昭一八・一〇・一八	ビスマーク諸島 戦死	二〇	海二兵曹	金子 春一
小杉 勘一	昭一八・一一・二三	パルマヘラドペロ戦死	一九	海軍属	小杉 キノ
金子 忠夫	昭一九・二・六	マーシャル方面 戦死	二九	海少尉	金子 茂
小杉 新平	昭一九・二・二三	本州南海上にて 戦死	三一	海軍属	小杉 洋子
小杉 年一	昭一九・五・二一	ニューギニア方面戦死	二二	伍長	小杉 繁夫
小杉 誠一	昭一九・七・二	サイパン近海 戦死	二五	海兵曹長	小杉 正
藤森 源三	昭一九・八・一	ビルマミートキナ戦死	三四	兵長	藤森 波男
藤森 猛	昭一九・九・二七	中国・広西省 戦死	三八	一等兵	藤森 寅義
金子 實	昭一九・一〇・一三	ブーゲンビル島 戦死	二三	曹長	金子 常作
井手 芳	昭一九・一〇・一八	比島マライ沖 戦死	二五	陸軍属	井手東太郎

煤屋		氏名	戦死年月日	場所	年令	階級	遺族名
金子芳衛	昭二一・九・二九 (不明)	金子芳衛	昭二一・九・二九 (不明)	朝鮮平城校外 病戦死	(不明)	海一曹	金子春一
脇山善三	昭二〇・八・二三	脇山善三	昭二〇・八・二三	満州東京城付近 戦死	二九	一等兵	原田定夫
原田勇	昭二〇・六・一四	原田勇	昭二〇・六・一四	沖繩本島にて 戦死	一八	海機兵長	金子茂
金子直	昭二〇・五・六	金子直	昭二〇・五・六	ルソン島バギユウ戦死	一九	陸飛兵長	丸田光也
丸田耕造	昭二〇・一・一二	丸田耕造	昭二〇・一・一二	仏印サイゴン上空戦死	二八	陸飛准尉	鶴田秀子
鶴田武實	昭一九・一二・一七	鶴田武實	昭一九・一二・一七	フィリピン輸送船戦死	一九	海軍属	金子常作
金子健吾	昭一九・一〇・二二	金子健吾	昭一九・一〇・二二	東支那海海上 戦死	一九	海軍属	小杉ハルエ
小杉孝一	昭一七・四・一七	小杉孝一	昭一七・四・一七	小倉陸軍病院 戦病死	二六	上等兵	小野又造
佐伯義光	昭一七・六・五	佐伯義光	昭一七・六・五	ミッドウエー海戦戦死	二〇	海二兵曹	佐伯光義
岸本光雄	昭一八・一二・二八	岸本光雄	昭一八・一二・二八	ニューギニア方面戦死	二二	伍長	岸本トメヨ
田中喜市	昭一九・六・四	田中喜市	昭一九・六・四	西ニューギニア 戦死	二五	兵長	田中勇
鶴田宏人	昭一九・九・一四	鶴田宏人	昭一九・九・一四	ビルマ膽越城 戦死	二三	伍長	鶴田達郎
田中磯雄	昭一九・九・一四	田中磯雄	昭一九・九・一四	ビルマ膽越城 戦死	二八	伍長	田中フサミ
田中虎雄	昭一九・一〇・二二	田中虎雄	昭一九・一〇・二二	南西諸島方面 戦死	二六	海一水兵	田中イツミ

		馬 蛤 潟				
井手 基	昭一八・一〇・四	ニューギニア島	戦死	二二	伍長	井手 正男
井手 茂	昭一八・一一・二三	ニューギニア島	戦死	二五	伍長	井手 忠代
渡辺 貢	昭一九・一・二	ボルネオ方面	戦死	四〇	陸軍属	渡辺 忠雄
兼武 清	昭一九・九・一四	ビルマ雲南省	戦死	三五	伍長	兼武 キミ
柴田 昇	昭一九・一〇・八	伊万里・前田病院	病死	二三	一等兵	柴田 勇
中島 弘	昭一九・一一・一	佐世保海軍病院	病死	二三	海軍属	中島 スエ
吉田 信一	昭一九・一一・五	フィリピン方面	戦死	二九	海兵曹長	吉田 八郎
渡辺 源悟	昭一九・一・二九	台湾海峡輸送船	戦死	二二	一等兵	渡辺 夕子
井手 勝	昭二〇・四・一二	ビルマヤメセン	戦死	二五	曹長	井手 新
柴田 勉	昭二〇・七・一	フィリピン方面	戦死	三六	伍長	柴田 シャツキ
田中 政俊	昭一九・一二・三〇	フィリピン方面	戦死	一七	海飛二曹	田中 武
田中善九郎	昭二〇・一・二	フィリピン方面	戦死	三九	海上水兵	田中 セキ
田中 兼吉	昭二〇・一・三一	ビルマナンバツカ	戦死	三二	伍長	田中 トク
田中 幾助	昭二〇・二・一五	比島・マニラ方面	戦死	三二	伍長	田中 建一
田中 琢也	昭二〇・三・一〇	北海道南方海上	戦死	一七	海軍属	田中 鉄三郎



氏名	戦死年月日	場所	年令	階級	遺族名
渡辺 逸三	昭二〇・七・二八	フィリピン方面 戦死	(不明)	陸軍属	(町外)
井手 圭一	昭二〇・五・二〇	比島・ルソン島 戦死	二五	伍長	井手 正男
辻					
小石原初太郎	明二八・二・一九	盛京省旅順口 戦病死	二一	二等兵	小石原徳男
高森 明	昭一五・一二・一五	鹿兒島西桜島袴腰戦死	一九	一空曹	高森 定雄
高森 豊助	昭一六・一二・五	東松浦郡有浦 戦病死	二六	上等兵	高森 智
波多 忠夫	昭一八・五・一二	ニューギニア島 戦死	三三	一等兵	波多 正樹
高森 優	昭一八・六・二一	東寧一陸軍病院戦病死	二一	上等兵	高森 辰也
高盛 明夫	昭一八・六・二五	フィリピン方面 戦死	二五	兵長	高盛 トセ
高森 虎夫	昭一八・一一・二五	南太平洋海上 戦死	二三	海兵曹長	高森 ナミ
高森久四郎	昭一九・一・二八	東寧一陸軍病院戦病死	三六	一等兵	高森アキノ
波多 清市	昭一九・三・二五	伊万里市今岳 戦病死	二六	一等兵	波多カメノ
高盛 春義	昭一九・四・一一	ビルマミートキナ戦死	二二	兵長	高盛 トセ
高森 清	昭一九・六・二五	ビルマ野戦病院戦病死	二一	兵長	高森 剛
栗原 久志	昭二〇・三・一七	硫黄島にて 戦死	二四	軍曹	栗原 敏春
池田常次郎	昭二〇・六・二三	沖縄本島にて 戦死	三八	伍長	池田忠兵衛

氏名	戦死年月日	場所	年令	階級	遺族名
横尾 徳次	昭二〇・七・七	黒母崎南方八海域戦死	三六	海少尉	横尾ハツヨ
高森 正実	昭二〇・八・九	チチハル三〇陣地戦死	二〇	上等兵	高森 剛
高森 弘	昭二〇・一一・一三	中国広東省にて戦病死	二一	上等兵	高森佐平次
内田 武美	昭二〇・七・一	広島県国立病院戦病死	二五	上等兵	内田シカヨ
川添 喜一	昭二三・一・二五	ソ連アムル収容所戦死	二七	伍長	川添 常男
中山新一郎	昭二〇・六・二五	シンガポール 戦死	三〇	伍長	山口 常男
高森 三男	(不明)	帰還後・病死	(不明)	一等兵	高森 雪代
郷ノ浦					
小杉文左エ門	昭一一・九・一九	広島衛戎病院 戦病死	二四	伍長	小杉 フイ
杉本 均	昭一三・四・一三	揚子江上流軍艦 戦死	二一	海一水兵	杉本 武
田中 敬市	昭一七・五・二五	南洋群島にて 戦死	二四	海二兵曹	田中ハル子
田中 俊男	昭一八・二・七	久留米陸軍病院戦病死	二〇	上等兵	田中ハル子
杉本 寅三	昭一八・一二・二一	琉球列島方面 戦死	二七	海上曹	杉本 茂助
平松 茂	昭一九・一・二六	台湾沖南支那海 戦死	二六	海一曹	平松 善助
竹田 丸治	昭一九・二・六	南洋群島にて 戦死	三四	海上曹	竹田マサヨ
吉田久太郎	昭一九・四・一	南洋ビスマロク 戦死	二九	兵長	吉田 光男



中組		氏名	戦死年月日	場所	年令	階級	遺族名
青木 佐重	篠崎善太郎	田中 東弥	昭一九・四・二八	ビルマミートキナ戦死	二三	軍曹	田中敬太郎
		野口竹次郎	昭一九・七・一八	マリヤナ諸島 戦死	二九	伍長	野口タズエ
		小杉源治郎	昭一九・九・五	南洋群島にて 戦死	二四	海二曹	小杉 フイ
		川添 道雄	昭一九・一〇・一九	久留米陸軍病院戦病死	二四	一等兵	川添 正人
		田中 強	昭一九・一二・一九	台湾沖輸送船 戦死	二四	上等兵	田中 一夫
		松本 常平	昭二〇・一・八	台湾近海掃海艇 戦死	三九	海一水兵	松本 岩男
		平松 讓	昭二〇・一・二九	台湾海峡輸送船 戦死	二三	一等兵	平松 善助
		田中 学	昭二〇・五・一	東支那海上空 戦死	一七	海軍属	田中 文夫
		高木 宇一	昭二〇・五・二六	フィリピン方面 戦死	二二	軍曹	高木 東一
		川本 清	昭二〇・六・八	スマトラチャバ海戦死	二三	海二兵曹	川本 茂助
		山口 茂	昭二〇・七・二〇	比島ルソン島 戦死	二九	伍長	山口 トク
		松本 猪平	昭二〇・八・一九	タイ平站病院 戦病死	二九	兵長	松本 慶明
		田中 定巳	昭二〇・一〇・一二	ルソン野戦病院戦病死	三八	伍長	田中 春子
日清戦争	日独戦争	戦病死	戦病死	戦病死	二七	一等兵	篠崎 正金
二八	二七	二八	二七	二八	二七	一等兵	青木 幹男

氏名	戦死年月日	場所	年令	階級	遺族名
正野 正孝	昭一六・五・一三	広東省恵陽県 戦死	二三	上等兵	正野 重信
金子 政満	昭一九・九・二四	湖北省陸軍病院戦病死	二二	陸軍属	金子 シマ
大塚庄次郎	昭一八・二・六	シヨウトランド戦病死	三二	伍長	大塚 利一
塚部 光男	昭一八・五・五	南太平洋にて 戦死	二八	海一曹	塚部 ソヨ
正野 三郎	昭一九・三・二七	ニューギニア方面戦死	二三	伍長	正野 重信
筒井 信雄	昭一九・七・八	南洋群島方面 戦死	三二	海上兵曹	筒井志津子
大塚 義雄	昭一九・七・一四	ニューギニア方面戦死	二六	伍長	大塚 トメ
塚部 義巳	昭一九・九・一二	リングアエン湾上空戦死	二二	海飛二曹	塚部 剛
大石 甫	昭一九・九・一四	雲南省騰越地区 戦死	二六	曹長	大石ハツノ
田中 一夫	昭一九・一一・二一	台湾沖戦艦金剛 戦死	二七	海一曹	田中 秀夫
栗原 一義	昭一九・一一・二四	比島マスパテ湾 戦死	一九	海上水兵	栗原 卯吉
大塚秀太郎	昭一九・一二・二〇	比島セブ島にて 戦死	三一	兵長	大塚 トメ
吉田 定義	昭二〇・一・一二	ビルマモロ高地 戦死	二四	伍長	吉田 陸和
田中儀太郎	昭一九・一・一九	ビルマ北シャン州戦死	二五	伍長	田中金兵衛
田村 祥	昭二〇・三・一七	硫黄島にて 戦死	三七	上等兵	田村シズ子
吉田 和助	昭二〇・三・三一	比島ルソン島 戦死	三五	准尉	吉田イツ子

氏名	戦死年月日	場所	年令	階級	遺族名
古館 春助	昭二〇・四・七	ニューギニア方面戦死	三九	海上曹	古館ミサオ
大塚 久吉	昭二〇・五・二〇	比島ルソン島 戦死	三八	兵長	大塚カメノ
池田 晋	昭二一・七・二四	福岡九大病院 戦病死	三六	兵長	池田 正俊
大石熊太郎	昭二〇・一二・二	河北省武昌病院戦病死	二五	上等兵	大石 庄六
塚部 常雄	昭二四・一〇・五	ソ連イズベスト戦病死	三五	伍長	塚部キヨミ
<b>野 林</b>					
水尾 仁造	明二八・三・三〇	馬公城陸軍病院戦病死	三三	一等兵	水尾 政利
酒谷 留蔵	昭四・六・二一	佐世保海軍病院戦病死	二二	海上水兵	酒谷 新
塚部 常造	昭四・九・五	東京海軍病院 戦病死	(不明)	海兵曹長	塚部 常義
酒谷 忠一	昭一七・八・七	ガダルカナル 戦死	三〇	海二曹	酒谷 勢一
青木 庄助	昭一七・一二・二二	横須賀海軍病院戦病死	二二	海二曹	青木金次郎
塚本 久義	昭一八・三・一三	久留米陸軍病院戦病死	二五	上等兵	塚本 久雄
青木安次郎	昭一八・九・六	ニューギニア方面戦死	二八	上等兵	青木金次郎
古川 常平	昭一八・九・一五	ニューギニア方面戦死	三四	海二曹	古川トシ子
松本 万吉	昭一八・一二・一	ニューギニア方面戦死	二四	伍長	松本 均
塚本 勝久	昭一九・一・二〇	玄海町吉岡病院公病死	二七	上等兵	塚本 久雄

氏名	戦死年月日	場所	年令	階級	遺族名
田中 義春	昭一九・二・八	大隈諸島黒島沖 戦死	二二	一等兵	田中 辰熊
久保 博之	昭一九・五・一	ラバウル南崎 戦死	二四	兵長	久保 清人
山田 小一	昭一九・五・一八	ビルマ・モロコン 戦死	(不明)	兵長	山田アサノ
篠崎 廣海	昭一九・七・一六	マリヤナ諸島方面 戦死	二六	海軍属	篠崎 イト
水尾 晴之	昭一九・七・一八	マリヤナ諸島方面 戦死	二九	上等兵	水尾ミチエ
久保 倉吉	昭一九・八・三	ビルマミートキナ 戦死	二六	伍長	久保 福一
古川 俊治	昭一九・一〇・四	東部ニューギニア 戦死	三九	上等兵	古川ヨシノ
津田 静男	昭一九・一〇・一三	台湾東方海面 戦死	一八	海飛二曹	津田 幸夫
塚本 一徳	昭二〇・一・八	東支那海龍洋丸 戦死	三四	海上水兵	塚本ヒサ子
津田 久一	昭二〇・一・二三	台湾沖舟山列島 戦死	二四	兵長	津田 幸夫
岩本 厚	昭二〇・一・二八	黄海方面にて 戦死	二五	海二曹	岩本シズエ
川崎 義夫	昭二〇・二・一二	ビルマ野戦病院 戦病死	二四	伍長	川崎ユキ子
香嶋 茂	昭二〇・二・二三	比島マニラ方面 戦死	二七	海一曹	香嶋エイ子
久保傳左エ門	昭二〇・二・二六	フィリピン方面 戦死	三三	海上水兵	久保 清人
青木 庄蔵	昭二〇・三・一五	比島ルソン島 戦死	一九	陸軍属	青木金次郎
津田 功	昭二〇・四・一四	北海道東方海上 戦死	二五	海二曹	津田 ナツ



氏名	戦死年月日	場所	年令	階級	遺族名
塚本重太郎	昭二〇・四・二〇	出水航分遺遂 戦傷死	二二	海上整兵	塚本与次郎
塚部 伴三	昭二〇・五・五	沖繩戦(戦車隊) 戦死	二七	准尉	塚本 茂吉
酒谷 務	昭二〇・六・五	山代町川南造船公病死	二〇	応徴士	酒谷 勝
塚部 敬治	昭二〇・六・一四	沖繩方面にて 戦死	二六	海上曹	塚部ヨシノ
栗原熊次郎	昭二〇・六・二〇	北ボルネオセガマ戦死	三八	伍長	栗原八重子
井手口寅男	昭二〇・八・一	ビルマ方面にて 戦死	二六	海上曹	井手口弥左エ門
塚部常四郎	昭二二・一二・二一	長崎兵機廠病院戦病死	二二	陸軍属	塚部 常義

## 第八章 産 業

### 第一節 農業

#### 一、農具と農法

明治、大正時代の農耕は、水稻作は牛馬に犁を引かせて耕やし唐鋤等で碎土し、これを数回繰返してから水を入れ、馬鋤でかきまぜ整地して田植えをしました。畑作は犁で耕し、鋤で整地をして種蒔きをしました。

昭和時代になって、犁は底にすらしの付いた深淺自在で安定した犁（山崎式、瀬戸式等）が発明され、更に水田裏作には畦立てに便利な片揚げ用の犁が流行し、裏作の為に便利になり溝揚げ犁の併用で能率が向上しました。更に二段耕犁の登場により土塊は小さくなり飛行機羽根のような碎土機の開発によって碎土が簡単になり、裏作の能率は格段向上をしました。

昭和三十年代になると、耕転機が開発され、農作業に一大革命をもたらしました。しかし、高価の為当時零細農家は安易に入手することはできませんでした。昭和三十五年池田内閣の所得倍増計画により、農村も兼業収入等により農家経済も幾分向上し、又、農業近代化資金の導入と相俟って耕転機は急速に普及しました。更に昭和五十年代に入り、国、県の助成により圃場整備が行われ耕地は区画整備されて、トラクター等の大型農機具が導入されるようになりました。

#### 二、農作物の耕種

##### ○米作

往時の米作は、八十八夜頃種籾を浸種し、五月十日頃籾蒔きをして四十日乃至四十五日の苗を本田に田植えをしました。本田は田植前に代あけをし、肥料として山野より草を刈取ってきて、すき込みすき戻しをして植代かきで田面をならして田植えをしました。

除草作業は、第一回目は雁爪打ちをしました。（手打雁爪で田面を打返す）第二回目は雁爪ならし（手で田面をかきならす。草も取る）第三回目（三番草という。手で田面の草を取る）第四回目は前回と同じ作業でした。昭和の初期頃から能率のよい手押雁爪が流行し、以後は手打雁爪を使用する人はなくなりました。

早生稲は十月より稲刈をしました。普通は十一月より稲刈をする人が大部分でした。

脱穀は千歯で脱穀し、トミーで風撰をして塵芥を除き、ネフキという筥に干して乾燥したらトースで籾摺りをして、万石という米撰機で撰別して俵に入れたものです。

現在はコンバイン（稲刈と脱穀が同時にできるもの）が登場し、ライスセンターで共同乾燥並に調整ができるようになり米の品質検査を済ませ共同販売入庫までできるようになりました。

米の販売は、昔は個人販売でしたが産業組合（現在の農協の前身）が発足してから共同販売となり、戦時中より食糧管理制度によって食糧は国の掌握するところとなり現在農協が集荷販売をするようになりました。

##### ○麦作

稲の収穫が終わって芋掘り等片付いてから、水稻あと地に麦田揚げをして麦の蒔付けが行われました。冬の間の中耕、除草、施肥、土入等を行い春の彼岸頃までにサコ揚げをしました。この作業は麦田渾と溝を雑草共にけずり取り畦の上に上げます。これは除草と乾燥を図るものです。五月下旬頃色づき成熟してから刈取り、手こぎ千歯で麦穂をこき落とし天日に干して鬼歯で叩きトミーで風撰し更に天日に干して俵に入れました。後に動力による麦摺機が登場して殆ど業者が脱穀するようになりました。現在では米と同じくライスセンターで共同乾燥調整するようになりました。

##### ○その他の雑穀

その他の雑穀として大豆、小豆、粟、そば等が自家用程度に栽培され、収穫もそれぞれ手作業で行われていましたが戦後の食糧事情の好転により雑穀栽培の農家は激減しました。しかし、最近政府の奨励もあり水稻の減反田利用によって、大豆等を栽培する農家がありますが、その数は少なくなりました。



## ○ハウス栽培

水稲の減反政策によりハウス栽培農家が漸次増加しつつあります。その作目は大体イチゴ、胡瓜等です。ハウス栽培の他に最近玉葱が栽培されるようになりました。

戦後普及された、たばこ、養蚕、お茶等は専ら上場の開拓、木場にて少人数大面積の経営となり下場では、イチゴ、胡瓜、玉葱等が増産されつつあります。みかん栽培の他に、一部で梨、桃等の栽培も行われています。

胡瓜は、畑河内選果場より大型トラック輸送で大阪市場に出荷されるようになりました。

## ○防除作業

水稲の病害虫で主なものは、害虫では、めい虫及びうんか、病害では稲熱病があります。

### ●めい虫の駆除

明治、大正時代は、苗代でめい虫卵を採取しました。この作業は小学生が適任でした。採取数量によって、区長が若干の報酬を支払ったりしました。本田での駆除は期日を決めて一斉に被害茎の抜取りをしました。

### ●うんかの駆除

うんかの発生を見たら、除虫油（石油に除虫菊を溶かした油）を水面に流し、その油を水と共に稲の茎に洗いかけ、うんかを洗い落とし、うんかを死滅させるという方法でした。

### ●ホリドール剤の登場

昭和三十年代になって、害虫駆除用としてホリドールという有機燐製剤が発見され害虫駆除に威力を発揮しましたが、これは人命を損傷する危険が多かったため使用禁止となりました。他に粉剤としてBHC、DDT、等使用されていましたがこれも後に使用禁止となりました。

### ●稲熱病の防除

稲の病害で最も被害の大きいのが稲熱病です。往時は一度この病気が発生すれば、ボルドー液等を作り手押噴霧機（所有者だけ、所有者は極く少なかった）等で撒布しましたが、水田撒布は容易ではなく、防除器具のない被害農家は傍観するよりほかなかったのです。

現在は、農機具の機械化も進み農薬も優秀なのが揃っていますので、防除作業は徹底的に行われるようになりました。

## 三、農作物の移り変わり

当地方においての農作物は、米、麦が主体でしたが、戦時中食糧の不足により主食の米麦に加え甘藷も主食として増産が叫ばれました。戦後たばこの栽培が導入され、その後更にみかんが爆発的に増殖されましたが、食糧事情の好転に伴い甘藷の作付けは漸次減少し、みかんもグレープフルーツ他の輸入農作物の自由化に伴い価格が低迷し、減産の已むなきに至りました。

一方、米は品種の改良、技術の進歩によって反当収量は大いに向上し増産されましたが、輸入農産物の自由化と食生活の変遷により消費が減少してきたので減反（作付面積を減らすこと）の已むなきに至り、農家の農業収入も漸減してきました。そこで、土木、建設等の農外作業に従事する者が多くなり、その収入を以って生活費に充てる農家が増加してきました。（専業農家から兼業農家へ移行し専業農家は激減している）

## 四、農家のくらし

昔の農家は質素を旨とした生活でした。

衣服は、盛装では羽織、袴がありましたが、普だん着は和服で、作業衣は上衣と脚には股引をはき、女性は上衣と腰巻、脚には脚絆をしていました。

食物は、普通は麦飯で白飯（米だけの飯）はめったに食べることがなく、副食は主に菜食でした。住居は母屋と小屋があり、母屋は住宅で小屋は収納舎と畜舎になっていました。屋根は殆んど茅葺で瓦葺の家はめったにありませんでした。

昔、大きな農家では農作業員として「ばば」及び「あんね」を雇っていました。

「ばば」や「あんね」は主に農家の骨折る仕事をさせられました。「ばば」は、秋の八朔の節句から翌年の春の三月の節句の間（何れも旧暦）昼間の仕事が終わってから、毎晩、藁ひとて一手（一手は両手で握る程度）宛、縄ないをしなければ寝ることができませんでした。

夏の田の草取りなどは、重労働でした。夏日のかんかん照りつける中、水温の沸き返る水田に入っている作業は、腰は痛いし日は長いし、誠に重労働でした。

しかし、おもしろいこともありました。田植前には農家は必ず浜崎のお諏訪様参りがありました。

（諏訪神社にはまむし蝮よけの御砂がお供えしてあり、これをいただいて帰り、蝮の出そうな所に御砂を撒くのです。）集落の青年男女も相集い参詣し、楽しい年中行事の一つでした。

田植が終わったら、さなぼりなまぼりがありました。これは農繁期が終わった後の慰労会で、田植に加勢に来た人も招待してもてなしました。

盆には、先祖の供養と盆踊りがありました。この時は、奉公人達も帰省して郷土の祭りに参加し、楽しいひと時を過ごしました。

供日は、秋の収穫が終わった頃集落の氏神様祭りをいひ五穀豊穡の感謝をする日です。この日は親類、知人を呼んで、常日頃お世話になることへの感謝の念を込めて精いっぱいもてなすのです。

昔は旅役者がいてこの一座を集落で招き、露天に舞台を作り芝居興行をしました。この芝居のある集落の近くの親類、縁者等は「花」を打たねばならない（寄付をすること）ので大変でした。附近の青年男女も殆ど見物に出かけましたので恋の芽生えるよい機会ともなったのです。

## 五、畜産

昔から農家は牛又は馬を一頭宛（大きな農家では二、三頭の家もあった）飼育していました。これを農耕用に使用し、敷料は堆肥として肥料にしました。

戦後耕転機、トラクター等の導入により家畜の飼育者は次第に減少し、現在は農耕用としての飼育者はなくなりました。そして、畜産は肉牛、肉豚、ブロイラー等の多頭飼育となり、その戸数は極端に少なくなりました。

## 六、製紙業（紙すき）

江戸時代・唐津藩主・土井周防守源利益公の時代に、波多津東部地区（井野尾・田代・板木・津留・主屋）と、南波多・黒川の一部＝当地方の農家は、農地も少なく、特産物もないことから、副業として、手漉和紙を奨励されたと聞かされていました。

紙の原料となる楮（カゴ）は、其の当時、藩の財源として重要視されていて、楮は紙木とし、茶桑と同様に年貢の対象とされ、楮の石盛りは高く、上紙木で歩当たり一升八合又は二升で、反当りに直せば五石四斗ないし六石といった石盛りでした。しかも、原料の楮は、はじめは自由販売でしたが、水野忠任公の入部と共に専売品となり、時の相場よりずっと安い値段で、強制的に買い上げられていたそうです。尚、楮の生産は米で年貢を納められていたそうです。

昭和八年（一九三三）現在の浜玉町内又は、虹の松原一揆に楮三万本の強制植付があったそうです。浜玉町は、波多津より早くから製紙農家があったと聞いていました。

紙の原料となる楮は、自家生産と各農家で育成されたものにより生産されていました。

いつの時代か専売制も解消して、自由に原料も購入ができるようになったそうです。楮の木を切り揃え、たばねたものを大釜の中に入れ、水を入れて大きな桶をかぶせて蒸し楮の皮を取る作業を「カゴモン」と言います。

楮の皮を川に浸して柔らかにし包丁で黒い皮を取り除く作業を「カワトリ」と言い昭和十年頃は紙すき農家は家廻りで共同作業が続けられました。夕食後夜十二時まで皮取り作業があっていましたが、これは冬の寒い時期だけの作業なのです。この楮の皮で製造したものが波多津特有の唐津半紙と名前が付いた有名品でした。

### ○紙すきについて

乾燥した楮皮を川の中に浸してから消石灰とよく混ぜ合わせ、大きな釜に入れて一日中火を焚き楮の皮を取り除く作業をする。次に水でよく洗い水田に水を入れて晒します。天気の良い時は二、三日で漂白されます。それを「カミタタキ」と言う粉碎作業を通して細かな繊維にするのです。主に夜の仕事で

したが、後に機械に依り粉碎するようになり、たいへん楽になりました。粉碎したものを紙船に入れ「オーレン」と混ぜ合わせて<sup>すげな</sup>簀笥ですく。主として主婦の人が紙すき作業でした。

### ○紙の乾燥について

昔は天日乾燥で、天気の良い日を選んで大きな板に張り付けて乾燥していましたが、大正の初期頃より鉄板による火力乾燥となり、水を入れ火を焚き熱湯と蒸気により乾燥する冬の紙製造の最盛期は、午前二時頃から早起きをして、家族全員で「紙ホシ」作業が行われました。紙乾燥は家廻しの五、六日ぐらいで、夜十二時頃まで作業しました。

### ○紙の種類と販売について

大正五年頃までは、小桁で大福帳・障子紙の製造であったらしいですが、障子紙製造は南波多方面に移り波多津は塵紙専用で製造されていて、紙にも製造方法により種々あります。薬品をいれ純白にした<sup>ちりがみ</sup>京花紙。前記、包丁で皮を取ったものは唐津半紙。楮の二級品で製造した<sup>しろほ</sup>白保。楮の三級品は、くず紙で最下位となっています。

京花紙と唐津半紙は、当時の花柳界と上流家庭に使用され、白保は一般家庭に使用されていました。販売方法は、仲買人が買い、紙問屋又は北九州地区・大阪・東京方面にも送られていたそうです。紙の規格は一ペ二千枚単位で束にしたもの、長さ約二十六・七cmで巾は二十cm位となっています。当時一ペ当たり二円五十銭程度と思いますが、昭和十年頃・戦後は五円位と記憶しています。

原料を全部購入の場合は、販売高の半分が利益となり、昔は「すきわけ」と言っていました。

紙すきは、家族全員で仕事ができ、家内工業としては最高でした。当時は紙製造農家は多忙でしたが、暮らしは豊かでした。時代の進歩に伴い機械紙が出回るようになり手漉和紙も対抗できなくなり、又、一方では原料の楮も農用地開発で掘り取られ、原料もなくなり、何百年と続いた製紙業は昭和の中期頃で終止符を打ち、自然消滅となりました。

(参考)

昭和十年頃の紙の価格と人夫賃

○紙一ペ 二円五十銭

○男＝一日日当 五十銭

○女＝一日日当 三十五銭

## 七、波多津における農民の協同組織の歴史

(1) 明治四十三年二月 無限責任 馬蛤瀉信用組合設立

大正四年 三月 解散

明治四十三年三月 無限責任 板木信用組合設立

組合長 加川公夫 解散不詳

(2) 大正十四年九月 有限責任

波多津村信用販売購買利用組合設立 (産業組合)

出資金 三千二百十六円(一口 金十円)

組合員 四百四十七名

初代組合長 稲葉義勇 (村長兼務)

二代組合長 加川公夫 (村長兼務)

イ、当初、事務所は役場二階、小会議室

ロ、昭和五年十二月 組合事務所新築落成

ハ、昭和八年四月 従前の有限責任を保証責任に変更

(3) 昭和十九年三月 波多津村農業会設立 (波多津村産業組合は解散)

出資金・会員数は不詳 (出資一口金二十円)

初代会長 田中英治 (村長兼務)

二代会長 井手文吉

三代会長 高田金治郎

戦局困難な昭和十八年「農業団体法」が制定され国策協力団体として、農会・養蚕組合を合併して設立されました。

(4) 昭和二十三年八月 波多津村農業協同組合設立（農業会は解散）

出資金 十九万八千円

組合員 五百九十二名

初代組合長 高田金治郎

二代組合長 田中正爾

第二次世界大戦の集結で、占領軍司令部による「農地改革に関する覚書」により農民の経済的、社会的地位の向上を目的として設立されました。

イ、昭和二十七年二月 農協事務所及び購買店舗全焼

ロ、昭和二十七年七月 上、新築

ハ、昭和二十九年四月 第二事務所及び店舗改築（井野尾）

ニ、昭和二十九年四月 波多津農業組合と改称（町村合併による）

(5) 昭和四十年十月一日 伊万里市農業協同組合設立（合併により）

出資金 六千四百七十八万円

正組合員 五千四百八十三名

准組合員 一千百六十五名

計 六千六百四十八名

初代組合長 松園春美（黒川町）

二代組合長 田中正爾（波多津町）

三代組合長 吉田紀夫（黒川町）

当面の諸問題を解決するには、大同合併により規模拡大を図り、健全で強固な組織づくりが大切であり、又それが合併の目的とされ、市内の大川、南波多を除く、十農協が合併し、各農協はそれぞれ支所となるように考えられました。

イ、昭和五十七年 波多津支所改築

ロ、昭和六十一年 井野尾出張所改築

## 八、農業の現状と今後の課題

### ①農業基盤整備への取り組み

昭和三十六年に制定された農業基本法は、農業に専念し、都市の勤労者に匹敵する所得を確保できる農民を作り出すことを政策目標に掲げ、そのプログラムとして、需要の増加の見込める作目（畜産・果樹・野菜）の生産を重点的に伸ばす選択的拡大を目標に据えていました。

このような農政の流れを受け、波多津町でも国の補助事業の導入による生産基盤の整備が積極的に実施されてきました。昭和四十年には筒井地区で農業構造改善事業によるみかん園の造成、昭和四十七年には木場地区で養蚕団地造成のための農地開発事業の着工、昭和五十年代に入ってからも辻地区の茶園造成、田代・中山地区の梨園造成事業と次から次へと山林の開墾による優良農地の造成確保が実現してきました。

一方、既存水田の区画整理も五十年代には同時に進められ、東部地区では県営圃場整備事業、西部地区では農村基盤総合整備事業を導入して今日の水田の整備が完了しました。また、伊万里市最後の大形プロジェクト事業として推進されてきた国営総合農地開発事業は、波多津町内では当初井野尾、中山、辻の三地区が候補地としてあげられていましたが、最終的には平成三年に中山地区の農地開発のみが実施されるに留まりました。

### ②農業生産の動向

農業基本法制定後の農業生産の動向は、昭和四十年までは米、みかん、畜産の三つが大きな柱であり、農畜産物販売高は二～三億円台で推移していましたが、農業基盤整備の進行と相俟って十億円の大台突破と飛躍的な伸びを示してきました。

これは、昭和五十六年、五十七年にかけて導入された新農業構造改善事業の効果による畜産販売高（肥育牛、ブロイラー）の増加によるものであります。とりわけ肥育牛の生産は堆肥センターが設置されたことにより一戸当たりの飼育頭数が増加して規模拡大が進み、平成二年には農産物販売高二十億円

達成に大きく貢献することとなりました。これらの功績が全国的にも認められ、平成四年に東部地区が全国の農業構造改善実施地区のなかから優良地区として晴れの農林水産大臣賞を受賞しました。

また、昭和五十八年の筒井地区を皮切りに施設胡瓜団地の建設ラッシュが始まり、昭和六十年には田代・津主地区、昭和六十一年には井野尾・内野地区でハウス胡瓜の栽培に取り組みられました。その後、筒井、井野尾地区で一部規模拡大が進み今日にいたっています。昭和五十七年ごろから始まった露地胡瓜の生産も水田転作の主要作物として定着しており年々拡大化傾向にあります。

一方、昭和四十年代に登場した養蚕とイ草栽培は、価格低迷により平成六年にイ草、平成七年に養蚕がそれぞれ波多津町の農作物から姿を消していきました。

### ③農業の将来展望と課題

日本の高度経済成長期という時代の流れのなかで、基本法農政が目ざした農民への都市勤労者並みの所得確保という政策目標は所得格差是正も達成できないまま、農業労働力の他産業への流出、農家戸数の減少と農業・農村の衰退という道をたどってきました。農業就業者の高齢化と後継者不足は、日本農業の抱える問題であるとともに、即波多津町農業の克服すべき課題であります。近年、他産業へ流出していた労働力の農業への環流が一部見受けられるようになったことは、農業にとって少しばかりではありますが明るい兆候であります。

現在、農業基本法の後継としての『食料農業農村基本法』の国会審議がされています。国民食料は国内農業生産を基本とすべきかどうか、食料自給率目標をいかにすべきか、中山間地域の振興をいかにすべきか等、農業・農村が持つ多面的な役割について論議されているところです。

高度経済成長期はモノ、カネを追求する時代でしたが、日本経済も成熟化し高齢化社会を迎えた今日では、健康、命を大切にす時代へと大きく変わろうとしています。波多津の農業が町民の命を守る産業として、さらに高齢者の生き甲斐を提供する産業としてさらに飛躍することを期待します。

## 農畜産販売高の年次別推移

(単位：千円、戸)

年度	販売高	正組合員	1戸当り 販売高	おもな出来事
昭和36年	59,701千			農業基本法、公布
37	67,439			
38	74,835			
39	98,999			
40	119,839	567	211	農協合併JA伊万里誕生
41	169,180	556	304	
42	157,196	495	318	
43	190,022	501	379	
44	240,110	502	478	
45	206,277	484	426	米、初めての減反政策
46	224,370	486	462	
47	220,646	486	454	木場農地開発着工(養蚕・たばこ)
48	340,083	459	741	
49	423,401	458	924	
50	677,276	459	1,476	
51				圃場整備事業着工
52	784,010	421	1,862	
53		426		
54		407		西部ライスセンター完成 辻農地開発着工
55	915,770	414	2,212	東部ライスセンター完成開拓農地開発着工
56	1,034,170	410	2,252	東部新農構事業着工(田代・中山)
57		406		西部新農構事業着工
58	1,173,040	431	2,722	筒井ハウス胡瓜団地造成
59	1,449,090	400	3,623	
60	1,457,260	395	3,689	新農構竣工 田代・津主胡瓜団地
61	1,675,450	396	4,231	内野・井野尾胡瓜団地
62	1,467,110	396	3,705	米価引下(31年ぶり)圃場整備竣工
63	1,727,920	394	4,386	みかん園再編対策実施
平成元年	1,812,600	394	4,601	
2	2,012,410	385	5,227	筒井・井野尾ス胡瓜団地
3	2,030,370	383	5,301	台風災害 中山国営農地開発着工
4	2,157,870	382	5,649	東部新農構農林大臣賞受賞
5	2,125,270	381	5,578	米大凶作、部分輸入化容認 梅植栽
6	2,017,716	380	5,310	
7	1,960,000	380	5,158	新食糧法施行
8	1,792,000	377	4,753	
9	1,836,000	377	4,870	自主米価格大幅下落



## 平成9年度品目別販売高実績

(単位：人,千円,%)

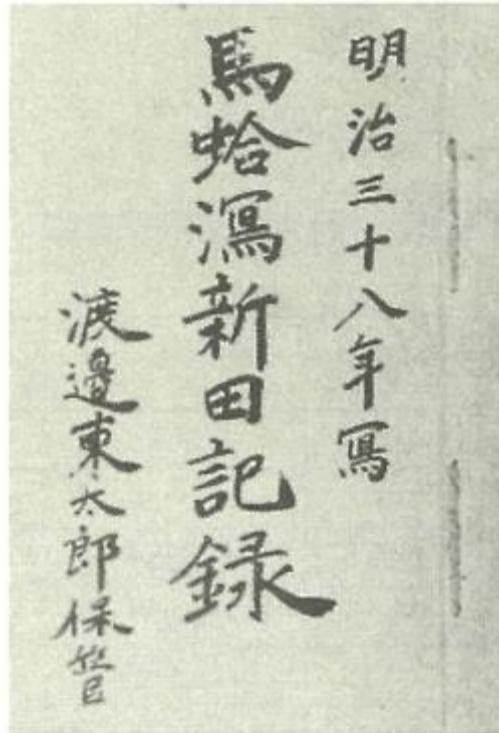
品目名	生産者数	販売高	1人当り販売高	販売高構成比	
穀類	米	273	95,830	351	5.2
	麦	2	34	17	0.0
	小計	275	95,864		5.2
施設野菜	苺	5	26,884	5,377	1.5
	胡瓜	19	172,089	9,057	9.4
	アスパラ	4	11,244	2,811	0.6
	小計	28	210,217		11.5
露地野菜	タマネギ	24	13,849	577	0.8
	夏秋胡瓜	17	44,534	2,620	2.4
	キノサヤ	22	5,485	249	0.3
	その他	12	1,743	145	0.1
	小計	75	65,611		3.6
果樹	ミカン	39	78,055	2,001	4.2
	ナシ	19	102,336	5,386	5.6
	梅	6	120	20	0.0
	小計	64	180,511		9.8
特産	茶	16	61,626	3,852	3.3
	椎茸	12	3,091	258	0.2
	花木	2	16,668	8,334	0.9
	小計	30	81,385	12,444	4.4
畜産	肉牛	13	642,625	49,433	34.9
	子牛	5	10,281	2,056	0.6
	肉豚	4	76,617	19,154	4.2
	子豚	2	33,153	16,577	1.8
	ブロイラー	7	444,028	63,433	24.1
	小計	31	1,206,704		65.6
合計	503	1,840,292	3,659		

## 九、馬蛤潟新田と力武新田沿革

## ○海を干拓して造成された馬蛤潟新田

元禄の終わり頃（一七〇〇）までは、煤屋も馬蛤潟もまだ海で、煤屋は大阪溜の下あたりまで、馬蛤潟は飯盛下から松の本まで、どちらも奥深く入り込んだ遠浅の入江でした。唐津藩は、代々開田奨励策

をとっておりますから、煤屋、馬蛤潟を見逃すはずありません。いよいよ時機到来、馬蛤潟の干拓工事が始まりました。



渡辺家保存記録

(以下は馬蛤潟区渡辺雅家保有資料による)

(1) 時一土井周防頭様御代 (既述唐津藩歴代領主参照)

イ、藩の相当役人

御仕置御家老 井上新左衛門様

郡御奉行 秋田孫左衛門様

御代官所 丹羽次郎左衛門様

水御奉行 小林長太夫殿 同断中森佐治平殿

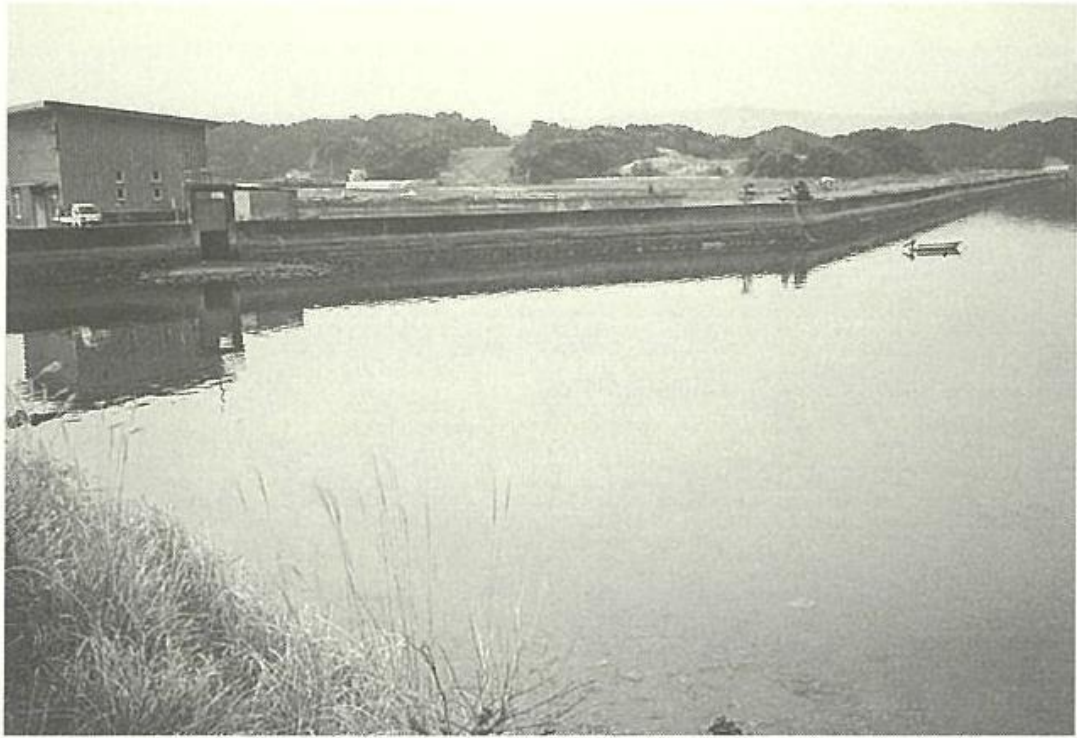
ロ、工事開始—宝永三丙戌(一七〇六)十一月十一日。御城下より役人便乗石船五艘廻り、

・・・・・・船水主は領内の浦々から五十人づつを集めて、深浦に小屋掛けで泊まりこませ、十二日から方々の浦々から石を漕ぎ寄せ、大堤防予定地の今の竜神社下から、南の方今の消防小屋の所まで投げ入れさせた。一方藩の山係役人が木樵十人をつれて辻の中藪山に泊まりこみで、石工道具の柄など千丁分も作らせ、次の仕事の準備を整えた上で、師走の二十五日までにはそれぞれに帰宅された。

ハ、宝永四丁亥正月十一日。藩役人お越しになり、方々の村より大工を十人集め、二間に入間の小屋を五棟建てさせ部屋割りまで二十五日に終わり、次に始まる堤防工事の準備をされました。

万全の準備で始められた大堤防工事は二月から開始されましたが、工事現場の責任は庄屋さんたち、総責任は畑河内組大庄屋兼武弥七郎、直属辻村庄屋川上与一郎、隣村畑津村庄屋青木左治右衛門、同内野村庄屋堀田弥一郎この四人は夜昼となく、事務所に詰めて人数の手配、工事の進捗差配、材料、道具、食事その他一切の抜かりのない計画、手配、それに隣接の黒川組、板木組、井手野組、切木組、入野組にまで加勢を受けて、人夫の数少ない時でも五百人、多いときは千人の人数を駆使して、長さ二〇〇m巾三〇mの石垣大堤防を築きあげたのは、約五十日かけて三月二十日でした。僅かの期間にこれだけの仕事を、よくぞ仕上げたものと驚嘆させられます。

二、宝永五戊子正月。唐津から係役人が出張してきて、堤・いぜきや、水路その他附属設備の工事を終わり、検地まで済して三月二十九日唐津へ引き揚げられました。



大堤防を外から見る

○検地の結果

田 廿壹町八反参畝拾壹歩半

畑 壹反九畝九歩

できていました。

この田・畑が耕作されて、米・麦を生産されるまでには、尚続けて管理熟成の数年間が必要でしょうが、遠浅の海が魚貝ならぬ主食生産地に変貌する日が楽しみです。

(宝永六・七年正徳元年過ぎて…)

(2) 入植・移民

イ、正徳二年

内野村勘七・同村与四兵衛・同村藤太夫・同村儀右衛門が家族と共に入植を願い出て、一人に付米三俵を三ヶ年据え置きで貸与され、家屋は四軒分必要なだけ藩林から払い下げ、また縄三十束かや六十駄を給与されました。

ロ、正徳三年 花房村勘右衛門

ハ、正徳六年 内野村角兵衛 畑津浦惣兵衛

ニ、享保三年 清水村市介 煤屋村三五郎



馬蛤潟の平野

### (3) 区民の感謝

#### イ、馬蛤潟の民風

馬蛤潟新田に希望入植した人は享保三年まで、九家族しか記録にありませんが、松浦拾風土記（文化年間（一八〇四—一八一七）作といわれる）の唐津領諸寄高には、馬蛤潟新田の名が既に出ており、

田畑高 四百九十七石九斗一升 古高なし

畝 数 二十二町九畝二十五歩半

石 盛 田 二石三斗五升より八斗迄

畑 三斗四升より二斗迄

とあります。<sup>かいびやく</sup>開關<sup>ようや</sup>以来漸く百年たったばかりで、同じ組内の他の村に比べて上位にあることは、地の利のよさにもありましようが、働き者揃いであり研究的な経営態度であること等が、その原因ではないかと思えます。

それと祖先崇拜の美俗がある事を特記せねばなりません。例証してみます。

#### ロ、馬蛤潟新田二百年記念祭執行

新田干拓工事が始められてから二百年にあたる明治三十八年の十二月に、当時の藩主土井周防盛利益公の墓前に参拝し、大堤防の守護神竜神社の大改修、神前感謝祈願祭 来賓招待感謝大宴会、二百年祭記念建立等の行事が行われました。紀元二〇〇六年は三百年にあたります。

#### ハ、通称ひげいも祭り

毎年定日旧正月元日、区内全戸より一名づつ畑津田嶋神社に集合。神前に豊作の感謝と祈願の拝礼の後、当番の用意した神前の神飯<sup>ごくらう</sup>と<sup>さま</sup>とひげのついたままのいもを小皿に分けた上に、お神酒をかけて指を使ってかきこむ。小皿というのは元治元年の銘がついた専用のものが◎枚、かねては神社総代の家に保存されています。その後全員で盛大に直会。

この祭りの起こりは、大堤防工事の時は真冬の厳寒時、海水の干潮時を狙った工事であれば、夜間でも強行されるのが常のこと、里詣のひげなど丁寧にするひまなどなかったであろう、寒いときは酒で暖を取るのが一番よい、しかし飯と酒と別にやる時間はとても得られない、飯お菜酒を一緒にやって当時のごくろうを偲ぶということからでした。



## ○力武新田沿革（授産舎擲）

寛政年間（一七八九—一八〇〇）唐津藩主水野佐近将監忠鼎公干拓普請を思召立たれ、畑川内組辻村深浦地先より黒川組煤屋村後口津地先を結ぶ海の中に石積堤防を築き十数町歩の干拓を計画、近郷近在の各組の人々の加勢を受け工事に着手されたが、海水は生きもので一日二回の干満と、風雨冬季は北西の季節風に吹きつけられ経験も浅い海中の工事は難工事で予定通り進展することなく一時中止となりました。

嘉永年間（一八五〇）藩主小笠原佐渡守長國公は肥前佐嘉藩に援助を乞い、当時有明方面に干拓工事の権威を誇る授産舎組を招き工事続行順調よく進み後僅かという折、世は一変し徳川一五代將軍慶喜公大政奉還、明治天皇御踐祥、明治二年唐津藩主小笠原長國公子爵位を賜り、唐津藩令となり明治四年九月伊萬里県に併合、同年十一月十四日東京に引揚げ殿様という主従関係もなくなり新田工事も中止打切となりました。

明治九年松浦郡山代郷の力武善七新田再工事を申請し許可を受け、樋門を堤防の北と南に設置し一番難しい汐止工事が地元馬蛤潟、煤屋、多数の人夫の見守る中九十数年を経て出来上がったのであります。

明治二十二年（一八八九）煤屋村灰ノ浦新田下約五町歩を埋立耕地整備に依る改修が施行されて稲作試作が行われたが低地と降雨による冠水、汐分多量のため収量なく放任状態となりました。

明治二十九年九月吉日、新田堤防上に力武善七八大龍王（新田守護神）を祀る。

明治三十年、伊萬里町梅屋（屋号）今井定治郎新田関係全般を力武善七より譲受け所有者となり山口助太郎一家を入植させ新田関係全般の管理を一任事務所に住居を与えました。

昭和十八年、梅屋今井富蔵新田関係及び殿ノ浦山林を維持困難のため煤屋村並に馬蛤潟村に売却、之より煤屋、馬蛤潟の両村共有地となる。堤防多年の歳月による老朽化甚しく煤屋、馬蛤潟での維持困難の極に至る（堤防漏水のため）

昭和三十三年四月一日、海岸保全国指定区域（五五三m）。

昭和三十六年、五ヶ年工事県営事業として堤防補強工事採択。

昭和四十一年三月末日、堤防補強工事完成漏水皆無となる。当時は食糧難という時代で堤防も完全に補強になった新田の汐遊地を干拓して食糧増産の計画案が出される。

昭和四十二年三月十八日、馬蛤潟力武新田食糧増産目的として汐遊地約十六町歩を県営補助干拓水田化の採択申請。

昭和四十二年六月七日、馬蛤潟力武新田県営補助干拓採択認可通知。

昭和四十二年六月二十三日、馬蛤潟干拓県営補助干拓採択同意書提出（関係者煤屋三十名、馬蛤潟二十三名合計五十三名）。

昭和四十二年九月十九日、馬蛤潟干拓県営補助干拓採択決定、同日県営補助干拓事業着工。昭和四十三年十月一日、力武新田関係所有権移転。

昭和四十六年三月三十一日、馬蛤潟干拓県営補助干拓事業完了、全面積十五・八一 ha、農地一二・二四 ha、その他三・五七 ha。

昭和四十八年十月十一日、馬蛤潟干拓売渡以来契約書、県→市。

昭和四十八年十月二十七日、馬蛤潟干拓売渡予約書交付。

昭和四十八年十一月二日、馬蛤潟干拓売渡通知書交付。

昭和四十八年十一月五日、馬蛤潟干拓造成地分筆登記。

昭和四十八年十二月二十八日、馬蛤潟干拓売渡収入金納付契約書、県→市。

昭和四十九年一月十日、馬蛤潟干拓売渡収入金納付契約書、市→県。

昭和四十九年一月二十二日、馬蛤潟干拓所有権移転登記。

昭和五十二年六月十五日、馬蛤潟干拓へ水稻作付取止めの連絡を受ける。

昭和五十三年二月二十八日、馬蛤潟干拓畑地利用説明会、於煤屋公民館、関係者五十三名全員。

昭和五十三年八月四日、馬蛤潟干拓畑作安定特別対策事業説明会、於伊萬里農林事務所、昭和五十四年より三ヶ年計画

昭和五十三年十二月十三日、馬蛤潟干拓畑作安定特別対策事業試作圃場造成地地割測量、波多津町株式会社市丸組。

昭和五十四年二月二十五日、馬蛤潟干拓畑作安定特別対策事業試作地一号より十号まで籤引により割当。

昭和五十四年二月二十六日、馬蛤潟干拓特別対策事業試作圃場視察、九州農政局、伊万里農林事務所。

昭和五十六年二月二十六日、会計検査。

昭和五十六年四月二十七日、馬蛤潟干拓構造改善畑地整備事業検討会、於伊万里市農協会館。

昭和五十六年九月十二日、香月熊雄佐賀県知事馬蛤潟干拓視察。

昭和五十六年十一月十六日、馬蛤潟干拓貯水池払下について伊万里農林事務所へ陳情。昭和五十七年二月三日、馬蛤潟地区畑作安定特別対策事業計画三ヵ年終了。

昭和五十七年八月三十日、県農業振興課他馬蛤潟干拓視察。

昭和五十七年九月二十五日、馬蛤潟干拓新農構事業土地改良事業公告。

昭和五十七年十月十七日、土地改良事業施行権利者同意書捺印書類作成。

昭和五十八年一月十日、馬蛤潟干拓波多津西部地区地区再編農業構造改善事業馬蛤潟干拓市営土地改良事業起工式、午前十時於現地。

昭和五十八年五月二十七日、波多津西部地区再編農業構造改善事業馬蛤潟干拓市営土地改良事業昭和五十八年度事業入札会、落札市丸組、工事期間昭和五十九年二月二十八日迄。

昭和四十四年四月吉日。堤塘改修記念碑建立、昭和三十六年より昭和四十年まで海岸保全事業堤防補強全面被覆エパラベツトエ樋門改修ニヶ所、門扉取替ニヶ所、盛土全被覆工五七二米、内堤工三七九、三米の竣工を記念して煤屋、馬蛤潟新田関係者一同により建立する、碑文は山口正次伊万里市長の書、石工内野小杉辰勇

昭和六十二年十二月二十一日、個人配分登記終了。

## 第二節 漁業

### 一、唐津藩時代の波多津の漁業

唐津藩における漁業は海の条件に恵まれて盛んでした。魚類・鮑<sup>あわび</sup>・榮螺<sup>きぎえ</sup>・鯨<sup>くじら</sup>・塩は藩財政にとって重要な位置を占めていました。文化十四年（一八一七）当時、唐津藩は表高こそ六万石でしたが、農業産力も高いうえに、櫛<sup>はげ</sup>・紙<sup>かみ</sup>・綿<sup>わた</sup>・石炭<sup>せきたん</sup>などの生産もすすみ、また、毎年鯨が三、四十頭、鮪<sup>まぐろ</sup>が一網三千本もとれるほどでありました。このような点から漁業全般に加わる運上銀<sup>うんじょうぎん</sup>は漁民の生活を圧迫したほどでありました。

水野、小笠原時代の唐津藩の浦は数多くありました。その中に畑津、黒川の両浦がありました。

「唐津市史」によると、波多津の浦にはつぎのような網がありました。

畑津……鰯網、四人引網、いか網、生海鼠引網、◎網、小諸漁網

寛政元年（一七八九）の唐津藩の総瀬網数は四三九帖、天保九年（一八三八）には五一九帖でありました。寛政五年（一七九三）の畑津浦には船数が五拾貳艘でありました。これらを他の史料によってみると、

畑津浦

一、銀六拾四匁八分	鰯網九帖	一、同拾匁	但銚共に	◎小河岸網壹帖
一、同拾貳匁	四人引網貳帖	一、同四匁		釣船壹艘
一、同四匁	烏賊貳帖	一、同八匁		◎網壹帖
一、同拾七匁五分	海鼠引船三十五艘	一、同四匁五分		底引網三帖
一、同貳匁五分	◎網壹帖	一、同七匁五分		同網五帖
一、同拾匁	小諸漁網壹帖	一、同六匁四分		投網貳帖
一、同貳匁五分	◎網壹帖	一、同拾匁		諸肴旅出運上

〆百六拾三匁七分

こうした藩内各浦運上◎計が、銀百五貫七拾五匁三分壹厘に達し、そのうち黒川、畑津両浦の占める



地位は極めて小さく、僅か〇・二%であったといえます。

なお、これら運上のうち、網運上は一帖につき何匁と規定され（釣漁は一人当たりもしくは、一艘当り、鉾は一本につき、生活鼠引、長縄などは船数について賦課）、漁獲物に対しては、「諸肴分一」税が課せられた。「諸肴分一」とは、「鰯網入候肴、何品にも而も拾歩一」とか「鮪網に入候肴、何によらず三分一」などと現物もしくは売上代金をもって上納するものでした。さらにこのほか、「諸肴他所出した運上」があり、「大鯖百には付銀三分、小鯖式分」、「鰯拾匁、鰯壺石に三分」などと規定されていましたが、のち実際には請負運上（定額）にしたようでした。

ところでこれら漁獲物のうち生海鼠については、これを煎海鼠として、干鮑などと共に長崎奉行所および藩の統制のもとに各浦の請負高制となりました。さきの史料（安政二卯年）によると、畑津浦千六百五拾六斤となっています。

畑津、黒川両津は、その地理的位置から地先海面は狭く、漁場には恵まれていませんでした。従って漁民は平戸領海へも出漁せねばならなかったようです。

## 二、波多津の漁業組合の沿革

### (1) 位置

波多津漁業組合は、佐賀県北部の波の荒い玄海灘の奥湾のいろは島が点在する波静かな景勝の地伊万里湾の一角にあります。前方には、長崎県福島があります。働く漁場の少ない漁港であります。

明治時代の漁民は、半農、半漁で生計をたてていました。水田は少なく、畑に麦、芋を栽培していました。漁業は一t未満の和船で底引網という小さな網で漁をしてきました。明治の時代は、買う網がなく手揃った漁家では、麻糸で網をすき、大きな片口鰻等を網にさかせて、少量の漁をして、その鰻と農家で米に替えていました。

明治四十年頃になって、日本の漁業者は、組合の必要さを認識し、波多津の漁民も明治四十五年二月組合を設立しました。設立発起人酒谷弥市。この人の名義で登録され同年三月初めて漁業組合が誕生しました。

### (2) 設立登記 設立発起人 郡会議員酒谷弥市

### (3) 歴代組合長名と在任期間

初代	塚 部 常太郎	明治四十五年三月から大正七年三月
二代	松 尾 誠一郎	大正七年四月から 昭和二年三月
三代	古 崎 定 治	昭和二年四月から 昭和八年三月
四代	池 田 佐 市	昭和八年四月から 昭和十六年七月
五代	塚 部 鹿 造	昭和十六年八月から 昭和二十二年四月
六代	塚 本 豊 治	昭和二十二年五月から昭和二十九年四月
七代	田 中 弥 作	昭和二十九年五月から昭和三十七年六月
八代	塚 部 茂 助	昭和三十七年七月から昭和三十九年五月
九代	橋 口 政治郎	昭和三十九年六月から昭和四十二年五月
十代	水 尾 今朝治	昭和四十二年六月から昭和四十九年四月
十一代	橋 口 政治郎	昭和四十九年五月から昭和六十年四月
十二代	松 本 仁	昭和六十年五月から 平成四年四月
十三代	大 石 嘉 一	平成四年五月から現在

## 三、波多津の初期の漁業

明治四十五年頃に、広島県や岡山県に綿糸の製網会社が出来て綿糸の網が自由に購入できるようになり、漁民は一斉にその網を求めているような漁業ができるようになりました。初めは、マカセというコノシロを取る網が出来ました。元網と銘して、塚部常太郎、塚部紋兵衛の組ができました。続いて、新網といって青木安太郎、塚部豊造の組、酒谷弥市の組、松本今朝治の組。郷之浦組とでき、一時は八組もできました。浦中の人はいずれの組に分散してのり込み漁にでていました。冬期はコノシロ漁に出て、そのとれ高により網子たちに配分され、農寒の米と替えて生活をしていました。

明治三十八年、日露戦争後、松尾牛太郎は、千葉県にアジ、サバをとる巾着網の研究に行きました。

その後各網主はこの網をつくり明治四十年頃から朝鮮周辺に漁業に出るようになりました。当時漁船には機械はなく帆と櫓を頼りに出漁しました。始めは北朝鮮より魚群を追って釜山方面に下り、大同方面まで廻って半年間の漁期を終えて帰航しておりました。朝鮮のサバの群は巨大で、時には網を破ることもあるほどでした。こうして、大正五年頃までは大漁が続いたと言われていましたが、大正七年九月の台風時に出漁中、松本組が壱岐、対馬の中間でその台風に会い五隻の船団はバラバラになり一隻の船網は対馬の東、博多沖に当たる大イワズ島に漂流しました。小舟三隻は転覆して船底にしがみつき救助を待ちました。一方の網船は漂流中に中支天津行きの輸送船に救助されて一カ月後に乗組員は送還されました。船と網は総て棄ててきました。不幸の中にも乗組員は全員無事でありました。

その後、朝鮮への出漁は取りやめになりました。昭和の漁民の目から見れば、昔の漁師の豪毅さに驚くばかりです。

また、その頃塚本留造は仲間を作って台湾のボラ網に行ったことがありますが、台湾のボラ漁は、一匹が5kg、10kgの大物ばかりで網を破り、魚をとることができず、台湾のボラ網漁は失敗に終わりました。

大正十年頃から壱岐近海で真鯷がとれるようになり波多津の漁民の大半はこの漁に出るようになりました。十年ほどはこの鯷漁が続き波多津の漁師の家計をうるおしました。

昭和の初期になって対馬の近海に大アジがとれるようになりました。波多津にも片手廻し巾着網ができました。昭和三年にできた初船可丸一号は塚本豊次、青木庄三郎の共同船で、網子は近親者三十人位の乗り組みでありました。その頃対馬は島根、山口、福岡、長崎の巾着船団の集まりの場でありました。これら船団の中で波多津の可丸の漁獲はいつも上位で、優勝旗をもらうこともありました。そして漁が終わって可丸が波多津の港に入港するときは、大漁旗をなびかせて接岸し、それは勇壮なものでありました。接岸と同時に四斗樽の鏡割りをして出迎への村人たちにも酒をふるまっていました。こうして、可丸の名は各方面に知られました。

可丸進水二年後に松栄丸（酒谷栄太郎、松尾三次組）ができ、可丸とともに漁ができていましたが松栄丸は不運にも昭和五年秋の台風のおりに対馬の港の入口に座礁して、船網共に揚がりませんでした。その後対馬の漁も下火となりました。

昭和七年頃から伊万里湾に片口鯷が大量にとれるようになりました。波多津は長崎側の要請を受け、初めに船漕網仲間が福島に一統、松浦今福に一統、共同で事業を始めました。盛期の昭和十年頃は長崎県の要請も増えて、鷹島の殿の浦、福島の鍋の串、今福新網と網数も多くなりました。波多津湾の朝はいわし船が旗を上げて廻り、海岸の製造場は、煮干しいわしで足のふみ場もないほど活気に満ちていました。玄海漁連の煮干入札会では、その頃高串、波多津と最高の生産高を誇っていました。

しかし、昭和三十年頃から潮流の関係で伊万里湾の片口鯷も少なくなり、長崎側との共同の網も次々と解散するようになりました。そして、長崎県側との共同巾着網は昭和四十六年に今福町滑栄と波多津船漕組との解散が最後でありました。その後、波多津の漁民はエビ曳網、船曳、延縄等と個人操業の漁業に変わりました。

この間、昭和三十年代に大分県波多江に真珠養殖の研修に行き、組合員全員真珠母貝の養殖を十年ほどやりました。でも母貝では成功せず真珠玉入れに切り替えた者は長く続きました。しかし、近年公害で貝の育ちが悪くなり昭和六十年までには、個々にやめて鯛やハマチの養殖に変わりました。この養殖魚はどこまでも活魚で運送しますので大きな公害さえ出なければ有望とみられています。

#### 四、波多津の延縄漁業

明治三十年頃から、綿糸がないときは麻をより合わせて手造りの糸で延縄を作り鯛やチヌ、ブリ、カレイ、ゴチ、アナゴ等をとっていました。伊万里湾内外を櫓舟で操業し、松浦市今福の市場の下には二十隻ぐらいの波多津の舟が何日も泊り込んで仕事をしていました。

大正五年頃から電気着火小型発動機が出回るようになって、波多津でも初めて漁船に機械を備えるようになりました。最初は塚部伊平の田島丸（二馬力半）でした。それから清栄丸、喜漁丸と機械化が進み延縄全船が機械を備えつけるようになりました。その後、船も機械も拡大し昭和四十年頃は漁場も長崎県沖合や壱岐・対馬周辺を主漁場として操業するようになりました。そこでは主にフグ、アマ鯛の漁をしました。その後、明光丸（田中保、田中作治）の船や宝栄丸が出来て同海域での漁がされてきました。漁法でもこれら大型船の活躍が期待されていましたが全船とも長く続きませんでした。今では明光丸一隻が九州南方海上、沖縄周辺の海域で操業を続けています。

エビ漕ぎ網は二人以内でも操業ができる網です。昭和四十年頃は同業者の船が四十隻もいて、伊万里湾を主に、玄海海域までも操業していました。ところが伊万里湾開発のために漁業権を失い、いまでは七人が残って操業しています。

船漕網は、いりこ生産の網です。最盛期は、二十統もおり、長崎県、福島、松浦、高島の漁協等両県立合いの入漁をして操業をしました。一時は波多津は漁協第一の水揚げもありました。だが、漁業権消滅とともに他県への入漁も拒否されてきて、操業の場がなくなり漁業者の大半が開発事業の方へ転業しました。残る者は、船漕きとしては三ヵ月位の操業の場 しかなく、他は敷網に転業して玄海の漁場で操業しています。

ナマコは、昔から地元海岸に繁殖している魚類です。組合でも、山石等を投げ入れてナマコの養殖をして、年に一度年末に採捕して年越しの金として期待してきました。しかし、近年公害の為にナマコの種も絶えてしまいました。

この頃、赤潮に関心をもつようになりました。そこで赤潮を恐れない漁業として車エビの養殖に目を向けました。ところが、この事業には新沿岸構造改善事業の認可が必要です。この認可を得るまでは、県や市の援助と多くの人々の協力を得ました。そして、町内煤屋浦に車エビの養殖場を新設しました。そして、平成元年までに四回の水揚げをしました。池面積二四三〇〇平方米、工事費二億四〇〇万円、昭和六十年に追加した池面積五〇〇平方米、追加工事費二四〇〇万円、池の名称を「伊万里車エビセンター」としました。

現在組合長 松本仁 養殖理事長 大石嘉一 養殖場長 塚本久雄

## 五、波多津漁港改修工事

波多津町漁協の百年の歴史の中で特記すべき事業に波多津漁港の改修工事があります。田中角栄首相のとき日本列島改善論がでてきました。波多津漁港も県の説明会を受け、指導をえて昭和四十年漁港改修にのり出しました。港を改修して、それに道路をのせるという県の説明で協議を続けました。地元負担金の問題で話は進みませんでした。総会の賛同をえて工事にふみきりました。漁港工事の認可は県で一つの組合しかできぬことになっていました。波多津漁協と同時に唐房漁協も工事の申請をしていました。どちらかが切られることになりました。そこで陳情合戦となりました。波多津は当時保利代議士や館林農林政務次官に陳情をしました。陳情団は、県の係官、市長代表、区代表、地元市会議員、漁業組員、漁業組合長、外役員等で構成されました。その結果昭和四十年認可となり、四十一年七月事業着工の運びとなりました。その後二十三年の歳月を経てやがて完成の見通しであります。

この事業によって漁民はどんな台風にも耐え得る漁業基地を持つことができます。海岸道路、荷揚げ場の建設により浦集落の全容が一変します。また、今後の集落の発展と観光の両面から期待するところ多しといえます。

昭和四十年着工から平成二年までの事業費

第三次	昭和四十年	—	昭和四十三年	二九九〇〇 (千円)
第四次	昭和四十四年	—	昭和四十七年	一一〇九〇〇 (千円)
第五次	昭和四十八年	—	昭和五十一年	一三九〇〇〇 (千円)
第六次	昭和五十二年	—	昭和五十六年	一三九〇〇〇 (千円)
第七次	昭和五十七年	—	昭和六十一年	一〇一一〇〇〇 (千円)
第八次	昭和六十二年	—	平成二年	五〇〇〇〇〇 (千円)

漁港改修事業の外にできた補助事業

昭和五十年 第二次沿岸漁業改造構造改善事業

漁協事務所 水産物荷さばき施設

事業費 一五,二八一,〇〇〇円

昭和五十五年第二次沿岸補足整備事業

船揚場

事業費 一〇,〇一五,〇〇〇円

## 六、釣漁

古橋キヨエ（浦区）

「太かつん上がって来よるごたるばい。」……と夫のはずんだ声。漁師として生き五十余年、大小の見分けは手ごたえで分かるのでしょうか。延縄操り機がスリッしながら魚を揚げる。十五分もすれば、五m先の海面に空気を腹いっぱい吸って仰向けにぽっかりと巨体が浮かぶ。三十kg以上はあると夫。枝糸を手にとって、クエに合わせて手元に引き寄せ大たぶ（たも）で掬い船内に引き上げる。そこで、ひと息、夫婦の笑顔、最高の笑みである。たもに入らない大きなクエは、顎の所に手を入れ、片手で口元に魚釣を打ち入れて引き上げ、横に寝かせ、空気を抜く、それは魚が生きるために顎鰭の下に空気針を突き刺す。シューと音を立てて空気が抜け、お腹がひっこむ。蟹の言葉で（胃を潰すと言う）釣針を呑み込んだ魚は死ぬので、氷室に埋める。一般に三kg—四十kgまで釣れる。



壱岐島の市場で競る魚価は、十kg—二十kgまでが高値で七千円から一万円の高価、氷魚は少々安く競られる。

漁法は、壱岐港から夜明と共に漁場に出漁、長年の経験で海底まで知りつくしている。でも、今は魚群探知機、数年前からはプロクター機と、あらゆる機器を備えて、それこそ海底の岩礁の凹凸まではっきりと映る。ことにクエは荒い岩礁に住むので、その漁場を何回も操業するのです。

昔は北山から緒を購入して縫り、手作りの延縄を作っていました。その後は、綿ロープからクレモナのロープで、本縄は直径四mmから五mm、枝糸ナイロン八十五—一〇五号、釣針は二十—二十五号、縄の長さが四〇〇m、枝糸二尋（約三m）を、ひとこしき（ひと鉢）に丸く操り入れ釣針は三十五本、餌は鯖の幼魚（呼び名はヅンコ）大鯖ぐらいを三つ切り、ひと針に一個掛けてはえませます。一日に十五コシキ操業して、午後二時頃終わり壱岐入港して明日の用意に縄のもつれをといて元どおりにするには夕方までかかります。

以上は、活き中鯖の一匹掛けでしたが、今は餌にするほど鯖が釣れないのです。

昔は、伊万里湾を出れば操業できたのに、今は壱岐周辺、二神島、五島列島、対馬方面の沿岸が主な漁場となっています。魚減少のためなのです。長崎の大瀬戸方面からも五隻漁にきています。私達はひと航海に十日ぐらい渡り蟹として滞在します。

昭和三十三年頃は、十二月からは対馬の寒の岩石鳥賊（スルメ鳥賊）釣り一ヵ月渡り滞在して、暮れ

には帰港し、翌年五ヶ日を過ごして出漁し、一月中操業して帰港しました。

乾スルメ加工業者に生一匹、二円～四円、私が行った四十二年頃は一匹、二拾円となって買い取られました。今は、北海道の大型鳥賊船が三日三晩かけて壱岐の島へ来て市場競りをしています。壱岐～対馬沿岸の操業です。

今は、一般漁業者は浅蛸掘り、縄天草取り、穴子縄、鱸縄、鯛の一本釣り、黒虫の鯛縄、イサキ釣り、海老漕ぎ網、鰯網、十五年程前は、秋になると油イカの鯛縄を主にしていました。今は、長崎県側の意向で全面禁止になりました。波多津漁業者は少人数ながら、多類操業して暮らしています。

塚本留造（明治十年生まれ）延縄始めの頃は、釣針は自分流に焼き上げ、その釣針を見れば人の名前が分かったものだと古老が申ししていました。祖父は、あの有名な網師松尾丑太郎さんと大連に韓国人と三人で、櫓漕ぎ舟で一ヵ月もかけて行ったそうです。それから、台湾の高雄にも漁業振興のために西唐津の梶山さんと波多津の数人で渡航しています。この時は「鰯のからすみ作り」の先発隊として、大船に小舟を積んで行ったということです。

それ以後一度びは延縄ひと筋に操業しています。

### 第三節 林業

#### 加川村長の先見と英断—原野に植林造成

波多津村は、もともと原野の面積が広く、各種採草地として利用される外は、雑草の生い茂った荒野が多かったのです。

明治四十年四月、加川公夫氏が村長に就任以来、波多津の原野と荒地を生かした森林造成により将来波多津の基本財政作りを村会議に提案されました。当時は、村財政の苦しい中でもあり反対者もありましたが、度重なる協議の結果、遂に村を挙げて植林事業に取り組むことになりました。

明治四十一年—県より造林適地・地質調査が行われました。明治四十二年七月—田代地区の国有林払い下げを、村会議において議決され、明治四十三年二月—田代地区の松苗植付けから始まり、大正二年七月—植林委員会発足、同年十一月—植林条例が制定実施されました。

国有林田代地区・板木地区の松の尾が先ず差出され、その後、各集落より差出されました。主として集落の共有地の原野を村有林造成のため差出して、基本財産ができました。適地を持たない集落は、資金を出貸して、その割合により基本財産ができて昭和の初期頃までに集落有又は個人有のものも加入して現在に至っています。村有林の各集落より差出された土地は、比較的條件の悪い所が多かったのですが、村当局の熱心な指導のもと村民の皆さんの努力と手入れにより見事に育成され、伐採の運びとなり、波多津中学校の新校舎建築には総て桧の木を提供されました。

当時は中学校校舎を桧の木御殿とも言われていました。

その後、公共事業の経費も充当されその恩恵は現在まで測りしれないものがあり、これ全く加川村長の先見英断と当時の村議—古河熊大郎氏を初めとして、歴代植林委員会各位の献身的実践と督励並に村民各位の努力のお陰によるもので銘記して深く感謝を捧げるものであります。

村有林育成事業により、村民の植林意欲は開眼され、更に拍車をかけたのは、農業における草刈りの必要がなくなったこともあり、なお、入合林野法の改正と集落共有地の個人別分割と、植付補助金制度により植林が盛んに行われるようになりました。現在では、殆んど原野・荒地は見られなくなりました。

村有林は、町村合併により全部を市有地とされましたが、その管理育成は町に委託され、伐採の時は、三割が管理委員託料とし、七割は地元の公共事業財源に充当予算化される事になっています。現在でも、私有林管理委員会の指導により、町民の方々の努力によって育成され続けています。

#### ○参 考

- |    |            |           |
|----|------------|-----------|
| 明治 | 四十年四月二十七日  | 加川公夫村長就任  |
| 〃  | 四十一年二月九日   | 県より造林適地調査 |
| 〃  | 四十二年二月二十八日 | 田代・中山地区調査 |
| 〃  | 四十二年四月     | 村議による地質調査 |

〃 四十二年六月四日 村有林造成のために 一金 五百円也 借入  
〃 四十二年七月十一日 田代地区の国有林払下げ村議会に於て決定  
当時村議 古河熊大郎氏  
〃 四十三年二月三日 林有林松苗植付着手  
〃 四十四年一月二十七日 田代国有地払い下げの書類熊本営林局に提出  
大正 二年二月二十六日 板本地区剛里ヶ坂  
〃 二年七月 植林委員会発足（議員から）  
〃 三年二月 第一回桧苗植付 八万三千本  
期日不明 松苗植付 八千八百五十本



## 波多津町集落別市有林面積表

(平成2年4月調査)

集落名	小字名	面積(m <sup>2</sup> )	摘 要	集落名	小字名	面積(m <sup>2</sup> )	摘 要
木 場	立 石	51,001		中 山	上の耕地	17,613	
"	築 立	46,435		"	西の平	12,048	
"	深 谷	98,713		"	大 国	41,090	
"	白 岩	104,295		小 計		70,751	
小 計		300,444					
				畑 津	萩 平	3,038	
筒 井	加 倉 谷	31,801		小 計		3,038	
"	鳶の巣	13,917					
小 計		45,718		内 野	高 尾	16,213	
				"	佐 矢 中	12,892	
井野尾	二 杉	1,087		小 計		29,105	
"	大 坂	8,287					
"	黒田代	5,254		煤 屋	飯 盛	9,917	
小 計		14,628		小 計		9,917	
田 代	大 平	6,923		合 計		748,999	
	作 道	23,292					
小 計		30,215					
板 木	松の尾	44,354					
"	剛里ヶ坂	24,122					
"	大 抜	2,975					
"	上の木場	40,192	板木組大庄屋の山				
"	川 宇 治	58,112					
"	小野の原	10,439					
"	前 田	1,031					
"	白 木	746					
小 計		181,971					
津 留	上 大 谷	17,902					
	中 の 峠	8,445					
小 計		26,347					
主 屋	百 田	9,143					
"	塩 鶴	4,269					
"	前 田	23,453					
小 計		36,865					
計		(636,188)					

### 市内町別市有林面積表

(平成◎年◎月調査)

町 名	面 積 (m <sup>2</sup> )
波 多 津	748,999
南 波 多	436,132
大 川	211,436
松 浦	1,013,462
二 里	1,133,564
東 山 代	764,375
計	4,307,968

## 第九章 人物

### ●加川<sup>ただお</sup>公夫

(明治三年八月 波多津村板木で出生)



長じて軍務に服し日清戦役に勲功がありました。明治三十年七月波多津村助役に就任し、同四十年四月より推されて波多津村長に就任、前後を通じて二十二年余りの長期に亘り村行政の要務に任じ日夜精励され、その業績も顕著でした。特に村政百年の大計を樹立し村有林の造成を推進され、爾来四十数年の歳月を経て百余町歩の山林は見事に育成されました。学校改築や公共事業の唯一の財源となり、今に至るまで町民齊しく敬仰しています。氏が村行政に精励、植林事業、公共福祉の増進に多大の貢献をされたので、郡長、県知事、全国町村長会など幾度も表彰状を受賞されました。昭和二十七年一月逝去。享年八十一歳。

### ●天野 房太郎

(文久二年十一月 唐津で出生)

唐津藩士で少壮にして佐賀醫学校で学び、卒業後醫術開業試験に合格されました。更に東京の細菌法醫精神学校で研究を重ね、帰郷して検疫官、学校医、村医等を歴任し、明治三十六年波多津村浦に於いて開業されました。以来三十有余年間患者に対しては、貧富の差なく懇切に治療に当たり、窮乏な人には薬価や治療代を安くし、近隣、遠方より治療を受ける人々に、区別なく博愛心を持って対処し、また、村民の保健衛生に勤められますので、その高德に対し村民は勿論近隣者一同齊しく敬愛の念を持っています。大正十一年元氣益々旺盛で医療業務に精励され、余暇には書画や謡曲を愛しておられました。今後百歳までも健やかで寿福無窮を願って、村有志一同先生の高徳を後世に伝えるため大正十一年十月頌徳碑が建立されました。(天野翁頌徳碑文より)



天野翁頌徳碑

●高森 茂治郎

(明治十一年 波多津町弁賀で出生)



明治四十五年、三十四歳の若さで区長に推され、以来区民の要望により昭和六年まで連続二十年間にわたり辻区長の職を勤められました。その間家業の傍ら各種事業の達成に日夜内外を奔走されました。特に大正年間を通じて、浦区と上場間の新村道開通に努力され、十有余年の歳月を経て昭和二年に遂に完成されました。その結果辻区及び周辺地域の発展に与えた効果は計りしれぬものがあります。また当時区民が最も待望していた電灯線引込みを大正八年に完成させ、住民の生活水準と文化的生活の向上に寄与されました。更に湯之浦地先海面の埋立て工事を着工、長い年月を費やし 二町八反歩に余る美田を完成させ、農業の振興に貢献されました。その他、諸々の功績により自治功労者として表彰されること数回に及び、区民より慈父の如く慕われ、惜しまれながら昭和二十年に六十有余年の生涯を閉じられました。

### ●田中 英治

(明治二十三年七月 唐津市湊浦田家網元で出生)



明治四十二年三月旧制唐津中卒。大正元年波多津村辻田中酒造へ入籍、その後酒造業に精励され、弓取の商標で販路を拡大。昭和二年には貴族院多額納税者名鑑に記載され、直接国税総額千参百五拾円を納入されています。これは当時の波多津村の年間予算より多いといわれていました。昭和十七年より同二十年の第二次大戦末期に推されて困難な時期に波多津村長に就任。電話開設、道路建設など地域振興に努力されました。特に育英事業にも配慮され、小学校卒業の際成績優秀者に田中本店賞が戦前戦中に継続して贈られました。また政治の面でも佐賀県政友会の重鎮として活躍されました。昭和四十三年十一月逝去、享年七十九歳。勲六等単光旭日章を受賞されました。

### ●松尾 加助

(明治二十七年七月 波多津町中山で出生)



大正三年三月佐師卒。同年四月伊万里小訓導となり、曲川小・西山代第二小・波多津高小訓導を経て、大正十四年九月東山代尋常小（現滝野小）校長に昇任されました。昭和六年四月西山代第二小、同八年十月西山代第一小校長を歴任し、昭和十年四月より五年間佐賀師範学校附属小首席訓導（実質的な校長）を務められました。同十五年二月伊万里小校長に転任され、昭和二十一年三月同校を退職、その後伊万里図書館長、波多津村助役及び村長として伊万里市合併に尽力、市教育委員長として教育の正常化に努力、初代市郷土研究会長・初代市文化連盟会長・初代市老人クラブ連合会長・家庭裁判所調停委員等の要職を歴任されました。伊万里市の教育・文化・行政に多大の功績を挙げられました。市長・知事・法務大臣等の表彰状九回・感謝状十一回受賞されています。昭和四十一年に生存者叙勲勲五等瑞宝章を受けられました。平成元年七月二十二日逝去、享年九十五歳。



### ●橋口 政治郎

(明治四十四年 波多津町辻に出生)



大正十四年波多津尋常高等小学校卒業後家業を継いで漁業に従事されました。昭和二十七年福島町他関係周辺漁協と入漁契約し鰯船曳網及び巾着網の操業を可能にされました。昭和二十九年漁業組合理事になるや波多津漁業協同組合長をはじめ県や松浦海区等で幾多の理事・監事・委員等を歴任されました。

昭和四十一年より始まった波多津漁港改修工事の大事業完成に尽力されました。(平成四年完成)

昭和四十七年名村造船進出後は残った少数の漁業者へ鯛・はまちの養殖育成及び蓄養魚の奨励、また車海老の獲殖に着手され、昭和五十三年、県功労者として知事表彰。

昭和五十八年には勲六等単光旭日章叙勲を受け漁港の改修や養殖漁業の導入をはじめ漁業の振興と地区発展に偉大なる業績を残して平成五年十一月逝去、享年八十三歳。

### ●小杉 マツエ

(大正七年十一月 波多津町内野で出生)



昭和十二年三月佐女師卒、同年四月長松小訓導、同十四年四月波多津小、同十八年四月伊万里小、同二十一年三月同校退職、昭和三十七年四月波多津町婦人会長に推薦された後は、伊万里市婦人連絡協議会長・県婦人連絡協議会理事・市栄養改善協議会長・県食生活改善推進協議会長・全国食生活改善推進団体連絡協議会長・市教育委員・伊万里地区更生保護婦人会長・家庭裁判所婦人調停委員等の要職を歴任され、市長・知事・更生大臣等表彰状十五回、感謝状十回、計二十五回受賞されています。教職生活は九ヵ年でしたが、各種団体の責任者として、全国規模で社会に貢献された功績は誠に顕著であります。平成五年十二月逝去、七十五歳。

## ●田中 正爾

(大正九年六月十日 波多津町煤屋に出生)



昭和十四年三月、伊万里農林学校を卒業され農業に従事されていましたが、その後波多津農業組合に勤められました。

昭和三十二年五月には同農協の常務理事に就任され、以来農協の運営と農業・農村における指導的役割を果たされました。また、地域農業の振興、特に野菜・果樹・畜産の振興に努められました。

更に土地基盤の整備や近代化施設等の導入により農村環境の整備事業に全力を傾注されました。

昭和五十年六月より伊万里市農業協同共同組合組合長理事を勤めるとともに、県農協連合会の要職を歴任され、地域農業の発展に指導力を発揮されました。特に県共済連の副会長時代、会長職務執行者として農協連合会の健全発展に尽力されました。

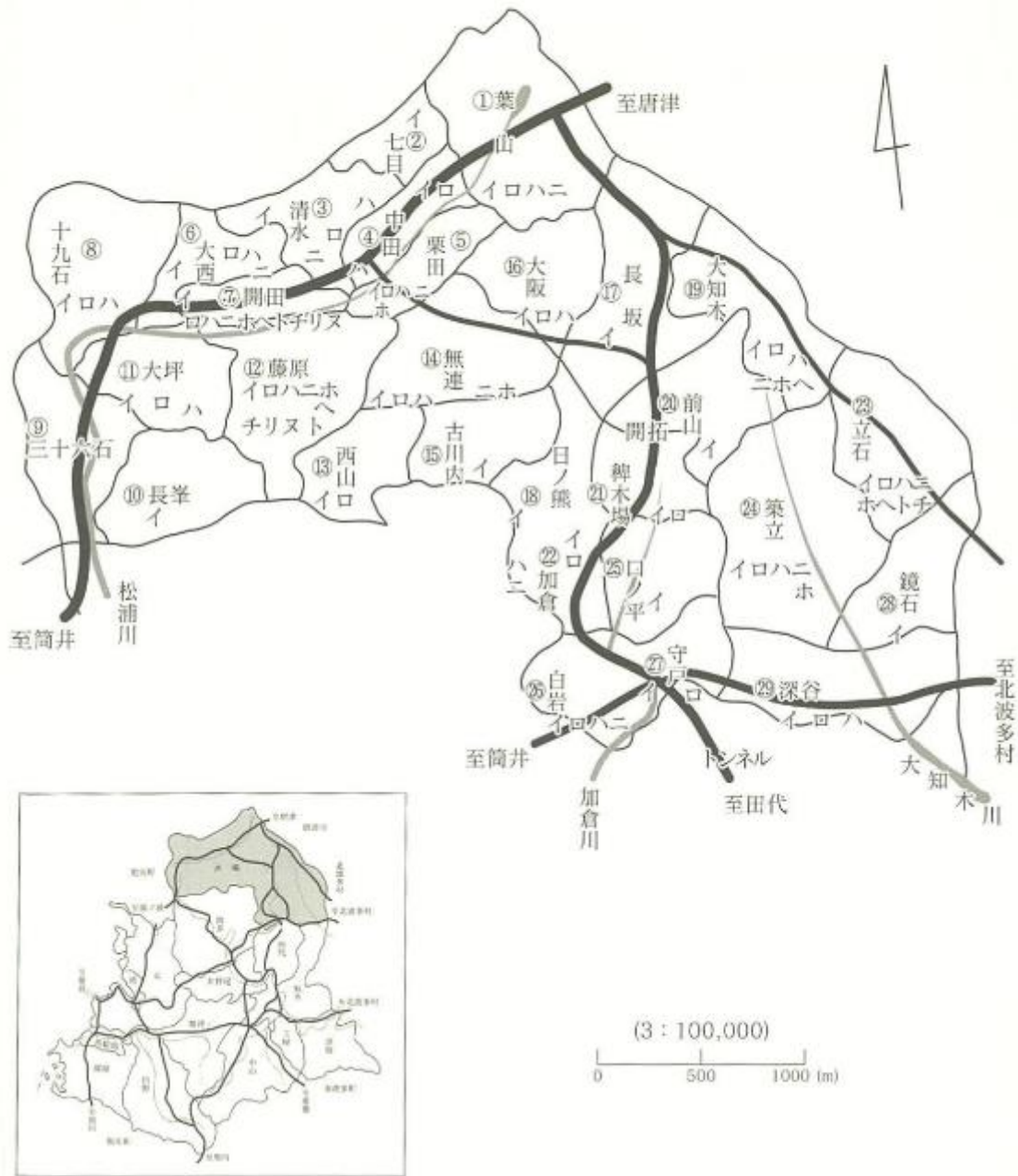
これらの数々の功績により平成元年五月黄綬褒章を受賞されましたが、平成二年七月六日惜しまれながら、七十歳にて生涯を閉じられました。



# 第十章 集落史

## 木場

【木場】



木場

小字名	生活地名	小字の中の要点
番号と 登記地名 説明	日常生活に使う住民の作り出した地名(カタカナ符号、ひらがな地名)	地名のいわれ・史跡・遺跡・お宮・お寺・文化財・公共設備・交通設備など
①葉 山	イ、まつばんはな ロ、とっけんい し ハ、はぎのさこ ニ、いわがみ	手足の不自由な人が祈願とお礼のためお堂を建てている。古溜の所在地・太神宮と宮地獄の神祠がある。バス停、国道から広域農道分岐国道二〇四号線は唐津市に至る。
②七 <small>なな</small> 目 <small>め</small>	イ、あてんたに	きれいな湧水
③清 水	イ、かんこば ロ、かんざん ハ、 ぞうこんげん ニ、まえだ ホ、し みず	イ、六地藏様 ロ、庚申様 ハ、六地藏(清水川) ニ、六地藏(まえだ)
④中 田	イ、まつや ロ、やまぞえ ハ、さ こんたに	イ、六地藏様

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑤栗田	イ、いわんむれ 口、うなたろ ハ、みどう ニ、たじも ホ、いわんたに	イ、六地藏様
⑥大西	イ、うとんたに 口、うえんくぼ ハ、かんねがさこ ニ、ながおさ	イ、大神宮様鎮座
⑦開田 <small>ひらき</small>	イ、くろきのもと 口、すきざき ハ、あぶらだ ニ、げんこだ ホ、とんこだ へ、しろやぼ ト、たばた ち、とうしし リ、おおばたけ ヌ、さこんたに	田嶋神社(二二三一ノ一番地)、四月・六月祈祷、西雲寺(二二三四番地) <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一月六日 修正会</li> <li>・ 三月二十一日 春彼岸会</li> <li>・ 八月七日 施餓鬼会</li> <li>・ 九月二十三日 秋彼岸会</li> <li>・ 旧十月十四日 十夜会</li> </ul> 集会所(二二三三番地)
⑧十九石	イ、すうぜんばる 口、さるまぶし ハ、はこば	昔は雨ごい広場があった
⑨三十六石		

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑩長峰	イ、わくどだに	昔、ワクド（ヒキガエル）が異常に多く住んでいたことからでた名前・集落から離れている。
⑪大坪	イ、たきのした ロ、とりごえ ハ、ちようだ	太古の鳥の化石が発見された。
⑫藤原	イ、かわよけ ロ、なかばる ハ、 すみだ ニ、たてだ ホ、いのしり へ、にしやま ト、ひらまつ チ、 まるやま リ、とんこだ ヌ、うし ろやま	
⑬西山	イ、まつのもと ロ、ふじわら	
⑭無連	イ、ごんげんやま ロ、ごうなだ ハ、なかしま ニ、ふるこうじ ホ、 みようといし	イ、権現様を祭った山 ロ、ごうなのたく山いた田 ん中 ホ、二つの岩がある。
⑮古川内	イ、めあら	木場石の石切場

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑯大 阪	イ、ううさこ ロ、おやだ ハ、とらぼう	新溜の所在地 水が豊富で稲作に最高の良田地帯 八月二十六日とらぼう祭をする。
⑰長 坂	イ、ながざこ	新溜所在地、大日様所在地、水安地藏様がおられる。
⑱日の熊	イ、ひのくま	びしゃもん様のお祭り(春秋二回)
⑲大知木	イ、いわがみ ロ、ごりんどう ハ、むこわり ニ、くまのこんげん ホ、からうすば ハ、かみだ	お茶が主産業・家七軒 昔、谷川の水流に米麦をつかせていたところ。
⑳前 山	イ、かいたくち	熊野権現様の神田(春秋二回)
㉑稗木場	イ、いでんひら ロ、うらんたに	地蔵大菩薩 日切り地藏
㉒加 倉	イ、かみやまだ ロ、すづほんだに ハ、しもまえだ ニ、きしだか	広い田
㉓立 石	イ、ばぶんやま ロ、いちまいだ ハ、うますてば ニ、でんろく ホ、たていしばる へ、みょうといし	昔、死馬を捨てていたところが地名になる。



小字名	生活地名	小字の中の要点
②④ 築立 <small>つぎたて</small>	ト、かみのきだに 千、まさきちだに に イ、ふうずきだに ロ、ひげだに ハ、ちいたて ニ、やまいんだに ホ、たきのうえ	
②⑤ 口の平	イ、たきのやま	滝のように水が落ちていた。
②⑥ 白岩	イ、さかんきど ロ、ひじざか ハ、 ひろた ニ、かまだ	
②⑦ 守戸	イ、ことうげ ロ、ふじざか	
②⑧ 鏡石	イ、じゃがふち	鏡のような美しい石がある。県行造林
②⑨ 深谷	イ、おおとうげ ロ、ちやのきだに ハ、ひじざか	下平野の茶畑地帯に入っていく。家四軒



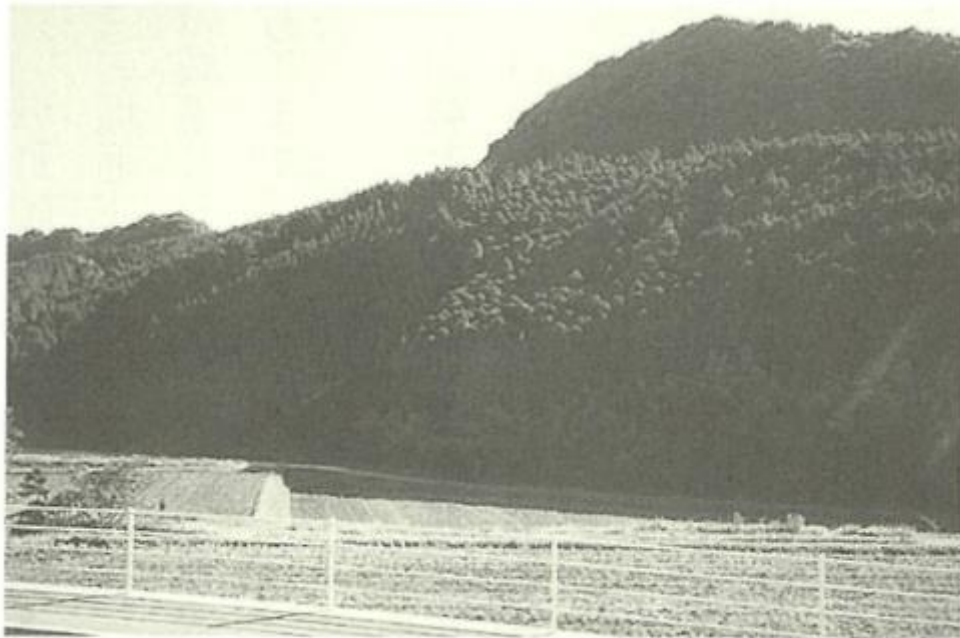
## 一、木場城

「松浦拾風土記」に、次のような記述があります。

「永仁三年(一二九五)九州探題北条兼時の目代として、松浦播磨守を呼出し、筑前國隈崎の城に居を置たり。其後代々熊崎の城主たりし。大友宗麟の時に當りて、熊崎駿河守此所を退き、松浦郡木場村に館を築き住居せり。其隈崎を退きし固意を尋るに、宗麟専ら邪蘇宗を信じて神社佛閣を破却し、我意を振う事傍若無人なり。駿河守偕思ひけるは、今此宗麟に屬せし事、天神地祇の御罰こそを畏しけれ、如何にもして此隈崎を退かんと思案を廻らせし折から、宗麟隣國と戦ひ出來し、軍勢を催足しけるに、駿河守虚病にして出でざりければ、宗麟怒りて軍陣の首途出として、隈崎の城に押寄せんと其支度をなしける。駿河守は書翰を認めて罪なき由をいひやり、城を明けて岸獄に來れり。其後岸獄の城より、木場・中浦の内を分けて居城を築かせ、旗下として差置きぬ。それより隈崎駿河守照連續して住居せり。(中略)

城野尾城と云ふに、隈崎豊後守源信有り。家老は西川半之丞。」

この城も、主家波多氏の没落により廃され、以後唐津藩領となりました。「松浦記集成」には、最初の城主とみられる熊(隈)崎照の墓が、「木場村にあり、此所を知行す」(松浦拾風土記には中通村にあり)とあります。



木場城のあった前山

## 二、山林と松岡泰作翁頌徳碑

三つの枝村をかかえた木場村は、広い面積を占め、区有の山林原野二五〇町歩を所有しています。この山林原野は、当区の次男・三男が分家した時、区有の山林原野を分与し、開墾して農業を営み居住するよう、他町村への流出を防ぐための資産として、個人分配はしないとの字規約が、大正の末頃でき厳守されてきました。このため植林にも努力が払われ、逐次一〇〇町歩の植林もできました。

こうしたお陰で、昭和中頃の共有電話設置、公民館建設、放送施設等大事業の経費も、成長した木材によってまかなうことができました。

また 昭和八年頃、字長坂の原野三十町歩余を整地して牧場を造成し、牛馬を飼育しましたが、戦後、開拓団に分譲され現在に至っています。

この区有林野も、昭和四十四年、入会林野整備法により、共有地七十五町六反歩を、区戸数六十三戸で一戸につき一町二反ずつ分配、各戸が植林して現在に至っております。

### 松岡泰作翁頌徳碑

先に述べた区有林野の運用や植林事業の推進に、大きく貢献されたのが松岡翁です。区ではその功績に対し頌徳碑が建てられました。碑文は

翁は明治十五年八月十二日 哲之助氏の次男として出生、若くして区長 村会議員を歴任され、木場林野管理組合理事長として、区民繁栄の基礎作りのために多年にわたり百町歩の植林目標を達成すると共に、共有地の分散防止を指導督励し、区民もその恵に対して今日に至る。昭和四十四年入会林野整備法の施行に依り、生産森林組合として七十五町六反歩を六十三戸で配分、更に上場共有地三十町歩を開墾して、養蚕 葉煙草栽培団地として将来に備えられた。これひとえに翁の功績に帰するところであり、茲に 深くその遺徳を敬慕し、今後も共有地の他部落への譲渡を永久に禁ずる事を申し合せ、この碑を建立する

昭和四十九年五月吉日 木場村中

(碑文は長谷川宝助による)



松岡翁頌徳碑

### 三、蔵王大権現

大権現を、四国の讃岐から木場村へお迎えしたのは、明治五年八月五日のことでした。

はじめ、唐津市梨川内の園田利七が、木場に世話人をたてて、長谷川丈右衛門・前川友太郎外数名の者が選ばれました。選ばれた者は出発に先立って、七日間一切の生活を精進潔斎した後、四国へ渡り神霊をお迎えして帰ったということです。お迎えした神霊は、木場村を見下す清水の岩山に祀られております。お迎えの時着用した白衣や幟等は、今も前川元治宅に保存されています。



蔵王大権現

### 四、木場村 上記

田畑高 四一七石六斗六升三合  
畝数 二五町八反七畝十歩  
戸数 三十六戸（一戸当四、五人）  
人数 一五二（男八十五、女六十七）  
氏神 田嶋大明神 祭礼九月十八日  
若武玉尊 天正十八年二月建立  
熊野十二社権現 天正十年二月、隈崎庄建立

### 開 拓

#### 一、開拓のはじまり

開拓のはじまりは、戦後の緊急開拓事業からです。日本は第二次世界大戦において全面降服をしたので、復員軍人と外国に出ていた同胞が、世界各地から七百万人も帰国するというのです。

そのために政府としては、莫大な食料を準備しなければなりません。しかも引き続きその供給（生産）を継続しなくてはならないのです。また、働く仕事の世話をしなくてはなりません。これは帰ってくる人たちがばかりでなく、今まで国内に居て、軍需産業等に従事していた人たちも、たくさんいたからです。



この時、政府の打ち出した計画は、全国の遊休地や山林原野のうち、開墾できる土地を緊急に開墾して、そこに住ませ、食糧生産に従事させるということでした。そこで、「自作 農創設特別措置法」が制定され、食糧増産は当時、国の最高命題となりました。

わが村、木場に開拓団が入植されたのは昭和二十一年二月十八日でした。開拓用地としては、木場集落が戦前に共同牧場としていた一帯が、未利用のまま残っていた三十八町と、これに隣接した波多津村有林七町、計四十五町が地権者の了解のもとに既に決定していました。

当時、入植された二十一名は、前途の多難であることを予測しながらも応募された方々で、その気概には敬服のほかありません。

当日（二月十八日）、開墾地で鍬入れ式を行い、翌日から早速開墾作業に入りました。後日、当時のもようを、富野加志男・松下常夫の両氏は、「入植者は、木場青年倶楽部に合宿、雨の日以外は、厳寒吹きさらしの上場に、鍬一丁、鎌一丁で開墾に立ち向った。開墾と併行して、年長組五名は家屋班として、住宅の建築に取りかかった。当分は雨露を凌ぐだけでもよい、早く家族を呼び同居できるようにと頑張ったが、両方とも重労働で馴れない仕事のため、なかなか能率があがらず、見るに見かねた波多津振農会や村の青年団の人たちが、何日間も労力奉仕をしていただき感謝している」と語っています。

こうして、二十二年春には、家族を呼ぶことができ、夏までには数町歩の開墾もでき、夏作に甘藷や南瓜を植えることができました。

しかし、苦難との闘いは、これで終わったわけではありません。前述の両氏は続けて、「二十二年には家族を呼びよせることができました。しかし、生活はいよいよ厳しく、時には床藪・つわ・よもぎも食べたし、塩水を汲みに当番で湯の浦にも通った。米を買うために、着物が一枚ずつ減っていった。過重労働と栄養失調のため倒れた人もあり（後略）」と当時をふりかえています。



開拓公民館

## 二、開拓四十七年間の足跡

終戦の翌年に希望してこの地に入植し、今日までの四十七年間に、ともかくも生かしていただいた自然の恵みと、開拓内外の人々の情をしみじみと感じます。今日までの歩みを、少しばかり書き留めてみます。

### (1) 電気導入

昭和二十三年十二月導入、これは、開拓を囲む大知木・加倉・深谷区が、導入をせきたててくれたお陰で、異例の早さで電気がつきました。

### (2) 極端な水不足

入植以来、いくつかの井戸を試掘しましたが水は出ません。ただ一ヶ所水が出たので、共同で使用していますが、涸れることもあり水量不足。未だに解決できません。

### (3) 公民館の建設

個人の持家が狭く、何事にも盛んに館を利用しています。

昭和二十四年第一次建築、昭和四十一年第二次建築、老朽化のため建替、広さ十五坪

### (4) 道路新設等 昭和二十二～二十三年 幹線道路五六三m、同支線一八五三m

昭和二十六～二十八年 地区道二六八二m、昭和三十年

地区外道六二二m

昭和三十九～四十年 開拓改良道三九九三m

昭和四十八年開拓地基盤整備三六〇m

国見山麓広域農道 木場字葉山から開拓－加倉－田代－板木－中山－内野－畑川内－清水－平山－脇田－屋敷野－白野

### (5) 営農事業

- ・昭和二十三年 茶の栽培を始めましたが、三十二年段々畑を造成したので廃園
- ・昭和二十六年 みかん植付、一時六町まで拡張しましたが、一部不適地が出て現在四町に減反
- ・昭和三十三年 これまで唐鍬による人力開墾で、耕地不均質の不便があったので、全耕地をブルドーザーで再開墾
- ・昭和四十七年から二カ年継続で、隣接地木場の団体営農地開発事業が行われたので、開拓から養蚕関係に三名、煙草関係に一名参加させてもらいました。

### (6) 入植者の消長

- ・入植 昭和二十一年 二十一人、内波多津出身者十一名
- ・離農退団 昭和二十九年 五人、三十八年 四人、四十年 一人、四十九年 二人、計十二人
- ・現状 現在九名、当時二十歳前後の入植者は健在ですが、高齢化もすすみ、半数程が後継者によって意志が受けつがれ経営されています。(平成四年十月現在)

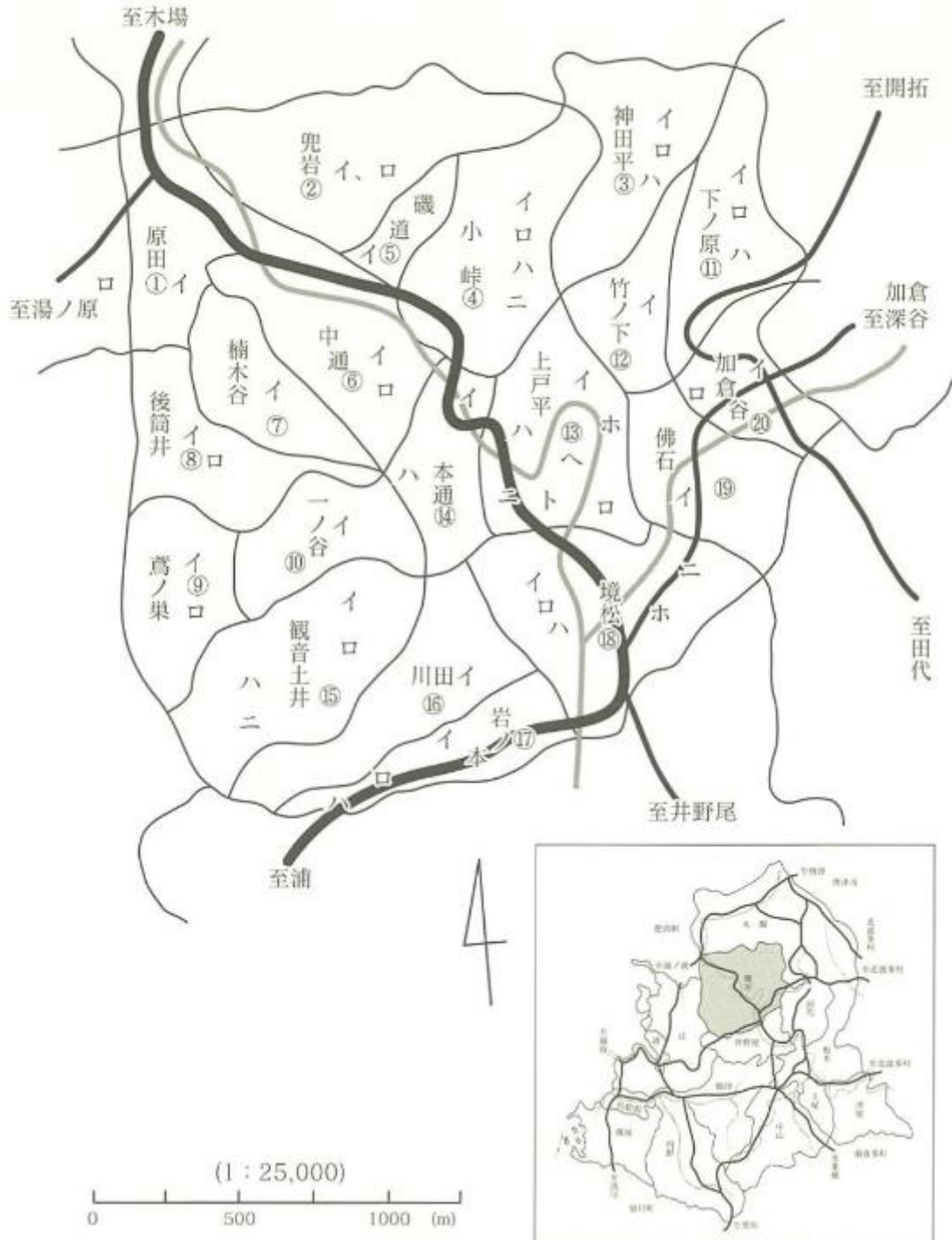
### (7) 開拓団を指導した木須清司

氏は、市内木須町出身、終戦により復員後、緊急開拓事業に希望参加し、幹部訓練を受けて、昭和二十一年二月十八日波多津開拓団に団長として、団員二十名と共に入植されました。氏は人格能力共にすぐれた人でした。団長として進んで団員の相談相手となり、団の発展のため日夜努力され、推されて県の開拓連合会の理事に就任されること数回、常に拓連の発展に努力されていました。

また推されて市会議員に当選されるや、市議会での活動も抜群で、当選三回で副議長に就任され、往くところ可ならざるなき大物と評価され、信頼されていましたが、交通事故により急逝されました。惜しみても余りある痛恨な事故でした。昭和四十八年、齢六十一才、まだまだこれからの活躍を期待されていました。市議会も県拓連も大痛手でした。家族はもちろん、波多津開拓団、波多津町にとっても惜しい人を失いました。

筒井

【筒井】





筒井

番号と 登記地名	説明	生活地名	小字名	日常生活に使う住民の作り出した 地名(カタカナ符号、ひらがな地名)	小字の中の要点
①原田			⑧後筒井	イ、ううぶとり 口、ちいこみ	溜池がある。
②兜岩			⑦楠木谷	イ、うぐいすだに	溜池がある。
③神田平			⑥中通	イ、なむぜ 口、たお	口、麻生四郎宅地跡がある。
④小峠			⑤磯道	イ、くりやま	不動明王堂がある。
				ふだば ニ、ひらんつじ	公民館がある。
				イ、やなぎたに 口、はるべた ハ、 ハ、たかたけ	
				イ、かぶら 口、はさこ	高岳山がある。
				イ、とんまつ 口、かぶといわ	分教場跡がある。
				イ、はるだ 口、きょうだいぼとけ	六地藏の石造物がある。 口、兄弟佛

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑨ 鳶ノ巣	イ、とびのす 口、かないしはる	市有林の側
⑩ 一ノ谷	イ、うしがみさま	牛頭天王 <small>こづうてんのう</small>
⑪ 下ノ原	イ、いしはるだ 口、よせまち ハ、さるくら	高岳山の下
⑫ 竹ノ下	イ、たけのした	上戸城趾の北側
⑬ 上戸平	イ、こうしんさま 口、さきぐち ハ、でんうち ニ、まつもと ホ、 びしゃもんさま ヘ、たしまじん しゃ ト、ろくじぞう	上戸城趾がある。
⑭ 本通	イ、ぶつと 口、かんじや ハ、こ うじ ニ、ろくじぞう ホ、いぼい しじぞう	
⑮ 観音土井	イ、かんのんでえ 口、ながさこ ハ、こうのす ニ、まつうら	

小字名	生活地名	小字の中の要点
②⑩ 加倉谷	イ、かんねがさこ 口、かまだ	
①⑨ 佛石	イ、きたむき	
①⑧ 境松	イ、いわんもり 口、どうで ハ、よこまくら ニ、なかばる ホ、らんばる	イ、洞窟がある。
①⑦ 岩ノ本	イ、いわんもと 口、いざかり ハ、いけだ	
①⑥ 川田	イ、とまき	

集落の中央を曲がりくねって流れる行合野川の両岸に沿って田畑が開け、さらに東の加倉川の流域にも、西の後筒井川流域にも細長い耕地が三か所にかけています。耕地面積は波多津の東部で一番広く、農業の面では最も恵まれています。総面積は三・四haの集落です。

明治の初期に置かれた筒井・木場境のとんまつ（飛松<sup>とびまつ</sup>）。分校跡地から曾畑式土器や、磨石<sup>すりいし</sup>、石鏃等古代人の生活用具が発掘され古代人の住居遺跡と認められています。

一方、現筒井公民館の庭にある六地藏をはじめ、境松墓地の六地藏、イボ地藏、石造文化等から考えても、筒井は古い時代から人が住みつき、この地方の先達の文化をもっていたのではないかと思います。

筆者は幼い頃、むらの故老から遠い昔源頼光公が家来の渡辺綱と共にわが村にやってきて、館邸を築き、この地方一帯を平定して、また京都に帰っていかれたこと、大江山の鬼退治のこと、筒井順慶のこと、唐津かんねのとんち話などを聞いて胸を躍らせたものでした。



筒井公民館

### 一、城後城とその周辺

この城の築城について松浦拾風土記には、六十二代村上天皇の代天曆三年（九四九）岡本山代守是吉（北面百騎司）と山上十五左衛門（藤原鎌足の孫で北面の組頭五人の中の一人）が、城後城を開いたとありますが具体的なことはわかりません。尚、城のある地名が上戸城平だから、上古城と書いた方がよくはないかと言う説もあります。

註 松浦古事記その他郷土資料について、編著者の吉村氏は「我松浦の地は、史跡・伝説の地であり、又名勝詩歌の国であるけれども、之を伝える古書、古文書の遺存するものは甚だ少ない。遙か後人の作に成る松浦古事記・松浦拾風土記・松浦記集成・その他二・三記録の残存するものでも、虚構妄誕採るに足らないものが多くある。然し、これらを措いて松浦史研究の資料で外に残存するものはない」と苦しい胸中を述べておられます。読者としても心して読んでください。波多津の独自資料は現物の残存するものの外、書類資料に至っては、明治以降でも極稀な有様で、郷土の実態を把握できなかったことは、慚愧の至りに堪えません。



### 城後城のあった山

私は少年時代に祖父から聞かされた頼光と綱の武勇談や筒井順慶の出世物語りの感動や夢を、祖父の年をはるかに越したいま、なぜか思い出しています。

松浦源氏の遠祖源頼光は正暦年間（九九〇年頃）肥前守に任ぜられて当国に下り、渡辺源吾綱も源頼光に従って松浦の地に下り筒井村に屋敷を構えたとあります。主従は満三か年ほどこの地に住んで、後年松浦党発展の基礎を築いております。近年渡辺綱の筒井居住に疑問の説がでていますので住民としても今後注目研究の必要があります。

後三条天皇延久元年（一〇六九）渡辺綱の曾孫源新太郎久は、肥前国宇野御厨荘の<sup>けんぎょう</sup>検校となり今福の加治屋城に居を構えました。ここで久ははじめて松浦を称え、松浦源氏の祖となり、上・下松浦の広大な領土をもつようになりました。

次男の持<sup>たもつ</sup>を岸岳に分家させ、同地に築城して波多氏を名乗り、周辺警備の任にあたらせました。家臣岡本山代守を筒井にやり天暦三年上戸に築城し、東松浦半島海岸の警備の拠点とし、外敵襲来に備えました。上戸城に登ると、福島・鷹島まで一望できます。

城の後は断崖絶壁で最良の地です。家臣に鶴田太郎左衛門、田原三太夫、家老松尾左近太夫がいました。鶴田太郎左衛門の墓は庚神墓地にあり供養は現在鶴田勝がしています。現在筒井の田原松尾の祖先とは判らない。庚神墓地のすぐ下の広い畑を上戸城の寺跡といひます。もとは茅葺きの祠があり阿弥陀如来像二基が祀ってありました。現在はすぐ下の道路脇に岸岳末孫の五輪塔と共に安置されています。寺跡に小さな祠を建て田原藤雄が祀っています。

そこから一〇〇m位川下に上戸城の守護神が祀ってあります。これが田嶋神社です。





## 田嶋神社

参道の頂上に順慶松がありました。大正十年村道改修のとき、木挽の田中鹿造翁が切り倒しました。その松皮を家宝として保存していましたが、家屋改築のおり、なくなったといひ伝えられています。木の周り一丈をこす松であったといひます。

順慶は俗名を丈之助といひていました。才知万能に富み家貧しくとも筒井山代守の落胤でありまして、土民耕作に陥ってはいましたが、

「お願いします。暫く暇をください。都にのぼって家名を興し、孝節をつくしたいと思ひます。」と両親の許しをえて十八歳のとき筒井を後にしたといひことです。順慶松はその旅立ちのおりに植えた松といひわれています。後に大和国郡山の十八万石の城主となりました。豊臣家の家臣石田、福島、加藤、小西、蜂須賀等数多くの武将の中の一人として信望があつたといひわれています。

田嶋神社の第一の鳥居のすぐ左横に重さ一〇〇kgを越える丸い力石ちからいしがあります。明治・大正・昭和を通じてこの力石をあげた者は田中元四郎翁一人といひのです。元四郎翁には北波多の恵木に伯母がいました。その伯母の葬式に米俵一俵をかついで行つたほどの力持でありました。昭和十六年六月八十四歳で亡くなりました。





## カ 石

第二の鳥居を登り上がったところの左・右に雌雄の駒獅子が建ててあります。これの材石は筒井の高岳の石で部落民総出で狭い山道を運んだといわれます。明治三十二年二月に建立されました。石工は東松浦郡値賀河内の徳永利平親子となっています。

拝殿横の小高い所に「土佐殿の松」がありました。大正十五年の台風で倒れ、幹は残りました。この幹に残った腐蝕土は菊栽培の培土に使われているようです。「筒井に土佐殿という人あり」と記されていますが、上戸城の家臣だったのか、松浦残党だったのか判りません。木の周りは一丈余りあったといわれています。

拝殿には数多くの古い絵が奉納されています。里見八犬伝、川中島の戦、壇の浦の合戦、熊谷次郎、敦盛、後醍醐天皇と名和長利、仁谷之四郎と亥獅子退治、神后皇后の朝鮮出征、織田信長と豊臣秀吉、桜井の役の楠木正成の親子の別れ等々です。村長麻生四郎の奉納された絵もあります。また、昭和十四年より筒井の小学生女子による御神楽舞が奉納されています。この行事は半世紀続いています。



田嶋神社に奉納された絵

## 二、青壮会

筒井には青壮会という三十五歳以下の会があります。大正二年に発足し以来七十有余年続いています。毎年、盆、正月に総会を開き、部落の発展に貢献しています。行事もいくつかもっており、その一つとして青壮会主催で毎年三月の彼岸に敬老会・物故会員やこれまでの戦で亡くなった戦死者の慰霊祭を実施します。本年で七十七回目に当たります。一般に老人軽視や戦死者の遺族に対する感謝の気持ちが薄らいでいくとき青壮会によって漸く保持されている始末です。

公民館広場に昭和二十九年、青壮会の資金により忠霊碑が建てられました。古川美年が会長のときでした。青壮会の創設者はいまは亡き松尾茂資で、現在は会員三十二名、宮崎智が会長を勤めています。

## 三、子供会

子供会には、幼稚園、小学生、中学生が入り三十年前に結成されました。子供会育成会長の指導で毎月一回、例会をもっています。昭和五十四年には、この子供会の健全育成が認められて全国表彰の栄に輝いています。行事としては、十月の亥の子祭りがあります。中学生以下の男子が、初息子の生まれた家をまわって亥の子石を句説きながら搗きます。搗き終わると接待を受け、その家の初息子の無病息災を祈願します。子供たちにとって楽しい行事です。

## 四、みかん園造成

昭和三十五年、第一次農業改善事業が行われました。みかん園造成です。総事業費七千五百万円。

配管施設や農道の建設工事が行われ、昭和三十九年に完成しました。そのお陰で昭和五十年頃には米代金を越す収入が得られるようになりました。現在では量より質に変わり斜陽化しつつあります。それに代わって、ハウス蜜柑、施設キュウリ等に切りかえられています。

## 五、行政と小学校設立

行政面では村長麻生四郎、助役古川団兵衛、村議古川音造、奈良崎儀三郎、市丸広吉、市議奈良崎儀三郎等が村や市の発展に貢献されました。

学校関係では、市制発足と同時に統合が計画され昭和三十年四月に波多津東部の大平小学校と波多津小学校筒井分校が統合されました。当時の大平小学校長藤田平太、伊万里市教育委員松尾茂資の尽力と校区民の協力によって、一時は難しいと思われた統合が実現しました。校名は伊万里市立波多津東小学

校。

その後、校区内に幼稚園設立の話が浮上してきました。教育は小学校からでは最早おそいという観点から、当時の市長山口正次の英断により伊万里市立波多津東幼稚園が開園されました。お陰で都市並みの幼児教育ができるようになりました。

#### 六、橋について

筒井を流れている川は曲折が多く、従って橋が何箇所も必要でした。大正十五年の村道改修以前は、原田川、下川、田島川、加倉川を渡るのに橋もなく、いずれも飛石伝いに渡っていました。その後徐々に橋が出来ました。石工森野広右エ門によって石橋ができました。当時はすべて人力によりましたから苦勞の程が偲ばれます。昭和三十年頃まで村道が幹線道路でありました。東西を結ぶ道路は鶴掛峠をはさんで険しい山道で、自動車は勿論、自転車も使えぬ細い山道でした。役場に行くにも、学校に行くにも、会合に行くにも徒歩で小一時間は要していました。昭和三十九年に、当時の参議院議員杉原荒太、山口正次市長の尽力によって国道に昇格、以来、バス、車等自由に通行できるようになり、最早僻地ではなくなりました。

#### 七、公民館

始めの建物は昭和六年に建てられました。当時の建物としてはユニークなもので、廻り舞台を仕掛けてありました。その頃は年に一回芝居が興行されて、近郷近在の人々の楽しみの中にもありました。公民館のすぐ横に六地蔵(弘治三年造)があります。青年団の主催で盆の二十四日の晩地藏祭りが行われます。地藏祭りでは子供会、青年団、婦人会による盆踊りや、ビールの早飲み競争など盛り沢山の催物があります。



弘治六地蔵

#### 八、お諏訪さん参り

明治・大正・昭和の初期まで、最大の慰安旅行は浜崎のお諏訪様参りでした。苗代の稲蒔も終わった農繁期前、マムシにかまれないようにとお諏訪様に祈願に行っていました。約二十kmの山道を歩いて一日がかりでお参りをしていました。その日は朝早くから弁当を作り、老若男女そろって出発していました。女は着物、下駄を風呂敷に包み、草履をはいて、世間話をしながら熊ノ原の魚屋まで歩いていき、その魚屋で昼食をとっていました。女性はそこでお詣り着物に着替え下駄をはいて、大手口の駅から十五銭の切符を買って軌道に乗って浜崎まで行っていました。木製の松浦橋を通る頃から疲れも忘れ、

みんなの心は弾んだものでした。

二軒茶屋で松原おこしを買ったり、浜崎けいらんを買ったりしたものでした。当時の小遣いは、普通七十銭、多く持っている人で一円ぐらいでした。

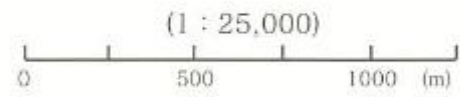


お諏訪参りの衣裳



井野尾

【井野尾】



井野尾

小字名	生活地名	小字の中の要点
番号と 登記地名 説明 ①二 杉	日常生活に使う住民の作り出した地名(カタカナ符号、ひらがな地名) イ、つるかけ ロ、あぐりやま ハ、ししのくち ニ、やぶがさこ ホ、かけはしたに ヘ、えのがさこ	地名のいわれ・史跡・遺跡・お宮・お寺・文化財・公共設備・交通設備など イ、国道二〇四号線
②畑津道 <small>はたつみち</small>	イ、おてこば ロ、やさぶろうだに ハ、うさぎだ ニ、あかふち ホ、みなんたに ヘ、だるこば ト、なかお	地藏堂 やさぶろう溜、おてこば溜 庄屋敷跡
③前田	イ、こんげんばる ロ、やまなかみ ハ、かんばる ニ、いたんはる ホ、のうてみち ヘ、きょうづかした ト、ううたじり	ロ、山神権現小社 和田津見神社 堂 海童神社



小字名	生活地名	小字の中の要点
④木場山	イ、かみのさかいまつ ロ、きようづか ハ、うえんこぼ ニ、たおんかけ ホ、とんのやま へ、こばやま ト、おおさこだめ	イ、上の境松、井野尾駐在所跡 農協井野尾出張所 農産物集積所 庄屋の墓所 大坂大溜池 地藏塔
⑤大坂	イ、たおんかけ ロ、いもほり ハ、かのかさこ ニ、おうさこだめ ホ、よこばたけ へ、おうさこだめに	大坂大溜の上の重溜
⑥御岳	イ、みたけ ロ、やなぎんだに ハ、あくたに ニ、みきれた ホ、もりで	御嶽城跡(不明) やなぎだに溜池
⑦山口	イ、やまぐちだに ロ、かわんたに ハ、うしがみ ニ、さるくら	牛頭天王
⑧鳥居原	イ、しものさかいまつ ロ、たしろうえのはる ハ、のりこし ニ、とりいばる ホ、どうんわき へ、かんじや ト、しみずのもと チ、み	下の境松 一級市道津留(木場線) 天照皇大神、氏神三王権現小社堂、日枝神社、大山神社、薬師観音堂、六地藏大菩薩塔、馬頭観音、八龍大明神小社、清水郷、清水川、伽藍堂、五輪塔、公民館

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑨通谷 <small>とあり たに</small>	ずごうり、り、しみずがわ、又、じ んじや イ、すすきだしろ、ロ、ささみの ハ、かわらやきのたに、ニ、ひやく だ、ホ、もちだんたに、へ、はじん たに、ト、どつたに	古川喜和人翁像 一級市道通谷線完成通学道路
⑩黒田代	イ、ぜんさの、ロ、うつとんたに ハ、いわんした、ニ、さかどう、ホ、 いしわりだに	坂道(板木―井野尾線の近道)

## 井野尾

### 一、井野尾の現状

井野尾は伊万里市の北部、南東方向に流れる行合野川に沿う集落で、交通の要所でもあります。

現在は、農協出張所に関連施設も完備（農産物集積所、共乾場、農産物出荷所、農機具材倉庫、ガソ

リンスタンド等)、販売部で日用品まで販売しています。

集落の前方に三岳を仰ぎ、その清涼雄姿に感動を覚えます。

狭隘な田地を努力して活かし、小規模ながら米作を主体に、麦作、豆作をし、副業に肥育牛の飼育、蔬菜類の「ハウス栽培」に励んでいます。

主たる米作が減反で収益が減り、農業は兼業として若手の会社勤め等によって生計を保っています。集落の田地面積の狭小な上に減反で米作ができないことは残念なことです。

田地狭小の訳は、大昔御岳（嶽）の火山活動で噴出した土砂が流れ込み多数の谷間ができ、その地を開田したので狭小田となったと考えられます。町内で狭小田の一番多い地区であり、労多く手数はかかりますが、地区民の努力によって米の収量は通常平均量が収穫できています。



井野尾公民館

## 二、井野尾地区の歴史

慶安元年（一六四八）幕府領、同二年から唐津領板木組に属していました。元和検地時は、中川左近の知行地で、村高は二〇三石余、文化年間頃の田畑高二四一石余、畝数十三町八反余、家数三十三軒、人数一五七人（男八八人、女六九人）、馬十三頭、牛十八頭、鉄砲一挺、威筒一挺の記録があります。

「井野尾」とどうして呼ぶようになったか、資料もなく確かではありませんが、御岳の裾野、長尾に「清水の元」「清水郷」と呼ぶ小字があります。古老は「清水の元より「清水郷」の地下に湧き出る清水は無尽蔵である」と言っており、良質で多量なことは近郊に知れわたっておりました。昔は飲用水不足の年には遠く上場からも担桶で汲水にきていたようです。

こうした清水を飲用し、御岳を仰ぎ、裾野を開田して豊かな村となるようにとの願望から、「井野尾」と呼ばれるようになったと推察しております。

清水郷の水量の多いことは、田中酒造の米磨水を大木箱で運んでいましたが、しばらくすると、前どおり溜って、いっこうに減らなかったと聞いております。

井野尾は、昔から農業が主ですが、その間稼には、男は苫・藁細工、女は木綿細工、近世では、和紙漉き（白保・範紙・京華紙）をしていました。製紙は労多く利益の少ない仕事ですが、雨の日も出来るという利点がありました。しかし、今は誰もやっていません。

### 三、水利について

天正年代ころの井野尾村の田地畝数は、十三町八反余、水利は四か所の溜池により五町歩余を灌水し、五か所の井堰により七町余りに灌漑していたようです。昔の灌漑用井堰は、井野尾本井堰＝加倉川と筒井川の合流した水を貯水し、必要量を灌漑。横枕井堰＝筒井川水を筒井と井野尾と共同で灌漑。上原井堰＝筒井川水を筒井と井野尾と共同で灌漑。板原井堰＝筒井川水を井野尾前田の権現原に灌漑したもの。黒田代井堰＝井野尾川水を黒田代に灌漑したものでした。

昭和五十六年土地改良事業（圃場整備）と河川改修（全長両岸）を並行して造成した為に水害も免れることになりました。水利良好となったので堰の数も少なくなり、現在では井野尾本井堰、横枕井堰、黒田代井堰の三井堰で灌漑できるようになりました。

また、井野尾には大坂谷に大溜池があり、二回嵩上げした為に以前の倍以上、六万tの水量を有するようになりました。前田の分は水不足の心配は解消しましたが、山田については出水に頼らざるを得ず、依然として早魃の年には水不足となります。

当地区は飲料水、灌漑用水ともに恵まれていると思います。昔、当地区では大方の家が製紙をやっていましたが、製紙には先ず水が大切で、清水で漉いた紙ほど光沢があると聞かされていました。自分の手漉き紙の仕上りを見て、水の大切さを実感したものでした。

### 四、橋梁について

●裏ノ川橋＝向通り道へ架橋されていました。橋と言っても長角の「石橋脚」の上に板石を載せた低い橋で、水位が一米もあがれば渡れなくなりました。後に堤防の上に大丸木を二本渡し、その上に厚板を載せ、手擦りを付けた丸木橋を渡っていました。

●境道橋＝境道への橋も、川面より一米余りの高さに長角の石板を積み上げた橋脚に板石を載せた低い橋で、大雨の時は渡れないので、田代迂回で子供の頃通学していました。後に橋が流失したので丈夫な石橋に架け替えられ便利になりました。

●通り谷橋＝中山へ通じ、南波多、伊万里方面への交通が便利になりました。

いま、一つひとつの橋に、地区民の願いと努力のあとが偲べれます。

### 五、伊万里市農業協同組合井野尾出張所

●昭和十二年十二月 波多津村産業組合第二事務所設立

後に木炭販売所、製紙組合、精米所を併設

産業組合第二農業倉庫建設（井野尾鳥居原）（建築年不詳）

後に現農業倉庫地に二度建替えられ現在の倉庫となる。

第二事務所も二度建替えられ、現在は名称も伊万里市農業協同組合井野尾出張所となりました。

### 六、記念塔とまつり

●古川喜和人翁記念塔

翁は修験者として弘法大師お巡りを発起、お巡りの大先達を務められました。また、夏祈禱も翁により執り行われました。記念塔は大正十四年八月建立。



古川喜和人翁記念塔

- 弘法大師講  
毎月二十日夜、家回りで御詠歌を唱え参詣さんけいしています。後、茶菓の接待を受け語らい合っています。婦人がほとんど。
- 弘法大師めぐり  
大先達（巡礼の先頭）古川喜和人、先達 古河熊五郎・田中駒吉・井本東三郎・市丸徳右衛門・奈良崎敬太郎・高田幸作・田中米倉全戸が講社員、昔は五人組で一泊し参拝していました。
- 太宰府天満宮飛梅講社  
●祐徳稻荷神社参拝  
正月に一泊して旅館の温泉に浴し憩いの一時を楽しみとしています。
- 鬼火たき  
正月七日に門松飾を焼き、餅を焼き厄除とし焼餅を食べます。





## 鬼火たき

- もぐら打ち
- 初午祭り
- 苗代ごもり
  
- 諏訪神社参拝
 

正月十四日、子供達は初嫁の尻叩きに行き接待を受けます。甲城稻荷社に参り、五穀豊穰、家内安全を祈ります。五月には苗代拵えをし、苗代ごもりをして豊作を祈り家内繁昌を祈ります。

初時むみまきの後参拝し五穀豊穰、家内安全を祈ります。宮前の飲食店で鯖豆腐、蒟蒻きつたを雑多煮して全員で飲食し満喫。「浜崎けいらん喰わねば帰らん」と言って、けいらんの甘さを又満喫したものです。
- さなぶり
 

田植が済んだ後日、田植祝と加勢の方々への慰労を兼ね宴を盛ってお礼としました。若者は青島田嶋神社参拝に小型船を仕立てて、楽しい船遊びもしていました。一つには、若者の田植慰労でもあったのです。
- 七 夕
 

盆前の七日、朝早く露を採って来て、その露を墨汁と成し、色紙に書いて笹竹に吊し庭先に飾り、盆の前日には川に流しました。
- 二十六夜待ち
 

八月二十六日の夜中に三岳に登り、中腹（昔城があったところだろう）で月を拝み、その後二十七、八日組々で祝宴。現在も続いています。
- 夏祈祷
 

田植えが済んだ後日（できるだけ近い日に）部落民全員の無病息災を祈願し五穀豊穰も併せて祈願します。
- 盆踊り
 

二十四日地藏菩薩祭りの時、青年男女、婦人会、子供が合同で大きな輪になり、音頭取、句節歌、歌謡に合わせて踊ります。昔は、笛、太鼓、鉦を打って音頭に合わせていました。（鉦はきょうしゅつ供出されて現在は無い）
- 秋祭り（くんち）
- 亥の子
 

氏神を祭り来客を饗なす。部落の祭日は十一月六日でした。初亥の日「亥の子餅」を搗き、子供達は全戸の家を回り石搗きをします。特に初嫁の家では、力いっぱい搗きます。（初嫁が良く坐るようと）その後で接待を受け、餅を貰います。貰った亥の子餅の分け方法は、歳かたの順に数も順々に一個ずつ多少に分けます。少なく貰った子供も、来年は多く貰えるんだからと喜び、賑やかに楽しんでいました。



## 七、娯 楽

春先や秋口には、浪曲や芝居が、他の地区よりずっと回数多く催されていました。

浪曲では、初代天中軒雲月師（十五・六才）、梅中軒鶯童、春日井梅鶯、寿々木米若等々の巨匠が来井され、熱演に魅了されたものです。特に初代雲月師のときは、日本一の浪曲を聴こうと、地区の娘達は、髪結いから衣裳揃えと大忙しだったと聞きます。近郷から多くの聴講者がきて、雲月師の美声を満喫したと伝えられています。

また地区民は根っからの芝居好きで、中でも真の愛好者は、一人で来演の契約をしてきて、「さあ、芝居だ、仕事を止めて芝居の用意をしてくれ」と、地区の婦女子を困惑させたこともありました。しかしそこは芝居好きの地区民のこと、忙しや嬉しやの思いで、重箱・十人弁当箱・酒等、楽しく用意して芝居見物に間に合わせたそうです。来井された多くの役者の中でも、名匠市川海老十郎（八十五才）の立舞には、多くの人が感銘を受けたと聞きます。

こうしたことで、井野尾には、芝居の小道具の屋台・建具・花道・格子戸・潜り戸・垣根・燭台・行灯・垂幕・中幕等、一通りはいつでも間に合うように用意してありました。昔は娯楽といえば、浪曲・芝居ぐらいでした。

## 八、波多津東部医院井野尾診療所

明治の中頃から井野尾村にはお医者さんが居られたようです。初めは木場山の高田為蔵家の上段の屋敷のようですが、数年後には同じ木場山で地区の中央付近に、更に移転して現公民館前の元庄屋の離れ座敷を改造して診療所とし、診察治療に勉めてもらっていました。初代は分かりませんが、お医者さんの氏名を記載しますと、

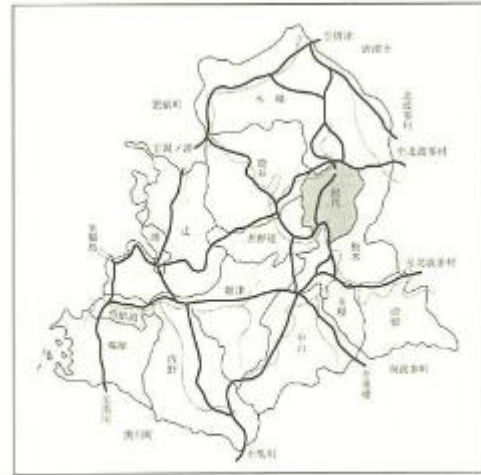
- 渋川市治郎 一見近寄り難い人のようでした。
- 平川七三郎 趣味は川魚取り（投網）、七面鳥飼育と多才な人。
- 田原 匡 先生は週に一回位の診療で、目立った記憶はありません。
- 坂本又次郎 気軽に何時でも「ハイ、ハイ」と早速来診してくれる親切な先生で近郷の人からも親しまれていました。
- 坂本 栄 誠実懇切、親身になって診療に尽くしていただきました。
- 山田 茂實 南波多原屋敷から何時でも乗馬での往診、名物先生で親しまれていました。
- 岡村 三夫 軍医を勤めた先生は質実剛健、一見近寄り難い面もあったが、真は本当に懇切親身に診療していただきました。
- 世戸 篤信 七山村から来ていただきました。元々伊万里の世戸病院と親族。誠心誠意地域医療に尽され住民から信頼されていました。
- 今村 守屋 先生は波佐見出身。とにかく勤勉で、苦学成った努力家でありました。お父様の協力もありましたが、診療の傍、兎を飼って研究に当り、医学博士号を取得されました。誰にも気易く親切で、オートバイでの往診が思い出されます。現在唐津で開業されています。
- 泉田 行男 医療には誠実懇切、住民の信望も厚く感謝していました。現在は東長崎で病院を開業。
- 今村 信雄 先生は東部診療所最終の医師でしたが、人格円満。誠意を以って尽していただきました。地元からの要望で帰郷されましたが、住民<sup>こそつて</sup>感謝しています。

## 九、井野尾駐在所

昭和二十一年一月五日設置されました。昭和三十四年九月、井野尾駐在所が乙種となり受持ちが波多津駐在所と統合され、昭和三十六年六月井野尾駐在所は廃止となりました。

田代

【田代】



田代

小字名 説明 番号と 登記地名	生活地名	小字の中の要点
①ドウゲン	イ、なかたけ ロ、うめのきだに ハ、だいどうげん ニ、こどうげん ホ、ひのくつた	(筒井、田代、板木、津主、中山地区)
② <sup>フ</sup> 作 <sup>チ</sup> 道 <sup>チ</sup>	イ、おろしばた ロ、かねがさこ ハ、おおさこ ニ、おおぎまつやま	扇松山、大きこ山、林道
③フウズキ 木場	イ、ながお ロ、いけばなのつじ ハ、しゃれんやま ニ、ひらこば	池場の辻、長尾道 サイレンの山
④柳の内	イ、せんかんね ロ、はなぐり石	ハナグリ石、カツタマキ川、溜池、中岳川、荒平、ウト山
⑤後の谷	イ、ふたまたさこ ロ、あずきこば ハ、あらへら ニ、はつちやばたけ	ニ双さこ、アツキ木場、後の谷川

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑥大平	イ、おとじろうやま	音次郎山 三嶋神社、権現様、田代公民館
⑦下ノ原	イ、しものほら	
⑧中ノ原	イ、なかばる	
⑨上ノ原	イ、いのこぼり ロ、きょうのやま ハ、えんしょうこうたいじんぐう	野佛様 (石造物)

## 田代

### 一、集落の地勢

行合野川が釈迦堂の岩壁にさえぎられて、大きく方向を変え、南から田代に流れ込んでいます。一方、集落の中央、柳ノ内の窪地全面に掘られた大溜池から流れる田代川がこれを迎えて、流れはやや太

り、田代の田をうるおしています。

三方が山に囲まれた小さな集落で、総面積も〇・八k㎡に過ぎません。「田代とは、古くから水田が開かれ、稲作が行われた所につけられた地名」とは聞きますが、何しろ耕地面積（後述）が狭く、昔から「田代は百人以上は食わせきれない、百人までが精一杯」とも言われており、耕地の狭さが田代の宿命とも思われます。

因みに、唐津藩時代、文化年間（一八〇四～一八一七）頃の田代の農地や人口は「田畑高一二石九斗六升・畝数七町一反五歩半・家数十七軒、人数七十八人、牛馬各五疋」とあります。

## 二、田代の現状

田代は、戸数二十一戸、人口一〇三人、田七・六八ha、内圃場整備がされていない田が一ha。畑約一ha、山林六十六・一haです。前述のように、耕地が狭いことや減反もあることから、営農には種々配慮され、水田のほか、胡瓜〇・九六a（六戸）梨園六・一ha（五戸）が作られています。（平成四年現在）

## 三、社寺と石造物

### （1）三島神社

字大平にあります。以前は下ノ原の道路山際にありましたが、明治四十年板木の田嶋神社に合祀され、その後境内はそのままでしたが、現在は市道が通り跡形もありません。現在大平神社入口の鳥居は、下ノ原にあった鳥居を移設されたものだそうで、前後して社殿が建てられたものと思われています。

下ノ原にあった頃は、毎年春秋に大祭があり、特に春の大祭には宮相撲や芝居、浪曲等も催され、出店もち、近郷からの参拝者も多く賑わっていたそうです。今は各戸一名が参拝しています。

現在の三島神社には、神様と観音様・地藏様が祀られ、神仏合祀の特殊な神社です。以前この敷地には、観音様が祀られており、この適地に神社が移転されたからだと推察されます。祭日は一月六日の年中願と、七月上旬、五穀豊穰と身体安全の茅の輪くぐりが行われる夏祈禱があります。

### （2）三島神社の大杉

境内にあった大杉は、波多津町で唯一の県登録名古木で、樹齢三〇〇年と登録されていましたが、昭和六十二年九月の台風で倒れてしまいました。前面の石垣より一・五m程奥に埋まっているそうですが、切株をみると、樹齢五〇〇年以上とも推定されます。今は代わりに植えられた幼木が育っています。

### （3）弘治六地藏

三島神社にあるこの地藏様（大小各一体）は、市内で二番目に古いものとして折紙がつけられていましたが、昭和四十六年、小さい方が盗難にあい一体となりました。後に村中で一体が再建されています。

弘治年間（一五五五～五七）頃から六地藏を祀る風習が盛んになったそうで、残った一体も、その頃建立されたものと思われていますが、無銘で明らかではありません。祭りは、八月二十四日、青年会主催で飾り付け、酒肴を用意して参詣者をもてなしています。



三島神社の六地藏

(4) 権現様

田代下組の中程に権現様の森があります。古老の話では、岸岳城主波多三河守の没落により、その家臣長坂淡路の守が、郎党十四人を引連れてこの地に来たり、自害して相果てたと伝えられています。現在は五輪塔一基、数ヶ所に石塚があります。この墓地に、大正五年、管理者福野善四郎により、正真権現と銘うって石碑が建立され、命日には下組の人達が酒肴をもって詣っていましたが、現在は福野定治が管理し、花を手向けています。

(5) 五輪塔群

字中ノ原の中央部一帯は、元田代村の共有墓地で、多くの五輪塔や石塔がありましたが、開田とともに二基だけが残され、多くは近くの山麓に積立ててあります。言い伝えによると、「おせん」「おまん」という姉妹で、移転される時、「私達はここから動きたくないの、ここで祀って下さい」と言った由、この仏様は靈験あらたかで、お詣りすると願が叶えられると聞きます。谷崎清が管理しています。

(6) 柳ノ内の大溜池

元<sup>(一六八八～一七〇三)</sup>禄年間の築造といわれ、水面は約一・二五ha、貯水量は五万t、田代の田をうるおし、住民を生かしてくれた命の源です。だから、この堤にまつわるいろいろな伝説が語られています。

万<sup>(一八六〇)</sup>延年間、唐津藩水奉公によって、横樋の取替工事があり、田代中の老若男女に出夫が命ぜられました。その工事中、誰かが「この横樋はイチイ<sup>かし</sup>樫で作られている」と言い出しました。ところが、役人は「一六〇年も前のことがわかるものか」と信用しなかったが、掘り出してみると、確かにイチイ樫だったそうで、役人は衆知の確かさと、大溜の重要性を改めて認識したということです。



### (7) 溜池地蔵と祈禱師乗園

前述した溜池の上、道路脇の桜の根方に、一基の地蔵様があります。「大日秀水童男、一太郎七歳、天明七年未三月二十七日、乗園」と刻銘されています。

ことは今から二〇〇年程前のこと、当時一太郎という七歳の男の子が、過ってこの溜池に落ちて亡くなりました。乗園は懇に弔ってやりました。ところが、まもなく一太郎が乗園の枕元にたち、「今後、この池に溺れて死ぬ人がないように、仏となって守るから、墓を建てて祀ってください」と告げたので、乗園はこの地蔵を建てて祀ったという事です。こうしたことで、現在まで、この池での事故はありません。

昭和六十二年は、一太郎の二〇〇年祭にあたりましたので、四月二十二日法要が行われました。

また一方では、この池を通りかかった男の子が、池のカップと相撲をとったところ、家に帰って急死したので、このようなことがないように守本尊を建てたという言い伝えもあります。

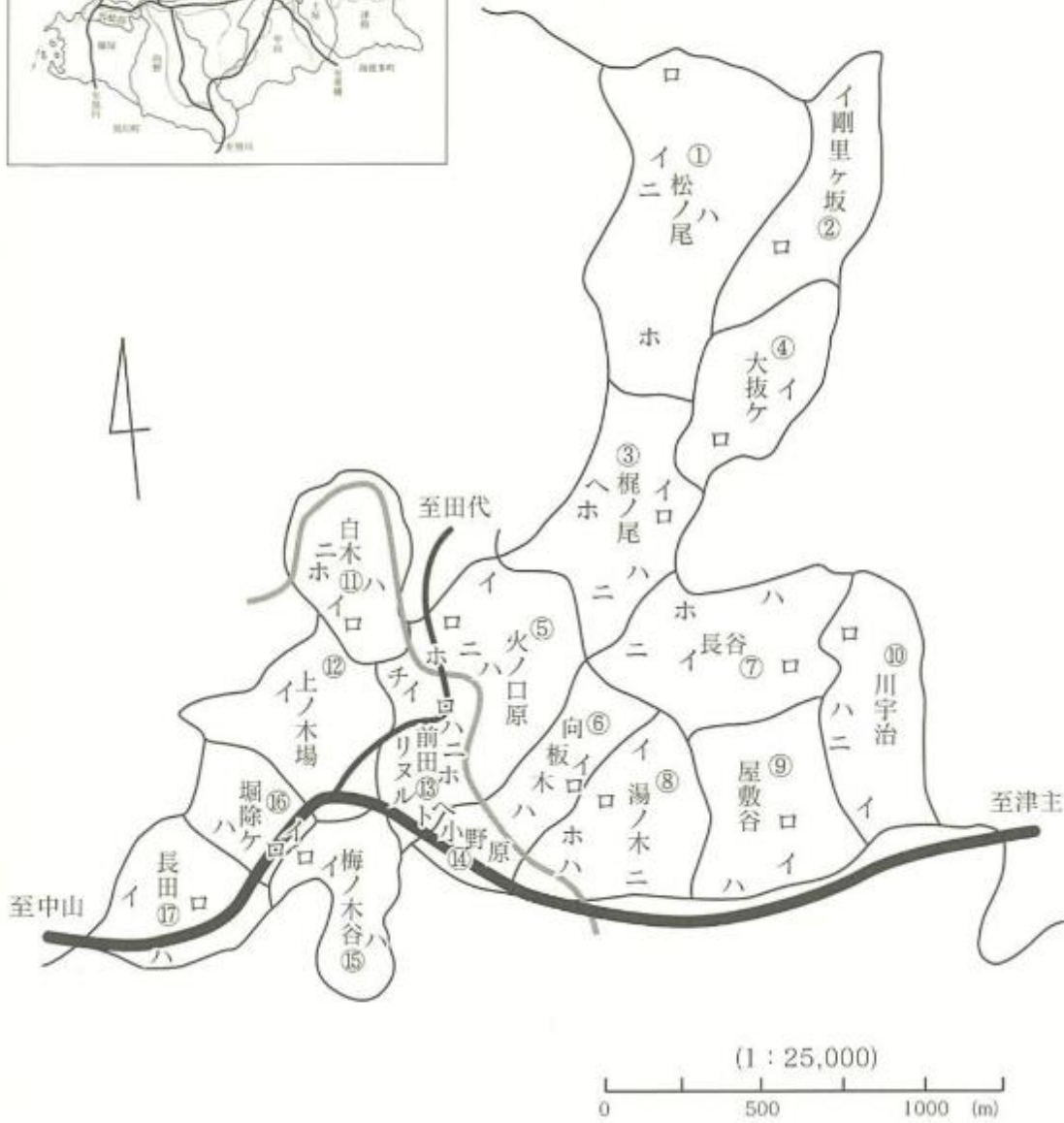
この乗園という人は、どこから来られたのか、その消息はよくわかりません。田代に住みつき、祈禱師をしていたと聞きます。その昔、天明の頃、連日の早天に襲われ飢饉が迫り、村人はほどこす術もなく、乗園様に祈禱をお願いしました。乗園様が一心不乱に祈願されたところ、俄に曇り大雨が降ったという伝説があります。戦後もある時期、村の婦人会が雨乞いをした乗園山のお堂の跡には、墓碑も残り、筆跡も残っていることから、乗園様の存在は、まぎれもない事実と思われる。



溜池地蔵

板木

【板木】



板木

番号と 登記地名	説明	生活地名	小字の中の要点
①松ノ尾		イ、ひらこば ロ、ちやわんがま ハ、あらこだに ニ、まつのだに ホ、たかのす	ロ、大昔、この地帯は地滑り地と言われ、深谷を見おろす高い山の中腹に穴があつて石を投げるとチャワンの鳴るような音をたてていた。
②剛里ヶ坂		イ、とうみたけ ロ、こりがさこみ ち	イ、遠見岳、標高二〇九米、板木で一番高い山。頂上に昔の測量分岐点の標石があり、伊万里市と東松浦郡との境界になっている。
③梶ノ尾		イ、たきのうえ ロ、たきのした ハ、かみがのき ニ、しもがのき ホ、かじの	山の谷間に高さ十五米以上の岩があり、大水のとき水が瀧のように流れるので瀧を中心に上と下へ長い谷間であるので上と下に分かれています。 (下の方を下がのき、上の方を上がのきという)
④大抜ヶ		イ、たかのす(鷹の巣) ロ、まるい しだに ハ、ううぬげのため	この一帯は水害による山崩れの常襲地帯だったのでおおぬげ。 ※恵木との境界が地図の上ではおかしい。

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑤火の口原 くちばる	イ、おとじろやま　ロ、じょうひら ハ、みやんしろ　ニ、ひのくち ホ、ばばのかわ	上平共同墓地 天神様お宮の後方 昔、武士が馬を洗った川
⑥向板木 むこういたぎ	イ、ながたにくち　ロ、ながどうり ハ、なかわたり	板木むらの中心地
⑦長谷	イ、はなばたけ　ロ、おくのこば ハ、えぎだに　ニ、うしのひら ホ、やすみば	ロ、長い長谷の一番奥の場所 ホ、松ノ尾、剛里が坂から仕事の帰りみちにきま つてみんな休んでいた所。 ハ、北波多の恵木に一番近い谷のこと。
⑧湯ノ木	イ、ごうし　ロ、おおつじ ハ、ほげいし　ニ、かんこうじ ホ、さだたに	ロ、山道の一番頂上附近。 ハ、かつて大岩があった。今は河川工事によって 除去されたが地名は残る。
⑨屋敷谷	イ、かおじ　ロ、ながみね ハ、さばくされ　ニ、やなぎのたに ホ、しもんかげ	ロ、小道の通った長い峯が続いている。 ハ、魚の行商人が今にも落ちそうな岩の下を通り えないでいるうちにさばがくさった。



小字名	生活地名	小字の中の要点
⑩川 宇 治	イ、こうもりいわ ロ、さろじ ハ、ひわのきだに ニ、くすのきだに	津留は川氏、板木は川宇治と書いて読みはどちらもカオジ。川道。
⑪白 木	イ、さかど(しゃかどう) ロ、とうげんした ハ、てんじんさま ニ、とうころやま ホ、しいのきのたいぼく	板木と井野尾の境道路の頂上。シイの木の大本(樹齡五〇〇年を有する)の下にお釈迦様と墓地があった。下方に釈迦堂が建っていた。
⑫上ノ木場	イ、うえのこばやま	現在の市有林、昔大庄屋の山林。
⑬前 田	イ、てんじんさま ロ、ばばくち ハ、つきかねふち ニ、がっこうあとち ホ、ひら ヘ、たしまじんしゃ ト、ろくじぞうさま チ、れいえんち リ、こうみんかん ヌ、しょうややしき ル、やくしどう オ、ほうせんじあと	天神様跡地、田嶋神社、薬師堂、霊園地、学校跡地、大庄屋敷跡、公民館 法行城城主及末孫の霊地

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑭小野ノ原	イ、ほうぎよしろあと　ロ、にしの かみ　ハ、このはる　ニ、はちまん さまあと	法行城跡地　八幡神社 法行城、城主の道
⑮梅ノ木谷	イ、かまやき　ロ、ばとうかんぜお ん　ハ、うさぎだに	昔、唐津焼の窯場の跡地 馬の埋葬地
⑯堀除ケ	イ、おべた　ロ、きんだのたに　ハ、 きやあだ	元灌漑用水路の長いよけ(みぞ)があつた。
⑰長田	イ、とおりに　ロ、ぜんしゅうだ に　ハ、みのだたに	中山―畑津―井野尾の境界に関連している。

## 板木

### 一、集落の沿革

板木村は、長い間、松浦党岸嶽城主波多三河守の支配下であり、板木・法行城主の知行でしたが、波多氏没落後は唐津藩領、一時幕府領、慶安二年以降再び唐津藩領となり、板木組十か村の元村として大



庄屋がおかれていました。史書に、初代藩主寺沢志摩守時代、俸禄三〇〇石の古郷孫兵衛の食禄であった、ともあります。くだって文化年間頃の田畑高一八一石余、古高一二九石余、畝数十一町余、年貢率五割七厘、家数二十二戸、人数一一四人、牛三頭、馬六頭の記録もあり、年貢米は行合野土場まで陸送され、波多川を川下げされていたようです。(第四章参照)



集落センター

## 二、法行城

法行城は、健保元年(一二一三)、岸嶽城の支城として波多氏の家臣古河越前守保により築かれ、(松浦古事記には、年代不詳、古家周防守築くとあり)初代城主に久家越前守(古河越前守改め)、以後十七代(十二代とも)続き、最後の城主久家玄蕃允のとき、主君波多氏の没落により廃城となりました。

頂上の城跡は、約七十坪程で、東方に岸岳がはっきり見え、牛神様と皿井大権現の石塔が建っており、五月と十月、牛神様祭りが昭和の中頃まで行われていました。この城跡も、後述するように、今では立派に整備されております。

## 三、板木組大庄屋と庄屋跡

唐津藩政の末端組織で、村々を組合わせて組を設け惣庄屋一名をおき、その支配下の村ごとに脇庄屋がおかれていましたが、大久保加賀守の頃から、大庄屋、小庄屋と呼ぶようになりました。(第四章参照)

板木組の区域は、板木、津留、主屋、中山、田代、井野尾、木場、筒井、湯ノ浦、杉ノ浦の村々で、板木に大庄屋がおかれ組を支配しました。

「北方大庄屋簿」には、「先祖古河光之助、当時彦吉、先祖波多氏家臣古河越前保なり。板木法行城に罷在、其の子孫蕃充計迄、法行城主十二代罷在し処、豊臣秀吉公名護屋に御在建の節、文禄三年波多家藩者の砌断絶仕り、板木村に居住しておったが、玄蕃允(助右衛門か)と申す者が、唐津藩主寺沢志摩守の代に、板木村の庄屋を仰せつけられ、弟伊左衛門成は井野尾村庄屋に、弟権兵衛は筒井村の庄屋を任せられたが、病身のため退役してその村に住んでおりましたる処、その子孫彦吉の父重左衛門が、天明二年黒川の清水村の庄屋に任せられ、文化元年そのあとを仰せ付けられました(一七八二)が、文政二年浜野藩村庄屋に任せられました」とあります。(一八〇四)

大庄屋が何代続いたか、その名も詳しくはわかりませんが、法行城主の子孫が多く任用されたようです。最後の庄屋尼村権治郎は、大政奉還後波多津役場の収入役・助役を勤めています。

その庄屋跡地凡そ六〇〇坪は、当時板木代表者古館四郎左衛門の所有となり、明治末、長男理三郎に

譲渡、昭和三十年頃前田虎夫の所有となり、樹園地として耕作されていましたが、昭和五十八年坂本篤郎に移り整備（後述）されました。

#### 四、坂本篤郎と城跡並びに周辺の整備

坂本篤郎は、大阪豊中市に居住、医業を営み、法行城主の末孫にあたる人で敬神崇祖の念厚く、昭和五十四年頃、法行城跡他旧跡の整備を板木区に申し出られました。区としては快くこの申出を受入れ、以降、平成四年頃までに、巨額の私財を投じて、次にあげる多くの整備が施され現在に至っております。

##### (1) 法行城跡の整備

昭和五十四年、頂上の城跡へ通じる参道の改修と、頂上に城跡の碑が建立されました。

##### 法行城 建碑の辞

嗟我天皇の皇子源融の玄孫渡辺綱、京を下り居を松浦に定めしより、子孫代々、西肥前の城主或は、京の御所の守護職を賜りたり。加治屋城主松浦源大夫判官久の弟渡辺源大夫博は、白河院北面龍口の惣官たりしが、其の孫渡辺長七唱は源三位頼政に従いし為、頼政公自刃後、下総古河に致りて閑居、其の子渡辺源大判は族たる肥前城主松浦に還向、禄を奉じ波多郷に上居して古河越前守と号せり、法行城はその五代孫古河越前守保が元寇の役後、本城たる岸岳城の出城として此処板木の庄に築城せるものにて、初代城主保は是より姓を久家越前の守と改めたり。

以降代々城主久家玄蕃允計は、主家波多三河守親が秀吉公の勘気を蒙りしに連り、文禄三年二月竟に城を棄て野に下り久家七右衛門督と改名せり。その子久家助右衛門明は、慶長四年、唐津城主寺沢志摩守の命に依り板木村庄屋、その子政は山口村の庄屋に任ぜられ、山口と改姓、爾後八代に亘り椿原村庄屋家督を承け、寛政九年山口恵門兵衛の曾孫松浦与五郎は坂本と改姓、その子坂本佐太郎は官に就き守護職として歴せり。明治十七年、再びこの地をはなれたれども猶族戚の多くは故地を守り継ぎて今日に栄たり。

茲に先祖代々の霊を供養して祖業を顕彰し当地の繁栄を願いて謹みて城主の碑を建立するものなり。

昭和五十四年

坂本篤郎



山頂の城跡碑と建碑の辞碑



### (2) 城主並びに末孫霊園の造成

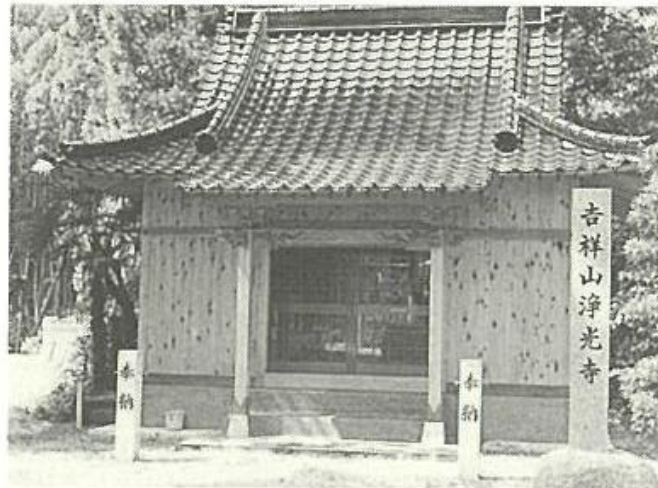
歴代城主及び末孫の墓地が、法行山中腹、薬師堂の西方斜面にありました。雑木林の中で、それまでは昔の立派な墓があるとは聞いておりましたが、その由来は知りませんでした。坂本氏により明らかになり、しかも多額の費用をかけて霊園が造成されました。霊園の上段・中段は城主又は浄光寺関係の墓地、下段は元禄の頃の墓、並びに五輪塔群に整備されています。



法行城跡霊園

### (3) 薬師如来堂の再建

中腹の薬師堂は、いつ建てられたのか明らかではありませんが、建坪十四坪、木造茅葺のお籠堂には、薬師如来・千手観世音が祀ってあります。昔から病気を直す大師様と知られ、お祭り以外の時でも参拝者があり、夜通し祈願される人もあったそうです。大分老朽化しておりましたが、平成二年新築され、毎年七月二十日、前記霊園の供養がここで行われるようになりました。



薬師如来堂

### (4) 庄屋跡地の整備

先にあげた凡そ六〇〇坪の庄屋跡地の所有が、昭和五十八年坂本氏に移り、昔の庄屋屋敷を思わせるように整備されました。尚、屋敷の半分程は、区の集落センター敷地として、運動広場兼ゲートボール場ができ、休憩舎までも造られました。

### (5) 田嶋神社の拝殿・鳥居等の改築

拝殿は、台風のため少し傾きかけており、氏子で改築を検討中でした。そうした折、氏の積極的な貢献があり、氏子は一部の負担で見事な拝殿が改築されました。また、台風で倒壊していた第二の鳥居も建立され、更に参拝者の安全を願って、石段の中央に手すりが上段から下段まで設置されました。

こうした数多くの事業が施され、法行城跡一帯は見違えるようになりました。この景観は、平成十年

佐賀新聞社主催の「新佐賀百景」に応募し上位入選しました。



田嶋神社拝殿

## 五、板木村塾・大平小学校跡

庄屋跡を中山方面に向かって登った小峠の頂上右手に、小高い丘があります。ここは明治維新前後、板木村塾（寺小屋）が建てられていたようで、その跡に明治十九年大平尋常小学校が創設されました。その後、校名は何度か改称されましたが、昭和三十一年四月、筒井分教場と合併して筒井に波多津東小学校が新築されました。こうして、長年、地区の人から親しまれてきた大平小学校も七十年の幕を閉じ廃校となりました。

## 六、椎茸栽培の足跡

### （1）当時の状況

終戦後十数年を経過した頃から、農業経営は徐々に苦しくなってきました。各地の農家は、農用地開発や樹園地造成で経営の多角化が図られましたが、当板木地区は、岩山と谷間が多く、農道作りも困難な程で、その上停滞気流のため樹園地には不適とされて、他地区のような開発はできないのが実状です。山一つ越えれば、伊万里湾を望む温暖な地にあり乍ら、地形の上からいずれの作物も満足にいかず、特産物もありません。加えて雨期には毎年のように洪水に悩まされ、耕地は荒らされる等被害も多く、その上一戸当りの耕地面積も少ないという悪条件の中で、農家の経済は苦境に立たされ、納税も滞る程でした。

当時、村の戸数は二十二戸ありましたが、半数以上の家が世帯主を始め、大切な後継者までもが、遠くは東京、近くは唐津炭坑等に出稼ぎに出る程で、村は危機寸前というところでした。

### （2）出稼ぎ防止対策

昭和四十四年当時の区長前田虎夫の発案により、農協・農林事務所・市役所等から関係者を招き、「板木の振興と出稼ぎ防止対策」について、地形の診断や意見交換がもたれました。その結果、むらには雑木林が多いことから、椎の木を原木として椎茸栽培がよかろうということになり、先ず希望者十七名で栽培に取り組むことになりました。

早速関係機関や熊本のキノコセンターの指導を受けたり、現地での植菌伏込みの講習を受けました。しかし、この仕事で家計の樹立が出来るのかと、不安でしたが、普通は植菌後二年半程でキノコが発生するそうですが、一年半程で発生し始め、組合員の喜びは筆舌に表せない程でした。

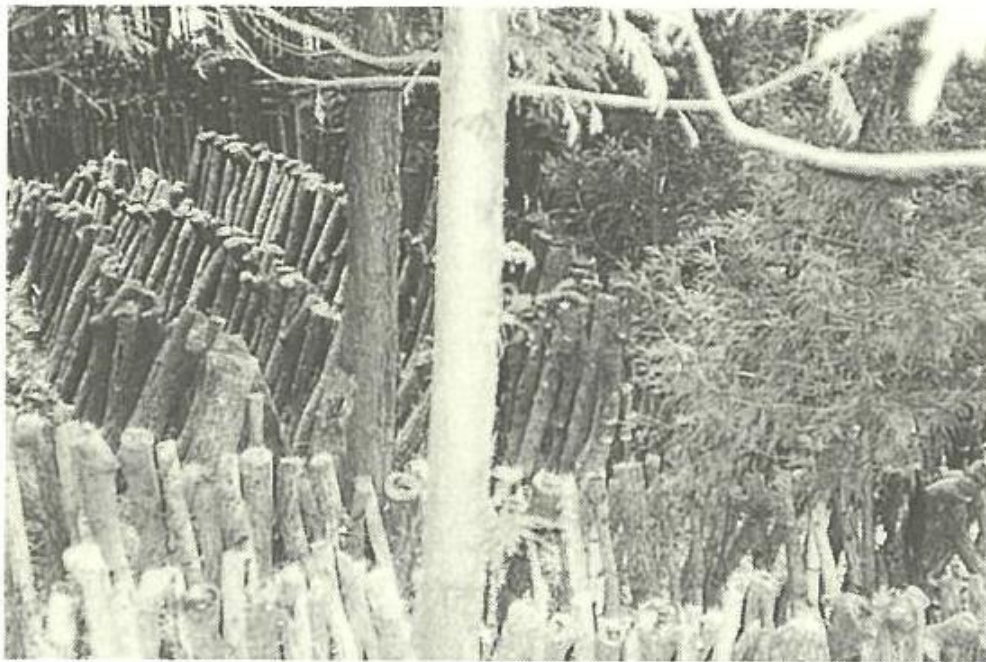


### (3) 夢と希望

東京方面の出稼ぎ者も徐々に呼びもどし、本格的な栽培に取りかかりました。しかし、資金はなく、農協に相談して、やっと一戸当り五万円の近代化資金を借用することができ、町内外から収量の多いクヌギやナラの原木を導入しました。また、当初は生椎茸で唐津や伊万里の青果市場に出荷しておりましたが、天候不順の折支障を来し、価格も安くなりますので、事業資金二百五十万円（補助金六〇％）を借用し、乾燥機B型二台その他備品一式を備える共同乾燥場（建物十八坪）を設置しました。

こうして、生椎茸は今まで通りに出荷、乾燥椎茸は久留米の兼貞物産に出荷する等、販路・価格も順調に伸び、組合員も二十名に増え、税の滞納もなくなり、農協の定期積金も板木は町内で上位に位置する程になりました。これも関係機関の指導、農協のPR、組合員の苦勞と努力の賜であると思っております。

その後、更に生産規模の拡大で共同乾燥場では処理できなくなり、各戸に乾燥機一〜二台を設置することになりました。初めは一台三十三万円程の乾燥機が導入されましたが、約七年で老朽化し、新しく新型サトー式（一台七十〜百万円）の乾燥機が、農業後継者資金（無利子・五ヶ年計画払込）を借入れ導入されています。



シイタケ栽培のホダ木

### (4) 乾燥椎茸の価格不況

昭和五十七年頃から韓国・中国から、安い乾燥椎茸が輸入され出廻るようになり、価格は以前の半額程に下がりました。その頃から、大阪の全農市場に出荷しておりますが、価格は低迷したままです。ただ、生椎茸は価格の低迷はあるものの、消費は伸びるような気がします。今後は品種の改良と栽培技術・乾燥技術の向上により、品質の向上を図ることが課題と思われま。

### (5) 原木の確保

昭和五十七年頃より年次計画をたて、原木確保のためクヌギを植付けています。現在、組合員のクヌギ植付、合計約十町歩、共同事業として国有林を借用（六十年間の契約）し、山代地区に三町三反歩植付けられています。

(6) 椎茸の販売実績

単位：トン

年次別	乾シイタケ	生シイタケ
昭和48	0.8	
" 49	0.3	見込です
" 50	0.4	
" 51	0.5	
" 52	4.00	
" 53	3.10	
" 54	3.50	
" 55	5.00	
" 56	4.20	22.00
" 57	2.20	21.00
" 58	3.60	29.00
" 59	8.50	5.00
" 60	4.50	23.00
" 61	6.70	24.00
" 62	5.00	19.50
" 63	7.70	10.00
平成1	2.00	15.00
" 2	2.10	10.00
" 3	1.50	15.00



【津留・主屋】



津留・主屋

小字名	生活地名	小字の中の要点
番号と 登記地名 説明	日常生活に使う住民の作り出した 地名(カタカナ符号、ひらがな地名)	地名のいわれ・史跡・遺跡・お宮・お寺・文化財・ 公共設備・交通設備など
①下前田	イ、かんこうじ ロ、にしのつる ハ、とりいもと ニ、すぎざき ホ、 はげら ヘ、たきやま ト、おおつ ジ チ、おんのま	神寄場、観音様、修業大師、不動明、仏像、五輪 塔、天照皇大神宮、燈籠、馬頭観世音、石仏 チ、石仏(波多三河の守石仏) 前田高信氏裏山
②川 氏	イ、せえしべた ロ、さばくされ	ロ、今にも落ちそうな岩場の下の道を商いに出る 漁師の主婦が通れないで待っている間にさばがく さってしまったという伝説がある。
③田 頭	イ、むらさきざき ロ、かたひら	五穀神社、鳥居
④具 瀬	イ、どんこば ロ、ゆみた	
⑤下大谷	イ、やけのひら ロ、なんこう ハ、 らんさま	十六羅漢 六地藏

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑥中大谷	イ、はちひゃんたに ロ、ながは たけ ハ、ぜんもんはか ニ、ひ こじや	
⑦上大谷	イ、しんがりや ロ、なりし	
⑧滝ノ内	イ、くだけお ロ、さんじゆだ	
⑨中ノ内	イ、いしきりひらき	
⑩中ノ峠		
⑪目美社 <small>めづしや</small>		
⑫小坊	イ、こぼう	イ、古坊 <small>こぼう</small> （昔、この地に古いお寺があつたのでは ないかといわれる。）
⑬前田	イ、くぼた ロ、やまなか ハ、 にしのはさこ ニ、だいら ホ、 このむかえ へ、どうのうえ ト、 こうやま ち、やぶきたに リ、 おおひらやま	田島神社（鳥居Ⅱ第一、第二）、唐獅子、燈籠、 九重塔、納骨堂、集落センター、天照皇大神宮、 観音堂、愛染明王

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑭塩 鶴	イ、しげた ロ、うめのきだに ハ、 こやんたに ニ、ほたちちめ	岸嶽ばつそん 宮地嶽さま
⑮岩 谷	イ、かたひら ロ、なかしま ハ、 まるしのたに ニ、ふるみち ホ、 ひかげびら ヘ、いっぼんすぎ ト、なかのきれ	
⑯百 田	イ、ごうや ロ、ごんこば ハ、き たびら ニ、すおみね	鬼のしょうがま

## 津留・主屋

### 一、津留・主屋の行政区

当区は、波多津の東南端に位置し、中央に流れる行合野川を境に津留と主屋の集落があります。明治

二十二年町村制施行以前は、津留村、主屋村と各々一村をなしていました。施行後も、大岳村（現波多津町）の大字津留、大字主屋として行政区は別々でしたが、昭和十五年頃から合併して「津留主屋」と呼ぶようになり、近年は「津主」と呼んでいます。

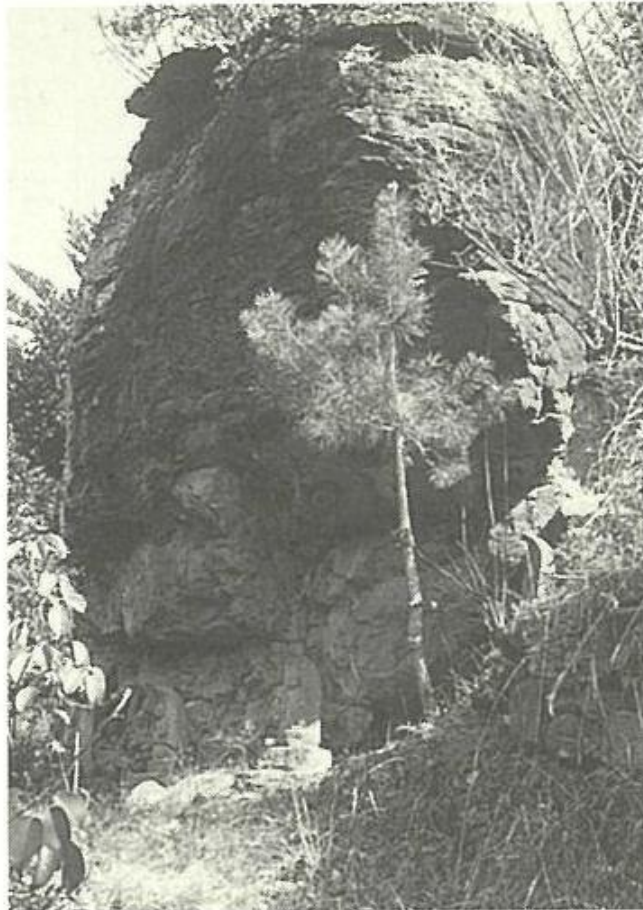
津留の地名について、日本地名辞典には「行合野川が狭隘な谷を形成し、地名もこの地形によるもの」と記されており、曲折した川、狭い谷が多く、戸数二十六戸、人口一二〇人、水田十五町余、畑三反余の小さな集落です。また、津主に電燈が取り付けられたのは、大正八年のことと聞いております。

## 二、交通の難所カオジ谷

カオジ谷には、津留と板木区の小字があり、概ね行合野川を境に南が津留の川氏、北側が板木区の川宇治となっており、どちらも「カオジ」と呼んでいます。県道新田－徳須恵線の津留から行合野に出るまでの凡そ一kmで、行合野川に沿って曲りくねった県道を、奇岩巨岩が今にも崩れ落ちそうに覆っています。その一つ、津留の出口に近い左手に、道を塞ぐように立つ岩を「鯖くされ岩」と呼び、昔、波多津の浜から、徳須恵や岸岳に魚の商いに行っていた漁師の嫁が、崩れ落ちそうな巨岩に恐れて、通りぬけることが出来ず、とうとう魚を腐らせてしまったことから、この名がついたという話です。

この岩も、平成二年頃、市丸建設によって一部取り除かれ、今では安全が確保されています。

また、大正十一年、カオジ谷の中程にある板木橋を一〇〇m程下った左手（恵木の土地）に山崩れが起り、大きな岩が川と道路を塞いで通行できなくなったそうです。ちょうど、津留の市丸力造と主屋の市丸信右衛門の現役入隊の日で、止むを得ず板木から恵木を通り岸岳駅まで見送りに行ったという話も聞きます。



カオジ谷のサバくされ岩



### 三、昭和二十八年の大水害

昭和二十八年六月二十八日、波多津地区は集中豪雨にみまわれました。当地区は、行合野川と中山川の合流地点で水量が増し、加えて津留橋の県道が八m程切断、片平山麓が、高さ三十m、幅十五m余にわたって山崩れを起し、行合野川を塞いだため、水田六町歩が土砂で埋没、家屋六戸が床上・床下浸水の被害を受けました。水田の被害は東谷全地区に及び、水田の表土や苗代が流失する被害を受けています。

田植直前のことで、水田の復旧と苗の確保には心痛されたようです。幸い農協の斡旋により、長崎県の川棚方面に二、三日間行き、救援苗を貰ってきて、被害面積に応じて分配しました。この年は、やっと自家保有米だけを植付ける人もいたようです。

### 四、圃場整備と営農

当地区は、昭和五十四年から圃場整備事業が始まり、約八町四反歩余の整備が、翌五十五年に終わりました。お陰で水利も近代的なポンプ揚水となり、全水田の地下にパイプが配管され、用水当番が一日三、四回水田を見まわって、必要に応じて蛇口を開閉して水の調節をしてくれますので、大変楽になりました。

また、大型の農機具も利用できるようになり、都合よくなりました。

しかし、打ち続く減反政策は痛く、現在では二七・八%にも達しています。そのため減反した田地を利用した施設野菜のキュウリ栽培（五戸、九反歩）のほか、養鶏（三戸、年間三十万羽出荷）、畜産（四戸、内肥育牛三戸、育成牛一戸、合計三〇〇頭）、玉ねぎ栽培（四戸、六反余）等が営まれています。（平成四年現在）

### 五、主な事業

- ・昭和五十九年農村地域構造改善事業として、集落センターが完成、工費一二〇六万三〇〇〇円、内国庫補助六〇三万一五〇〇円、地元負担五十%
  - ・昭和六十～六十一年、主屋林道、延長一二七〇m、工費二四七七万円、地元負担二四七万円余、
  - ・昭和六十二～六十三年、津留急傾斜改良工事、工費六四三九万円余、地元負担五十%
- 等が施行されました。

### 六、神社・石造物等

#### (1) 津留の神寄場

津留橋近くの堤防に、コンクリート石垣を積み、仏体が寄せられています。この地は、以前、お籠堂がありましたが、昭和十三年頃県道が新設されたため、この付近が整地されました。寄せられた石造物は、天照皇太神宮、観世音菩薩（十手観音、四国八十八ヶ所三十番）<sup>(一八〇八)</sup> 修業大師、不動明王、仏像四体のほか、五輪塔十八基、燈籠一対（文化五年銘入）等で、いつも新鮮な花が手向けられています。



津留橋畔の神寄場

## (2) 大谷の十六羅漢

下大谷の溜池の上、雑木林の中の大きな岩の下に、十六体の羅漢が一行に並んでいます。その内の一体には、「為秋月知信士、菩提建立、施主五左衛門」の記銘があり、他に「文化元年甲子八月二十五日」と記銘された一体もあります。十三体の形は大体同じですが、手持の品は違っています。



十六羅漢

## (3) 五穀神社

天保五年（一八三四）甲午九月吉祥日創建、津留主屋村中の当社は、津留の正面、片平山の山頂にあり、村中で豊作祈願のお籠り等もあっていましたそうですが、明治四十年、板木の田嶋神社に合祀され、今では年一回、秋のお祭りが村中で行われています。

尚、参道の中程に、鳥居が半分埋って建っており、嘉永二年（一八四九）九月建立の銘がみられます。



五穀神社

## (4) 主屋の田嶋神社

字岩屋にあった旧田嶋神社（創建年代不詳）は、主屋中の守護神として氏子に崇敬されていたそうですが、明治四十年、板木の田嶋神社に合祀されました。

その後、大正十一年九月、市丸建設の先代市丸広太郎が、自己所有の現在地字前田に本体を再建して、工事の安全、地域住民の守護神としました。更に平成二年頃から、現市丸建設社長市丸徳一が更に所有地を造成し、私財を投じて境内の整備拡充を図り、鳥居二基、唐獅子一對、燈籠一對、九重の塔等

が建てられております。尚、拝殿の建築も検討中で、将来は景観も整い、住民守護の神として、一層崇敬される神社となりましょう。

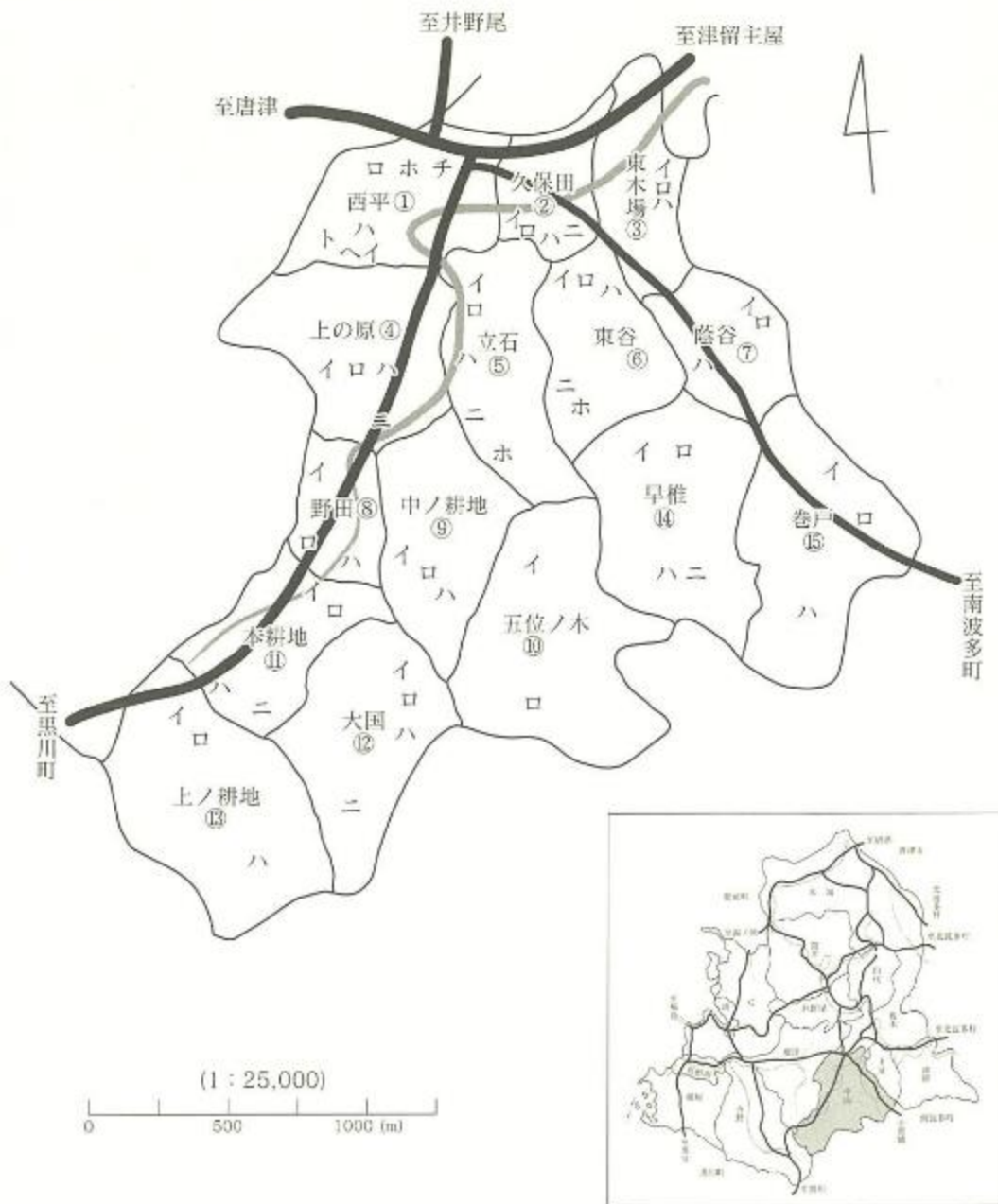
祭神は市杵島姫命、湯津姫命、田心姫命、大山祇命



主屋の田嶋神社

中山

【中山】





中山

番号と 登記地名	説明	
	小字名	生活地名
①西平	日常生活に使う住民の作り出した地名(カタカナ符号、ひらがな地名)	地名のいわれ・史跡・遺跡・お宮・お寺・文化財・公共設備・交通設備など
②久保田	イ、ひるめしだ ロ、ちゅうごくいわ ハ、しろやま ニ、てらのかわ ホ、かだんのはな ヘ、いそみち ト、ひえだ チ、おとがたに	イ、一回の昼飯と田を交換した。 ロ、中国地方より 木炭焼きにきたところ。 ハ、城のあった山。 ニ、 昔お寺で利用した川。 ホ、昔死罪人に花を供えたところ。 ヘ、磯に行く道。 大山祇神社、牛頭祇園、伊勢碑、地藏様、中山先生頌徳碑、庄屋屋敷の跡
③東木場	イ、かまやき ロ、ふうふういわ ハ、からつまる	お大師様、千手観音
④上ノ原	イ、じぞういで ロ、ながだ ハ、 こまだ ニ、ふるこ	イ、唐津焼の窯場があった(三百年前)。 ロ、 大小寄りそった二つの岩があるところ。
	イ、こやしき ロ、しちじゅうだ ハ、ろうさこ ニ、いっちのき	イ、小さい屋敷 ロ、狭い田が多くあった。 ハ、 お稲荷(米倉の前)



小字名	生活地名	小字の中の要点
⑤立石	イ、べつとんかわ ロ、たつし ハ、 どうここば ニ、ええばるだいち ホ、にひやくだ	イ、昔馬丁が馬を洗った。 ロ、大岩がそびえていた。 ハ、ふくろうがよく鳴いた。 ニ、広い畑があった。 ホ、せまい田が多かった。公民館 ロ、立石、六地藏、観音様、阿弥陀様
⑥東谷	イ、まつばんこし ロ、あづきこば ハ、しまんもと ニ、しやくだ ホ、 やました	昔的場があったところ。
⑦蔭谷	イ、たろごろ ロ、しおづる ハ、 ふっこば	溜池がある。
⑧野田	イ、みぎら ロ、ひえこば ハ、へ ぼたに	イ、ミザラ：水洗い、大雨のたびにすぐ水につかる。ロ、木場、稗木場の土地があった。(木場の松岡氏の所有地) ハ、へこの多い谷。
⑨中ノ耕地	イ、かきのうち ロ、ひやんさこ ハ、しじろたに	溜池がある。
⑩五位ノ木	イ、あきやぎ ロ、なかんたに	

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑪本耕地	イ、ふねいわ ロ、きんごやかた ハ、みのかけ ニ、ひわたし	イ、船型の岩がある。 ロ、金の館があった。 ハ、溜池
⑫大 国	イ、ごうや ロ、たきのうえ ハ、はちのくぼ ニ、みつし	イ、豪族が住んでいた。 ロ、滝の上 ハ、三角点
⑬上ノ耕地	イ、なたおとし ロ、とのこば ハ、いわのうえ	ハ、岩の上
⑭早 椎 <sup>わさ</sup>	イ、こっか ロ、まつのもと ハ、よこみち ニ、もものたに	イ、小型の古い塚 ロ、松の大木があったところ。 ハ、山の中腹に道があった。 ニ、桃畑のあったところ。
⑮巻 戸	イ、あなたに ロ、とや ハ、ごひやくだ	ハ、狭い田が多くあった。(谷間に田圃があった。)

### 中 山

四方を山に囲まれた三十九戸の小さな集落です。専業農家二戸、兼業農家三十六戸、会社勤務一戸、人口男九十名、女子八十六名、計一七六名です。田は十九町歩余、畑一町歩余、山林約七十町歩、梨園十町歩 十三戸が経営、密柑五町歩余 七戸、桃園五反(五戸)、キュウリ四反(五戸)、肉牛一四〇頭

(五戸)、牛十頭(二戸)、豚一三〇〇頭(四戸)といった産業の概略です。昭和五十五年、反対もありましたが、思いきって通した広域農道が起爆剤となって、更にいろいろな農業による生き方を模索して頑張っています。(平成四年現在)



中山集落センター(公民館)



広域農道開通記念碑

## 一、山の歴史

### (1) 城山

城山は村の裏手、西平にしひらにあり、さほど高くはありませんが険しい山です。頂上は四十坪程の平地で、昔、城があったそうです。現在は基盤整備事業のおりに立てられた四角柱が立っています。昔、二十六夜様の祭りには、太鼓や鉦をかついで登り酒盛りをしていましたが、今は止められています。

### (2) 立石山

小字立石にあり、昔、牛神様を祀ってありましたが、明治四十三年神社統合によって大山祇神社に合祀されました。牛神様のある頃、祭りの日には村中総出で一重を携帯して登り、お祭りしていたそうです。

### (3) 大国山

標高一七二m、字大国にあり、中山で一番高い山です。昔は見事な大国山の松林も、松食虫にやられ、いまは見る影もなくなっています。

## 二、河川など

### (1) 中山川

この川は、主屋から中山のお宮までが三級河川、その上流は普通河川です。基盤整備がされて河川も大分変わりました。別に蔭谷川・五位ノ木川があります。

中山川の中に昔は地蔵堰・上の川堰という大きな堰がありました。両方とも子供たちの格好の水泳場で、洗濯や洗いものもこの堰でやっていました。また地蔵堰と上の川堰の中間に別当川があります。ここでは、昔、お城があった頃、別当が馬を洗っていたところだと言われています。

### (2) 飲料水

中山できれいな水が出る所は、油屋の裏の井戸水でしたが、今では使われていません。また、田中友一宅の裏にあった清水は、冷たくてうま、夏は村人が好んで飲んだもので、現在もあります。

カノキ原の出水も有名です。湧き水が豊富で、十軒ほどの家が飲料水や使い水としていました。松尾直宅の下に湧き出しています。

### (3) 溜池

中山には溜池が三か所あります。柿の内溜、本耕地溜、塩鶴溜です。

柿の内溜は中ノ耕地にあって、中山で一番大きな溜池です。この溜池は、昔から度々修理されてきましたが、村人の修理では再び悪くなり、昭和五十五年から四か年の歳月をかけて、農業基盤整備老朽溜池整備事業として工事が進められました。今では、堤高五・八m、堤長四十八m、貯水量九万九千m<sup>3</sup>の立派な溜池となって、約十町歩の水田をうるおしています。

ほかの本耕地溜は、約五町歩の田に、塩鶴溜は約六町歩の田に水を注いでいます。

## 三、古跡

### (1) 城山

前述の城山に、昔、城があったと言われています。城には西の方から馬で登っていたそうです。城の麓に約三畝程の寺屋敷の跡があります。延徳四年(一四九二)頃のことだそうです。

### (2) 的場の越し

公民館の上の山を呼び、城山から弓や鉄砲の練習をする時に的をおいた所とされており、今も塹壕の跡が残っています。

### (3) 唐津焼窯跡

俗に「かまやき」と呼ばれ、東木場にあります。約三百五十年前に唐津焼が焼かれたそうです。盗掘されていますが、石臼四個のほか、付近茶碗のかけらがみられます。後に南波多の椎ノ峯に移ったそうです。

## 四、大山祇神社 (第七章 宗教の項参照)

## 五、浮立

中山の浮立は、二〇〇年も前から始まっているそうです。記憶に残るのは、昭和三年昭和天皇御大典の時浮立をだすことになり、南波多の原屋敷から師匠を招いて習いました。

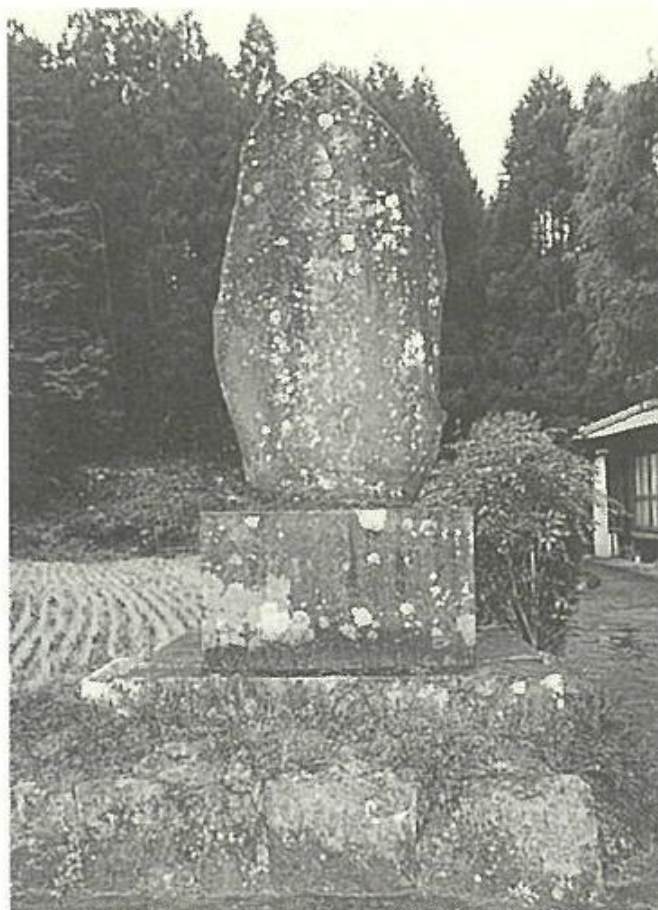
当時、富永定美・田中勇が十三歳、田中友一が十八歳でした。内容は、サンバ、五信鬼太鼓、エビス大黒、武者、矢ノ根、猿廻し、花切り、道行、ツメ太鼓等でした。その後は、初盆詣り、夏大祭等に鳴らしておりましたが、いつの間にか絶えてしまいました。戦時中に、尺三寸、八寸、九寸と大きい鉦から供出しました。

昭和六十二年、当時の区長古賀輝夫が、中山の浮立を復活させたいと村の会議に提案し、満場一致で可決しました。こうして太鼓も修理され、鉦も買い求め五個が揃いました。笛は個人で大事に保管して

います。平成二年の秋の大山祇神社大祭に出場するため、一生懸命練習しました。その後は忘れられたように、浮立が立つことはありません。

#### 六、教育に尽くした人々

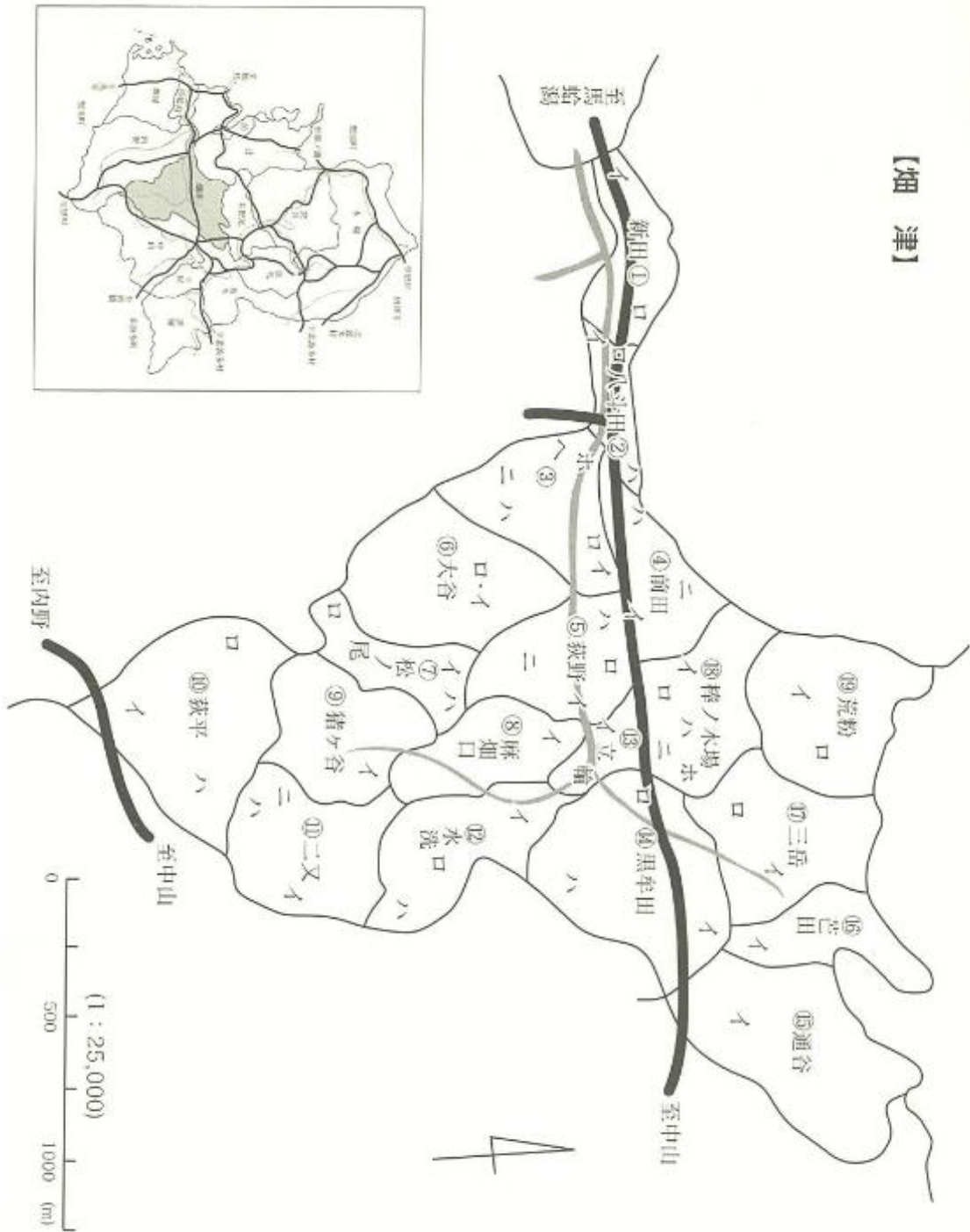
中山出身の教育者には、田中宗太郎、坂本吉兵衛、中山豊次郎、田中東吉、松尾加助等多士済々、すぐれた指導力をもって、町内外の教育に貢献されました。（第六章参照）



中山先生頌徳碑



【畑津】



畑津

小字名	生活地名	小字の中の要点
番号と 登記地名 説明	日常生活に使う住民の作り出した地名(カタカナ符号、ひらがな地名)	地名のいわれ・史跡・遺跡・お宮・お寺・文化財・公共設備・交通設備など
①新 田	イ、しんでん ロ、かみしんでん	波多津小学校がある。
②八斗 田	イ、ごたんま ロ、とりごえ ハ、かまえ ニ、いわのもと	田嶋神社がある。神殿は国の重要文化財である。宝泉寺がある。旧役場跡がある。農業倉庫や精米所がある。
③中 島	イ、たぎき ロ、やまぐち ハ、かじごやだに ニ、ちよすけたに ホ、せんとやしき ヘ、あんのはな	こうや(紺屋)の前のもちの木に、昔は舟をつないでいたそうだが、一九九一年の台風十九号でその木は倒れた。牛神様がある。桜の木の公園がある。
④前 田	イ、まえだ ロ、かきや ハ、たにぐち ニ、みようがんとに ホ、とんざいし	畑津公民館がある。護国神様がある。

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑤ 蕨野	イ、しみずがたに ロ、ひらきだ ハ、だいらやま ニ、わらびの	蕨野は地区発祥の地といわれるが、後には何も残っていない。溜池がある。地藏様がある。
⑥ 大谷	イ、とびのす ロ、うしろごち	畑津から内野へ通ずる里道があつたが、今は通行困難である。
⑦ 松ノ尾	イ、ろくろ ロ、なげやり ハ、お おき(おき)	
⑧ 麻畑	イ、いわした ロ、うちば	
⑨ 猪ヶ谷	イ、ししがたに	内野へ通ずる里道があつたが今は通行困難。
⑩ 萩平	イ、ううひら ロ、はげんだいら ハ、おつけこ	
⑪ 二又	イ、ふたまたけ ロ、ところがたい ら ハ、よこいん	
⑫ 水洗	イ、えのき ロ、ひゃんさこ ハ、 かきのこば	地区一番の大きい用水池がある。

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑬立輪	イ、すうだはる	
⑭黒牟田	イ、あとがたに ハ、やしきのはる	元は耕地があつたが今は山林である。
⑮通谷	イ、とおりに	井野尾に通ずる貫通道路がある。
⑯芒田		
⑰三岳		三岳二三三・五m、波多津採石がある。
⑱棒ノ木場		
⑲荒粉		

## 畑津

### 一、「畑津」の地名

「はたつ」「畑津」の地名が、いつごろから呼ばれるようになったのか、どんな由来があるのか、將

又、集落がいつごろできたのかもわかりません。伊万里市史にある古文書や絵図から、畑津或いは畑津付近を指して呼ばれたであろうと思われる地名を抜粋してみますと

「波多浦」康和四年（一一〇二） 「八田津越道」前同  
「波多津西崎」治承四年（一一八〇） 「波多里道」文永六年（一二六九）  
「はたつの浦」正中三年（一三二六）  
「波多津」慶長年間（一五九六～一六一四）  
「畑津村」宝永三年（一七〇六）

とあり、「波多浦」「八田津越道」が初見だとされています。畑津を「浦」「津」「崎」と呼ばれても当時の地形から推して不思議ではありませんが、以上の資料では間があきすぎて、特定することは難しいようです。尚、想像を拵げて、後述の御嶽城主の名に、「波多津」「畑津」の冠称があることも、集落名と関係がありそうに思えます。



集落の一部

## 二、波多三河守支配のころ

### (1) 御嶽城と城主たち

標高二三三m、三岳の中腹、東寄りに御嶽城があり、城主が畑津及び付近を知行していたようです。そのことを、二・三史書から拾ってみますと、

- ①「波多津太郎増、即波多津を知行す、頃は建武<sup>(一三三四～三五)</sup>の頃と見えたり。御嶽の城畑津村に在り、右畑津太郎増の居城なり。其後 畑津内記と云仁、此城に居城して此所を知行す。墓所あり。」(松浦昔鑑)
- ②「御嶽城 久多五郎築く。波多三河守家臣 畑津平内藤原清和 畑津御嶽城 三〇〇石。同家臣 畑津左京藤原清貞 同所 無禄。」(松浦古事記)
- ③「(前略) 御嶽城の遺構は、石垣囲いの本丸をはじめ、土塁、空堀、櫓跡が認められる。」(肥前戦国武將史 木原武雄著)として、城の要図が添えられています。

以上のことから、城の存在は確かだと思えますが、築城したのは久多五郎としても、いつかはわかりません。町内の城後城・法行城・木場城の築城年代（九五〇年頃から一三〇〇年頃）や、前述の波多津太郎増が居城したとされる「建武のころ(一三三四～三五)から推察するほかありません。

いずれにしても、最後に居城した畑津内記まで三〇〇年余、岸嶽城の支城として努めましたが、文禄三年波多三河守の没落とともに廃城となりました。以後今日まで四〇〇年余、今は石ころの多い山林で、城跡を確認することは難しいようです。



(図1)御嶽城要図



(肥前戦国武将史から引用)

### (2) 波多三河守の処分と大評定

文禄元年（一五九二）、名護屋に布陣した秀吉の朝鮮出兵に依えて、三河守は鍋島軍に編入され、三月、兵二〇〇〇（雑役軍夫等もふくめたか。七五〇騎とも）を率いて、波多津港から出陣しました。二年余の戦いで、七五〇騎の過半数も討死にする程の働きをし、文禄三年二月帰国しましたが、三河守を待っていたものは「上陸すべからず、領地は没収、身は徳川家康に預ける」という処分でした。まもなく、同年五月 譴責状（処分の理由を述べたもの）とともに、常陸国（茨城県）筑波山麓に配流先が申し渡されました。

このことが岸嶽城に報らされると、城内外あげて驚き、家臣らは馳せ参じて善後策についての大評定が開かれました。大評定には、鶴田越前守をはじめ、一族旗下家臣らが集まっています。勿論、畑津御嶽城の畑津内記、板木法行城の久我玄蕃允、木場城の隈崎素人も参加しており、評議は区々、大激論が交わされました。その議論の一部を抜粋しますと、

「某思うに、今名護屋御陣に切り入り八方に乱入し、潔ぎ能く討死せん事末代までの名誉なり。…城地を明け渡さぬ内、夜討ちの用意すべきなり」（隈崎素人・木場城）と、「血眼になりて申しける」過激派の意見や、「一先づ城を明け渡し、知るべ知るべに引退き、忍び忍びに会合して謀計を廻らし、配所の主君を守り奉り一勢に旗を上げ、其時こそ討死して名を後世に残すべし」（田代日向守）とした自重派。これに反論して「その評定もさることながら、とても今趣意を通さずば期して都に攻め登らん事思いもよらず…其存る所は、御母子佐嘉表へ送りまいらせ、名護屋の御陣へ忍び入り、一時に放火して焼き払い、火焰の中にて討死すべし」（井手飛騨守・向三郎・畑津内記）とする意見が出る等、なかなかまとまらなかったようです。このような評定が何回も続けられたことでしょう。

結局は、「其主たる人なくしては成就しがたし」（黒川左源太夫・鶴田因幡守）の意見で、密かに常州へ赴き、主君を連れだすことで決着しているようです。（松浦拾風土記・岸岳城盛衰記）

### (3) 波多家臣の末路

主君のない岸嶽城は、まもなく明け渡され、所領は志摩守に譲渡されました。その上、主君三河守の死亡説が流れ、かすかに再興の悲願を抱いていた家臣等は、その総てを失い、四散し、その殆どが刀を捨て帰農したが、中には仏門に入る者もあったようです。中でも、悲壮なのは、激しい怨みを抱きながら、主君の後を追ひ殉死した多くの人々もあったようです。（岸岳城盛衰記）

「松浦古事記」には、文禄三年三月八日三十名、九日に四十七名の人が、城中、茶園の平、瑞巖等等で辞世の句を残し、或いは無念の涙とともに殉死したとあります。この中に、御嶽城主「畑津内記光方・大道月仙居士」の名があがっています。（殉死の期日は、主君の命日を九日—配流の日—としたた

め、それに合わせた作為であろう、と岸岳城盛衰記にはあります)

しかし、怨みは殉死だけでは終わっていないようです。

事は慶長五年、関ヶ原の戦いに従軍していた志摩守の留守をねらって、唐津を襲撃する反乱が起りましたが、平戸藩主の応援で「自ら潰えた」とあります。この反乱軍が誰であったかわかりませんが、この地にあって、反乱を起こす程の者は、波多氏残党以外に考えられないと述べてあります。前述の大評定の様子からも反乱は予知できるようです。しかし、志ならず、事ここに至っては、悲願もむなしく怨念のみを残して、あちこちにおいて自決したものであろう、と推察されています。主君配流から六年後のことです。(前同書)

また、殉死や自決に限らず、四散した地で生涯を閉じた岸嶽末孫の墓と聞く五輪塔が、畑津にも何か所かあります。粗末にすると末孫のたたりがあると聞かれますが、こうした由来によるものでしょうか。



五 輪 塔

ただ 史家の間では、史実と伝説の区別がつかなくなっていることも指摘されています。

尚、後代になりますが波多領を受けついだ唐津藩では、浪人となった武士たちの何人かを取立てているようです。

「松浦要畧記」には、「波多浪人の者共被召寄 大川野郷組に参拾人御取立 (中略) 其後小麦原、畑津、中嶋にて武拾四人御取立、国境相守る儀被仰付候 (後略)」とあり、大庄屋・小庄屋にも旧波多家臣の中から登用されている例もあるようです。

### 三、唐津藩政のころ

畑津村は、文禄三年 (一五九四) 以来藩籍奉還まで二五〇年余、唐津藩領畑川内組 (畑津村外十か村) に属し、各村に小庄屋がおかれ畑川内村におかれた大庄屋が、同組を統括しました。史書に畑津村庄屋・中島林平家貞・中<sup>不詳</sup>良八の名がみえますが、ほかにもあろうかと思えます。

この頃の村のようすを示す一端として、伊万里市史に次の史料があります。

畑津村 石高	(元和検地以前・文禄年中波多氏の検地か)	一五八石四斗七升四合
元和検地高	(元和二年・一六一六、寺沢志摩守の時)	二二〇石四斗三升
田畑高	(一七〇〇年後半、水野和泉守の時)	三〇〇石 七升

史料でみる限り、時代を経るにつれて田畑高は増加しています。考えられることは、技術の進歩もあったとは思いますが、新田の開発（小学校付近）や小規模な田畑の開墾、かん漑水利の整備（溜池・井堰・水路）、水利による畑地の田地への作替え等、農民の知恵と努力が考えられます。水洗・前田・厥野の溜池、波多津川の数か所の井堰、山際のぎりぎりまで開かれた田地等は、いつ、だれが作ったかわかりませんが、それぞれに期待と希望がかけられて作られたに違いありません。

しかし、田畑高がふえたといつて、一概に喜ぶわけにはいかなかったようです。

「唐津領惣寄高」にある畑津村の田畑高に対する免（年貢率）は、「六ツ二分三（六割二分三厘）」と高く、謂所六公四民の厳しい取立てに苦しめられていたようです。（第四章に詳述）

畑津に限らず唐津藩では（時代によっては）、三斗三升をもって年貢米三斗俵としたり、枡に米を山盛りに積らせ、手前半分だけをかき落とす計り方をしたり、後には、年貢米用枡として京枡より一割程容量の大きい納枡を作らせる等々。特に定免制下では、豊凶にかかわらず定量を納めなければならず、石盛りも、高く検見されたとなれば、六公四民どころではなかったと想像します。

勿論、土井公等の仁政もありましたが、藩財政の如何によっては、一人一日一文の日銭や豊税を課す年もあったようです。（伊万里市史）

#### 四、明治維新以降

##### （1）畑津村の属する行政区

詳細は、本誌第四・五章にありますので、属する行政区の呼び名だけを列記します。

明治五年二月まで	松浦郡	畑津村
〃	二月から	松浦郡 第三二大区第二小区 畑津村（大区小区制施行） （以後、八年・九年大区小区の改正がある）
〃	十一年七月から	西松浦郡 畑津村（大・小区制廃止）
〃	二十二年	西松浦郡 大岳村 大字畑津 （畑津に村役場がおかれた。三七年移転）
明治三十四年	西松浦郡	波多津村大字畑津

##### （2）道路の変遷

（図2）県道 馬蛤潟新田一徳須恵線



国道二〇二号線と二〇四号線を結ぶ県道馬蛤潟新田一徳須恵線が、畑津を西から東へ縦断しています。この道路も、過去、中山峠・三又路付近に、何度かの新設改修があったようです。

（イ）集落の東端字立輪から中山峠へぬける区間は、北は山、南は谷、しかも、勾配も相当あって、道路建設上も通行上も難所でありました。古くは、図①のように立輪の県道から一〇〇m程南東に入り、馬頭観音のある山の麓を通って峠に出る道が主要道でした。今も残っています。

古老の話では、昭和三年頃、図②のように谷を通した曲折の多い道路が新設されています。道幅は相



当広くなりましたが、砂利道の頃は、依然難所でありました。特に自転車・車力・リヤカー・馬車が運搬の主要具であった頃、荷でも積んでおれば、村の中程を過ぎると後押しの助勢が必要でした。

また、自動車の時代に入っても、先のみえないカーブや、離合も難しく、更に、昭和四十二年、福島橋の開通・高度経済成長の波とともに、通行量・大型車共に増え、一段と危険が増しました。こうしたことで、昭和六十年頃、図③に示す現在の道路が新設されています。

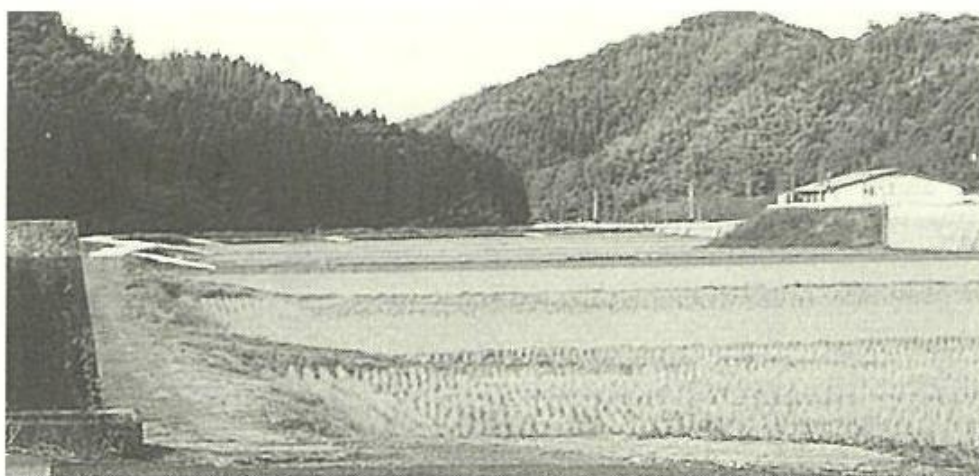
(ロ) 一方、波多津小学校校門前から、三又路に至る道路図⑤は、昭和十八～十九年頃新設されたもので、それ以前は、校門前から波多津川沿いに東上し(図④)、下田橋で左折して田嶋神社前に出ていました。伊万里から浦へ通う西部(西肥)バスも、ここを通過しておりました。

聞くと、三又路から校門前の道路は、当時、徴用された十数人の韓国人労働者が、今の体育館近くにあった武雄某の納屋を宿舎にあて、区有地であった三又路の山を崩し、トロッコで土砂を運んでできたものだそうです。終戦前の緊迫した時期で、衣・食にも事欠く中、食糧増産・一億総武装が叫ばれる頃でした。

この道路も改修が加えられ、昭和五十年には舗装・通学路もでき、更に近年拡幅整備されて、街路樹のある歩道までできています。



昭和のはじめ中山峠への道



学校前川沿いの道

### (3) 波多津採石と三岳

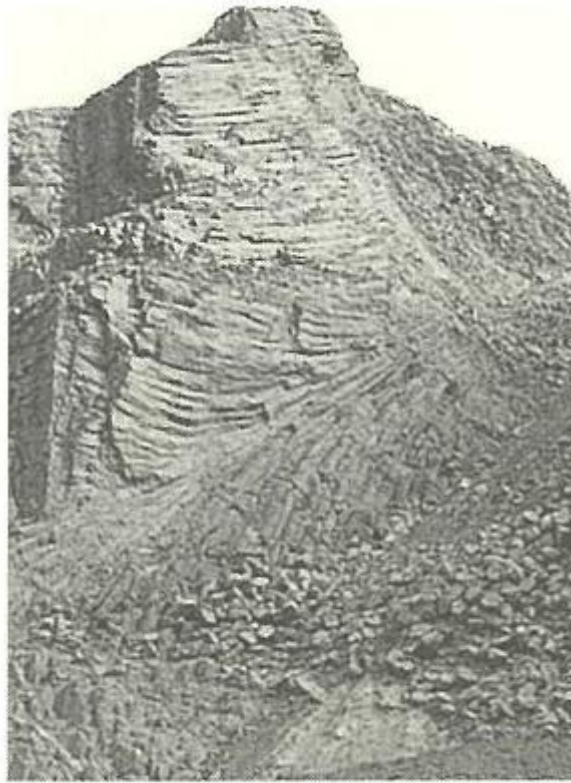
有限会社波多津採石は、多久市に本社をもつ（株）タニグチグループの一つ。

昭和四十一年、某氏が、ここ三岳の現在地に採石場を開設、翌四十二年八月に（株）タニグチが買収、操業が始められて現在に至っております。三岳の岩石は玄武岩で、生コンクリート用の碎石として最適の岩質をもつそうです。しかも、表土が少なく、各地への運搬にも便利という好条件の中、規模も徐々に拡充され、当初三反歩程のものが、現在では二十二町余、月産二五〇〇m<sup>3</sup>にも達しています。

一方、三岳の山は、畑津のシンボルとして秀麗を誇り、遠足で登ったり、校名に使われたり、運動会の応援歌にも歌われておりました。「三岳山下に秋満ちて、黄金の波のゆれるとき」とは、運動会が近づくと、誰が指導するでもなく歌われておりました。これも終戦前のこと、運動会は十月十日と決まっていた。

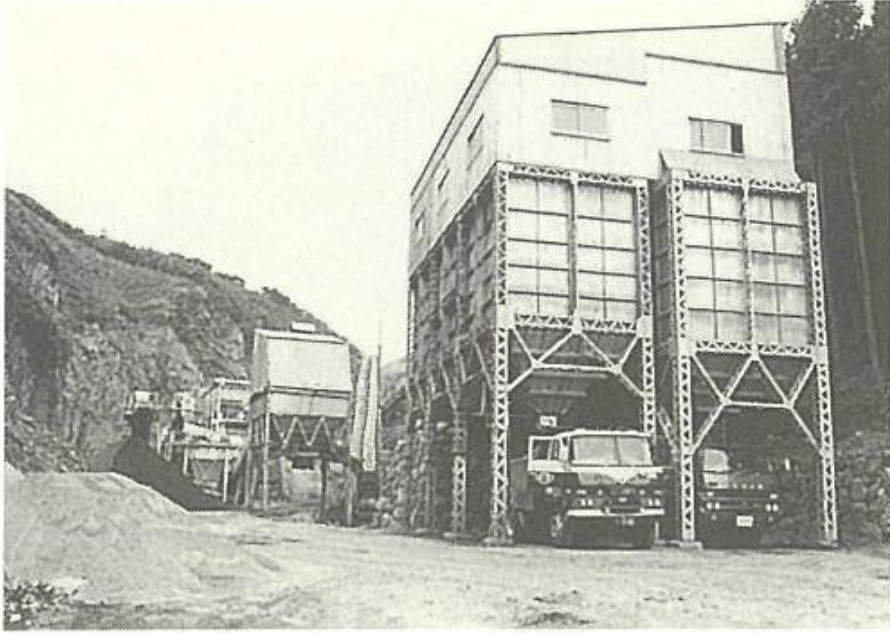
その三岳も、西側は採石されて姿を変え、頂上は崩落して低くなっています。三岳には、私有地と区有地があり、その判断には、いろいろと苦慮されたと聞いています。

註 これまで引用した古書の中には、その内容に信憑性を疑問視される史家があることを付記します。



変容した三岳頂上西側

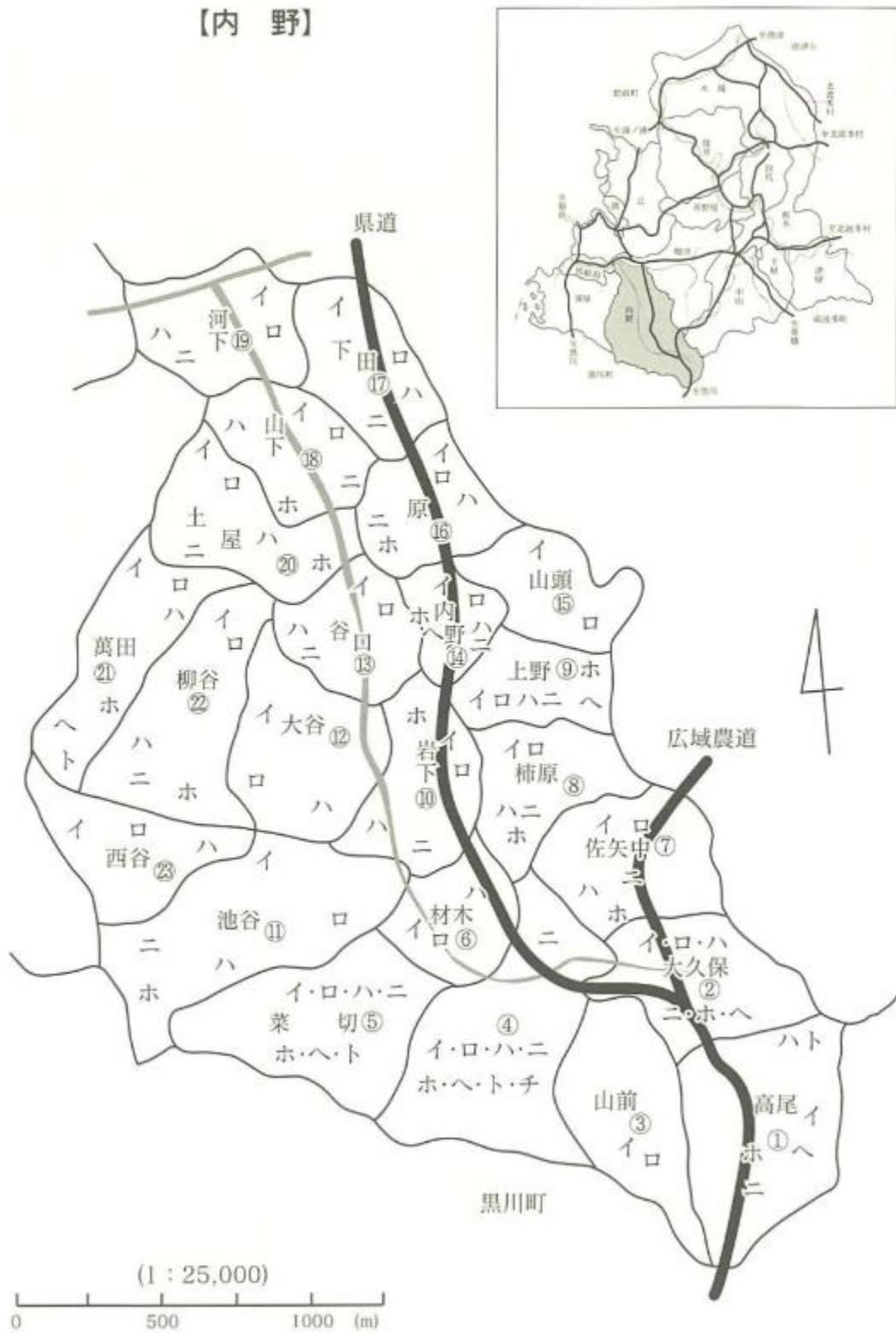




波多津採石

内野

【内野】



内野

小字名	生活地名	小字の中の要点
番号と 登記地名 説明	日常生活に使う住民の作り出した 地名(カタカナ符号、ひらがな地名)	地名のいわれ・史跡・遺跡・お宮・お寺・文化財・ 公共設備・交通設備など
①高尾	イ、ふるかわ ロ、なしのきだに ハ、ひうこうら ニ、たけんした ホ、かないし ヘ、かがみね ト、みちやま	貝が峯、一三七米黒川町の境界、波多津町一の 高さ。木場から来た広域農道と波多津、畑川内、 府招、古川、大川、巖木地方主要道がここで交差 して畑川内へ行く。
②大久保	イ、かつき ロ、ひのくち ハ、ま つのもと ニ、ううくじも ホ、 こくだし ヘ、ほとけのだいら	イ、かつき―木の根株(畑) ニ、大久保下の転訛 ヘ、寺の花松にちようどの小松の生えた野原
③山前 <small>やまのまえ</small>	イ、びくりんひら ロ、あなんさこ	
④永田	イ、ながみの口、やまいんだに ハ、わらべほつだ ニ、さんびやく だ ホ、ひやどこ ヘ、ほんだに ト、こうのす ち、たぶのきだに	昔、黒川村奥野集落へ越す最短の山道があり、 よく利用されていた。

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑤菜切	イ、にしんたに ロ、よこんだいど ハ、どろめき ニ、えんしゅうい わ ホ、みやぎへ、むさしいわ ト、わりしだに	この谷は堆積岩の露頭が大きく出ていて植林には適切ではないが、住民はがんばって昔水田・今植林に精出ししている。
⑥材木	イ、ぎぎのくち ロ、ためした ハ、 のぞえ ニ、おろしばた	大溜のある字、東の谷は長田、西の谷は菜切で杉松の植林が茂り流込面積も広く水量も多大。 ハ、のぞえには古い墓地が五軒分あった。
⑦佐矢中	イ、しまんもと ロ、うそんたに ハ、たつし ニ、ううづくし ホ、 うそんはる	水量の豊かな谷。中腹は背後に山を負い南が開けて陽光がよく当たり、みかん園が開墾されている。古代の石器が出土した当時、もっとも注意して精査しなければならぬ地域であった。
⑧柿原	イ、こうそんたに ロ、はしりやが り ハ、いしどんはる ニ、つぐろ だに ホ、かきのきばる	国見山麓広域農道が中山から登ってきて高尾を通り黒川町、伊万里へと延びていく。柿の木原の低地には、住民の屋敷が出現してくる。
⑨上野	イ、はかやま ロ、よこばたけ ハ、 ばんば ニ、たかみ ホ、なぎやり へ、ううさこ	墓山(集落第一に多数の関係者)を囲んで道が通じ家が建ち、活力がみられる。上組・中組・原組がここから下の方に展開していく。



小字名	生活地名	小字の中の要点
⑩ 岩 下	イ、にほぎいで ロ、かたひらいで ハ、にほぎ ニ、とおの ホ、やけ やま	じょうのの辻―村の中心、共同アンテナ設置 やけやま―病牛、馬の共同墓地があった。
⑪ 池ノ谷	イ、ひとつばし ロ、ふじのもと ハ、きどいわ ニ、いがくら ホ、 いろはいし	ホ、いろはいし―黒川の有志で弘法大師の霊場を 設営してある。
⑫ 大 谷	イ、さるまぶし ロ、かくしだ ハ、 いのしもんたに	ロ、旧藩時代年貢のがれの狭い田があった。
⑬ 谷 口	イ、かじや ロ、はんどがめ ハ、 どおんうら ニ、ううたに	移動かじやの作業場があったので、いつのまにか 附近をかじやというようになった。
⑭ 内 野	イ、てらんまえ(たかみ) ロ、てら のした ハ、ふるやしき ニ、たに ホ、かみやま ヘ、うまがみさま	法徳寺、公民館のある集落の中心地。人家が四 十軒。
⑮ 山 頭	イ、なぎやり ロ、はんどいわ	山頭―寺の上―上野にかけて畑津境界の山の中 腹に畑が広がり、みかん・梨・野菜が栽培される。



小字名	生活地名	小字の中の要点
⑬原 <sup>はら</sup>	イ、げしろ ロ、つつみのはた ハ、つつみのうえ ニ、ふながわ ホ、こうじや	庄屋屋敷(本家・新家)
⑭下 <sup>しも</sup> 田 <sup>だ</sup>	イ、てんじばる ロ、すぎそのハ、やがたに ニ、いのうえ	天満神社があつた跡の田原。砒泉が出る所の上の畑原(天保年間の庄屋記に「先代を井の上山に葬る」とある)
⑮山 <sup>やま</sup> 下 <sup>しも</sup>	イ、まるだ ロ、くびれ ハ、まつ のうえ ニ、てのこぎ ホ、わたう ち川	落合井手Ⅱ内野川と畑津川の合流点。波多津小学校真向うの山の中腹に飯盛神社があつた。
⑯河 <sup>かわ</sup> 下 <sup>しも</sup>	イ、えんのもと ロ、こばえ ハ、 ごんげんやま ニ、おちやいで	福田に通じる道路に面した所。集落本通り(南北)に対して西に延びる家並・伊勢皇太神宮を祀つてある。
⑰土 <sup>つち</sup> 屋 <sup>や</sup>	イ、うめのきだに ロ、かせどり ハ、ふたみち ニ、よこみち ホ、 おいせやま	煤屋清久保に隣接している土地。カンネカズラがよく繁茂する土地。
⑱萬 <sup>まん</sup> 田 <sup>だ</sup>	イ、すすやせいくほ ロ、かんねが さこ ハ、ひるめしだ ニ、うまご	煤屋清久保に隣接している土地。カンネカズラがよく繁茂する土地。

小字名	生活地名	小字の中の要点
	<p>だ ホ、こーや へ、にしごち ト、 とうげ</p>	
②② 柳ン谷	<p>イ、さかんもと ロ、みずあらい ハ、ひょうごろう ニ、こぜがみ ホ、たたかり</p>	<p>昔、こぜさんが行倒れた場所に、簡単な標識を建てて師走の二十五日に毎年きまってお詣りする奇特な人がおられる。(目の不自由な女・物乞い・放浪者)</p>
②③ 西ノ谷	<p>イ、しらこんさこ ロ、いぼいし ハ、あかし田</p>	<p>固く小さく、まるっこい石を含んだ砂岩(いぼいし)が多い地域。</p>



## 内野区の集落

県道五十二号線（新田一行合野）の田嶋神社前から南に走る県道三十二号線の中軸にして内野の盆地が開ける。掌形の農山村特有の圃場は主とする稲作の他にキュウリやイチゴ等のハウス栽培が行われていて今日的な農業経営の姿をうかがわせる。

東・南・西の蹄状<sup>ひづめ</sup>に連なる丘や山は、杉などの植林がなされているがモウソウチクの竹林が点在し各家々の庭先には柿の木など植えられ四季を通しての豊かな生活環境に恵まれている。

内野の歴史をひもとくと、慶長絵図（豊臣秀吉－徳川家康・秀忠のころ）には、「内野村・波多津ノ内」と記名がある（日本歴史地名体系－佐賀県の地名より）

文化年中記録によれば「畝数十五町二段二畝八歩半」とある。当区内の真宗大谷派法徳寺開基の空円は、波多三河守の家臣・井手野の新久田城主井手飛驒守橋度源で、西念寺<sup>さいねん</sup>（現大坪町）も建立したという記録もある。

この記録には隣接の畑津村、中山村の記録もある。松浦拾風土記によると内野村は、畑川内村、花房村、長尾村、真手野村、重橋村、谷口村、畑津村、辻村、畑津浦、馬蛤潟新田と共に畑河内組に属している。

なお煤屋村は黒川組に属し、板木組には、板木村、主屋村、津留村、中山村、田代村、井野尾村、筒井村、木場村、杉野浦村、湯野浦村が含まれている。

松浦拾風土記による内野村の記録が次のように掲げてある。

### 一、田畑高 二百八石六斗五升五合

畝数 十五町二段二畝八歩半  
石高 百四十七石六斗二升五合  
石盛 田 二石六斗ヨリ一石迄

御免六ツ三分二

畑 一石二斗ヨリ三斗迄  
家数 五十一軒 一軒ニ五人三分  
人数 二七〇人 内 百五十六人 男  
百十四人 女

氏神 天満宮 祭礼 十一月十七日 徳末 堤出雲  
牛 六疋 馬 六疋 威鉄砲 一挺

東本願寺末寺 光月山法徳寺 開基 寛永十六巳卯年 空園法師

小学生のころ、波多津小学校の南、波多津川にかかる木橋を渡って通称権現山に数名の友達と何度か遊びに行ったことがある。

すると、その山中にこけむした古い石垣の社やしろの跡があるのを気づいていた。成人してから調べてみると確かに権現さんと言う飯盛神社跡であった。

また、集落の北に位置する下田は集落の中で広々とした圃場で美田が畳を敷き連ねた様に広がっているが、その昔天満神社が在ったことを庄屋記に記されているようだ。



### 元 庄屋屋敷・現 鶴田家

昔の村々（現在は殆ど区）には伊勢皇太神宮を祀る社があり現在も区の祭祀さいしの伝統的な一大行事であるが、当区では字・土屋・通称よこみちにその森がある。

小高い森は、社の長い歳月を物語るようにタブノキやアラカンなどの巨木が茂り神域をただよわせている。

中心になる碑は自然石であるが碑文は解らないように風雪に風化されているが、皇紀二千六百年を記念して整備された。主碑と並び菅原道真公まつを祀る天満宮の碑が並んでいるのは、菅公の至誠、学問への崇敬の念を心した区民の表れでありましょう。

この社を区の老人クラブで毎月清掃され区の象徴の森となっている。





## 土屋(よこみち)のお伊勢様のやしろ

太平洋戦争の名残りとして区の公民館入口南側に大きな忠霊碑が白い石英の台座の上に輝いている。陸軍を表す星のマークと海軍を表す錨のマークを重ねた印は特に印象的に光っている。心して佇<sup>たた</sup>ずむと、昔日の思い出がほうふつと甦る。

「聞け海神(わだつみ)声」—海ゆかば みづくかばね 山ゆかば 草むすかばね…太平洋の戦域の当時のニュースを思い出す「麦と兵隊」は旧き時代<sup>ふる</sup>の者よく歌ったものだ。

戦友<sup>とも</sup>を背にして道なき道を 往けば戦野は夜の雨 すまぬすまぬを 背中に聞けば  
馬鹿をいうなとまた進む…

碑中には戦没者の名前が並ぶ、あの人、この人、若い日の思い出を探ろうとすると時間が過去の時代を追いすがる。

区では春と秋に二回慰霊祭が行われる。

公民館と向かい合わせの道路東側に道路改修記念碑が建っている。元の消防倉庫横で、ほぼ区を中心点にあたり、字内野の法徳寺方面への道の交叉点に在る。三岳産と思われる玄武岩の柱状節理に碑文が刻まれ全戸に亘る寄付者名が広く連ねてある。





道路改修記念碑

道路改修記念碑 解説碑文

地方文化ノ興隆民衆ノ福利ハ交通ノ發達ニ俟ツコト大ナリ  
区民之ヲ望ムコト久シ  
氣運茲ニ熱シ第一期事業トシテ昭和五年二月ニ起エシ  
同六年三月ニ至リ田嶋神社前ヨリ字材木間壱千七十有餘間  
ヲ竣エス

※書 元小学校長（内野）  
藤本東三郎先生

※寄付者芳名  
小杉定治 八拾円  
他 全戸

波多津川の支流内野川は今も清流をもって区内を南北に縦貫する。上流付近にはホタルが夏の夜を彩る。

川にはハヤやフナが淵にすむ。古き時代、花房より歩いて波多津尋常高等小学校に通勤されていた先生はハヤ釣りの名人で土曜の帰途釣りを楽しんでおられたことがエピソードとして残っています。

内野区に北より少し入った字・原には石材屋さんがあり、ハイテクの方法で形成した色々の石像が並んでいるのに目を引く。

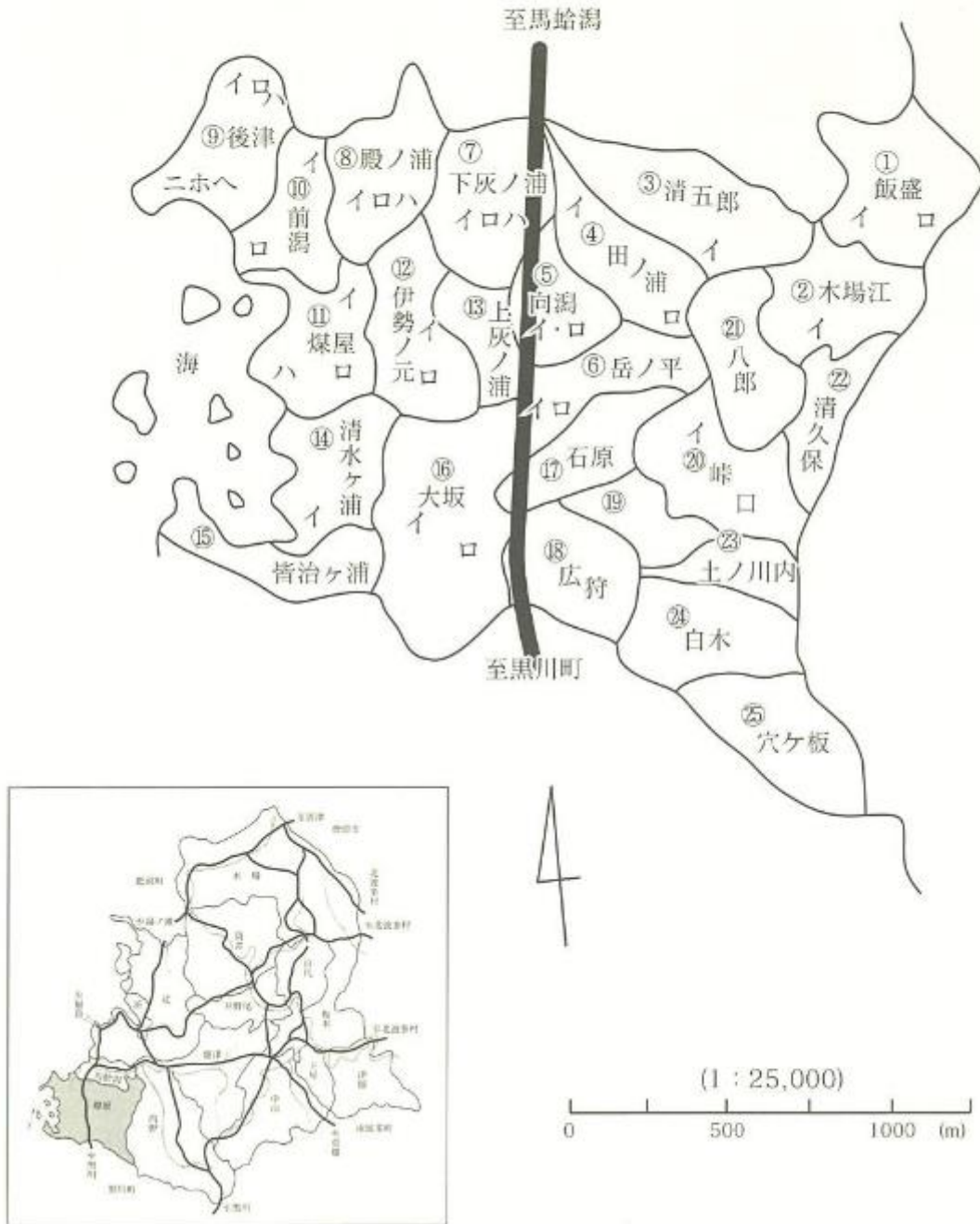
楽かな自然美溢るる農村の中で時代を駆使した製法また、人々のニーズに合った耕作など新しい息吹を見ることが出来ます。



内野入口石材店のユニークな石像

煤屋

【煤屋】



煤屋

番号と 登記地名	説明	
	小字名	生活地名
①飯盛		日常生活に使う住民の作り出した地名(カタカナ符号、ひらがな地名) イ、ばんにんのたに 口、こいりも
②木場江		江戸時代に番人をおいて海岸警備に当たさせた。地名となって「番人の谷」
③清五郎		葦ん谷(葦が繁茂していた土地)
④田ノ浦		山の神を祭った山。神山、越道
⑤向潟		湧水の温度が低くて、田の温度が上昇しなかった。
⑥岳ノ平		清水、上り口(旧道から台地上るところ)
⑦下平浦		新田組 沖田(灰の浦新田の北方―海に近い方) 灰田道

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑧ 殿ノ浦	イ、いそみち ロ、せんぐら ハ、 どうんたに	八大龍王碑〔三回建替、宝永二年（一七〇五）、 文政五年（一八二二）、明治十年（一八七七）〕煤 屋新田の守護神 薬師堂の裏の谷
⑨ 後 津	イ、ひのうらだに ロ、ふるだ ハ、 すすやざき ニ、わたしざき ホ、 わたりざき ヘ、たつのせど	波多津の最西端（波多津の西崎→煤屋崎のこと） 福島に高压電線を通す。 イ、日の浦―福島の炭 坑に一ばん近い海岸 ロ、煤屋で一ばん古い新田
⑩ 前 湯	イ、とくすえしんでん ロ、すえざ き	
⑪ 煤 屋	イ、ひゃーとーみち ロ、こうさつ ば ハ、つじやまみち ニ、ふなと やま ホ、こばまみち	昔から煤屋集落の中心地域、公民館・地区倉庫所 在、納骨堂、忠霊碑、黒男神社 イ、拝頭道（拝頭道が変化してヒヤートウミチ） ロ、高札場
⑫ 伊勢ノ元	イ、どうふう ロ、しろいわのはな ハ、いせさま	伊勢皇太神宮碑所在 陸地測量部の三角点所在
⑬ 上灰ノ浦		かいたく新田のうえのほう



小字名	生活地名	小字の中の要点
⑭清水ヶ浦	イ、おじがうら	波多津漁協のえび養殖場がある。
⑮皆治ヶ浦	イ、おきのしま	波黒炭坑の坑口がある。
⑯大坂	イ、ぜんもんいわ ロ、だじ	堤二面がある。ロ、駄道（農作業にいく牛馬の通った道）
⑰石原		昔、洪水のため石の河原となった所
⑱広狩	イ、こんつみ ロ、きつねつか ハ、こまつぼり ニ、かみひろかり ホ、しもひろかり	
⑲四畝町		集落の共有林を四畝ずつ配分したことから起こった地名
⑳峠	イ、せんぼし ロ、きじのくぼ	
㉑八郎		
㉒清久保	イ、かねがさこ	

②⑤ 穴 ケ 板	②④ 白 木	②③ 土 ノ 川 内 <small>こつら</small>	小 字 名	・  生 活 地 名	小 字 の 中 の 要 点
イ、たかひら ロ、いぼいし	イ、びゃんこ				灌漑用の溜池 <small>うま</small> がある。

## 煤 屋

### 一、集落の歴史

煤屋は波多津の南西部に位置し、丘陵と新田（干拓）が主で、小字には浦や津、潟、灰、江のついた地名が多く、住宅は丘、谷間、山の下、山の中腹と点在しています。

江戸時代以前の煤屋村は、岸岳城主波多氏の領内、黒川姥城の支配に属していましたが、波多氏没落後は唐津藩領となり、慶安元年（一六四八）幕府領、同二年から従前の唐津藩領となり、黒川組に属していましたが、明治維新後も一村として位置づけられていましたが、明治二十二年町村制の施行により、大岳村（現波多津町）の大字となり、冠称はかわりましたが、現在に至っております。

因みに、文化年間（一八〇四～一八一七）頃の田畑高二四三石余、畝数二十五町余、年貢率五割九分七厘から一割、家数二十九戸、人口一四五人、馬二十、牛十一の記録があります。

## 二、庄屋跡と黒男大明神宮

### （１）庄屋屋敷跡と拝頭道・高札場

字煤屋に、慶応三年まで庄屋をつとめた佐伯熊作（慶応三卯三月十一日卒、功雲自徳居士・墓は字煤屋に在）の屋敷跡近くの道路を拝頭道と呼び、庄屋が村人に知らせる掲示板（高札）を立てた所として、高札場（旧道三又路土橋の上）の地名が残っていますが、現在は市道の敷地になり形跡はありません。

### （２）黒男大明神宮

大明神宮がいつ創建されたか、その由来も確かなことはわかりません。

「唐津領惣寄高」の中には、「氏神 九郎大明神 掛り 福田村 坂口守人」とあり、言い伝えでは、「往時、島津の漁夫が、煤屋崎竹生島近くで操業中、漂流していた御神体（御神符か）が、漁網にかかったので大事に拾いあげ、煤屋海岸古神山の一角に小さな祠を建てて祀ったのが起源で、当時は浜の漁夫が、御神酒・御供飯・掛の魚を供えて参詣されていた」ということです。（田村マヨ・吉田定兵衛の話）

詳細は知ることはできませんが、社の棟木銘や鳥居銘によって、いくつかのことが知られます。

- ①棟木銘 黒男大明神宮祠建立 第百拾六代桃園天皇（一七五三）宝曆三癸酉六月吉日  
社人福田村 坂口守人 庄屋（不詳）  
名頭 格右衛門 惣代 亀蔵  
（此の時 古神山は島で参詣に不便な為、現在地小島へ移す）
- ②鳥居銘 黒尾大明神宮鳥居建立 第百貳拾代仁孝天皇（一八四二）天保拾参年壬寅歳正月吉辰経営  
願主 氏子中 庄屋 佐伯熊作 名頭 善九郎  
惣代 東蔵 浅吉
- ③棟木銘 黒尾大明神宮再建 第百貳拾貳代明治天皇 明治拾貳年巳卯年九月穀旦  
社人塩屋村 牧野 傳 当番 岸本広右衛門 田中和助  
大工 内野村 脇山善四郎 悴 与助

の記銘がみられます。

以後 明治四十一年、畑津の田嶋神社に合祀されましたが、明治四十二年八月、トントン坂に移転（宮司田村力太郎）、更に昭和二十三年八月に現在地に移転されております。尚、平成二年七月、拝殿が建替えられました。祭神は蘆原醜男命アシハラシコノミ（大国主命）、大巳貴命オオナムチノカミ、顯国魂神ウツシクニタマノカミ、ほか六神が祀られています。（田中繁の記録による）

## 三、馬蛤潟（煤屋）力武新田の干拓（第八章産業の項参照）

### 四、波多津町馬蛤潟地区内湛水防除事業

昭和四十二年から四十六年にかけて進められた潮遊びの干拓は、農地十二ha余、その他三ha余の土地を生みましたが、思いのほか自然は厳しいものでした。

昭和四十九年七月十八日付西日本新聞は、「伊万里市波多津町で排水施設工事」の見出しで、「波多津町馬蛤潟地区が、五十mmの降雨があると、約七十二haの農地に水がたまるなど被害が出る為、このほどから、排水ポンプ施設造に着工した。干拓十二・二haを四十五年に造成以来、被害が繰返していた。このため、伊万里湾に注ぐ樋門のわきに、鉄骨平屋建一五四㎡のポンプ小屋を建設し、千mm一五馬力、七〇〇mm七十馬力の排水ポンプを、それぞれ一基ずつ据付ける。ポンプは、千mmが一秒間に二t、七〇〇mmが同一tの排水能力、完成は五十年で、工費は約一億二千万円、ポンプは重油を燃料としており、どんな暴風雨でも威力を発揮する」と報じています。

この施設は、昭和四十六年申請され、五十一年三月竣工、水害、塩害から農地を守っています。



潮遊びの干拓地

## 五、波黒炭坑跡

昭和七年五月、ニタン谷坑内（藩政時代に採炭した炭坑口の跡）の水をくみ出し、坑内を調査中に、皆治ヶ浦付近の炭層を確認、飯塚市の森本要造（鉱業権者）が、煤屋田中三郎より皆治ヶ浦新田を借受け、坑内夫数人を雇い、住宅を建て採掘準備にかかりました。

昭和九年、黒川村福田に事務所、貯炭場、船積用棧橋、ボイラー等諸施設を完了、波多津村と黒川村に施設ができたので波黒炭坑と称されました。皆治ヶ浦を本坑として、同時に、福田の大久保に坑口を開き、煤屋字穴ヶ坂に向かって掘進を始め、最盛期は昭和十年より十四年頃で一日の出炭量四十～五十t、福田字松葉の県道を横切り、福田新田に動巻で下し、それからは海岸洗炭場まで馬によって運搬されていました。

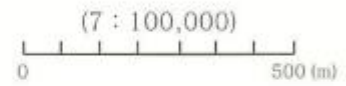
昭和十四年頃の坑夫住宅は、五戸続きの長屋で、皆治ヶ浦に四棟、福田字道切に四棟、大久保に二棟の合計十棟が建ち、人口二百数十人、坑内夫百五十人、坑外夫四十人程でした。

## 六、まつり

- (1) 「百々手」「イトマゲ」「ウチムキャ」については、第七章参照
- (2) 夏祈禱 六月、無病息災、五穀豊穰を祈願する。福田境と馬蛤潟の境に縄を張り立札を立てます。立札には、「疫病齋神勢強健諸災消除大字中鎮安守護」と書き、縄の（コ）は、「九、八、十、三」と張ります。
- (3) 龍神宮祭 十二月二十一日、灰ノ浦新田が豊作であったことに感謝して、龍神宮田約五畝歩でできた初穂をたいて龍神宮にお供えする。賄役は家順七名、毎年交代で龍神田を耕作します。
- (4) その他 筑前愛宕神社詣は四名一組、伊勢講、薬師様、秋願成就、山ノ神祭り、他。

# 馬蛤潟

## 【馬蛤潟】





馬 蛤 潟

番号と 登記地名	説明	
	小字名	生活地名
①小灰ノ浦	イ、おおたに	日常生活に使う住民の作り出した地名(カタカナ符号、ひらがな地名)
②蒲 原	イ、おきだ	地名のいわれ・史跡・遺跡・お宮・お寺・文化財・公共設備・交通設備など
③先ノ塩屋	イ、むかえ ロ、いわんもと	大谷堤、西部共同乾燥場、煤屋馬蛤潟消防器格納庫、波多津西部基盤整備完工記念碑
④白 潟 <small>しほがた</small>	イ、いいもりした	波多津自動車陳列場
⑤午ノ木 <small>うまき</small>	イ、いわのした	畑原 牛舎、豚舎 番人の小屋
⑥力武新田	イ、かんたく	養鶏場、公民館、竜宮神社
⑦馬 蛤 潟	イ、まえだ ロ、かしのきびら ハ、ひやあくばな ニ、まつのもと	千拓堤防、八大龍王碑、八坂神社お旅所、大型排水ポンプ場 屋敷のすぐ下、集落公民館

馬 蛤 潟

一、集落の誕生

おおかたの集落は、いつごろ、どうしてできたのか、はっきりしないのが普通ですが、馬蛤潟の場合

は、宝永五年(一七〇八)二十二町歩余の馬蛤潟新田完成後、正徳二年(一七一二) から入植が始まり集落が誕生しています。(詳細は第八章産業の項参照)

その後、唐津藩は、入植者一人に付、年間米三俵を三年間貸与したり、家屋の建築に便宜をはかる等(馬蛤潟新田思召立覚帳)の施策を講じていることからしても、新田が、すぐに生産に結びつくものではなく、耕作はもちろん、普段の生活にも相当の苦労があったものと推測されます。

また、新田に入植が始まってから、およそ一〇〇年後の文化年間頃(一八〇四~一八一七)の反当り収穫高は、周辺の集落と大差はありませんが、年貢率が周辺集落の六割前後に対して、馬蛤潟新田の年貢率が三割二分四厘(松浦拾風土記)と非常に低いのも、ひどい塩害や水害等の悪条件が斟酌されたことではないかとも思われます。



馬蛤潟新田開拓者 土井公の墓

## 二、集落の運営 一初会議協議事項綴から一

馬蛤潟には、当年度の運営に関する初会議の重要事項を記録した綴が、明治三十八年分からあり、区長代々の引継書類となっています。これによると、当時の村の生活や変遷の一端が察知できます。

明治四十五年の初会議事項を書き出してみますと、

- 一、農区事業トシテ春秋二回(一回三人ヅツ)農事視察ヲナス、但シ方向ハ視察員適宜ニ任せ、手当金ハ一人ニ付一円ヲ給ス
- 一、青年夜学会ノ費用ハ前年ノ通り補助ス
- 一、今年ヨリ穀物ノ御初穂蓄積ヲナス
- 一、畦道、ヨセ処、三隅ノ脇道ハ盛土ヲナシ修理スルコト
- 一、田ノ畦畔、今春必ズ大<sup>ひろ</sup>ムルコト、又 畦元株耕シ謹シムコト
- 一、道路ニ接近シテ植物ノ栽培ヲナスベカラズ、又果樹等モ隣地ノ妨ゲヲ為スモノハ枝払ヲナスコト
- 一、米講、金講発起又ハ終リノ際、ヒラヲ除キ、吸物ハ全体ヲ除ク。又、講数多キ者ハ合併開札ヲナスモ妨ゲナシ
- 一、字会、諸役目ノ遅刻処分法ハ前年ノトオリトスル
- 一、字内ニ於テ火災ニ遭遇シタル時、義損寄付トシテ共有金ヲ使用スルコト、ソノ額ハ場合ニ依リ定

ム

一、今年度ニ於テ消防機買入レヲナス

一、八坂大神ノ御幸行ニハ、必ズ一戸一名ヅツ往復オ伴ヲナスコト

一、祝祭日改正 天神講<sup>二月二十五日</sup><sub>八月二十五日</sub> 川祭<sup>春</sup><sub>秋</sub> 雛祭四月三日 幟節句五月二十七日  
御日待一月十八日 伊勢講一月、九月、十一月の各十一日  
当日ノ会費 前年通り

一、船渡金十八円 <sup>八円与市</sup><sub>二円東作</sub> <sup>八円幸助</sup><sub>二円松右エ門</sub> 渡方<sup>六月八日</sup><sub>六月九日</sub>

納入期日 三月二十五日、五月二十五日、九月二十五日、十二月二十五日

とあり、二・三の事項を割愛しましたが、現在にも通用する取決めもあり、運営の確かさが伺えます。

### 三、力武新田の沿革（第八章産業の項参照）

### 四、まつり

#### （1）竜神まつり（ひげいもまつり）

既述の馬蛤潟新田の干拓工事は、大変な苦労があったようです。特に、激寒の正月から始められた大堤防潮止め工事と樋門の難工事は、寒さと疲れとの闘いでもあったようです。近隣の村から寄せられた五〇〇人、八〇〇人、時には千人からの百姓土工たちが、激寒時に昼となく夜となく、所謂潮干工事（昼夜に関係なく干潮時に作業をすすめる工法）で強行、三月には完成するという驚異的なはたらきと苦労があったようです。そのご恩に感謝して、毎年、一番寒い旧正月の元日に、全戸一人づつ、田嶋神社に集まって、報恩感謝と豊作祈願の神事を行います。その中で「えそ」（当日の準備・世話役）の給仕で、ごくうさま（白飯）に、ひげのついた里芋の潮煮をのせ、御神酒をかけていただきます。食事も休憩も、ゆっくりできなかつた百姓土工や、工事に携わった人々のご苦労を偲び感謝する祭りです。

#### （2）祇園祭り

以前は旧六月十五日がお祭りでしたが、現在は七月十五日になっています。当日は、畑津の田嶋神社より御神降になり、馬蛤潟堤塘で神事があります。以前は町内はもとより、町外からも参詣者が多く、出店が立って賑わいをみせていましたが、今は神事と少数の参詣者があるのみで淋しくなりました。



ぎおん祭お下り風景

#### （3）馬頭観世音・観音様のまつり



公民館前に「牛魂の碑」があります。昭和八年八月建立されたもので、碑文には「馬蛤潟区産業の一助として飼牛を肥育し、年々之を屠殺場に送る 而も人類営利のためと雖も 此の犠牲者たる無慈悲の動物に対し同情と感謝なき能はず（後略）」とあり、毎年八月十日、馬頭観世音と道上の観音様のお祭りを一緒に、田嶋神社宮司を招き慰霊の神事が行われます。

#### （４）豊作祈願と龍神社

二百十日は、古くから台風による被害が心配される時期で、この日は村中が集まり龍神社に安全を祈願しています。祈願祭典後は、公民館に一重を持参し、お神酒が振舞われ酒盛りが行われています。

二百二十日、この日も時間を定めて参詣しています。

また、二百十日から二百三十日まで、毎日夕方、祈願のため灯明を捧げています。こうして、二百三十日が過ぎると、都合を見て御願成就のお礼詣りがあります。

尚、年間を通して、月の一日と十五日は、家回りで龍神社に灯明を捧げ、家内安全と五穀豊穰のため参詣しています。

この龍神社は、明治四十年九月、田嶋神社に合祀されましたが、海上安全、五穀豊穰、地域住民の守護神として分祀され、今でも氏子の崇敬を受けています。

祭神は海童命・宮司は大川野の田中義矩、木造瓦屋根、創建年代不詳

#### 田嶋神社への合祀願文

無格社 龍神社

右ハ信徒少数ニシテ累年久シク頽廢シ、到底維持ノ見込無之而已ナラズ祭祀迄モ行届キ兼不候間今般全村畑津村者田嶋神社へ合祀仕度候間、御許可被成下別紙双方明細書添属信徒惣代並ニ社掌連署ノ上此段奉願候也 明治四十年三月二十八日

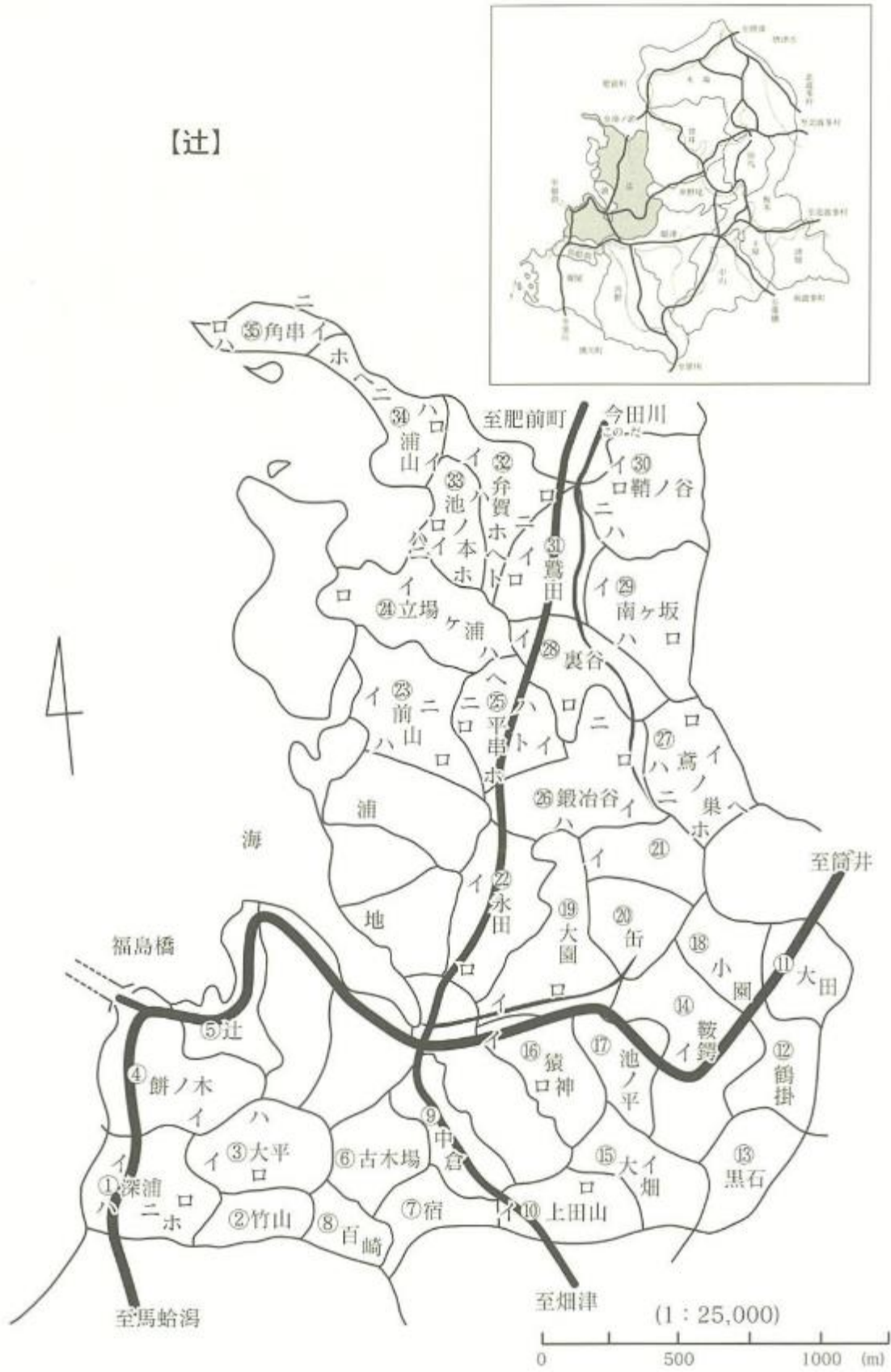
社挙 田村力太郎 信徒惣代 辻兼太郎 井手宇太郎 柴田友太郎

この願によって、同年八月、佐賀県指令収佐第四十七号をもって合祀が許可されています。



龍 神 宮

【辻】





辻

小字名	生活地名	小字の中の要点
番号と 登記地名 説明	日常生活に使う住民の作り出した 地名(カタカナ符号、ひらがな地名)	地名のいわれ・史跡・遺跡・お宮・お寺・文化財・ 公共設備・交通設備など
①深 浦	イ、みすみ ロ、ほんでん ハ、し んでん ニ、びわんめ ホ、ほけん たに	土地改良竣工記念碑、水神様
②竹 山		馬蛤潟との境
③大 平	イ、たんのひら ロ、さがりばた ハ、ぼせんば	地藏様、礼所 ハ、宿場で疲れた馬を洗った跡
④餅ノ木	イ、かわんたに	福島橋基点
⑤辻	イ、おおぜ ロ、こぜ	おおぜは無縁佛 浦と辻で1/2割
⑥古木場	イ、にたの	
⑦宿		宿場あと

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑧百崎		
⑨中倉	イ、うら	浦より小学校に通ずる（旧道）野口製材所の上
⑩上田山 <small>こうだやま</small>	イ、しゅうごえ ロ、とりごえ	浦より小学校への坂道路、行合野に至る。
⑪太田		
⑫鶴掛		中学校の茶園がある。
⑬黒岩		
⑭鞍 <small>くろ</small> 鑿 <small>つば</small>	イ、いちのさか ロ、いわんした	
⑮大畑	イ、へえだんたに	
⑯猿神	イ、しりきりざか ロ、こよんだ	猿神様
⑰池ノ平		
⑱小園		伊万里・呼子線国道、浜新田より井野尾に至る。 お茶園辻区五町

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑲大園	イ、こんにやく ロ、なかぞん	
⑳岳		水源地
㉑夕舟	イ、たけんつじ	溜池
㉒永田	イ、ふつがきこ ロ、ながさきので	
㉓前山	イ、かきのうら ロ、しんでん ハ、りゅうぐうた ニ、かみのはな	護国神社跡、平串新田、水神様、農用水施設所、神の鼻は栗原恒尚氏の土地で、二十五年前農道工事中に一文銭が、ぞくぞく出て、ビニール袋一ぱいになった。村中で金毘羅様に献上した。
㉔立場ヶ浦	イ、しんでん ロ、しらいわ ハ、たちあらいば	滝神様
㉕平串	イ、しみずがわ ロ、たにこ ハ、おたきば ニ、さかぐち ホ、むかえへ ヘ、どうどがわ ト、こうや	三界万霊地藏様、お大師様、佛よせ所、お観音様、お滝場
㉖鍛冶谷	イ、こうきやだに ロ、きつねだに ハ、だにやま ニ、ううだに	三界万霊地藏様、平串飲用及農水施設地

小字名	生活地名	小字の中の要点
②7 鳶ノ巣	イ、ししのくち ロ、かないし ハ、 てんぐまつ ニ、あぐりやま ホ、 せんばだき へ、くろかみさま	監視所跡（戦時中） 雨乞千把だき所
②8 浦 谷	イ、なかみの ロ、しらがいけ	浦谷川（湯ノ浦に至る） 飲用及農業用水の施設所浦谷橋
②9 南ケ坂	イ、このだ ふねばたけ ロ、ひろ みのむこう	
③1 鞘ノ谷	イ、ゆうや ロ、ゆやんたに ハ、 くるまき ニ、しこつた	鞘ん神様 湯やん谷（谷元）
③2 鷺 田	イ、ううまつのきのした ロ、しし ばな	
③3 弁 賀	イ、おくつ ロ、ううひら ハ、な かどうり ニ、あかまつ ホ、こそ の へ、みのんつじ ト、ひご	田嶋神社、五輪堂様、観音様、集落センター、牛 神様、忠魂碑、瓦工場の跡二か所、地区運動場

小字名	生活地名	小字の中の要点
③③ 池ノ本	イ、とんまつ 口、たちばがうら ハ、がんぞぐら ニ、ひやあさき ホ、しろやま へ、しらいわのはな ト、かつぼ	弁賀城跡、立場が浦（刀洗場ともいう）、養鶏場、 新田、瀧神社
③④ 浦山	イ、さきのつじ口、くらと ハ、ひ つちやばたけ ニ、けーど ホ、さ さびやし へ、ふるで ト、ぺんが さき ち、かわんはた	正一位稲荷神社（豊受） 飯盛高綱稲荷神社 海岸護岸工事（平成元年度より）
③⑤ 角串	イ、くびと 口、しろやまごんげん ハ、つぐるせ ニ、ふながくし	城山大権現様 岸嶽末孫、海岸守護の神様

## 辻

町内で辻区ほど集落が分散している地区はありません。その原因は？と考え調べてみても確たる証拠はつかめません。

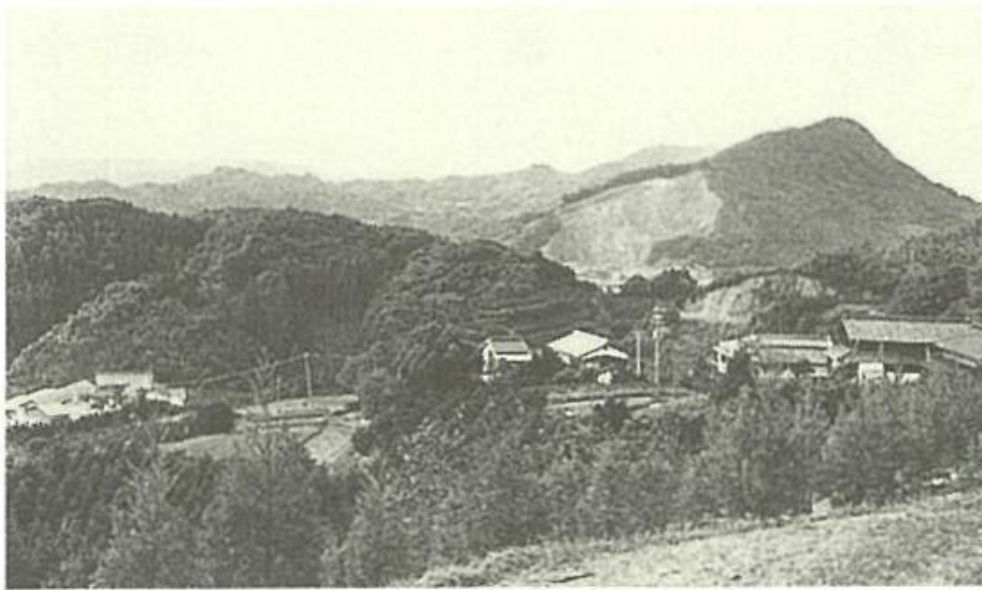


波多津町辻の番地は馬蛤潟の一番地に始まり本辻、郷ノ浦、大園、野林、平串、弁賀へと続いています。

この番地制が採用されたのが何時の頃からか定かではありませんが、これから考えられることは、もともと辻区は馬蛤潟、浦をも含めて辻と呼ばれていたものと思われます。

それ以降、馬蛤潟新田の開発（一七〇七）によって馬蛤潟が分離し、浜新田の開発（一七三六）に伴い漁港として発展した浜に人家が集中し、漁村部と農村部との生活環境上の違いから、自然発生的に利害関係が生じ、浜は浦区として分離独立したのではと想像されます。

従って字図でも分かるとおおり、海岸周辺の浦区が抜けると必然的に取り残されるのは、本辻、大園、平串、弁賀の農村部だけとなります。こう考えると最初の疑問も納得がいくように思われます。



本 辻

### 一、本辻（五戸）

縄文時代の石器が阿弥陀堂周辺から発見されるくらいだから、本辻には大昔から人が住み着いて居た所であろうと思われます。

今の稲葉家屋敷は、江戸時代の庄屋屋敷で西の畑には寺子屋が建っていたと云われています。

阿弥陀さま周辺の五輪塔と多数の石積みは、岸嶽末孫の寄墓地ではないかとも云われています。

- ・祭事
  - ・お観音さま 毎月十七日
  - ・お伊勢講 一、五、九の各月十一日
  - ・金比羅さま 三、六、十の各月十日
- ・その他
  - ・馬蛤潟一本辻一浦間の道路（昭和四年）
  - ・深浦一大平間農道（昭和三十九年）
  - ・ボーリング（昭和五十四年）
  - ・土地改良総合整備事業（昭和五十八年）



阿弥陀さまと五輪塔



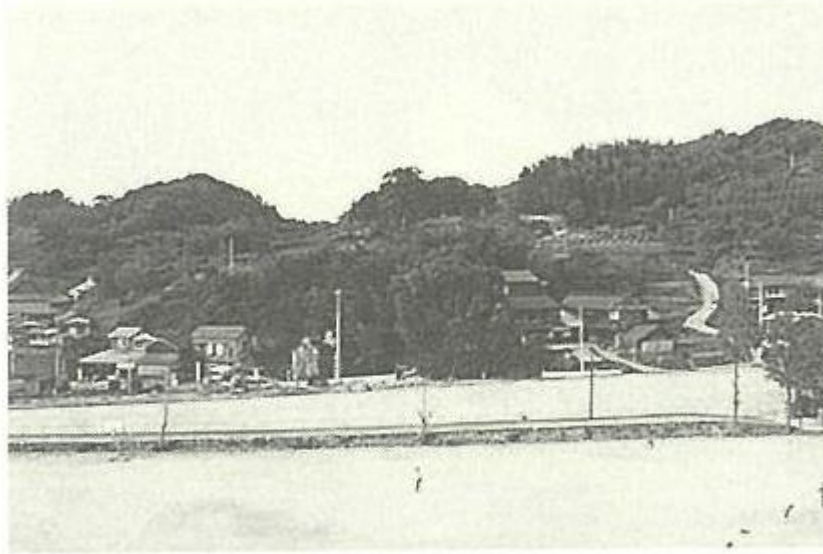
土地改良事業記念碑(深浦地区)

## 二、大園 (ハ戸)

川上与市郎

辻村の庄屋で墓は稲葉家屋敷の墓地に在り、今尚、深浦新田の開拓者として稲葉家より祀られています。

- ・ 祭事
  - ・ お地藏様 毎年八月二十四日  
(年三回のお伊勢講、金比羅さまは本辻と合同)
- ・ その他
  - ・ 仁田一黒石農道 (昭和三十八年)



大園

### 三、平串（十一戸）

- ・ 祭事
  - ・ 五穀神祭 九月二日
  - ・ 観音念仏会 毎月十七日
  - ・ お大師さま 毎月二十四日
- ・ その他
  - ・ 集落内主要道（昭和三十四年。舗装五十九年）
  - ・ ボーリング

昭和五十年、佐賀厚生年金休暇センターの用地として瀬の脇地区が選定され、平串新田にボーリングが施されたが、用地変更により干魃時の営農用水用として地区への払下げを受けました。



平串全景



観音さま

#### 四、弁賀（二十一戸）

- ・祭事及び年間行事(一部含辻区)

一月……家払い田嶋神社宮司さんによって、辻区全戸行われます。

お供は区長さんと宮総代。悪事、災難等の魔除け祈願（九日）

- ・お伊勢講……十一日

二月

- ・お観音さま
- ・太宰府天満宮参拝……飛梅講によって毎年四名ずつ参拝する。帰着後、部落内で内迎えをし次年度の参拝者を籤で決め、一巡後は、講参加者全員で参拝します。

三月

- ・部落初会……例年十日前後行われます。部落の行政、役員を選出、役職給の改正、その他部落での行事が決定されます。

四月

- ・春のみ……農家では苗代蒔きが終わると春のみがあります。若衆、中老、敬老と年代別のグループに



分かれて行われます。

- ・お諏訪さま参り……春のみが終わるとお諏訪さま参りが、若い男女にとっては特に楽しみでありました。  
今では車で三十分もあれば行けますが、昔は草履をはいて明け方暗い中から出かけたものです。ガヤガヤ、ワイワイ語りながら道一ぱいに広がって行ったことも今は昔の物語りです。

六月

- ・さなぼり……農家は全戸田植えが終わると「さなぼり」です。この日が百姓にとっては ホッと一息つく時でもあります。

七月

- ・ご祈祷……地区民全員和尚様より大般若を頂き、夏季の病災追放を願ってお籠りをします。

八月

- ・盆踊り（十五日）……初盆を迎えられる家庭から持ち寄られたお位牌を前に故人を偲びながら踊りの輪を作り供養を捧げます。
- ・観音さまの盆踊り（十八日）……ここ暫く途絶えているが復活の方向で検討できないものかと願っています。
- ・二十六夜待ち……旧暦二十六日の夜は、月の出を迎えるための二十六夜待ちがあり、昔は若衆の漕ぐ舟に娘を乗せ、鐘太鼓を打ちならし近郷近在からイロハ島周辺へ集まり、酒を酌み交わしつつ月の出を待ったものです。現在その風習は残っていません。

十月

- ・金比羅さま……秋の大祭。部落での講。
- ・牛神さま……部落全員でお籠りをします。
- ・田嶋神社のお籠り……二年毎に弁賀部落の選出と作業道の整備作業後お籠りをします。
- ・くんち（十七日）……この日は田嶋神社の秋の大祭で全戸くんちが行われていましたが現在は殆ど中止されています。





弁賀全景



辻集落センター



牛神さま

・事業、その他

- ・浦一辻一木場線道路……昭和二年県道編入、三十七年市道へ、昭和四十九年改修工事後全線舗装されました。
- ・獅子鼻一浦谷農道（昭和十二年）
- ・弁賀下道（昭和三十八年）
- ・大平農道（昭和四十二年）
- ・この田農道（昭和四十二年、舗装五十九年）
- ・ボーリング（昭和四十三年）……このボーリングにより大干魃<sup>かんぼつ</sup>でも周辺の水田では水不足に悩まされる心配がなくなりました。
- ・ケード道（昭和四十八年）
- ・集落センター（昭和五十八年）
- ・運動広場（昭和五十九年）
- ・土地改良総合整備事業（昭和六十二年）
- ・海岸保全施設整備事業（平成八年）



土地改良総合整備事業記念碑(辻地区)



海岸保全施設整備事業記念碑



- ・あぐり山……あぐり山と三岳は、波多津のシンボルとして町民に慣れ親しまれてきた山であったが、三岳は採石のため取り崩されて昔の面影は見られません。

あぐり山はその昔、北方海上の異変を烽火を上げて岸嶽城に知らせたところと云われ、太平洋戦争中に設置された防空監視哨は当時の外形を未だにそのままとどめています。

昭和二十年の終戦までは、毎年海軍記念日の五月二十七日波多津高等小学校全生徒が登山し、校長先生から日露戦争当時の日本海海戦の話を聞いた後、野原の中に隠された鉛筆を探し出す「宝探し」に、全校生徒が小さな胸をときめかせた楽しい思い出の山でもあります。その一面原野に覆われたあぐり山も、昭和四十五年入会林野整備法によって辻村の共有地権者で等分に分割、開墾され、かつてに芒に覆われていた原野も今では写真に見られるようなすばらしい茶園と化しております。



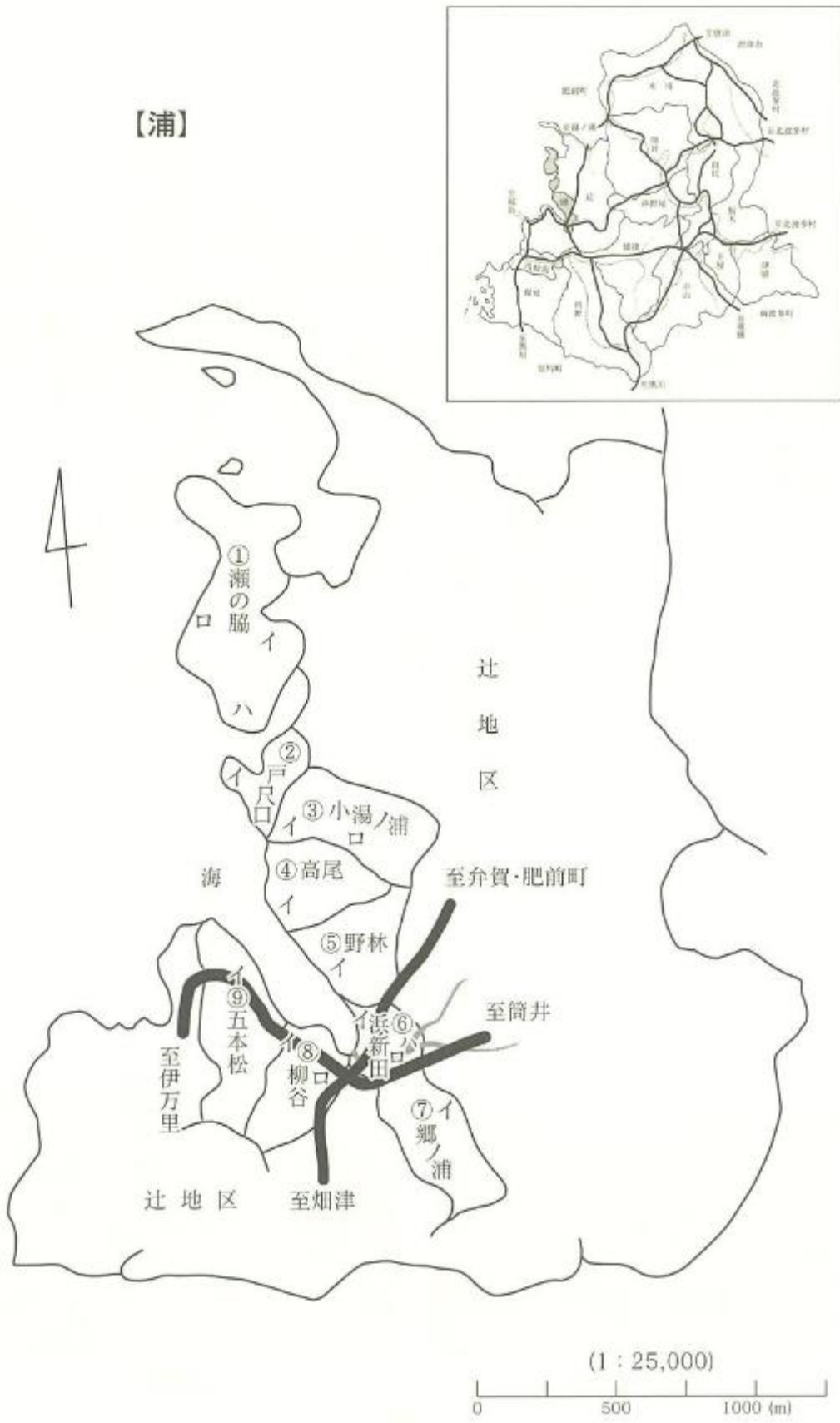
監視哨跡



あぐり山茶園

浦

【浦】





浦

小字名	生活地名	小字の中の要点
番号と 登記地名 ①瀬の脇 ②戸尺 <small>しき</small> ③小湯ノ浦 ④高尾 ⑤野林 ⑥浜新田	説明 日常生活に使う住民の作り出した地名(カタカナ符号、ひらがな地名) イ、ちゅうらび ロ、くちのせ ハ、くろいわ イ、うら ロ、けんな イ、うら ロ、ぜんのじょう イ、うら イ、うら イ、うら ロ、あかさき ハ、うらがた	地名のいわれ・史跡・遺跡・お宮・お寺・文化財・公共設備・交通設備など 恵比須様、平串新田、水神様、養魚場 旧温泉 岸嶽末孫の墓 金毘羅神社、鳥居、燈籠四基、天照皇太神の碑、お大師様、造船所跡、公園、Aコープ 中の波戸 恵比須様 町公民館、憩の家、小島病院、養寿寺、お地藏様、猿神社、農協支所、郵便局、町営ゲートボール場、漁協、Aコープ、浦公民館、縫製工場、田中鉄工所、自動車工場、浦ゲートボール場

小字名	生活地名	小字の中の要点
⑦郷の浦	イ、ごんな	イ、プロパン
⑧柳谷	イ、おきのしょうや ロ、なかのしょうや	製材所、庄屋跡、寺子屋跡(稲葉義信宅)
⑨五本松	イ、えびすさまんはな ロ、ばせん ば ハ、ごりんどうさま あみだ さま	エビス神社、鉄工所、造船所、漁加工工場、保育園 ロ、馬洗場Ⅱ宿場で疲れた馬を洗った跡。 ハ、辻地区で年一回字の総会の日、養寿寺の住職 にきてもらって、山盛りにごはんを盛って和尚さん があみだ様に投げつけてめし椀のかけ方でその 年の農作物が豊作か不作かを占っていた。 庄屋跡(稲葉義信宅) 寺小屋跡(同)

## 浦

波多津の浦には、享保(一七一六)年間以前から人が住み、遠浅の入り江を利用して魚介類を採り生活を営んでいたと言われています。

浜新田奥地の埋立を現地から考えてみますと、現波多津中学校校舎及び運動場は、以前はフケ田といって、ひざまでつかぬかみでありました。収穫等に大変苦勞をしていました。堤防は猿神様付近まで盛土だけで高さが一・五m位の高いものでした。山際に水路を設け、区の干拓事業としては最初でありました。その後、現在の公民館、憩の家付近まで、下三段位の石垣を積み上げ、その上に盛土をした堤防が道路となっていました。この新田の高さが、途中区切られていることから、工事はそれぞれ年代が違っているものと推定されます。この堤防工事も順調に進まなかったため、人柱があったと伝えられています。そこで、堤防の側に地蔵様を祀り犠牲者の霊を慰めたとされています。地蔵様は養寿寺の下にあって、昔からこの地名を「長崎のはな」といっています。山手から長い瀬が出ていて、これが堤防となりました。

長崎のはなには直径一・五m位、樹齡三〇〇年ほどの大きな松がありました。以前の道路ができる前は堤防が道でありました。現在の地蔵様の位置は移転しています。

唐津藩といって残っているのは浦瀨の北端の高所に出て旧軍人墓地の前を通り、お大師様の下を通過して平串の境の堀り切りの上に出る幅一m位の狭い道でありました。筑前参りに行く人を、この地まで出て見送っていました。その当時までは、僻地であったため他町村との交流はなかったと思われます。

浜新田ができる少し前までは、中ノ瀬を中心として赤崎の方に干拓がなされました。しかし、度重なる豪雨のために堤防が流されました。現在その面影が少し残っています。現農協前の杉本、酒谷、大塚三家の裏に通称中瀬といって、二畝位の遊水池があり、潮止め工事がなされました。赤崎の方はフケ田でもありました。

稲葉家の古い記録をみますと、天保六年稲葉氏は<sup>むら</sup>辻<sup>おき</sup>邑の長を拜命され、本辻の地に居を構えられました。その頃、浜新田は干拓工事がなされました。その当時稲葉氏の所有田は三町三反とされています。

小笠原公当時の地図には文化・文政年間、畑津浦 舟泊 至十六里と記してあり、年貢の輸送の船場に利用されていました。また、漁業の基地として唐津藩の主要な位置を占めていたと思われます。

現在、土井町の中央の通りは、昔は土手でありました。その土手は赤崎より中町に通じる道で、塚部末太郎家の裏山をくずして盛土となし、干拓がなされ、これが現在「堤防」と言われ親しまれています。岡と海の境であり、強い風が吹きあれるときは、「堤防」を越えて飛沫を上げていました。反面、晴天時にはポカポカとした暖かい日溜りができて子供等の遊びの場所でもありました。

明治六年に入り地籍調査がなされました。三岳村住民稲葉義方が測量に加わりました。明治六年八月二十日命により波多津浦村長、明治十一年十二月十六日戸長となりました。人口五五〇人でありました。明治二十二年大岳村となり、戸数九十戸、人口六〇〇人と記してあります。

明治二十六年、巳旧二月二日、浦中協議会にて浦分総代田中徳治となりました。最初の浦総代でありました。同年旧二月十一日浦中集会にて、相定候儀・決議書定約記録とあります。

第一条 当浦中集会ニテ定メタル事ヲ規約トス。

第二条 此帳簿ニ記入シタルコト違フベカラズ。

第三条 当規約ヲ違反シタル者、有之候時ハ後日集会ニテ罰ヲ行フベシ。

また、

一、田畑或は山野のそだ切りに至るまで、大人・子供を問わず、他人の所有地に入って無断で作物を取る事を得ず。若し後日見当り候得ば、金十銭を払わせ、浦中の儲金になす者也。

薬価受をいたしたい願ひ事あり

一、明治二十六年旧五月より医師天野房太郎氏満一ヶ年間、当浦中の人民（人数七〇〇人）、戸数一四二戸、此の人数にて、病氣やみたる時は、先生の及限り医科の道を別料り下され度

二、一ヶ年の薬価料 一金、百五十円也

時の組長にて四期に別け、総代に提出すること。

明治二十九年 浦中總會

濱新田、海岸の空き地の件

海岸付近の埋立の時は、海岸六尺を浦共有地として差出す事。埋築仕たる地所 二人持の間を家建つれば その先四尺通りを道としてあくる事。浦中より委任を受け、諸般調候事も記す。役員名計九名を選任する。

明治三十三年 波多津村となる。

明治三十八年旧正月二十二日初会。

元畑地にして、新たに植林する者は、四方共、貳間通りさがり植林する事。但し、元山地はお互いに話し合いの上植付ける事。

明治三十七年(一九〇四)

義勇艦隊義捐金 壹百四拾貳円向五ヶ年間

明治三十九年(一九〇六)正月二十八日契約書

親戚・他人を問わず、相互間に於て、俗に狐つけ、或いはその類と傾し是等は、吾人の大いに忌むべきを以て、充分の記跡を挙げざるべからず。若し、軽拳に出で、人を困却せしめたるものは、右の違約金を徴収す。一金・五十円、但し、出来ざる者は壹百日間の道作りの事。但し、道作りは、一ヶ月三日宛、一日の金によれば五銭の割、初会にて決議す。

明治四十二年旧十月十八日 浦避病院建築の件可決す。

大正五年(一九一六) 総会決議事項 行合野県道工事運動員田中英治氏に依頼す。

#### 魚市場変更の件

田中英治・栗原定治両氏にて、大正五年旧二月二日午後より大正十五年旧二月二日午前十二時迄、左記の件決定す。尚、浦方の兩名は、契約書二通作成し双方壹通宛保存するものなり。

大正七年、班長、評議員外三名ずつ集会にて、村税等級割の協議をせり。

大正十年、初総会 漁業組合理事・監事選任の件

理事 松尾誠一郎 監事 松本今朝治 同 古崎定治

大正十二年 初総会にて、報徳金貯金、天野翁寄付金の残金を使用する事四七〇円

報徳会貯金、二〇七円五十二銭、寄付金募集評議員・組長と協議

購入委員 松本喜一郎 古崎定治

大正八年 初総会 北浦産婆薬価の件、之迄壹ヶ年一戸二十銭を大正八年度より三十銭に可決す。

大正九年 初総会 波止場及び市内の電燈新設、増設する場所、電燈料金の徴収方法は、組長・評議員に一任す。

#### 汽船問屋・発動船問屋変更の件

大正十二年度より波多津浦の経営にする事に協定す。但し、浦中の収入は、乗客乗入、貨物、船賃、口銭を収得し、上陸客、貨物の川揚げは仲使人の収入とす。本年より一か年汽船部・塚部久太郎・発動船部 田中十太郎

#### 魚市場を浦経営にする

大正十二年四月一日現在にて魚問屋引受計算書売掛金計六二〇円二十二銭。網方賃は五六三円五十三銭、以下略 差引受金高四一〇九円六銭、右基本金として支払す。共同販売所長 松尾誠一郎、同検査役 田中英治、同・松本今朝治、同・池田佐市、同・古崎定治、会計主任・前山和助、鍵取 栗原米造

大正十三年宿越峠埋込工事始まる。今年度、土木請負人市丸広太郎、区負担壹戸四分、一戸当り金一円三十五銭、人夫にて仕事することを決議す。

#### 浦新地造成工事

大正十三年から三ヶ年を要して区民の奉仕により、トロッコにて土を運び工事を完成さす。当時としては画期的な大事業でありました。

大正十三年初会議 漁業組合理事 監事選挙の件

理事 松尾誠一郎 監事 松本今朝治 同 古崎定治

大正十三年、浦区にて初めて警鐘台新設可決。但し、場所は浦新地に可決。金比羅神社の本殿葺替の件、寄付にて可決。共同販売所建築可決。

一、入札期日 大正十四年旧五月二十五日

一、入札保証金 貳拾円

一、契約保証金 契約高の一割

一、入札当日の旅費、日当一切の費用は入れ者自弁とす。

一、請負人 松尾吉太郎 金壱千貳百参拾五円也  
内、松の木七本、前島より材株とし代金三十五円見積り請負人に提供する。

大正十四年(一九二五)共同回漕部 はしきの件 第二号松浦丸、第三号松浦丸、第一鍋串丸、田中十太郎に一任す。那覇丸、鎮西丸、雑船、塚部久太郎に一任す。

昭和二年総会 共同販売所現金出納員選任の件  
古崎定治 但し、任期二ヶ年とし身元保証人二名連署の上提供する事。報酬としては、協議会にて是を定む。  
漁業組合役員選挙の件 投票の結果つぎの通り当選す。理事 古崎定治、幹事 塚本豊治、同 田中弥作

昭和四年三月一日 壱月元旦より陽曆に改正する事。

青年会館建設の件 請負金 貳千五百円 区有志の寄付金、各戸負担の件  
昭和四年起工していた防波堤及五本松地先防波堤計算承認 (詳細省略)

昭和七年 青年会場の賃貸価格協定  
一、興行 一日の貸料 金貳拾円也  
一、集会 一日の貸料 金五円也  
一、繭販売及産業奨励並びに公共に関するもの 一日の貸料 金三円也  
前項の賃貸料は、浦区と青年会とで折半の事。

昭和十年総会 (一九三五)  
一、共同販売所存続の件  
イ、昭和十年旧正月二十一日限り解散をなし、二十一日後は別冊として販売をなす。但し、現金制度として、理事・区長責任を持って取引をなすこと。  
ロ、使用人として前山和助氏を旧販売所、整備期限中雇い入れ、一ヵ月貳拾五円として整備後は協議の上決定す。  
ハ、整備期間中資金を要する場合は、借入れをなすこと。  
二、清算付次第総会を開き、其後販売所については協議を以て決すること。

昭和十三年総会  
一、監視哨の件  
十八歳より四十五歳まで、各戸、肩押し出勤すること。戸別に貳拾銭宛集金をなし、一人に付、貳拾銭宛を与えること。各戸肩押しは人数如何に拘わらず一戸壱人とす。

昭和十四年総会  
一、天野氏 医療辞退の件 承認決議す。

### ●波多津監視哨

西暦一九〇〇年代 北方の異変を烽火をあげて、岸嶽の本城に伝える拠点として、アグリ山の地に監視哨の件、村中の評議にかかり、浦区は役目賃金、男七十銭、女五十銭にして工事を始め、十八歳~四十五歳各戸肩押し出勤する事。戸は二十銭宛集金をなし一人に付貳拾銭を与えると総会議事録に記載されている。平穏な状態が続いたが、突如として昭和十七年米航空母艦より発進した米爆撃機により、東京初の空襲があり、以後終日勤務に変わることになった。

昭和十八年度より、アグリ山に監視哨の移転工事が始まり、波多津小学校上級生及び村内の人々の奉仕作業と協力があり、一階を仮眠室、二階監視所、哨舎は当時県下に誇る優秀なものであった。県庁への直通電話もつながれていた。

哨長吉田和助、副哨長塚部正美、樋口好次、古崎泰三、高田為藏、大久保久と五九班にて日夜勤務にはげんでいた、哨員の苦労もまた大変であった。村内外から婦人会・女子青年等の慰問等もあり、哨員



にとっては銃後の戦士としての誇りがあった。しかし、度重なる召集により人員の確保と戦局の不利な状況により、十九年の半ばになり、二階の部分を取り壊し、壕を掘り監視を続けていました。

間もなく戦争も終わり、記念碑を建て永久にその名を残すことになりました。

### ●防空壕

大東亜戦争のため、米軍の航空機の空襲は大都市から田舎の地に至るまで、その危険にさらされていました。各家庭の庭先の防空壕は、空襲がひどくなる昭和十九年頃より危険度を増し、国や村の指示により、別に区内で七か所位作ることになりました。中組は浦潟組と協同して作ることになりました。その道の経験者に依頼して作業に入り、各組員は掘った土を運び出す仕事をしました。壕の中央には空襲の犠牲を少なくするために、左右二本の道路をつくり、昭和二十年春には完成しました。その後、度々の空襲警報のサイレンが鳴るたびに老若男女は直ちに壕に入って退避しました。

そして、終戦を迎えました。その後、この壕は損田から浦潟へ通ずる直線の近道として利用されていましたが、壕の中央付近に落盤があり利用不可能になりました。また、近くには消防格納庫の壕も作られました。長くはもたなかったようです。

### ●防空演習

小さな手押しポンプが、古崎家の横の空地の倉庫に格納されていました。演習は頻繁に行われ、銃後の守りは安全だと、婦人会等の意気込みは旺んでありました。隊長の号令一下、空襲警報発令、敵機襲来、何処何処に焼夷弾が落ち炎上中等の想定が下っていました。それに従って、それぞれの分担・役割によってポンプをひき出し、バケツの搬送・火叩き等の操作も勇ましいものでした。モンペ・防空頭巾等のいで立ちは、誠に前線さながらでありました。



防空演習

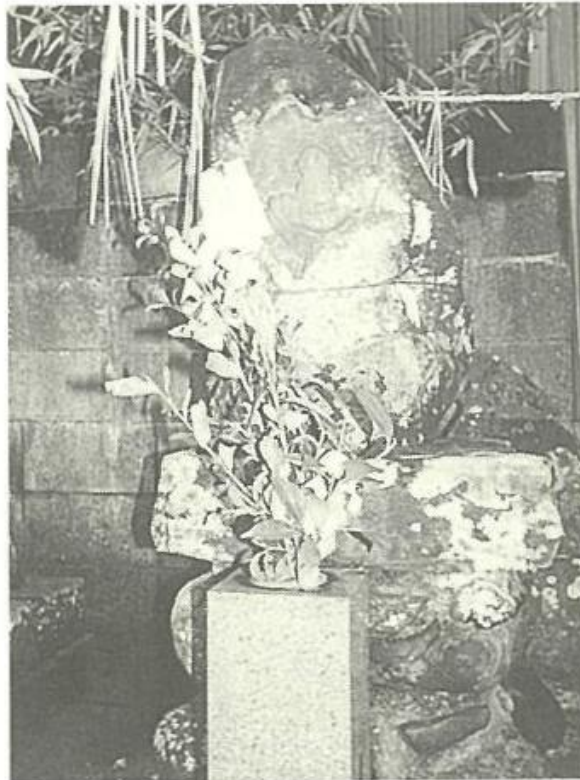
### ●竹槍訓練

竹槍訓練も、立派な銃後のつとめでありました。一m五〇cmの竹の棒を銃剣の代わりに銃剣術の構えで前後に進み、相手を突く動作でありました。機敏に、的確に動作して汗にまみれての猛訓練でありました。波多津小学校の校庭、浦青年倶楽部前の広場等随所にて、竹槍訓練のかけ声がこだましていました。若い人は、それなりの身のこなし方でまぎまぎでした。しかし、中年以上の人には、無理な訓練のように思われました。でも真剣な動作をみていると、土壇場での覚悟がうかがえたものでした。

### ●恵比寿神社

浦中総会議事録によれば、明治二十八年九月、田中三太郎、田中金兵衛、古崎伝次郎発起人となり、浦区有志の寄付を募り、丘の適地を開いて広場を作り海岸より三十六段の石段を作り、祭神として祀ると記してあります。

古事をさかのぼれば、この根本に神社ありと伝えられています。神殿には赤松の古木があり通称男松女松、または夫婦松といって海中に飛び出すように壮厳な有様でした。浦区では毎年一月二十日に例祭を行い、以来、浦区の人、または、近郊漁民の守護神となり、出漁のおり、この下を通るときには、清酒を海に投じ、また、帰港のおりには、「えびす様」と唱えつつ獲物を海中に投じて大漁を感謝していました。現在は、浦区を代表して氏子総代が神主さんとともに例祭を行っています。



恵比寿様

### ●猿神様

町公民館横の高台に祭壇があります。猿神様はその昔、一本の大きな木が立っていました。そこへどこからともなく一匹の女猿があらわれ、大木の上に乗っていました。ある朝、猟師が現われて猿に銃口を向けました。それに気付いた猿は、大きな腹の中心をさすって猟師に合図しました。猟師はうなづいて銃口は火をふきました。猿は絶命をしました。猿のお腹の中には子供が入っているから撃たないでくれといったのを、猟師は撃てと言ったと受け間違えたのです。その後、猿の墓を建て冥福を祈りました。

そのお祭は九月二十八日です。その日には、近郊の人たちが集って賑やかでした。後に金比羅神社に合祀されましたが、また、元の位置に安置されています。



猿 神 様

●竜神様

漁協事務所前に鎮座してある竜神様は、天保八年に建立され、浜新地が出来るまで土居の土手の上にあります。それが浜新地の岬の突端に移転され、その後、埋立が完了して現地に鎮座してあります。先祖から魚介類の霊を慰め、豊漁を祈願する漁民や住民は家内安全も併せて、お祈りしています。

浦区では、四月三日に区長、氏子総代、漁民、区民等たくさんの方がお詣りしています。





水 神 社

### ●高尾山公園

そめい吉野など一〇〇〇本におよぶ桜の満開、一時に咲きそろい、市内随一の桜の名所が高尾山であります。展望台からはいろは島はじめ湾内に浮かぶ島々が見れます。その島々は 四季おりおりに富んだ景観を楽しませてくれます。

山の中腹の駐車場は、昭和四十五年吉田定兵衛の寄贈によるものです。約三〇〇aの広場で、その上に第一の鳥居（明治十三年、巳九月立石者、田中徳四郎の寄贈）があります。その石段四十五段を容易に上れるように昭和五十七年（一九八二）十月に吉田町造寄贈の手摺が作られています。右の方へはお大師様があり、区民の信仰を集めています。左に進み、登りつめたところに広場があります。浦区は大正元年（一九一二）十月十日にこの広場に天野翁の記念碑を建立しました。

われわれが小さい頃は、この広場は運動会に備えて稽古の場でもありました。角力をしたり、遊んだりした場所でもありました。また、浦区の花見のおりは、ここに組の名前を染めぬいた横断幕をめぐらしたものでした。

第二の鳥居は、神戸に住む、当町出身の古川叶の寄贈によるものです。第三の鳥居をくぐると金比羅神社の神殿があります。

山には大正五年に植えられた桜の大樹とその後に植樹された桜が一ぱいあります。波多津浦若連中が奉納された碑には天保六年（一八三五）享保十四年（一七二九）、畠津浦中と記してあることから多くの人々の信仰のほどがうかがえます。

社は明治四十年に改築され、旧年旧十月二十八日御輿塗装工事、昭和十二年（一九三七）拝殿改築が行われました。こうして、町民の山として崇められるようになりました。

ところが、昭和六十一年八月末台風十二号に遭い山の樹木が倒されてしまいました。その年に浦区民の奉仕作業により若桜二〇〇本の記念植樹をいたしました。



金毘羅神社拜殿

高尾山の「記念碑」の碑文

濫費ハ漁村ノ通弊ニシテ此ノ地亦貯蓄思想ニ乏シク、偶不漁ニ遭遇スル時ハ、困難実ニ、名状スベカラザルモノアリ。識者之ヲ憂ヒ、貯蓄ヲ奨メ凶荒ニ備エンコト諮ルモ、衆議ノ容ルルトコロトナラズ、徒ニ有志ヲシテ、前途ヲ憂ヘシムルコト既ニ久シカリキ。明治二十六年田中徳治氏ノ総代ニ選バルヤ、挺身公共ノ事ニ当リ、殊ニ漁村貯蓄ノ必要ヲ鼓吹シ、有志ニ諮リ輿論ノ喚起ニ努ムル等、熱誠感ズベキモノアリ。偶馬蛤潟新田ノ埋築工事ノ起ルニ際シ、築堤甲トシテ潟土採掘ノ需ニ応ジ拾五円ノ報奨ヲ得タリ。氏大ニ喜ビ有志ニ諮リテ之ヲ蓄積セリ。是レ共同貯金ノ嚆矢ニシテ、其後幾多ノ困難ヲ機シ、地祖及ビ営業税納付ニ際シ其ノ百分ノ一ニ相当スル金額ヲ抛出シ共同貯金ニ編入スルノ制ヲ立テタリ。爾来、総代区長ノ更迭アルモ、其ノ轍ヲ継承シ、今ヤ現金貳千餘円ヲ有スルニ至レリ、里人之ヲ徳トシテ金ヲ醸シ碑ヲ建テ、後世ニ傳ヘ、以テ長ヘニ、勤儉ノ美風ヲ存シ後人ヲシテ永ク其ノ徳ニ倚ラシメントス。  
大正元年十月十日

### ●いろは島

伊万里湾には、大小無数の島があるといわれます。

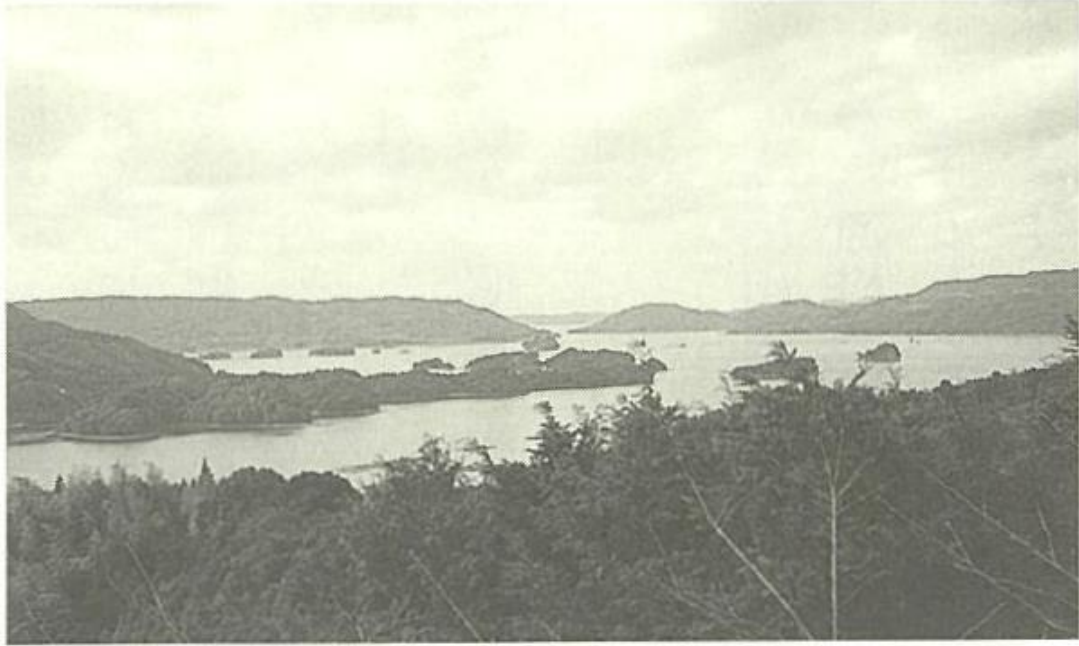
「島なんてないよ。ほとんどないんじゃない」

と首をかしげる人がいます。でもたくさんの島々があるのです。伊万里市民にとっては身近かに感じないかも知れません。

いろは島は、島山島、弁天島、帆立島、小島、十コ島、四十が島、野島、松島など、いろは四十八を数える程にあることからこの名がつけられたそうです。実際の数、潮の干満によって見えがくれする岩場程度の島を加えると四十八を超えるのです。

高尾山の展望台からは箱庭のように、美しい光景を目にすることができます。春の潮干狩や、夏の海水浴等大へん賑わっています。





## いろは島

### ●大水害

昭和二十八年六月二十六日浦区は未曾有の水害にあいました。古老の話でも今までにない突然の水害であるという。前夜までの雨は普通の梅雨位であったのが、夜半から突然豪雨となり眠られぬ一夜が明け始めました。雨はいくらか小降りになったので、戸外に出てみると、浦方の方から水が道路を流れてきているのです。米屋の前に来てみると、水が長靴の中に入る位の水位になっていました。夜明け前のこととて全戸まだ眠っていました。

「水が流れてくるぞー」

と大声で叫びました。眠りから覚めた人々は、すでに床下浸水になっている実状にびっくりしました。雨戸の上約三十cm以上の水流は、土井町を包みこみ中町をのみこんでいきました。道路を流れる水の勢いに呆然として手のほどこしようはありませんでした。あふれ流れる水は瀧のように海に落ちていきました。

この原因は、中学校校舎新築のために材木を運動場や其の付近に積んであったのが、一度に流れて井樋を塞いだためでありました。消防団員全員が召集され大さわぎになりました。

まもなく満潮時も過ぎ、水は海に落ち流れましたが思わぬ大きな被害にあいました。

### ●波多津簡易水道

浦区民は各組に一ヶ所位の井戸があって、その井戸水を共同で使用していたのです。渇水状態が長くなると、水不足になり困っていた時代が長く続いていました。昭和二十八年（一九五三）簡易水道の話がもち上がり嶽の溜池を利用して貯水池をつくり、昭和三十一年に貯水池より浦潟付近まで水道管の埋設が終わり、昭和三十二年浦区の主要道路で埋設工事が始まりました。

当初は、二三〇戸加入の目標でした。が先づ、三十戸位の利用者にて給水が始まりました。しかし、漏水が甚だしく雨の後でも貯水池は二・三日経つと渇水状態となっていました。伊万里水道部の管理になって補修工事が何回も行われました。そして、地下水を揚げる事となり、区内三ヶ所にボーリングをしました。三ヶ所に溜った水を一ヶ所に集め、水源地に揚げることになりました。昭和三十五年現地に水神宮を祀り漏水防止を祈念することにしました。昭和三十八年、その工法を繰り返しながら逐次漏水はなくなり、昭和五十五年に拡張工事をして貯水槽二五〇tを加えました。さらに昭和六十三年、三〇〇戸分、一日二七〇t～三〇〇tを配水するようになりました。

しかし、現状では、夏の水はカルキの量が原因で匂うようになりました。早急な改良給水工事を全戸

期待しているところです。

### ●浦の盆踊り

毎年盆が近づくと、年齢は問わず、職場職場にて、盆口説を一か月前から練習をしていました。口説は、「おつや口説」「祐徳丸口説」「さぶろう口説」とがあり、月の夜になると、公民館で鐘や太鼓に合わせて練習をしていました。

戦後は、青年団員も少なくなり、一時は老人と子供が主となって盆踊りは続けられてきました。しかし、再び青年が主となって続行するようになりました。

浦の盆踊りは主として、初盆を迎える家をまわって故人の霊を慰めることにしています。

### ●精霊流し

盆が近づくと、初盆のところは、親戚一同集まって、精霊船の準備がされます。小さい舟を船大工さんに注文して作ってもらい、約一週間以上の時間をかけて飾りつけをします。満艦飾にでき上がった精霊舟を町内の人々に見てもらい、八月十六日午前零時頃から満潮時に向けて、飾り立てた舟をそれぞれの初盆の家の趣向によって流すのです。住職の読経と共に流しながら故人のありし日を偲ぶのです。そして、また来年のお盆にお出なされと身内の人々は合拳して流れていく舟を見送ります。

また、初盆以外の家々でも、佛様をもっている家は麦藁で丸くまるめて六尺位の竹ひごを通して舟を作り、これも出来るだけ装飾して、同じ時刻に精霊舟を流します。

近年は麦藁も少なくなり、木の舟（一m五十cm位）を船大工さんに作ってもらって流しています。

このように精霊流しは、昔から変わりなく続けられています。この頃は、相当の費用をかけて、打上げ花火も加わって、盆の風物詩となっています。

### ●波浦橋

昭和二十三年より、二十六年にかけて、田中本店前より藤森秀雄宅前に至る新道は、家屋の移転等があり、大変な事業でありました。昭和二十七年木橋の波浦橋が架けられ、この上もなく便利な主要道路となりました。橋が出来る以前は、野林から郷ノ浦<sup>デ</sup>に行くには、吉田菓子店の前を通り、塚部酒店前を右折し、塚部米屋の前をさらに右折して土居町の堤から赤崎の岩の下を通り、松本精米所を通過していました。

しかし、国や県の予算は少なく、Ⓣ事業といって炭坑離職者が就労していました。山口宅の上の小さな橋で工事は中止となりました。そこで当時県議会議長であった山下徳夫に、昭和三十六年、古崎泰三、野口義一が陳情をしました。内容は、従来の道路は幅員が狭く、起伏が多く、中学生の通学に難渋しているということでした。これを早期に解決して欲しいという要望だったのです。

そんなことから、町民は、町で造ろうと計画をし、全戸から出労するという誠意を示しました。三度に亘り、古崎泰三、野口義一は揃って県議会議長室を訪ねました。県の土井垣道路課長（後の土木部長）も同席でした。町の東西を結ぶ重要な道路だから、是非とも早期完成をお願いしたい旨伝えました。二・三日後に渡辺出張所長に県より連絡があり、道路課長、山下県議が現地をみたいから案内を頼むというのでした。当日は両氏とも地下足袋を履いた軽装で、岩の本地区の見える山頂まで踏査されました。

「県の道路課長が、こんな所まで現地視察をされるのは初めてのことですよ」と山下県議会議長は言われました。

その後、二週間ぐらいて国道に昇格して工事を決めるとの議長からの電話がありました。大変な喜びでした。関係者の間で祝盃をあげたほどでした。それから工事はとんとん拍子に進みました。

昭和四十二年道路拡幅工事がなされました。中学校横より恵比寿様までの間の二車線工事がなされました。家屋の移転等もありました。国道のバイパスとしての工事は終わり、町の中心的役割を果たすことができました。信号も取り付けられて大変美化されました。

### ●福島橋

大正の始めの頃より福島町発展の鍵は、波多津と橋で結ぶ以外に道はないと考えられていました。福島町の志水八太郎と波多津の古崎定治との間に話があっていました。

昭和三十年に入り最初は煤屋福島間高圧電柱北側百m位、祝崎より煤屋海岸に飛石伝いに通ずる架橋

計画であったので、波多津は浦区を中心に全町をあげて、浦を通過しない架橋地点並に道路方線には、絶対反対を表明しました。橋口伊万里市長も、事態の重要性を心配されていました。その間、保利代議士の斡旋により、浦区有林・餅の木より福島町喜内瀬に架橋することに決定し、具体的な話し合いができ、両県による現地視察の後、福島橋の実現となりました。

このような曲折を経て、見事大橋の開通式が行われた昭和四十二年十月のその日は、波多津からも、多数のパレード参加等もあり、大きな喜びを共にしました。両町は、その後も益々親密な隣どうしの関係です。

### ●波多津急傾斜地崩壊危険区域

- 1、昭和四十五年十一月三十日指定  
公示番号 第四八八〇号  
指定面積 四七八  
上組より郷之浦組の順に指定を受けて順次工事が始まりました。
- 2、県知事告示 第一〇七号  
第一次工事に続いて、浦潟組より下野林地区まで工事が始められました。
- 3、昭和五十七年四月二十日 告示  
第二五一号により残り地域・高尾組の工事がありました。今まで地元負担がなく話も順調に進んだけれども昭和五十七年より五分の地元負担があるようになりました。  
昭和六十年度に至り全体の工事が終了しました。

### ●浜新田の埋立工事

昭和四十七年三月、浜新田の埋立工事が始まりました。浦区としては、流水・冠水で毎年悩まされていたので、災害禍等の不安がありました。工事中止を市当局に請願しました。

諸問題を解決して昭和五十五年に土地区画整理事業が行われ、井樋等の大型化により種々の懸案を逐次解決して埋立ては終わり、これにより浦区の内陸部は大きく変容することになりました。

### ●湾内浚渫と市道建設

昭和三十三年湾内は長い年月の混土の累積により漁船の停泊及び通行に支障をきたしていたため浚渫工事がありました。現在、辻より肥前町へ通ずる市道もできました。

### ●市営住宅

波多津小字校上の道路東側にあった教員住宅を他の地に移転建設してくれとの要請があつて、浦の登記所の上に移築しました。

### ●浦区役目賃金

年	男賃金	女賃金
昭和十八年	一円八〇銭	一円四〇銭
昭和二十二年	二一円	一六円
昭和二十八年	一八〇円	一三〇円
昭和三十二年	二八〇円	一六〇円
昭和三十六年	三〇〇円	二四〇円
昭和四十年	四〇〇円	三二〇円
昭和四十五年	七〇〇円	五六〇円
昭和四十七年	九〇〇円	七二〇円
昭和五十二年	三二五〇円	二二七五円
昭和五十六年	三四〇〇円	二三八〇円
昭和六十年	三七八〇円	二八三五円
昭和六十三年	三七八〇円	二八三五円

天野翁頌德碑

正三位子爵 小笠原長生書

(碑文)

君通称房太郎唐津藩士也、小壮学於佐賀医学校卒業後及第於医術開業試験而為医士、君不滿假之更登東都究細菌法医精神学校衛生諸科之蘊奧、帰來歷任子檢疫官学校医村医等。明治二十六年開業於波多津村・春風秋雨三十年如一日矣・而君之接患者也不問親疎不論貧富慎重懇切至矣。監矢遠近知與不知皆集君門。君慈仁博愛恤無告救窮之其開業之初、先發診療低藥價広開施療濟生之道得一村、之保健悉依君而安定人々以欽仰軒岐頌揚其高德今茲大正十一年君齡達耳順元氣益々旺盛精勵干業務壯者亦不及焉、業間或親書画或愛謠曲以大発揮英雄胸中閑日月、兒孫誥々滿千内和氣洋々溢千、外可以知君之前途躋古稀未齡而九十而百積善之寿域尚無窮茲村有志齊謀欲歎君之高德於右傳千不朽令予銘之銘曰

術究 軒岐 德覃 四鄉 以壽 以福 山高 水長

大正十一年十月中澣

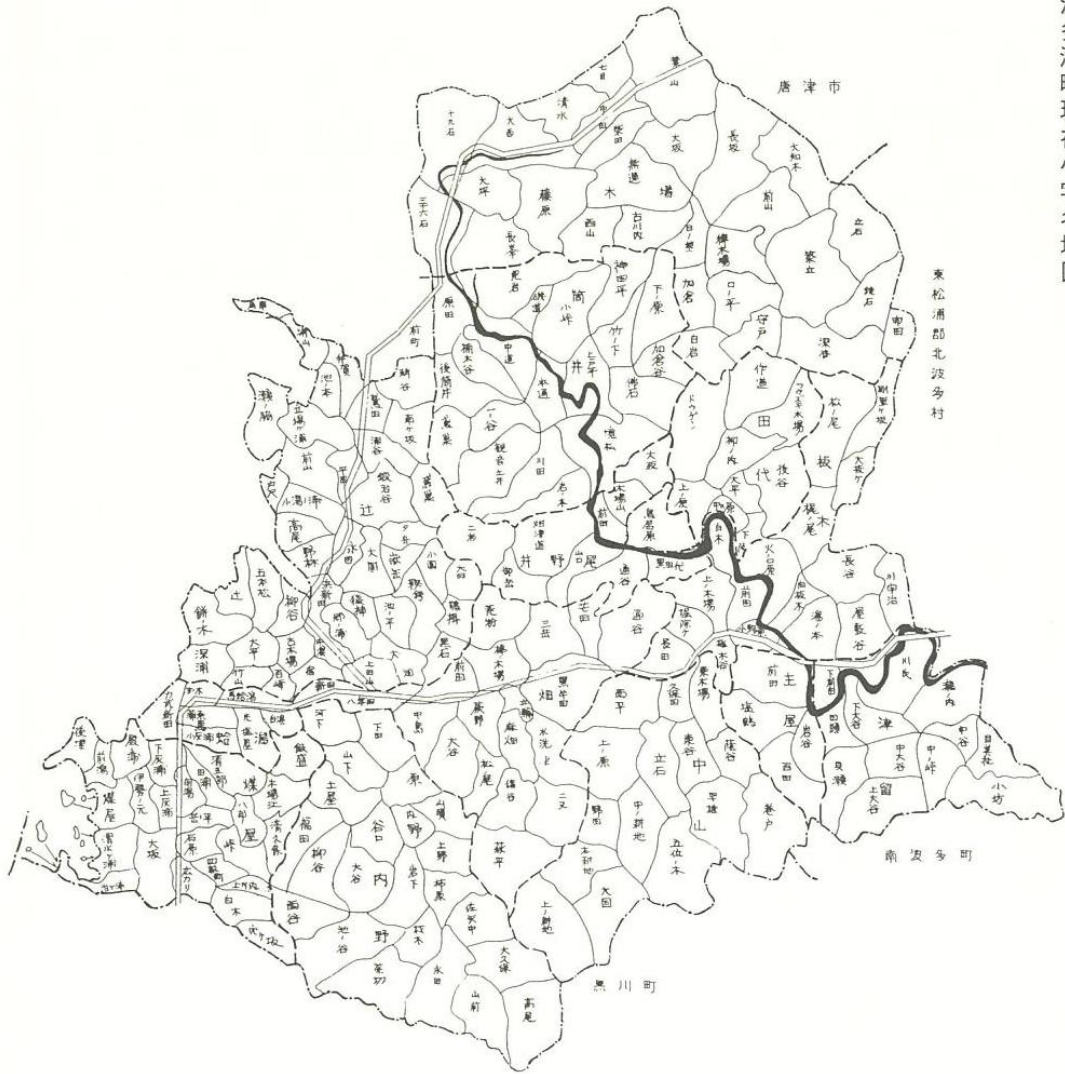
西松浦郡長 正六位勲五等 樫田三郎撰

### 波多津町大字名地図

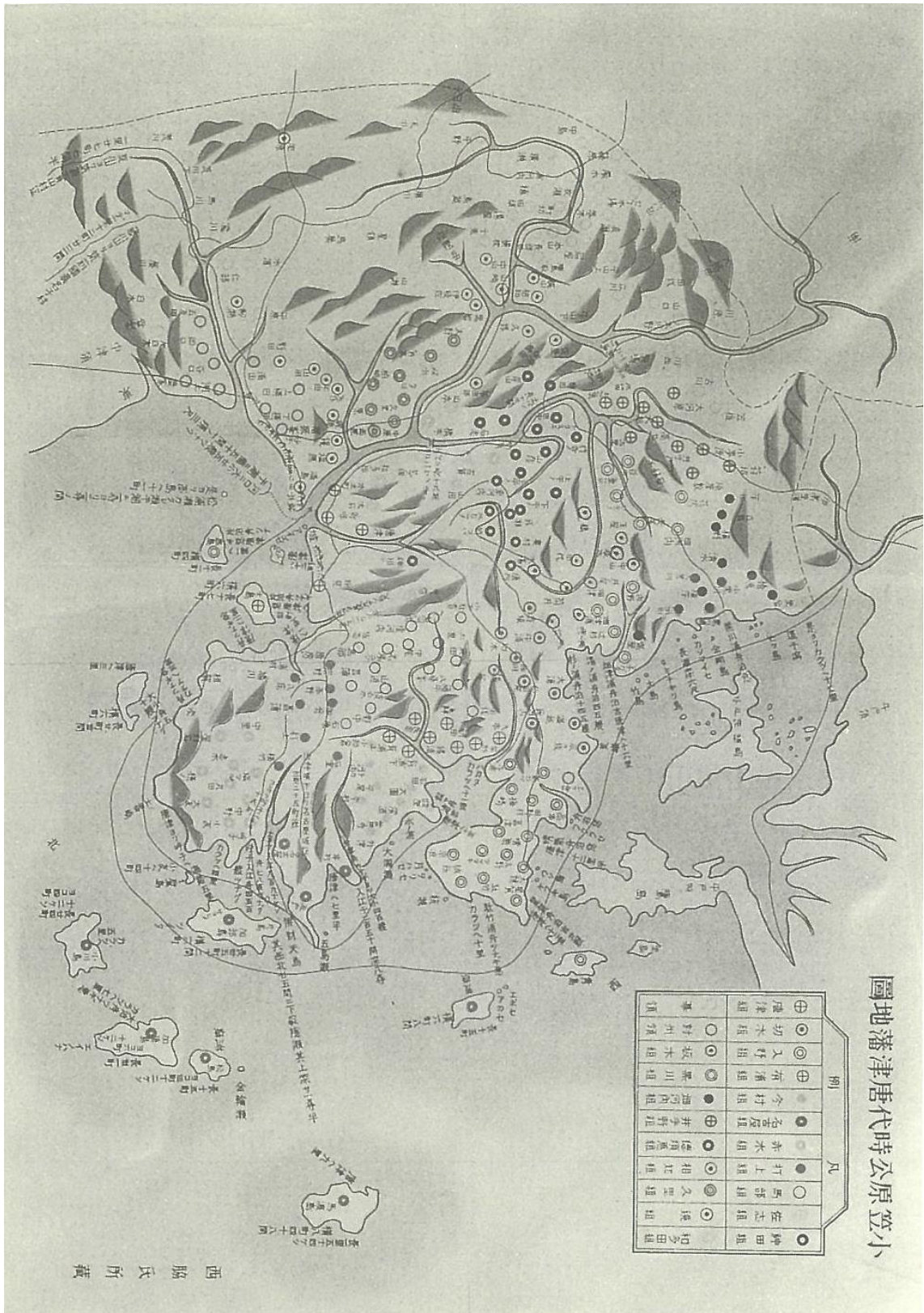




波多津町現在小字名地図



小笠原時代時津藩地圖



凡	
○	陣田
◎	在志
⊙	馬部
⊚	打上
⊛	相定
⊜	徳須
⊝	赤木
⊞	名倉
⊟	井手
⊠	湖河
⊡	黒川
⊢	坂本
⊣	又野
⊤	切木
⊥	康津
⊦	和分
⊧	織
⊨	久里
⊩	馬部
⊪	馬部
⊫	馬部
⊬	馬部
⊭	馬部
⊮	馬部
⊯	馬部
⊰	馬部
⊱	馬部
⊲	馬部
⊳	馬部
⊴	馬部
⊵	馬部
⊶	馬部
⊷	馬部
⊸	馬部
⊹	馬部
⊺	馬部
⊻	馬部
⊼	馬部
⊽	馬部
⊾	馬部
⊿	馬部

西脇氏所藏

## あとがき

伊万里市の近年の文化財発掘調査により平成五年から十年にかけて大坪町六仙寺で<sup>うまもどしいせき</sup>午戻遺跡が発見され弥生時代中期（約二千年前）の土器や石器などの遺物が包含層から沢山出土されましたが、その中でも、佐賀県内二例目として発見された完鏡の青銅製漢式鏡は大陸製のものだと解りました。

これらのことから考察して弥生時代の中心国と思われる伊都国や奴国の影響を受けていたと思われる伊万里地区も大昔から進んだ地方だったろうと思われてきます。

私達の郷土波多津についても、木場地区の前山遺跡、開田遺跡、井野尾地区の水溜遺跡などから石で作られた矢じりの<sup>せきぞく</sup>石鏃などが発見され太古の私達の祖先を彷彿と偲ぶことができます。

編集委員長である藤田平太先生の発刊のことばにあるように、昭和五十年末発行された波多津小学校創立百周年記念誌を第二のステップとして、先生は町内の有志の方々や市内の専門家に相談されたところ、その熱意に賛同され郷土の文化の掘り起こしと情報の収集につとめられました。

相提携した調査収集活動の途中・有志の方で完結の日を待たずにおなくなりになる方もありました。が、平成十一年春、花実るころには町誌も結実して多くの家庭に届けることが出来るよう鋭意努力を注ぎ込み資料の編集に微力を捧げてまいりました。

小さいときから通ったあの道この道、親の背をみながらやむなく手伝いをした田畑、魚釣りをした海岸や川の堤防、歴史や祖先への感謝も考えずに過ごした日々だが、永い歴史の帳<sup>とばり</sup>の中で数多くの先人の苦労が包まれていることを知ることができました。

煤屋地区（元・煤屋村（煤の漢字は日へんに雲））には、旧海岸であった字名が干拓され新字名となった上灰浦・下灰浦などがあり、近隣の馬蛤潟や黒川の干拓地に字名に灰のつく地名があり干拓地であることを示しています。

馬蛤潟新田は今では美田と化していますが、今から二百九十三年前の宝永三年（一七〇六）より、唐津藩により人夫を大動員し堤防工事や田畑の造成を行い六年の歳月を経て入村させた記録があります。なお旧正月の竜宮様祭の時には当時の風習が残っています。

辻地区（元・辻村）は玄武岩で覆われた百九十二mのあぐり山で境されていますが、かつて烽火<sup>のろし</sup>をあげて連絡したことから、「あぐる」が「あぐり」になまったと言われています。

波多津の地名も古代末より「八田津」の地名として名を留め、松浦党と関連しながら所管した波多氏に因んで明治三十三年今日の字「波多津」に変わっているようですが、ことばは変わらず約一千年前から活用されています。

故郷<sup>ふるさと</sup>はなつかしさを思い起こし心をなごませてくれます。また人と人とのつながりで私達の生き方を教えてくれます。編集委員長に導かれて町内各地を廻ったり、先輩・同輩といっしょに資料の整理や編集の手伝いをしながら佳き故郷を再認識し心の中に実感として歴史や自然を深く受けとめることができました。

郷土の資料として家庭や多くの方に活かしていただければ幸甚です。

編 集 委 員

## 主な参考文献

- |                 |             |
|-----------------|-------------|
| 創立百周年記念誌        | 波多津小学校      |
| 伊万里市史           | 伊万里市        |
| いまり歴史散歩         | 伊万里市教育委員会   |
| ふるさとの想いで写真集 伊万里 | 伊万里市郷土研究会   |
| ふるさとの石造文化       | 伊万里市郷土研究会   |
| 佐賀県史 上・中・下巻     | 佐賀県         |
| 佐賀県の歴史と文化       | 佐賀県文化館      |
| 佐賀県の地名 日本歴史地名大系 | 平凡社         |
| 烏ん枕             | 伊万里市郷土研究会   |
| 松浦叢書 第一巻・第二巻    | 吉村茂三郎編 名著出版 |
| 一、松浦古資料         | 二、松浦古事記     |
| 三、松浦拾風土記        | 一・二・三巻      |
| 四、小笠原藩私記        | 村松文書        |
| 五、松浦昔鑑          | 六、松浦記集成     |
| 波多津小学校要覧        | 波多津東小学校要覧   |
| 波多津東幼稚園要覧       | 波多津保育園資料    |
| 黒川町史            | 黒川町史編集委員会   |
| 脇田町誌            | 脇田町誌編集委員会   |
| 大川町誌            | 大川町誌編集委員会   |
|                 | 波多津中学校要覧    |

## 波多津町誌編集委員会

- |       |              |           |           |
|-------|--------------|-----------|-----------|
| 委員長   | 藤田 平太        |           |           |
| 委員    | 松下 用助 (故)    | 松下 愛吉 (故) | 山口 幸雄     |
|       | 松尾三次郎 (故)    | 田中 秋雄     | 奈良崎角助     |
|       | 古川 満         | 松下 常夫 (故) | 森野 季二 (故) |
|       | 古川 仙吉 (故)    | 谷崎 勇      | 谷崎 清 (故)  |
|       | 古河 吉村        | 加川 周史     | 市丸 定治     |
|       | 市丸 健 (故)     | 田中 友一     | 田中 米倉     |
|       | 松尾 一         | 向 大進 (故)  | 野田庄太郎 (故) |
|       | 大久保 久 (故)    | 金子 典      | 井手東太郎 (故) |
|       | 小杉 東太        | 井手 ソヤ (故) | 田中 俊男 (故) |
|       | 岸本 弘         | 柴田 初雄     | 田中 敬太郎    |
|       | 古崎 泰三 (故)    | 橋口政次郎 (故) | 大石 嘉一     |
|       | 松本 仁         | 内田 勇 (故)  | 福地 チエ (故) |
| 執筆協力者 | 原口 静雄 (故)    | 諸岡 均      | 久我 俊郎     |
|       | 田中 良雄        | 井手 芳子 (故) | 小杉 俊子     |
|       | 前田 トシ子       | 田中 照      | 長谷川コトノ    |
|       | 原口 辰巳        | 田中 和人     | 古橋キヨエ     |
| 庶務会計  | 田中 繁 (故)     | 前田善太郎 (故) | 古川 稔      |
| 協力者   | 松本 武明        | 高森 勤      | 松本 辰夫     |
|       | 筒井 恣         | 石倉 秀信     | 丸田 光也     |
| 後援団体  | 波多津町老人クラブ連合会 | 波多津町区長会   |           |
|       | 波多津町婦人会      | 波多津教育会    |           |

問い合わせ先

〒八四八—〇—〇一

佐賀県伊万里市波多津町辻一〇一八

☎ (〇九五五) 二五一〇〇〇一 波多津公民館

波多津町誌

発行日 平成十一年三月三十日  
編集者 伊万里市波多津町誌編集委員会  
発行所 伊万里市波多津公民館  
佐賀県伊万里市波多津町辻一〇八〇番地  
TEL (〇九五五) 二五-〇〇〇一  
印刷所 株式会社 三光  
佐賀県伊万里市大坪町乙四一六一一一  
TEL (〇九五五) 二三-五八〇八



